THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十一月號

第三十九年　第十二號　第四百四十一號

―本書の解說する主要なる問題―

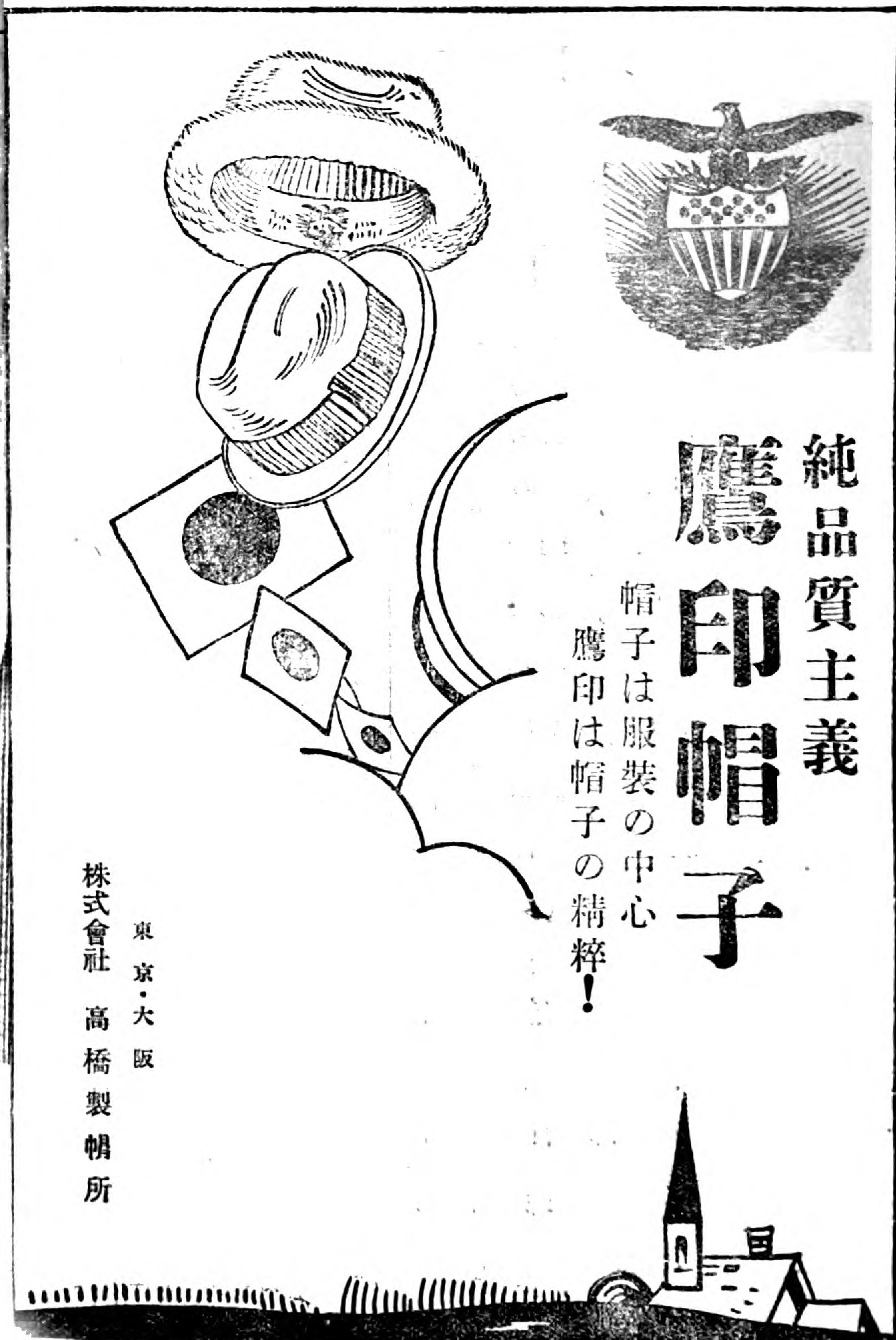
□我々は何を以て生活の標準とすべきや
□國家は何を以て統治の標準とすべきや
□思想問題勞働問題小作爭議の批判標準
□生活及び統治と倫理學・社會學・哲學
□權利思想の輸入及び其影響
□法學教育を受けたる者に依りて其主腦部を占めらるる現在の社會
□法律萬能の思想尙ほ存す
□生活上法則の意義
□生活上法律の支配を受けざる部分
□家庭生活を支配すべき法則
□家庭生活に於ける權利義務の意識
□社會生活を支配すべき法則
□富者の悲慘なる生活
□實業家會社員と生活法則
□生活法則を無視したる成功者
□利權運動と生活法則
□富豪に對する反感
□パンの問題と生活法則
□偉人・大學者・大政治家と生活法則
□青年子弟の進むべき道
□道德慣習の他律的意義の論證
□感情則の是認
□感情則と主人・妻君・奉公人・社員
□姑と嫁との不和
□個人の社會的活動と感情則
□法則の認容する感情と排斥する感情

□離婚問題と感情則
□收入濫費の主人と條理則
□社會的成功と條理則
□公人としての生活態度と條理則
□生活法則としての法律の價値
□秩序を破壞すべき社會運動
□法律の指導的任務
□法律以外の生活法則と法律との異同
□國家權力に因る拘束力と社會力に因る拘束力
□法律と他の生活法則との內容の一致
□法則の分類
□社會規範の意義
□生活法則の矛盾
□法律と道德との矛盾
□法の社會化・法の倫理化・自由法說
□法律の目的及び性質
□法律解釋の根柢
□法律と慣習・感情・條理との矛盾
□貞操蹂躙と條理則
□夫の知らざる妻の借財と條理則
□高利貸を擊退したる名裁判
□生活法則の統一
□警戒的生活態度と其武器
□新道德の渴仰――放縱生活
□社會改造問題と生活法則
□國家統治の法則

□我國體と憲法
□皇室中心主義の眞諦
□法學者の國體論と非法學者の國體論
□普遍我の力
□統一原理に因る最高者の發揮
□統治機關の職分
□國家の理想と裁判所の職分
□火保問題の裁判と余の主張
□東京市民は何故に市民相互火保會社を起さざるや
□相互火保會社の設立手續及び資金
□國家の理想と政治
□國民と政府の敵視
□法律のみに依り政治を行はんとするは國家生活の破壞なり
□政府自身の行動と生活法則
□議會生活と生活法則
□議會の本質
□國民の批判に値する議論
□議會生活の世に及ぼす惡化
□地方議會の惡化及び地方に及ぼす影響
□貴族院一瞥――改革問題
□思想問題の生活法則的批判
□勞働問題の生活法則的批判
□小作爭議の生活法則的批判
□藝術の生活法則的批判

發行所 法律評論社
東京神田小川町五三
振替東京一六、一六七
電話大手五七八四


大阪市東區南久寶寺町四丁目支店
クリーム
おしろいドには
ハムーシンクリーム
濃化粧には艶美人又は
ステアリンカンフアイス
マッサーヂにはトリアノンクリーム
美白には過酸化水素クリーム
眠つて居る間にきれいになる
コールデクリーム
銀座 資生堂



純品質主義
鷹印帽子
帽子は服裝の中心
鷹印は帽子の精粹！
東京・大阪
株式會社 高橋製帽所

◎豫算方針の討議に暴露した聯立內閣の不統一……法學博士　堀江歸一……九六
◎軍閥と金持に對する氣兼をやめよ……安部磯雄……九八
◎不景氣を環境としての政變の可能及び不可能……杉森孝次郎……一〇五
▼說苑
御殿女中の髮飾服裝……三田村鳶魚……一
太陽の御座敷に引越して……佐々木指月……四二

河鍋曉齋……村松梢風　六二

スカンディナヴィアの自然と藝術……林久男　九四

菊花の賦

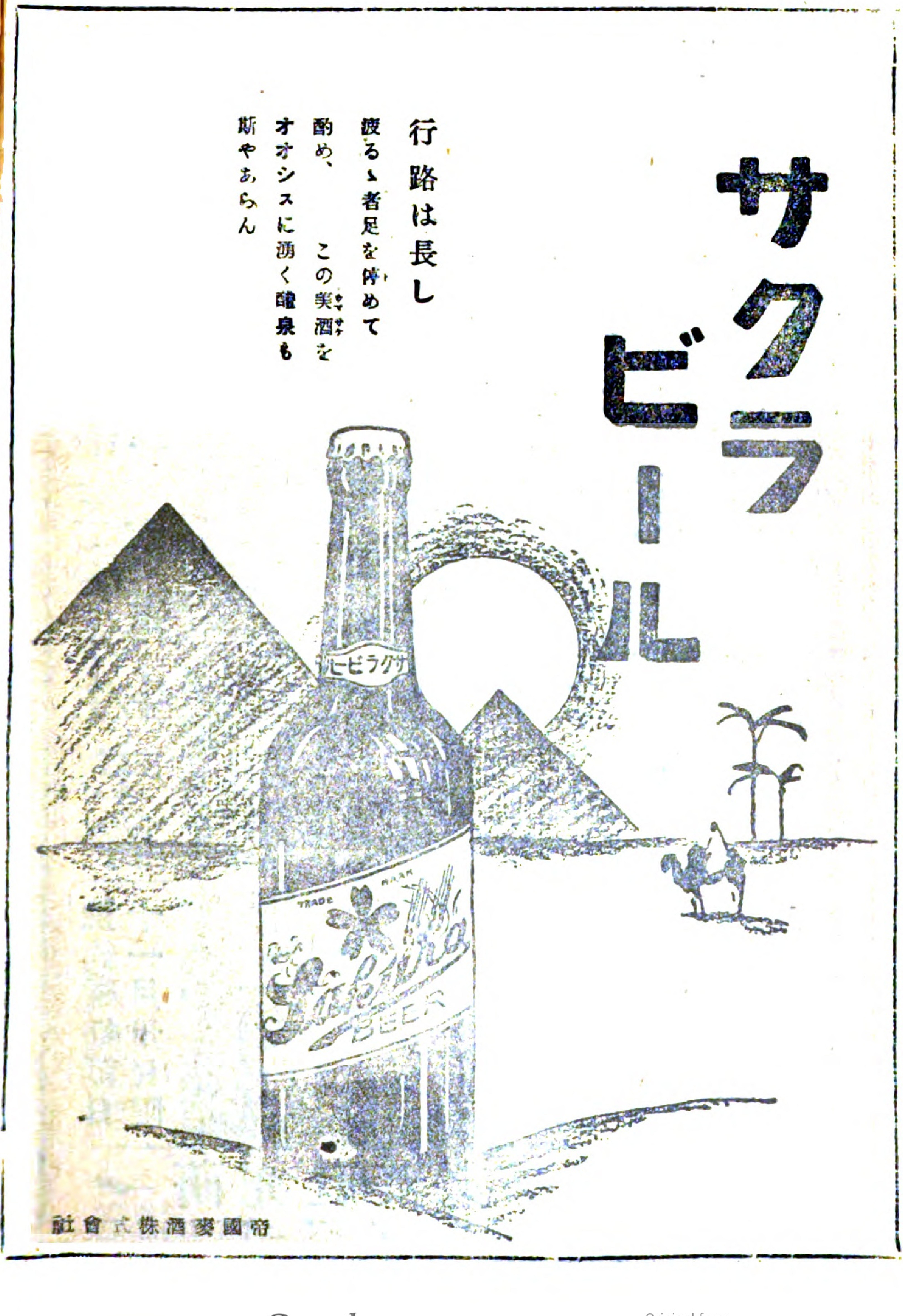
◎黄菊白菊……佐藤春夫　一一一

◎僧房の菊花と霜に傷む菊花……小川未明　一一三

◎菊花の賦……近松秋江　一一五

◎菊の詩、菊の句……田中貢太郎　一一七


學理上
實驗上
齒を強く美しくする
最新
最良
の
クラブ煉齒磨
齒科醫學者の推薦
する一番齒の爲に
よいクラブ煉齒磨
顔のアレない
カテイ石鹸
クラブ石鹸


サクラビール
行路は長し
渡るゝ者足を停めて
酌め、　この美酒を
オオシスに湧く醴泉も
斯やあらん
サクラビール
TRADE MARK
Sakura
BEER
帝國麥酒株式會社

大正十三年

中央公論

十一月一日發行

拾一月號

第卅九年　第十二號

第四百四十一號

朝鮮の問題

――此頃の問題で吾人の最も憂慮に堪えぬものは、支那紛亂の前途でもない、日米關係の險悪でもない、將た東京市政の紊亂でもない。近き將來の危惧さるゝ險慘なる朝鮮の容模様である。少しく朝鮮の實情に通ずる者、果して今日の狀勢に甘じて晏如たることを得るか。

× × × × ×

私は澤山の友達を朝鮮の官界に有つて居る。彼等の多くは內地に歸る度每に私共を訪ねて呉れる。そして其の告ぐる所は殆んど一致して居る。曰く朝鮮の物情は案外に靜平だ。曰く朝鮮人の大多數には今の所日本の統治に不平をのべたり反抗したりするの氣概はないと。果ては朝鮮を見もせず東京邊で在留學生達の空論に聽いて勝手な對朝鮮意見をきめられては困るなどゝ忠告めいたことをさへ云はれる。

之等の友人のうちには、赴任前私共から朝鮮に關する意見を徵し、向ふに往つたら行掛りや偏見やを脫して本當に朝鮮の爲に竭さうと熱烈なる道念を擁うて起つた者も少くはない。然るに向ふに落ち付いて一年も立つと、大抵皆一種の型に自分の頭腦を鑄かためてしまう。本人は意識しないかも知れぬが又それが本當の見識の積りで居るのかも知れぬが、私共の觀る所では、朝鮮の官吏には一種特有の型のあることを疑ふことが出來ぬ。

尤も役人をやめてから又は內地の他の役に轉じてから前の意見を飜えす人もないではない。矢ッ張り局外に立て見ると君達の見解が正しいやうだと大人しく折れて來るのである。併し之は極めて稀な例外だ。孰れにしても朝鮮の問題が朝鮮の役人に依てのみ解決さるゝといふことに、國民は今や一種の不安を感じてゐる。

× × × × ×

そんなら朝鮮今日の狀態は如何といふに、詳しく述ぶる迄もなく、每日の新聞を注意して居れば一ト通はわかる。就中私共の見逃してならぬ事は、本年度に於ける異常の凶作である。凶作だの豐作だのといふことは日本でもよくある。そこで朝鮮の凶作の事も、內地でも時々あることの樣な程度のものに考へてしまう嫌はあるが、事實そんなものではない。酷をいふと平年に於てすら一般の鮮人は日本の凶作以上の苦痛を甞めて居たのだ。それが本年度の樣な凶作となると、本當に喰ふに一物もないといふ窮境に陷るのである。本年中はまだいゝとして、年もあけ二月三月と日を重ねたら何となる。統治の政略上からは無論だが、隣りの親類の死活にかかは

る人道問題として亦吾人の大に啓發を要する所ではあるまいか。

若し夫れ凶作に祟さるゝ極度の不景氣の結果內地留學の學生の退學歸鄉せるの事實、從て所謂智識階級の人士が爲す事もなく各地に散在せるの事實や、米國方面に於ける一部青年の活動開始の事實等を併せ考ふる時、今や朝鮮の問題は事極めて重大である。而して之に備ふる改善の途は斷じて師團增設の擧に非ることも、心ある識者の諒とせらるゝ所であらう。

× × × × ×

朝鮮人の衣食の爲には日本政府としてこれ迄隨分力を盡してゐる筈だ。遣つた金も莫大の額に上るだらう。夫にも拘らず朝鮮人の生活は年々歳々苦痛を增して行くのは如何(どう)いふ譯(わけ)か。役人は押しなべて此事實を否定する。そんな筈はないと云ふ。而も事實は爭へない。一昨年より昨年が苦しく、昨年より今年が更に辛い。彼等の現實の生活が斯く年と共にドン底に馳けて行くの事實は、我々國民の最も深き研究を遂げねばならぬ所ではあるまいか。

× × × × ×

私の友人に朝鮮の某會社に勤むる者がある。彼の云ふ所に依ると、重役は一年の四分三を東京で暮し妻子眷屬をも東京に置き乍ら、莫大の俸給の外每月何千といふ出張手當を取て居る。又或る重役は、昔官吏であつた頃は清廉の令名があつたが、此會社に天降つて數年、罷めて內地に歸る時は數十萬の私財を持ち去つたといふ。

もう一人の友達は曰ふ、會社員ならまだいゝ、大した位置の高くない役人の某氏は頻りに內地に金を送て地面を買て居る、又或る人は可なり巨額の金を株に換へたと。

私が斯んな例を列擧するのは、會社員なり官吏なりが不正の富を作つたといふ點に矯正の叫びを高うせうと云ふのではない。朝鮮生民の爲に將た朝鮮產業の開發のために向けられた金の如何に大きな部分が、色々の形に於て朝鮮から奪はれ內地に掠め取らるゝかの一例を示して、讀者の警戒を促さんが爲に外ならぬ。東拓の資金が北海道の地面を擔保として政黨員に貸出されたとか、又は總督府の機密費が選擧費用に濫用されたとかの噂は、何れ丈信用していゝか分らぬが、之等の金が直接の使途が何であれ兎に角朝鮮で使はれ朝鮮といふ軀(からだ)の血管に注射されて居つたなら、朝鮮は決して今日の樣な營養不良の狀態には陷らなかつたらう。

× × × × ×

我々は色々の意味に於て朝鮮に對して悔いねばならぬ。

中央公論



第卅九年第十一號
十一月號
第四百四十一號

遙かにタゴオル氏に寄せて亞細亞同盟の思想を論す

田中王堂

親愛なる閣下

一

仄かに聞くところに依れば、あなたは、刻下、頻りに東洋文化の復興、若しくは、其れの發揚のために亞細亞同盟と

いふものを唱道せられ、そして、（いろ／＼の事情より推して、其れは、多分、政治的のものより寧ろ文化的のものであり、どこ／＼までも、政治的のものであるよりも、文化的のものであることを要ふでありませうが）之れが實現に腐心して居られるといふことであります。今、あなたは、あなたの赫々たる顯位と隆々たる盛名とを擁して大學に於ける慈雨にも等しきこの好題目を提げて起たれたのであります。印度に於ては無論のこと、支那や、日本に於てもあなたのこの唱道が一部の人士間に熱心なる共鳴を見出だし、若しくは、作り出すのに大した不思議はありません。

亞細亞同盟！ 不敏と雖も、わたくしは一個の哲學者であり、文明批評家であります。一個の哲學者、文明批評家として、わたくしの窮極の事業は、この地上に出來るだけ分化された、そして、其れの總べての成分が出來るだけ融通し、協同する一つの文化共和を建設し、完成することに應分の貢獻をすることであります。されば、亞細亞同盟がこの理想を達成する一つの手段たるに限りで、其れはわたくしに取つても一大關心事たるを失ひません。そんなものが可能であるか、不可能であるかに就いて、そんなものが可能であるとしても、其れが必要であるか、不必要であるかに就て、假りにそんなものが必要だとしても、其れは如何たるものと理會され、如何なる方法に依つて築せらるべきものであるかに就いて、わたくしには獨自の見識があり、考案があります。平生、わたくしはあなたの宇宙觀や人生觀と、わたくしの其等との間に、霄壤の相違ありと知りながら、否、知るが故に、あなたの思想の料として其等の解釋と考案とをあなたに對つて披瀝したいと思ふのであります、披瀝するの義務を感ずるのであります。何故ならば、この問題に關して、あなたの考慮に入らずして、獨りわたくしの考慮に入るものも多く、等しくあなたとわたくしとの考慮に入るものでも、あなたとわたくしとに在つては、其れの志向と意義とを異にするものが多いと信ずるからであります。そして、あなたは絕對に賢くあつて、わたくしが絕對に愚であるといふことが證明されない以上、あなたの思想と情操との特徵

を爲さずしてわたくしの思想と情操とを爲して居るものは、尠なくともあなたに取つて他山の石たるの役目を滿たし得ると信ずるからであります。

わたくしはこゝにあなたに致すわたくしの獻言を一つの私信としないで、一つの公開狀としました。其の理由は極めて單純であります。あなたとわたくしとに依つて討議の題目とされて居るものは、直ちに汎く亞細亞民衆の榮辱と興亡とに關するものであります。然し、あなたとわたくしとは非常に異なつた觀點より、非常に異なつた興味を以て其れを攻究して居るのです。さればわたくしの此等の言説に對して、あなたの鑑賞を受けたいと言ふのは、無論、わたくしの第一の欲求ではありますが、其れと同時に、彼等をしてわたくしの此等の言説を通し、彼等の聰明に頼りて、あなたの所見とわたくしの所見とを對比し、兩者の間に選擇の作用をはたらかせる機會を得せしめようとするのが、わたくしの第二の、然し、其れの純眞さと熾烈さとに於て第一のものに劣らざる要願であります。

二

わたくしは個人主義者であります。（若しわたくしの主張の特徴を標識する必要があるならば、）徹底個人主義者であります。然し、わたくしが徹底個人主義者であるが故に、わたくしは其れの必然の延長、若しくは、歸結として、同時に、國民主義者であり、國際主義者であります。（若し、こゝにもわたくしの主張の特徴を標識する必要があるならば、）わたくしは徹底國民主義者であり、徹底國際主義者であると申し上げて置きます。どうしてわたくしはこのやうに個人主義と、國民主義と、國際主義との間に關聯の必然性を體認しなければなりませんか。わたくしからすれば、人間に依つて爲さるゝあらゆる努力と、彼に依つて企てらるゝあらゆる設備とは、窮極、個人の聰明を開發し、彼れの幸福を增進

する一事に限られるのであるが、（尠なくとも今日の文化の程度と傾向とに於ては）此等の理想は獨り個人を、彼が現に生き、現にはたらくまゝに、國民生活の中に取り、國際關係の中に取りて、始めて實現され得るものであるからであります。この事實に關しては、數年前、わたくしとしては、最も簡明なる文句を以て、最も的確にわたくしの思想を表現したものがありますから、わたくしの立論のきつかけとして、こゝに其れの一部を引用するの自由を與へられたいと存じます。

『今日に於ける、及び、特に今後に來たる文化生活に在つては、如何なる個人も或る國民の一員となつて、始めて彼れの個性の完成を期することが出來る如く、如何なる國民も世界共和國の一員となつて、始めて其れの國民性を修練することが出來るのである。この事實を逆に、そして、一層切實に言ひ換へれば、世界共和國の性質は個々其れの獨自の特徴を保ちながら國際化された各國民の國民性の交徹より構成され、或る國民の性質は個々彼れの獨自の特徴を保ちながら國民化された各個人の個性の錯綜より釀成されて居るといふことになるのである。して見ると、正しき個人主義の基礎の上に立たざる國民主義の誤謬であることは、正しき國民主義の上に立たざる國際主義の空虛であると同樣である。徹底すれば、個人主義は世界主義にならなければならないし、溯源すれば、國際主義は個人主義であらねばならぬ。つまり、個人主義も、國民主義も、國際主義も、其れの志向よりすれば一つのものである。たゞ、其れが發動するに當つて其れの異なる側面が力說されるに隨つて、三つのものとして取られるのに過ぎない。』

此れは人間の生活の根本事實に關してわたくしの作り得る最も澄明にして最も到徹した一つの公準であります。されば、わたくしからすれば、現代に於て其れを眞實に說明しやうとする理論がこの公準に基づかなければならないやうに、未來に向つて正當に其れを改善しやうとする計畫もこの公準に基づかなければならないのであります。然し、それであ

るに拘はらず、今日のところ、個人主義は必然に國民主義と矛盾し、國民主義は必然に國際主義と撞著するものであるとして、やゝもすればこの公準が一つの詭辯と取られるほど人類の漸く逹し得た文化と、特に其れの志向に關する彼等の理會とは、猶ほ幼稚な段階に低迷して居るのであります。

こゝには主題に因んで、わたくしの觀察を姑らく國民主義と國際主義とを撞著するものとする多くの民族と國民との謬見と妄執とに限ることにします。

昔、ソクラテスが頻りに無神論を唱へて當時のアテンスの青年を堕落させて居るといふ罪目の下に告發された時に彼れは法廷に於て、法官に對つて『自分は自分の隣人が善人であればあるほど、彼等より益を受ける事が多く、彼等が惡人であればあるどほ、彼等より害を被ることが多いと考へる。さすれば、自分は何を好んで自分の隣人たる彼等青年を堕落に導くやうなことをしやうぞ』と、毅然として答へたのでありました。ソクラティスはこの一言に依つて、端的に、千古に亙つて、あらゆる種の協同生活に含まれた Give and Take の眞理を道破したのであります。然し、彼れの時代を去る三千年の今日に於て、民族と國民との多數は、國際關係に關して未だこの簡單なる眞理を十分に會得するに致らないのであります。彼等は、平生、物資の交換や學藝の融通に依つて不完全ながら既に一つの文化協和を組織し、相互にこれより來たる恩澤に浴しながら、理論に於ては兎に角、實行に於ては、餘りにしばしば其れの道徳的の、そして、精神的の意義を沒却するのであります。彼等は其の文化共和の榮枯盛衰は、結局、彼等の各の榮枯盛衰であり、其れの運命を離れて、結局、彼等の運命を開拓する餘地のない事をわすれて、おのれの雄大は獨り他の尫弱に依つてのみ得られ、おのれの文化を擴充することは獨り他の文化の增進を妨止することに依つてのみ得られるとするの謬見と妄執との因となつて居ります。あらゆる形に於て人類の半數に未曾有の慘禍を與へた歐洲戰爭も、この謬見と妄執と

が外に狂奔した結果でありました。數千億の富を蕩盡し、數百萬の人命を損失して成り立つた國際聯盟が、猶ほ互ひに猜疑と、反目と、葛藤とを事としてゐる大小無數の民族と國民との上に其れの當然の威力と道理とを示すことの出來ないのはこの謬見と妄執とが内に蠢動する反映であります。今日のところでは、あの大戰亂の總計も、戰勝者が戰敗者に溢む傲慢なる態度を以て、勝手に、不合理に、無意味に領土の併合と改廢とを行つたに過ぎないことになつて居ります。あの大戰亂のために文化共和の道徳的の、そして、精神的の意義に關して彼等の意識の擁護されたことはありますが、其れに關して彼等の理會と責任感との啓明されたことは大してありません。

固と、其の種類を一にし、其の語源を一にし、久しい間其習慣と、道徳と、信仰と、制度とを共にした歐羅巴人の間にあつても、既に此の通りであります。されば、一度、わたくし共にして其の種族を異にし、其言語を異にし、随つて、其の習慣と、道徳と、信仰と、制度とを異にする亞細亞人と歐羅巴人との關係に眼を轉じ、想を寄せる時に、其れの事態の言ふに忍びざるもののあるのに何等の不思議もないではありませんか。

嚴密なる意味に取れば、歐羅巴と亞西亞との交渉は侵略、若しくは、搾取の單なる目的を以て無限に優越性の自覺に滿ちた歐羅巴人の手に依つて開かれたのであります。當時、彼等は新たに獲得した武器の發明と航海術の知識とを擁して、財貨の蒐集と冒險心の滿足とのために、之れが効力の試驗の場所と機會とを廣く世界の隅々にまで索めて居つたのであります。かくて譁判たる氣運に依つて養成され、刺激されて遠征の途に上つた幾多の青年客氣の士は、縱し彼等の故國に在つては、純眞なる、若しくは、僞善なる基督教徒であつたにしても、彼等は、悉く、「スエスの彼方に道徳と良心とを投げ棄てゝ」亞西亞に來たのであります。わたくし共はクライブの、若しくは、ウオレン・ヘエスチングの醜を畏れず、人を憚からざる亂行暴爲に目を聳てます。然し、わたくし共は一人のクライブの陰には無數のクライブが

たらひて居たことを、又、一人のウオレン・ヘンスチングの陰には無數のウオレン・ヘンスチングの働いて居たことを知らねばなりません。畢竟するに、當のクライブも、ウオレン・ヘンスチングも其等の人々の代理として彼等の意思を執行して居たに過ぎないのであります。今日に至つても、猶ほ（其れには大分外交上の辭令も加つて居ることでありますが）、開國の大恩人としてわが同胞に依つて記憶され、感謝されて居る提督ペルリさへも、場合に依つては、砲彈と銃劍とを以てわが國を征服する意圖を藏して居たことは、優に文獻の證するところではありませんか

歐羅巴と亞細亞とが初めて接觸に齎らせられた時に、歐羅巴は既に近世文明に入つて居たのに、亞細亞は古代文明の中に止まつてゐました。亞細亞に固有する其の古代文明なるものは、久しきは五千年間、近きも三千年間に亙つて蓄積され、洗練されて來たのでありますから、其の種のものとしては、例へば、印度の形而上學や、支那の文學や、わが國の藝術の如く、その優秀を極めたものであります。然し、其れが如何なる意味に於ても、古代文明であつて、近世文明でなかつたといふ單純なる事由から、軍備、殖産、衞生、教育、學術等歐羅巴の長所とする所のものは、總じて、悉く亞細亞の短所とするところでありました。されば、近世文明の環境の中に生れ、そこに棲息しながら、纔かに、それの功利を物質的に享樂することだけを知つて、其れの意義を精神的に鑑賞し、畏敬するの理解と併せて餘裕を持たなかつた彼等東來の歐羅巴人の大多數にまでは、それがたゞ低級なもの、迂腐なもの、繁縟なもの、醜怪なものとのみ映じたのであります。彼等は亞細亞に對つて與ふべき總べてのものを有ち、其れより學ぶべき何物をも見出さないと考へたのであります。若し、習慣に關し制度に關し、道德に關して、彼我の間に扞格するところがあるならば、其由來と結果とを討査するまでもなく、當然是は我に在つて、非は彼れにあると考へたのであります。

斯くして、優等人種の意識を將ゐて來た歐羅巴人は、實力の競爭に依つて、倏ちにして、事實に於て、亞細亞人を劣等

人種の烙印を附したのであります。そして、亞細亞に分布された總べての國民と民族とは、それぞれ、過去の傳說とからして天寵の選民たることを矜りながら、政治と、經濟と、武力との關係に於ては、苦き事實に面して、いやいやながらも、彼等に對して尠なくも退嬰人種たることを承認せざるを得なかつたのであります。

昔、希臘の如き、羅馬の如きは、其の仕事と、價値と、運命とに關して、截然分割された自由人と奴隷との二つの階級より組織された社會を構成して居たのであります。今は、この規模が世界に擴大されて、歐羅巴人は自由國民の役（ロオル）を占め、亞細亞人は奴隷國民の役（ロオル）を滿たすことになりました。歐羅巴人の勝手な想像に隨へば、彼等は支配する運命を有つて生れ、亞細亞人は支配される運命を有つて生れたのであります。隨つて、この地球は歐羅巴人に取つては演技の舞臺であるが、亞細亞人に取つては、彼等の演技に光彩を添える樂屋、若しくは、奈落に過ぎないのであります。この想像の下に彼等は右の手に兵器を持し、左の手に商品を提げて亞細亞に侵入し、縱横に其れを蹂躙して、そこに彼等の屬國を作り、彼等の植民地を据え、彼等の市場を開きました。彼等の確信に從へば、世界には唯一つの支配しか有り得ない、そして、其れは歐羅巴人の支配であります。世界には唯一の文明しか成り立ち得ない、そして、其れは歐羅巴の文明であります。彼等が熱心に夢想して居る世界の歐羅巴化、若しくは、亞米利加化の如きは彼等のこの確信より發して居るのであります。

然し、亞細亞人たるわたくし共――過去に於て光輝ある文明を創造し未來に向つて一層光輝あるものにまで其れを完成しようとする襟期に燃えて居るわたくし共からすれば、歐羅巴人の抱くこのやうな空想や、妄想にどれだけの根柢があるでありませうか。其れは一顧の價だも有せぬものではありませんか。されば、わたくし共亞細亞人の間から早晩、實物教育に依つて彼等歐羅巴人をしてこんな空想や、妄想を放棄せしむる運動の起る時機の到來しなければならぬこと

は、初めから容易に逆睹し得られたのであります。さうして、今や其の時機が到來したのであります。わたくし共亞細亞人は餘りに久しく歐羅巴人の驕慢と、輕侮と、虐使とを忍んで來ました。わたくし共は此等の禍根を芟除することに依つて多年の屈辱を雪がねばなりません。然し、永久に其れを雪ぐの道は、術は唯一つであります。其れは、亞細亞に棲息する總ての國民が、てんでに、あらゆる意味に於て、獨自の、そして、卓越した文明を、言ひ換へれば、精當に自國の資力と、要求と、國民性とに依據して、適切に對外的には公正に、對内的には剛健に、さうして實行的には簡楚であると同時に、理論的と、審美的とには典逸にして醇雅な文明を發揚することであります。然し、さうするのには人間の性情の極致に徹し、世界の文運の樞紐に徹する特殊に雄深なる情操と、高邁なる知見とが必要とされるのでありますが、この特殊に雄深なる情操と高邁なる知見とを把持するといふことは現在の亞細亞人に取つて難事中の最難事であらねばなりません。何故ならば、彼等の叡智と反省とはまだ十分に人間の性情の極致に徹し、世界の文運の樞紐に徹するには餘りに幼稚に、餘りに粗硬であるからであります。

今日、わが國に於ても、いろいろの事情と行き掛りより、亞細亞文明の復興、若しくは、其れの皇張の急務なることを說く輩の數が急に增して來ました。然し、惜しいかな、彼等の大數は、否、殆ど彼等の全數はこの特殊に雄深なる情操と高邁の知見とを所持せずして、漫然、其れを說いて居るのであります。其の結果は、彼等の所說をして痴人が夢を語るに等しきものたらしめて居ります。わたくしが率然彼等の所說に雷同せずして、別に一個の所見を立するのは、立しなければならないのは、偏に彼等の所說にはこの重大なる缺陷が含まれて居るがためであります。

三

それでは、等しく亜細亜文明の復興、若しくは、其れの皇張を目的としながら、彼等の所説とわたくしの所見との間には、どれだけの相違がありますか。其の相違の最も顯著な點は何んでありますか。わたくしは、わたくしの議論と批判とを進めて行くに先立ち、こゝに其れの輪廓を標出して置くことが、便利であると考へます。

彼等に固定の東洋文明を流行の西洋文明に對置し、(彼等の想像に隨つて)我れの長を以て彼れの短を抑制することに依つて亜細亜文明の復興、若しくは、其れの皇張を圖らうとするに反し、わたくしは亜細亜の總べての國民が、各、彼等に內具する資力と、要求と、國民性とを標準とし、近世紀を通して常に其れの志向としてはたらいて來た西洋文明の精髓を地方化し、國民化することに依つて其れを圖らうとするのであります。一言に括約すれば、彼等とわたくしとの間に横はる意見の相違にこれだけのことになります。然し、これだけの相違の中には文明の本質の理會に關し、西洋文明と東洋文明との得失の理會に關し、兩者の交渉と融通とのはたらき振りの理會に關して、霄壤の相違が包含されて居ることは、事理に暁らかなる者の容易に看取し得るところでありませう。

四

以上の叙述からして、あなたはわたくしが熱心に亜細亜文明の發揚に志して居る一人であると同時に、如何なる方法に依つて其れを策し、如何なる方法に依らされば其の策を實現することが出來ないと考へて居る者であるかを一通り了解なされたことゝ思ひます。そして、其れが、あなたの執つて居られる方法と非常に扞格するものであることに、直ちにお氣付きになられたことと思ひます。あなたの執つて居られる方法と、わたくしの執つて居る方法との間には、このやうに甚大なる扞格がありますために、(若しあなたにしてわたくしの確信に就いての忌憚なき公表を許さるゝならば、)わたく

しは、あなたの取つて居らるゝ方法に依つては永恒に亙つて亞細亞文明の復興、若しくは、其れの皇張といふやうなものの理想の實現される期は決して來ません、其れが最も短かき期間に於て實現され得るのは、獨りわたくしの取つて居る方法に依つてであると敢言したいのであります。それにしても、あなたの執つて居られる方法と、わたくしの執つて居る方法とはどうしてこのやうに互に扞格するものとなつたのでありませうか。其の由來は極めて深く且つ、遠くして、其れは文明一般といふものに關するあなたの概念とわたくしの概念との相違より其の端を發して居るのであります。さうすると、あなたの執つて居らるゝ方法とわたくしの執つて居る方法との優劣を闡明する準備として、あなたとわたくしとの間の討議は文明の本質、即ち、長き期間に亙つて總べての人類に取つて何が最も好ましき生活條件であるかの考察より始められねばならぬと考へます。何故ならば、この一點にして明瞭となる以上、其れの結果として東洋文明と西洋文明との得失の如き、兩者の融通に關する態度、若しくは、精神の選擇の如きは快刀亂麻を裂くの快を以て自然に判定されると信ずるからであります。

人間は如何なる場所に、若しくは、如何なる時代に棲息するを論ぜず、彼れが人間である限り、彼れには大體一つの輪廓の内に落つる性質と、數とを具へた衝動が賦與されてあります。そして、彼れが生活を續け、經驗を積むに随つて、其等の一つ一つに相當の價値を附し、其等の孰れの一つにも相當以上の價値を附しないことが幸福なる生活の必須條件であることを彼れはだんだんに、理論としてでなければ、尠なくも實行に於て發見して行きました。それで、彼れの努力は其等のものが生活に幸福を齎らすやうに相互にはたらいた跡を觀察し、記憶し、様式化することに集中されました。斯くして、沈澱し、沈澱したものの上に醇化の施されたものは、遊戯や、仕事や、儀式や、宗教や、道德や、法律や、政治や、藝術の濫觴を爲したのであります。然し、事實として、總べての人類が全然同一なる境遇に於て彼等

の生活を始めたのではありません。彼等は夙に地球の異なる部分に分布され、異なる環境に在つて、そこに彼等に與へする異なる刺激に酬酢しながら、其等を利用するために異なる生活の方法を工夫したのであります。若し、文明とは遊戯や、仕事や、儀式や、宗教や、法律や、政治や、藝術が習慣や、傳統や、命令や、制裁の力に依つて自動的におのれを支持し、改造する組織を取つたものと言ふに過ぎないならば、異なる環境に置かれた異なる種族の間に異なる文明が形造られるのは極めて當然であります。其等の異なる種族に共通する欲望は出來るだけ幸福なる生活を營まうとすることにあつたのは勿論でありますが、彼等はそれぞれ異なる種の刺激に順應し、其等を征服するの必要から、異なる種の文明を創造するに至ました。それでも『手より口へ』の其の日暮しを事として居る民衆の生活だけが文明の根柢を爲すものでありましたならば、異なる種族を通じての文明の相違は、現に見出だされるものより遙かに僅少であつたでありませう。然し、彼等は生活はしますが、其れが顯現する事實と傾向とを一つの文明にまで組織する能力を彼等は所持しませんでした。さうする能力を所持し、そして民衆を利すると等しく、時としては彼等を害してまでも其れを十分に運用もし、過分に濫用もしたのは帝王と、僧侶と、學者とでありました。民衆は帝王や、僧侶や、學者から一つの文明を課せられて、始めて、其れに依つておのれ等の生活を表現し、統一することが出來たのです。其の文明が民衆の欲求を基礎としたことは言ふまでもありませんが、其れには、(單に其れの考察者の私欲の見地からよりも、一層多く民衆の公益の見地からよりして、)大分に方便が加味されたのでありました。そして、其れは主として社會の進歩を目的としてよりも其れの秩序を目的としてであり、個人の啓蒙を目的としてよりも、彼れの服從を目的としてでありました。この目的を達するために、彼等の幼稚なる理會から、或る種の衝動の大多數は純惡として抑壓され、僅かに他の種の衝動の一二のものだけが純善として奬勵されたのであります。民衆の間に、このやうに彼等の本性に反した習慣と傳統とを關

致するためには、いろいろの手段が試みられ、そして、用ゐられました。其等の中で最も有効であつたのは、無論、賞罰と神話とでありました。此等の中でも、特に後者でありました。因襲の久しき、其れは彼等の實行の上にはさほどの感化は無かつたにしても、彼等の情操の上には可なりの影響のあつたことは確かな事實であります。嚴密に彼等の指導者の意志を奉體しなかつた、又することの出來よう筈の無かつた俗衆も、平常の氣持ちとして、或る種の行爲に對しては内的是認を感じ、他の種の行爲に對しては内的呵責を感ずることになりました。このやうた文明の由來は古代に於て、例へば、ユダヤ人とバビロン人との如く、彼等の土壤は相接し、彼等の風土や氣候と雖も大して異なるところのなかつた二つの民族が如何にしてあのやうに非常に異つた文明を工夫し、あのやうに久しく其れを繼承し、固守して行つたかの理を説明します。

世の中に其の初め實利を其れの材料とし、依據として出立しない神話といふものは一つもありませんが、其れが神話として一つの獨立した形態を取るや否や、其れは忽ちにして實利の批判を超越して、其れより來たる改造の要求を拒否することになります。この事實からして、生活の一つの方便として、神話は蒙昧にして退嬰の群衆に適しますが、聰明にして進取の市人に適するものではありません。されば、今日、孰づれの文明國と雖も、過去の遺物として、多少、神話の要素を其れの社會制度と社會感情との中に含まないものは殆ど一つも見當りませんが、實際に其れがはたらかして居る勢力の強弱と廣狭とに依つて安全に其の國の文野の程度は窺はれると思ひます。

あなたの祖國たる印度は卓越して神話の國であります。其れの忠實なる相續人として、あなたが勇敢に代辯される印度文明は卓越して神話の文明であります。神話の運命と其れの運命を共にしなければならぬ文明であります。

あなたの屬する種族も、彼等が北方に遊牧してゐた間は、剛健、素朴であつたと推測されて居ります。其れが彼等の

南下して熱帶地方に移住するに及んで、其れの氣候と風土とに感化されて次第に懶惰の氣質と保守の習俗とを養成することになりました。其れにも拘はらず、彼等にして人間であり、人間の性情を賦與されて居る以上は、どうにかして自分の生活を改善しようとする欲望を放棄することの出來る筈のものではありません。彼等は實行に於て不活潑となるに正比例して、想像力に於て活潑となり、彼等の理想の實現を現實の世界に求める代りに、空想の世界に其れを求めることになりました。民衆のこの一般傾向を一層誇張し、其れを理論化し、神祕化して一つの宇宙觀とし、人生觀としたものは彼等の僧侶階級でありました。其の僧侶階級は、その結果に於て、猶ほ多少なりと民衆の間に殘存した進取の欲望の實際のはたらきを理論と神祕との力に依つて彼等より取り去ることになつたのであります。實に、永久に印度民族を征服し、彼等の専制君主として永久に彼等の頸に鐵枷を嵌めて了つた者は、アレキサンダア大王でもなく、マホメット教徒でもなく、其等の僧侶であります。

若し宗教的であることの特徴が客觀の條件の改造に依らず、主觀の情操の陶冶に依つて、生活に幸福を實現しようとするのにあるならば、古來、世界に出現した數ある文明の中で、印度文明ぐらゐ徹底して宗教的であつたものはありません。其れの根本疾患は、想像に由つては兎に角、實際に於ては生活を二分して其れを完全に統一することを爲さず、又、永久にさうすることを不可能ならしめることであります。人間の生活は雜多の欲求と其等に依つて呼び起される雜多な知覺とより成り立ちます。さうであるから、眞正なる統一は、獨り、其等に潜在する關係を發見し、其等の關係の志向を發揚し、醇化して、始めて、達成されるのであります。然し、其れには長い間に亙つての苦心と忍耐とが必要とされます。其の苦心を費さず、其の忍耐を有つことが出來ずして、其等の欲求と知覺とを混亂したまゝ捨て置いて、其等の上に、外に、僞似の統一を想構したのが宗教的なることを其れの基調とした印度文明であります。中世紀に流行した學

許を藉りるならば、特殊の有てる、若しくは、遣る意義の認得されたものが普遍であるのに、印度文明は其等の特殊を卑下して、酷だしきは、其等の存在までをも否定して、特殊を離れたところに普遍を追求して居りました。

あなたもこの考へ方を傳統的に紹繼し、沒批判的に祖述して、頻りに人間の欲求は悉とく有限である。わたくし共は有限のものの滿足だけに安住することは出來ない、わたくし、共に最後の安住を與へるものは、唯、無限なる絕對と一致することであると力說して居られます。然し、一體、人間の欲求の外に、上に、存在する絕對とは如何なるものでありますか。畢竟するに、有限に對立せしめられる無限なるものは、有限の一小部分が勝手に抽出され、勝手に曲解されたものの幻影に過ぎないではありませんか。さうすると、あなたは、確かに、生活全體の統一に關し、充實して有効なる方法を棄てて、徒らに稀薄にして無力な方法を採つて居られるのであります。あなたは、確かに、象徵と象徵されるものとの主客を顚倒して、象徵を實在とし、象徵されるものを反つて其れよりの墮落、若しくは、其れに對する錯覺として居られるのであります。あなたは有限が無限なる絕對に一致することより生ずる歡喜を高唱されます。然し、徒らに空想、若しくは、迷想の上に築かれた歡喜にどれだけの價値がありますか、どれだけの權威がありませうか。印度人と雖も人間であります。生活する以上は、其れに必要なる意欲と知覺とを全然滅却することは出來ません。されば、若し自然界より、例へば、饑餓とか天災とかいふやうな暴力が來たつて彼等の意欲や知覺を搖蕩するか、若しくは、人間界より、例へば、暴君の壓制とか、外國の征服とかいふやうな暴力が來たつて彼等の意欲や知覺を搖蕩する時は、其の歡喜をして幻滅せしめないものがあなたの同胞中に果して幾人あるでありませうか。過去の歷史に照らし、現在の實情に照らして、其の歡喜あるがために、平時にあつてすら、あなたの同胞が他の國人に勝つて、個人的に、社會的に一層善く彼等の意欲と知覺とを緊醐し、一層優れた生活を營んで居るとわたくしは信ずることの出來ない者であります。

あなたは口を開けば、西洋文明を物質的と非難し、印度文明を精神的と稱揚するのを常として居られます。然し、さうなさる時に、あなたは嘗て一度でも眞面目に、眞劍に、生活の事實に即して、物質的と精神的との意味を究明されたことがおありでしたか。何故に物質的たることはそんなに非難すべきことであつて、精神的たることは何故にそんなに賞揚すべきことでありますか。わたくしからすれば、非難さるべきものとして、物質的といふ言葉が用ゐられ、稱揚さるべきものとして精神的といふ言葉が用ゐられる場合には、此等の各は一つの確定した意味しか有ち得ないのであります。物質的たることの惡として非難されるのは、其れが生活に分裂を齎らすものと視られるからであつて、精神的たることの善として稱揚されるのは、其れが生活の統一を助けるものと視られるからではありませんか。物質的と精神的なる二つの言葉を輕率に使つて居る世人の大多數は、勿論、そこまで衝き詰めて使つては居りません。然し此等の言葉の窮竟の意味はこの外に一つでもあり得るとわたくしには考へられません。さうすると、今日の文化の程度に於ては、孰れの國の文明にしても、醇乎として精神的であつて、尠しも物質的でないと言はれるほどのものになつて居りません。然し、其れの志向と組織とからすれば、西洋文明は精神的たり得るの基礎の上に置かれて居るのに、全然、精神的たり得るの照準の外に立つて居るのは印度文明であります。されば、比較的に言へば、精神的であるのは西洋文明であつて、物質的であるのは印度文明であります。何故ならば、印度文明は特殊を離れて普遍を索め、欲求と理想との間に二元を劃して居るのに、西洋文明は特殊の中に普遍を見出だし、欲求と理想とを一元と解して居るからであります、尠なくとも、さう解さうとして努めて居るからであります。

斯く印度文明を評價するものの、印度とて四千年に亙つて獨自の教化を鼓吹し、獨自の修養を蓄積して來た一大古邦であります。あなたの同胞の生活の中には、卓越した者や尊貴なものが見出だされることをわたくしは決して疑ひませ

ん。そして、其等のものの多くの特徴が Innerlichkeit と Gemütlichkeit の性質を取つて居るところにあるならば、其等はますます高等なる文明生活に重要なものであります。たとひ其等は過去に於て、健全なる生活の標準からすれば、過大な犧牲を拂つて神秘主義に依つて養成されたものにしても、今日になつて、一個の自由民族として、若しくは、自由國民として、世界の大勢に順應しつゝ、人類の文化共和に或る貢獻を致す見地から、其の神秘主義が既に其等のものの自由の發動と發展とを沮害するものとなつたならば、あなたの同胞の一日も忽にすることの出來ない一事は、勇敢に其れと絶縁することであらねばなりません。あらゆる方法を盡して其れと絶縁しようと心掛けることであらねばなりません。實に、今日、印度文明の最深病源は其れの總ての側面が幽邃を裝ふ神秘主義のために痲痺され、其れの道徳觀念をしてニイチエの謂ふところの奴隷道徳たらしめて居ることです、そして、あなたやガンヂイ氏のやうな最有力の指導者までがまだ其れの醜惡に些しも氣付かれないことです。然し、折角あなた方が計畫されて居る光輝ある印度民族のあらゆる意味に於ける解放を實にしようとするためには、是非とも其れを化してニイチエの謂ふところの英雄道徳にまでしなければなりません。それには、聰明なる態度と到徹した知見とを以て印度國民は、純然たる誤解よりあなたが平常嫌つて居られる、或は嫌ふやうに裝うて居られる近世文明より其れの啓蒙の洗禮を受けねばなりません。

然し、支那にしても、日本にしても、苟くも其れの志が現代に處して眞に其れに固有の文明を發揚しようとするにあるならば、言ひ換へれば、世界の大勢より屏息し、死物としておのれの過去の形骸を保存するにあらずして、其れの要求に順應しながら、活體としておのれの未完の事業を完成しようとするにあるならば、其等も印度と等しく、是非とも一度は近世文明より其れの啓蒙の洗禮を受けなければならないのであります。然し、支那文明は印度文明と異なり、日本文明は印度文明とも異なり、支那文明とも異なります。隨つて、近世文明より其れの啓蒙の洗禮を受けるといつても、

此等は其れに對する態度と、其れより期待する刺激及び感化の種類とに於てそれぞれ異なるところが無ければなりません。あなたが西洋文明と東洋文明とを論ぜられる時に、あなたは、やゝもすれば、この重大なる事件をあなたの考慮より逸して居られるやうです。あなたが無雑作に西洋文明と東洋文明とを對立させ、そして沒批判に西洋文明を物質的と非難し、東洋文明を精神的と稱揚される時に、あなたは無差別に東洋文明なる一般名稱の下に印度文明と、支那文明と、日本文明とを包括されます。そして、わたくしの忖度するところでは、其れの代表、若しくは、典型としてあなたの心頭に浮ぶものは、いつでも印度文明でなければ、印度型に屬する文明であるやうです。然し、あなたは如何なる事實に基づいてさういふ考へ方を造られたのでありますか。大分多くの事實を無視し、更らに、大分多くの事實を曲解し、曲解しない限り、さういふ考へ方は到底造られ得ないとしかわたくしには思はれません。あなたと雖も、まさか印度人と、支那人と、日本人とのやうな互に異なつた三つの民族が各、獨立して、自發的に、そのやうに酷似する文明を創造したのであるとはお考へにならないでせう。さうすると、あなたが支那文明と日本文明とを一概に印度型に屬するものと論されるのは あなたが印度文明の所産の一なる佛教が支那と日本とに宣傳せられ、附植された結果として、其れの思想が、自然、支那文明と日本文明とを陶冶して其等の基調を爲すに至つたと想像されて居るからのことでありませう。然しあなたのこの想像は全然事實に適合せざる一片の空想に過ぎません。佛教が、そして、其れにつれて、印度文明が支那と日本とに輸入され、其れが後者の文明を感化し、變更することのあつたことは何人にしても正直に承認しなければならぬ顯著な事實であります。然し、あなたが空想されて居るやうに、其れが決して支那文明の基調を爲すにも至らず、日本文明の基調を爲すにも至らなかつたことは、儼として歴史の經過と現在の狀態とが證明するところであります。

事實として、印度文明は神秘主義に終始して居ります。支那文明は夙にクラシシズムを完成したために、印度文明の

東漸も其れの幹根を動かすことは出來ませんでした。印度文明と支那文明とは、わが國がおのれに特有なる一つの文化をまだ十分に創立せざるに先立つてわが國に移植されました。わが國の文明は支那文明と印度文明との誘掖に依つて成長しました。然し、わが國の民族性と支那の民族性、若しくは、印度の民族性との間には霄壤の相違がありましたために、支那文明のクラシシズムも、印度文明の神秘主義も多くは、わたくし共日本人が民族的に内具して居たものを搖蕩し、掘摘するに役立つただけであります。日本文明は神秘主義にも降伏せず、クラシシズムにも征服せられず、其れの適當なる表現として徐々に象徴主義を沈澱し、發展して行つたのであります。そして、生活樣式、若しくは、生活理想として、神秘主義と、クラシシズムと、象徴主義とは、それぞれ互に混同すべからざる輪廓と内容とを具へたものではありませんか。

支那文明はクラシシズムの文明であります、卓越してクラシシズムの文明であります。わたくし共にして廣く東西古今に亙つてクラシシズムの文明の範を求めるならば、それは支那文明であることに一點の疑を挾む餘地はありません。希臘文明はクラシシズムの文明として大醇にして小疵なるものであります。支那文明はクラシシズムの文明として、醇乎として醇なるものであります。然し、わたくし共はそこに支那文明の長所があると同時に、短所のあることを知らなければなりません。

支那民族は實に驚歎に價する民族であります。四千年の昔、當時、地球の異なる部分に分布された總べての他の民族が遊牧を事とし、水草を逐うて轉々して居た時代に方つて、支那民族は既に一つの完全なる社會生活を營み、一つの複雜にして、而かも、整齊せる國家機關を運用して居たのであります。今日に到つて、猶ほ燦爛たる光輝の人目を射る文學や、藝術や、思辯や、教育や、政治組織は支那文明の所産として一つとしてあの時代の偉大と繁昌とを語らないものはありません。

印度民族の空想的なるに反して、支那民族は飽くまで實理的であります。印度民族は感覺世界を超越したところに實在を創置し、其れと一致することを生活の極致としましたが、支那民族は感覺世界の中に實在を把持し、其れの秩序に則ることを生活の極致としました。(月並の學語を借りるならば、)印度民族の實在は超越的のものでありましたが、支那民族の實在は内在的のものであります。然し、よくよく事實を追窮すれば、孰づれの場合に於ても、實在とされて居るものは自分が理想として居る生活原理の他に一つもありやう筈はありません。されば、人間の生活は大まかに言つて、境遇と性情との交渉より成り立つて居るのでありますから、印度民族は一向に性情の陶冶だけに依つて生活の改善を圖らうとし、支那民族は性情の陶冶と併せて境遇の整頓とに依つて生活の改善を圖らうとして居ると見られます。この一點からすると、生活の改善を講ずる上に於て、支那民族は印度民族に比して、遙かに妥當な、随つて、有効な方法に頼つて居たのであります。

それでは、クラシシズムを其れの特徴とする支那文明には何等の缺陷も含まれて居りませんか。わたくしは決してさうは信じません。それには多くの缺陷が含まれて居ります。そして其等の殆ど總べては生活の改善に對する其れの態度若しくは、覺悟の實理的であるに拘はらず、其れが甚だしく審美的であることに、若しくは、藝術的であることに僻して居るからであります。勿論、最廣義と最深義とに於て、生活に美と調和とを見出だし、及び創造し、其れの支配の領域を擴張して行くことは人間の最後の目的であるとも言へます。然し、今日のやうに、生活のあらゆる側面にあらゆる種の醜と不調和とが充滿し、橫溢して居る間は、美と調和との支配の理想は美感と藝術とだけに依つて實現さるべきものではなくして、其等と並行し、協同して、久しきに亘る政治や、道德や、科學や、産業やの根氣よき努力に依つて、始めて實現さるべきものであります。あらゆる型に屬するクラシシズムは美と調和との支配を性急に憧憬するの餘り、實際

に於て其れがまだ成立しないのに、情操に於て其れが既に成立したと想像し、徹底的に其れを建設する代りに、皮相的に其れを假設したのでありました。あれ程に自由討議の精神に富んだ希臘型のクラシシズムにしてからに、この一般過失に陷りました。支那型のクラシシズムがこの一般過失に陷つたのに不思議はありません。

支那民族は非常に美を尊重し、調和に對して非常な敏感を有つた種族でありました。彼等がさうであつたことは禮と樂とが彼等の教育と政治とに於て重要な地位を占めて居たのでも解かります。美と調和とに依つて或る樣式にまで組織されない宇宙と人生とは彼等の環境として、到底彼等の堪え得るところではありませんでした。そこで、彼等のこの欲求を滿たす方法として、彼等の採つたものは忍耐強く理智に依つて宇宙と人生とを其等の成分にまで分析し、其等の成分の內具性に隨つて其等の改整を圖ることではなくして、一氣に嗜好に依つて全體として其等に屬する特徵を抽出し、想像力に依つて其等を醇化することでありました。支那民族はさういふ安易な方法で宇宙と人生とを式化し、さうして式化された宇宙と人生とを其等の原形と想像し、そして、其の想像に當て嵌るやうに、政治や、道德や、學問や、產業を工夫したのであります。

一見したところ、支那文明は其れの制度より文章の末に至るまで、如何にも整調の美觀を極めて居ります。然し、其等が餘りにさうであるがために、わたくし共は、自然、其等が眞物でなくして、僞物でありはしないかとの疑念を起すのです。何故ならば、眞に生命の飛躍し、生長のはたらいて居るところには、動的の交涉はあるが、支那文明の構圖するやうな靜的の整調は見出だされないからであります。實に、支那文明の表現した Kosmos は、本質的なる Chaos をそのまゝにして措いて、纔かに其れの上に貼り附けられた裝飾的の Kosmos であります。この頃、新聞紙の報ずるところに依れば、辜鴻銘氏はわが國への來遊の途上、朝鮮に於て、支那は文を以て勝り、日本は武を以て勝る。されば、

支那の文と日本の武とを合すれば世界に敵は無い、といふ意味のことを語られたさうであります。わたくしと雖も、確かに支那は或る意味に於て『文』を以て世界に獨歩する國であることを承認します。然し、其の『文』なるものは果してさう誇るに足るほどのものでありませうか。それは文明の『文』ではなくして、文飾の『文』であつたではないでせうか。言ひ換へれば、其れは質の發動としての『文』ではなくして、外より其れの發展を汨沒する『文』であつたではないでせうか。この數千年の間、幾度となく dynasties の交替はあつたが大して生活の改造なく、常に空疎なる理論と板僵なる實際とが遠き隔りに於て置かれて來たのは、畢竟するに、汎く、深く其の『文』に禍された結果であります。之れを要するに、支那文明は修辭の文明であります其れの宿弊は事實に置き換へるに修辭を以てし、常に端的に生活に面しないで、間接に修辭の一膜を通して其れを望んで居たところにあるのであります。支那にして眞面目に、眞劍に生きやうとするならば、是非ともこの宿弊より脫却しなければなりません。そして、わたくしは之れが對症藥としては、近世文明、聰明に理會され、的確に評價されたる近世文明に勝るものはないと信ずる者であります。

日本民族の特徴は印度民族の特徴より對角線的に異なつて居ると同時に、支那民族の特徴よりも對角線的に異なつて居ります。日本民族は印度民族のやうに瞑想的でもなく、支那民族のやうに組織的ではありません。然し、最も含蓄ある意味に於て實行的であります。この特徴を其れの素質として、わたくし共は印度より將來された神秘主義と支那より將來されたクラシシズムとの搖蕩の下に象徵主義を涵養し、其れを獨自の文明の基調としたのであります。

由來、氣稟剛健にして快活なる上に、豐富にして奔放なる官能を具へたのはわたくし共日本民族であります。そんな素質を有つた種族は如何なる境遇に置かれ、如何なる感化の下にあるも、結局は、象徵主義の文明を醞釀し、沈澱するに至ることは、さうしなければ止まないことは、極めて自然のやうに思はれます。印度文明たる神秘主義が彼等の野性

を薫習して其れを溫厚にし、支那文明からタラシシズムが彼等の粗質を洗練して其れを醇雅なものにしたといふことはありませう。然し、其等は白紙を薫習し、洗練したのではありません。未來に向つて一つの特定した發展を藏した一つの特定した素質を薫習し、洗練したのであります。樹は其の實に依つて知らる。其等の感化の下に、わたくし共の祖先は、彼等の性情の發動とし、要求として、彼等に獨自の文明たる象徴主義を展開して行つたのは之れが何よりの證據ではありませんか。

わたくし共の祖先は、謙虚に、そして、悲しいかな、多くの場合に於て、盲目に印度文明と支那文明とを、特に、後者を師範と仰いで居りました。彼等の態度は選擇の其れで無くして、純然たる模倣の其れでありました。之れがためにわが國は隨分多くの損害を蒙りました。それにも拘はらず、意識的に印度文明と支那文明との渇仰者であつた彼等は、不意識的には其等の改造者であり、超越者であつたのであります。この不思議なる經過の結果として、彼等は、絶えず彼等の傳習した理論を以て、其等の理論が到底當て篏まらない樣式にまで彼等自づからの掌中に於て發展さした事件を强いて解釋しようとし、解釋し去らうとする滑稽を演じて居りました。そして、彼等はさうすることの矛盾を覺りませんでした。然し、經緯はどうであつたにしても、彼等の內にはたらいて居たわが民族性は、其れの表現を求めて、だんだんに神秘主義の文明や、タラシシズムの文明の窠臼を脱して、象徴主義の文明を形造つて行つたことは炳焉たる事實であります。

それでは、象徴主義とは何んでありますか。特に、考察の範圍を狹めて、わが民族性の涵養した樣式としての象徴主義とは何んでありますか。

元來、象徴主義なる言葉は藝術上の樣式、若しくは、主張を標識するために工夫されたものであります。そして、象

徵主義者は『瞬間の中に永久を觀ようとする、』若しくは、『瞬間を以て永久を捕へようとする』のが其れの志向である」說明するのであります。然し、事實として、瞬間は時間の最も短かきものであり、永久は最も長き時間を超越したものであるならば、瞬間の中に永久を觀るとか、瞬間を以て永久を捕へるとかいふことは、此等の標語が文字通りに解釋された場合には、孰れも一つのパラドックスに過ぎないことになります。さうすると、若し象徵主義の主張に一つの眞理が含まれるならば、此等の標語は文字通りに解釋さるべきものでは無くして、純ら形容として解釋さるべきものであります。それならば、さう解釋した時に、此等の標語の暗示しようとするものに何か眞理がありますか、若しありますならば、其の眞理は何んでありますか。其等は、鑑賞を中心として語れば、單純なる經驗の中に出來るだけ豐富なる意義を發見しようとし、實行を中心として語れば、出來るだけ單純なる方便を用ゐて、出來るだけ複雜なる効果を擧げようとする努力である、とわたくしは解釋する者であります。

このやうに象徵主義の標語を解釋しますと、（そして、わたくしは此れ以外に正當なる解釋は一つも有り得ないと信じますが）わたくし共は無難に象徵主義なる言葉の概念を擴張して、其れをして單に藝術に關する一つの樣式、若しくは主張を表現するに止まらしめず、人間の生活一般に關する一つの樣式、若しくは、主張を表現せしむることが出來ると思ひます。そして、斯く表現される樣式若しくは、主張はあらゆる樣式、若しくは主張の中で極めて優秀なるものであると思ひます。

わたくしは象徵主義の眞頭骨を說明して、其れは、觀賞を中心として語れば、單純なる經驗の中に出來るだけ豐富なる意義を發見しようとし、實行を中心として語れば、出來るだけ單純なる方便を用ゐて、出來るだけ複雜なる効果を擧げようとする努力であるとしました。さうしますと、何人にして、わが國の文明の所産たる政治や、道德や、宗教や、

藝術や、學問やの孰れかの一つを取つて、印度文明の產出した其れに若しくは、支那文明の產出した其れに比較し、其等が如何なる點に於て、如何なる風に互に異なるかを檢討しますならば、彼れはわたくしが、何故に印度文明を神秘主義と呼び、支那文明をクラシシズムと呼ぶのに、わが國の文明を象徵主義と呼ぶかの理由を容易に了解するであらうと考へます。概して、わが國の文明の所產のものは、其等の文明の所產よりも、其れの構造を遙かに簡約にするに拘はらず、其れの意義を遙かに豐富にし、其れの運用を遙かに柔軟にし、自由にするからであります。わたくしに之が例證を擧げよとならば、わたくしは、たゞ、其れの饒多に苦しむのであります。敎理としては、(其れが、其れの外形だけに於てなりとも、神秘主義の拘束の内に跼蹐するがために、象徵主義の精神を發揮するのには最も不利な位置にあるに拘はらず)眞宗と日蓮宗とを擧げることが出來ます。道德の一部としては、武士道を擧げることが出來ます。再び辜鴻銘氏を引合ひに出しますが、中國の道德は夷狄に蹂躙されて、日本に去つた、日本の武士道が、即ち、其れであると言はれて居るさうであります。然し、概念としては兎に角、體驗上の道德としての武士道は、どうしても獨り象徵主義の文明の下に於てだけ涵養され得るものであつて、其の他の種の文明の下には發達し得ないものであります。彼れがさういふ言を爲すのは、畢竟するに、彼れはクラシシズムの文明と象徵主義の文明との相違を全然辨ぜざるがためであるとしなければなりません。

然し、何んと言つても、わたくし共が象徵主義の文明の粹は、之れを我が國の產出した藝術の中に索めなければなりません。中に就き、茶室と、俳句と、浮世繪とは粹の最も粹なるものであります。何故ならば、此等は、わが民族性が最も自由なる發動を取つて、最も不羈なる樣式を工夫した結果であるからであります。こゝには、『わが民族性は瞬間の中に永久を觀る、』若しくは、『瞬間を以て永久を捕へる』といふ象徵主義の標語が直ちに當て嵌るやうに、外面的の色彩と

形象とは強化され、醇化されて内面的となり、出來るだけ單純なる方便を以て、出來るだけ複雜なる効果が逹せられて居りますために。そこに、感覺的幽玄性、若しくは、官能的偶永性といふやうな不思議に微妙な體驗が味はれるのであります。何人にしても、苟も深刻に、徹底に、一國の文明の異なる部分の相關と交渉とのデリケートなはたらきを考察しようとするならば、茶室や、俳句や、浮世繪のやうなものは、ほんの纎弱末技に過ぎない、其等はわたくし共の國民生活一般に對して大した價値のあるものではない、なぞと云つてはなりません。其等はわが國民性が外部よりの拘束を感ぜず、若しくは、其等を破つておのれに内具する傾向を發見し、それを練磨して行く時には、其れが如何なる發動の樣式を取るかといふことをわたくし共に説明し、證明するものであります。其等は、たとひ位置に於てわが國民生活の中核であつたと言はれ得ないにしても、尠なくとも、意義に於ては其れの頂點をなしたものであります。この意味に於て、其等はわが國民生活全體が、自覺の淨火に依つておのれに含まれた雜素を燒き盡し、自然に結晶した寶石であるとも見られるのであります。

以上、わたくしは省筆と粗畧とながら、印度文明と、支那文明と、日本文明とが、それぞれ、其れの特徴として居るものを描出しました。そして、其等はあなたが漫然と想像されるやうに、決して一樣のものでないといふことを聊か明白にしたつもりです。わたくしの評價が一方に於て、印度文明に對して最も薄く、他の一方に於て、日本文明に對して最も厚きはわたくしの確信の正直なる告白でありますから、止むを得ません。他の點は姑らく措きます。世界の文化共和に參加するメンバーとしての資格の優劣の一點に關しては、神秘主義に生きる印度民族とクラシシズムに生きる支那民族とを排して、日本民族を上位に置くことにわたくしは躊躇しない者であります。

それでは、獨り日本だけが、その上、何等の準備を要することなく、現代に於て、將來に向つて、世界の文化共和の

一メンバーとして、完全におのれに獨自の文明を發揚することに依つて、其れに對して重要なる貢獻をして行くことが出來るでありませうか。わたくしはさうは考へません。さうして行くことの出來ないことは、わが同胞が歐羅巴文明に接觸して以來、この五十年間に亙つて彼等の暴露した多くの過失が具さに物語つて居ります。さうして行くためには、日本民族は印度民族や、支那民族と等しく、もつと深く、もつと強烈に、もつと徹底して近世文明から其れの振盪と覺醒との洗禮を受けなければなりません。たゞ、さうすることに於て、印度民族と支那民族と、日本民族とはそれぞれその態度と精神とを異にしなければならぬだけであります。

五

あなたにしても辜鴻銘氏にしても、亞細亞文明の振作の急務なることを大聲疾呼せられ、自國に於て一世の大先覺者、大指導者として萬人の景賴を一身に集めて居られる方々が、何故に近世文明に對してそのやうに偏見を抱かれるかはわたくしの理解に苦しむところであります。あなた方がそのやうに近世文明を避忌し、嫌惡されるのは、畢竟するに、あなた方が（斯く申し上げてはあなたに對して甚しく非禮にあたりますが、）近世文明の志向と作用とをまだ十分に會得されないからではありませんか、否、十分に其等を檢討されたことさへもないからではありませんか。わたくしからすれば、近世文明の志向と作用とが精當に解釋され、博厚に鑑賞された時、今日のところ、其れを措いて世界の大勢に應じて、最も自由に、而かも、最も秩序正しく亞細亞諸民族の文明を開發するものは他に一つも在り得ないとわたくしは信ずる者であります。わたくしからすれば、近世文明はこれまで人間が自己解放のために計畫したあらゆる機關の中で、最も完全なるものであります。近世文明は其れ自づからに自由社會ではありませんが、其れに至る必然の段階で

あります。其れは歐羅巴人の専有物では無くして、人類全體の共有物であります。其れが歐羅巴人に依つて先鞭を著けられたといふことの如きは、ほんの歴史上の偶然の出來事であつて、大して問題とするには足らぬほどの事柄であります。何故ならば他の如何なる民族と雖も、彼等が人間としての體驗を積み、人間としての理想を有ちて自己解放の無限の道程を進み行く限り、いつか一度は通過しなければならぬ段階であるからであります。わたくしは民族主義、若しくは、國民主義の最も忠實にして強硬なる主張者であるがために、斯くは近世文明の重大なる意義を高調するのであります。

近世文明の功德に關するわたくしのこの陶醉的嘆美の言葉の全く終らざるうちに、あなたのお顏には忽ち皮肉と義憤との冷笑が浮んで來る樣子がまざまざとわたくしの心眼まで映じます。あなたは立ちどころに近世文明の名に依つて、社會的に、國際的に犯された無數の罪惡を指摘して、わたくしを目するに近世文明の缺陷に對する一個の憐むべき色盲者を以てするでありませう。さうして近世文明の醜惡にまでわたくしの注意を喚起するために、あなたはあなたが現代生活の缺陷と解釋されるものを擧げて悉とく近世文明の所産とし、隨つて、近世文明は其等に對して全責任を負ふべきものとされるでありませう。あなたの解釋に隨へば、近世文明は精神想――總べてのものの一致を齎らすところの精神想を壓殺し、物質欲――總べてのものの分裂を促がすところの物質欲を挑發した結果として、現代に於て、欲求と理想との間より、個人と個人との間より、民族と民族との間より、國家と國家との間より、最後に、人間と宇宙との間より悉とく溫かき一致の關係を逐ひ出だし、其れの代はりに、冷たき反目の關係を永久に置き据えたのでした。斯くして、一本の魔杖を振つて、昨日まで無邪氣な天使として光明の中に逍遙して居た人間をして、俄かに罪の重荷を負うて暗黑の中に匍匐し、啼吟する惡魔にまで變ぜしめたのは、悉とく近世文明といふ魔法師の仕業であつたのでした。

あなたのこのやうな法外な意見は、何等の事實に依つても支持され得ないものとして、わたくしは全然其れに反對する者であります。わたくしは現代の一般狀態としてあなたが理會して居られるものにも反對し、其れの生產者として、近世文明をして其れに對して全責任を負はしめようとするあなたの意見にも反對する者であります。

わたくしと雖も、現代に於て、あなたの非難の對象とされた原料のあることだけは承認します。然し、其等は單に原料としてであります。其等が事實となるには、必然に、其等にまで或る意味と價値とが與へられなければなりません。然し、其等に如何なる意味と價値とを與へるかは、其等を解釋し、評價する人々の理會の異なるに隨つて、大分に異ります。そして、あなたは靜的、孤立的、敎理的の理會より其等を解釋し、評價しようとするに反して、わたくしは動的、作用的、文明史的の理會より其等を解釋し、評價しようとします。あなたとわたくしとの間に、この根本的の相違あるがために、あなたからの物質欲は、反つてわたくしからの精神想となり、あなたに取つて墮落であるものは、わたくしに取つて向上であり、あなたが分裂しか見出ださないところに、わたくしは新たなる一致、若しくは、其れに至る準備を見出だし、あなたが單なる爭鬪を見出だす處に、わたくしは其れを掩うて一層大なる、そして、一層深厚なる協同の醱酵し、生長して居るのを見出だすでありませう。隨つて、今日、謂ふところの文明人の置かれた境遇は險惡でないとは言はれませんが、其れを改善する方法に關して、あなたとわたくしとの間には多大の相違があるべきであります。

近世文明と言つても、何もそんな一つの外物が人間の生活を攪亂するために、急に其れにまで侵入して來たのではありません。其れは人間が絕えずおのれを改善し、改造し行く無限の進程の中に現はれた一契機に過ぎないのであります。其れは、其れに先立つ文明の發展であり、其れに次ぐ文明の準備であります。されば、彼れが近世文明に入るや、

否や、急に、善を喜び、惡を憎み、不幸を避けて幸福に就く彼れの根本性情を逆にして、惡を好み、善を嫌ひ、幸福を斥けて不幸を求めるやうになつたとはどうしても受け取りにくい話ではありませんか。事實は、丁度、其れの反對です。人間が聰明を増し、徳義を高めて來た時に、彼れはおのずから近世文明といふ一紀元を拓いたのです。公平に、そして、思慮深く總べての物を計算に入れ、近世文明を上古文明、若しくは、中世文明より劃する特徴は何んであるかと追窮すると、最も含蓄ある意味で、即ち、理智に於ても、情操に於ても、徳性に於ても、其れは其等よりも一層善くなつたところにあると言はなければなりません。

近世文明は、其れに於て人間が始めて自覺に達した、言ひ換へれば、全體として、及び、其れの部分と部分との關係として、自分の性情のはたらき振りと、其れのあらゆる所産の交渉とに識到し、味到した種の文明であります。近世文明の光榮は、人間がそれまでは外部よりの拘束に依らなければ成り立ち得ないと想像されて居た實在にしても、理想にしても、おのれの知覺と衝動との内面よりの生長に依つて完全に成り立ち得るものであり、そして其等をしてさう成り立たせるのが、知覺と衝動との自具性であるといふことを理會するに至つたことであります。斯くして、彼れは近世文明に至つて始めて文字通りに『天上天下唯我獨尊』となりました。實に、嚴密に言つて、あらゆる他の種の文明に於て不可能であつて、獨り近世文明に於て可能となつた科學とデモクラシイとは人間がこのやうな自由の段階に達した紀念碑であつて、同時に、彼のために未來に向つて其の段階を守護する保砦であります。

一口に、近世文明といふ中には、其れの本質、即ち、志向と其れの偶然性、即ち、外形とが含まれて居ることをわたくし共は知らねばなりません。普通、近世文明が其れの弊害として、世人より非難を受けて居るのは、其れの偶然性、即ち、外形の側面に於てであつて、其れの本質、即ち、志向の側面に於てではありません。わたくしが近世文明を肯定

し、讃美するのは、無論、其れの本質、即ち、志向の側面に於てであつて、其れの偶然性、即ち、外形の側面に於てゞはありません。されば、こゝにわたくしは近世文明の此等の二つの側面が如何にして生じ、如何なる關係に於てあるかを勘しく考察しなければなりません。

近世文明は其の端を文藝復興の運動に發したのであります。人間はあの運動に依つて、それまで、幾千年間、若しくは、幾萬年間、暗中に模索して居たものを、始めて白日の下に發見し、そして、把持したのでありました。人間はあの運動に依つて、新たに自己の欲望の性質を理會し、自己の能力の範圍を認識するやうになり、前代未聞の特殊の意味で自己解放の緒を得たのであります。

人間は如何に太古に溯つても、一方に於て自然の要素を利用し、他の一方に於て協同生活を營むことに依つて、おのれの幸福を保障し、增進しやうとしなかつた時代は一つもありませんでした。さうすることは人間としての彼れの根本性情の命ずるところでありました。然し、概して言へば、彼れが文藝復興期に至つて自己の欲望の性質を理會し、自己の能力の範圍を認識するまでは、自然の要素を利用することと等しく、協同生活を營むことも、長い間の慣習の沈澱たる神話や權力のやうな外的の方法に依つて爲すより他に道は無かつたのであります。其等を爲すのに、先づ自然の要素を分析し、實驗して、其れのはたらきを記錄した上で其れを利用し、協同生活の理法として各人が相互に目的たり、手段たるの事相を觀察した上、其れを營むやうな內的の方法に依ることになつたのは文藝復興期から以後のころでありました。斯くして、文藝復興の運動の窮極の成果は人間の生活に近世社會の二大柱石たる科學とデモクラシイとの樹立でありました。人間は此等の二つの知見と方便とに依りて始めて個人としておのれの欲求を統制し、社會人としておのれ等の行爲を整齊することが出來るやうになつたのであります。

實に、近世文明はこれまでに人類が實現し得た生活様式の頂點であります。そして、近世文明と科學、及びデモクラシイとは一つのものに與へられた二重の名稱であります。其れの系統の側面からすれば、わたくし共は其れに近世文明の名稱を與へ、其れの表現の側からすれば、わたくし共は其れに科學、及びデモクラシイの名稱を與へるのであります。近世文明は科學及びデモクラシイの體であり、科學とデモクラシイ及び近世文明の用であります。既に科學とデモクラシイとにして近世文明の最も純粹なる表現であり、はたらきであるとすると、近世生活を組織するあらゆる種の活動は科學とデモクラシイとに依つて相關的に、聯帶的に、そして、補角的に體現されて居なければならぬ筈であります。例へば、一つの協同團體を形造る各のメンバアが個人としておのれの欲求を統制することは、おのれの行爲と他のメンバアの行爲とを整齊することであり、おのれの行爲と他のメンバアの行爲とを整齊する結果は、自然と、おのれの行爲を統制することとなるやうなものであります。文藝復興期の雄大にして博厚なる氣運に搖蕩され、搖醒されて蹶起したヒユマニスト等が、一方に於て科學の鼓吹者、若しくは研究者であると同時に、他の一方に於て社會の改造者であり、新道徳の提唱者であつたのは、彼等の直觀に依つて、科學とデモクラシイとの間に不可分の關係と意義との伏在するのを洞察したからであります。

かういふ風に、近世文明の本質、即ち、志向として、科學とデモクラシイとの職とするところのものを敍述して來ますと、科學にも、デモクラシイにも、百の稱賛すべきものはあるが、一つの非難すべきものはないやうに見えます。然しながら、今日、世界を通じて、ある種の人種から科學とデモクラシイとが強烈な非難を受けて居ることも顯著な事實であります。それならば、彼等の非難は全然彼等の空想より發せられるのでありますか。彼等は敵なきに矢を放ち、火なき處に煙が立つと評かるのでありますか。必らずしもさうではありません。近世文明は猶ほ幼稚であります。其れが

世に出現してから、短日月しか經過しません。其れの體系は既に確立しましたが、其れの使命に至つては、多くの障礙と戰ひつゝ果されなければならないのです。理想としては、最も有力でありますが、存在としては、尙ほ、極めて微力であることを免かれません。存在としては、其れに取つて代はらるべき運命の下にある中世文明よりも、時としては、上古文明よりも一層微力である場合があります。力量の關係より、往々にして、其れの志向に反し、其等によつて驅使され、惡用されます。そして、實際にこの經緯よりの損害を蒙るものは、近世文明の表現たる科學とデモクラシイとであります。人間の生活の中には、上古文明の、そして、中世文明の遺物として、まだ科學化されず、デモクラタイズされないのみならず、頑强に科學化され、デモクラタイズされることに反抗して居る部分があります。其等は社會に迷信を形造り、陰謀を形造り、戰爭を形造り、拜金主義を形造り、資本主義を形造り、侵略主義を形造る部分であります。其等はおのれ等の滅亡の日を一日なりとも緩うせんがために、常に科學とデモクラシイとの自由なる發展と圓滑なるはたらきとを妨害しようとして居ります。かうして、或る方向に進みつゝある物體が、他の方向より來たる物體と衝突し、其れの動力に依つておのれの取りつゝあつた方向が轉換せしめられ、其れがおのれのとは異なつた方向を取ることになるやうに、今日、科學とデモクラシイとは猶ほ餘威を逞うしつゝある其等の過去文明の遺物に依つて、或は壓迫され、或は拘禁されて、其れの本來の志向に反し、心ならずも邪道に陷ゐり、迷路に彷つて居るのであります。其の間の事情を全然會得せざる世の嘖々者流は科學とデモクラシイとのこの僞體を見て輕卒に其れを其等の本質と誤認し、科學とデモクラシイとに對して、呪詛の言を發し、輕蔑の礫を迸らすのであります。例へば、平等の理想がおのれの野望を遂ぐるために煽動政治家に依つて惡用され、藥品の發明や機械の改造が貪欲に滿ちた資本家や、功名心に燃える外交家に依つて誤用されて、彼等の資產を作り、若しくは、彼等の權勢を張るの具に供せられるやうなものであります。然

し、このやうな惡用や誤用に對して、科學とデモクラシイとはどこまで之れが責に任ずべきでありませうか。若しさうすべきものが抄しでもあるとするならば、其れは其等の惡用と誤用とに抵抗する力に缺けるところあると、自由の精神に缺くるところあるとに歸せねばなりません。つまり其れは積極的のものでは無くして、消極的のものであります。

近世文明の偶然性が世人一般に依つて其の本質と誤認されるところから、其れは欲望を滿たす方便の改良は講ずるが、そして、この事に關しては既に驚歎に價する成績を擧げて居るが、欲望そのものを整頓することに關しては無心であり、無力であると言ふのであります。嘗て『智識はおのれを正用するの術を知らぬ。其れを知つて居るのは、智識の上に在つて、其れを支配する智慧である。』といふやうなことをベエコンは言ひました。智識と智慧とに關するベエコンのこの意見を借りることにしますと、或る人にまでは、近世文明は人生の終局の目的に盲目であつて、たゞ片々たる方便の改造にのみ腐心して居るのでありますから、其れは智識であつても、到底、智慧ではあり得ないもののやうに見えませう。然し、如何なる場合に於ても、知識と智慧とを二つのものとして分割することは頑固の見解たるを免れません。眞正なる智慧は充實せる知識に依つて組織されなければならないし、智慧たることを其れの志向として居らない知識は、その質、知識にもなり得ないと確信して居るわたくしは、近世文明は、今日のところ、猶ほ極めて幼稚ではありますが、眞正なる智慧は近世文明を以て、初めて、始まつたのでもあるとわたくしは確信して居る者であります。動機あつての手段であります。動機として、欲望の整頓が動機として、そのものが先づはたらいて居らないたらば、其れを滿たす手段の如きは、どこからも生じ得ぬではありませんか。欲望を滿たす手段の改造は、一つ一つに其の限りに於て既に欲望そのものの整頓の意味が含まれて居ります、否、既に欲望そのものが整頓されて居るのであります。されば、若し世の中に欲望を滿たす手段の改善が欲望そのものを攪亂し、破壞するやうにはたらいて居ることがあるならば、そ

こには、其等の計畫者の意思が十分に發動しないで、其等の意志を逆用する者の意思が發動して居るのであります。

近世文明の缺陷は其れの意思を表現する道具として、科學とデモクラシイとを逆用して居るところには無くして、上古文明と中世文明との意思が其等を壓迫して、其等の進行を途中で沮止して居るからであります。本來、老母を養ふ動機を以て造られた飴が、或る人に依つて錢を盜むに誤用される結果として、飴は欲望を整頓せずして、反つて、其れを破壞する手段にされたと言つて、誰れが飴を造つた人の動機を非難するでありませうか。この世の中に於て、飴を造つた人の意思が十分に其れの發展を遂げたならば、其れは能く總べての人々の意思を感化し盡して、遂には飴の本來の志向を遮つて、其れを誤用するやうなことも、其れが誤用される機會も一切其の跡を斷つわけでありますが、不幸にして現代はまだ其の段階に達せざること遙かに遠いのであります。

近世文明は、あらゆる種の文明に優れて、人間の生活を理想的にすることに努力し、そして、さうすることに成功したものであります。されば、科學が起つたゝめに人間が肉欲的となつて、欲望が破壞されたのでは無くして、科學が起つたに拘はらず、其等の整頓がまだ十分に確立されるに至らないのであります。デモクラシイが行はれたゝめに人間が利己的となつて、個人と個人との間に憎惡の念が増し、階級と階級との間に鬪爭の思想が旺んになつたのではなくして、デモクラシイが行はれ始めたに拘はらず、個人と個人との間に憎惡の念がまだ十分に滅ぜず、階級と階級との間に鬪爭の思想がまだ十分に衰へないのであります。隨つて、わたくしは、わたくし共の生活から此等の疾患を取り去る方法は、科學とデモクラシイとの志向を其れの最後まで徹底させることの一事にあると確く信ずる者であります。

かういふわけで、近世文明には、隨つて、其れのヴエヒクルたる科學とデモクラシイとには、本質と偶然性とが含まれて居ります。わたくし共は其れの偶然性を排斥するがために、其れと併せて、其れの本質をも廢棄してはなりませ

ん。何故ならば、其れをも排斥することはわたくし共の發展する道を、否、換言すれば、わたくし共の生きる道さへ一切杜塞することゝなるからであります。あなたも、辜鴻銘氏も、口を極めて近世文明を非難し、力を極めて其れを排斥して居られます。然し、あなた方がさうなさるのは、其れの本質と偶然性とを混同されて居る結果からではありませんか、否、其等は識別さるべきものであるとする見地を體得されない結果ではありませんか。あなた方がどんなに殊勝に奮闘なされても、感覺の麻痺を理想とする婆羅門の教理や、欲求の羈束を目的とする孔孟の遺訓を以て現代に棲息する印度民族や支那民族を青春化することは出來ないとわたくしは考へます。わたくしの考へるところでは、この偉大にして、而かも至難なる大業を成就するの方法は、たゞ、聰明に、そして、重厚に近世文明を採用して、其れに生きることであります。あなた方の同胞が、一度、聰明に、重厚に近世文明を採用して、其れに生きるならば、彼等は彼等の文明を發揚し、彼等の民族性を啓明する上に取つて、其れは婆羅門の教理よりも、孔孟の遺訓よりも、他のあらゆるものよりも、遙かに親切にして、遙かに適切であるといふことを、彼等の經驗と實驗とから、體認し體得するに至るでありませう。

六

近世文明は、其れが如何なる場所に於て、如何なる民族、若しくは、國民に依つて、如何なる歴史上の行き掛りより始められたにしても、其れの內具性と內具價値からして、總べての人類に取つて文明の唯一の正當なる型であることをわたくしは確く信ずる者であります。されば、苟くも或る民族、若しくは、國民にして賢く現代に生き、正しく未來に發展することを志すならば、必然に其れの所有者となり、運用者とならなければなりません。若し、偶ま、不幸にして或る民族、若しくは國民が遺產として其れを相續しないならば、彼等は他の手段を盡して其れを獲得しなければなりま

せん。そして、近世文明に含まれた志向の完成に最も多くの、そして、最も優秀なる貢獻を爲す者が、この地上に於て、最も幸福にして、最も光榮ある民族、若しくは、國民であるのであります。この思想の眞理であることは、人間の根本性情と、文化の終極趨歸とが明らかにわたくし共に告ぐるところのものであります。

然し、事實として、今日までに實現され、現に流行して居るまでは、近世文明は極めて不完全なるものであります。共れがさうであるといふことは、共れの本質が絶えず共れの偶然性に依つて掩晦され、壓迫され、誤用され、虐使される一事からでも解かります。將來に向つて、共れを精當に、そして、豐潤に開展して行く唯一の道は、共れの本質を共れの偶然より辨別し、前者を擁護し、後者を抑制して、前者を後者の掩晦と、壓迫と、誤用と、虐使とより解放することにあります。今日、地上に棲息する民族の、若しくは、國民の孰づれがこの偉大なる、而かも、至難なる事業を爲し遂げるでありませうか。歴史上の出來事とすれば、始めて近世文明を工夫し、建設したのは歐羅巴の民族に相違ありません。然し、若し、こゝにも、物質的に言へば、最初に火藥に逢著したのは支那人であつたが、彼等は毫も共れを生活に利用することをしなかつたといふ事實を以て、精神的に言へば、共れを發明したのは彼等ではないといふ論法がこゝにも應用され得るならば、今日に於て彼等の子孫が共れの本質の純粹なる發達に心懸けないで、一向に共れの偶然性の享樂にのみ淫して居る事實からして、彼等は已に其の相續權を放棄しようとして居る者であるといふことも言へます。さうすると、神權に依つて、將來、共等の正當なる相續者となるの光榮を有する者は孰づれの國民でありませうか。

總じて、亞細亞の民族、若しくは、國民は近世文明の恩澤を受けるところの、歐羅巴の共等に比して遙かに遲く、そして、尠きものであります。この不幸は反つて彼等のために幸福となつて、彼等は歐羅巴の民族、若しくは、國民に比して、遙かに冷靜に、遙かに合理に、共れの價値を批判し得るの自由と餘裕とが與へられて居ります。彼等は歐羅巴人の覆轍

に鑑みて、其の自由と餘裕とを正しくはたらかせるの聰明と勇氣とを有たねばなりません。

若しわたくしの所見にして其の當を得たものならば、近世文明は其れの到着點として象徴主義の文明にまで發展して行かなければならぬものであります。眞正なる象徴主義の文明は、獨り近世文明の段階を經過して、始めて實現され得るものであります。固より、近世文明は俗人の俗解に反して、これまで人間に依つて工夫された文明の中で最も理想的のものであります。何故ならば、科學にしても、デモクラシイにしても、現實の中に含まれた理想がはたらき出し、其れが翻つて其の現實を醇化して始めて體現される生活の方針であるからであります。然しながら、これまでのところ、近世文明は十分におのれの産出したものの眞相に徹しませんでした。之れがため、往々にして其れは過去の文明の誘惑と振蕩とに出遇つて、其れを組織する現實と理想とは互に其の抱擁の手を緩めようとしました。この結果は、生活の內に、空靈なる、即ち、神秘主義的なる理想と、板實なる、即ち唯物主義的なる理想とを對立させ、相剋させることとなりました。象徴主義はこの不完全にして不安定なる理想主義を一層完全に、そして、一層安定にしようとする努力であります。象徴主義は瞬間毎に現はれる特殊の外に何物をも認めず、其れが特殊として成り立つのは、既に其れの細胞を形造る普遍のはたらきで其れの內具性として そこにあるとします。そして總べての人々の總べての感情と、總べての思想と、總べての行爲とは完全に現實的であつて、同時に、完全に理想的であると理會し、取り扱うのであります。象徴主義の志向をかういふ風に解釋すると、象徴主義の文明は最も經濟的であつて最も合理的である、否、最も經濟的であるが故に最も合理的である種の文明であると言はねばなりません。この解釋よりすると、『わたくし共アテンス人は美を好んで驕奢に流れない、學を愛して底弱に陷らない』と言つたペリクリイスの文句や、『自分は美と、善と、完全とに生きようと決心した。』と言つたゲエテの言葉は正しく象徴主義の文明の基調を宣言したものであると言はねばなりません。

わたくし共日本民族は單純なる生活を營むために、小なる規模に於てではあつたが、現に今、過去に於て象徴主義の種のものであると言ひ得る文明を建設したのであります。さうして、近世文明は象徴主義の文明たることを

其れの最後の趨歸として居るとすると、わたくし共が初めて近世文明に接觸した時に、其れに對してわたくし共の取つた態度は決して聰明なものではありませんでした。わたくし共は、たゞ不思議な、然し便利なものとして其れを使用しただけです。わたくし共は其れの偶然性だけを享樂しようとして、尠しも其れの本質を鑑賞しようとしませんでした。否、さうすることが出來ませんでした。此れは、畢竟するに、わが國に於て發達した象徴主義は過去の文明に屬するものであつて、近世文明の洗禮を受けたものでなかつたためであります。わたくし共の文明と科學やデモクラシイとの間には必然に共通のものがあるのでありますが、わたくし共は、兩方の外殼を破つて其れを見通すことが出來なかつのたであります。之れがために、わが象徴主義の文明は、近世文明の壓迫に依つて、殆ど全然其れのイニシエチヴの力を失ふまでに窒息させられました。然しながら、わたくし共がだんだんに西洋文明に親炙することの深くなるに隨つて、尠なくとも極めて少數の人々は、わが象徴主義の文明を以て近世文明の本質を發揚し、其れの偶然性の短所を訂正することのわたくし共に取つて可能であり、緊要であることを漠然ながら覺つて來たやうです。但し、其等少數者と雖も、一度正當なパアスペクチイヴを取つて、わが象徴主義の文明の志向と近世文明の志向とは全然同性質のものであるの眞諦を體認するに至るまでには、そこに、まだ大なる距離があるとしなければなりません。其れにも拘はらず、わたくしは特異なるわが國民性の賜として、夙に一種の象徴主義の文明を洗澱し、醇化したわが同胞のために一個の文化國民としての彼等の洋々たる前途を祝福する者であります。

之れに反して、わたくしの洞見し得るところに依れば、久しい間、神秘主義の文明を繼承つて來た印度國民や、クラシシズムの文明を繼承して來た支那國民は、近世文明との關係に於て極めて勝手の惡い羽目に置かれて居るとしなければなりません。近世文明は數千年に亙つて神秘主義の文明とクラシシズムの文明とより漸次に轉化し、進化して來た文明であります。其等があるまゝでは、近世文明の志向と彼等の文明の志向との間に共通するところの極めて尠なく、乖離し、背反するところの極めて多いのであります。然し、彼等にしても、それぞれ、一個の文化國民として將來に向つて

生きようとするならば、生きるだけの價値あるやうに生きようとするならば、言ひ換へれば、世界の文運に貢獻し、共れをして彼等の存在と意思と勢力とを感得せしめ、理會せしむるやうに生きようとするならば、彼等は是非とも適當に彼等の文明を處置しなければなりません。彼等の幸福のために、徒に共れを回避することは絕對に彼等に許されて居ないからであります。それならば、どうしたらばよいのですか。彼等の取るべき道は唯一つしかありません。共れは、彼等の文明を、隨つて、彼等の生活を、彼等の感じ方と、考へ方と、行ひ方とを近世化することです。言ひ換へれば、共等を現實主義的に象徵主義化することです。然し、彼等の文明はさうすることに强硬に、頑迷に抵抗します。形式的には兎に角として、作用的には抵抗します。然し、さうすることが彼等に取つて將來に向つて生きる唯一の道であるならば、之れがためには、彼等は如何なる難行、苦行も宜しく吝まざるべきであります。

こゝまで語つて來て、如何にしたならば彼れの文明を近世化するとが出來るかに就いて、わたくしの意見を述べて簡單になりと提示しないのは不親切の所爲なるの嫌ひを免かれますまいから、尠しく共れに關して語ることにします。

西洋に於てクラシンダムの文明が象徵主義の文明の萠芽たる近世文明、即ち、現實主義の文明に至るまでには、隨分長い歲月を經、隨分多くの爭鬪と改革とを閱しました。神祕主義の文明は尙更のことです。されば、印度國民や支那國民をして一飛躍に依つて神祕主義の文明、若しくは、象徵主義の文明を超えて現實主義の文明に達せしめ、彼等をして共れを運用するに適當するだけの思想と情操とを創造せしむることは、固より困難な業であります。然し、不可能の業であることはありません。共れは、思ふさま大膽に、科學や、文藝や、敎育や、必要があれば、法律さへの方便を用ひて、彼等が現代生活を營むことに方つて、彼等の信仰や傳統や制度が如何に不合理のものであるかを尠くとも不便のものであり、不十分のものであるかを、彼等をして、理智に於てと等しく、否、共れに於けるよりも一層多く情操に於て、しんみりと徹底的に會得し、體認せしむる事です。今日、彼等がある如く、彼等をして信仰と、若しくは、道德と、功利とを二元となし、其の間に到底相越ゆべからざる障壁を築かせて置くやうでは、到底、この遠大

なる目的は達せられるものではありません。彼等の文明を實驗主義の文明と化するの術は、後者を以て前者を攻撃することではなくして、其れを溶解することであらねばなりません。それでは、さうした後で、彼等の過去の文明はどうなりませうか。其れを組織する成分の中で彼等が強く、美く、善く近世生活を營む上に於て、少しでも貢献あり價値あるものは悉とく彼等の實際生活の中に取り入れられ、其等の一部分を滅するところも、失ふところもないでありませう。其等は、彼等の祖先より繼承した彼等の性情と共に、彼等に特有なる型の現實主義、若しくは、象徴主義の文明を構成し行く要素であります。

七

刻下、わが同胞の中の有識階級に屬する人々の大數は、一つの大なるヂスイルウジョンに陷つて居ります。其れは西洋文明に對するヂスイルウジョンであります。其れは彼等がこれまで餘りに西洋の文物を、超値し、西洋の道徳を過信した反動として起つたものであります。彼等のこのヂスイルウジョンの遠因となつたものはいろいろありませう。然し、其れの近因の一つが大戰勃發以後の歐羅巴の見下げ果てた社會生活の混亂と、道徳觀念の下落、若しくは、其れの眞相の暴露とであり、其れの最近因の米國議會に於ける、謂ふところの排日法案の通過であることは爭はれません。大凡崇拜の對象は完全なることを要します。たとひ其れに瑕瑾あるとも、其れの崇拜者にの瑕瑾は其の存在を認識し、其れを適當に評價することを許されません。彼れの想象力は其れを擒うて其れを一つの完全體にまでに揑ち上げなければ止まないのです。ボオズウエル主義は崇拜物に對する崇拜者の一般心狀であります。さきには、彼等は彼等の不見識から沒批判的に西洋の文化を渴仰しました。今は一時の失望と落膽とのために沒批判的に其れを唾棄しやうとして居ります。さきには、彼等は大した根柢なく西洋の諸國民を人間以上の或るものと想像しました。今は又、大した根柢なく、彼等を人間以下の或るものと想像しやうとして居ります

この風潮に促がされて、この頃、わが同胞の間には二つの主張が叫ばれることになりました。其等の一つは近世文明を呪詛する主張であり、他の一つは亞細亞の同盟を策する主張であります。世人の或る者は其等の主張は人工に依つて作られた稀薄なる大氣の中に窒息して居たわが國民性が、漸く其れの自由なる發露と活動とを求めて來た自覺の第一聲であると取るのであります。然し、其れは果してさうでありませうか。わたくしはさうは信じません。信ずることが出來ません。このやうなものは一片の輕佻なるセンチメンタリズムより發せられるものであつて、決して、明らかにおのれの個性と國民性とに徹し、深くおのれの使命を信ずる雄深なる理解より發せられた主張ではないと、わたくしは確く信ずる者であります。何故にわたくしはさう信じますか。わたくしは近世文明を呪詛することを主張し、亞細亞同盟を策することを主張するやうなことが、既にわが同胞がまだ眞の自覺に達しないといふことの證據であるとする故にい さう信ずるのであります。近頃になつて、わが同胞は自分たちの亞細亞民族の一つであることを自覺したと言ひます。わたくしは彼等がそんな自覺を有つに至つたことの五十年後れたことを憾みとします。然し、永久にそんな自覺を有たないよりも無論、遙かに結構であります。然し、近世文明を呪詛することや、亞細亞の同盟を策することがその自覺の徴候であるとされるに至つては、わたくしは其の自覺も畢竟するに無自覺の一變形で無きやを大いに疑ふ者であります。彼等がそんな事をするのは、一つの無自覺で始めたものの後始末をつけるのに、他の一つの無自覺を以てするといふものです。そんな物にどこに覺醒があり、進歩がありますか。眞に自覺を有する者はおのれの個性と國民性の發動と、發展とを中心として生活しますから、西洋文明に對しても選擇を以て終始します。然し、不幸にして、初めに自覺を有せざるがために、實際上の要求と想像上の要求とを混同して、雜然と西洋文明を取り入れた後に至つて、眞に自覺を有することになつたのならば、彼れはさきに取り入れたものの上に選擇を施し、其等を整理すべきであります。其等を全然排斥するの行爲に出づべきではありませんか。そんなことは、今日、わが國の實情に照して、到底出來る筈のものではありませんが、單に情操の上だけにしても、そんな態度を取ることは間違つたことです。前非を訂正するが

めに、振子の如く一つの極端より他の極端に走つて、其の中間に安定の地位を見出ださないのは、見出だすことの出來ないのは、無自覺の行爲の最好適例です。歐羅巴の社會生活が混亂し、其れの道德觀念が下落すること、及至、米國議會が排日法案を通過すること等はわたくし共に取つて確かに歷史上の問題や、社會上の問題や、國際政治、及至、國際道德の問題を構成します。が、これまで西洋文明を採用して來たこと、これから先とて其れを採用しく行くことがわたくし共の個性と國民性との發揚と發展とのためになされたものならば、其れに對するわたくし共の態度に關して其れは一つの問題をも構成するとはわたくしの到底理會出來ないところのものであります。苟くもわたくし共にして外國の文明を取り入れるからには、わたくし共はもつと自主的に大膽に、もつと自主的に細心にならなければなりません。わたくし共にして眞に如何なるものでも其れの用途を知つて其れを收めて自家藥籠中の物とするの見識と推量とさへ自分にあるならば、それが藥草であらうと、毒草であらうと、尠しも問ふところは無いのであります。刻下、わが同胞の中に西洋文明を呪詛する主張と、亞細亞同盟を策する主張との叫ばれるのを聞いて、わたくしは彼等がまだ一つの獨立國民として、眞に自己を發見するに至らないものとして、彼等のために惜み、彼等のために悲しむ者であります。

八

かゝる時期に際して、あなたは偶まわが國へお出でになりました。わたくしはあなたにお目にかゝり、親しくあなたのお話をお聽きする機會をもちませんでした。然し、新聞紙の傳へるところに依れば、あなたはいろいろの團體の招待に應じて、處々で講話を試みられたやうです。そして、あなたの題目は先年お出での折と同樣に、物質的として西洋文明を非難し、精神的として東洋文明を稱揚する範圍を出なかつたやうです。そして、あなたがあなたのこの意見を力說なさるのに、哲學の見地にも據らず、文明史の考察にも基づかず、唯、漫然と神秘主義の想像に立つて其れを爲されたのも、前回と大して變はりは無かつたやうです。たゞ、わたくしが耳新らしく承はりましたのは、あなたが頻りに亞細亞文明の同盟といふことを主張して居られたといふ一事であります。

二十世紀の今日に至つても、猶ほ地球の表面より全く拭ひ去られざる其れの最大汚點は、自由と幸福とを享樂する機會が異なる種族の間に、特に、其等が白哲人種と有色人種との間に均等に分配されて居らないことであります、わたくし共亞細亞民族は一齊に蹶起して、人類全體の名に依りて、この地球上の不正を匡正し、その不正より來たるこの地球深の不安を根絶せねばなりません。されば、この目的を遂成する一つの方法として、あなたが亞細亞文明の同盟を策して居られることは極めて機宜に適したものとしてわたくしはあなたの計畫に賛成いたします。そして、其れの性質を政治的のものたらしめずして、文化的のものたらしめて居るあなたの遠慮に對してもわたくしの共鳴を吝まないところであります。何故ならば、總べての場合に於て、或る民族が永久に彼等の自由と幸福とを獲取し、確保するの道は、政治的更新では無くして、文化的啓發であるが、特に、現下に於ける亞細亞民族の多數に取つては、有効なるべき政治的更新は、必然に徹底せる文化的啓發に先たれなければならぬからであります、然し、意義あり、隨つて、實行され得、そして、効果の擧がり得る亞細亞文明の同盟とは如何なるものであるべきでありませうか。わたくしの所見に隨へば、そこにさういふものは唯一つしかあり得ません。其れは、成文的にもせよ、不成文的にもせよ、心に同盟を誓つた總べての民族は、互におのれの成功と失敗とより得たる一切の智慧を擧げて其れを參考資料として他に提供することであります。

　建國よりの曆日の數よりすれば、わが日本はあなたの祖國たる印度に比して遥かに後進であります。然し、近世文明に關する閲歴と、近世生活を生きんとした艱難とよりすれば、日本は印度に比して聊か一日の長ありと信じます。是れわたくしが日本の市民の一人として、一片の忌憚なき忠言をあなたに致す所以であります。どうか、其れの價値に隨つて御取捨下さるやうにお願ひいたします。

　若しこの公開狀の中に、尠しでも非禮の言葉が含まれて居りますならば、あなたの洪量は必らず其等をお宥し下さることゝ信じます。此等の言々句々は永遠にあなたの同胞と併せて他の亞細亞民族の自由と幸福とを冀ふわたくしの肺腑より發したものでありますから。

郵船會社事件に直面して會社經營の根本義を論ず

法學博士　堀江歸一

一、郵船會社紛擾の特徴——首謀者の見殺し——同盟罷業としての觀察——俸給衣食者の同盟——此種同盟の組織される要件——淡たる社員團結は素因でたい。二、團體運動の動機——愛社精神の意義——權力爭奪か社業刷新か——陸員派と海員派との別。三、社員の所屬と重役の態度——社內重役の責任——郵船會社既往の紛爭——郵船紛爭の人事的方面——伊東氏の重んぜられざる五原因。四、海運業の不振と郵船會社——社長以下幹部の營業方針——利益金分配の方針——既往に於ける經營方針の輕燥。五、營務經濟問題——所利資金下付の請願——重役攻擊の焦點。六、重役の責任——新重役の人選標準——重役と株主との關係——大株主の無關心なる態度。

一

公稱資本金一億圓、拂込資本金五千八百萬圓を擁し、東洋屈指の一大株式會社として、世間の視聽を集めること、最も大なる日本郵船株式會社の內部に於て、重役と社員との間に見苦しき紛爭を生じたことは、我國實業界に於ける空前の醜態であつて、何人も之に對して不快の念を感ぜざるを得ないであらう。會社に於て、重役の間に暗鬪が行はれたり、重役に對して社員が反抗を試みたり、勞働者職工が幹部の處置に服從しないで、同盟罷業を行つたりした事實は今日まで、世間に例なしとしない。人間が感情の動物であり、又自己の利益を擧げるに熱烈なる精神を有する者である以上は、時に自己と思想感情の異なる者や、自己の立身出世を妨げる者を排斥したり、又之を排斥するに就て、徒黨を作つたりすることも、人間社會に起り得る事柄であつて、固より善事として稱讚するを得ないが、尙ほ自然の出來事と認めて、不問に付せらるるであらう。然るに今回日本郵船會社に起つた紛擾は世間に在り觸れたものとは、性質が異なり、第一社員中所謂陸上派と稱される者の數百名が公然團

體を組織して、社長以下幹部重役に辭職を迫り、第二其辭職の容易く行はれざるや、一派の社員は續々辭表を提出して、業務を怠り、同盟罷業の形を持つて、幹部を脅かし、第三自己の希望を遂げる爲めには、會社、株主、同盟外の社員の利害の如きは、全然眼中に置かざるの態度に出でた諸點に於て、甚だしく特徴を發揮したやうに見へる。而して事の成就し難きを認めるや、始め行動の不穩である故を以つて、馘首された十一名の社員の復職一件の如きは、全然之を放棄した儘にして、各自の辭表を取下げ、斯る運動を起さなかつた以前の狀態に立戻り、義に馘首された犠牲者を犬死同樣に終らしめるに至つては、當世會社員なるものゝ節義を重んぜざる氣質を示したものであつて、此の點にも一の特徴を現はしたと云へる。或る人々が或る目的を果す爲めに、團體を組織して、運動に從事したとする、其內の重立つた者は內外の交渉に當り、殊に內部の重役に接觸する機會の多い爲めに、自ら彼等の憎惡を買つたり、又は運動抑壓の血祭に上げられたりして、眞先に罷免の處分に會つた場合に、是等の人々と運動を共にした數十名、數百名の人々が飽くまでも彼等を見殺にせず、犬死をもさせず、奮鬪努力して、目的の達成に勉めるのが、當然であり、時利あらずして、運動に失敗し、旗を捲いて、退陣するの已むを得ざるに至つた場合に於ても、尚ほ遂に犠牲者として馘首された人々の復職は飽くまでも之を要求し、此要求の容れられざる限り、斷じて復職しないといふ頑强なる態度に出でるのが、斯る團體的運動を起した者の道德であり、又倫理でなければならない。然るに郵船會社の事件に於ては、十一名の罷免者は遂に罷免の儘に終り、眼前に此悲慘事を眺めつゝ、他の辭表提出者は自ら不信任を呼號して、排斥の目標とした現任社內重役に事件の解決を一任し、各自辭表を撤回して、地位の安泰を謀るに至つては、倫理を蹂躙し、道德を沒却するの甚だしきものと云はざるを得ない。

郵船會社員の同盟辭職を勞働者の同盟罷業に喩へて、種々の批評が試みられた。其一は教育あり、教養ある大會社の社員が勞働者の爲す所を學んで、同盟罷業に類する所業を爲すことを以つて、賤しとするものであつた。然しながら此種の所說たる、我國に於て筋肉勞働者を蔑視し、一方に會社員とか、銀行員とか云ふ俸給衣食者を尊重する傳統的風習に基いたものに外ならない。會社員の如き、其地位に就くに或る知識を要し、又或る程度の教育を受けなければならない、現に今回郵船會社に於て、辭職運動に參加した人々の內にも、多數の官公私大學其他專門學校卒業者の含まれて居つたことは勿論であるが、斯る

敎育ある人士であれば何故に同盟罷業又は之に類する所業に依つて、自家の主張を貫徹する運動に從ふことを憚らなければならないのであるか。無產者階級は從來勞働者のみから成るものの如くに考へられて居つたが、勞働者の外に、俸給衣食者と云ふ一種の階級があり、資本家又は有產者階級に對せしめれば、俸給衣食者の如き、亦無產階級の一部たる可きものである。今同郵船會社に於て、一種の運動を試みた社員の內には、平生相當の給與を會社から受け、殊に、戰時好況時代に、纏まつた賞與金を支給された爲めに、多少の財產を所有して居る者もあるかも知れないが、固より一個の財產家を以つて、許す可き程のものでなく、純然たる勞働者と比較して、五十步百步の相違に過ぎないであらう。俸給衣食者が自家の勤勞を施す地位を離れゝば、直に所得を喪失して、生活に窮乏を訴へることは、別に勞働者と異なる所を見ない。玆に於てか我國に於ても俸給衣食者の間に、團結を組織し、以つて各自の利害を保護する手段に出でゝは、如何であるかと云ふ說は近來世間の一部に行はれた。然しながら俸給衣食者間の團結は例へば小學校敎員とか、タイピストとか、速記者とか同一特殊の職業に從事し、且つ其報酬に格外の差違の存せざる者の間に、橫斷的に、即ち諸處の官廳、銀行、會社等を通じて、組織され可きものであつて、斯く組織されてこそ、始めて其自然であると共に、其鞏固を致すを得るのである。此點から云へば、郵船會社に於て、一部の陸上勤務員が同交會の下に、團結したことの如き、社交上の團體としては兎に角、他の方面に於て資本家たる重役に對抗する場合には、重大なる意義を成すものとするを得ない。蓋し彼等社員の間に於ては、其地位や所得に餘りに大なる懸隔がある。彼等の內の或る者は近き將來に何等かの好機會が到達すれば、重役に榮進するを得るかも知れないが、他の或る者に至つては、幾年の後に果して斯る好運の見舞ふ所と爲るか、期し得べからざる者がある。斯る人々を擧げて、一列一體に一の團結に屬せしめ、以つて會社改革運動を行はうとする。改革運動の成効した曉に、上級社員には重役候補に上ると云ふ利益があるが、其以外の社員に何の利益があるか、殆ど豫想するを得ないとすれば、團結の薄弱であることは、明瞭の事實である。社內重役が當初から同交會に對して、畏れる所なく、或方法を以つてすれば、懷柔することも出來れば、蹂躪することも出來るとしたもの、必ずしも一場の豪語とのみ見る可きではなからうと思はれる。私は俸給衣食者を以つて、一の無產者階級と見るの觀察點から、彼等の團體運動を以つて、不可なりとするものではない。團體運動の一として同盟罷業亦許され可きものと考へる。

唯此種の運動に從ふならば、團體を組織するに當つて、地位境遇に餘り大なる懸隔の存せざる者のみを選んで、團員とすることを以つて、最も必要であると考へる。然らずんば團員の思想にも、感情にも、利害にも相一致せざるものを生じて、團體其ものを薄弱ならしめる恐れなきを得ないのである。

二

郵船會社員の一團は今回の紛爭に於て、明に伊東現社長の不信任を叫び、其排斥を企てた。而して其排斥の理由とする所は伊東氏が無爲無能であつて、爲めに社業の不振を來すことの一事であつて、社員として之を爲すは畢竟愛社の精神の然らしめるものであるとした。社員が各自の最善を其命ぜられた職務に致して、最大の效果を擧げることも、愛社的所業であると共に、社長其他の重役に凡庸の輩あつて、社員勤勞の效果を沒却し去るの歎ある場合には、先づ無能重役を放逐し、有能者をして之に代らしめる運動に着手することも、廣き意味に於ける愛社的精神の發露と見るを得るであらう。然しながら郵船社員にして眞實斯る高尚なる動機に左右されて、社長其他社內重役を排斥するものであれば、何故に現幹部の無能であり、短才である爲めに、業務に不良の結果を齎したと云ふ一切の顚末を說明しなかつたのであるか。株主に對し、世間に對し、監督官廳に對して、充分に此事を說明し、現幹部を排斥して、如何なる方針を以つて、營業政策を改造したならば、以つて會社の繁昌を促し、又會社をして、國家に荷ふ義務を全うせしめるを得るかと云ふことに就て、大方の諒解を得ることが最も必要の手段であつたのである。然も彼等の爲す所は海陸分野の確立、職制の改革、ボールド幷に社內の廓淸であつて、局外者から見れば、社業を盛大ならしめることゝは、間接に關係を持つかも知れないが、直接に關係せざる事柄に過ぎないし、殊に海陸分野の確立と云ふが如き、徒に權力の爭奪に耽るの觀なきを得ない。

若しも郵船會社員にして、單に權力の爭奪に耽り、往年海上勤務員が、團結に依つて我意を果した報復として、陸上勤務員が海上勤務員を背景とする重役を排斥し、排斥し去らないまでも、彼等を牽制して、陸上勤務員の爲めに進路を打開しようとするものであれば、彼等は單に空閒なる團結を組織して、或る要求を社內重役に提出し、其容れられざるときに、總辭職を決行し、斯くて社業に停滯を惹起すことを以つて、重役を脅かし、要求の貫徹を期することを以つて、當れりとするかも知れない。然も彼等の期する所必ずしも之に止まらず、此以上に社業を刷新する爲めに、現任の社內重役を排斥するを必要とする

ものであるとすれば、今回の如き運動だけでは、未だ世間の諒恕を收めるに足らないのであつて、別に爲すべき道が殘されて居つたのである。

海陸分野の確立と云ふことが今回の紛爭に於ける題目の一ツと爲つた。近年郵船會社の陸上勤務員中には、海員出身者の登用された者があり、更に其内の功勞者は擧げられて、重役の地位に就き、又時に海員若しくは其出身者の團體に擁護されて、社長と爲る者があり、斯る關係に依つて、社長と爲つた者は勢海員出身者を重用して、陸員出身者を疎外する、斯くて海員は海上に於ては勿論、陸上に於ても亦其地位を求めることを難しとせず、職業の範圍の頗る廣きに亙るに反し、陸員出身者は單に陸上勤務にのみ限られる。斯くて重役の地位も亦次第に海員出身者に蠶食され、彼等の水陸兩棲の便宜を得ることが陸上勤務員の羨望し、嫉視する所と爲り、海員出身者に依つて擁護される現任社長を排斥する意味に於て、今回の紛爭が惹起されたとすれば、私は一の會社内部に陸員派とか、海員派とか云ふが如き黨派の生じ來り、單に社交上の交渉に止まらず、會社の營業なり、人員配置なりに就て、互に各自の黨與の利益を謀らうとすることを以つて、奇怪事としなければならない。陸員と海員とは就職の當初に於ては、其出身學校なり、又は其有する熟練や、素質なりが異なる結果として、各々勤務する方面を異にするであらう。然も海員の職務には特殊專門の教育なり、知識なりを必要とするが、陸員の職務に至つては、必ずしも特別の教養を要しない、陸員中の高級者に進めば、進むだけ、之を要する程度を減ずるであらう。故に今、會社の海上勤務員中、海上に勤務しつゝある傍、船舶の運轉操縦、機關の取扱の外に、海運業の全般なり、又は特殊の方面なりに就て、實驗的に相當の知識を收め、陸上勤務に堪へるならば、其方面に拔擢登用して、其才能を盡さしめるのが一の會社に於て、適材を適所に置く所以である。船長の職を奉じて、年久しきに亙つた者は第一多數の部下を統御する技倆あり、第二多數の人士に接觸して、巧に應酬する機略あり、第三加ふるに本人の心掛け次第に依つては、海外の風俗人情に通ずるは勿論、世界に亙る寄航地の商業事情に明なるを得るが如き、幾多の特徴を備へるに至る可き道理であるから、會社としては斯る人を何時までも船長として、海上に置き、一個の老船長たらしめるよりも、適當の時期に於て陸上に引上げ、陸上勤務員として、其爲す可き所を爲さしめ可きである。此場合に陸上勤務員が自己の地位を蹂躙されるる故を以つて、反對の態度に出で、海員出身者は海員を以つて其一生を終らしめ、彼等の立身を局限することに依つて、自己

の立身に便しようとするのは、餘りに排他的利己的所業であると認めざるを得ない。會社の全體から云へば、社員の出身の如きに就て差別を爲すが如きは、大なる間違であつて、其陸上勤務員であつたと、海上勤務員であつたとの別を問はず、當時最も有能なる者を擧げて、其最も適する地位に就かしめることを以つて、當然とする。陸上勤務員とか、海上勤務員とか、派を立て、黨を結んで、互に排擠することが許されるならば、出身學校の別に依つて、互に同様の處置を爲すことも亦許されなければならない。斯の如きは實業界に偏狹の氣風を誘導し、從業員に殺伐の行爲を刺戟し、結局彼等の能率を薄弱ならしめるものとして、吾人の斷じて賛成する能はざる所である。

唯問題として殘る所は今日の如く所謂海上勤務員に依つて、擁立された社長が上に居つて、人事を左右し、選叙を決定する場合に、社員中に於ける海員陸員兩派に對する取扱が至公至正、一點の私なきを得たかどうか。換言すれば或る人は一の地位から他の地位に榮進し、他の人は一の地位から他の地位に左遷されたとして、其榮進なり、左遷なりが總て本人の會社に於ける勤務上の成績に基いたと認められるかどうか。社員内に黨派的所屬を生じた場合に、重役の取る可き態度は勉めて斯る徒黨を撲滅し、全社を擧げて、一體の有機物たらしめることゝしなければならず、若しも此事が實際に出來難くして、兩派なり、又は數派なりが對立したとしても、重役の如きは全株主の信任を負うて、會社の業務を指揮するものであると云ふ見地に基き、斯る社員間の黨派的分野の如きは、全然之を眼中に置かず、社員の任免配置は絶對に適材適處を主義とし、此點に於て些の誤解を挾むの餘地なからしめることを期しなければならない。然るに郵船會社の重役は此間に處して、何事を爲したかと云へば、社内に於ける徒黨の發生を認めるのは勿論、彼等自ら一方の徒黨を背景として、自家の地位を獲得したことの情實に制されて、常に其徒黨に偏私しようとする。斯の如くして會社内に紛爭の釀成されるのは、當然の道理であつて、紛爭は社内重役自ら之を發生せしめたものと云へる。

三

郵船會社には從來と雖も、内部に紛爭の跡を絶たなかつた。遠き昔は姑く措き、近藤廉平氏の社長時代にも、種々の紛議があり、社長をして煩悶せしめるもの少なしとしなかつたが、然も其紛爭たる、一部の株主が團結して、會社に增資增配を迫つたり、增配の財源を積立金の分割に求めようとしたり、或は關西方面の株主殊に虛業家を以つて知られた輩が其買占めた株數

の多きに乘じて、重役に割込まうと試みたりするの類であつて、左までに世間を騷がすに至らず、會社重役の手に依つて、解決された一方に、重役と社員との間、一部の社員と他の一部の社員との間に、葛藤を生ずること、今回の如き事例は之を求めるに由なかつたのである。郵船會社の社長として、社の內外を通じて、多大の聲望を收め、斯人あつて會社の重きを致したと稱されたのは、實に故吉川泰次郎氏であつた。近藤廉平氏は吉川氏に比較すれば、就任の當初に於ては、聊か見劣りするやに思はれたが、一二年の歲月を經るに隨ひ、次第に貫目を增し、社長として社員を統御するに難色を見なかつた。畢竟近藤氏の溫厚なる資質や、長者たるの風格が能く多數社員をして心服するに至らしめたものと思はれる。然るに近藤氏の沒後、伊東米治郎氏が社長に就任して以來は、何事であるか、郵船會社の內部に紛擾の絕へることなく、醜聲の外に漏れるは勿論、今回の如き大失態を演出して、世間の信用を失墜するもの少なからざるに至つた。其原因は何れに在るかと云へば、伊東社長の威望を以つてしては、社內全部を統括するに足らず、海陸二派の紛爭をして其行はれるに任せるの一事に外ならないと答へ可きであるが、更に個別的に考へを進めれば、郵船會社の病根は餘程深い所に存する。先づ第一に人事關係の方面から考へる。

第一、近藤氏の社長在職は以外の長年月に及んだ。在職中に偶々日露戰爭が起り、郵船會社としては大なる働きを爲し、其功勞に依つて、近藤氏は男爵を授けられ、此邊を潮時に引退するかと思はれたのに、歐洲戰爭中の黃金時代にも引續き其職に居り、遂に在職の儘病沒するに至つた。隨つて當然近藤氏の後繼者たる可く期待された副社長の加藤氏の方が一足先きに辭職したり、一度は郵船會社の社長と爲るであらうと內外から屬目された林民雄氏が或る事情の下に、退社して、全然社外の人となつたりして、社長候補者に種々の番狂を生じ、意外にも伊東氏をして社長の榮冠を戴かしめるに至つた。同交會は伊東社長を排斥する決議文中に同氏の社長就任に無理のあつたことを難じた。何を以つて無理の事情としたか、之を示さなかつたが、氏の社長就任の甚だしく不自然であつて、爲めに後日の累と爲つたことは、何としても否定するを得ないと考へられる。

第二、伊東氏の如き、即ち其經歷に於いても、又其實力に於ても、近藤氏の沒後、直に其後を繼いで、社長と爲るが如き、僭越の沙汰であつて、自己に副はざる高地に推上げられた觀なきを得ないのである。氏の爲めに利害を考へれば、近

藤氏の歿後、加藤氏とか、林氏とか云ふが如き先輩を社長に
戴き、其下に暫時在職し、徐に他日の榮達を謀ることの得策
としたのであるのに、人事に起つた偶然の事情から、一躍社
長と爲り、自己に充分の貫碌の備はらざる爲めに、内外から
輕視されるの趣きなきを得ざることゝ爲つた

第三、或は伊東社長の下に、故參社員から重役に拔擢さ
れた人々が專務とし、常務として、取締役の地位に居り、誠
意を以つて、伊東氏を扶翼したならば、ボールドとして、社
員に對する威容を盛ならしめるを得たかも知れないが、伊東
氏の社長就任以來、副社長や專務又は常務取締役の更迭は頗
る頻繁であつて、安田　中島、石井、藤島其他私の記憶に殘
らない程、多數の人々が或は重役に爲るかと思へば、社外に
退いたり、責任ある地位に就いた後には、暫時にして平取締
役に列したりする有樣であつて、何人が眞實會社の中堅と爲
り、樞軸と爲つて、社長を助け、ボールドをして重からしめ
るか、殆ど不定の狀であつた。斯くしては社員をして幹部重
役の威信を疑はしめるのも、亦敢て異とするに足らない。

第四、以前郵船會社には我國實業界に於ける一流の人士が
平取締役や、監査役として、名を列したことがあり、其後何
時か一人去り、二人去つて、之を見ざるに至つたが、近時再
び社外重役として三井三菱其他の代表者を取締役に充てること
と爲つた。即ち今日郵船會社の重役中に福井、成瀨、長
田、江口諸氏の名を存する所以と解されるが、斯る社外重役
の方が聲望に於て、閲歷に於て、遙かに社内重役を壓倒する
趣きのあるは、爭う可からざる事實であつて、隨つて斯る社
外重役を置いたことは、社員をして却つて社内重役を輕んぜ
しめるの傾きなきを得ないであらう。現に今回の紛爭に於て
も、社内重役は被告で、同交會は原告であり、一方に社外重役
が裁判官たる威容を示したが如き、其一端とするに足りる。

第五、由來海運業の如き、特殊の業務に從事し、或る限ら
れたる範圍にその知能を傾倒する者は其社會に於ては、如何
なる人物であつても、之を廣き實業界の代表者たらしめるに
就ては、種々の故障がある。殊に伊東氏の如き不備の經歷を
以てして、郵船會社の社長と爲つた人が代表的人物として、
實業界に重きを成すを得ないのは、亦當然の事實としたけれ
ばならない。

如上の事情を考へれば、伊東氏が大會社の社長として、其貫
目に輕き所あるは、已むを得ない。偶々ボールドの獨斷を以つ
て、十一名の高級社員を放逐すれば、恰も不法の處置にでも出
でた如くに、社外重役から、非難される狀態であつては、自己

の威容を加へる目的の下に、任選した社外重役の爲めに、却つて之を傷つけられるの襯なしとしないのである。

四

或は伊東氏が右の如き狀況の下に、社長に就任したとしても、會社の營業に對する措置宜しきに適したならば、或は少壯者の技倆を發揮したものとして、內外の稱讃を博し、其の地位を鞏固ならしめるを得たかも知れない。氏の社長職に就いてから、海運業は戰後に於ける經濟社會反動の影響を蒙り、世界的に不景氣の狀況に陷らざるを得ざるに至り、郵船會社も亦社業に不振を致し、好況時代に建築された宏大なる事務所も徒に往年の全盛を偲ぶに過ぎないし、株主は配當平均準備金の繰入りに依つて、纔に一割の配當に安んずるの外はないし、社員も亦賞與金の削減を嘆ぜざるを得ざる有樣である。此場合に社員全體が伊東氏併に幹部重役に絕對の信任を拂ひ、斯く社業の不振を告げるのも、已むを得ない。徐に他日の再起を謀るの一途あるのみと云ふ考を持つならば、會社も亦平和の空氣に包まれて、**社業の圓滿なる進行を見る道理であるが、斯の如き空氣の**醸成されるに就ては、社長以下幹部の會社經營方針に一點の錯誤なく、違算なかりし事を必要とする。然るに日本郵船會社の經營方針は從來決して斯る完璧を以て、許さるゝものでなく、幾多の點に瑕疵の指摘され可きものを存したのである。就中其著しきものを以つて、戰時好況時代に於ける利益金分取りの方針とする。

歐洲戰爭中、我國に於ける海運業併に船舶業が總て有利なる影響を蒙つて、空前の好景氣を呈したことは、世人の記憶に新なる所である。然も此事たる、戰時に於ける貨物の輻輳した一方に、船舶に不足した爲に、運賃傭船料等に急劇なる上進を來した結果であつて、固より一時的事相に過ぎない。戰爭終熄の後に於ては、反動の來ることを以つて、當然の勢とする。一個の船舶所有者が一時の好運に乘じて、巨額の利益を收め、成金風に得意を催して、金錢を浪費し、將來の計を爲さゞるが如きは、小人の常として、咎めるに值しないが、郵船會社の如き、一個の大會社として、其業務は中外に認められ、業務の成績如何に依つて、我國の經濟の興廢に重大なる關係を持つ場合には、好景氣時代に於て、將來の不景氣時代に處する覺悟がなければならない道理である。然も郵船會社の爲す所は市井の船主**と異ならず、利益金の擧げられることの多き場合には、其擧げ**られるに任せて、之を株主の配當金に充て、以つて株主の滿足を買ふと共に、重役以下社員に對する賞與金を豐かにして、各

自の財務を潤すに忙はしかつたことは、大正五年以來同社の配當率が

大正五年	上半季	二割
	下半季	二割八分
同六年	上半季	七割
	下半季	五割
同七年	上半季	五割
	下半季	六割
同八年	上半季	五割
	下半季	五割
同九年	上半季	四割
	下半季	三割

に居つた一方に、大正五年增資が行はれて、株主に大なる利益を與へ、重役以下社員にも亦株主に對して劣らざる利益が賞與金の形態に於て與へられ、斯る利益金分取りの爲めに、當然將來の準備として、蓄積され、以つて社業の發展に資す可き資金が多く消散されるに至つたのは、爭ふ可からざる事實である。

郵船會社の株主の中には、何故か多數の株式投機業者が居る。彼等は眞面目なる考へを以つて、株式に資本を放下したものではない。隨つて社業の堅實に行はれるとか、誠實に營まれるとか、資産が豐富であるとか云ふことには、少しも重きを置かない。期する所は平時に於ける增配であり、好況期に於ける增資又は拂込の督促であり、增配の爲めには身の皮を剝ぐと同樣、會社の大切なる資産をも掠奪し、一時の付景氣に依つて、株式市場に於ける郵船株の聲價を高からしめることを憚らない。斯る株式投機業者が互に氣脈を通じ、一團と爲つて、常に會社に求める所がある其場合に、戰時の好景氣に會したとすれば、會社の幹部重役に餘程の威力が備はり、又高い見識を有して居る人が之に當つて居れば兎に角、然らざる限り、斯る株主の要望に動かされ、利益金の大なる儘に、之を浪費して、顧みざることを常とする。郵船會社の如きは、屢々述べた通り、我國有數の大會社である、其事業は國家的運命に大なる關係を有し、國民經濟の興亡をも支配するし、事業の性質上、列國環視の下に、外國の同業者と劇烈なる競爭を試みなければならない。此邊の關係は郵船會社の如き國家的事業を經營する大會社の首腦者の當然考量す可き問題であつて、如何に株主から增配の要求があればとて斷乎として之を拒否し、寧ろ配當率の平均を得ることを以つて、株主に安全なる放資物に伴ふ利益を與へる方針に出でなければならない。此事に關聯して、私が一つ記

憶を喚び起したことがある。確か明治三十一年頃の出來事と思ふが、其前郵船會社は日清戰爭に臨んで、莫大なる利益金を收め、例に依つて高率の配當金を株主に分配した。而して戰後の反動期に會するや、利益劇減して、忽にして無配當の已むを得ざるに至つたのである。當時會社の株主の中には船價減損補充資金の一部分を割つて、配當を繼續す可き運動を開始し、猛烈に會社當局者に迫つたが、流石に當局者は之を以つて會社將來の基礎を危うするものとして、峻拒すると共に、斷然無配當の方針を決定したことがある。當時私は都下の或る新聞社に論說を擔當して居つたが、此問題に關して、二個の論說を起草掲載した。即ち第一日に於ては、郵船會社一部の株主が會社將來の利益に就て慮る所なく、目前の利益に汲々たる態度を難じて、重役が斯る要求を排斥し去つたことを當然であるとし、聊か會社當局者の爲めに、有利なる意見を述べたが、更に第二日に於ては、郵船會社の如き大會社に於て、利益金の多いときに、其多いに乘じて、之を分配し盡し、利益金の減少したときに、無配當を以つて、株主を驚かすのは、會社の經營法として、最も拙劣なるものであり、又株式の市價に意外の動搖を惹起して、財產上の安定を缺く嫌ありとし、會社重役の所爲の輕燥であり、浮薄であることを非難した。

「當時から今日に至るまで、二十餘年の歲月を經過したが、郵船會社の重役の所爲は其間に於て、果して幾何の改められたものありとするを得るであらうか。戰時戰後の好況時代に法外の配當を株主に頒つのは、日清戰爭に於けると、歐洲戰爭に於けると、其間に毫も異なる所なく、戰後の反動に苦しむことも、何等の違うものはない。流石に今日は郵船會社の資力の膨脹し、資金の充實したゞけあつて、不景氣の爲めに、直に無配當を告げる程の窮狀には陷らないが、近時郵船會社が株主に頒ちつゝある配當金の財源は何れも配當平均準備金を割いて、之に充てるものであるとすれば、配當の行はれゝば、行はれるだけ、會社の基礎を薄弱ならしめるものと云ふを憚らない。而して一方に昨今の悲況時代に社員に對する賞與金の減少しつゝあるが如きも、好況時代に於けるものと比較して、餘りに懸隔の大なる爲めに、彼等の不平を惹起す一原因と爲つて居ることは論を俟たない。即ち郵船會社の幹部重役が好況時代と悲況時代との別に依つて、配當率の決定、賞與金の分配等に異常の動搖を生ぜしめることは、自ら重役に對する株主や、社員の不平を誘致するに至る所以と爲るのであるが、同時に彼等が前途に何等の慮りなく、俗に言ふ有れば有り次第の會社經營法を試みて、推移し來つたことは、一時郵船會社の株主並に社員を滿足せしめ

たかも知れないが、永遠に會社の基礎を鞏固にし、時代に適應し、又外國の競爭に對抗する營業に就かしめる所以でなかつた。換言すれば株主に與へた利益なるものも、目前の小利であつて、決して永遠の大利を以つて、目す可からざることが今日に至つて、明に指摘されるのである。同交會が今回の紛爭に於て、幹部重役を以つて、會社經營の大任を託するに堪へずとしたのも、自ら理由のあること〻認められる。

五

郵船會社幹部重役の既往に於て爲した所の會社永遠の利益に副はなかつた一事は優秀船建造の問題に依つて、之を知るを得るのである。蓋し歐洲戰後諸外國は經濟的國策を遂行する爲め、又將來に於ける事變に備へる爲め、海運業の有效なる經營に着眼し、優秀船の建造に依つて、其必要に應じようとしつ〻あるのである。現に昨今米國航路に就く內外汽船會社の船舶に就て比較すると、

	隻數	噸數	速力	航海日數
加奈陀船	四	一萬七千乃至二萬二千噸	一八、八	九
アドミラル線	五	一萬四千噸	一六、四	一二
郵船會社	八	五千九百噸	一二｜一三	一四
商船會社	六	九千五百噸	一三、三	一三、五
東洋汽船會社	五	一萬二千噸	一四、六	一六

であつて、我國の汽船が外國船の敵に非ざることは、一目瞭然たるものがあり、殊に郵船會社の汽船に於て、其劣れるの著しきことを見るであらう。優秀船を建造して、外國汽船會社の競爭に當るの必要は夙に具眼者の認めた所であつた。然も會社は自力を以つて、此問題を解決しようとせず、郵船會社の如き、遞信當局者に陳情して、低利資金の貸付又は助成金の形態に依る援助を請ふこと、既に數回の多きに及んだと云ふことである。我國の實業家が自主獨立の精神に乏しく、少しく困難なる問題に遭遇するや、政府の保護又は援助に依つて、之に當り、以つて一時を彌縫しようとするのは毎度の沙汰であつて、必ずしも一の郵船會社のみを責むるを得ないかも知れないが、郵船會社の如き歐洲戰時に於ける好況時代に於て、其方針を愼重にし、少なくとも會社の將來に處するの用意に出でたならば、今日に於て優秀船の建造に就て、特に政府の保護を要請するが如き窮態を演ずることを免かれた道理である。好況時代には、重役株主を擧げて、我慾一天張りの態度を縱にし、斯くて自ら悲況時代に困難の加はる可き勢を招き、其勢の愈々甚だしきに及んで、政府の保護を求めんとするが如き、市井の匹夫と雖も、

尙ほ爲すを恥づる所である。堂々たる郵船會社の重役が此事を敢てするに至つては、其處に大なる缺陷の存することを認めなければならない。今回社員の重役排斥運動は偏頗なる人員の配置、不公平なる職制の改革を非難すると共に、重役の無能を攻擊することに存したようであるが、私を以つて見れば、後の一點こそ、重役攻擊の最大武器であつて、好況時代に會社の利益金を濫費し、悲況時代の今日に於て、手も足も出す能はざる窮態に陷り、外國汽船會社所屬の優秀船が世界到る所の航路に跋扈しつゝある狀況を目前に眺め、之に對して競爭を試みるを得ざる一事に就ては、現在の社內重役に負ふ可き責任の大なるもののありとしなければならない。

六

故に郵船會社の社內重役は今回の如き內部の紛爭を制止するを得ず、幾多の醜態を外部に暴露した點に於て、歐洲戰爭以來の社業に對する方針宜しきを得ず、社業を行詰らせ、將來に於ける希望を塞止した點に於て、責任を負うて、其地位を去ることを以つて、當然の處置とする。而して如何なる人物を以つて此國家的事業の經營者たらしめるかと云ふ問題に接すると、何人も即答に窮するであらうし、人名を指すが如きに至つては、

到底、不可能事に屬する。唯從來郵船會社の社業に混亂をし、收拾の難きを告げるに至つた所以は第一社員に海上勤務と陸上勤務との二派を生じ、互に黨を組んで、內訌し、重役に兩者を統合する力量の備はざること、第二重役が一部株主の意嚮に追從して、目前の利益を擧げるに忙はしく會社永遠の利益の爲めに、敢然たる態度に出でざることの二點に外ならない。故に正副社長を選任する場合にも、從來の如く、或は陸上勤務員が後援する人であるとか、或は海上勤務員を背景とする人であるとか云ふが如き傳統を一掃し、兩派の上に立ち、又は兩派以外に超然として、會社の全體を統括するに足る實業界の有力者を擧げ、以つて會社を託するの方法に出でなければならない。郵船會社の社長たるもの、必ずしも船舶の航行する技術や、船舶の建造される工藝に通曉することを要しない、荷客を蒐集する方法を辨知することも亦必要でない、唯大局に通じて、社業の根本方針を決定すれば、即ち足れりとする。海運業が諸種の事業中、聊か特殊專門のものである故を以つて、從來郵船會社の下級社員から出身した者に限つて、之を社內重役としたことは、却つて重役の選擇される範圍を狹くし、選擇された重役は海運業の專門家であるとしても、實業界に於ける第一流の人物たらざりし榮を免かれしめざるに至つたのである。

若し其れ會社重役が將來に於ける社業を閑却し、一時の増配に依つて、株主の歡心を繋がうとする弊害を矯正するには、株主殊に大株主中、會社將來の利害を念とする者が互に意思を疏通し、會社經營の根本方針に就て、重役に所見を開陳し、輕佻なる所業を愼しましまなければならない。郵船會社の社外重役の如き、單に會社の内紛を調停したり、不平社員の所説を聞いたりするのが必ずしも其職分ではあるまい。本來の職分は社内重役の意見の一局部に偏傾せんとする勢に對して、之を矯正し、其正しきことに就かしめることでなければならない。唯從來斯る用が爲されて居つたかどうかゞ一の疑問と爲るのである。

而して會社が常に會社永遠の利害に着眼して、社業の方針を律する、其結果として或る時代に法外の利益が收められても、直に之を株主に配當金として分配せず、其大部分を積立てゝ、他日社業を改良する財源に供する方針に出でたならば、投機的利益を目的とする株主の如きは、必ず不滿足の念を懷くであらう。或は不滿足の結果、互に團結して、重役を排斥する運動を試みるかも知れないが、試みたとした所で、大株主が重役[illegible]所を諒承し、重役と大株主との間に、諒解の成れるものある以上は、小株主の運動の如き、何等の力を他に及ぼすに足らない、重役は爲す可き所を爲して、會社の爲に盡すを得るのである。

重役に寛容なく、株主との諒解を待たず、外は徒に株主の歡心を結ばうとして、社業の基礎を傷け、内は一部の社員を從系して自己の地位を固めやうとして、却つて他の一部社員の反感を挑發する、斯くて會社の内紛續出し、社業をして暗澹たらしめるもの、亦故なしとしないのである。郵船會社の大株主中には當内者は姑く措き、約三萬五千株の三菱造船會社を筆頭として、有力なる資本家の網羅されるもの少しとしない。是等の人々にして團結したならば、自ら會社の營業方針を一新して、永久の利益に副はしめ、又適當なる人物を擧げて、之を遂行するの任に當らしめるを得る道理である。大株主が浮動極りなき營業方針の下に、自家の財産をして常に波瀾の赴く所に任さしめ、時に重役と社員との紛爭とを見せ付けられながら、半期の配當金を受取る外に、能事なしとするが如き態度を示しつゝあるは何故であるか。私は郵船會社の紊亂を以つて、斯る大株主の社業に對する無關心に依る所少なからざることを認めるのである。

動亂の支那對策と停頓の日露交渉前途

法學博士　米田實

今回勃發した支那の動亂は、騷擾頻々として相踵ぐ同國に取つても、容易ならぬ大事變と云はなければならぬ。尤も今次の動亂の直接原因となり、口火を切つたものは、江蘇督軍齊燮元と浙江督軍盧永祥（盧永祥自身は一昨年督軍の稱を止めて、浙江軍務善後督辦と稱したが、實際は同じことである）との勢力均衡に動搖を生ぜしめた極めて些細なる事件であつた。それは最近福建省に於て直隷系と見て宜い孫傳芳及び周蔭人の爲め、反直隷系の臧致平、揚化昭が逐はれて江西を經由し浙江に入ると、浙江督軍若くは軍務督辦の盧永祥は之を歡迎し、去る六月此兩將を其軍隊六千と共に自己の軍隊に編入したのである。之に對し江蘇督軍齊燮元は昨年八月取交されたる蘇浙和平協約を根據として抗議し、臧致平、揚化昭の軍隊の武裝を解除せんことを求めた。即ち昨年八月直隷派が福建を攻撃し、双方の關係を緊張せしめた時實業家連中によつて、蘇浙和平會なるものが組織され、上海領事團も斡旋努力し以て、八月十八日齊燮元盧永祥及び松滬護軍使何豐林との間に、蘇浙和平協約を締結した。而して其第三條に於ては「外部より來れる客軍が兩省に入り若くは通過することとを防止する」の約束が結ばれて居たのである、齊督軍は此第三條を楯に今回盧永祥の臧致平軍歡迎並に浙軍編入が、和平協約の精神に悖るものなるを指摘して嚴に抗爭した。所が盧永祥は之に對し、齊氏は其職務として江蘇督軍たる以外に蘇（江蘇）皖（安徽）贛（江西）巡閲使として三省の Su-e.-tuchun であり從つて江西の平和維持に對しても責任を有つてゐる、即ち江西は齊燮元の勢力下にある、然るに最初臧致平軍を通過せしめたのは齊燮元氏自から同協約第三條の「通過すべからず」と云ふ項目に背反せるものではない乎、何故自由且つ無事に管轄地を通過せしめたのか、何故武裝を解かしめなかつた乎と大いに反爭する所があつた。此爭端は本年七月であ

つたが、齊燮元が此間大總統曹錕及び例の呉佩孚等とも度々協議を重ねたことは、言はずも分り切つた所である、而して盧永祥が其要求を拒絶するや齊燮元等は愈事を武力に愬ふるの決意を爲し、遂に本年八月頃より軍事行動を起しつゝ、九月一日夜江蘇軍の黄渡附近浙江軍攻撃を手始めとして双方兵火の巷に相見ゆるに至つたのである。

砲火一度中部支那に爆發するや、豫て相應すべく約束があつたと信ぜらるゝ南方廣東の孫文も九月四日大本營軍事會議の結果直隷討伐を宣言するし、又東三省巡閲使奉天將軍（尤も一昨年奉直戰後聯を縦むるの命あり、獨立の姿であるが）張作霖も九月十五日同じく呉佩孚以下直隷系の討伐を意味する最後通牒を大總統曹錕に送り。天津に蟄伏して居た段祺瑞は部下の意見從來區々にして一致せず、温和派もあれば急進派もあり、陰忍を勸むるものもあれば突進を望むものもあつたが、やはり突進派たる彼れの妹婿呉光新等の意見に動されたるものと見え、目下自己の手兵は有せざるものゝ、九月九日附直隷派政府反對宣言を發するに及んだ、そして雲南の唐繼堯も亦勿論之に相應じて居る。同時に北京政府が九月八日盧氏討伐令を九月十八日張氏討伐令を發した。斯くて今や支那は殆ど各地を擧げて動亂の巷と化せらるゝに至つたのである、

所が支那の大動亂勃發と同時に、自然其關心なるを得ざるは、我日本である。何れの國と雖も皆政治的經濟的關係を同國に有しないものは少ないが、就中我日本に於ては、其政治的經濟的關係が地理上の接近事情と相俟つて、各國に比し一層大なるものあるは自然と云はなければならぬ。從つて目下我國内に種々の支那論又は對支問題運動等の行はるゝのも吾々は敢て不思儀とするものではない。併し唯此際我國に行はるゝ議論を檢し、殊に、近頃擡頭し來つた對支干渉論を解剖すると、予は之が果して適當且賢明なる國策と稱すべきものであるかを疑ふ。我國の對外關係中支那問題が重大なれば重大なる程、此對支干渉論に就ては吾人は一層愼重に然も徹底的に考慮しなければならぬのではあるまいか。依つて卑見を江湖に致して見たいと思ふ。

二

予は劈頭に打明けて云ふ、吾人は支那に於ける形勢の轉移を輕視することは出來ない、十分なる注意を以て之に對し、又局面の變轉に就ては隣國として共國際關係の常道に於て爲さればならぬことを爲すのも必要であらうし、或は列國と協同的に或は之から離れて單獨的に何等かの活動を爲さねばならない場合

が發生せぬとも云へない。けれども今日一部に唱へられて居るやうな種類の干涉論に對しては、寧ろ反對せざるを得ぬ立場に立たねばならぬことを悲しむものである。今日唱道せらるゝが如き干涉論は肝腎の中華民國其者の爲めにも利益でないと共に、我日本の爲めにも有利でないと確信する、それは何故であるか少しく私見を述べて見たい。

若しそれ今回蘇浙に於て勃發せる爭端が單に齊燮元盧永祥間の、個人的若くは地方的勢力爭ひたる意義を有するに止まるならば、吾々は寧ろ共和平の速かならんことを希望し、之が爲めには無論國家としての干涉の形式でなくとも、非公式的私人的活動を列國と共に行ひ、其爭闘を中止せしむることも適當であるかも知れない。併し予は今回の動亂がそんな些細な、無意義なものから生れたのではなく、地理的に云ふと支那全體に亘つて居り、又た政治的、國家發達見地から見て、非常に重く深き意義から生れたことを信ずるが故に、外國が始めから矢鱈に沮止的干涉を敢てするの正當なるかを疑ふものである。固より蘇浙戰爭の口火となつたものは極めて微細なものである。即ち臧致平楊化昭の軍兵を浙江軍に編入し、之によつて江蘇浙江の兵力のバランスを失はしむると言ふ均衡問題の爭ひ丈けならば、之を調停し以て此一點に於て兩者を安心せしむる途は必ずしも皆無ではないと思ふ。又今次の蘇浙爭端の他の理由としては、長く齊燮元が懷いて居た上海地方一帶の恢復問題と言ふのが含まれて居る。即ち齊燮元は是まで江蘇督軍として江蘇全體を支配して居る譯だが、事實はさうなつて居なかつた、それは何故であるかと言ふと、盧永祥は曾て松滬護軍使であつたが、一度浙江督軍となるや其後任として自己の味方たる何豐林を松滬護軍使とした、この關係から江蘇の一部たる上海一帶は江蘇督軍の下にあらずして、浙江支配者盧永祥の勢力範圍に置かるゝに至つた。而して上海及び其附近は中部支那に於ける最要地であり、從つて收入も多く何人も流涎せざるを得ぬ所である。加ふるに又た同地方にては密輸入盛に行はれ、密輸入價格の幾歩合は支那官吏の手に收められ、轉じて浙江督軍の手にも勘からざる部分が渡ると共に、財政上大に浙江を有利ならしめて居た事情もある、だから齊燮元としては江蘇督軍として其重要なる一部が他の督軍の勢力範圍内にあるを快とせず、之を恢復せんと考へるのも敢て不思議とするに足らぬのである。又た此外に蘇浙戰爭の一助因がある、過般直隸派の孫傳芳（日本士官學校出身）及び、周蔭人が福建の恢復に當り、然も周孫兩者の關係面白からず、周蔭人、福建を支配して孫傳芳遂に排斥せられ今や難境に居るの結果、彼としては盧永祥を排斥し自己の勢力地盤

を浙江省に作ることを便宜とする地位に立てることも容易に察し得られる所である。若し是等の事情が蘇浙戰爭の根柢であるとしたならば、それは支那の政治的機運の大進展の潮流の進みにも關係のあることではなく、大なる全國的思潮の動き力にも關係のないことであるから、或は在留外人或は領事館又はそれ等の機關の手によつて、之が平和鎭定を期せしむると云ふことも決して無意義ではないかと思はれる。

併しながら吾々の觀る所を以てすれば、之には恐らくは多數の同意見者があることゝ思ふが、今回の爭ひは支那に於て當然來らねばならぬ爭の到來したものと云つて差支ない。換言すれば支那の政治が行くべき所に行かんとしその進路の梯梯として起つた爭亂であると思ふ。無論今度の爭亂後直ちに現はるゝ現象其ものを以て結論と見る譯ではない、眞の結論を得るまでには固より相當の年月を要するかも知れない、其間には勿論斯の如き爭亂が繰返され、其歸着點に達するのは前途遼遠であるかも解らぬ。併し今日之を人爲的に無理に制止せんとするは、恰も一木を以て大廈の倒るゝを支ふるにも等しく、戸板を建てゝ以て暴風を阻止せんとするの類である。のみならず斯く行ふことは、支那の發達に忠實なるか如くにして、その實、不忠なものである。何を以て之を云ふか、之には種々の點を指摘し說明せねばならぬ、併し是は後に論じ、手近い所では先づ蘇浙に就つて居る支那の一大事實即ち直隷派對安徽派――廣く言へば反直派の爭ひは、膏藥療治で防げるものでは無いことを思はねばならぬ。又た之に依つて、示されて居る敎訓は支那軍閥の二大潮流が其受けねばならぬ當然の運命に進みつゝあることを示すものではあるまい乎。而して更に一層徹底的に達觀すれば、何れは亡びなければならぬ支那の軍閥は他の力よりも彼等間の力の爭鬪によつて自から其墓を築く可きものであり、斯くして今日よりもより進歩せる支那共和政治の眞の實現に向つて用意せられつゝあるものではあるまい乎。斯く考へると吾人は單に不自然に此自然的進展の勢ひを阻止することを以て、我外交政策の執るべき途なりと信ずることが出來ないのである

顧るに直隷派、安徽派の爭ひは、隨分長く、同時に簡單に賭せらる可くも無い程度となつて居る、袁世凱が民國五年（大正五年）六月其帝政の失敗に惱み、半ば狂死の姿にて歿せる後の支那の政治は、實に此兩派の爭鬪に終始されて來たと云つても過言ではない。無論南方には平民主義者にして且理想派である孫逸仙以下の國民黨が居る然かも何分其力弱く此等の力で所謂軍閥を壓倒すること至難であり、今日のところ未だ支那の實際の政治に於て十分重きを致して居らぬ、然らば猶ほ重きを致し

て居る軍閥中此兩派の爭ひは如何にして起つたか、と言ふと袁世凱歿後殘つた彼の部下の三天王とも見て宜かつたのは段祺瑞馮國璋並に王士珍であつた、王士珍は極めて野心少しく黨與を作らず自然埒外に置かれたのに反し、馮國璋段祺瑞の二人は略互角の勢ひを以て活動して居つた。馮國璋は云ふまでもなく、直隷出身であつたので自然直隷系の首領たらざるを得ないことゝなり、其系統の下には昨年十月六十二歳で支那大總統とまでのし上げた曹錕が居り、曹錕の下には目下五十二歳である吳佩孚が居た、又た馮國璋は長く南京に居り、其下には江蘇督軍として記憶せらるゝ李純が居た、而して李純は四年前死去したので、その後を繼承せるものは今の江蘇督軍齊燮元である。是等の中には直隷派と云つても必ずしも全部が直隷出身と云ふ譯ではない、例へば曹錕は直隷省天津縣の出身であり、然も其下に在りて最も雄腕を發揮し、今や北京政界の實際的支配者たり動もすれば曹錕を偶像の如く動かして居る彼の直（直隷）魯（山東）豫（河南）巡閲使吳佩孚は山東省蓬來縣の人である。江蘇督軍たる齊燮元は直隷出身であるけれども、一昨年の奉直戰爭に最も直隷派の爲め氣焔を擧げた馮玉璋は却つて反對派たる安徽省出身であると云ふやうな極端の例さへもないではない。大正七年馮國璋が世を去るや其後繼者として曹錕之に代り、其名流としては上に述べた吳佩孚、馮國璋、齊燮元、周蔭人等が數えられて居る有樣である、之に對して一方の安徽派は如何と云ふに、云ふまでもなく前に述べた袁世凱三天王の一人たる段祺瑞（安徽省合肥縣の出身、六十才を越ゆ、）が牛耳を握り、其下にあつて長く活躍したのは吳光新及び暫らく日本に來て居た我が士官學校出身の徐樹錚等の武人がある、又文人としては新交通系として知らるゝ而々即ち我中央大學出身にして外務次長、財政總長、交通銀行總理等とまでなつた曹汝霖が居り、最近まで日本公使たりし陸宗輿等もあつた。其他段祺瑞が久しく陸軍の牛耳を執つた關係で、軍人中之に味方したるものも頗る多く、今の浙江督軍盧永祥の如き、奉天督軍張作霖の如き、皆安徽系若くは少くとも准安徽系と見て差支ないものであつた、又最近福建より浙江に遁入せる臧致平が安徽派であるのみならず、安徽省出身者の有力なる一員たることを忘れてはならない。而して吾人が特に注意しなければならないのは袁世凱歿後兩派に分立せる安徽直隷の二大軍閥が、既に八年間に亙り引續き相互間に爭鬪を續け、人をして兩立の困難なるを思はしむるに至つて居ることである。

事茲に至れる最初はと云へば袁世凱歿後黎元洪は副總統より大總統となり、段祺瑞は總理として支那の政局を掌握するや、

馮國璋は江蘇將軍として中部支那に覇を唱へ、當時の支那に南方の國民黨系と相對して三大勢力互に拮抗するの有樣であつた。然も此兩大勢力の馮國璋と段祺瑞とは政見相異り、段祺瑞が當時南方民黨討伐を主張すると馮國璋は民黨との和睦を希望して、兩者の意見に杆格を生じ既に暗鬪を見て居たものである。所が大正六年五月、段祺瑞が對獨宣戰案で議會と衝突し、黎大總統に免職せられた後、六月張勳北上して、七月一日大總統黎元洪を逐ひ、宣統帝の復辟を斷行し、明智光秀の三日天下ならぬ十二日天下を見たのであつたが、其際段祺瑞先づ之に反抗し曹錕吳佩孚馮國璋等の直隸派亦之を不當と爲し、其結果哀れ張勳復辟の夢は失敗に歸し、和蘭公使館に逃れ馮國璋大總統となり、段祺瑞總理となつて玆に北京に於て二大勢力の直接的對峙を見たのであつた。かくなると、段と馮とは互に其門下及び味方に重要の官職を與へんとして暗鬪公鬪を行つたことは世間周知の事實である。同時に對南方討伐問題及び國內統一問題に於て、段は飽くまで武力解決を主張し、馮國璋は平和解決を固執して共に下らず、此頃に於ける兩者の爭ひは馮國璋の江蘇將軍時代よりも一層甚しきものがあつた。安徽派が武力解決に着々歩を進めると、直隸派は長江一帶に於て盛に其政策を妨害した、又段祺瑞が日本親善政策を執れば直隸派は暗に排日を鼓吹する傾向があつた。次て大正七年九月徐世昌が總理に選ばれた後も、直隸安徽の爭ひは依然として行はれた、這は一は老巧な狡智な徐世昌が安直兩派の爭鬪を巧みに利用し、自己の勢力を維持する策に出たのにも助長せられたのである、然かも乖離益甚しきを加へた兩派關係が遂に爆破を見たのは、云ふまでもなく民國九年(大正十年)の安直戰爭であつた。安直戰爭は誰も知る如く安徽派は當時河南將軍たりし直隸派の趙倜を排し段祺瑞の妹婿たる吳光新を以て之に代えんとする運動に依つて直接兩派衝突の機會を作つたものである、之に對し直隸派將軍連が中心となり他の安徽系中の一二不平將軍を加へて聯合反對し、且當時河南に出征して居た吳佩孚の軍隊を引揚げ北上せしめて安徽派を抑制するの策に出でしなるに至つたのである。斯うなつては安徽派も沈默すること能はず、段祺瑞自から出馬し徐總統に對して、曹錕の直隸將軍吳佩孚の第三師長を罷めしめんととを要求し、玆に兩派の衝突は勃發し民國九年七月十五日開戰を見た、其結果が七月十九日に至り安徽派の敗北直隸派の勝利に歸し安徽派の安福俱樂部解散し、同派の徐樹錚以下九名、日本公使館に逃れ段祺瑞も邊防督辦の職を免せられたことは、世人周知の事實である。

斯くて北京の天地は安徽派沒落し、直隸派は降伏勢になりか

けたが、之は双方に執り、力を試驗し得た決戰の結果は、誰も思は無かつた純安徽派ではないがそれに近かかつた少くとも段と近き張作霖の如き、徐樹錚との個人的感情並に蒙古問題に於ける勢力爭ひ等より、一時却つて直隷派に合致して安徽派に反對したのであつた、同時に彼は民國九年の戰爭にも功績があり、北京政界に勢力を存して居た爲め、北京未だ直隷派萬能と云ふことは出來なかつた。梁士詒の内閣の如き、張作霖の擁立に依つたこと、世の知る所である、所が一昨年四月及五月奉直戰爭起り遂に張作霖の敗北となるに及び、直隷派は殆ど完全に北京政界を支配するの運命に進んだのである。然かも安徽派並びに準安徽派側から言ふと、此等の戰爭は自己等の實力が試驗せられたと思はれ無かつた、のみならず直隷派が中央政權を掌握することゝなるや、彼等は各地に安徽派及反直派が依然勢力を有するのを見て、その勢力あるものを一掃し、直隷派の下に眞に天下を收めねばならぬ運命に立つた、同時に殘れる安徽系反直系も同しく防禦的攻勢を執らねばならぬことゝなり、此等は大局の上から北京に反對する南方の孫文とも聯絡することゝなつたのである、ところが其後の形勢を見ると、昨年十月には直隷派の曹錕は多少呉佩孚の傀儡化的陰謀もあつたことではあるが、愈大總統に擧げられた、勿論彼が當選するまでには非常に難問題があり、曹錕は寧ろ盛んに黃白を散じ、所謂買收によつて大總統の位を贏ち得たのは公然の秘密である。併し其方法は如何なる途を取つたに拘らず、直隷派天下統一計畫の一端たることは否定し難き事實である。同時に直隷派は四川及福建討伐に於て成功し、それ丈け勢力をも加へて來た、依つて奉天、浙江、雲南に殘留せる安徽派若くは反直派が相聯合して直隷派に當らんとするに至れるは、寧ろ自然でもあり又必然でもある趨勢と見なければならぬ。

殘留せる反直派中今日に於て最も重要たるものは、浙江の盧永祥、奉天の張作霖である。盧永祥は年齡今や五十八歲前清時代より武官として聲名高く然も頗る老巧なる人物とて、直隷派も之に乘ずるの機會が少なかつたのであるが、今回臧致平入省問題の突發を機會とし、中部支那に於ける安徽派及び反直派の勢力を一掃せんと企てたものと思はれる。恐らく呉佩孚の心事は自己の推薦によつて福建に赴き、一度地盤を作りかけて然も蹉跌せる孫傳芳の如きを浙江に送り、自己の勢力下に代ふることを以て上策と爲せるものではあるまい乎。それは兎も角も直隷派が中部支那の統一を企てゝ居るものとすれば、北方に蟠居せる張作霖が今回の如く戰爭開始の手段に出でたことも、容易に了解し得られるのである、何となれば既に四川平定し福建治ま

り、直隷派の勢力増大せる後に於て更に浙江平定せられ、中部支那までも直隷派の勢力下に服するに於ては、次で來るべき直隷派の鋒先は當然東三省張作霖に向つて投ぜられなければならぬのは、知者を俟たずして悟り得らるゝ所である。そこで手を束ねて將來の奉直第二戰爭の期を待つよりも、寧ろ今蘇浙戰爭の勃發に際し北京の手が南方に引かるゝ秋に於て、自から起つて浙江と相呼應し戰運を決するの一層便宜にして且賢明なりと考へたことは、敢て不思議ではない。併しかゝる商人の立場の論議は別として、中華民國の大勢と兩派の爭鬪が最早や根深くなつて居る歷史とを考へて來ると、誰か今回の支那動亂を以て根柢淺きものと言ふことが出來やう、同時に刻下の一時的な國內の平和、秩序と云ふ一點のみより觀察して、所謂部分的の創口に對し膏藥を貼り以て一時を彌縫すると云ふやうな國際的政策を考へ出すことが果して適當なる方策であらう乎。吾人は寧ろ斯の如き姑息彌縫政策の眞の用をなさゞるのみならず却つて其紛亂を長引かせ、禍根を遠き將來に貽して面白からざる結果を齎らすに止まるものではあるまい乎を憂懼するものである、殊に支那の戰爭が他國の戰爭の如く慘禍を伴はざるに於て益々此感を加へねばならない。

三

猶ほ吾人は之以上に支那に關して考慮すべき事がある、之れは目下支那の最惡制度として同國を禍せる督軍制度の廢止問題である。同國民の幸福の爲めにも同國の政治的將來の爲めにも督軍制度は速かに廢止せられ一掃せられなければならぬ。而して目下の動亂の如きも實に此督軍制度一掃に向つて步を進めつつあるものではあるまい乎と言ふ點是れである。

顧るに支那共和政治採用せられて以來、現はれて居る武人政治の炎位ひ惡弊多く同國を禍せるものはあるまい。清朝時代は如何と云ふに武人は第二位に置かれ、文官は其上位にあつた、無論今日のやうに支那は從前より地方自治の風が或程度に於て行はれて居た、即ち地方で地方を處分するの風がないでもなかつた。長髮賊其他の時代の例に見ても、地方人の力で地方の治平を保存し爭亂鎭定等のことが屢行はれたものであつた。併しながら大體より見て、今日の督軍の如き極端なる例は發見しなかつた。地方の政治は云ふまでもなく、文官總督巡撫の下に歸屬して居り其總督巡撫は支那中央政府が任命せるもので、之が免黜は自由であつた。そして彼等は中央政府に租稅收入を送つたものである、否な中央政府は是等總督巡撫に對し、一定の租稅額

を背負はして居た、勿論文明國に於て見るものとは自から相違はあるが、兎に角地方收入が相當に中央に向つて送られて居たのは論ずるまでもない。一方武人に就て云へば清朝政府は唯警戒の意味を以て地方に將軍を送つては居たが、彼は其省政治を支配するものではなかつた、帝政時代ですら此の如く文官中心であつた支那は、共和政治となると、圖らざりき却つて武人の極端なる跋扈を見、然も一切の文武兩政は舉げて武人の手に掌握せらるゝの冠履轉倒狀態を見たのである、之を觀る時、吾人は所謂支那の共和政治に對して大なる皮肉を感ぜざるを得ないのである。其事の起りは袁世凱が自己の武人出身であつたこと、並に彼が日清戰爭の教訓に鑑み、盛に支那陸軍制の改革に努力し軍人養成に努めて居た關係より、各方面に於て軍人の門下生若くば味方を有したので、共和制となるや、彼が自己の門下生及び味方を重用し、之によつて大總統としての自己の努力を支那各地に深く扶植せんと考へたことも、彼の武人重用策の一原因ともなつた。而して是等の武人連は袁世凱時代に於てこそ彼との個人的關係もあり彼の威望の下に兎も角大體中央を尊敬したのであるが、袁世凱一度歿した後、此等武人は將軍の名が、督軍と改稱された一方に、實權も増加して來た、即ち中央に於て是等武人を制御するに十分なる能力を有する人がないと共に、彼等督軍は漸次横暴となり、中央政權を無視するの態度を示す狀態と變化して來た、無論督軍は一省の官職中、最高位に居るけれども、大體軍政のみを管掌することが其本來の任務であり、一般政治は別に省長なるものありて之を行ふべき定めである。然るに中央政府の威令一として行はれず、是等督軍は殆ど獨立的に一切の文武兩政を支配するに至つた、彼等は中央政府の命令があつても、自己に都合好きものこそ之に聽從するが、都合惡しきものに對しては之に背反して憚らない、各省よりの中央に送る納金の如きも督軍の手に强奪され、政府收入の鐵道利益金すらも之を横合より取上げて了ふのみならず、外國との關係がある鹽税までも勝手に占有せらるゝのである、或意味から云へば督軍政治の始まつて以來、支那には彼方此方に獨立國が出現したと評しても過言ではない。支那通なるボアン博士等が評して居るやうに、實際中央政府の政治は近頃北京の周圍三四十哩位しか完全に支配して居ない狀態にあつた、のみならず各省互に分離し督軍相對峙せる結果、此等督軍は中央政府の命令を待たず場合によつては其命令を無視し勝手に相互間に戰鬪を開始し、或は領土を掠奪し、或は物資の刧略を敢てする。之が爲めに支那中央政府は國内の安全を保障することも出來ねば、外國に對して條約上其他に於て國際的義務を履行すること

をも出來得なくなつた。世人よ、斯の如き制度を繼續せしめ置くことは、今迄は止むを得なかつたとしても今後の支那に於て決して許すべからざることではあるまい乎。速かに之を絶熄することは、今日の最大要務ではあるまい乎。

更に吾々が考慮すべきことは、斯の如く武人が各省を根據とし獨立狀態の下に相對峙せる惡制度は、又た此惡制度を支持し、之が繼續を可能にする必要から、幾多の惡制度を造り出し若くは少くとも之を助長しつゝある點是れである、その一端を示すと督軍と其部下將校兵卒との關係若くば部下將軍と兵卒の關係等は悉く私的性質即ち個人關係となつて居る、日本では將軍と兵士との關係は國家の命を通して丈けの關係で、將軍その職を免せらるれば、兵隊とは他人になるが、支那では兵隊は國家よりも將軍その人を廻つて集つた團體である、ソコデ將軍其人が好運に進めば、部下軍隊も樂みと好運とを分つことが出來るが、將軍が沒落すると、兵隊は又た共に沒落することを覺悟せねばならない。然も是等將軍及び其部下の軍將連は双互間爭鬪紛亂の多いだけそれだけ、運命の變化がある。今日官職に在るも沒落して明日その部下兵員を卒ゐつゝ匪賊と化せねばならず、若くは今日匪賊なるも明日幸運に會して部下を卒いて官職に就くと云ふ如き奇現象を呈して居る。勿論支那では「好鐵不打釘、好人不當兵」と言ふやうに、以前から兵は良質のものでは無い、匪賊が官軍化するなどの例も、清朝時代にもあつた、併し今日の如き督軍が私兵を養つて相對峙する場合に於て、此種の惡風は督軍若くは督軍制度そのものゝ便宜から、又た必要から一層助長せられて來て、同時に甚しい禍ひを支那の上に及ぼして居ることを思はねばならぬのである。

殊に此弊風が支那の國際的關係につきてまで如何に支那を禍しつゝあるかは、近年に現はれた臨城事件以下西洋人不法拘留事件其他に徴しても、容易に看取し得らるゝところだと思ふ。

人は昨年突發せし臨城事件を記憶するであらうが、右の如き事件は強ち臨城事件を以て最初なりとは云はれない、舉例すれば一昨年奉直戰爭の際河南省に於て遙かに張作霖に響應し敗北せる軍兵は、同省に於て匪賊となり同年六月には諾威宣教師を拉致し、八月には佛蘭西人希臘人を捕へ十月には米國傳道所を襲ひ米國人及瑞典人宣教師を捕へ、次で三名の英國人を拉致する等暴狀亂行至らざるなき有樣であつた。該隊は約一萬を算し西洋人釋放の場合に對して賠償金を要求し並に自己等に對し軍隊に於ける官職を與へんことを求めたものであつた、當時支那中央政府は是等山東匪賊の要求を容れんとしたが呉佩孚の反對により中止したのであつた、所が外國公使館に於て外人救助の念

を說くものあり、結局妥協成立し、或程度に於て是等匪賊の要求を容るゝに至つた。而して之に續いて起つたのが昨年五月の臨城事件なのである。同事件は土匪約一千名津浦鐵道臨城驛に於て急行列車を襲ひ米人十二名英人六名佛蘭西人九名以下を人質として拉致し、之が釋放條件として賠償金を要求すると共に、支那政府に對し土匪の官兵編入を求めたのであつた。同年六月遂に妥協成立し支那政府より是等匪賊に對し所謂身代金は手交され、六月二十二日には其統領たりし孫美瑤を旅長とし其部下の面々を官兵に任用することゝなつた。這は實に極端な例證を擧げたのであるが、要するに今日の如く督軍制度があり、半獨立狀態の下に中央政府の命を俟たず私鬪に耽り、文武一切の政治は彼等の手によつて自由に行はれ、國家の軍隊にあらざる私的軍隊を擁して橫暴專恣至らざるなき有樣は、今や上より下に及び支那國內全部に亙れる不顧武人の橫行匪賊の跳梁を來さずには止まないのである。然かもこは督軍制度の惡弊の一端である、唯だ一を聽いて十を知る賢明なる讀者は、恐らくは未だ述べざる所をも容易に察知することが出來るであらう。

四

以上は現在における督軍制度の惡弊を叙べたのであるが、此際吾人の考へなければならぬことは、斯の如き支那武人の橫行各省の實際的獨立狀態を永遠に繼續せしむべきものであらうか、又繼續せらるべきものであらうかである。吾々の考を以てせば之が永續せらるべきものとは思はれない。若し之を永續するに於ては支那は各省個々別々の獨立國とならざるを得ない、其政治は淸朝の盛なりし時代否な末葉時代よりも一層惡政となるべきは明かである。折角共和政治を採用せる支那は共和民政所でなく、從來の帝政以上に政治の混亂を見るものとしか云はれないのである。吾々を以て見れば斯の如き形勢は永續さすべきものでもなければ永續せらるべきものでもない。殊に注意すべきは近頃支那に於て濟々靑年の覺醒の萌ひを示しつゝあること是れである。彼の學生運動の如きも確かに其一端を示して居るものではなからう乎。又た支那と外國との關係複雜を極むると共に、支那人間に於て之に刺戟せられて所謂國內統一熱なるものが漸く高まつて來た。此形勢が支那人本來の思想と如何なる關係を有するか、外國の壓迫に對する反撥心丈けに原因する點が多分である乎と云ふやうな問題は姑く措き、兎も角國內統一希望が漸次盛となり來れる思潮に照らすに、現在の督軍制度は明かに之に背反し、同時に消滅終焉するを當然の進路と觀なければならぬ。況んや文治を欲するは支那人本來の性質であ

り、又總てに於て保守的否平和主義者であり、軍國主義でもなければ武斷的でもない支那に於て、今日の如き極端なる武人政治の行はるゝことは、決して根本の理論に合致せぬものであつて、或時期に於ける一種の變態現象としか觀られないのである。斯く檢し來る時吾人は其何れの點よりするも、支那をして進むべき所に進ましめ、行くべき所に行かしむる爲めには、此制度の廢滅が其過程裡にあらねばならないことを考へる、然かも此廢滅は、同國現狀に照すに、外部より來る原因よりも、彼等自身の間に在り、又その制度の中に含まれて居る原因即ち、彼等自己の力の爭に依り、その絶えざる內紛により自から殪るゝことに依つて期せらる可きではあるまい乎、かう思ふと今や支那は其當然の歸結に向つて進みつゝあるを感せねばならぬのである。

五

以上述べたる所に從ひ今日支那全土に行はるゝ動亂に對し、膏藥的局部治療然たる干渉策或は調停運動は極めて愚劣なる法策だと斷ぜねばならぬのである、併しながら以上は唯支那の和平を希望する立場から和平勸告若くは干渉論を主張する分子に對する吾人の所見であるが、此外に又更らに別種の干渉論

があるやうに見える。それは何かと言ふと具體的に云へば日本其他各國の貿易に影響あることを恐れ、支那の和平を希望する論でもなければ、又單に戰爭を中止せしむると云ふやうな計畫でもない、唯此種の干渉論者は支那の統一的機運あるを承認し若し此機運があるとしたならば日本としては寧ろ現在支那政界に立てる人物の何れかを援助し、其統一を助成すべしと主張するのである、更に之を具體的に云へば張作霖とか、吳佩孚とか若くは段祺瑞の如の如き一部有力な人物を日本が援助することによつて、支邦の統一に資すべきであると云ふ論である。否な之丈けでは無い此外尙別種の干渉論がある、それは日本が或人物を援助し支那統一に努力せしむべしと云ふのではなく、單に滿洲蒙古の一部分即ち日本の關係極めて密接なる地帶に於ける日本の權利を安全にする利己的見地から出發せるものであつて、之が爲めに特定の人物をして滿蒙に其地盤を固守せしめ然も之によつて該人物をして支那の中央政界に足を踏出すことを爲さしめず、此種類の活動をも日本の手にて制止すると共に、中央政界に對しても此人物の滿蒙に於ける地位を擁護すると云ふ意味の干渉論である、此二論は前に述べた一般干渉論とは異つて居る。即ち前の干渉論は動亂は不可とする和平希望の見地から之を中止せしめんとするのであつて、一定の人物をして勢

力を得せしむるとか、或は一定の人物の地位を保障すると云ふのではない、單に現狀の儘に於て貿易を安全にし日本を初め列國の通商利益擁護の立場から和平を望むのである。是れ恰も昨年八月上海附近の實業家並に領事團が蘇浙の爭端を防止せると同樣の立場にあるものであつて、後に述べた二個の干渉論に至つては大部之とは相違がある。然らば後の二個の干渉論は果して正當なるものであらうか、是亦予が大いに疑ひなきを得ずとする所である。

第一に日本は一定の人物に加勢し之によつて支那を統一せしむべきであらう乎、日本とのみ云はず列國皆共同努力するも差支ない、日本が第一主張者となり列國を誘ひ援助せしむるも可であるが、斯の如き人物を援助することが果して正當であるか、是に就て先づ吾人は現在支那政界に立てる人物中、眞に我が援助に價ひするものありや否や、日本は先づ何人に援助を與へんと欲するか、直隷派を中心として現に大總統たる曹錕は吳服呼賣り商から上つた異彩ではあるが今や漸次勢力を低下し最早過去の人物たらんとしてゐる、今日事實上北京政界を動かせるものは何と云つても吳佩孚である、曹錕が大總統となり得たのも吳佩孚の默許によるもので、謂ば吳佩孚が彼を傀儡とする便宜から所謂祭上げられ大總統となつたと云つても宜い、況んや曹錕が賄賂を盛に行使し、議會を買收することによつて總統とれるが如きは、覺醒せんとしつゝある支那政治家の心を得た手段でないのみならず、彼は一片の軍人たるに止まるのであつて、それ以上政治家的能力ありとも思はれぬ。吳佩孚は如何と云ふに彼は今日軍人中に於て比較的教育ある男で、英米人よりは甚將敎系と目せられて非常に評判が良い、又民國九年の安直戰爭に於ける活躍振は最も外人の信用を高めた、併し乍ら彼と雖も今や直隷派軍人及び一般國民間に於て聲望十分で無い、現に大總統との關係も表面は兎も角內實に於て面白からざるものがある、其例證の一として曹錕の弟曹銳が吳に野心あることを知つて一昨年彼に背き、却つて奉天側に味方するの情勢を呈したのでも一班を窺知するに足るではない乎。次ぎに現在直隷派中人物として見られ、吳佩孚に次ぐ有力者は齊燮元であるが齊燮元は曹錕吳佩孚系でなく李純の系統である、若し今回の戰爭が直隷派の勝利に歸した曉には吳佩孚と相爭はんとするとさへ傳へられてある 現に在支三十年の前駐支英國公使ジョルダン氏さへ、昨年來曹錕、吳佩孚の統一能力なきを說いて居る程である、從つて吳佩孚等を援くる如きは未だ問題にはならぬ。然らば段祺瑞は如何と云ふに、彼は其淸廉潔白なる點に於て支那人中稀に見る人物であり、軍人界の元老ではあるけれども、彼も最早

過去の人であらう、彼の政治的生命は民國九年に於て終つたと云つても宜い、否な事實に於て民國八年同九年當時に於ても彼は安徽派の統領であるとは云へ實は空名であつた、彼は徐樹錚曹汝霖其他安福派倶樂部の専恣なる行動を制することも出來なかつた位で、今日は或程度の德望こそあれ、最早支那統一の力ある活動的人物ではない。張作霖は如何、彼は年齢に於て曹錕段祺瑞吳佩孚よりも少なく頗る活氣あり、鐵腕を以て支配するの慨を有すると雖も、本來無教育の馬賊上りであつて眼界も狹く識見も低く、到抵支那四百餘洲を統御し得る人物ではない、最上に見てやはり奉天將軍が彼の限度であると云はねばならぬ、殊に彼は保守主義者、守舊派である、彼は本來復辟を希望し大正六年張勳が復辟を企てし際には、彼は之に策應すべく内約を有して居たのである、所が周圍の形勢不可なるを看取し參加しなかつたけれども彼の思想の一端を知られるのであつて、之が新共和支那の中心人物となり得ないことは明かである。斯く檢し來れば目下吾人の以て後援すべしと爲す人物は、支那の勢力爭奪階級の中に於て認むることが出來ぬ、新に現はるゝ人物はいざ知らず、今日に於て眞に支那を支配し統一し得るものとして、吾々の助勢せんと欲する大人物は發見されない。

併し翻つて考へると、何人をして支那統一を實現せしむべきかは、支那人自身が考へ且つ決す可き所であつて、日本乃至列國か決す可き所では無い。未だ支那の輿論が認むる人物なきに、他國が進んで特定の人物を援助する時は、其援助せんとする外國は最も支那國民の悪感を買ひ、好意却つて正反對の現象を招來するのみならず、之が援助を受くる人傑それ自身もかりに統一の能力ありとしても、支那人の反感を蒙つて眞の統一實現は期待されない憂がある。殊に此點で、大正七年寺内内閣の段祺瑞援助の例の如きは最も我國に反省の教訓を與ふるものではなからう乎、當時段祺瑞は馮國璋沒落し直隸派に未だ人物の擡頭するものなく、袁世凱の後繼者として支那軍閥の中心人物と云つても差支ない程度であつた、そこで我寺内内閣は全力を擧げて之を援助するの態度を執つた、尤も一面には對獨參戰問題もあつたけれども種々の方面に於て之を支持したものであつた。誰も知る如く寺内内閣は彼の有名な西原借款一億五千五百萬圓を以て、段祺瑞及び之を中心とする安徽派の統一策を援助した、即ち我より支那に貸與せるものは交通銀行業務整理借款二千萬圓、有線電信借款二千萬圓、吉林會寧鐵道借款前渡一千萬圓、吉林金礦森林借款三千萬圓、滿蒙四鐵道借款二千萬圓、山東二鐵道借款二千萬圓參戰借款二千萬圓第二次善後借款一千萬圓、京畿水災借款五百萬圓であつたが、其少からざる部分が段祺

習派の南方討伐費となり、或は其勢力扶植の運動費となつたと云ふも誰か否認し得るであらうか。而して其結果如何と云ふに段祺瑞は呉佩孚の所謂國を賣るの賊とされ、日本の傀儡化せるが如く一般支那人に思惟せられ、彼自身惡名を受けたのみか、其率ゆる安徽系は沒落の運命に立至つた。同時に我日本も亦支那に於ける評判を惡くし、大正八年の巴里會議に於ける講和條約中、山東條項問題と相俟つて支那に於ける猛烈なる排日運動を挑發し、未曾有のボイコットを見、支那人の上に於ける日本の道德的精神的勢力は殆ど一掃された如き姿になつたではないか。既に斯の如き前例がある、支那人の意嚮未だ決せざるに外國より或個人を援け、それをして支那統一策に向はしむると云ふが如きことの不可なるは容易に看取せらるゝであらう。而して今日個人援助論は英米國等に最も之を見る所であり、彼の支那通チャール スデンビー氏等の如き個人援助論を鼓吹して居るやうに見えるが、幸に我日本では支那統一の如き目的を有する意味の個人援助論の比較的微弱なることは、當然とは云へ吾々の喜ばなければならぬ點である。

六

然らば顧つて第二の論即ち滿蒙に於ける我日本の特殊的地位に關聯し、特定の人物を援助し行く政策はどうであるか、一見前の干涉論に比して多少の理由を發見しない理ではない。而して此意味に於ける我國内の議論を、此種論者の所説につき詳しく檢して見ると、主として滿洲に於ける張作霖支持論に外ならないやうに思はれる。我國が日露戰爭に勝ち、滿鐵を獲得し、滿洲を自己の勢力範圍内に收めて以來、奉天の總督督軍は幾度も更迭したけれども、其變更せる幾多の總督將軍督軍の間に於て、張作霖が比較的日本に親善であり日本人との關係圓滑なりと云ふ論點から、張作霖の東三省統治を繼續する方が日本に取つて有利なりとする議論是れである。併しながら此種の張作霖支持策に就ては、吾々は幾多の異論を挾むに躊躇しないのである。

第一論者が從來の奉天總督々軍中に於て張作霖最も日本に親善なりと云ふも、這は一に督軍の境遇に基づくものではなかつた乎、例へば從來張作霖以前の總督等の場合には、北京政府の勢力最も多く奉天に及んで居り、今日の督軍の如き獨立的のものではなかつた、從つて北京政府の威令行はるゝと同程度に於て、從前の總督等は日本に自由なる讓歩を爲すが如きことは至難であつた。然るに張作霖に至つて所謂獨立狀態に立ち、北京の壓迫を受くること最も少なきのみならず、其獨立狀態を維持する上には、是非共日本の厚意に俟たねばならぬ立場より、從前の責任

者に比し比較的日本に好意を寄せたはで無い乎、否少なくとも好意を表せざるを得ない理由が存したのではなからう乎。斯く考ふると、張作霖で無くとも、同一の境遇にある督軍は同様であるだらうし、張作霖と雖もその環境變更せは、異つた態度を執るのではなからう乎殊に張作霖なる人物が信用に値ひするかどうかと云ふに、之に就ても彼は常に日本側に近かる可しと見る人もあるが、併し大正六年彼が復辟問題に於て清皇室支持を張勳に約し、又開闢の形勢に從つて變節したのを見れば、吾人は之を疑はねばならぬ。即ち彼が舊約を反覆破棄せるが如き態度は、果して信頼の値あるものであらう乎亦一疑問たらざるを得ないのである。のみならず吾々が更に考慮せざるを得ないのは論者の如く張作霖をして中央政界に立たしめ支那統一を遂行せしむると云ふにあらず、單に滿洲に於ける張作霖の地位を維持せしむると云ふにあるならば、日本は張作霖をして支那本土の政治より脱離せしめ、長く中立的地位を取らしめねばならぬのである。然るに今日張作霖が滿洲に於て獨立狀態を維持する所以のものは、中央政府の力不十分にして强力ならざる結果であつて、若し中央政府强大となるに至らば張は奉天督軍たる自己の地位を動かされ易くなるのは明かである、だから張作霖たるもの亦支那本土に於ける政治の轉移しつゝある姿に無關心たるを得ないのである。所で日本が無關心たり得ざる張作霖をして、永遠に北京政界より手を引かしめんとするならば、之は張作霖をして自衞の策を取ること能はざらしむるものである。之にも拘らす彼をして日本側論者の策を實行せしむる爲には、日本自ら張作霖の地位を保障しなければならぬ、さもなくば張作霖は到抵北京政界より手を引くことは出來ないのである、所が滿洲に於ける張作霖の地位を日本に於て保障することが可能であらう乎。云ふまでもなく滿洲は支那の領土でありその主權にある地域てある、今の督軍獨立狀態は一種の變態であり、北京政府が有力にさへならば、何時にても督軍を免黜し更迭するの自由を主張するであらう、斯くの如くなるに、日本が張作霖の滿洲に於ける地位を保障すると言ふのは、支那の主權を無視する所以であつて、勢ひ日支衝突を誘致せずには出來ない所であらう。之が日本側のなす可からさる處である以上は日本の張作霖に對する地位保障と云ふ如きことは問題となり得無いことを忘れてはならない。斯くの如く保障が出來ぬに張作霖として日本に干渉せられ制止せられて中央に手を出さないと云ふ如きことは、何としてもその甘受し得ぬ狀態である、やはり彼はこれ自身の爲に將來の運命を賭しても、他の督軍連と合從連衡し直隷派に當るこそ、寧ろ自然の勢ひではなかろうか。斯く檢し

來れば張作霖支持の爲に我國が奉直戰爭を阻止するの策に出づることも亦云ふべくして行ひ難い所である。況んや今日の如く張作霖が南の方孫逸仙とも聯絡を有し盧永祥とも連衡を保ち、多年約束せる結果として兵を擧ぐるに至つたのに對し、之を阻止するが如きことがあつたならば、それこそ却つて直隷派を援け盧永祥孫文段祺瑞派を勢力均衡上あら不利の境遇に陷らしむるのみならず、延いては是等反直派の怨恨を日本の上に齎らすものではあるまい乎、斯く考へ來る時、吾人は以上の干渉論を以て未だ適當なりと信ずる譯には行かないのである

無論我日本の滿蒙に於ける利益關係は極めて複雜且重大なものがある、此正當なる利益を正當に擁護し維持するは寧ろ當然のことであり、本國人を初め朝鮮人約百萬人を有する滿洲に於て、それ等の生命財産を戰亂の危險より安全に免れしめ、惡影響を受けしめず、資本金十四億圓の滿鐵事業を安全に確保する如きは正に日本の爲すべき方策である、然も是等は條約上の本義に則り正當の範圍に於て行へば敢て差支ないのである、此必要あるの故を以て當然支那の管轄に屬すべき政治問題、殊に督軍連の政權爭奪にまで關係し干渉することは却つて愚の極ではあるまい乎。殊に吾々は支那問題を見るに當つて唯滿蒙と云ふ如き局部に限定せず、廣く支那全體に着眼せねばならない、又た日本の利益を考ふ可きだが、第一、支那の政治的進展は先づ支那人自身の立場から、その幸福の問題から考へてやる丈けの雅懷が東洋人の先達たる日本人に執り大切なことを忘れてはならない、而して之こそ日本から見ても、その永遠的利益の立場に於て良策であることを悟らねばならぬのである、以上の立場から目下起つて居る干渉論には同意することが出來ない。勿論時として干渉の要を生ずることは皆無とは言はぬが、それは支那人民の輿論が之を翹望するに至つたときに於て、一片の援助を與ふるにあらう。然らざる干渉は支那を傷け、日本を傷くる無益有害の擧と言はねばならない。

七

刻下の對支問題に對する予の所見は右の如くであるが、此際予は更に我對露交渉に就ても一言を費さゞるを得ないのである。殊に其談判が半歳に亘つた今日尙停頓の姿を見るに於て此念を深くせざるを得ない。

顧るに本年の日露交渉は二月二十四日北京に於て芳澤駐支公使と、露西亞代表カラハン氏との間に、浦鹽駐在日本領事否認問題、郵便問題、新聞通信員放逐問題に關聯して會見を見、續いて三月更に會談を見たのを機會に、根本的日露交渉の端が開か

れたのである。而して五月十四日以來愈正式交渉に入り、相當の進捗を見つゝあつたが、六月十五日加藤新内閣の芳澤公使召還となり、次で同公使の樺太視察となつて一時中絶した、八月に入るや又復北京で再開し今日に及んで居る。其間の經過を見るに日本側にても從前と異り、前例なき程の讓歩を爲した跡が見え、露西亞側にても相當條約成立を希望せりと見らるべき態度を示して居る。併しながら今日に於て決定を見た事項と云ふものは極めて少ないやうである。尤も未だ決定を見ないもの總てが兩國交渉の難問題と云ふ理ではない。例へば右交渉條件の一である相互に宣傳を禁止すると云ふ事柄は我日本側でも、相當に重視して居るけれども之は露西亞が今日まで歐羅巴諸國との間に作つた殆ど各種の條約に於て認めて居ることであるから、決して難關でも何でもない。次に露西亞は過激派政府成立以後直に舊來の條約廢棄を聲明せる結果、舊條約效力問題も亦交渉の一項であるが、是も昨年六七月に亘る東京會議に於てヨッフェが、我川上公使に言明せる如く舊條約の内容を新條約に於て認め得る便法もある。又露西亞側にては他の各種條約は無效としても、ポーツマウス條約の内容を有効とするの考へを有して居ない譯でもなく、同時に日本人の漁業權の如きも十分ポーツウマス條約によつて認めて居たものであるから、露西亞に於ては勿論承認すると信ぜらるべき理由がある。唯露が承認しないかと思はるゝものは、薩哈嗹方面に於ける日本人の漁業を日本管理下に置くと云ふ一項で、現に多少面倒なる問題となつたと信ずべき理由もある。其外露西亞側の希望せる日本軍撤兵問題は既に一昨年十月西伯利より撤兵を行ひ、今日は唯北樺太に一部占領軍が殘留せるのみで、日本は繼續を希望して居る譯ではない、諸種の條件が充されたならば急ぎ撤退する方、國費節約上からも必要とされるので、是も問題それ自身としては面倒でない。厄介と云はるゝのは日本が露西亞に貸與して居る約三億圓の債權と及び、西伯利に於ける邦人の財産權問題であるが、是れとても露國は既に幾多の條約を他國と結びかけて居るのだから、斯の如き問題は日露間に別々の決定を爲さずとも、他の列國と同一の地位に立つことに於て、其問題の將來を保障したならば、强ち解決困難なりとは思はれぬ。斯く述べ來れば殘る問題は尼港事件に對する露國の陳謝問題、樺太其他に於ける日本人利權獲得問題であるが、尼港事件の陳謝に就ては最初日本は非常なる强硬的態度を執り、日露談判の難局を作つて居たけれども、最近は陳謝の形式を變へ、必ずしも文書にする必要を固執せず、口頭にても足れりと云ふが如き程度と變じて來た。其交渉に就ても寛大な態度を示して居る位で、無論此論を爲す時期

に於ては、其内容形式の交渉は纏つて居ないけれども決して談判の根本的難關とは見られないのである。それでは目下日露交渉の最大難關として見らるゝものは何であるか、樺太其他に於ける日本側利權獲得問題でなからねばならぬ。

然らば此利權問題に於て如何に相互間の意見不一致を生じて居る乎、之はそれが秘密談判の形式であるのと、又た其内容が着々變化し行く爲め、未だ紹介し難いところもあるが極めて大體的に之を云へば、先づ利權の年限に關して日本側は最初九十九ケ年説を取り、それが五十年まで引下ぐるの態度と變つて來た、露西亞側は曾て米國シンクレア會社との利權協約にも現はれて居る如く、三十六年を以て最長期限とする説を取らんことを固執し、其以後に於て更に期限を更正し延長することに於て協定せんとする態度を持して居るやうである。尤も最近の變化には未だ言及することが六ケしい、次に日本側は樺太に關聯して最初石油石炭其他廣汎なる利權を要求し、最近に於ては他は重きを置かず專ら石油の一點に力をこめて居る、即ち其條件として北樺太に於ける此種官業權を日本に與へ、少くとも日露兩國民の手に之を制限して第三國の侵入を排斥せんと主張した如き形跡がある。之に對して露西亞は日本側の優先權若くは獨占權に反對し、斯くては露西亞は恰も戰敗國として戰勝國たる日本より條件を課せらるゝかの如き感じを生ずるのみならず、革命均等主義に背くものなりと述べ、更に斯樣な條件は假りに之を舊露帝政時代であつたとしても、恐らく許さるべきことではなからう。今日の均等な双方關係に於て之を許すべき理由のないことを説いてゐる。次に日本側は露西亞側に對し今回結ばんとする條約、即ち露西亞承認を議定し、双方の友好關係を作る條約に於て、若くは少くとも該條約作成に際し直に利權に關係する委曲の協定を作らんことを求めた。所謂抽象的規定にあらずして具體的規定を作らんことを欲したのである。這は云ふまでもなく日本が露西亞側に對して幾分の不安と不信用の觀念を懷けるが爲めであつた。露西亞は之に對しても亦反對し他外國との前例を引き、依然抽象的利權規定に止めんことを、求めたのである。尤も昨今に至つては此最後の點に就ては少し態度を變更し來れる如く見ゆるけれど、其變化たるや極めて微細のものに止まつて居るではあるまいか、兎も角斯くの如くにして日露復交の最重大問題たる樺太利權問題は、容易に決定を見ず從つて兩國復交條約の協定も行惱んで居る行樣である。

八

現在の日露交渉狀態は以上述べる通りであるが、予は斯の如

き兩國の交渉が難關に逢着して居るのを見て、特に想ひ起すことは我過去に於ける外交上の無能並に短見が如何に兩國復交の時期を遲延せしめ、之が爲めに容易に我に獲得し得たと信ぜられし利權並に利益を獲得し得ず、今日の窮境に立つに至れることを悲しまざるを得ない。思ふに我國が露西亞と親交恢復の協議を開始してより彼是三年の歲月を費して居る、其第一は大連會議であつた、同會議は大正十年八九月より始まり十一年四月を以て終つた。其第二は長春會議にして大正十一年九月に始まり同月末に談判缺裂を見た其後後藤新平子のヨッフェ呼寄せ非公式交渉斡旋があり、昨年六月東京精養軒に於けるヨッフェ川上の談判開始を見るに至つたのであるが、是亦七月停頓の運命に陷つた。右の中大連會議は如何と云ふに、我日本政府は國論に基き西伯利撤兵の方針を定むると共に、其撤兵に先ち當時チタにありし極東政府と日本間に通商協定を作らんと企てたものであつた。然も其際日本の主張せる內容を見るに、日露間の商業を可能ならしむる規定を作らんとする外、過激派の宣傳禁止條項を含めた其上に、更に極東共和國內に於て絕對的に少くとも日本人に關する限りに於て共產主義適用を行はざることを條件としたのである。這は在西伯利日本人に一種の治外法權を與へ、恰も露國の法律外に置かんとするものであつて、事實上少くとも勞農露西亞の勢力下に在るチタ政府の認め得べき所ではなかつた。此外種々の經濟的條件並に太平洋沿岸の武裝解除と云ふが如き條件をも含んで居たので、之が失敗に歸したのは寧ろ當然と云はざるを得ない。然らば長春會議は如何と云ふに同會議の最後に於ける缺裂が露西亞の北樺太撤兵要求を日本が拒絕せることに基くものゝ如く見られて居るけれども、其根本原因は同會議に於て我日本は未だ勞農政府と協約する決心がなく外交機關の人々の中には多少其心持はあつたにしても、我政治界に絕大の力を有する元老軍閥其他が之に反對したことに在る即ちチタ政府との交渉の意思こそあれ勞農政府との交渉の意を有しなかつたのが、抑も交渉缺裂の眞因と見て差支ない。然らば昨年の東京會議は如何と云ふに之は前二個の會議に比し、日本側が少くとも勞農露國其物を相手とし、交渉するだけの決心を作つた點に於て一歩を進めたのであるが、それでも猶同會議に於ては、日本は根本的に勞農露國を承認すると云ふが如き決意は遺憾ながら有つて居なかつた。當時ヨッフェ氏は表面に於ては承認問題を高潮せざれ、裏心は最もそれを希望して居た、然るにも拘はらず、此點に於て日本が躊躇するだけの用意を欠如せることは、やはり同會議欠裂の一重因であつたと云つても宜い。猶ほヨッフェ氏は大いに日本に讓歩し、尼港問題の同

題に就ても、或程度の讓歩を爲す意があり、條約問題に就ても形式は兎も角實質に於て讓歩するの妥協性を發揮し、又利權に於ても彼が長春會議直後一昨年十一月十一日に發せる通牒に日本に利權を讓歩するの意あることを述べて居た位だから、利權要求に應諾せんとする意嚮を有したりしに拘らず、融通利かぬ日本は依然として一面より國際信義問題及び國際義務問題を擔ぎ出し、主義形式上の爭ひに捉はれ、所謂實際策としての融通手段を執るの雅量と機轉とを有しなかつた爲め、又復失敗に歸したのであつた。斯の如くにして折角の日露交渉は屢欠裂し不成績に終始して居る中、露西亞と他強國との交渉は着々と進渉を見たのは、恐らくは世人の記憶に新なる所であらう。

蓋し東京會議欠裂後今日に至る一年間に於ては、露西亞の國際的地位は大なる變化を見たのである。即ち第一は本年二月一日英國政府によつて承認せられたことである。其第二は本年二月七日伊露兩國間に於て承認を含む新條約の締結を見たことである。其第三は五月三十日東洋に於て露支條約の成立を見た事あでる。英國に於ては云ふまでもなく昨年十二月總選擧に於て統一黨は議員數を減少し、其結果本年一月勞働黨は自由黨の支持を得て新内閣を組織するに至つたが、同内閣の成立は直に英國の露國承認を促したのであつた。無論英國は大正十年三月に認こそしなかつたが露西亞と通商條約を締結するなど、兩國接近の機會は夙に準備されて居た。然も本年二月一日の條約に於ては英國は露西亞との間に於ける、國際條約問題債權問題並に一切の事業經營若くは利權獲得と云ふが如き問題に何等觸るる所なく何等先決條件を決定せず、一足飛びに露西亞を承認した、之は英國代理大使ハジソン氏が露國に送つた公文によつても明かなる所である。斯の如く寛大であつた英國は本年四月より露西亞との間に修交通商條約の協議を開始し、八月六日に至り成立したのであるが、之を見ても英國が露國を如何に寛大に取扱へるかゞ窺はれる。何となれば英國は從來露西亞に於ける對英國人債務に就ては其元金の半額位を返付することを以て足れりとせしのみならず、之に對し同國政府は世人の想像も爲し得なかつた英國に於ける露西亞の公債募集につき英國政府自から保證に立つことを約したのである。共產主義政府の公債募集に對し英國の如き資本的大國政府が保證を與ふる等は、何人にも容易に考へ得られなかつた所であらう。斯く對英交渉に於て有利なる經驗を嘗め成功を收めた露國外交は、此成功を第一歩として他にも同一の成功を重ねんと、努めて居るのが今日の狀態である。一例を擧ぐれば今や露西亞側は佛蘭西を動かして

同一の條約を作らんとしつゝある。誰も知る如く本年五月の總選擧に於て勝利を得、六月新内閣を組織せる急進黨首領エリオ氏は、曾て露西亞に赴きし歴史もあり親露的傾向を有する人物であるが、彼は本年六月首相就任後在米佛國大使ジユセランを經て米國に交渉し、米國を誘ふて對露承認の擧に出でんと試みたことさへあつた。殊に最近英露協約に成功せるラコフスキー氏等は、此佛蘭西の好都合なる形勢に乘じ、佛國をして英國同樣各種問題の決定以前に於て先づ露國を承認せしめんと努力しつゝある有樣である、ラコフスキーは本年十月巴里に於て述べて曰く、「佛蘭西に就ても先づ最初に法律上公式の露西亞承認がなくてはならぬ、然る後に協議すべきである、承認が行はれて周圍の空氣を良くし、相互の信頼を深くして後に交渉を開始することは、其交渉をして成功に導く所以の途である。英國に於て成功を見たのも、此點が重要なる理由を爲したのであると云つて宜い」英國に於て成功せる以來歐洲に於て斯の如き態度を執れる露西亞が、我日本に對しても此成功に乘じ同一態度を以て臨まんとしつゝあるは、殆ど想像に難からざる所ではあるまい乎。況んや露西亞は本年に入り獨り英國及伊太利の兩大國から承認を得たばかりでなく、又佛蘭西との復交形勢良好ならんとして居るばかりでなく、本年二月には諸威によつて承認せられ、三月には希臘及び瑞典によつて承認せられ、翌四月にはダンチツヒ及び英領加奈陀によつて承認されたのである。斯の如くにして着々交友國家の增加を見つゝある時、本年五月突如東洋に於ては露支協約の成立を見たのである。故に少くとも今日日本による露國承認は露國側で從前の如く重き價打を置かぬことになつたのである。即ち昨年までは世界五大國中一國も露國を承認するものなく、東洋に於ても露支交渉は未だ成立し居らず、從つて當時日本の露國承認は實に重大な意義を有して居たのであるが、今や周圍の形勢事情一變し、日本との復交に於ける露西亞側の價値付が餘り高くなくなつたのは已むを得ざる次第である。現にカラハン氏の如き本年五月に於て二年前と今日の變化を說き、尼港問題陳謝に關聯しても讓歩し難きことを公言して居る位ではないか、斯くして我樺太西伯利の利權獲得問題も同樣幾分難局に立つに至つたのである。之を惟ふ時吾人は切に我對露外交が過去に於て悉く時機を失し、其成功の機を喪へる罪を深く悲まねばならない。

九

併しながら今日に於て過去を顧みて痛嘆するも詮なきことである。以上の如き周圍の形勢に直面せる吾々は、寧ろ前面に現

はれて來た現實の姿を見、之に處して最善の策を執るべきではなからうか。此點から觀て吾々は露國側に於ても日本と妥協し日本に讓步することの必要を感ずるは勿論であるが、同時に我國に於ても相當の讓步を敢てし以て纏め得べき所に纏めることが却つて得策ではないかと思ふ。何となれば第一過去に於て日露交涉を遷延せしめて不利の狀態に陷つた日本は、今日の條件が假令不滿足なるものとしても、交涉を遷延することによつて果して周圍の形勢は我國に取り有利に展開するの可能性があるかどうかを思はねばならぬ、吾人は今に於て其可能性の甚だ少きを遺憾とせざるを得ない。殊に我國の經濟的立場は根柢的に見て隣國支那並に露西亞の如き亞細亞大陸と親善關係を作るにあらざれば、國家の發展を困難にする窮境に立つて居るものである。我日本は面積狹く、然も國內に富源乏しく、鐵と云ひ石油と云ひ、石炭と云ひ其他各種工業の發達上に若くは軍備上に必要なる原料品を國內に產出しない、どうしても國家として和戰兩樣に備ふる、重大なる生命の問題から論ずる時は翼を大陸方面に伸し敢て他國を侵略すると云ふのではないが、露支兩國と接近し兩國から多くの物資供給を受けねばならぬのである。此立場こそは我國をして相當の讓步を敢てしても、亞細亞大陸國家と根本的親善策を圖らしめねばならぬ所である、而して之に就きては我國民は己を知ると共に、相手方をも知らねばならぬ、而して現在の勞農露國の境遇と其立場に對し、相當の理解を有することも、日露親善の成功の一必要條件であらねばならぬ。

此點から今日勞農露國が利權問題其他に就て日本の希望を其儘に容るゝ能はざるが如き態度を執り、盛んに對等主義を唱へ來れる所以の要因即ち之に關する露國內の事情をも我等は顧みねばならぬ、そは外でも無い。露國は人口一億三千萬中純粹の過激派と見るべきものは多くて六七十萬人を超へないのである、そこで是等の面々が、自己の政權を永く維持する上に於ては、國民の輿望を繫ぐことが必要である。從つて國民多數が尙對外的屈辱を欲せず、國家の威力が如何に發揮せられるかに就て多大の興味と注意を拂つて居る今日、是等民心を迎ふる上に於ても、國民が觀て以て極端なる利權の讓步とし、國家の利益を毀損するが如き感を爲すものに贊成することは、勞農爲政者に取つては內政上困難の點なきを得ないのである。殊に勞農露國は新らしい國家として、今や世界各國と修交を結ばんとしつゝあるが、一見その國力は微弱である、即ち勞農露國は軍隊を有するものゝ、その組織も武器も他國の尊敬を値ゐするには足らない。又目下の國內經濟狀態の衰勢も國家の對外活動には甚だ便宜でない、かくて勞農露國は國際政局上、舊帝政時代の露西亞

が有するだけの威力を保持し得ず、動もすれば各國より輕視さるゝ傾きがある。斯る事情の存することは勞農露國當局をして、その外交關係復舊に際し、一層對外的均等地位の維持問題に神經を尖らしめ、又自國民の前に共產政府の威信を維持する上からも、對外條約で飽くまでも舊帝政時代の露國に劣らざる所謂對等條件を維持せんとし、動もすれば戰敗國が戰勝國と締結するが如き意味の條約を作るまいと努力せしめつゝある所以である。是れ最近日本との利權問題其他に於ても、彼等が切りに國內法尊重を說き若くはそれを反映するが如き議論を試みつゝあるものは、全く其此邊の消息に出でたものである。予は竊かに思ふ、日本側も此點に於ける彼等の立場につき充分の理解を有するが必要であらうと、殊に吾人が考へなければならぬことは、過去に於て二三例が示して居る敎訓是れである、それは何であるか、勞農露國代表者が一たん讓步した意味の條件を含む條約を作つた場合に於て、該條約が其後に變更せられ若くは完全に實行せられなかつたりする實例是である。予の記憶する所によれば一九二二年五月伊太利露西亞間に作られた、第二回通商條約は伊太利に讓る所過大なりとの理由を以て、露國立法機關は六月之が批准を拒絕したことがあつた。本年二月の伊露協定に就ても一旦締結せられたが其後露國側の希望により外國貿易其他の項につき修正を企てた事實がある。更に他の一例を擧ぐれば、波蘭露西亞條約即ち波蘭及び露國が參加せるリガ條約第三條に於ては舊露國國立銀行の金準備に關する波蘭の權利が規定され、又波蘭私人經營の鐵道會社財產は露國側より返還せらるべきことを規定したのであるが、是等は一向實行せられて居ない。現に露西亞は實行し得ざるが如き條件を課せられた場合には、一旦該條約に調印しても之が實行を敢てしないのが例となつて居るのである。斯る點から觀て日露兩國間の條約は日本側に於ても能く實行し得られ、無理のなきことを必要とすると共に、露國側に於ても同國の現狀に照して實行せられ易く無理のなき如き條件に於て成立せらるゝことが、相互間に於ける眞の國交恢復に對する良策ではあるまい乎。

吾人は目下北京に於ける日露交涉に對しても、日本は英國其他を學ぶべきであるまい乎、少くとも大體に於て寬大なる態度を執ることが日露修交關係復活の捷徑ではあるまい乎と思ふ。尤も之に關聯して我も人も憂ひて居る一點がある。それは勞農露國の信義問題であつて、露國の現狀に通じて居るものゝ間に相當行はるる議論としては今の過激派政府信賴するに足らずとの說である。之は或程度に於て理由の存することだ、勿論今日の世界に文明國を稱する各國は多くは極めて狡猾にして、表面の

辭令形式こそ功みなれ、其裏面に於ては詭詐權變常なきものが少なくない、獨り勞農露國のみ然るのでは無いのである。唯同國は本來共產主義によつて立ち、從來の資本主義的國家政府とは其各種の制度に於て亦事情に自から異つて居る、爲に兩者の衝突軋轢の機會も他の場合よりも多き傾向あるを免れない。次に勞農露國は共產主義を根本的主義と爲しながら、今や必要の前に叩頭して所謂便宜主義として、資本主義的國家と妥協しつゝある有樣である。然も此の勞農露國政府を動かして居る便宜主義は、其の外交に或は國際交渉に顯現はれ、事情の變化に順じて態度を變更することも亦た普通の諸國家以上であると云つてもよい。是亦他國をして憂惧せしむる一因である。右の如き點を顧慮し我日本の執政者が今日日露協商に際し、利權問題其他に就て大體的協定に滿足せず、詳細なる具體的協定を爲さんとの希望を生じて居る所以であつて、確かに一理がある、併しながら他方から觀察すれば斯の如き便宜主義による權變的露國政府に對して、目下第一の承認の機會に乘じ、露西亞が本心から承諾し離しと見るが如き事項を協定せしめたと假定しても、所謂便宜主義による權變的態度に終始せる露國執政者のことなれば、他國以上に將來の或時期に之が變更を企つる可能性もあることを忘れてはならぬ。打明けて云へば吾々は共產主義の露西亞を讃美することが出來ないやうに、同國現在の外交を[illegible]ることも出來ない、何づれにしても厄介物は厄介物たるに違はない。さりながら厄介物なるの故を以て我日本が永遠に露西亞と隣國たる關係あるに拘らず、全然關係を有しないことは我國の將來に憂ふべき問題でなければならぬ。我國策としてはやはり露國と關係を作り友交を復活するのが利益である。若し我國策としての要求であるとするならば、確かに厄介物ではあるが其厄介物たる事情を了解し、而して之と比較的に永續し易い即ち內容に於て持續性を有して居る協定を作ることが有利ではあるまいか。斯く說くと、人或は言はう、便宜主義で豹變する露國だとすれば、斯の如き國との條約協約を結ぶも何の効があらうと、併し國家がその利害の變化に伴ひて國際協定の變更若くは其實効を空無にするの策を講ずることは、國際道德幼稚な今日、殘念ながら大國間の通弊であつて、獨り露國のみの事では無い、僅かに程度と形式の差があると言ふ丈けだ、加ふるに露國とても好んで不信義の國たらんと欲するものでは無い、唯だ窮餘の策として忍んで之を敢てするに過ぎぬ、北京會議今後の進行は敢て豫言せぬが、その協定策が成る可く双方に公正であり、それ丈け永續性あるものたらんことを期して貰い度いと思ふ、

豫算討議によつて暴露された聯立内閣の不統一

貴族院大明神、政友本黨大明神

文學博士　三宅雪嶺

現内閣は三人片輪が扶け合ふに似、危なさうで割合に持ち耐へて居る。貴族院が控へて居つたり、政友本黨が堅唾を吞んで見て居つたりするので、此處が一大事と後生大事に扶け合ひ、何とか進んで行く。用心に用心するけれど、時々躓くの恐がある。前から扶け合つたのでなく、隨分喧嘩したのであつて、それが扶け合はねばならぬ事となり、手を引きつつ、時として云ひ合ひを初める。地金を露はしにかかり、それではならぬと思ひ直し、我慢して折合ふに努める。財政上に消極と云ひ、積極と云ひ、當局者の意見も分れ、輿論も分れるのがある。輿論を後援としながら、其の當てにならぬ事を云ひ、自ら矛盾するのが普通の例になつて居る。自ら意見を發表する場合、輿論を重んずる如く、反對者の意見を指すに俗論を迎へるといふを以てして怪しまない。輿論を尊重すると同時に、俗論を顧みないといふ所に自身の位置を置かうとして居る。

議會の初めから一方に租税を輕減して民力を休養せうとし、一方に租税を增徴して事業を興さうとし、孰れも相應の贊成者があり、利害が地方にて分れる事少くない。嘗て自由黨が政府に近寄つて積極に傾き、政友會となつて鐵道、港灣、治水等を振り興し、關係地方の民心を攬めた所がある。何でも官設事業が興りさへすれば、多少土地が潤うと定まつて居る。裁判所でも學校でも出來さへせば、それだけ何かにつけて利益がある。單に或る地方を潤はすが爲めでなく、國運の發展に必要としての事であつても、關係地方に利益あるとして、躍氣にならうとする。政府で議する際、専ら國家の標準に於てし、政黨幹部で議

する際、黨の地盤に重きを置く。國家を標準として正々堂々議論し得ないでなく、それが政黨擴張に必要といふ所こそ、政黨出身の政治家の玉手箱とする所がある。所で其の反對に租税を減ずるといふ事も民心に入り易く、或る地方で熱心に希望して已まない。豐かな地方で何でもない事でも、逼迫した地方で最も大切な事として希望する。總じて富んだ者は少く富まないのが多く、僅かな通行税でも拂ひたくないと云ふのが普通である。一人の頭で僅かな輕減でも、全國で相應に大きな額となるを認めずに置けぬ。一億圓を輕減すればそれだけ世間に餘裕が出來、活氣を生ずると考へる事が出來る。實にさういふ所がある。直ぐ眼の前に見えなくても、何日となしに結果が現はれるのを否定すべきでない。併し一億圓も幾千萬の頭に分り當てれば、何程のものでなく、それを纏めれば着々効果を現はし得るといふ所があり、其處で議論が岐れる。成るべく租税を少くし成るべく事業を盛んにしたいのであつて、さう行けば文句なくさうは問屋で卸さぬといふので何處かに無理を忍ばねばならぬといふ事になる。

正直に國家の上から着眼して居れば、利害得失は知り易いけれど、種々の事情が入り込み、大きな聲で云へぬといふ事で有耶無耶に過ぎて行く事がいろいろある。不完全なる人間の仕業いくらか情實を已むを得ないとし、已むを得ぬのが重り重[illegible]て、につちもさつちも行かなくなるやうな事がある。年度末[illegible][illegible]億圓を超え、全會計三十億と云ふに至つたのは、強ち政黨擴張の爲めにしたのではなく、大體に國家を念としての事であつても、情實に馴れ、放漫に流れたのは確かである。適當に發したならば、更に効果が多く、放漫に過ぎて得べき利益を得ず、大きな特殊銀行會社が散々の態たらくになつて居る。不足を公債で埋めやうとなつては、財政の基礎を危くする恐れがある。心配した程のものでなく、日本の國力は優に之れ位の事に堪へ得るとしたが、心配する側で隨分心配せずに居れず、偶々東京横濱及び其他に大震火災の損害があり、不時に五十幾億圓の缺陷を生じたとあつては、何としても考へ直さずに置けぬ。前のやうな放漫を愼まうと云ひ合はしたやうに一致した。

三派協調し、内閣を組織したり援助したりするのは、種々の事情あるにせよ、放漫が行き止まつて、篤と思案せねばならなくなつたのに基く所がある。犬と猿とで徒らに喧嘩しては居れず、何とか處置せねばならなくなつて來た。若し今の政友會と政友本黨とが合同し得ると見えれば、政友會の態度が今と違ひ、可成に鼻息荒く、内閣を破壞するやうな事もないとせぬ。少くとも現閣員なる高橋氏、横田氏、及び之と密接の關係ある

人々は合同する時に位置を失ふべきであり、如何にしても突張つて居らねばならず、其の爲めに現狀維持の餘儀ないものがある。總裁としての高橋氏は達磨とか、物に拘泥しないとか、餘り面倒のないもののやうに見られて居り、前に濱口氏と爭ひ、高飛車に抑へつけた事など、忘れて了つたものと思はれる。大口開いて笑へば悉く水に流れたかに感ぜられる。其處は持ち前の德と云へば云へる。併し全く忘れる程の健忘性であるべきでなく、根が陽氣に仕事したい方であり、前からの行き掛りで消極的に過ぎるのを好まない。財政の行き詰るのを解せぬ程の沒分曉漢でなければ、必要な事業を繼續する位な事が出來ると信じて居る。財政の緊縮は可い、必要な事業は廢してならず、紊りに繰延べてならぬとする。自らさう信じて居り、又前に吹聽した手前もあり、政友會の餘り苦情を云ふやうな事ないのを望んで居る。出來ねば仕方がなけれど、何とか出來さうに考へ、少しでも多く仕事を續けたいとして居る。其處をつけ込んで政友本黨で積極を仄めかし、本黨ならば緊縮一點張りのしみつたれな事をせず、必要な事業はどしどし進行し、鐵道、港灣、治水等も捗取るとておいでおいでを極め込んで居る。本黨とて財政難を知らぬでなく、それで生咬い云ひ方をするのであるが、唯一の反對黨として積極を振り翳すの奇異なる態度に出るのには、幾分か其處に考へて居る。政友會はそれこそ前からさき立つか何うか。皐月、あやめが何の位の事になるか。

政友會が憲政會に押しつけられ、全く消極化したと見られては、地方によつて不滿足に感ずるのがある。所謂持ち設けた事業が繰延べられ、何處まで繰延べられるか何れかと心配したりする。總裁たる高橋氏が內閣に居つてさういふ不甲斐ない事では困るといふのがあり、高橋も何とか力を顯はさねばならぬ。彼れ自ら斷着したくても、横田氏が控へて居り、政友會にケチのつかぬやうにしようとして居る。何時までゝも政友會を今のまゝに置く氣でなく、機會だにあらば一大活躍を試みさうな構へて居り、地盤の崩れぬやうにせねばならぬ。緊縮は高々承知の上の事、必要な事業は繰延べてならぬといふのであり、財源がないと云はれゝば、他を削つて振り向ければよいとする。何を削るかとなつて、其處は藏相に於て何とか考へるだらうと云ふ事になる。

濱口藏相は削れるだけ削り、同時に増せるだけ増さねばならぬ境遇に居る。財政と云へば、現內閣の如く財政通らしい者の多いのが無く、加藤首相は曾つて大藏省にも居り、一度の財政通を以て任じ、若槻內相も藏相職を勤めた事があり、高橋農相は勿論の事、犬養遞相でも財政に後れを取らぬつもりで居る。

仙石鐵相も金勘定に細かく、岡田文相も其の邊で注意深い。横田法相は財政通とて何程の事あるか、自分で一つ眼を通せば一目瞭然といふ權幕である。幣原外相とて岩崎關係で加藤と兄弟分、財政に尻込みする方でない。揃ひも揃つて財政通であり、それで頻りに財政の基礎を等閑にしようと努めつゝ、畢竟何の結果を得るか。何故に初めから緩和案を持ち出さないで、三委員案を持ち出したか、その方が議事に入り易いとしたか、まさか濱口氏ともあらうものが責任を譲らうとしたのでなからう。二億二千六百萬圓を減ずる案で一億三千萬圓までにより戻されたのは何ういふものか。尙ほ七千萬圓を減じ二億に漕ぎつけようと云ふ事であるが、さう行くか何うか。さう行くならば世間の期待を裏切る所が少いと云へやうが、これで財政の基礎が定まるか。いよいよ基礎を定めるには、一年で足らず、十五年度からでなくてはならぬと稱するが、さう行くものならば、内閣がそれまで繼續して貰ひたい。それで尙ほ基礎が定まらず、預金部で一時間に合はせねばならぬやうな事があつては、國政を私するものと云はねばならぬ。財政に行き詰まる所あるは一般に思ひ及ぶ所であつて、幸に濱口藏相に堅い決心あるらしく、一時も早く整理すればそれだけ國家の利益になる。

行政財政が整理し得るとし、憲政會が衝に當り、畢竟するに憲政會の手柄となるのであつて、政友會で聊か業腹に感せず居れまい。農商務省を農林省及び商工省とし、一面に農村の振興を圖り、一面に内閣に於ける政友會の勢力圏を擴張するやうな所あるか。從來内閣に憲政會員及び準憲政會員が多きに過ぎ　新たに大臣となるは政友會員であらう。其處らでいくらか息を續く事が出來ようか。それにしても貴族院及び政友本黨が睨んで居るので與黨三派の締りが好い。貴族院改革案を立てれば、それでも兄弟牆に鬩ぎ外侮を禦ぐといふやうな事があらう。貴族院大明神、政友本黨大明神か。（完）

豫算編成の爭ひ

石川半山

加藤内閣が大正十四年度の豫算を編成するに當て、少なからぬ衝突を生じたのは、如何にも世人の耳目を聳動した、幾日も幾日も爭論が續いて、容易に纒まりが附きさうに見えなかつたのは、貴族院の研究會や、政友本黨をして、舌を吐いて一笑せしめた、世間では之を評して聯立内閣の弱點を暴露したものだと云ふが、正にその通りだ、然かもその聯立内閣が、單に三派の聯立でない實は五派も六派も有るのだから、爭ひが激烈になるのだ、財部海相は海軍々閥の代表で有る、宇垣陸相は陸軍々閥の代表で有る、其の外にも種々の閥の代表が入り込んで居る、若しも其の内閣が、單純なる憲政會内閣で有つたならば、濱口君がこんなに苦しまないで、スラ〳〵と往つたらうが、内閣其者が、寄合世帶の寄木細工で、各自我を張つて、一歩を讓らないから、話が圓滿には進行しなかつたのだ、其の間に立ちて、濱口君が其の面目を、餘り多く潰さない範圍で、豫算を編成し得たことは、少からぬ苦勞で有つた、彼が熱誠と不撓不屈の精神で押して往て、漸く一億五千萬圓迄漕ぎ附け得たのは、私共は其の勞を多とする、勿論彼れだけで此の豫算の纒まりは附かず、加藤首相が調停に任じて、努力したことは少からぬ者で、高橋農相も曾て度々藏相の任に在りし經驗上、調停の勞を取つた樣だが、兎に角十四年度の豫算が纒まつたのは、結構なことだ、一億五千萬圓の整理額では、大藏省も滿足せず、世間も滿足せず、其の豫算案が第五十議會の案頭に置かれた時は、必ず反對黨から非難の聲が高まるであらう、特に其の不足額を、公債に求める樣なことになつたなら、非募債主義を聲明したる濱口藏相に對して、甚しい攻撃の矢が集まるであらうが、こんな風に度り行くのも、聯立内閣の悲哀で、兎角寄合世帶は、話がシツくりと合はない者で有る

豫算分捕の宿弊

然かし此の豫算に付て、國務大臣が頻りに爭ふの弊は、決し

て聯立内閣に於て、始めて現ばれた者ではない、本來我が内閣に附隨する宿弊の一で有る、毎年豫算編成の時になると、如何なる内閣でも、同じ樣な騷ぎを演出するのだ、それは各省が分捕主義になつて居るからで有る、課長等が種々の案を立て、局長へ出す、局長から次官へ持つて往て、それから屬僚全體の力を以て、大臣を激勵するのだ、多くの大臣はそれを抑さへるだけの力はなくて、屬僚の作つた我田引水的の過大な豫算を、内閣へ持ち出して、成るべく多く取つて來るのが、自分の職責でも有るか如く考へて居る、豫算を多く取つて來さへすれば、其の省では、其の大臣をエラいと尊敬するのだ、中橋徳五郎君は文部大臣の時に、世間では二枚舌だの何だのと言はれて評判が極めて惡かつたが、何しろ豫算となると、思ひ切つて多く取つて來たから、省内では評判が良かつた、昔から伴食大臣と評されて、輕蔑された男は、豫算の分捕會議に、威力を揮ひ得ずして、大藏大臣の査定の通りに、其の要求額を切り縮められた連中で有る、されば豫算編成時期には、大臣は勿論、次官、局長、課長、皆血眼になる、これは過ぐる二十四年間の政府の宿弊で有る、

眞の國務大臣

眞に一國の國務を双肩に荷ふ處の國務大臣で有るならば、其の心は、必ず國家全體の事を考へなくてはならぬ、逆上して血眼になるべき者ではない、自分が所管の一省の豫算の如きは、必ずしも之を爭ふべきではない、然るに今の各省大臣は、屬僚の心を以て心となし、一錢一厘でも多く豫算を取て來て、省内の事務を擴張し、金を多く振り蒔くを以て、其の本領として居る、或る省の如きは其の年度内に用ひ切れぬ程の豫算を取て來て、年度末に剩餘金が出でると、それで屬僚を旅行をさせたり、洋行をさせたり、ウンと賞與を振り蒔いたりして、それで大臣が威張つて居る、これは決して國務大臣の良い心得ではない、歴代の大臣の中でも、黑田清隆とか西郷從道とか、眞に國士として見るべき大人物には、そんな風はなかつたが、屬僚から段々鰻上りに上つた小人が、大臣になつて、大臣の素質が著しく低下した、政黨員の大臣でも、尾崎行雄、武富時敏、河野廣中、松田正久諸君は眞の國士で、豫算分捕などと云ふ野卑なことはしなかつたが、中橋徳五郎君の程度になると、世間で如何に評判が惡るくても、豫算をウンと取り込んで、省内の人氣を博收すると云ふ風になつた、これは政府の宿弊で有る、單に聯立内閣で不統一なるが故に、こんなに騷ぎが甚しいのではない、實は國務大臣の心事低下し、各省分捕主義の弊が現はれて居るのだ、或る一黨の内閣で統一して居るならば同じく分

捕主義で騷いでも、多くは外間に漏れず、又妥協の道も、早く附き易いが、現內閣の如く騷ぎが永く續き、其の爭ひが、火花を散らす樣に、激烈に赴いたのは、聯立內閣の悲哀とも云へるが、本來は政府多年の痼疾たる豫算分捕主義の宿弊の現はれた處だ。

行政財政整理

普通の豫算編成でも、相應に每年騷ぎが激烈な處へ、本年は又行政財政整理と云ふ者が附いて居る、それで騷ぎが二重になつて居るのだ、濱口君は二億圓以上の整理をしなくては、財政の計畫が立たないと言つた、各省で整理額を出した處が、彼れの假面と照合すると、其の差一億圓に達すると言つた。濱口君の苦しい立場は、十分に察してやらなくてはならぬ。

全體此の行政財政整理と云ふのは、時々聞かされるお題目だが、何時でも一時限りの者で有る、昔の事を考へて見ると、松隈內閣の時に、行政財政整理と云つて、拓殖務省の廢止其他局課の廢合や人員の淘汰をやつたことが有るが、それが間もなくズラ／＼に擴張となつた、一番思ひ切て行政財政整理に着手したのは、山本權兵衛伯の內閣で、今でも整理の事になると、山本伯はなか／＼氣焰を吐かれる、山本內閣は拓殖局の廢止其他で、四千萬圓以上の整理をしたが、山本伯の話では、それは彼れとしては如何にも不十分で有つた、モウ壹年自分が內閣を維持し得て居たら、更らに多くの整理をなし得たで有らうと思つて居る、加藤友三郎內閣に於て、市來藏相が各省二割天引案を提げて、頗る强硬にねぢ合うたのは、其の背後に山本伯が光つて居たからで、あれは市來案と云ふよりも、寧ろ山本案で有つた、整理は勿論時々必要で有るが、整理をしてから間もなくズラ／＼と復舊し、さらに擴張して居るのが、政府の常態で有る、今度でも濱口君がこれだけの骨を折つて、各省大臣と顏を赤め合して、首尾克く一億五千萬圓以上の整理をしたとしても、屹度又二三年立たない內に、元の木阿彌になるのだ、人員を五人の處を三人に減少して、整理が出來たと喜んで居るが、それがいつの間にやら五人に復舊し、間もなく八人から十人に殖えて居るのが、官界の常態だ、それ故に私は行政財政整理の話が出ると、又かと云ふ感じが起る、どうせ姑息な整理では、何にもならぬ、ホンの一時の人氣取りに過ぎない位の者だ。

新省の新設

拓殖務省の新設と云ふ話が有るが、此の機關の如く怪しい者

はない。日清戰爭の後に拓殖務省が出來て、高島鞆之助將軍が大臣で奥田義人君が次官に任じた。それを松隈內閣で廢止すると共の後桂內閣が內閣直屬で拓殖局を設け、それが西園寺內閣の頃迄續いて居たので、元田肇君が始めて任官したのは、拓殖局の長官であつた。然るに山本內閣の行政財政整理で之を廢止し、それが又いつの間にやら內閣の直屬となつて現に存在して居る。曾て加藤友三郎內閣の時代に、其の大官兩三名と會した時、私は或る人に向て、拓殖局と云ふ者は、全體どんな用事が有るのかと問ふたら、『殖民地專用の郵便局だ』と答へた。殖民地は朝鮮でも臺灣でも、總督の專制で、拓殖局の力は、之に加ふるを得ず、關東長官にしても樺太長官にしても、拓殖局の支配を受くると云ふこともないから、唯此等の各地から內閣總理大臣へ報告して來る郵便物を取次ぐ所だと云ふことだ、尤も拓殖局長官の人物に依ては、古賀廉造氏の如き、途方もない活動を試みた人も有るから、此の地位は、必ずしも輕視することは出來ないが、本來の性質が、先づ無用と謂ふべき者だ、それを擴張して、一省にすると云ふのは、唯大臣を一名增すと云ふに過ぎない、一方に行政整理と云ふて、騷いで居る時に、農林省と商工省を分けて見たり、拓殖務省を設けたりするのは、政府の矛盾で、良くないことだ。

地方人の勝手

行政整理に付ても、地方との關係には、六ケしいことが多い、地方人士は八分の地方の事の外は、考へて居らない。私の鄕里の岡山縣は、犬養毅君の勢力範圍で、革新俱樂部全盛の所だ、多年軍備縮小論が旺盛で、同俱樂部は今でも拾個師團以上減少の意見を高唱して居る、然るに岡山師團が今回の軍縮で、廢止の列に加へられると云ふ評判が起ると忽ち師團存置運動が起つた、其の中に革新俱樂部の人が多いのは妙だ、一方に軍備縮小論、師團半減論の人々が、岡山師團だけは存置せよとは矛盾な話で有る、犬養先生だけは流石にそんなことは言はれないさうだが、地方の人になると、其の地方の利害ばかりで動く、先日北海道の室蘭へ往つたら、行政財政整理の必要は認めますが、室蘭の築港だけは、減額しない樣に願ふと言つた、青森縣へ往つたら『何が何でもハア岩木川の治水費だけは減額されては困ります』と言つた。其の他各地方皆勝手な熱を上げて居る。而して現內閣が整理緊縮方針で、港灣、治水、鐵道其他地方事業を繰り延べ、中止、又は減額をするなら、それは憲政會が民心を失ふ所以となり、黨勢不振となり、其の間に乘じて、政友本黨が離間中傷を試み、『我黨內閣ならば、外の地方は兎に

角、此の地方の此の事業だけは遂成する』などと甘言を弄するので、地方の憲政會員は、居堪まらず、血眼になつて上京し、內務省や鐵道院へ押しかける。其の結果、あれも復活し、これも復活し、段々整理額が減少する樣になるを免かれない。

大臣の胸中

閣內には幾多の問が有て、容易に讓る所以を知らず、地方には地方の利害あるを知て、國家の大局を思ふ者少く、政黨の人氣取りは、一方に經費を減少して見せることで、他方には、仕事をドシ／＼進めてやることだが、これはなか／＼手品師でも容易に出來ないことで有る、此の困難の渦中に立ちて、濱口君は熱誠で先づ／＼能くやつた。加藤首相は能く之を纏めて、各派の衝突を融和し得た。其の間には江木翼君も多大の勞を拂ふた樣で有る、高橋農相も少からず調停の勞を執つた樣で有る、特に橫田法相が濱口藏相の整理要求額をスラリと受けて、一言も異議なく、之を實行したと言ふに至ては、流石に腹の確かな男で、頭腦に餘裕が有るからだ。

凡そ國務大臣の地位に在る者は、如何なる場合に在ても、血眼なつてはならぬ。胸中常に一幅の春風を包藏して居らなくてはならぬ、近來の內閣は、國務大臣の器が、段々小さくなり、血眼の爭ひが多くなつた。而して時々大破裂の醜態を演出した。現內閣は第一に聯立內閣で有り、第二に大臣ばかり良くても、屬僚が血眼になるので、官界の豫算分捕主義は、尙殘つて居り、それに第三に行政財政整理と云ふ厄介な問題が附隨して、騷ぎが大分永く續いたが、然かし閣中には加藤首相、高橋農相、犬養遞相の各大人物も居り、其他の閣僚、何れも相當に胸中に春風を有する人格者の爭ひで有つたから、先づ一億五千萬圓で纏まつたのだ。大臣の人格が、更らに一進して、大人物ばかりになると、每年豫算編成の騷ぎなども、遙かに減少することで有らう。

豫算方針の討議に暴露した聯立內閣の不統一

法學博士　堀江歸一

外國電報に依れば、英國政府は近く議會を解散して、總選擧を擧行し、勞働黨內閣に對する國民の信任を問ふと云ふことが傳へられる。元來本年一月勞働黨が單獨で內閣を組織したと云ふことは、非常の決心に出でたものである。蓋し同黨の所屬議員百九十二名に對して、保守黨議員二百五十七名、自由黨議員百五十八名であり、而して勞働黨と自由黨との間には、或る問題に就ては、一脈の相通ずるものあるとした所で、提携して居る次第ではないから、自由保守兩黨が聯合して、勞働黨に反對したならば、如何なる政府の提案も否決の運命に陷らざるを得ない。勞働黨が此危險を冒しつゝ單獨內閣の組織を試みたのは單獨を以つてしなければ、自家の抱負を行ふに支障を生ずる、單獨內閣の下に、滿腹の經綸を實行しやう、自由保守兩黨の反對に會すれば、議會を解散して、信任を國民に問はうと云ふ鞏固なる意思があつたからであつて、今回議會解散の風說に接するのは、勞働黨としては、豫定の行動に出でたものに外ならない。政治家が政界に處するには、此位の決心があつて、貫いたいのである。

私は今春の總選擧後淸浦內閣が崩壞し、政權の憲政會に移らうとするに當つて、憲政會單獨の內閣の組織されることを希望した。何かの機會に於て政友會や革新俱樂部が政友本黨と提携して、憲政會單獨內閣に反對するであらう、反對したならば、其時を以つて、議會を解散するだけの話しであつて、解散までに、單獨內閣の爲した所が正しかつたならば、國民は必ず憲政會に與し、同會をして衆議院に於て多數の黨員を有せしめるに相違いない、單獨內閣の下に、平生の所信を斷行するのが死中に活を得る道であると云ふことを論じた。詰り英國勞働黨の行はんとする型を憲政會に行はせて見たかつたのである。

然しながら憲政會は何の見る所あつたか、護憲運動の行掛に

拘泥して、三派聯立の内閣を組織した。内閣組織の當初から、閣員の割當や、配置に就て、兎角の議論はあつたが、三派共一旦掌中に收め得た珠を他に奪はれては、大變であると云ふ恐怖心のあつた爲めか、曖昧なる所で、妥協するに至つたものゝ、實際の經綸を施す一段と爲つて、如何なる事實を生じたであらうか。見るもの、聞くもの、蓋し聯立内閣の悲哀を語る資料たるのみである。今回の豫算方針に關する閣議に於て、議論紛糾して、結局曖昧裡に一場の妥協を遂げるに至つたことの如き、誠に一の例證を加へたものとしなければならない。

本來憲政會の消極政策と政友會の積極政策とが政治上に於て、並立するが如きは、道理の許す可からざる所である。然も政友會の積極政策は原内閣以來多くの機會に於て實行され其弊害著しく、國民をして之に堪へさらしめるに至つた。憲政會が過般の總選擧に於て、第一黨たる地位を占めたのも、畢竟積極政策の行詰りが國民に對する一種の教訓と爲つて、憲政會の下に消極政策の實行されることを希望するに至つた結果であると認められる。即ち憲政會が消極政策を徹底的に實行することは國民の輿望に副ひ憲政會の政治的生命を強からしめる所以に外ならない。始め濱口其他に依つて立案された財政行政の整理案なるものが果して徹底的のものであつたかどうか、一個の疑問であるのに、愈々閣議に於て審査される一段と爲れば、何と云つても多年積極政策を高唱し來り、斯くて政權を地方に繋いだ政友會代表者が幾分なりとも積極政策の殘骸を留めて置かうと云ふ根性から濱口等の原案に反對するのは當然の事と見なければならない。濱口の原案を固執する程度、高橋等の積極政策を主張する程度に依つては、或は内閣の決裂を見るかも知れないとまでに、風説されたが、其處は當世政治家氣質の誠に調法な所であつて、何時か双方から歩み寄つて、積極と消極と云ふ何としても衝突し、矛盾する二ツの政策が一の財政計畫の下に、折衷されることゝ爲つたようである。是れで加藤内閣も一時の延命法に接するを得たのであるが、其代り聯立内閣の不統一は遺憾なく暴露された。即ち

第一、國民が現内閣に期待した財政の緊縮、行政の整理は極めて不徹底のものに終り、國民經濟の振興、行政的能率の伸張に幾何の資するものあるを得るか、甚だ疑はしく、

第二、三派聯合の力を以つて、軍事費に切込んで、軍制に改革を施さうとする計畫も軍部の方で、三派聯合の内兜を見透した今日に於ては、容易に行はれ難いであらうし、

第三、貴族院改革と云ふが如き難問題も果して現内閣に依つて、解決されるかどうか、疑は

と云ふ考へは何人の腦裡にも浮び來るであらう。其れに付けても、此内閣をして早く解決させたいのは、普選問題であつて、普選の即時斷行が決定し、之を機會として衆議院が解散し、總選擧の結果に依つて、政權が移動す可き所に、移動して、其處に始めて我國政界の安定を見るに至りはしないであらうか。加藤内閣も普選問題でも解決したならば、同じ聯立内閣でも、往年の大隈板垣聯合の憲政黨内閣に勝ると云はれるであらう。其れとも憲政會は何かの機會に政友會や革新倶樂部と手を切つて、聯立から單獨内閣に立戻らうとするか、然も財政行政整理と云ふ大問題に蹉跌して、憲政會其ものに對する國民の信用の衰へた今日に於て、斯る離れ業を試みて、却つて政友會と政友本黨とを接近させ、内閣自滅の機會を早めるに至りはしないであらうか。何れにしても加藤内閣成立の當初、護憲と云ふ空漠なる題目が餘りに重要視されて、積極消極兩論者の抱擁するに至つたことか加藤内閣の一大病弊であるとしなければならない。世人が加藤に期待した所は其剛情の點であり、一徹の所であつて、存外思ひ切つて、積弊を根絶するであらうと考へた一事であつた。加藤の性癖は果して斯の如くであるか、其れとも剛情と見へ、一徹と思はれるのは、存外上邊だけであつて、内實は存外融通が利くものか、其れ等の事は私の全然關知しない所であるか、兎に角加藤内閣の今日まで爲した所を概觀すれば、別に取立てゝ云ふ程の事もなく、憲政會が在野時代に濱口若槻等の口を通じて、天下に公約した諸種の經綸の實行されることも、望み少なきの趣きを存する。況や更始一新の如きに至つては、全く其望みなしとするのが正しき見方であらう。私は國民が今一段の經濟的窮厄の狀態に陥らなければ、覺醒の機に逹せざるものであるかを考へて、憮然たらざるを得ないのである。

何と云つても憲政の本場は英國である。日本の如き幾ら氣張つても、英國を眞似ることすら出來ない。加藤は永年英國に駐在して、英國の崇拜者であるやに聞いて居るが、一つマクドナルドやクラインズの向ふを張つて、國民を感嘆させることは出來ないものであらうか。英國に於ける議會解散說を耳にして、私は隔痒きの感に堪へないのである。

軍閥と金持に對する氣兼をやめよ

安部磯雄

九月の末頃から十月の七日頃までは財政整理の問題が内閣會議の主題であつた。併し其内容は秘密にせられて居たが爲に、我々は唯だそれを想像するに止まつて、恐しい、正確な事實に就いては無論分らなかつた。纔かに新聞紙を通じて知る處に依れば、内閣會議の議題としては二個の整理案が提出せられたやうである。其一は政府委員案であつて、之は主として濱口藏相と江木内閣書記官長との間に相談の結果出來た案である。そして他の一は與黨三派案なるものである。政府案に依れば整理に據つて節減し得る金額は大體二億三千萬圓と稱せられて居た。大藏大臣は全力を盡して此政府案の通過を圖つたのであるが、政友會及び革新派の三大臣は根本主義に於て政府案に贊成することが出來なかつたのである。政友會は數年來其の政策として積極主義を標榜し、主として産業方面に於て生産事業を奬勵し、國力の許す限りに於て産業發展の爲に力を竭すことを主張して來た。即ちそれに依れば他方に於ける港灣、治水、道路、鐵道等の事業に對しては、當然國庫の十分な補助が必要なのであるが、然るに此度の大藏大臣の主張は政友會の政策の積極的であるのとは反對に極めて消極的である。政府案の二億三千萬圓を節約するには總ゆる方面の豫算を緊縮せねばならぬ。啻に中央政府の行政、財政の整理だけに止まらず、地方事業に對する補助、即ち港灣、治水、道路、鐵道等の繼續事業の補助を繰延べ若くは全然それを廢止するといふのが大藏大臣の整理方針なのであるから到底政友會の意見とは一致を見ることが出來ない。若し政友會や革新派の三大臣の意見を容れることになれば、財政整理に依つて節約される金額は一億圓乃至一億二三千萬圓程度に過ぎないであらうから、そこで大藏大臣も盛んに自己の説を主張し、又政友會の二大臣も自説を執つて下らず、其結果一時新聞紙は此財政整理問題に依つて内閣分裂の端を開きはしないかと傳へた位であつて、内閣會議に於ては相當激論も出たやうに思はれる。然し現在までの經過に依れば大藏大臣の

讓步に依つて兎に角先づ整理問題も落着したやうに見える。勿論大藏大臣が今後再び奮發して自己の主張を通さうと企てることがあるかも知れぬが、現在に於ては此問題に依つて内閣が動搖を來すことは考へられない。乍併さうであるからと云つて、それだけで此問題が必しも全部解決されたといふ譯ではないのである。私は以下此問題に對する私の批評と注文を試みやうと思ふ。

私共が第一に感ずることは、財政整理の如き問題は政治の大局から見て決して大問題でないといふことである。少くとも私は此問題が内閣に於て議せられても餘り興味を感ずることが出來ない。勿論我國のやうに極めて貧乏な國に於ては、國費の中から一億圓とか、二億三千萬圓を節約するといふことは決して小問題として看ることが出來ないかも知れない。然し要するに此度の財政整理は極めて限られたる小範圍に於ける問題の論爭であつて、それは蝸牛角上の爭とも見られる。私共の考へる財政整理はもつと徹底的なものでなくてはならないが、今回の財政整理は此問題の中心に觸れて居ない。整理といふ以上、もつと思ひ切つた方針に基いてそれを行ふべき筈であるが、それがたか〳〵一億か二億の整理を意味する問題であつて、それに關して内閣の分裂を懸念させる程閣員が懸命に爭ふべき重大な問題ではない。實際に整理をやるならば、先づ其以前に寧ろ大臣達の思想の整理から始めるべきであつて、即ちもう一度生れ變つて來て彼等の思想から改めてかゝらなければ徹底的な財政整理は出來ないであらう。勿論財政整理其事は或場合に必要な好い事であるに相違ない。然し此度の大藏大臣の整理には無理な點がある。寧ろ亂暴とさへ思はれるところがある。治水、港灣、鐵道、道路等の如き生産事業の繰延べ、若くは廢止は何を意味するか、それは果して財政整理を意味するものであらうか。個人として考へて見ても、儉約といふことは好いが、生産を儉約するといふことは全然意味をなさない。殊に地方は種々の意味に於て常に壓迫を受けて居る。政治的にも、經濟的にも中央集權主義の下に地方は東京とか大阪の如き大都會の犧牲になつて居る。其地方の爲めに約束して居る補助金を繰延べ若くは廢止するに至つては、私は政府の財政整理案に贊成することが出來ない。私は此點寧ろ政友會の積極主義に贊意を表するものである。

私共が常に非常に遺憾に思ふのは、節約すべからざるものに對して節約を强ひ、節約して差支ない點に節約が行はれて居ないといふことである。日本の軍備は即ち其後者の實例である。軍備は公平に考へて大部分不生産的である。昔は陸海軍の

必要が認められた時代があつて、今日の日本の地位は其陸海軍の力に依る處が多かつたと見られて居るが、而も猶ほ現在斯かる龐大なる軍備を擁することは絶對に必要ではない。況んや今日の形勢から云つて、龐大なる陸軍を持つことは全然意味がない。今日支那や露西亞と戰爭することは考へられないことであり、米國を假想敵とする軍人もあるが、それならば海軍との戰爭であつて陸軍が相手ではないのである。犬養氏の如きも在野黨時代は師團半減論を唱へて居た位であるが、私は陸軍はそれ以上に減じても差支へないと思つて居る。不生產的な軍備を節減することは現在に於ては確かに可能である。財政整理が行はれる時に先づ整理の當面に立つものは軍備の問題である。實際に我々の希望する處は、政府が貴族院改革といふことで貴族虐めをすることよりも、軍閥の力を抑ることを必要とするのであるが、然るに今回の財政整理案に依れば陸軍は四箇師團を廢止するといふに止まつて居て、而もそれが大藏大臣の所謂財政整理、國費の節約になるかといふとさうではなく、四箇師團廢止に依つて捻出したる金は新に兵器充實の費用に當てるといふのである。此度の財政整理が最も不生產的なる軍備に對して行はれて居ないことは不都合であつて、實際軍備を除いては他に整理の餘地が少いのであるから、強いて整理をすることになれば生產事業を縮少する消極的政策に陷る惧れがある。

今後の戰爭に就いて考へれば、戰爭は常に陸海軍に依つてされるかどうかは疑問である。或書物に依れば、將來の戰爭は陸軍や海軍によつてなされるそれではなく、飛行機と毒瓦斯の戰爭であると云つて居る。歐洲戰爭の未だ終らぬ前、亞米利加に於て毒瓦斯が發明されたが、それを用ゐる以前に戰爭が終つたので、遂にそれを實戰に使用するに至らなかつたが、其威力は恐るべきものであつて、此毒瓦斯を伯林の如き大きな町に振りまく時には、風の吹き廻しさへよければ、町に住む三百萬人位は一時に殺すことが出來る。歐洲戰爭に使はれた毒瓦斯はマスクなどで防ぐことも出來たが、此毒瓦斯は呼吸をしなくとも人間の體がそれに觸れると皮膚の中に侵入して遂に死に至らしめるといふ恐るべき力を持つて居る。爆彈の如きも亞米利加で大體試驗的にやつた處に依ると、ニューヨークのやうな大きな町でも、十二三個の爆彈投下に依て全滅させることが出來るさうである。斯くの如き事實を知れば、素人考でも今後の戰爭に現在のやうな陸海軍を持つてゐることは間違であることが分る。若し我々が徹底的に平和主義を執ることになれば、軍備は殆んど其存在の意義がなくなる。早い話が我々が滿洲、蒙古、西伯利の方面に對して野心を持たないならば陸軍などは必要がなく

なるに相違ない。斯くの如き立場から考へても政府が財的整理に當つて軍備に共斧を振はなかつたことは遺憾であるが、然し直ちに軍備の縮少を行ふことは從來の行掛り上困難を伴ふとしても、機會さへあれば軍備を縮少する考を忘れないことは必要である。今年の國際聯盟會議に於て仲裁々判所を設け、同時に聯盟加入國は互に他の國を侵すことをせず、若し侵すことをせず、若し侵す者があれば其國に對して軍事上、經濟上の壓迫を加へることが議決され、更に愈々來年六月には軍備縮少の目的で國際聯盟會議を開くことが決定せられたやうである。世界は斯くの如き機運に向ひつゝあるのであるが、此際引き摺られて軍備の縮少をするのではなく、我國は自覺的に率先して其機運に乘じて自ら軍備を縮少する態度をとりたいと思ふ。

要するに財政整理問題が、軍備を除外して整理を行はふとする處に困難が生ずるのであつて、其整理が軍備にまで及んで初めて徹底的に財政緊縮を行ふことが出來るであらう。

次に問題は、大藏大臣が財政整理に關してそれが自己の主張通りに行かなければ、我國の財政は行詰るといふ悲觀説を述べて居ることである。假りに日本の財政が破産狀態に陷るといふことを考へれば大問題となるが、之れも大藏大臣の限界が或物に制限せられて居る結果生れて來る考に外ならない。それは即ち軍備の縮少を考へずに財政整理を行はうとするから困難がい如く、恰もそれと同じく大藏大臣の悲觀説は將來我國の歳入の增加に就いて其方法を發見し得ないことに基く財政上の悲觀説である。然し我國の歳入は現在以上に上らない、其財源がないと考へるのは早計であつて、日本は貧乏であるから國民から税金を絞つてそれに充てることは困難であるが、併し我國には貧乏人の多い一方に相當金持が存在して居る。然らば財政窮乏の際には臨機應變の處置を執ることは決して困難ではない。即ち貧乏人から直接税を取ることは不可能であつて、強いて取れば騷動を惹起す原因となるが、餘裕ある金持の間に財源を求めることは比較的容易であつて、政治家は其處に眞の財源のあることを考へなければならぬ。外國の例をとれば、英國は歐洲戰爭の結果、國債が日本の金にすれば七百億圓、毎年の利拂ひ丈けでも、三十億圓に上り、丁度日本の國費の倍以上の額である。斯くの如き場合に國民全體から金を集めることに依つて困難な立場を切り拔けることは不可能であるが、餘裕のある金持から金を徴集して危急の場合に應ずれば好い。勞働黨の主張たる財產税は、それに依つて一度に國債を拂ひ返さうとするものであるが、其財產税は日本の五萬圓以下の財產を持つて居る者に對しては課せられないのであるから、勿論貧乏人

は税を出す必要がない。五萬圓以上の財産を有する者には累進税が課せられる。それには一時でなくとも、本人の希望に依つて四年乃至五年の年賦で支拂つても差支ないが、それは累進税であるが故に財産の多くなる程高くなり、百萬圓の財産（それは土地、家屋、公債等も含めて）に對しては其半分位の税金が課せられる。之れは一時税であつて、此割合に依つて一度に四百億圓を集めることが出來るから、七百億圓の國債は半分返却されることになる。此主張を以て勞働黨は昨年十二月の總選擧に臨んだが、之れに對して自由黨と保守黨は勞働黨を評して强盜の黨派であると攻擊した。勞働黨は之れに答へて、戰爭の時に國家は徵兵令を發して何處の家の兒と雖も之れを驅り出して歐洲の戰場に送つた。兒のある家から人間を徵兵令で徵發するならば、財産を有する者から徵産税で財産を徵發することは又決して不合理ではないと云つた。人間の生命に關係ある徵兵令が存在する限り、人間の生命よりも價値の小さい財産に對して徵産税があることは合理的である。斯くの如く考へれば、日本の如き貧乏國家と雖も其財政狀態が破産に瀕するといふことは有り得べからざる處である。國家の破産は戰爭に依る國家の危急の場合と同じ狀態であるから、國債を一時に拂返す意味に於て財産を徵發することは決して不當ではない。これは必じしも財産税と云はなくとも、他の形式に於てゞも、更に所得家の負擔は金持が之れを負擔するといふことを原則とすれば好い。又奢侈品に對して課税をして居るが。之れを內國品にまで及ぼすことを希望する。何故ならば金持の立場から云へば奢侈品の課税は彼等にとつて決して苦痛ではないからである。それとは反對に奢侈品は價が高ければ高いほど金持から歡迎されるのであつて、それを金持が所有して誇るのは奢侈品なるが爲めではなく、價の高きが爲めである。それと同じ意味に於て金持の庭園などにも税をかけ、然もそれを累進税とすれば其處に又新なる財源がある譯である。私は前に英國の例をとつたが、歐洲戰爭には米國も參加したので國債も出來た結果、國家は税金の增徵を必要としたが、千九百十九年の改正所得税に依ると、百萬弗の所得ある者は六十九萬四千三十弗、即ち約七割の税金を收めなければならなかつた。これに比すれば日本の金持は極樂世界に住んで居るやうなものである。私は今直ちに日本の金持の税金を引上げよといふのではないが、大藏大臣の悲觀說に對して、日本には猶ほ財源のあることを云いたいのである。日本國民は酒の爲めに每年十億以上も金を費して居る。即ち日本國民は酒といふ飲料のために日本の國費位に當る金を使つて居る。課税の點に於て金持に氣兼さへしなければ十二三億位の税金を收め

ることはさほど困難ではない。即ち前にも云つた通り財政整理が巧く行かないのは軍閥に對する遠慮があるからであり、國庫の收入を增やすことの出來ないのは金持に對する氣兼があるからであつて、それがなければ日本の財政整理は容易であり、日本の國庫の收入は其增加を見ること困難でなくなるに相違ない。

要するに財政整理はそんなに重大な問題ではない。これが爲めに内閣が分裂を來せば甚だ滑稽である。加藤内閣は三大綱領として、財政整理、貴院改革、普選實行を掲げたが此中で最も價値少きは財政整理問題である。何と云つても加藤内閣の成立に同情を寄せることが出來たのは、普選問題があつたからである。普選に成功すれば内閣の使命は果されたものといふべきであつて、貴院改革の如きは急を要しない問題であるが、普選は此内閣にしてやらなければ猶十年、十五年の歲月を待たなければならない問題であるが故に一層重大な意味を持つのである。幸に今年の議會も無事に濟み、來年も亦議會に臨むことが出來るならば、現政府は今年の議會に於て普選問題を解決し、來年の議會に於ては貴院改革の討議をすることも必要であらうが、財政整理問題の如きは大藏大臣には氣の毒であるが其價値は第三位であつて、財政整理が一億二三千萬圓程度の整理を意味するものならばどつちに轉んでも差支へないと思ふ。此世には客顚倒といふ事がある。現内閣が主要なる問題を等閑にして、小問題に拘泥するのは明かに主客顚倒である。私は財政整理問題の如き小問題のために、現内閣が分裂の機會を作らざらんことを切に望んで止まない。

不景氣を環境としての政變の不可能及び可能

杉森孝次郎

最近の日本の一般的不景氣が節約內閣に出現の機會を與へ、緊縮藏相の活躍と努力に多少とも成功の機會を與へたといふ事情が明視される。

いはゆる政友會の傳統的積極主義なるものも、全體としての國富の增進を意味するものではなく、主として國內各地方の地方的興榮を、鐵道、港灣その他の起業のかたちに於いて目的とするものであつた。いはゆる憲政會の消極主義なるものも、財政の條件たる行政乃至立法の全的組織には改正の斧を加へずに、また、政友會同樣に、貿易を出超的傾向に導く大策を案出せずに、經費を非根本的に切りつめることを特徵とするもので最初から要するにあつた。

そのやうな政友會系の積極主義と、そのやうな憲政會系の消極主義とは、發明的でなく、根本策的及び大策的でない點に於いては、特に言ふに足るほどの差別を示さない。しかしながら、兩者が關するだけの限りに於いては、憲政會系の消極主義の方が、いささかたりとも時情と時務を解したものであると斷定される。不景氣を不景氣とも思はずに浮かれ騷ぐことは、不景氣を不景氣がつて反省的、謹愼的、警戒的に傾くことに比して、一層の愚だからだ。

現藏相の名によつて要するに代表される來年度豫算節減案は、至極當然的に必要なことが頗る不充分な程度に於いて成されたといふ印象を世間の識者間に與へたらしいが、この事自身が現代日本の內情を靜かに、しかしながら有力に暗示し且つ證示する一現象だ。日本の財政的行きづまりが昨今、國民の無智の、それだけに眞劍な、實感となつて來たことをなに人か、日本人として、輕々に見去ることが出來よう。

生活がいよ〳〵成り立たなくなれば、分配の現狀または現行方法に多少の新たなる注意と努力が發生し、發達してくる可能

がある。その可能は必らずしも單純な、また平和的なものでのみはありえない。國民は、この際、この邊の考慮をも缺くわけにゆかん。

國民が嚴粛な心的狀態に立ち返へること、あるひは、進み達することは、いく多の意味に於いて慶祝を値ひする。現代の日本の最先急務的必要は、實に、深刻なる反省によつて代表されるといふ一面の眞實情があるからだ。

現在のなほ進展しつつある不景氣的傾向が、先づ姑息的に對策され、まもなく、國民の全的深反省を强要することともならば、そして、聰明にして善なる日本の再生が續いて結果するならば、現在の不景氣は、國民によつて正視され、賢用されたといはねばならん。

無自覺放慢の積極主義はひとへに有害だが、眞の積極策なき消極主義の價値には見え透いた限度がある。

現內閣が、憲政會系が支配するかたちに於いても、政、革系が支配するかたちに於いても、が三系和協のかたちに於いても、根本的整理が必要とする制度改正と、全體的富榮が必要とする對外政策、殊に對支及び對露政策とを、實現する適任者だとは、その有望者だとは、いまのところ、容易に考へられない。

しかし、國內のどこからでもいいから、したがつて現內閣の將來からでも勿論いいから、或る意味に於いては手数が省けるだけ一層いいから、その適任者としての有力者が出現するならば、しかも早く出現するならばいよく、現代日本の位置は樂觀される。

雜誌を選ぶは今!!

◇新年からお薦めしたい雜誌◇

◇生活の必需品 として我國でも雜誌が新聞と同じ樣に誰にも讀まれて來たことは、最も喜ぶべき事實であるが、その善惡の影響に就いては、識者の間の話題となつてゐる樣だ。雜誌の持つ美點、效果に就ては今更言ふ迄もないが、多く讀まれゝば讀まれるだけに、如何はしい營利本位のものも自然現れて來ることは何時も變らぬことで、現在では雜誌の選擇がまた重要なるものとなつて來た程である。

雜誌は新年號から讀み初めることが讀者にとつて最も利便が多い、從つて來年からは何を讀まうかと迷つて居られる方も多いことであらう。

◇少年少女讀物 としては、何と言つても、澄宮殿下台覽の光榮を荷ひし、同種類中第一の大部數を有する「少年倶樂部」少女向としては、國母陛下皇太子妃殿下台覽の雜誌「少女倶樂部」と定評がある。何しろ兩誌共現代一流の敎育家數十名が賛助員として編輯されるものだけに愛する御子弟方の讀物としては絶好のものである。

◇婦人雜誌の中 では上品で實用的との評判が高い「婦人倶樂部」が第一に數へられる。同誌が最も親切な婦人の味方として、堅實な道を歩み今日の大發展を見た事は實に感嘆に値する。小說、料理、育兒、裁縫、美容の記事說話、評論、研究等婦人に關する一切の讀物は、各專門大家が責任を以つて記述してゐる。御婦人方が雜誌選擇の絶好期に際し「婦人倶樂部」を手にせられる事を記者は切にお薦めしたい。

◇萬人向の雜誌 では「講談倶樂部」が第一に數へられる。德富蘇峯氏、上杉愼吉博士が極力推奬されてゐる所から見ても、滑稽愉快な雜誌「面白倶樂部」と共に我國の娯樂雜誌を代表してゐるものと言へやう。

高級ものでは現社會百般の記事を網羅し、高級知識の民衆化を標榜し、國民必須の知識を平易に誰が讀んでも面白く、判る樣に記述した雜誌「現代」が名實共に日本一、是非お薦めしたい雜誌の一つ。

◇面白くて爲に なる事を其標語として編輯される大日本雄辯會講談社發行のものは各方面から代表的な雜誌として好評を受けてゐる。例へば講談倶樂部、現代、面白倶樂部、或は雄辯、婦人倶樂部、少年倶樂部、少女倶樂部と云つた樣に何れもその方面々々で評判實行共に誌界第一位を占めてゐる。

この新年號から創刊される同社の「キング」も豫告や、諸方面の名士の評判から見ても、これ又推奬すべき良雜誌の樣に見られる。

◇日本一を標榜 し發行部數も現在日本の最大部數を發行する雜誌より三倍で、面白いこと、爲になること、安いこと、何から何まで日本一、然も同社が過去二ケ年に亙る研究の結果發刊されるものだけに、一躍世界有數の名雜誌として日本の誇りともなるやに考へられる。

今は雜誌の選び時、此期に以上の樣な良雜誌を選擇されることが最も肝要である。何故ならば種々な大讀物や面白い續物などは、何れも新年號から掲載されるし又種々な特典もあるからである。

（廣　告）



御殿女中の髪飾服裝

鳶魚

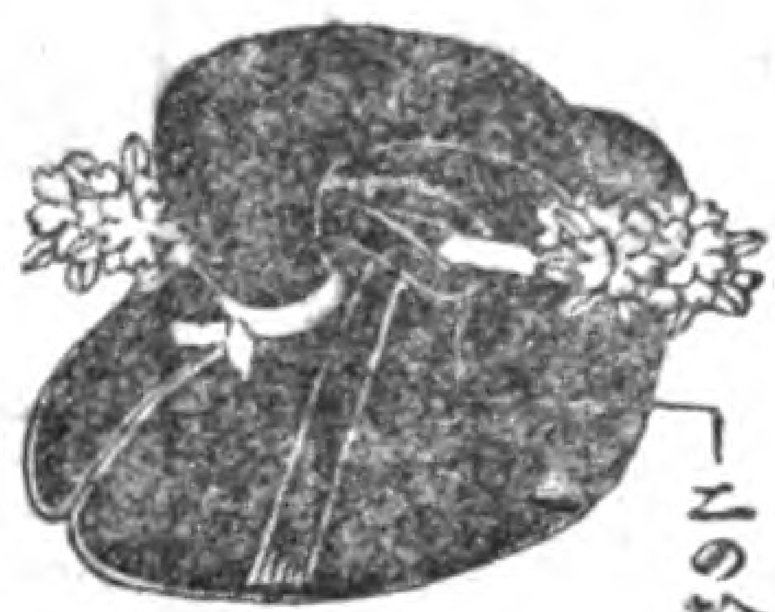
御殿女中の衣裳髪飾は、それによつて外觀から只だの婦女と懸け隔てるだけのものでない、若し彼等から衣裳と、髪飾とを除くならば、羽衣を失つた天女と同樣になるのである、典例格式に依つてのみ行はれる彼等の職事は、一時も規定の衣裳髪飾なしには服務されぬ、故に彼等を綺麗にするための粧飾物でなく、孰れもが欠くべからざる必要品なのである、ませ子刀自の昔話に此の必要な衣裳髪飾の話は、是非とも補記して置かなければならない。

御本丸女中の結髪樣式などは、決して多種多樣でないのに明白になつて居らぬ、服裝にしても思つたよりは規則立つて居て、餘り混雜した物ではないらしい、此等について老刀自の話は頗る要領を得たものと思ふ。

結髪樣式のさま〴〵

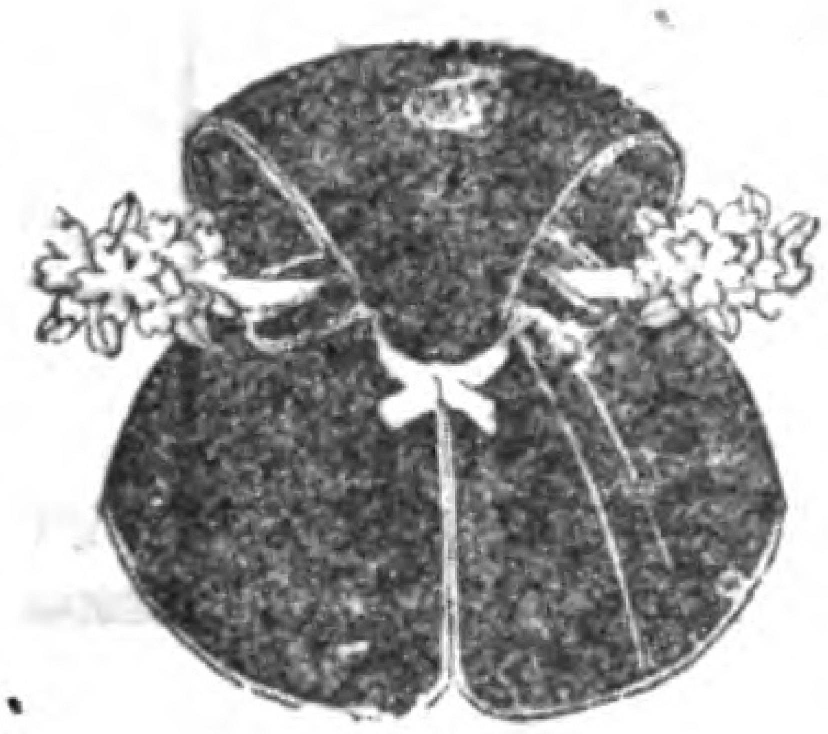
オマタガヘシは御臺所が御着帯以前のお髪です、御袖留の後はお罷めになります、御袖留は御着帯（姙娠後五月目に儀式がある）と御同時になさるのです、天璋院樣（家定將軍の夫人島津氏、安政三年に廿一歳で入輿された）は、御養君のお出（安政五年六月、紀州慶福を迎へて、家定の嗣子とした、此の時天璋院殿は廿三である）まで、御振袖ォマタガヘシでした、（天璋院殿の入輿年齡の廿一といふのが既に遲れて居る上に、家定が病人で子供がなかつた爲めもあるが、廿三まで振袖オマタガ

へシで居られたのは珍しいと思ふ、但し珍しいといふのは年齢からであつて、結婚後三年といふ方からは珍しくもない）、御振袖ォマタガヘシは下ざまの半元服といつたやうなものです、（民間の女の元服といふのは眉を剃り落し、歯を黒く染める、半元服は眉だけ落して白歯で居る、明治の初年に妾宅へ半元服の女を住はせ、それを權妻といつて大に流行した、流行に乘じて權妻でない女も半元服に黒縮緬の羽織を着たものだ）、七種（正



二の輪

おまたがへし



おまたがへし背面

月）までの内にお精進日があれば、お次お三の間の者が一人つゝ、オマタガヘシに結ひました、簪はなく花笄をさします。

オマタガヘシの型は田舍源氏（廿一編）の朝霧や千鳥のが似て居ます（爰へ田舍源氏の挿畫から、正面と側面の見へるやうな處を抄寫して置かう）



式日にはお中﨟の内で、若くない年寄でない者が二人づゝ、オスベラカシにします、（オスベラカシは下げ髪のことで、御臺所の儀式の御髪型である、御臺所がオスベラカシの時に、御中﨟が二人だけ髪を同型にする、其の時にお次三の間の者が、オマタガヘシにするのは、御中﨟のオスベラカシと釣合ひを取つたものらしい、御臺所としてはオマタガヘシは儀式の御粧ひではない）、長（長髢を略してナガといふ、オスベラカシには必ず長髢を用ゐるゆゑ、長を掛けると云へばオスベラカシのことになる）を掛けない時には眉はありません、（オスベラカシの時にのみ眉を置く）、御所（京都）では常さげ常眉の人（いはゆる官女）がありますが、武家には有りません、眉も一色しか無いのです。

御中﨟はオスベラカシにするのを迷惑がつたものです、形が似て居るのでお杓子といふ仇名をつけて居ました、（後から見た形がお杓子のやうなのだ、長を掛けては進退が自由でない、故

漫にすれば曲り角などではナガを引懸けるやうなこともある、常に背筋に垂れて居るナガを掻取の中へ入れて歩行しなければならぬ、ナガを掻取の中へ入れるのは、臂の張りやう一つである、身體の屈伸に拘らず、一定の位置を保たせられる）

ナガの枕は毛を一寸ばかりの厚みに紫縮緬で卷いたのです（髷は民間のも枕を紫縮緬で包んである、だが民間の髷は桐材が遣つてあつて、毛で卷いてはない）、ナガは其の名の通り長いものですから、起てば後へ曳きます、それ故に歩行する時は掻取の中へ入れてあるくのです、ナガの掛けやうは自分の毛を平らたく扱き下げて、毛裏へ鬢附（油）を斉け、漆紙（黒色 民間でも島田や唐人髷の毛裏へ鬢附で、コンドサといふ紺色の厚い紙を張り附けて結つた、）を張附け、其處へナガを白元結で結び附け、其の上へ謂元結を掛けます、是は御年寄御中臈等御目見以上のものに限つたことです、表使や御目見以下のお次頭 お次、御右筆頭、御右筆、御切手書などが、ナガを掛ける場合には中かもじ（長髢は略してナガとのみいふが、中かもじは中と略稱することはない、必ず中かもじといふ）を入れます、それに謂元結を遣はすにタケナガを掛けるのでした、中かもじは起つて後へ曳きません。

ナガをかける時には、地毛とナガとの結びめに繪元結一ケ所、繪元結は金紙へ松竹梅などの模様があつて、後先が紅で染めてあります、其の下へコビンサキが二ケ所、コビンサキは丈長を細く折つて膝折結びにします、其の下へシロクレナヰを二ケ所掛けます、シロクレナヰは元結とはいふものゝ、實は水引なのです、一尺ばかりありました、總てゞ五ケ所結ぶのです、

是だけでは聞き馴れない人には分らない、小笠原水島等の傳書のよりも、簡明であるから奥女中袖鏡の解説と挿圖を爰へ出さう。

長かもじの事

一長さ五尺計り、背の七のゆの通りにて、髪を寄せ、かもじを入れ、水こき元結にて堅く結ぶなり、扨その元を平元結にて、二ゑ廻しゆひ、其上に繪元結をかけるなり、

但しけしやうゆひは、とくるとも、下結ひはとけさるに結ぶべし、

一其次は凡六寸か七寸程をきて、小びんさき元結にて、かたわなに結ふなり、

一又其次を六七寸置て、小びんさき元結にて、かたわなに結ふなり、

一其より下七八寸計りに、白くれなひの水引一筋にて、かたわなにゆふなり、是を結び捨と云、都合四所なり、

一年の寄たる人、又は髪の少なき人の事、

一竹のふしとて、かもじを入るゝ所より上にて、一所水こき元結にて、一ツかたわなに根ゆひをするなり、

一其下に引つけて、かもじを入れ、下をしかとゆひ、其上に平元結にてむすび、絎元結を懸るなり、

一その次は、こびんさきにて、ひとつ、

一其次は前に同じ、絎元結とも以上五所なり、

一總じてかやうの寸法あれども、人々のかつこう、長短により、右寸法に應じ、ほどよくかつ好あるべし、

一年よりたる女中の結やうは、兩のわけめばかりわけて、兩わきへすべらかし、びんをうつくしう、なですまして、小びたいの頃より、からがひにてわけ出し、其うちをひねるなり、髮のひねり數、かた〳〵三ツづゝ、六ひねりなり、ひねりやうは髮のけを四すじ、ひとつに取て、耳にかゝるやうにひねり出すなり、中四すじづゝ三ひねりにて十二すじなり、

一投地髮の裾に長かもじの頭（枕のこと）を入て、ひら元結にて、かもじのかしらを結ふなり、髮のよき人のおひしより、下髮の短き人は、それより上に鬠頭を入れて、かもじのかしらをば、下結とて水こきのより元結にて結ひ、其うへに平元結をかけて常のごとく結ふなり、

一平元結の上に絎元結を掛へるなり、平元結の兩はしと、絎元結の一分のはしと、三ツかなはになる樣にゆひ申なり、

一絎元結の一分のはしは、ゆひ手の右に成るやうにゆふなり、

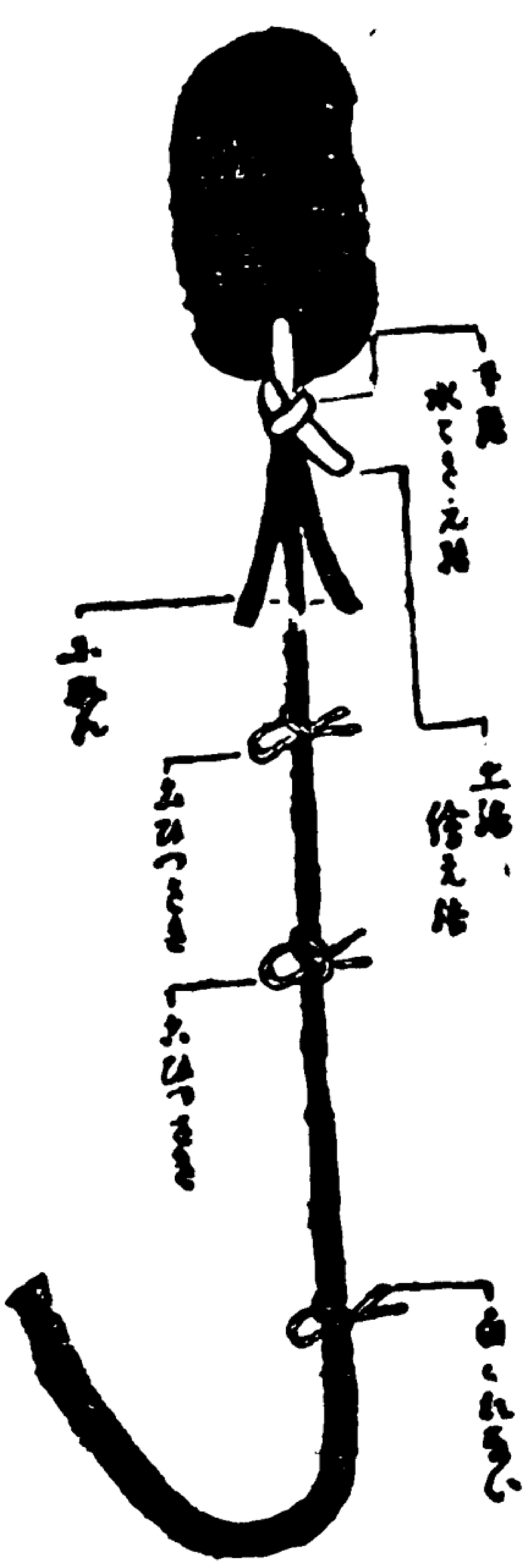
一長かもじのこびんのたけは、一寸五分計りなり、小びんさきをのけて、びんぎわを結ふ、元結より手一束よけて、しろくれなひの水引にてゆふなり、

一白くれなひのゆひやうは、二重卷、しろき黑きさかひを、ゆひめのまん中へなし、わなはゆひての左へなし、はづれは右へなし、紅の方、上へなるやうに、二重まきたるを、ひとつに通して、女むすびに、かたわなにゆふなり、白紅の水引より五寸さげて、地がみのたるみ五寸ほどゆるりと取て、たるませて、いりさきにて左へ、わなの成るやうに、おとこ結ひにかたわなに結ぶなり、

一又それより五寸さげて、ひつさきにて、右のごとく結ぶなり、

一それより下り、その人のせいにより、成たけにたゝみぎわ

長かもじの図



を、引さきにてゆひ申すなり、以上六所なり、

一若き衆のゆひやうは、よろづ前の如くにて、繪元結より手一束ほとさげて、白紅の水引にてゆひ、其下ほどおきて、ひつさきにて結（ゆひ）、それより下は其人のせひたけに、たゝみぎわを引さきにてゆふなり、以上五所ゆひ候なり、

御本丸には竹ブシなどゝいふことはない、又た元結を四ケ所、六ケ所掛けることもなかつた、孰れも五所結ひのみで、

繪元結＝小ビンサキ＝同＝白紅＝同

といふ型式に定まつて居た、繪元結の掛つた處は、地毛を扁平に扱き下げ、毛裏へ張つた漆紙（前文參照）で、ナガを包む、即ち此處が地髮とナガとの接續する場所なのだ、それ故に撚元結を二重に廻して ナカを緊縛したのが下結ひである、其の上へ繪元結が掛けてあるのだ、上結の繪元結は裝飾であるが、下結ひの撚元結は實用なのだ、善く締まらなければならない、それには平元結でもタケナガでも往けない、撚元結に限る、しかし撚元結では見立てがない、其處で裝飾が必要になる、上結びの繪元結が入用にもなつて來るのだ、コビッサキといふ名も御本丸では聞かない、御本丸ではコビンサキといつた。

袖鏡の圖では地毛とナガとの接續が慥でない、それに小鬢の處で切斷してあるので合點が往かぬ。それと參照するやうに化粧眉作口傳の圖を出さう、此の圖の元結の掛け方は宜しくない、袖鏡の方が宜しい、此圖では繪元結の下結ひが見へて居る、下結ひの見へない方が正しいのであるが、下結ひの體裁を見せるには却つて便利だと思ふ。



化粧眉作口傳の揷畫

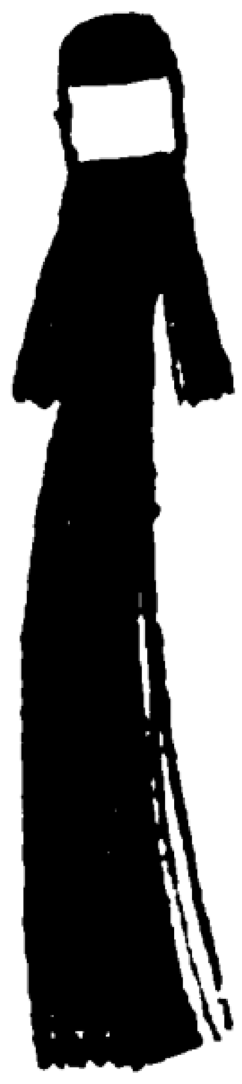
此の揷畫はオスベラカシを後方から見たのであるが、前に云つたお杓子といふ仇名のあるのが首肯されるだらう、丸で黒塗の杓子を立てたやうに見られる、それから序に長髢の圖も出し



長髢の圖

て置から、是で小髮といふ兩方に下つた毛が、地毛でないのも知れる。

髱の話のついでに爰へ中かもじの圖と、袖鏡の文を書き附けて置から、



中かもじの圖

中かもじの事

一かもじを初より、中を入れべき事、結びやうもと髮長き時は袖の通りまでおろし、中を入れ、元結にて下一重廻しに結びて端をはねさせ、縮元結をかくるなり。

但し此は留袖の時の事なり、

一ふり袖の時は帶の上へ、横手にきて元結を懸けるなり、

一幾つにても眉直し（元服）前は、わらわなれども、十五歳の時、かもじ懸そむる祝をするゆへ、十五歳（六月かもじ懸け初むる祝あり）以後は眉直し前。かもじ ナガ、を入れざるゆへ中を入れるなり、

但し中のかもじ、全體下つかたの髱にて、身柄の人は用ひざるよし、然れども下さま、中かもじを入れざるには、中を用ひらる、下さま、中を入るゝ時は長かもじを入るゝなり、

此の本文は專ら年少者のために云つたのであるが、爰の但書は上にて長かもじを用ゐらるゝ時、下さまにて中かもじを用うとした方が宜からう、童女は別だが、中髱は上流では用ゐたいものである。

何時も芝居を見る度毎に、ナガを掛けるのが儀式の際だけであるのを知らないで、武家の婦女が日常あゝした髮で居るのが馬鹿々々しい、其の上に御辭儀をする横顏へブランと下がる、髱の拵へが惡い、中かもじでもなくナガでもない變なものだからである、何にせよ短くて細そいのが宜しくない、それに帶の處で云はうが、帶が嘘だから餘計ブラ下がりもするのだ、多分此の間違は童女が中かもじを掛けるのから勘違ひをしたのであらう、昔の芝居でもブラ下がつたか否か、古老に聞き質したこともないが、何にせよ横顏の處へブラッタのは妙でない。

前にオスベラカシの圖を二つ出したが、何れも違つてゐる、老刀自に賴んで拵へて貰つた標本を爰へ描出しやう、五處へ掛かる元結は、格別な寸法があるやうに云ふのはいけない、御本丸のは等分に掛けてあつた。

ナガも若いものは七本、それから五本、年を取つては三本です、（此の本數は髱の太さの差である、御本丸では年齡に依つて髱の太さが違ふだけで、元結の掛け方は同じなのだ）、元服しないものはナガを掛けません、自分の眉のある者は髷をさゝないと極つて居ました。



標本のオスベラカシ

ナガを掛けて居て働く時にはサゲアゲにします、サゲアゲ簪と云つて、鼈甲の耳搔のある、花のついたのがありまして、それへグル〳〵と捲きつけました、簪を拔けば直ぐ解けます、サゲアゲは、下げ下地（したぢ）なのですが、サゲシタヂとは云ひません、サゲウラ（漆紙で拵へ、地毛の毛は裏へ張つてナガと接續する、繪元結の下の處）を除けて、ナガの元結（繪元結の下結）を切り（是でナガを取除けたのである）、地毛だけにしてサゲアゲ簪へ卷き附けるのです、（サゲアゲはナガを取去つて、地毛のみを簪へ卷き附けたのである、元結を掛けてないから、簪を拔けば直ぐに解けるに相違ないが、それで原狀回復する譯ではないスベラカシの原狀に回復するには、毛裏へ漆紙を張り、取除けたナガを其處へ結び附けなければならぬ、只だそれだけの手數で原狀回復するといふだけである、最初の擬粧に比べては簡單だがサゲアゲをスベラカシにする手數は餘り輕便に行はれるものではない）





さげあげ背面

上々の御髮は極つて居ましたが、宮樣（和宮、家茂將軍御臺所）は武家にはならぬとおつしやつて、おぐしも江戸風には遊ばされず、御附中臈には一度も御櫛上げをおさせになりませんでした、御目見にも御上段に御几帳がありまして、其の中に居らつしやるのですから、誠に薄暗う御座いました、御几帳は宮樣ばかりで、外のお方々にはございません、そんなに威張つてゐらつしやつたのを、お附の者がいゝやうなことをいつて、お勸め

申して京都へ御歸りになりましたが、御手當が違ふので御發心なすつて、江戸へ歸りたいとおつしやつて、お歸りにはなりましたが、モウ德川家の方へはお入りにならず、京都からお持ちになつたお金で、赤坂の小さな屋敷においでになりました、

我等は此の意外な感慨を老刀自から聞かせられて、和宮樣の御降嫁後の御樣子が知れた、宮樣は柳營代々の御臺所とは、全く違つた御日常であつたのだ、幕府は曾て公武御合體のために



田舍源氏の挿畫

御降嫁を奏請したのであるけれども、斯うした感慨が後年まで大奥の舊人から漏されるのでも、御降嫁が如何なる意味に變化したか、天下の形勢どころか、將軍の家庭にさへ妙な形跡を」留めた、我等は宮樣のことを『芝のお寺』の中へ書き、當時の大奥女中團の話を『足の向く儘』で述べたから、爰での架說を差控へたい。





田舍源氏の挿畫

ワゲと云へばカタハヅシのことです。

田舍源氏（二編、廿二編）の杉生の髮がワゲです、同じワゲではありますけれども、下方風で前髮がちいさうございます。それでも二の輪の這入つてゐる所まで描いてあります、



かたはづし



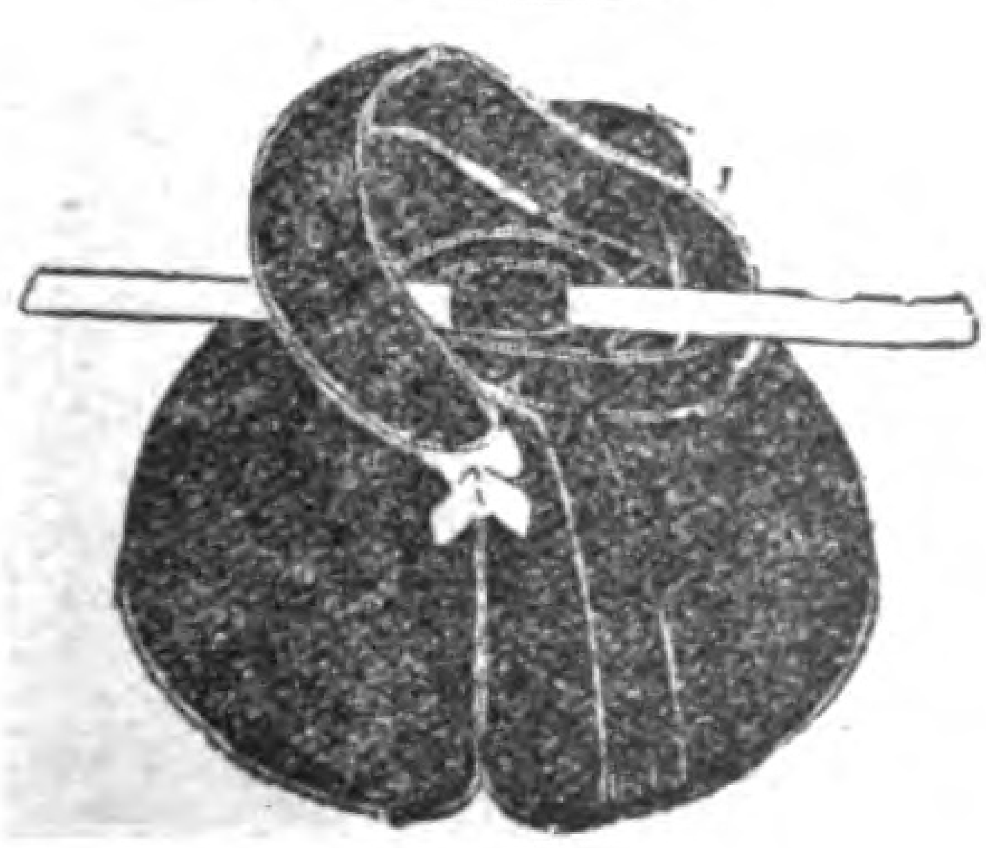
かたはづし正側面



かたはづし正側面



かたはづし側面



かたはづし背面

我等は二の輪の說明をしなければなるまい、二の輪は毛裏に使用する漆紙を輪にして、ワゲの先の毛を鬢附油でそれへ卷き附けたもので、二の輪の穴へ笄が通るのである、抄出した田

合源氏の挿畫に注意標を附けて、二の輪の位置形狀を示した、カタハヅシを描いて二の輪を書かないのは、正しい描き方でないのである。

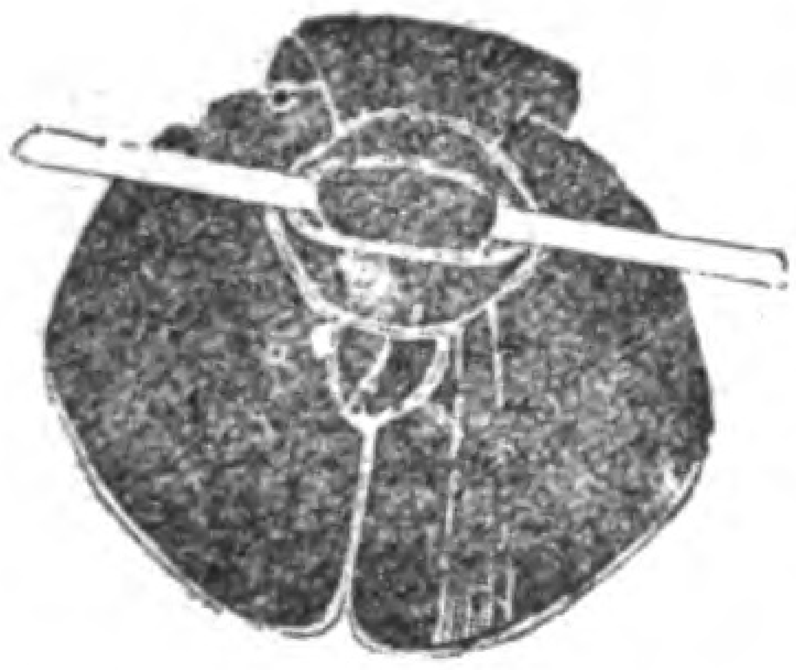
役人（役人のことは前號參照）はワゲを小さく、白粉を薄く、目だたない化粧でした、表使やお次は中かもじを掛けました。

御使番はモミジワゲ、鼈甲の櫛をさします、式日の外に櫛をさす者は御使番だけでした、タモンは御供に出て、駕籠脇へ附く時には、シノジに結つて櫛をさします。

御使番お仲居火の番お末頭の結ふモミヂワゲは後の毛がねぢれてゐます、部屋方のシノジは、それを二つに折つて一の字にするのです。



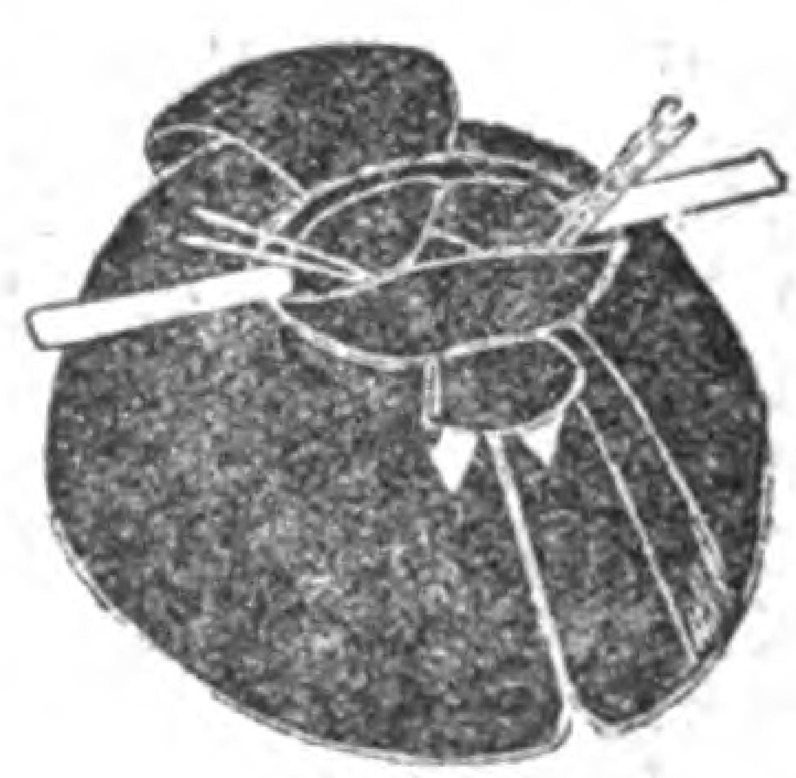
もみぢ側面



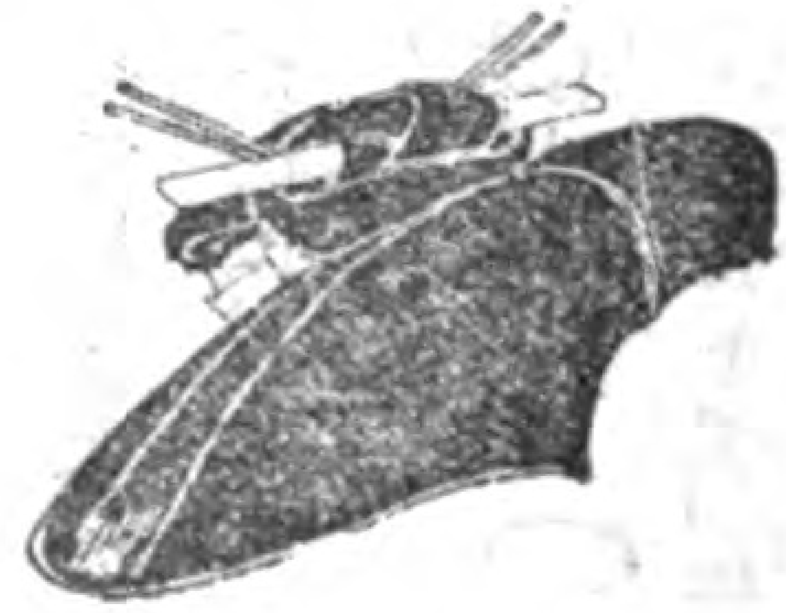
もみぢ

標本のモミヂワゲ

田安（昔の御三卿、今の德川達孝伯の家）では御中居御膳所お火の番お使番お末抔の御目見以下の者は、御本丸のシノジと同じ結び方でしたが、シノジとは云はずに、シノマキと云ひました、田安にはイトマキと云つて、御本丸のチョンボリヅトと同じな髪があつたのです、



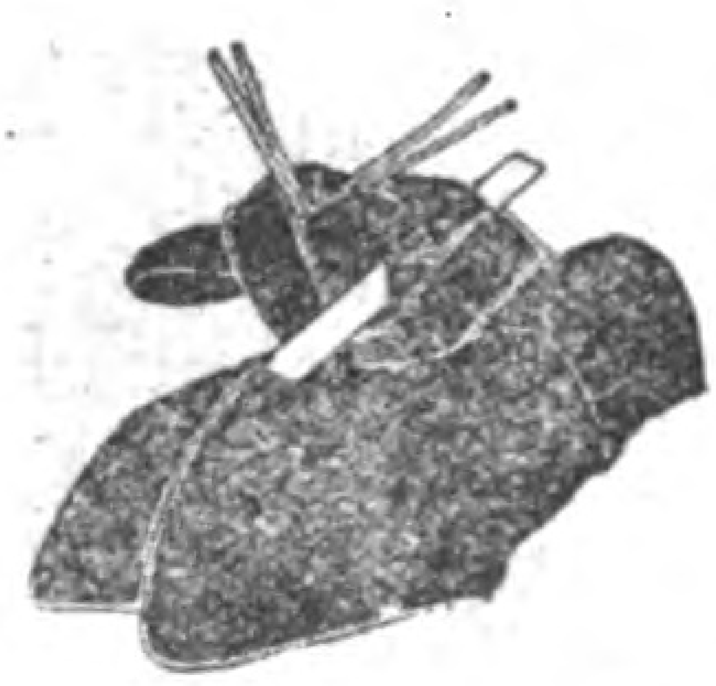
しのじ



しのじ側面

標本のシノジ

同じ部屋方でも御年寄以下、お次お三の間までの者に遣はれて居るものはシノジに結ひ、それより低い者に遣はれるものはチョンボリヅトに結つたのです、お仲居お使番お火の番お末は又た者でなく直の御奉公なのですからモミヂに結ひました。



ちよんぼりづと



ちよんぼりづと側面

標本のチョンボリツト

是は塚原澁柿園氏の妹で、田安に仕へた谷洗馬さんの母堂から、田安にはモミヂといふ髪はなく、また髪形に直奉公と又者

との差別もなく、只だ低級女中の髪はシノマキ、イトマキの二様だけであつたと聞いて、老刀自に質した其の答へである、御本丸では低級女中の髪を、直參公の者がモミヂ、又た者がシノジとチョンボリヅトの三様に分けてゐた、それから話の内にワゲといつて、マゲとは云はないこと、ワゲは輪毛で、マゲよりも正しい稱呼だと思ふ。

下方風といふ言葉は老刀自の話の中に屢々出て來る、しかし別段に其の言葉についての説明を求めなかつた、然るに又姿でカタハヅシが下方風だといふ處になつて、カタハヅシは民間の結髪様式でない、氣の附き様が遅かつた、思ひ當ることがあるから、「女服のあらまし」を出して見る、有つた〳〵。

一下タ方と申は萬石以下の事の由、

下方は民間などのことではない、小諸侯若しくは大旗本を指していふのだ、萬石以下を一睨みに下方と云つて除ける、大奥女中の見識が想ひ遣られる。

僅に結髪様式を田安家と比較したゞけでも大分の差違がある、嘉永度に西澤一鳳が江戸の見聞を記した皇都午睡の中に、

女髮は將軍家の奥女中の風儀は別段の事にて、他家にては其風を竊す事は御法度のよし、御三家（尾張紀伊水戸）始め御大名方にても、其屋敷〳〵にて異容あれば、あれはどの屋敷、是は何れの屋敷女中也と、彼地にては委しき人は見ても知るゝ也、

とある、見分ける程の人は尠くもあらう、しかし家々で御殿女中の髪飾りやら衣服やらが違ふと云ふだけは、一般に知れ渡つたことであつた。

老刀自は相の間（又者）の頭はワッパをかぶつて居ますといひ、相の間はシノジで櫛をさしませんともいつた、シノジに結ふのにワッパが用ゐられる、其のワッパの説明を求めた。

ワッパは漆紙を斯ういふ形に切つて、前へ入れるのは六七分の高さ、後へ入れるのは一寸二三分の高さにします、ワッパといつても輪になつて居るのではありません、それへ髪附で毛を張り附けて、前後から引込んで輪にするのです、漆紙の片端を笄の下へ双方から引込んで、髪附で堅めて置きます、それ故まへが低く後が高くなつて居ました、ワッパへ張附ける毛は自分の毛でなく、別に毛を張附けたワッパが出來て居ました。

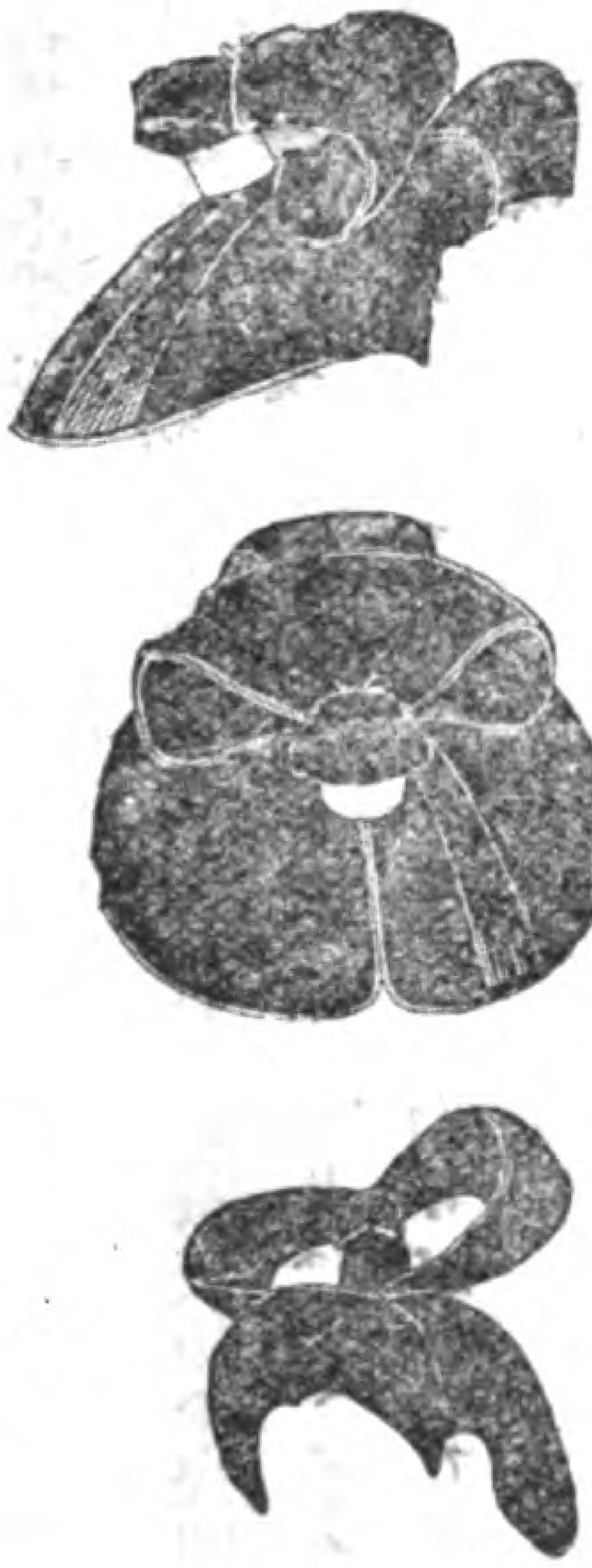
キリは桐の木で平たい小判がたで、まあこんな風な形でした、其の眞中に穴があいて居ます、髪の薄いものは其の穴へ毛を引込んで入れます、入れ毛をしないでも宜しい者はキリばかり入れました、キリへ羽二重を卷いて入れる者もありま

したが、卷かずに入れる者の方が多うござました、（民間の根卷は小枕といつて、キリを栗の絹綿で包んであつた、根元結が小枕へ掛る、髻を堅く締めるのに小枕がないと堪へない、キリは入毛のためでなく、髻を締めるには必要である、入毛には勿論都合が好い、入毛の必要のない者でもキリを入れるといふので、さうしたことには迂遠な我等も合點が往く、それと共に民間の根卷の小枕が小判形のキリである理由も知れた、ナガや中かもじの枕は毛を卷いたものであるのは、低級女中や民間の婦女とは結髪樣式が違ふからのことだ、）中剃りは上々にも下々にもありません、お末でもありません、中剃りがあつてはキリが這入らないからです。

部屋子（へやこ）は三の側、四の側でさへ、部屋の者からはお嬢樣と云はせて居ました、大抵チゴかシマダで居ますから笄をさします、小僧はシマダで平打をさし、花笄もさします、元服すれば花笄をさしません、（平打（ひらうち）の髪挿は部屋方のみのものだ、さうして元服しない者、即ち童女に限る挿物である、忠臣藏のお幅と云へばお約束でシマダへ平打をさす、一體顔世御前の御側に居る人間なのだが、一向勤め向きが分らない、鹽冶判官は五萬石の小諸侯であるから、御本丸の規模に引當てゝ、奥向のことを云へもしない、とは云へ奥方の御使ひにヒヨコ／＼出て來るのは怪しからぬ抔と議論する前に、作者はお幅の役柄を何と見立てゝ書いたであらう、俳優も何を睨んで平打を好んだらう、武家の女奉公人に腰元などゝいふ名稱がない、浮世草紙で見ると京大阪の豪商大賈の家には腰元といふ奉公人があつたらしい、それを芝居で武家の方へ勝手に持ち込んだのではあるまいか。）

眉のある（元服前）お小性（七歳から十二三歳までの童女、俗にお茶小性といつた、お茶を上げるだけの役目だといふ、勿論振袖を着て居る）の髪は、オチゴからマヘヅトのオチゴ、それから根細（ねぼそ）のシマダになります、根細のシマダは部屋子も結ひました、髪挿も笄もさゝずに、根を丈長で卷くだけです、ナガヅトは後で拜がませます、（田舍源氏の廿二編に眉のある御小性が書いてある、それを爰へ抄出する、女小性が御刀を持つことは決して無い、それから標本の根細のシマダを模寫して、參照のために並べて出して置く、見比べて御覧なさい、オチゴもマヘヅトのオチゴも、老刀自の紙で拵へて見れた標本を模寫して置から、お小性の髪は上記三種だけで其の他にはなかつた）、元服お小性（眉のない）のシマダはキリを込まれて後で拜がませてあります、（根細の反對に、根太のシマダになる）元服しても花笄をさします。


田舎源氏の挿畫



上々では髪をお切りになつても、鬟張（鯨で拵へたもの、團扇の大骨に似た形である、各種の結髪に總べて用ゐられる、上々のみでなく、高級女中も用ゆ）をお入れになつて、平つたく扱いた髪先を御封印と申して、丈長の上から美濃紙で包むのです、前髪はお執りになりません。

我等は此の際元結の一般について、ひと通り説明して置かう。

繪元結は大元結とも化粧元結ともいふ、鳥の子紙で太さ三分ほどの小口に拵へてある、長さは五寸有餘、金地へ彩色繪が描いてある

水こき元結、撚元結といふは常の元結である。

平元結は丈長を幅一寸弱に斷截し、四ツ疊みにして掛ける、

こびつさき（御本丸ではコビンサキ）元結は、薄葉（うすえう）を幅五六分に斷截し、四つ疊み或は五つ疊みにもして用う。

白くれなゐは半分白く、半分赤く染めた水引なのだ、くれないの方は紅を濃く笹色になる程に染めてある、通例の白あかど違ふのは、紅が濃いから、見た目も同じでないのだ、御本丸には無かつたが、白の方を銀にしたのもあつたさうだ。

ひつさき元結は、鳥の子紙又は薄葉を、廣さ二分乃至一分にも疊んで用ひるのだ。

思ひ附いたから書き附ける、ナガも中かもじも掛けずに下げ髪にしたのをワラハ髪といふ、是も御本丸には無かつたやうだ、童女に限つたことで、民間のお下げと同様である、肩から四五寸スベラカして、繪元結を掛けた、これはコビンサキや白紅はない、只だ一所結んだゞけだといふ。

女服のあらまし

是から服裝の話になる、その前に大體を呑み込めるやうに、先づ『女服のあらまし』の本文を抄出して、讀んで置いて貰はう。是は外間の記述であるから、直に御本丸のこととして請取れない、多分の用捨があり、辨正がなくてはならぬ、しかし大名以上の武家の服裝が如何なるものであるかを概想させるには便利だと信ずる、

婚禮 式之節

高貴之方

髮 ワラハ

眉の有る方を元服前と云、長かけ（御本丸ではナガとのみ云ふが、諸大名では長かけといふ）を掛けず

スベラカシ

眉のなき方、前髮をとる、長かけを掛ける

上へ下タとも

白幸ひ菱、唐織

裏白、ユルシと申す地、のしめの様なる厚き地なり、地紋切れ不申様織立る、着丈ケ雛形を以て織立る、是は縫目も地紋切れざる様にするはへたり、

帶、白唐織

右同斷

下着、白羽二重

九月頃は一ツ、寒むければ紅白、紅白とは二ツ重ねて着る事也

緋ノ袴

緋精巧、緋縮緬緞引き

ひの袴はかいどり共、袴の中へ入れ、紐は結ばず、左の手にて押へ居る（後の搔取袴着の圖參照

足袋

極上晒木綿、紐白羽二重、底に息ぬきの穴二ツ、一ツもあり

藝州の室、富貴宮、緋之袴の節、着用候かいどり、綸子模様にて無之、縮珍と申して、能裝束のから織の様なるのゝのよし、

○盃事濟み、色直し

右唐織、緋の唐織に成る、裏緋ユルシ（織物の名）

帶も緋になる、下着は白む、

緋の袴、

○又の着替、

地白綸子模様、模様は好次第、

間着、緋鹿子縫入り、

カケシタ帯、空色縫とり、

右上﨟年寄、老女も同服、

○給仕、スペラカシ、

御次女中は中かもじ、

御三の間は㲉下げ

㲉下げとは持前の髪（髢を入れぬ）にて下げる也、

服　地白の模様かいどり、裏もみ、間着白ちりめん染縫入物模様、帯、白綸子縫とり、赤糸を入れる、

色直し、

空色惣模様縫入、

間着は共儘にてもよし、共間着に無之は緋の紋縮緬間着なり、

夏の婚禮

麻白地ツジ模様、鹿の子入、

但寒むければ絹縮、暑ければ越後縮、

附帶、白地赤色入、腰巻あり、

着替、

白晒縮惣模様

但寒むければ縮緬、單惣もやう、絹縮にても空色惣模様なり、

附帶、右用る、

腰巻、地紅梅、ユルシと申候て、かな色のしめ極上、板の様なる地合へ寶盡しやうの模様の間へ、定紋縫入、透間なく織物のやうにて、振袖のものは振り袖、留袖はとめ袖に、裏へ緋ユルシ附け、袷にこしらへ、提帶へ袖を通し、子供遊びの一寸法師のやうにて、おかしきものゝよし、

諸家婚禮

地白、綸子、模様かいどり、

間着、綸子、かのこ縫入、

帶、空色綸子、みな縫とり、

色直し、

空色縮緬惣もやう縫、、

間着、紅紋ちりめん、

帯は好次第

一惣て祝事には空色を主もに用、

一婚禮に紫を忌むは、世間通例の處、藝州に御入輿末姫様之節、公儀にては御構無之、御供之女中紫入有之、藝州奥にて驚入るよし、（藝州御守殿、末姫は家斉将軍の女）、

正月

上、地黒地赤の内、綸子模様、地白も用る、間着、緋紋縮緬なりとも、緋鹿の子縫入にても、

袷取（かいどり）地赤の節は、欝金紋縮緬か、白縮緬、惣模様縫入にても用る、

御次勤之女中迄は綸子用る、

但紅綸子の間着は相成らず、

御三之間は空色惣模様縫入を用る、

間着は無地の緋縮緬を用る、

二月

正月に同じ

三月

上、節句計り、紅大紋綸子模様地紋の合ひ候様別織り、もみ裏、間着、白大紋綸子、色なし縫、間白（あいじろ）と云、裏もみ、

但色なし縫（色糸を用ゐざるもの）は上み計り、

女中頂戴候ても着用ならず、赤き縫少し入れて着す

御次、をの字と云、緋縮緬かい取、間着白縮緬、御三の間も同断、

下タ方は

桃色惣模様縫入、

有馬家（久留米）、松平甲州（柳澤）などにても用ひるよし、

間着、白紋縮緬、大紋綸子の内を用る、

四月

上、袷綸子、重ね計、

朔日より附帯

但下ゲ帯（附帯、下ゲ帯、提帯は同物であるが、御本丸ではツケオビといひ、文字には提帯と書いた）には上み下もなし、

五月

上、節句、帷子縮緬辻（模様の名、後文に説明する）、紋なし、綸子物の様なる惣模様、

下着、單、白羽二重、

下ゲ帶（後文に圖解する）
五月暑氣强ければ、
帷子晒惣模樣、辻重ね晒、
下ゲ帶、
土用に入、
越後縮惣模樣辻、重ねさらし、
（六月は五月と同事であるから、省略したのであらう）
七月
上、節句、地黑は用ひず、地白を用る、下タ方、晒模樣なし、白にて金紋か銀紋附る
但縫にても、箔にても、
有馬家、松平中州などにても用る、
八月
八朔も右に同じ、
九月
朔日より八日迄は前條袷、四月に同じ、節句よりは、
地黑にても地赤にても、
相白、（着の字を略していふ）
但間白之節は地白は用ひず、（かいどりと間着と同じ地色でないのを着る）

下タ方、節句、千種色、茶色のやうなる色、惣模樣かいどり、
間白、並之通、
玄猪よりは前條正月に同じ、
一玄猪に限り兩丸、御臺樣御簾中樣は、紫の綸子惣模樣を御用ひ、御間着は同じ、（玄猪御召しのことは、後文で說明する）、
女中向は用ひず
右紫の御服いたゞき候へば、いつにても綸子代りに用ひてよきよし、
一下タ方と申すは萬石以下の事の由、
一衣服帶とも四季共模樣、春を冬に、夏を秋冬に、何れに用ひても苦しからず候よし、模樣は諸寄せ、或は四季にわたり候もの、又は色々寄せ候分多く候よしなり、
一間白は三月節句より晦日迄、九月節句より玄猪前日、戌の日迄相用る、
但玄猪之式無之家、藝州などにては、十月朔日に間赤に成候よし、
一裾模樣、
御紋裾（ごもんすそ）と申して葵の御紋附の裾模樣を用る、自分紋の裾もやうと申事は先づ無之拜領物ゆへ裾模樣を用る、自分物な

らば中模様を用ひ申候、中模様と申は紋なしにて、右の袖より脊中にかけ模様あるもの也、中もやうと申は左の袖には模様無之もの也、

一夏の地赤は、ちゞみ、すきやさらしにはなし、絹ちゞみにかぎり申し候、土用中は用ひ不申物に候、地赤はまことに美しく見へ候ものゆへ、御姫さまの頃、又元服候ても祝儀事、はれの節は、地赤着用候へども、三十歳もこへ器量あしき女などは、餘り着いたし不申、御本丸向にては上﨟方、御中老方などは着用、大名にても藝州などにては用ひ不申、長州阿波土佐有馬家などは派手大名にて、格別の衣類有之、地黒に黒繻子地にて、素縫など用ひ候よし、素縫とは縫計りにて候、綸子縮緬絹ちゞみの地赤はみな模様、白上り染出し、ゆひ鹿の子に候、尤春夏冬、地赤何の祝儀にても用ひ候得共、七夕八朔は地白に限り申候、

新葬、法事之服

上、上へ下タ白、大紋りんず、

夏は白、絹縮、晒、越後縮（三色の中の一色を用ゆ）、

御次御使番は綸子に色なし模様、紅入れぬ事也、夏は白晒、色なし模様、

附帶同斷、

老刀自は御婚儀に遭遇しなかつたので、それだけは當然闕如して居る、天璋院殿にも和宮様にも御所生がなかつたから、御着帶のこともない、家定家茂兩將軍に公子女がない故に、御本丸で御成育になつたお姫様の話もない、特に老刀自の御召物の控が紛失したのは甚だ遺憾である、『女服のあらまし』は決して老刀自の手録した御臺所の名物帳の代用になるものではない、只だ老刀自の話に參照して、幾分かの考據を資ける迄に過ぎぬ、『女服のあらまし』の記者は、御守殿のあつた藝州侯家の人で、御本丸西丸のことを聞き書きにしたゞけに、何處までが御本丸の事なのか、藝州御守殿の事なのか、容易に分別し難い、取捨についての危險は其處にある、迂濶に取扱ふと既刊諸書と同様な失敗を招くのは必然であらう。

服装のいろ〳〵

今の女學生の袴は紐で結ぶのですが、それとは違つてお袴は紐で結ぶのではありません、下へ手を入れて持つて居るのです、（女服のあらまし參照）、下に細い帶を後で結んでありたす、紐の長さが一間の餘もあつて、幅は五寸ほどでした、（明治四十三年六月南葵文庫記念會へ出陳された、徳川侯爵家所蔵裝束

中の搔取袴着の寫眞を爰へ提擧しよう、是は人形へ着用させたのである、其の説明標に、搔取袴着、髮（わらは）、びんづら長髱、搔取、萠黄地繡珍牡牡藤の丸蝶、紗綾形、赤黄紫繡、小袖（白重付）、赤間着、大文綸子、菊牡丹、唐扇有文、帶、黑繡子、源氏車葵菊牡丹繡、袴（長袴）緋精巧、蝙蝠、高橋とあつた、此の寫眞を見るとお袴が紐で保たれずに、左のお手で持つてお出になるのが知れよう、此等の服裝は御簾中所用のものである。

先年尾上梅幸が帝劇で秀忠將軍の女千姫に扮した時に、此の搔取袴着であつた、しかし搔取の上へ袴を着けるのを忘れて、袴を着けた上へ搔取を羽折つて居たやうに記憶する



搔取袴着の圖

お袴は三ケ日五節句お祝ひ日にお召しになります、上の外には上﨟さんだけで外に袴を着ける者はありません、お袴の色は旦那樣（天璋院殿）のは緋でしたが、溫恭院樣（家定將軍）のお腹樣（跡部氏）は、旦那樣からお願ひがあつて、上通り（將軍の家族の待遇）になりましたが、お姫樣方の末座といふので、樺色の袴でした。

和宮樣は武家風にはおなりにならないので、萬事が違つたことばかりでした、御臺樣とは申上げずに始終宮樣と申しましたが、お袴の色も緋でなく、カチン色といふのでした、カチン色といふのは今の牡丹色の黑味のあるのです、其のお袴の下の方に穴があいて居て、其處から足が出て居るので、

跡へお引きになつた時に御足が見へました、御足が直に疊をお踏みになるのです、宮樣のお袴だけが別なので、如何にも珍しいことに拜見して居りました。

夏はお腰卷（女服のあらまし參照）の袖を提帶から通して前を合はせて後へ下がつて居ます、お腰卷は麻の縫模樣で、衣服と同じです、孰れも五月から先のお儀式になさるのです、召し物は重ねのついたお帷子なのです、お重ねは上と同じ地合で模樣がありません、……お腰卷の前を合はせるのですが、慥か打紐が附いて居たやうに覺へて居ます。

提帶は京都の高い人は夏ばかり、役の輕い人は夏冬とも二重廻り結び切りのものを用ゐるさうです、御本丸では役人が四月から九月八日まで、中﨟は三ケ日其の他の式日だけ、お三の間などは五節句だけでした、提帶にする錦は紅地紺地萌黄地の段織に限つて居ました、地色は身分に依つて違ふのではなく、年配で違ふのです。

提帶は金襴で幅二寸五分、長さ一丈、角のやうに兩方へ突張つた所が二尺あります、突張つた所へは板目紙を捲いて入れ、突張らない所へも心に卷かずに板目紙が這入つて居るのです、（前面の突張らない所は平絎のやうに見へ、背面の突張つた所は筒のやうになつて居る、提帶は吝結ひで締つて居ない、突張つた所の少し前の所を疊んで、萌黄の打紐で結つて置くのだ）、一重まわりで凝れだけ保つのですから、堅くないといけません、別に外に締めるものはないのです、（提帶を用ゐる時は平生の帶を締めない）、突張つた所が板目紙だけでは少し經つと、グタ〳〵するやうになりますから、鯨を紙で卷いて入れますが、鯨を入れるのは本式でありません、京都では位の高い人は一重廻りで結ひ目の兩端が下がつて居ます、



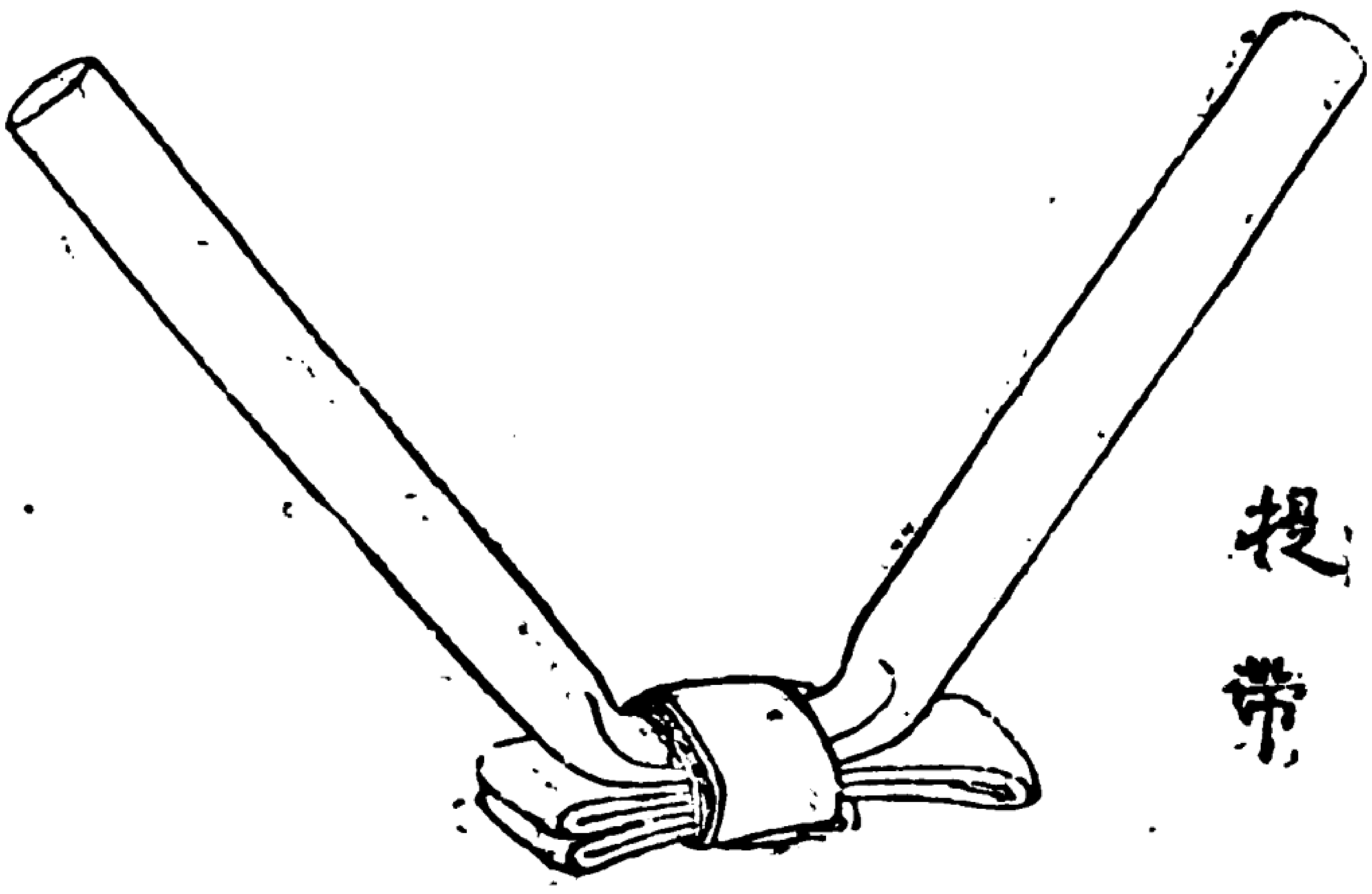
低い人のは二重廻しで



斯ういふやうにチョキリ結びなのです、（御本丸には二重廻しはない、結び目が兩方へ垂れたのもない、角のやうに突張つたのばかりである、又た低級女中は提帶を用ゐない、浮世風呂に御殿下り女の對話を書いた中に、「四月から九月迄は何方さまでも帶付でございますから、お襠はございません、みなお下帶でございます」……下帶といふのはネ、心の厚く這入つた、「ア、知れました〳〵、蜻蛉が羽根をひろげたやうにしやつきりして、幅の狹い帶でございませう」「あれも役者のいたすのはしやつきりして居るか、あのやうぢやアございません」「役者は狂言だから、三月の節句などに下帶で出るけれどもネ、ほんとうは四月から九月までの間で、袷と帷子の時候に用ゐのさとある、諸大名の奥では京都風の兩端の垂れた提帶があつたと見へる、又た今日は提帶などを知つた者は尠いか、浮世風呂の

本文に依つて一般に提帯が知られて居たことを明白にする、それも御本丸風の後へ突張つた提帯が知られて居たのである、或は芝居の舞臺から覺へられたのかも知れぬ、けれども俳優のする奥女中の扮裝、特に提帯だけは御本丸風を正しく傳へたのであらう）、

提帯



提帯の圖

提帯が後へ突張つて居ますから、提帯留めといふものがありました、提帯留めは打紐で輪になつて居て、眞中に緒占めが附いて居ます、駕籠へ乘る時などには、提帯の一方を打紐へ引かけて、それから他の一方を引寄せて又引掛けます、又打紐の輪の中へ入れて、突張つた幅を狹くするのです、提帯突張つたまゝでは、狹い處は通れません、御番に出てゝは提帯留めが遣へないのですから、狹い處を通るのには身體を側めて、一方を先へ出し、一方は押へて通らなければなりません、一番困るのは便所へ往つた時です、ナガを帶へ挾んで、片手で提帯を押へ、片手で褄を執るのです、便所では片手しか遣ひません、片手は清淨にして置きます、それから詰所のハンド（龍頭）で洗ひ、御側へ往く途中のハンドで洗ひます、最初からでは都合三度洗はなければ御側へ往かれないのでした。

我等は提帯の話を書いて居る中に、ふと舊幕府といふ古雜誌の口繪を見附けた、是は戸川殘花氏が天璋院殿御附きであつた或る老女に聞き質して、富岡永洗氏の筆を借りて描出したものである、その圖（二一頁）を爰へ出して前掲の圖と對照させよう、何りよりも提帯が斯うまで不恰好ではない筈だ、突張つた本の方細かく、末の方が太い、木刷で拵へた玩器の喇叭のやうに見るへが、本も末も同じ太さでなければならぬ、十分信憑すべきのもらしい此の圖が、此の有様なので見れば、其の他の繪畫も誠に不安心なものである。



御臺所の提帶の圖

中﨟は式日に綸子、夏はツヂ模様、春の末は絹縮、眞夏（盛夏）には越後（縮）を着ます、誰の何ですか「鞍坪へさしてかへるやつちが花」といふのは、ツヂを植物と思つて何作したものでせうか、ツヂが花は模様なのです、（女服のあらまし參照）、ツジは縫入もあり模様もありますが、摺箔はありません、總べて摺箔といふものは用ゐないのです、ツジと云へば二種はないのですが、茶屋四郎次郎から納めるのを茶屋辻、呉服後藤から納めるのを本辻と云ひました、茶屋辻は別染で一種模様が違つて居ました、大紋綸子のやうに丸形や龜甲の模様の間に、色々な花を縫つたのは茶屋辻の變つた處なのです、本辻はサッパリした模様で、少しあらうございました、鑑の色目は茶屋辻の方が濃くて、何となく下品に見へます。

浮世風呂に「茶屋辻とはヱ、「さらしの惣模様さ、「七月はヱ、「七夕もやはり茶屋辻さ、「縮は六月七月と、一月に限るやうでございますネ、「さうさ、縮の惣模様もあるが、大概は茶屋辻で間に合ふのさ、八朔が箔紋さ、「箔紋とは花紋の様な物かネヱ、「イ、ヱ紋所や惣模様を摺箔でおいた物さ、「絹縮は五月と八月でございますネヱ、そしてお玄猪から間赤になりましたネ、「さうさ、お玄猪はお正月のお規式のはじまりだと申すよとある、此の問答は三馬が妙な處へ逝がつただけでなく、當時御殿下りの得意な喋舌でもあり、それを聞き嚙つて珍しさに吹聽する、一種のブッタ女も居たのである、此の問答が直ぐ後の夏の服裝の話の參考にもなり、辻模様の說明の一部にもなる。

奥女中袖鏡の御中﨟以上の服裝の條に、

一地白本辻　表さらし麻、金銀のいと、色糸にて惣縫模様、下重さらし、表袖口紅羽二重、下重ね御心袖ぐちとも、白羽ぶたえ



ツジ模様の圖

一地黒本辻　表さらし麻、金銀の糸、色糸にて惣ぬい模様、下重ねさらし、表袖口紅羽二重、下重ね領心袖口とも白羽二重

右辻二しな

とあつて、御小性御側御次等の條には

一地白茶屋辻　表さらし麻、金銀の糸、色糸にて惣ぬいもやう、下重ねさらし、表袖口紅羽二重、下重ね領心袖口とも白羽二重、

一地黒茶屋辻　表さらし、金銀の糸、色糸にて惣ぬいもやう、下がさねさらし、表袖口紅羽二重、下重ねゑり心で袖口とも白羽二重、

右辻二しな、

とあつて、本辻茶屋辻の着用は當人の分限に關係があるらしい、しかし浮世風呂の板の間話にしても、それより仔細らしい奥女中袖鏡にしても、諸侯の奥女中の事であつて、御本丸のことではない、御本丸では本辻茶屋辻の制限はなく、只だ茶屋辻の藍の色が下品だといつて高級女中が着なかつた迄である、前掲の辻模様は高級女中の部屋に勤めるお小僧の着衣で、水色へ白く辻模様が染めてあるのだ、辻模様といふことを見せるには藍で出たのと同じでもあり、且つお小僧の着衣といふ處に興味を持つて提出したのである、偖此の辻模様といふ名稱については色々考證もあるやうだが、我等は柳亭種彦の

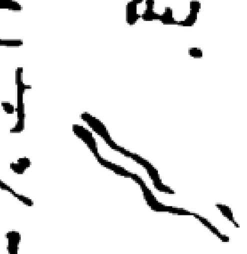
考へが宜しいやうに思ふ、御迷惑でもあらうが、読んで置いて貰いたい、それは下文の通りである。

貞徳の御傘に「つじが花も、つゝじが花といふ事を中略したる名なれども、赤き帷子の名になりたれば、春の季にならず、帷子にひかれて、夏の句になるなり」とあり、按に躑躅が花の中略ならば、つゝじ花とこそいふべけれ、てにをはのかの字をおきて、躑のつの字を略く例ありともおぼえず、別に名義あるなるべし、

三十二番職人歌合左五番　桂の女、

春風にわかゆの桶をいたゞきて
袂もつぢが花を折かな

親元日記寛政六年八月二十二日犬追物の射手の装束を記しゝ條に「御すはう地白地紋に、ひがき、かちんに葛の葉、乱紋に萌黄、御小袴、例式御帷子べにいらずの辻が花」と見へたり、又河村誓真聞書天文永禄中の書に「つぢが花、又箔の事、　女房衆、児などの被着候、男衆も着候はん歟、十二三まで男も着す、成人の程らいによるべし」と記し、又同書に「犬追物の時は、いかやうにも若く出立れ候て苦しからぬ也」とあり、前に引し親元日記は、男子なれども、犬追物故に着したるは、こゝにいふ処と合す、且べにいらずとことわるを思へば、つぢが花は赤きが本にて、貞徳の説も據なきにはあらねど、春の歌にも詠たれば、帷子にも限らざる歟――。

按に衣服に模様を摺りもし、染もするは天地のことにもとづくが多し、天とは雲形霞の類なり、地とは島、洲、洲崎又は洲濱へには、さまぐの形あり〉是等に對べ見ればつぢは十字街の形なるへし、此形に花をつなぎて染たるを、つぢが花といひ、茶屋染に染たるを茶屋つぢ、桔梗色に染たるを、きゝやうつぢと云なるべし、今つぢつまのあはざると いふも、衣を縫たる再より出で、つぢは縫めの十字になる所をいふ、馬の毛のつぢ、筮のつぢなどいふは、つぢ風のふきめぐるより出で、十字のつぢとは異なり、へ本文

辻模様は花が交互して十字形をなすといふよりも、枝や蔓が交互して十字形になつて居るのだ、しかし十字形の模様がツジであることは相違ない、是について尚ほ色々な説もあり、其の起原や變遷について、多少の愚按がないでもないが、此の際は煩しいから陳述を差控へたい。

夏の衣類は初めが絹の一重がさね、下は白羽二重、新参の者は遠慮して〈白羽二重のかさねを遠慮する、かさねは二枚がさねなのだ、絹の一重がさねといふのは裏がないからいふのでかされ其の者は二枚なのである、一重か二枚がされだといふと

聞き別け惜い、それでも慣用語だから仕方がない、實は裏のない絽のかさね着なのだ、元來かさねといふのは二枚着るからの言葉であつて、一枚ならばかさねになつては居ない〕下を羽二重にして、上を縮緬にします、それから絽、縮緬共に暑氣が强ければ麻がさねになり、其の次は透紗(すきや)の麻がさね、極暑は越後縮の麻がさね、越後は上々でお召しになつてから、一同が着るのです、總體身分のある人ほど單衣の間が長く、帷子の間が短いのです、越後ちゞみは上から着初じめると申して、上様〔將軍家〕御臺所天障院様が召してから、御側の者が着ます、帷子は下から着ると申して、透紗の麻がさねは、お三の間などは五月中から着ますが、上は暑中にならなくては召さないのです。

私どもは五月一日から、絹縮の單物に羽二重がさねを着ました、絹縮の代りに絽や縮緬も着ましたが、地白地赤地黒を着る時には、絹縮でなければなりませんでした、それから襲ねが麻になります、それから透紗の麻襲ね、晒の麻がさね、それから越後の麻がさね、越後は上が召さないうちは着られません、上が召すと其の翌日からでも着ます、これは越後だけのことで其の外のものはかまいません、帷子は下から着るのですから、お次やお三の間の者は、まだ私共〔中臈〕が絹縮を着て居る内に、透紗を着ました、時候の寒い時は單物の下へ冬の白を着ます、新參者の襲ねの遠慮は二年の間だけで、三年目からは白羽二重を着ました、お腰卷は上の外は京都から來た上﨟年寄だけです、お腰卷は上のも下のも同じ名ですが、間違ふやうなことはありません。

夏は地黒地白ですが、絹縮だけは地赤を着ます、透紗には縫入はありません、縫入りは大きな模様の間に結び花が縫つてあるのですが、大模様といつても御本丸風は、下方のよりは餘程小さいのです。

惣模様といふのは縮緬に限つたことです、褄模様や肩拔きは大名衆の奥にはあつたかも知れませんが、御本丸にはありません、中模様の片袖掛りはありました、それも右だけです、左のは知りません、兩袖掛りはありました、中模様は拜領した者は御紋付を着ます、拜領しない者は自分紋にしなければならないので、無紋にしました、〔推察するのは宜しくないことだが、自分紋を附けたくないので無紋にしたものである、自分紋を附けては、拜領して御紋付を着込んで居る者に對して、我が身が引けるやうに感じたからであらう、其處が御殿女中根性といふものではあるまいか〕。

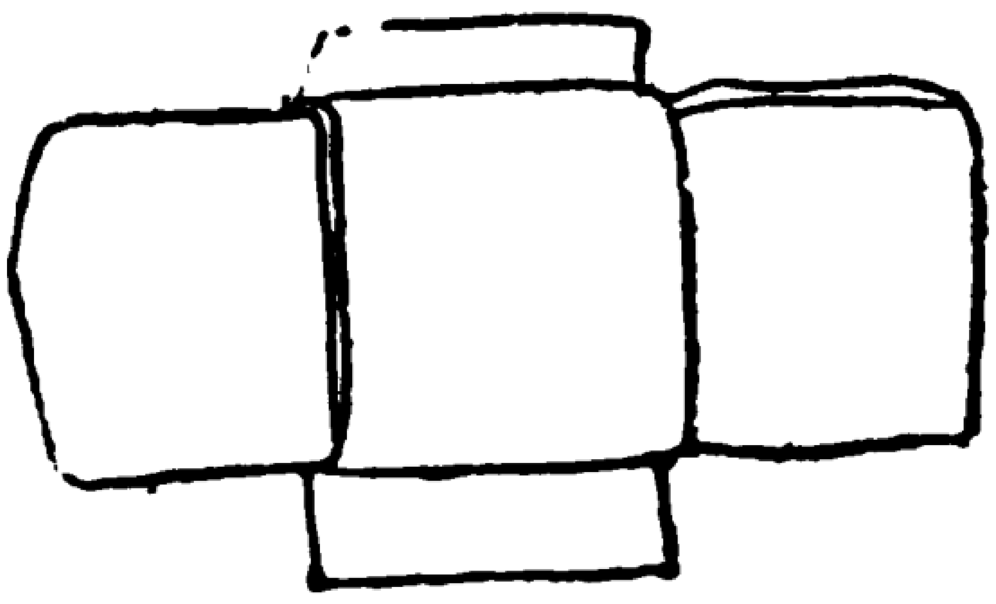
素縫といふのは縫ひ(すが)ばかりで、模様のないのです。

夏の縞物は紅絣、桔梗絣などで、紅絣は白へ赤のかすり、桔

梗絣は白へ紫の絣です、御精進日（當代の忌日）には縞物を着るのが例でした。

上様（將軍）附お中﨟は、何時も帯付で掻取を着ません、眉のあるお小性も三ヶ日には振袖の掻取を着ますが、其の外は帯付振袖です、（掻取を着ない拵へを帯付といふ、帯付といふ言葉は耳遠く聞える、其の癖屢々出て來る言葉だから、爰で注意して置く）

掛帯（かけおび）といふのは掻取下の帯のことです、民間では掻取のことを掛けと云ひます、掻取下の帯は六寸幅で、前で結ぶのですから、マア町家の女の前帯、あゝいふ恰好でした、寒い時には兩手を結び目の輪になつた處へ入れて暖ためました、（なかく／＼ハイカラなもの、女異人のボア宜しいの體裁だ）



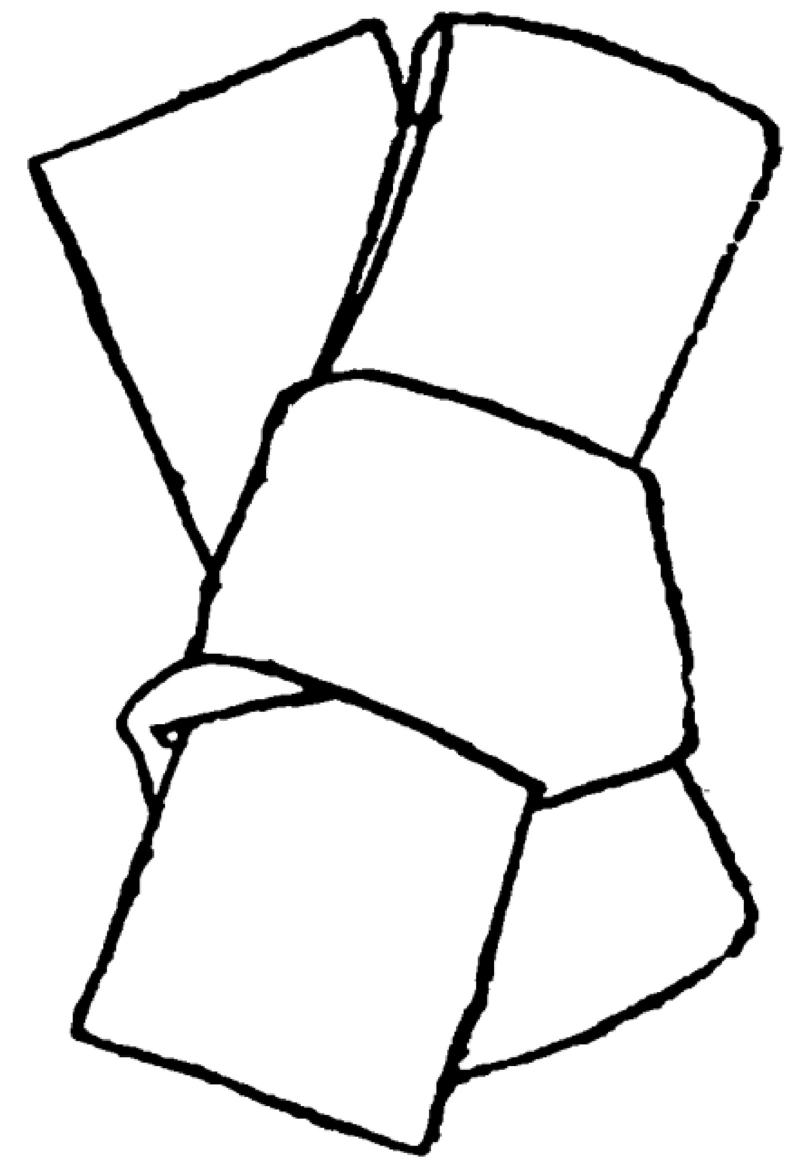
掛帯

金華山、銀華山の帯といふのは、地が金か銀で、それへ天鵞絨の紋柄が出て居るのです、別に身分によつての制限はありません、其の品を持つて居る者は、誰が締めても差支ないのですが、高價な品だけに誰々も所持するといふ譯に往かないのでした。

帯幅は七寸、かけ下は六寸から六寸五分、地は縮緬か、繻子の金入縫取模様です、地の色は年配次第さまぐ＼で極つては居りません、元服した者は前帯ですが、掻取からげの時には後で結びます、（ナガを掛けるのは元服した者である、掻取カラゲの時は別だが、帯は後では結ばない、掻取を着て後へ帯を結んで、坐體をさせるから、下げ髪が横顔へブラ下がるやうな失態が芝居では見られる、髪の短いばかりでなく、前帯にすべき筈のものを、後で結ばせることが、ブラ下がる因縁の第一だと思ふ）、

やの字結びは着物を引いた時に結ぶのです、結んだ上の方を背中へ、ピッタリと附けるのがお中﨟などの好みでした、背中へ附かないやうにするを下卑て居るといつて嫌ひます、お末などは其の下卑た方を好みました、掻取下でなくても、普通の女帯（九寸）よりは少し狭いのです、お末の帯は片側は何を附けても、片側は必ず黒八丈に極つて居ました。（御本丸風のやの字結びの圖は二六頁にあり。）

お間召（あいめし）（間着）は掻取の直ぐ下の着物のことです、（間着といふ言葉も、現在では耳立つて聞へるが、浮世風呂を見ると町家の婦女について、鼠色縮緬だつけが伊豫染に黒裏さ、とんだいい上りだつた、あひ着はずつと茶返しの比翼で緋縮緬の襦袢と云つてある、此のあひ着は下着なのであるが、間着といふ言葉が一般に用ゐられてゐたと見へる）、二ツ白といふのはおあい白



やの字

下へ白を重ねるのです、大紋綸子のお間着（お間召は勿論のことだが、お間着といふ、おの字だけて女中等の所用でないのが知れる、御臺所とか御前とか旦那様とか云はずに、只だおの字だけで明確な辨別になるなどが、昔の言葉の妙用とでも云ふのであらう）はお年寄が着用するだけで、お中臈は縮緬の掻取を着た時にばかり、綸子の間着を着ますが、それでも二枚重ねて着ることはできません、（上の外はお年寄のみが二枚重ねて着る）。御臺様が綸子の地赤（掻取）を召した時には、縫ひのある白のお間着（綸子）です、此の綸子は菊綸子でなく、大紋綸子です、頂戴しても綸子がさねは御臺様の外に着られないものですから、掻取にして着るより外に仕方はありません、其の掻取も式日などには憚つて着ないやうにしました、綸子の間着のも白でないのは誰も着ます、只だ大紋綸子の白を御遠慮申すのでした、御臺様もお掻取に白綸子を召しますが、それは大紋綸子でなく、菊綸子（地模様）でした、誰も大紋綸子でない菊綸子の掻取なら着るのです、紫綸子のお召しも、御臺様限りのものですから、頂戴しても御儀式などの時には着られません、黄の間着は縮緬の地赤（掻取）を着た時と、年回の御法事の時とばかり着るものです。

五月から先になつて尚ほ寒ければ、單衣の下に白を召します、何の召し物でも襲ねのないのはありません、單衣には縮かの襲ねがあるのです、寒いから襲ねを召すのではありません、眞にお寒い時にはお間着を召します、下へ着る白は五尺に拵へるのです、其の他の着物も同じ寸法にするのは、立褄が股へ這入らないやうに長くするのです、着物の寸法は、

丈　四尺五六寸より、袖一尺二寸乃至二寸五分

肩行は並、背幅八寸、前幅七寸、

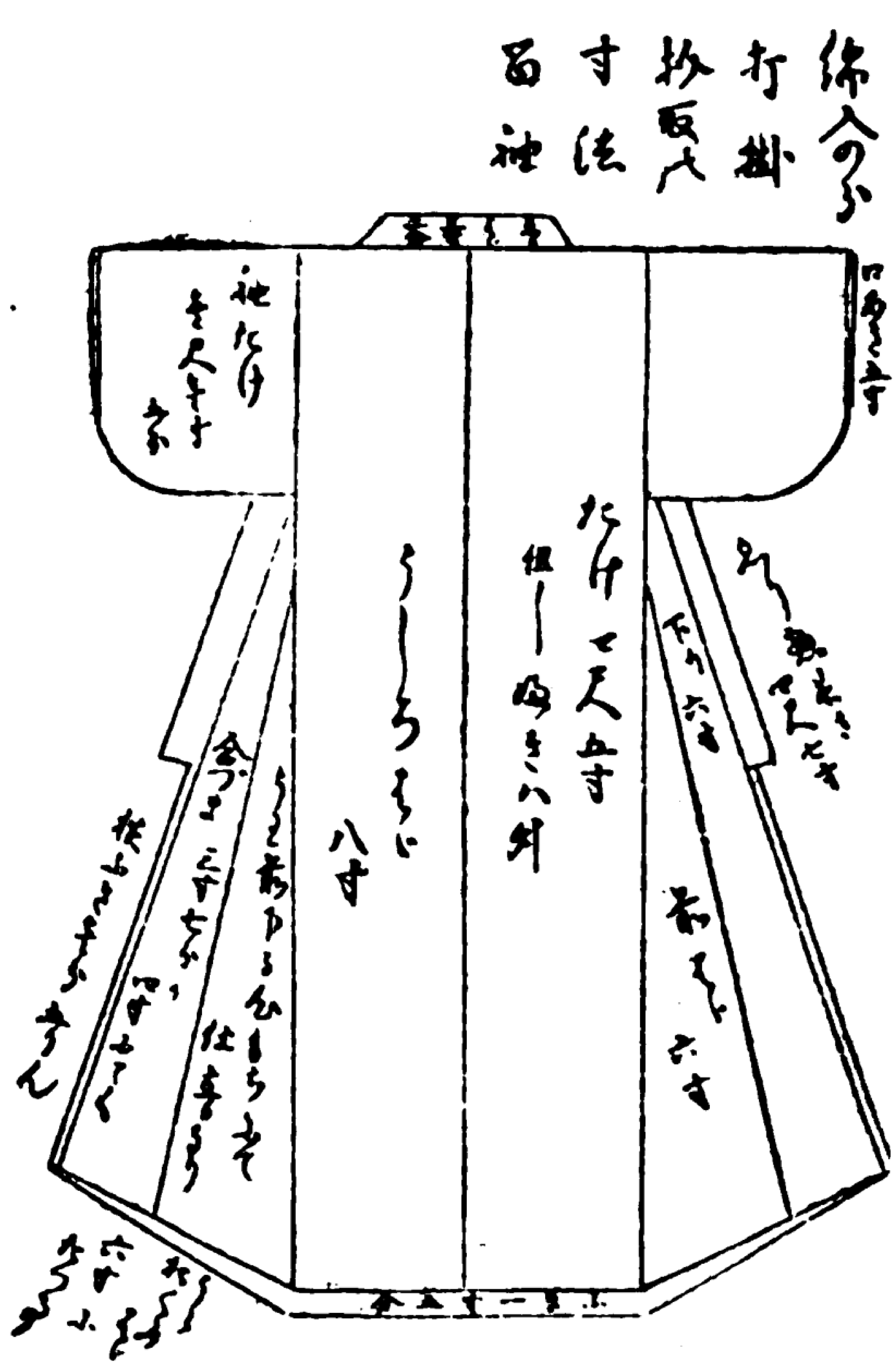
おくみはゞ五寸、襟はゞ三寸、

・立褄二尺、脇あきはなし、

です。

我等は爰へ奥女中袖鏡の衣服の圖（二七、二八頁）を出して、御本丸女中の衣服と諸大名の女中の衣服とは仕立方の違つて居ることを示さう。

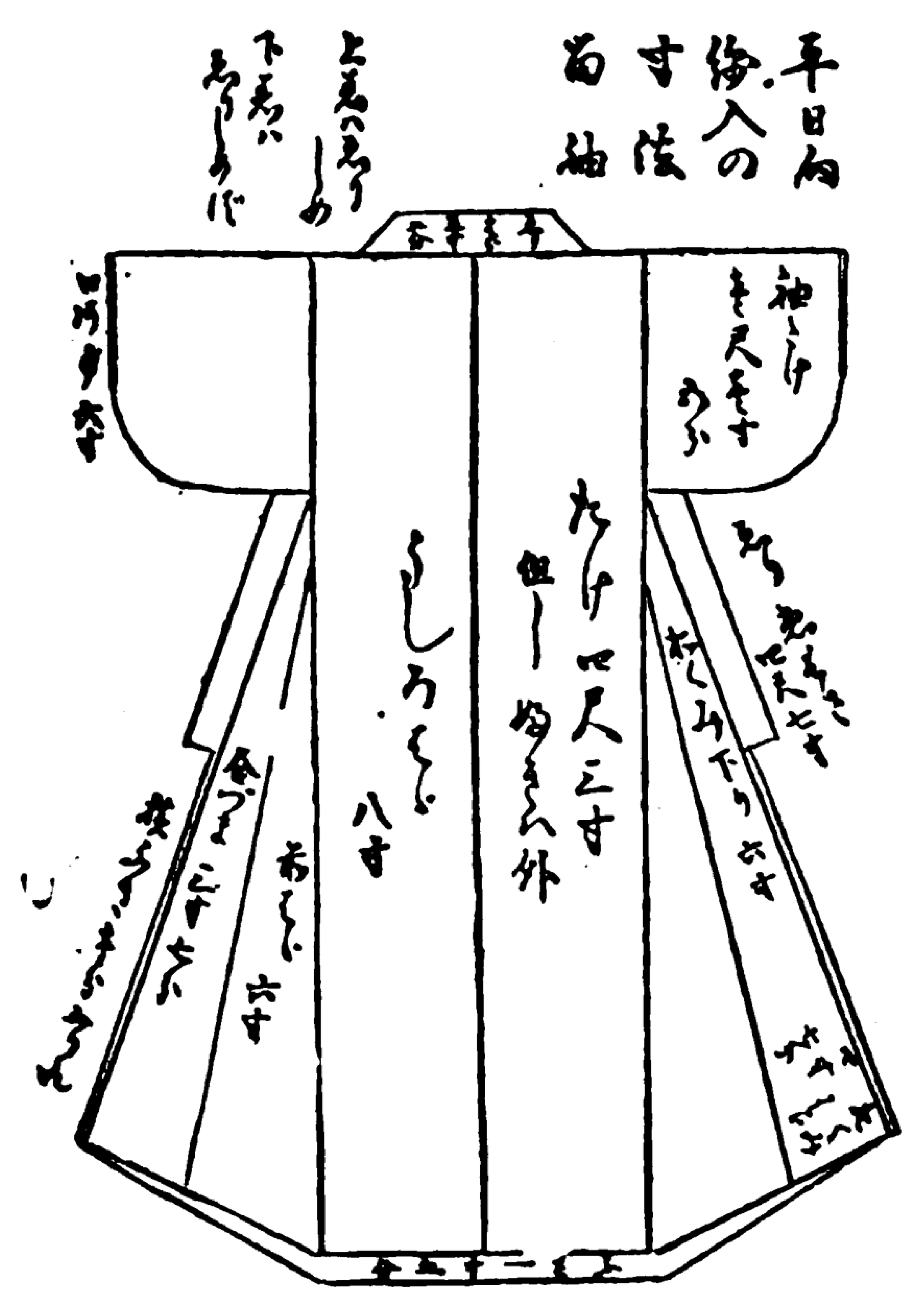
お年寄にはカラゲルといふことはありませんが、お中臈は朝夕に御用が多ければ掛ゲ（掻取カラゲ）たす、カラゲといふのは掛カラゲのことで、下方で申せばハショリなのです、カラゲ



綿入打掛搔取の寸法

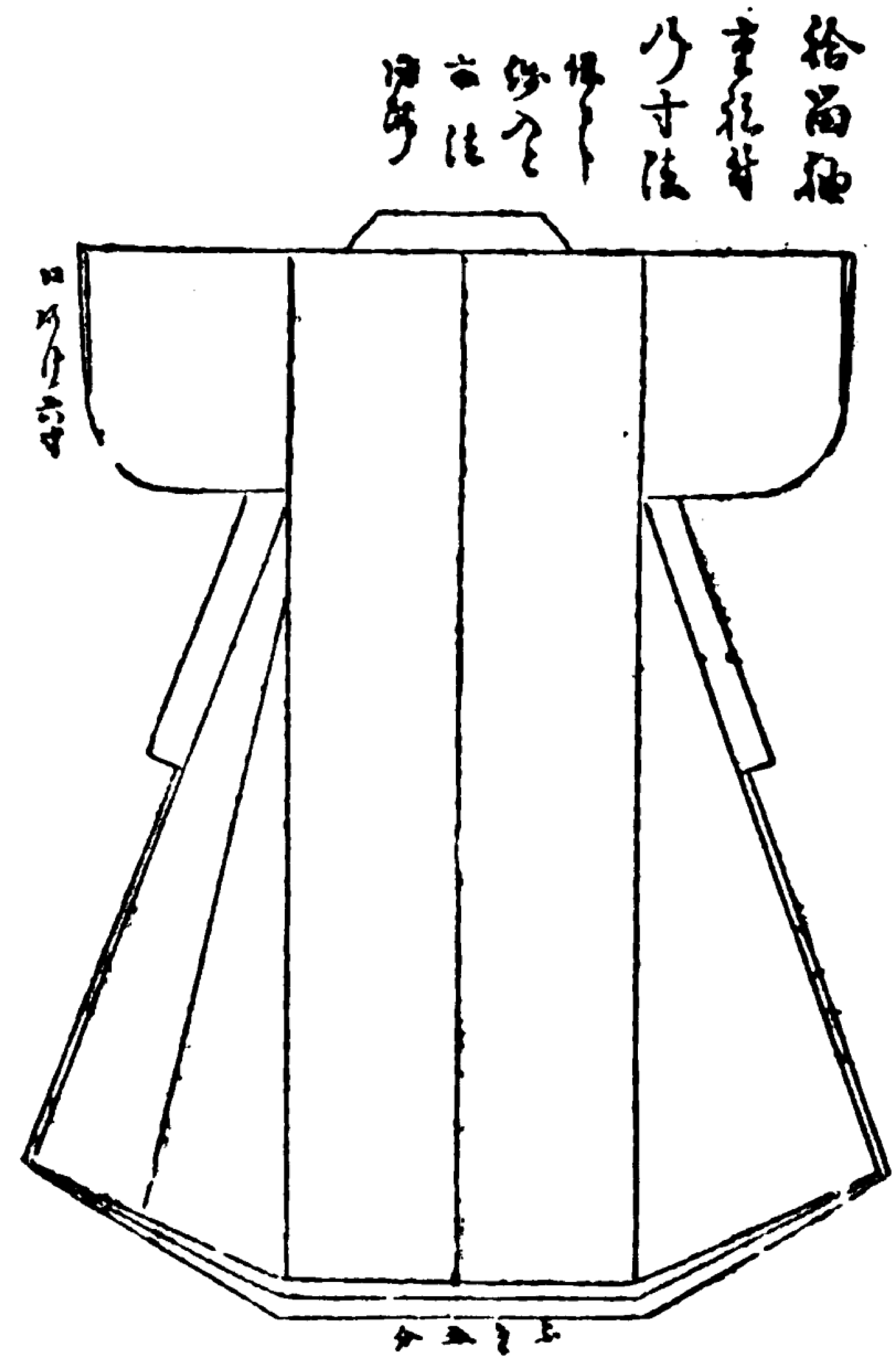
（腰帯のやうに絎けてある）は緋縮緬、振袖の人は緋縮緬のシゴキを結んで下げます、お年寄の腰帯は年中白絹です、腰帯の幅は三寸、カラゲとは違ひます、上々のは紋縮緬、吹上げなどへ御出かけの時は縫入です。

袷は四月一日から一ケ月着ます、九月には一日から八日までしか着ません、九日のお節句で綿入れに着替へて了ひます、初めは綿入の白を附けて居ます、身分のある者ほど衣類を餘計に着るのでした、袷の白もありますが、裾は綿が這入つて居るのです、單衣の白でも裾には綿が入れてあります、此の九日の間は定つた服装がありません、地白のお襲ねつきで御搔取を召さないのです、（即ち帯付なのである、浮世風呂の流し問答にさへ、四月から九月迄は何方さまでも、帯付でございますから、お襠はございません、みなおさげ帯でございますとあるではないか）、勿論誰々も襲ねつきを着て居ります、地白と極つて居るのは嘉祥（五月十六日）八朔（八月一日）です、旦那様は御精進日だけ惣縫入、御腹様は年中御紋付ばかりです。



平日向綿入の寸法留袖

袷留袖重ね付の寸法

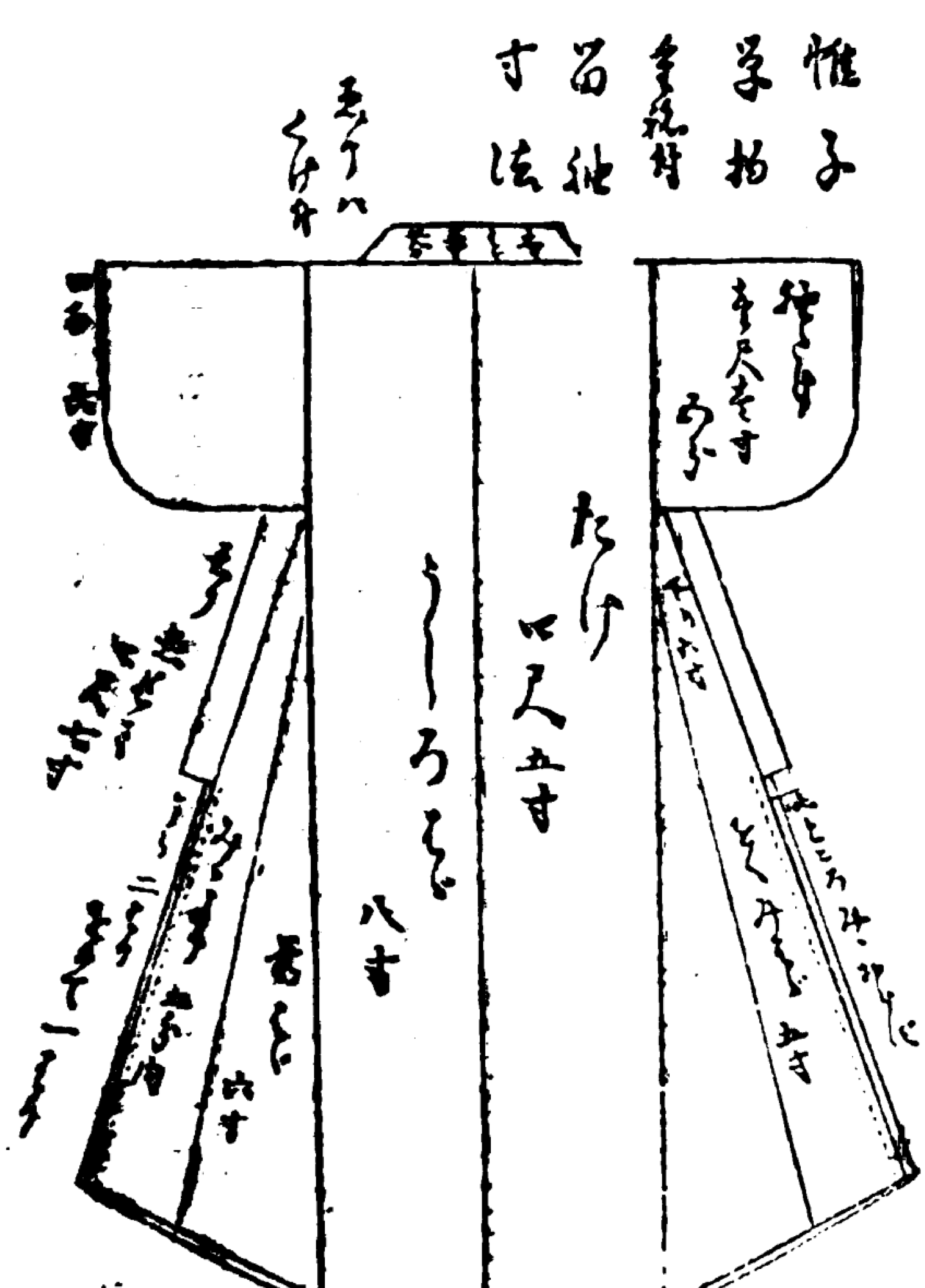


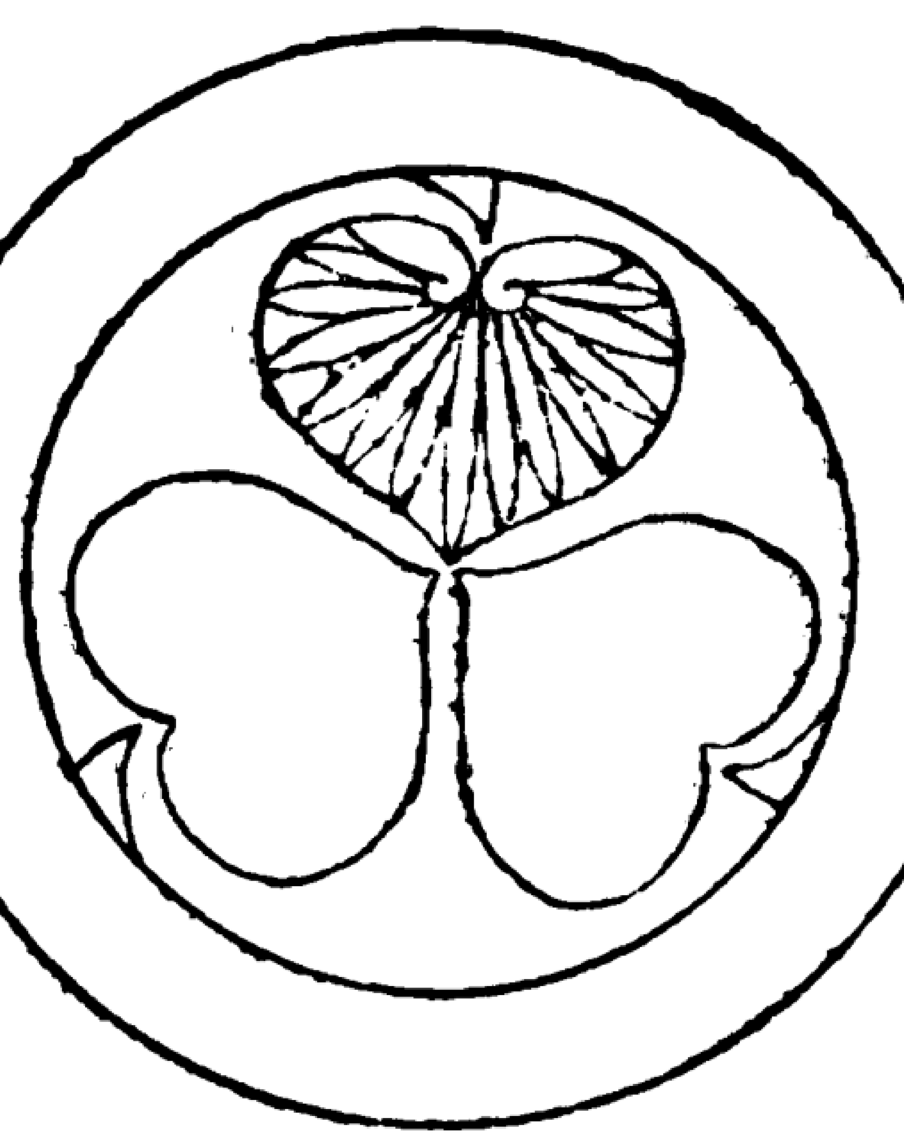
御紋所の御紋裾は染紋ですが、普通のよりは少々大きいだけでございます、お被布の紋は鯨で三寸位、竪は少し詰り二寸五分位、是は縫紋です、紫綸子のには金絲御紋もありました、勿論お被布は表向の召し物ではありません、御紋の筋立は十五です。

葵御紋は三葉左鞆繪である、家光より家齊まで代々の紋章は筋立に不同がある、家齊は十三を用ゐられ、其の後は十五を用ゐられたといふ、爰には十五筋立の紋（二九頁）を寫して置く。

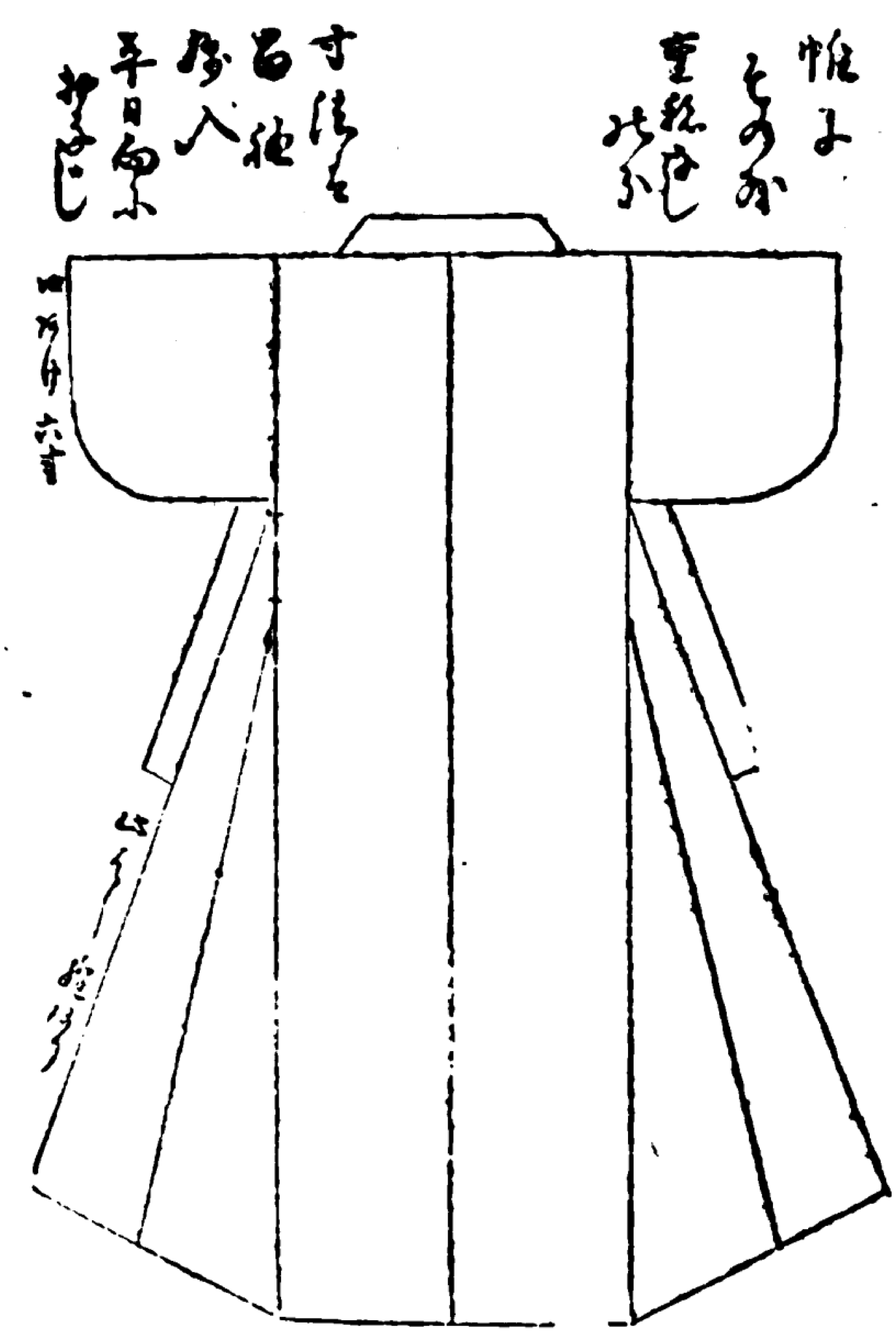
又た三家は同じ三つ葵でも、葉の描き方が違つて居る、尾州は表一つ、裏二つ、紀州は表一つ裏二つ、水戸は三つとも裏である、勿論筋立も違ふ、一門の家々も紋章に差別があつて、紛れないやうになつて居る、それを二三年前に德川家一門の方々が寄合はれた席上で、宗家はじめ一樣に同じ紋樣に改めやうと發議されたといふ、其の實行は何となつたか知らないが、同じ紋樣にすれば本家も分家も一目で分る譯には往かない、しかし紋章といふものが、世間で注意を逸して居る際であるから、殿

帷子單物重ね付留袖寸法





十五筋立の葵紋



様運中も紋章制一論を持出されたのであらう。

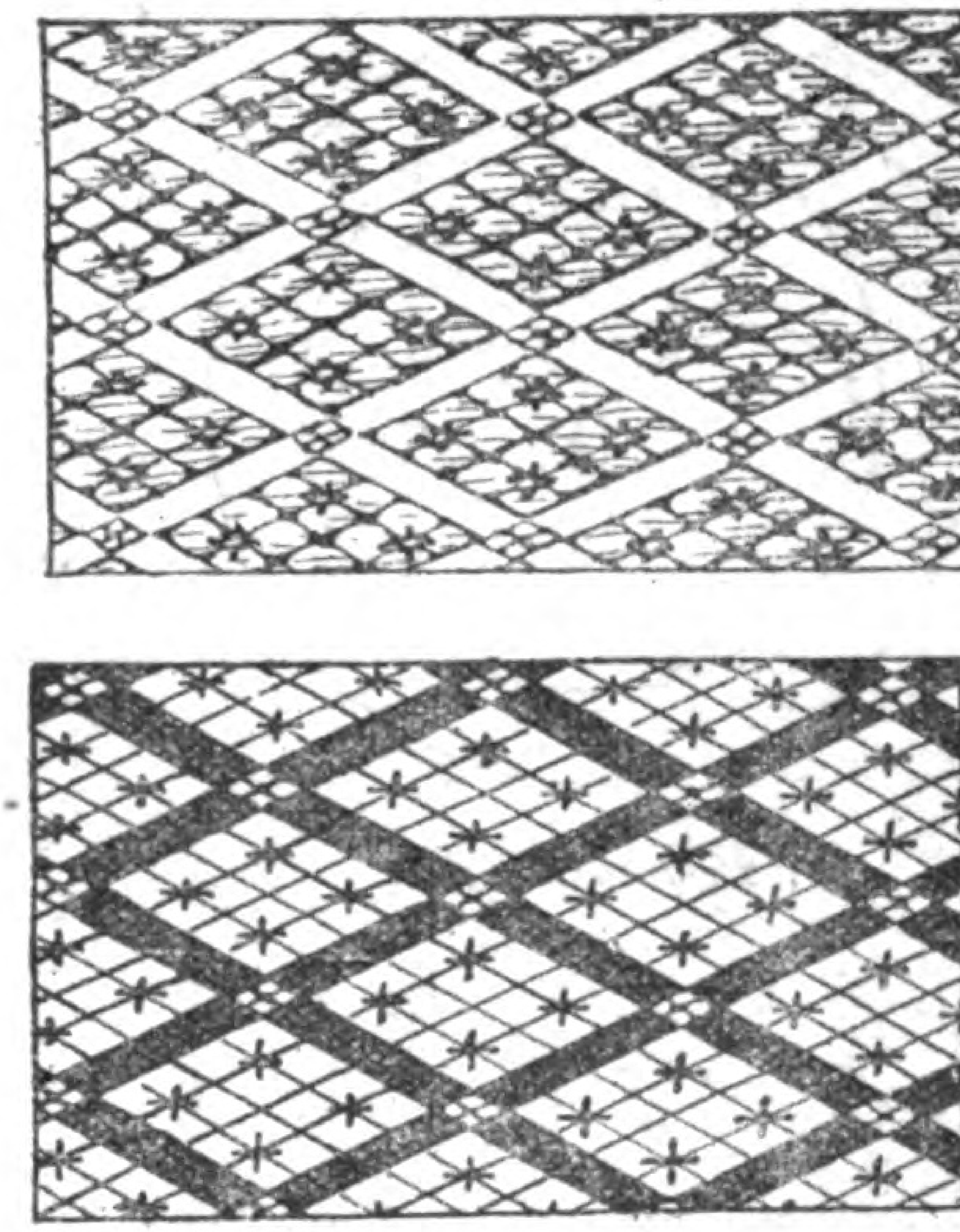
明治十八九年頃だと思ふが、明治天一坊といつて當時に顯著な詐僞事件があつた、それは慶喜公の弟だと觸込んで、松平慶承といふ者が名古屋で悪事を働いたのである、其の慶承が伊藤呉服店へ、紋付衣服の調進を命じた、常に尾州家の御用を達して居る店舗だけに、畏りました、御紋の御筋立は御幾筋でございませうかと聞いた、家令だといつて居る者が紋の筋立を知らない、伊藤の番頭は其の返答に行詰つたのを見て、御家來が御紋を知らない、ハテ不思議なこともあるものだと、首を捻つたのが、僞物暴露の發端であつたといふ。

搔取もお間召も裏はモミ（紅絹）です、瀧山（御年寄、老刀自の叔母）などは倹約家でしたから、袖口袘廻しを附けましけども、上々には袖口袘廻しなどゝいふものはありません。

襦袢の袵は下々でも、子供でも皆白です、縦間着にも色物はありません、上の御縦間着は白羽二重です、帯は心のない幅の狹い緋縮緬です、腰卷も白羽二重です、上々も私共も同じでした、武家屋敷の女は桃色とか赤とか、總べて色のある腰卷はしなかつたものです、あれは全く民間だけのものでせう。

十月の初めの亥の日を玄猪といつて惣出仕があります、其の時は玄猪召しと云つて紫綸子の惣縫ひを召すものです。

此の幸菱（女服のあらまし參照）は模様の出た方が搔取、模様の低くなつて居る方が間着になるのです、二枚とも白です、お色直しには搔取がカチン色、間着が赤です、是はお年寄と役


幸菱

人が着ます。

御臺所はお三日に大紋綸子（亂菊の地模様）の上へ、サヤガタに縫入のある搔取を召します。

祝日にはソラ色の物を着ます、おわるくなつた時（薨去）にも、模様のないソラ色を着ます。

眉のあるお小性は振袖の搔取です、尤もお三日の外は帶付です、上もオマタガヘシの間はお振袖なのです。

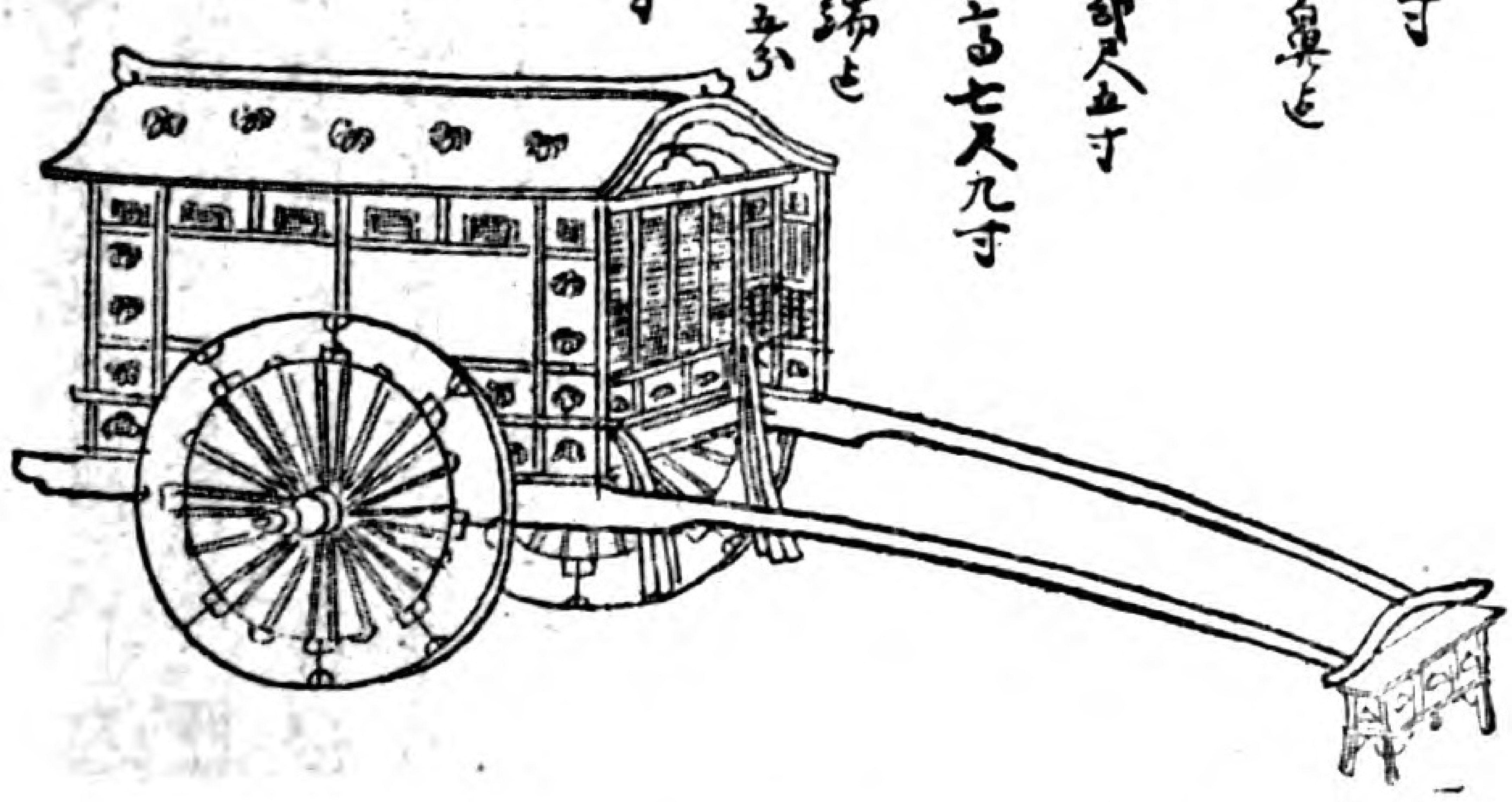
紅鹿の子は大名風だといつて着ません、御本丸では中紅鹿(ちうべに)の子を着ます、海老茶のやうな色合ですから、紅鹿の子のやうに奇麗ではありません。

呉服の間でお装束を縫ふことはなかつたのです、今の宮内省でも御装束を御手許で仕立はしません、

調度の品々

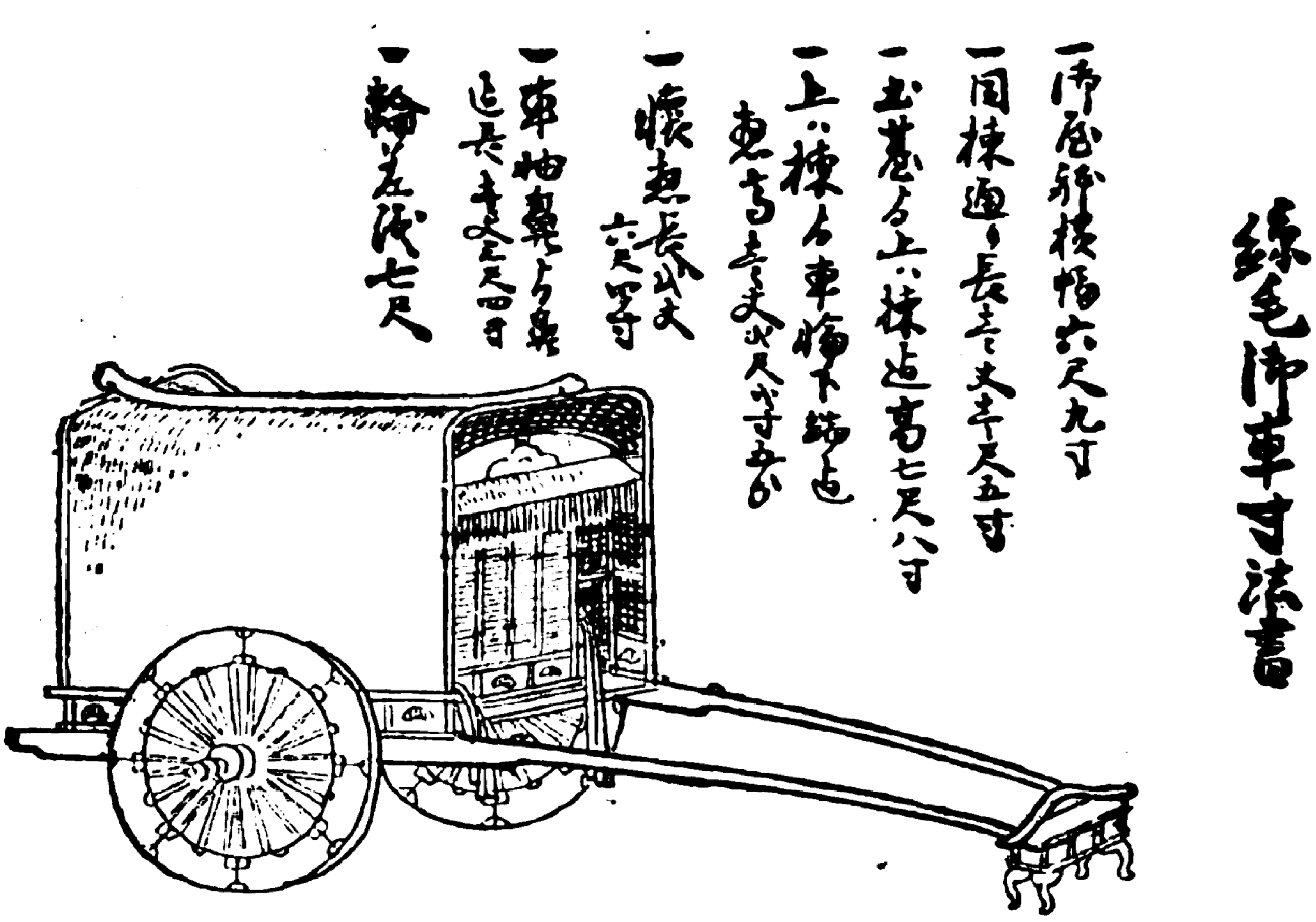
八葉御車寸法書

一屋形横幅六尺九寸
一庇根唐破風より奥迄 長さ八尺六寸
一同棟通り長さ丈貳尺五寸
一土居より上ハ棟迄高さ七尺九寸
一上ハ棟より車輪下端迄 惣高さ一丈貳尺一寸五分
一轅惣長さ貳丈六尺四寸
一車輪奥より奥迄 長さ一丈三尺四寸
一輪差渡七尺



表道具七品は表向のお道具です、お長柄(ながえ)、（傘）、お駕輿、お打物（長刀）、お箱（挾箱）、お茶辨當、それでは數が足りないハテ何で

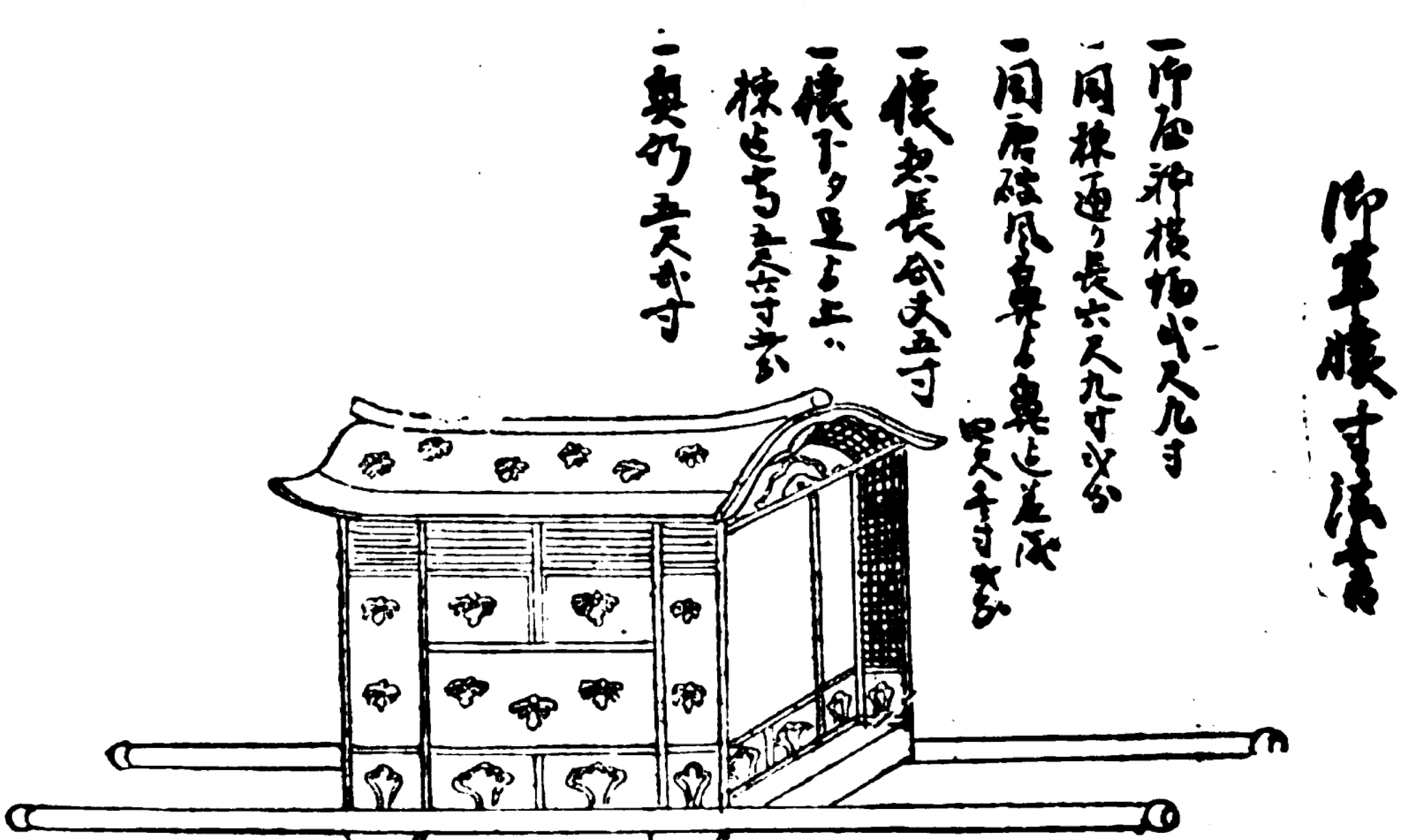
したか思ひ出せません（老刀自は其の時、かねて寫して置いた四枚の寸法書を示された、それは左掲の四圖である。）



お煙管ですか、雅字が紫檀の黒塗へ金蒔繪の御紋が三つ、雁首と吸口とに御紋一つ宛彫つてありました。

おあがりばし（お食事用）といふのは、柳の白い丸箸です。

おもく茶碗、其れは、お薬用のお茶碗なのです、外は梨子地へ御紋散しで、内は銀を延へたのが嵌めてある器物

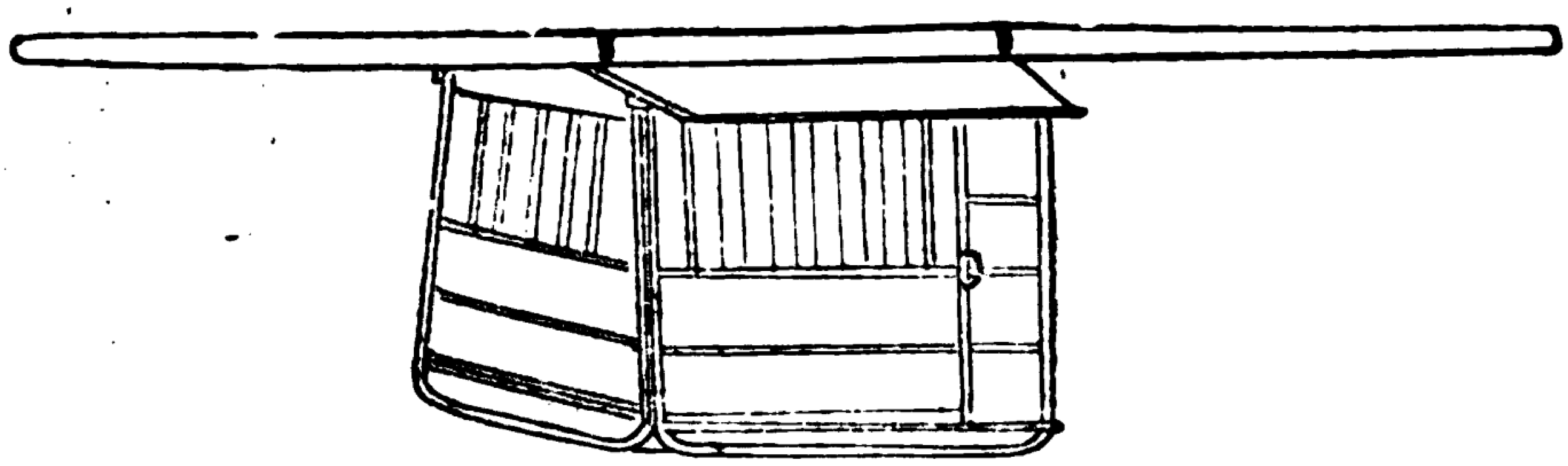


なのです、上げる時には三方へ乗せます、お薬は御薬子の間でお次の者が煎じます、御臺様へは中年寄、將軍家へは御錠口が差上げます。お風味茶碗といつて、鼠色の楽焼のやうな茶碗がありまして、差上げる前に御風味を致すのです。

暮れ方になりますと燭臺へ四十匁蠟燭をつけて持つて來ますが、上が『おわかり』とおつしやる迄は、いくら暗くなつても持込みません。五ツ(午後八時)になるとお立替を致します(蠟燭を替へるのでなく、燭臺を引替へる)、お夜詰過ぎ四ツ頃(午後十時)から、網行燈になります、それ迄は油火はありません、

御板輿寸法書

一 亏鉢ゟ棒上ゝ端迄四尺
一 総通奥行四尺六寸
一 同横物三尺
一 棒長サ丈六尺六寸



お火鉢は毎朝十幾つ、お三の間から十能へ火の起つたのを入れて持つて來ます、詰過ぎにお繼替へがあります、お側の者が(お次へ)運んで、お次ぎのものが直すのです、上の炭取はありませんが(御寢所のお側に炭取もなく、御用の炭取といふもなし)、お次の(所用)炭取はあります、黒塗の四角な箱で上に手が付いて居ます、紋は付いては居ません、其の中に少いさい切炭が這入つて居るのです、お火入の火はお次の炭取の炭を遣ふのです、朝のお煙草盆と夜のお煙草盆は、お紋ぢらしで、昔のお烟草盆はお紋がなくて、景色等の蒔繪でした、火入も灰吹も皆銀で出來てゐます、白木の箱炭取はお末などが遣ふのです。

扇子は御年寄でも持たない人が多うございました、持つにしても人の前で遣ふやうなことはありません、其の他の者は尚ほ更持たないのです、(芝居の御殿女中が銀地紙を閃めかすのは寫實でない)、上を煽ぎ申しても直ぐに宜しいとおつしやる、御自身(御寢所)では扇子をお遣ひになることはありません、昔は汗をかく者は下品としてありました、上などは極暑の時にお装束を召しても、お襦袢がしめつぽいなどゝいふことは遂にありませんでした、昔は我々でも他所へ往つて煽がれると、直ぐに辭退をして、御遠慮なくと云はれても、御免を蒙りますと云つて、屈んで鼻の先を少し煽いだものです、

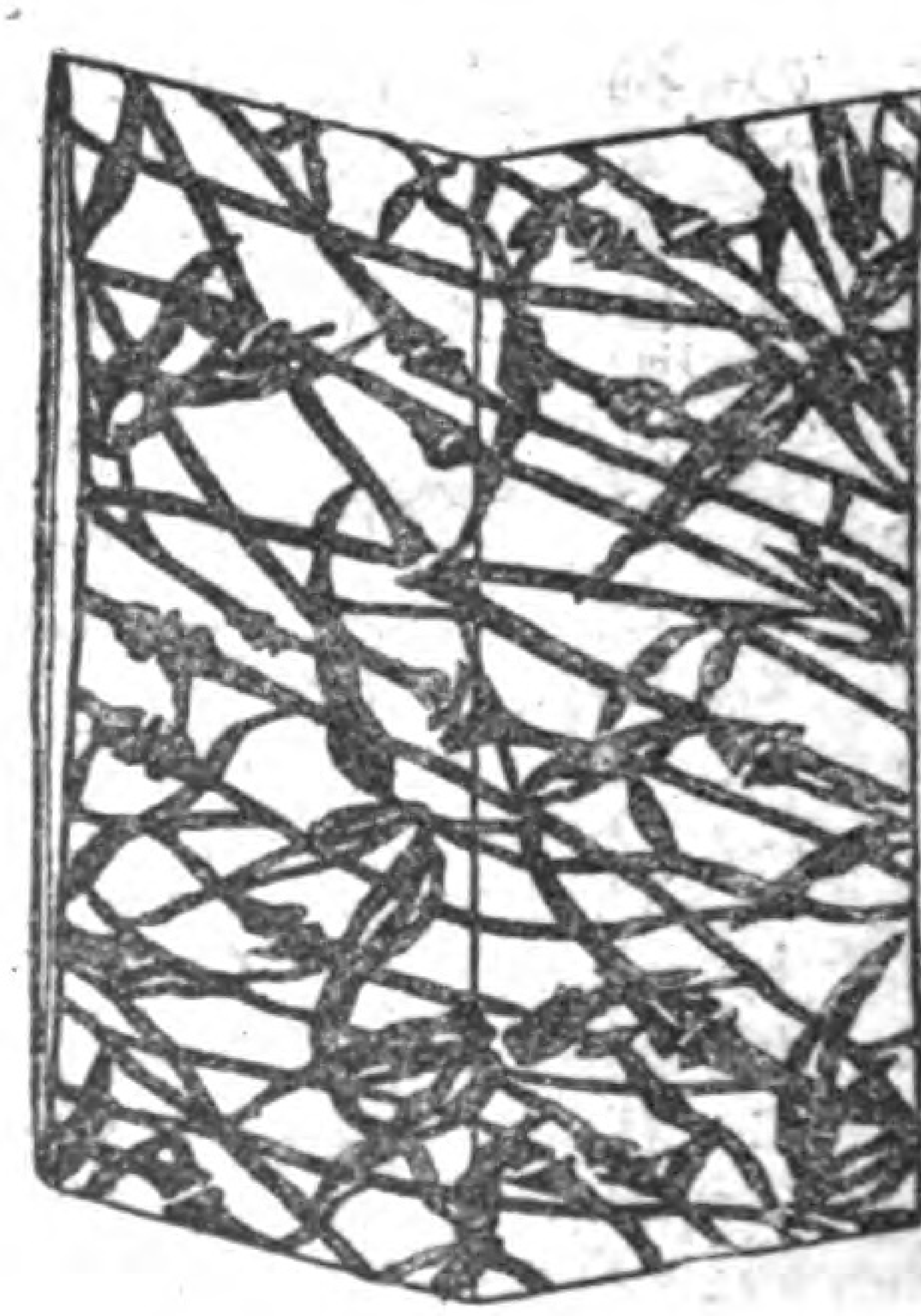
袂落しは両方が袋で、縁は縮緬、裏は羽二重です、蛇口になつて居て、紐が千鳥に掛けてあります、紐は羽二重で、両方の先が二つになつてゐて、袋の左右の側に附きます、紐の双方へ附いてゐる袋を袂へ落すから、袂おとしといふ名前なのです、袋は袂へ落し紐は懐中へ残るのです、片方の袋へは鼻紙を入れ、片方へは薬やら箸やら鋏やら、色々な物を入れます、箱せこへは何も道入るものではありません、それで袂落しへ色々な物を入れるのです。

鼻紙入



是れは鼻紙入です、御本丸のではありますまい、御本丸のならば鏡付になつて居ます、中に練絹が附い居ますが、鏡付ならば練絹でなく、(鹽瀬などを附け)匕子入があります、練絹は千代紙のやうな模様で、お細工物に遣ふために、出来てゐるものですが、裏になる處へばかり遣ひます、匕子入れは鳥や草木などを押します、是は竹の葉の筋を略して描いてありませんけれども、御本丸のお細工物は一々描いて、略すといふことはありません、それに横切れが遣つてありますが、御本丸では決して横切れなどを遣ふことはしません、(お細工物として名々に手細工をする、

鼻紙入 内側



押繪は勿論、鼻紙入匕子入を拵へて、自分用にもすれば人にも與へた)、鏡付は鼻紙で巻いて持ちます。

御用になる羽子板といふのはありません、御子供衆のある時は、『殿様奥様さんしよさま』を胡粉で書いてある羽子板を遣ふのです、押繪のはありません、羽根も鞠も吹上の織殿から調進するのがありますが、誰も羽根をつく者はありません、調進の鞠は細長い杉の柾の箱に入れてあつて、練纏で拵えたのです、箱には仕切りがあつて幾つも入れてありました、私がお次へ出た時は未だ十三でしたから、お三の間へいつては鞠を突きました、子供が尠いから鞠を突くことも極めて稀です、部屋方の者は極で善く突いて居ました。

御寝所へ飾るお守掛けは衣桁ほどあります、(神佛の御影を表装して掛ける)、お守り臺と申して目録臺ほどの大きさの臺があ

りまして、其の上へお守入れといふ黒塗御紋付の箱を載せてあります。

民間から珍らしく思はれさうなのは蟲取、蛇取でせう、蟲取はサハラの木の箱で、竪が六七寸、幅三寸、高さ五寸、四方紗張りで、下が差蓋になつて居ます、それを蟲の上へかぶせて、差蓋を閉ぢるのです、百足(むかで)などを取る道具なのです、蛇取は提げ烟草盆のやうなもので、大きさが尺か尺二寸ぐらゐ、高さは一尺五寸位、前と上とが金網で、横と下とは板です、板の方は上げ蓋になつて居ますから、上げ蓋を開けて置いて追込んで締めるのです、此の箱は提げてあるけます、二の丸に御住居の頃は蛇が多く出て来ますので、斯ういふ御道具もありました。

御守殿枕は御本丸でも遣ひます、長局(ながつぼね)では並みの箱枕では困るから、あゝいふ形の枕をするのです、御守殿風といふのも御本丸の風を持つて大名へ御入輿なさるから、先方でいふ言葉なので、御本丸では御守殿などとは云ひません、畢竟御本丸風の枕といふ訳でせう。

お櫛だゝふには歯の荒いのと細いのと、二枚づゝ三通り都合六枚道入つて居ます、黒塗の櫛は表道具で飾り物です、御常用の分は黄楊で、是だけは遣ひ込んだのが宜しいものですから古くなる迄お遣ひになります。

紅猪口は子供の茶椀くらゐの大きさの微塵唐草の瀬戸物です、紅を掃いて置いて小さい刷毛で附けます。

旦那様のお笄は鼈甲で、長さ一尺幅一寸位、厚さは六分ほど、それに花が附きます、(鼈甲の枠附の花、其の枠を笄の両端へ嵌める、枠は二つある、)笄挿しといつて銀で拵へた三角になつたものを差込むのです、笄の端だけは厚さも幅も笄だけあります、お中臈などのは幾分か短うございます 別に寸法に定めがあるのではありません、拝領すれば其の儘で遣ひます、下手の者になりますと長さも五六寸です、部屋方の者は平日硝子や木で拵へた笄を用ゐて居ました。

お爪は辰の日に取りました、其の間に取ることもあります、(卯亥巳未に爪を取るなといつて、其の日を甚だ忌み、世間一般に辰の日を済しとした、多分陰陽道に由来する禁忌であらう、)

御家流は下品だといふので、姫君様の御手本は公卿衆の書いたのが、京都から来ました、上々には別段に御書初めなどゝいふことはなく、お歌でも遊ばすことがあればあるのです。

初雷の時には梅干を食べるのが例でした、梅干の肉を少々お船へ入れて下さいます、それを披いて包んで下がりました、紙のお船は美濃紙を四ツ折にして拵へるのです、梅干ばかりでな

く、下菓子も入れました、餡の物は菓子盆です、雷鳴地震には夜中でも惣出仕と極つて居ります。

長局のくさ〴〵

女は手札（名刺）を遣ひません、（男子の手札は奉書を小短册の型に切つて、姓名を自書して遣つた、）印鑑もなく只だ請取判がありました、請取判といつても三文判同樣なもので、ゴザイに渡して置きます、（扶持方を請取る時に押すだけ故に、その手續を引受けて居るゴザイに渡して置くのである、）部屋の道具へは自分の紋を附けます、たれ部屋と紙へ書いたのを張付けて置きました、（是は自筆のこと、部屋方即ち其の使用人が書いて張附けたのには、誰樣御部屋とある、）

部屋の勘定は各々自身にします、私は瀧山（老刀自の伯母でもあり、世話親でもあり、且つ其の部屋に同居した、）が一切して呉れました、頂戴したお金も一々瀧山に渡しました、毎日の御菜の代などは、局に渡して置きます。

部屋々々の庭の手入は、御庭方が毎月一二度づゝ來ます、庭方といふのは高田の彦兵衞、三河島の七郎兵衞の人足なのです。

遊藝の師匠も上りますが、部屋々々で習ふ者は、尠うございました、お精進日でなければ鳴物は差支へないのですけれども、さうした嗜みのある者がありませんから、部屋々々に糸竹の音がしないのです。

お中﨟の湯殿は部屋〳〵のが、廊下の向ふにあります、（前號二三頁參照、）普通の水風呂を焚いて沸すのです、化粧部屋といつて別にありません、めい〳〵の座敷でします。

部屋方の疊の緣は黑です。

御膳は御年寄ならば猫足、お中﨟は三方です、局が御膳、相の間が給仕、仲居が盛を拵へ、小僧が通ひです、（是は部屋で食事をする時のこと、高級女中の生活が隨分仰山なものなのが想像されやう、共古翁が魚類や菜蔬のみならず、菓子のやうなもの迄が、部屋〳〵の買入は甚だ尠いと不審がつて居られたので、それを老刀自に聞くと）

全く尠いのです、種々頂戴物がある上に、食事も大抵は上でする故、買物をしなければならないことが多い譯がありません、（妙に仰山な暮しのやうで、脩錢の掛らないのが長局である、）

又た者（部屋方）が病氣の時は、番部屋（御使番詰所）に往き、奧詰御醫師の診察を受けて、醫師の見込に依つては宿へ下げます、お中﨟はお廣敷へ出て診察を受けるのですが、御年

寄は名指しで、誰々の診察といつて望みます、望まなければ請合ひの醫師が立會ひで診脈するのです。

吹上などへ往つた時、御年寄其の他（高級女中）が手を洗ふために、杉の葉を敷いた所が拵へてありました、（屋外手洗ひ場の設備）是は地面の上へ直かに水を灑して手を洗ふと、撥ねて着て居る白を（白のみならず、總へて衣類も同樣ながら、特に白が目立つ）汚すので、水の撥ねないやうに杉の葉を敷いてあるのです、上のは何處までもお盥お湯桶を持つて往きますから、杉の葉を敷いたお手洗ひ場を拵へなくても宜しいのです。

奥女中の花見に出た樣を描いた畫に、筥せこを挿つて居るばかりか、筥せこかんざしを挿いてあります、外へ出る時はお庭へ出るにもカラゲて出るのです、カラゲタ時には決して筥せこを挿ちません、筥せこかんざし（畫に描いた奥女中や、芝居の御殿女中の懐中から、銀の細い鎖のやうなものが幾筋もぶら下つて居る、是れが筥せこかんざしである）は大名風だといつて嫌ひました、御本丸には筥せこかんざしといふものはありません。

奥で菊合せがあつたといふのは嘘です、吹上に菊のお花合せはありました、是は鉢植でなく花壇づくりです、毎年極つて五十三間のお馬場へお植付になるのです。

加州の雪ですか（前田家から暑中に獻上する恒例）、是れはゴミだらけ泥だらけなものですが、成るべく綺麗な處を茶碗へ入れて上げます。

お買初めですか、是れは正月の二日にあるのです、一間ほどもある臺へ海の物、山の物を盛り上げてあります、お食料一切を買入れる譯で、お掛屋といふのが御廣敷の外にありまして此のお掛屋のことを民間ではお納屋（なや）といひます、其の方で調進して御廣敷の内にある御膳所を經て、奥の御膳所から御前へ出すのです、其の間に役々の手を通ることは勿論です、御廣敷の御膳所には味噌をする部屋がありました、極細い目の金網が張詰めてあります、奥の御膳所の下た働きをする仕組になつて居るのでした。

福茶（ふくちや）は大福と申して大晦日ばかりでなく、正月三ケ日にも上げました、五月の菖蒲酒も上げました、菖蒲湯にもお這入りになります。

奈良臺は奈良臺子といふのが本當です、今遣ふ結納臺のやうなもので、眞中に糸花があつて、糸花の下に奈良人形の尉と姥（うば）とが置いてあります、是れは蓬萊臺なのです。

鮮鯛といつても生ではないのです、干をセンと讀なのです、干鯛（ひだい）箱は二尺ものでした、足のある檜の白木で拵へた箱で、蓋も

附いて居ます、目張かしてありました、それを一箱とは云はずに一折と云ひます、一臺といふと足附きの白木の臺へ載せたので、臺へ載せたのには蓋はありません、熊笹を敷いた上に魚が並べてありました。

舊事諮問錄に御附御中﨟が、天璋院樣の御酒の御相手をして醉つたなどといふのは、有るべき筈のないことで、其の場で御杯を頂くことが無いばかりでなく、お下を頂くのは御年寄か中年寄です、其の他の者は頂けません、お流れ頂戴も表使までゞす、表使は役人なのですから頂戴する譯でした。

御廣敷入口は坂下御門（赤い門）の突當りにありました、（天璋院樣は西丸にお住居であつた、それ故坂下御門から御表御門、御切手御門、お廣敷御門といふ順になる、一重橋の方から這入れば直ぐに御切手御門である、西丸は天保九年三月に燒け、又嘉永五年五月に燒けて居る、嘉永の御普請の西丸へ天璋院樣が御住居になつて、それが文久三年六月に燒けたので、天璋院樣は二の丸へお移りになつたが、同年十一月十五日に其の二の丸も御本丸と共に炎上した）、我々の偶箇で出る口（下御廣敷）にも七つ口にも松飾りはありません、惜には云はれませんが、御本丸の松飾りには橙がついて居たと云ひます、誰ぞに聞いて御覽なさい、（是は老刀自の覺へ違いで、橙はなかつたさうだ）、

桔橋（はねばし）は西桔橋と北桔橋と二所ありました、西のは吹上の通路でしたが、北桔橋は御葬式の時に卸すだけです、釣つてある橋も錆附いて居て容易に卸されないのに、その北桔橋を越へて、御金藏へ泥坊が這入り、古金五百兩ほど盜み出して、おでん燗酒賣になつて一年半も隱れて居ましたが、遂に召捕られたといひます。

我等は只た是だけを聞き得たのであるが、老刀自から聞いた數多い話の中で、初耳でないのは此の御金藏の泥坊ばかりなのだ、さうして御本丸の北桔橋が、今更のやうに、我等の注意を惹いた、此の泥坊については我等も氣を附けては居たが、別に事件を詮索したことゝもない、だがその大筋だけは知つて居る、何にせよ將軍の居城へ泥坊が這入つたのである、鼠賊などに犯されては公方樣の御威光にも拘はる、數多い門番、書院番に大名旗本御家人が勤務する、三重四重の警戒を犯した、其の大膽なのには誰も仰天しない者はなかつた、從つて世間の評判は大變であつたけれども、場所柄だけに憚つて、詳しいことが傳はつて居ないやうでもある。

御金藏へ泥坊が這入つたのは、安政二年三月六日のことである、此の泥坊が北桔橋から浸入したとは、老刀自のみでなく何間でも云ふことだ、然かし千代田城の側面から浸入したには違

いないが、實は矢來御門から西拮橋、それから中の御門、埋御門を經て城の前面へ廻り込み、遂に御金藏へ行着いたのである、御金藏の位置は堀を隔てゝ内櫻田御門と向ひ合つて居た、決して北拮橋から侵入したのではない。

此の泥坊は安政四年五月十三日に、小塚原で磔になつた、犯人が受刑に先立つて江戸中を引廻しになつた際に、例の紙幟に斯う書いた。

野州犬塚村無宿
入墨　富藏　巳三十三
上槇町清兵衛地借
藤十郎　巳三十七

此者共儀困窮に迫り惡心出し、去々卯年二月以來、八重の御構を乘越し、重き御場所の御土藏え忍入、御金箱二千兩入二箱盗出し、右金子四千兩兩人にて配分いたし候段、公儀を不恐入仕方、重々不屆至極に付、兩人引廻の上、磔に行ふもの也、

巳五月

此の藤十郎は嘉永五六年の頃に江戸へ出て來て、安政元年に田安家のお小人（奥女中の外出に乘物に附き、諸役人のお供をする役目）の株を買つたといふから、江戸生れでない、江戸時代には株の賣買によつて武士の分限が得られた、勿論輕輩に限つたことである、是には色々な内規もあつた、だが武士の分限を買得するといふよりも、俸祿を買得するといつた方が正確なのであらう、藤十郎は田安の家來になつて、藤岡藤十郎といふ武士になつた、しかし小人の俸祿は十五俵一人扶持なのだ、二た口合せた一年に七石八斗の現米しか貰へない、彼は處刑の當時五十七歳の母りよ、十九歳の妻みな、十四歳の養子戸三郎と一家四人であつたが、養子は安政三年に貰つたといふ、さうなら泥坊を働いた翌年に貰つたのだ、妻も泥坊をした後に貰つたのであらう、最初は母と二人だけだと思はれる、貰ふ米は七石八斗でも、食料を引けば賣る米は六石しかない、當時の江戸相場にすれば一石二兩の十二兩、今日の正米相場にしても一石四十二圓見當に過ぎぬ、だから二百五十二圓の年收だ、月割にすれば十二圓、屋敷内に住んで家賃の心配はないが、母と二人で暮す藤十郎の家計は推察に餘りある、何時だつて算盤は同じことだ、藤十郎は小人目付に昇進した、けれども僅な役金が給與されるだけで、固より家計を緩和する譯でもない、藤十郎は夜な〳〵おでん燗酒賣に出た、田安右衛門督慶賴卿（家達公の父御家來藤岡藤十郎といへば、如何にも物々しいが、天秤を擔いで、おでん〳〵おでん暖かいと賣つてあるく、御家人の夜賣、武士の裏表、斯うしなければ生きて居られないのである、慶應

に成功した倒幕運動も、實に窮迫を極めた諸大名の家來共の機運から發生したものだ。

富蔵は入墨敲き放しの處刑を受けて居る、其の入墨を燒き消して、御天守番御（天守は北拮橋の近所にあつた）を勤める某の中間に住み込み、弘化元年五月十日の曉に御本丸が燒失した、其の際に御本丸の正面背面の狀況を詳しく覺えた、彼は安政になつて主人方をヅラカツタといふが、泥坊を働く當時まで勤續して居たらしくも思はれる、富蔵は燗酒やおでんが媒介して藤十郎と懇意になつた、心安くなつて富蔵は、何時まで燗酒を賣つて居たつて、只だ年が寄るだけのことだ、俺は一生安樂に暮す法を知つて居る、だが一人では出來ないことだ、お前も樂がしたいなら相棒になつて遣る氣はないかと持ち掛けた、藤十郎は苦しければこそ、折角兩刀を帶する身分になりながらも、おでん燗酒を賣つて居るのだから、それは何よりの法だ、私で遣れることなら、是非相棒にして貰いたいが、其の法といふのは一體どういふ事なのだらうといつた、富蔵は二つとはない結構な法だ、話を聞いて逃げられては溜らない、必ず相棒になると極めてゞなければ話されない、聞いてから否應を云へば即座に殺して了ふが、それも承知かと念を押した、富蔵は散々藤十郎の腹を据へさせて、一生安樂に暮す法といふのは、先年御本丸炎上の時に存分勝手は覺へて居いた、其の御金藏から金箱を擔ぎ出すのだ、お前は一處に往つて其の金箱を持ち出す手傳ひをすれば好いのだ、萬事は俺が働くと打明けた、藤十郎も吃驚はしたが、度々といふではなし、一度の稼ぎで生涯安樂に暮らせるのだと合點して、愈々兩人一處に忍び込むことになつた、二月四日の夜、紅葉山の裏手の矢來御門の柵を乘越し、二人は城内へ忍び込み、藤十郎を西拮橋御門の石垣の際に待たせ、富蔵だけが御金藏に忍び寄り、御戸前の錠を紙へ寫して來た、それから合鍵を拵へて往つて、銅庫や土戸の合鍵を拵へるために、前後四度潜入した上に、三月六日の夜、五度目に御藏から小判二千兩入を四箱と、銀子入一箱とを盜み出した、けれども二人で五箱は持てない、それで二千兩入二箱だけを擔いで埋御門迄來たが、物を持たなければ御門々々を乘越せるのだけれども、千兩箱を擔いでは流石に乘越せない、其處で埋御門の潜りの貫抜を外から開け、中の御門も同樣にして通過し、西拮橋御門では藤十郎を先へ下して置いて、御門の家根裏の腕木へ細引を掛けて金箱を釣下し、二人は矢來御門の柵を破つて逃走した、さうして此の金を千二百六十五兩、富蔵が取り、殘り二千七百三十五兩は藤十郎が持つて居た。

藤十郎は御金藏へ潜入した翌年（安政三年）の春、田安家へ

御暇を願つて町宅へ移り、幕府の御材木御用の下受をするといつて、御作事方の大棟梁天野榮助へ取入り、御用と書いた高張提燈を自宅の入口へ飾込み、材木の買入を初め、それと共に金貸もした、然るに幕府は御金藏の盜について、威信に關する重大事犯であるから、探索は嚴重にするが一向犯人が知れない、小判五兩以上遣ふ者があつたら早速訴へ出ろと國々まで觸れを出して置いた、富藏は其の後加賀へ往つて居たが、一度に小判で三百兩支拂つたので足が附き、直に捕縛され、其の白狀に依つて委細を江戸へ報告したので、二月廿六日上槇町の自宅へ南町奉行内藤紀伊守手附の與力同心が踏込んで、藤十郎を捕縛したのである、安政二年三月の事犯が滿二年經つて、同四年二月に捕へられたのだ。

此の一件を今日まで忘れさせないのは、明治十八年十月千歲座で、河竹默阿彌の新作四千兩小判梅葉が上演されてから、屢々複演されるからである、明治になつては何の遠慮もない御金藏の泥坊譚も、幕府の治下では大に忌憚すべき譯だ、當時に聞きたがり、話したがられた事件であつたのに、傳はる分量の甚だ尠いのも、官憲の目玉が光つたからである、默阿彌も安政六年二月、市村座の新狂言に鬼薊淸吉を書いて、其の中の俳諧師月岡白蓮實は盜賊大寺正兵衛といふのが、金貸をして居る泥坊なのだ、是は藤岡藤十郎を持込んだもので、科白にも四千兩云々といふことがある、しかし大入大當りの最中に、當て込みの祟りで、觀面に興行禁止を命ぜられた、此の時は富藏藤十郎所刑後、まだ一年有餘なのだ。

斯ういふことは時代の人ではあつても、老刀自の談話に妙味もないなど丶思ふ下から、頗る有力なのもあることを思ひ出す。

上樣が蒸汽船で御上洛なさらうとした時、天璋院樣が大變御心配なすつて、越前の春嶽を召して、御申聞けがありました、慶喜公の御相續になるのを太分お嫌ひになつたやうでした、大阪から急にお還り（鳥羽戰敗の後に急遽歸東）になつた時には御假立の西丸、天璋院樣の居らつしやる處へお這入になつたのですが、御逢ひがありませんでしたが、再三御申解けがあつてから御對面になりました、天璋院樣は餘程お違ひなすつて居らしつたやうです、他の御方々のやうなことはありません。

慶喜公については我等は大に書きたいこともあるが、爰では到底盡されぬ、軍艦で上洛するといふのは、家茂將軍の初度の上洛の際で、文久三年二月九日、御軍艦にて御上洛遊ばさるべく旨、仰出され候處、御都合有之に付、來十三日御發駕、東海道筋御上洛遊ばさるべく旨仰出され候と達した、此の月二十

六日海路上洛と發表して、既に準備も整つて居るのに、何故に陸路に變更されたのかと不審して居たが、天璋院殿が海上の航行を不安に思はれて、政事總裁職松平慶永に對して抗議された爲めに、此の變更を見たのである、是は我等だけかも知れないが初耳であつた。

天璋院樣は瓦壞（明治元年）後、一橋の御屋形、それから靑山の紀州屋敷、それから外山屋敷（尾州下屋敷）、それから赤坂の相良屋敷、それから千駄ヶ谷（現在の德川公爵邸）へ御移りになりました、私は二十一の時（慶應二年）に御暇になりましたが、御手當御合力を辭退して、瓦解の時まで御附き申して居りました、（老刀自は安政五年に十三歲で入仕し、十ケ年御奉公をしたのである）。

上（家定將軍）はお覺へがよいもので、父がお小納戶を勤めて居りましたので、忠右衛門の娘がなど丶おからかひなさいました。

御本丸へ上がる時に親が拵へて呉れた春慶塗の重ね簞笥は一兩二分でした、それを今日まで遣つて居ります、白木の簞笥といふものを當時は遣ひませんでした、錢は一朱（一兩の十六分の一）、一朱銀といふ銀貨があつた」に四百二十四文がへでした、（錢相場があつて時々に高低した、一朱に四百二十四文ならば、一兩には六貫七百八十四文である、一文は小さい栗の寬永通寶一枚なのだ）、町の髮結は三百文、二百文、百五十文、五十文と、上手下手に依つて等級がありました、人に錢を遣すのに蕎麥一組と云へば二朱、蒸籠一組と云へば一分（一兩の四分の一）やる譯でした、包んで遣る紙にも、さう書いて遣つたものです。

老刀自は大岡忠右衛門といふ御小納戶衆の家に生れた、其の屋敷は四谷だつたさうだ、御小納戶衆は將軍家の御身邊の用事を承る役柄で、五百石高、御役料三百俵頂く、千二百石の人も此の役を勤めて居るが、五百石より尠い者が任命されると、持ち高が何程であつても足し高を下されて、五百石になるやうに補足された、大岡家は二百俵だつたと聞いてゐるから、無論お足し高を貰つたのである五百石といへば實收二百石なのだ、五百石の米が穫れる領地を持つ者は、四公六民といふから三百石は農民が取つて、二百石は領主へ納める勘定、此の割合は土地に依つて同じでないが、大抵四六を以て定率とした、二百俵を四斗俵に換算すれば八十石に爲り、二百石は五百俵であるから、大岡家は四百二十俵の加俸を受ける勘定である、御小納戶にたると身上が三倍有餘になるのだ、忠右衛門の先代は子女が多く、二百俵の身上では骨が折れた、瀧山さんは其の貧乏の中で育つたのと、生れ附きも太分締つた人であつたので、八歲の時から手

内職をして、親から小遣錢を貰つたことがなかつたといふ、やがては御本丸へ御奉公に上がつて、御年寄になつた、弟忠右衛門を引立てゝ御小納戸にもしたのである、老刀自にしても五百石の格式と收入とある大岡忠右衛門の娘として、一兩二分の春慶塗の箪笥を持つて御奉公に出た、嘉永安政の江戸には五兩十兩の箪笥が出來合にもあつた、黒塗のもあつた、家計が稍々裕かになつても、春慶塗の箪笥で通す處が其の日常の生活振りを十分に説明して居る。

嫁入の準備に御奉公に上がつて、低級女中となり、又たは部屋方に勤める民間から出た女共は、分限は輕いが何も彼もが榮耀に過ぎぬ、それとは違つて晴々しい身柄の高級女中は、懸命に立身出世を心掛ける、それが榮耀に誇り、權威に驕らうとするのではなく、自分を救ひ、親兄弟を救ふための志願なのだ。一生不犯を誓つて迄も御奉公を續ける、民間から上がつた女共が、數年の御奉公中を、美しい〳〵夢のやうに過すのとは何程の違いなのか、同じ人間とは思はぬほど境涯を異にして居る、其の違いが武士と町人との差隔なのだらうか、御年寄とか御中﨟とか云はれて、ナガを掛けたり、間を置いたりして、猫足や三方で食事をする、其の人等は貧乏な親兄弟に世話を掛けたくないから御奉公に出たのだ、奇麗な極彩色の畫のやうな高級女中は、實に武家の貧乏の表示であることを心附いた時に、我等は世間に是程悲しい事はないと思つた。

太陽の御座敷に引越して

佐々木指月

一

さて、これは、太陽の御座敷にゐて書く文章である。

人世は、もう、どうでもいゝと云ふことになつちまつた。なにしろ暑くてたまらない。えゝと今日は何日だつけな。丁度、座右に新聞はなし、何日でもいゝや、何でも、八月一日は

五六日前だつた。

太陽の御座敷と、だしぬけに云つたのでは、何のことだかわかるまい。火の玉のなかにでもゐるやうに思はれては、この文章を讀む人にこちらの心が通じない。

太陽の御座敷と云ふのは、なにも不思議なところではない。サン、パーラーのことである。サンは太陽で、パーラーは御座敷だから、だから太陽の御座敷と、これを譯したまでゞある。凡てものは云ひやうで、くだらないことでも、云ひ方によつては人をびつくりさせる。文章などと云ふものは皆かうしたものだ。

そこで、本文に立ちかへつて、では、サン、パーラーと云ふのはどう云ふ御座敷かと聞かれると、こいつは少しく說明を要する。先づ手短に云へば、それは日當りのいゝ御座敷のことだ。私の今ゐる、サン、パーラーは、川に近い、アパートメントの五階目で、西北に向つたパーラーは一面の硝子張りだ。かう書き立てて見ると、何んだか金魚でも住むところか、人形でも入れて置く箱のやうにきこえるが、決してさう云ふところぢやない。元來、西洋の家と云ふものは、籠のやうなもので、四方を壁でかためて置いて、それから窓を穿つのであるが、この、サン、パーラーは、窓を座敷の主にしてゐる。窓も窓、大きな一面の窓——と云ふと、話は大袈裟だが、障子のはまつた日本の御座敷と思へば何のこともない。全くね、西洋人から見たならば、日本の家の御座敷は、窓ばかりのやうに見えるにちがひない。

ところが、このサン、パラーはその一面の大きな窓が、日本ならば美濃紙の障子でもつて、軒にかかつた鳥籠の影でも映らうと云ふところであるが、西洋と來た日には、こんなところは殺風景だ、硝子張りだからやりきれない。しかもその窓が、西北に向つた方ばかりでなく、南にまはつた方にもある。午後も三時をさがつて來ると、日は兩方の窓からあたる。座敷のなかに陰と云ふものは、まるで無くなる。太陽の御座敷とはよくも譯した。いくらこの都合は、日光と空氣の代價をも拂はなければならぬと云ふものの、かう、ふんだんに日光に射し込まれては、これまたやりきれない。これでは火の玉のなかにゐるのとさした違ひはないことになる。かてて加へて今は夏のまつ盛りだ、八月の今日は、ええと、六日かな。

滿堂風を孕む、なんて、詩にでもよむときには、如何にも涼しいやうであるが、かうした太陽の御座敷で、滿堂風を孕まれた日には、そこらの戸は明いたりしまつたりばたばたするし、机の上のものは皆舞ひ上るし、かうして書いてる原稿用紙

は、まるで生きてる魚でも、おさへつけてゐるやうである。ぱたぱたとはためいて、ちよつと手でも放さうものなら、例の窓から飛び出して、往來の上をどこまで、泳いでゆくかわからない。

尤もこの大きな窓へ、私は日本の簾を買つてぶらさげた。何しろ窓が大きいのだから、ちつとやそつとの簾では間に合はない。このニウヨルクに片桐と云ふ日本人の雜貨店があつて、たしかそこに日本の簾が來てゐたと覺えてゐたので、出掛けて行つてきいて見ると、あるにはあつたが品物は揃つてゐない。私が欲しいと思つた竹の簾は、なんにもかんにも二枚しきやない。二枚ではとてもどうにも仕やうがない。せめて八枚はいるのだがと、私が嘆いたものだから、片桐の番頭さんが氣の毒に思つてくれて、電話でもつて、ニウヨルク中の日本雜貨店、十何軒を尋ねてくれたが、やつぱりどこでも品切れだつた。そこで座敷には暗くなるが、蘆の簾でもいゝと思つて、それはあるかときいて見ると、それならあると云ふことで、竹の簾を三枚に、蘆の簾を五枚買つて、いよいよそれを窓へ掛けると云ふことになつた。

さあ、近所隣りではびつくりした。

『マーマ、御覽よ、あすこの、土耳古人の家では、妙な窓掛をかけてゐるよ。』向ふ側の往來にあそんでゐる女の子が、こちらを仰のいて見ながら話してゐる。

なる程ね、西洋の子供の目から見たら、これが妙な窓掛に見えるだらうが、土耳古人の家とは少々恐れ入つたな。尤もこの邊は土耳古人の巢だとは前もつて聞いてはゐたが、さうした所に引移ると、こちらもその仲間と見えるのか知ら。いや待つてくれ。然しかう考へてはあまり自惚が強過ぎるかも知れない。ことによるとあの子供は、今度はあすこの家へ支那人の下男が來たぐらゐに思つてゐるかも知れない。或はちつともそんなことは思つてゐず、窓掛だけが目に見えて、私などは目にもとまつてゐないかも知れない。だが何もこれが必ずしも、大日本帝國の忠良なる臣民と見えなければならないと限つたわけのものではない。そんなことを云つた日には、日本に行つてゐる西洋人なんか、どこ人と見られてゐるかわかつたものぢやない。

簾を掛けるに半日かゝつた。そのかはり八枚とも、上に小さな庇をつけて、紐でもつて卷きあげるやうな仕掛にした。すつかり掛けてしまつてから、どんな工合に見えるか知らと、私は外へ出て見たが、何しろ五階目のてつぺんなのだから、往來から見たところでは一面に簾を張つたやうに見える。たゞ一つ簾の外へ掛けた風鈴が、風にゆられてちりんちりんと鳴るその音が、

はるかはなれた方までも私の耳を追ひかけて聞こえてくる。衣は提灯が欲しいなと私は思つた。紫の桔梗の花でも描いた岐阜提灯でも掛けたら、さぞよからうと考へた。

何は兎もあれその日から、私は一つの氣苦勞を取りのぞいた。と云ふのは別な話でもないが、この太陽の御座敷に引移つてからと云ふものは、晝の日中も夜の夜中も、うつかり裸になることが出來ない。さあ近邊に高い建物と云つては、ここの直ぐ前の、赤い煉瓦のアパートメント一つだが、何しろこの太陽の御座敷は、硝子張りの見透しの家なのだから、なかで何をしてゐるかゞ、外からちやんと見えやうと云ふものだ。暑いからと云つて、日本流に褌ひとつにでもなつてゐやうものなら、大變な苦情を持ち込まれなければならない。だが、夜ならば家のなかは暗からうと思ふとそれが間違ひで、この太陽の御座敷は夜でも明るい。明るいはずだ。それが丁度西北と西南の街角に當つた家なので、その街角には明々たるアーク燈が、晩から朝まで光つてゐるので、それが窓の硝子に殘らず反射するので、いや驚いたね。風の全くない晩でも、うつかり踏み脱いで寢ることも出來ない。たゞ一ケ所、浴室だけは擂り硝子になつてゐるので、朝晩衣服を着換へるにも、ちよつと靴下を取りかへるにも、一々その浴室へ出たり入つたりするわけだが、少しくらゐ、膝小僧や尻つぺたが出てゐたつて、隠したがれと云ふおやないし、それを見て、さう何も迷惑がらなくつたつていゝではないか。西洋と云ふところは、全く手數のかゝつたところだ。しかし、かうしてなかから簾をかけてしまへば晝間だけは、請合ひ、外から透いて見える氣づかいはない。たゞまだ少し心配なのは、暗くなつて、座敷のなかに灯がともると、晝間と夜は、あべこべで、今度は外から中が見える順になる。簾にうつる影法師、なぞと、唄の文句にありさうな場面だが、その影法師が臍の垢を取る圖だつたりなんかしては、見るものは眼をつぶすことだらう。序だから云ふが、日本では臍の垢をとると、あとで腹が痛くなるとか云つて、私なぞは子供の時には、臍をほじると母親に叱られたものだが、西洋へ來てからのち、或る日或るところで、或る人に臍を見られて、垢が黒く御臍のやうにたまつてゐるので、大ひに怒られたことがあつた。

餘談はさて措き、簾の情趣は、何んと云つても日の暮れかた。西日が、かう、ぱつと一ぱいに射しかけて、竹の簾も葦の簀も、その竹が一本一本光つて見える時になると、壁にも床にも、だんだらの影がうつつて、座敷のなかゞ一しきりこの都會からかけはなれる。竹の簾からうける感じに、どこかの古御所の跡へでも來たと云ふやうな感じた。紺の袴の女が、床から眉

えた海の穂末に立ち現はれて、半破れた團扇に顔をかくして、けら／＼と高笑ひしたと思へば影もない。葭簀の方から來る感じには、これはまたぐつと俗にくだけて、番茶の煮出しに、西國巡禮の白腰卷に、馬の沓。ついそこに簀越しに見えるマンハツタンの街並みは、廣重の木版の東海道五十三次だ。私は、正面の西北の窓の中程に竹の簾を三枚かけて、その兩側に葭簀を一枚づゝ掛けて、あまりの葭簀を三枚ならべて西南の窓にかけたが、往來の向ふ側に靑い葉の木立があるので、それが簀から透つて見えて、なか／＼面白い。遊びにくる西洋人の客たちも、葭簀の方を賞翫する。

さてかうして、自分の窓へ簾をかけて、その目で、外の家の窓の、レースのカーテーンを眺めると、どれもこれも腰にそまつて、くたくたになつて、汗をかいた女の肌着でも吊したやうによじくれてゐる。こんな埃だらけな都會のまんなかで、白いカーテンなぞをさげて置かうと云ふのがそも／＼間違つてゐる。それよりか、夏は簾、冬は障子。これで疊があれば申し分ないが、かう日本から離れては、疊はとても得られない。

だが今日は、この太陽の御座敷は、少し風通しが好さすぎる。簾と云ふ簾がみな、支那海を渡るジヤンクの帆のやうにふくらんで、窓框の上側からぶらさげた風鈴は、硝子だからたまらない。ちんがらちんがらと、今にも碎けて落つこちさうである。私はその御座敷のまんなかにゐて、圓いテーブルに向つて書いてゐる原稿用紙を、ひら手でぴつたりおさへつけて、髮の毛はもぢや／＼と舞ひ上るし、今にも、氣でも狂ひ出しさうである。

□

さて、世の中に何が馬鹿らしいと云つて、往來の步道の角に立ち伸びて、ラヂオを聞いてる人の顏ほど、とんまに、まぬけて馬鹿らしいものはない。

まさか近頃、そんな人もあるまいが、ラヂオと云ふと何んだね？と聞かれると、こいつは困つてしまうね。ラヂオと云へば、先づ、無線電話とでも云つて然るべきものだらう。無線電信のやうにトントンツーと音で響いてくるのぢやない。いや、音で響いて來るのには違ひないが、トントンツーとは響いて來ない。唄ならば唄。話ならば話のまゝで、大空をつたはつて響いて來る。

響のもとは、蓄音機へ唄を吹き込む、あの仕掛と變りはない。それが電波になつて八方へひろがるやつを、こちらへ張つた、空中線が導いて、小箱のなかの、とぐろを卷いた針金が感

受する。米突を合はせる仕掛が箱にあつて、それを卷き上げれば遠くの發音所のが聞こへるし、卷き下げれば近くの發音所のが聞こへる。

ラヂオの箱を持つてる人のところへは、ラヂオ會社から、毎日のやうに、その會社のラヂオ番附を送つてよこす。今日の何時何十分には、ニウジャージーの、どこそこの發音所で、何と云ふオペラシンガーが何を唄ふ。今晩の何時何十分には、ペンシルヴァニヤのどこそこで、何組のオーケストラが何を奏す。また何時何十分には、どこそこで、何んとか女史が何んとかの講演をやると云つたやうに、その時々のラヂオ發音所と、發電の時間と、演出する曲目とがそれでわかる。

晩餐のあとなどに、電話交換所の交換手が掛けてるやうな受音機を耳へ掛けて、箱の米突を卷き上げたり卷き下げたり。

『やあ、聞える聞える。やあ大騷ぎだ。皆が喝采してるら！』

『ははア、こいつは面白いや。』受音機から聞くやつは獨合點だ。はたにゐるものには何が面白いのだかさつぱりわけがわからない。

『どれ、貸しな。』

『まあ、待ちな。』

喧嘩のもとだ。

だが、普通の蓄音機のやうに、箱へ喇叭を取りつけて聞くやつは、響は、ぱつとして來るが、傍は皆にきこえるから、喧嘩にはならないが、そのかはり皆、馬鹿になる。隣はこゝにゐても、魂は百里もさきのラヂオ發音所へ引きつけられてしまうのだから、その顏と云つたら見てゐられない。目だまを上へつるしあげてしまつて、河豚の提灯のやうな顏になる。

それもだ、家のなかで聞いてるやつはまだいゝが、ラヂオの箱を賣つてる店舗の、前へ突き出した喇叭のこなたへ停んで、揃ひも揃つて、さうした顏をぶらさげられては、氣がつかずにそこへ來かゝつたものは、おや、あの連中どうかしたのか知らと、不思議に思ふ程である。

殊に近所迷惑なのは、夜中のラヂオだ。誰でも知つてゐる通り、このニウヨルクとシカゴでは、時間が一時間程ちがうのであるが、夜になると、シカゴのラヂオがきこえて來る。然しシカゴは十二時でも、こゝはもう朝の一時だ。いゝ氣持で寢てゐると、何かがやがやと耳もとへきこえてくると。目をさまして見ると、やつてる。直ぐ下のアパートメントで宵の口から寢ずにゐたか、それとも、皆起き出したか？家中が總立になつて、ラヂオが奏すオーケストラの音に合せて、ダンシングをやつてゐる模樣である。月の光にほだされて、森の梢や野の梢が輪

になつて音のないダンスを踏むと云ふことは聞いてゐたが、夜中のラヂオに飛起きて、うぬが女房をかゝえたり、兄の肩にぶらさがつたりして、跳まはつたところで何が面白いのだらう？あれが文明人の娯樂とすれば文明人は氣違だね。

實はこちらは蓄音機でも買つて、義太夫や新内のレコードでも取寄せて、その昔、吉原では、引け過ぎの新内の流しをきいて、それの音色につまされて、心中をするものがふへると云ふので、一と頃あれは法度になつたくらいなものださうだが、それだけあつてどうもあれは好いからなア、それでも鳴らして、日本に向いた西の空に、月の落ち入る眞夜中を、すつかり、かうしんみりとした氣分にでもならうかと思つてゐたところなのだ。それは全く嘘ぢやない。長年からして西洋に來てゐるとたまにどこかで、新内に限らず、義太夫のさはりでも吹き込んだレコードでも聞くと、わけもなく感激しちまう。何んと云つても離れた國の音樂ほど心の底に泌み込むものはないからね。ましてやそれが、名曲だつたりした日には、とめどもなく涙が流れてくるものだ。

だが、私はその蓄音機も見合はしてゐたと云ふのは外でもない。その音が窓からもれて、西洋人の耳に入ると、義太夫なぞは喧嘩でもしてゐるのではないかと間違へられたり、新内なぞは誰か病氣にでもなつたのかと見舞に來られやしないかと、それを案じてゐたためだ。こちらではこのくらゐ近所の手前をえん慮つてゐるのに、どうだらうあの騒ぎは、えエッ？こちらは一階上だから、まだいゝとして、下になつたアーパトメントは驚いてゐるだらうなア。よくまあ苦情も持ち込まずにゐるものだね。それともラヂオと云ふ名前に對して敬意でも拂つてゐるのか知ら？ことによつたら、下のやからも上つて來て一緒になつて、あの騒ぎをやつてゐるかも知れないな。

なにしろこのラヂオが流出り出してからと云ふものは、蓄音機はすつかりすたつた。尤も蓄音機と云ふやつは、何んとなく氣ぜはしいものだ。すつかり聞き惚れて感心してゐながらも、だん／＼回るレコードが目に見えて、やつとこどつこいしよと、重いお尻を立てなければならない苦勞が伴ふが、ラヂオと來ては、そんな苦勞はさらにない。聞きながら寢てしまはうが、聞きながら便所に行かうが、まさに歡樂の盡きると云ふ時がない。そればかりか、蓄音機だと明けても暮れても、いつも同じ曲よりほかは聞けないが、ラヂオだと毎日のやうに番附は、とりかへ引きかへ變つてゆく、それでゐて安いのだと二十弗のから三十弗 普通のところが五十弗と云ふお金で、その機械が買えやうといふものだ。シカゴのオペラが聞こえると云ふやう

なのになると、二百弗ぐらいからある。御亭主が毎晩夜遊びに出掛けるので、女房が氣をきかして、クリスマスのプレゼントにラヂオを買つてあてがつたところが、今度は亭主どの、すつかりそれに夢中になつて、女房などはふり向いても見ないので、女房とう／＼怒つてしまつて、離婚の訴訟を起したといふ珍談もある。

たゞ一つ困つたことは、このラヂオは、それを導く空中線を屋根の上へ掛けねばならぬことである。それがために近頃の、ニウヨルク界隈の、無論シカゴあたりでもさうだらうが、アパートメントなぞの屋根と來ては、ラヂオの空中線を、あちらへもこちらへも張りまはして、大さに美觀を損じてゐる。夕方なぞはそのうしろから、例の間抜て膨んだ月が出ると、その空中線が、まるで蜘蛛の巣のやうに見える。本職の蜘蛛の身になつたらば、人間と云ふやつは、たしかに不思議な活物だ。針金の網を屋根へ掛けて、空から音樂をつかまへる、とでも思つてゐるかも知れない。

それはまだしも最近では金持の奥方連が、日傘のなかへ空中線をしかけて、握つてゐるその柄からラヂオを聞くといふ有様だ。

『あら奥様どちらへ？』

『えゝ、ちよつと散歩なの。』

『あら奥様つてば、いやな方。往來で唄なんかおうたひになつて。』

『おほゝゝゝ。あなたの耳がどうかしてゐるのよ。』

『だつて奥様？あらまたおうたひになつたは。』

『あなたそれは幻覺病よ。』なぞと人をおどかして、奥様は大悦だ。自働車のなかへラヂオを仕掛けて、走りながら聞くと云ふやうなことは、もう流行おくれだ。これにいつも自働車に幌をかけてゐなければならないので、夏向きは如何にもあれは面白くない。

實際近頃のアメリカは、何んでもラヂオ、かんでもラヂオだ。ラヂオでもつて有名な坊さんの説教もきけるし、ラヂオでもつて大學の博士の講義もきける。これはちよいと、おつぢやないか。國禁の酒をちびりながら、しなだれかゝつて來る美人を抱き込んで、天國の福音を聞くことが出來る世の中になつたんだぜ。清濁併せ呑むと云ふことは、昔は男の胸三寸にあつたのだが、今ではラヂオの作用になつた。ベットに寝てゐて勉強も出來るし、湯浴につかりながら、今日のニュースも聞かれるといふものだ。

それにしてもこの深夜に、あゝいつまでもぶう／＼ばた／＼

やられてたかなはないね。なんとかかう東京市の電車のやうに、夜分は十二時限り、ラデオを用ふべからずとでも、法律でもつてきめて貰はなければ、あゝしたダンスの精霊見たいなやつらは別として、睡くなる目を擦つてゐる本當の人間はやりきれない。

日本にゐた時には、夜遊びをしての歸りに、萬世の乘り換へ場で最終の赤電車を逃がしてしまつて、あれから早稻田の住ひまで、二圓と云ふ滅法高い人力車に乘らねばならないと、十二時限りに電車を止めるなんて、こんなゴッデム　シティが世界中どこへ行つたつてあるものかと怒つたものだが、今考へるとさうではない。日本人はなか〳〵あれで人間と云ふものを研究してゐる。人間と云ふものは寢るもだと云ふことを知つてゐる。それ故に東京市なぞは、十二時過ぎには寢られるやうに出來てゐる。電車も通らねば自働車も通らない。あの銀座の、私のいふのは地震前の銀座のことだが、眞ん中がひつそり閑として、たゞゴム輪の人力を引く車屋のゴム足袋の音ばかりが、妙にかう力無げに聞える。街路樹の蔭に魂をぬかれたやうな電氣燈がぽつとともつて、その下に顔の青い女でもしよんぼりと立ちさうな、どうも、東京の深夜はいやに陰氣だつた。然し寢るには都合がよかつた。

然るに、このニウヨルクと來ると、純粹に物質一方の文明の都會なので、こゝでは人間は寢るものだ、いや、寢なければならないものだなぞと云ふことは少しも考へられてはゐない。どうしても人間が寢られぬやうにこゝの萬事は出來てゐる。電氣の親玉、エヂソン翁なぞは、この人は無慈悲なことを云ふ人だ、人間は寢るのは間違つてゐるとさへ云つてゐる。

夜る夜つぴて自働車は飛びまはる。高架電車はわざ〳〵脊の立つやうに、鐵材のブリッヂの上を走る。いやこゝはやかましいことにかけては世界一の都會で、この間も日本から、三宅克己畫伯が巴里へ行かれる途中、御夫婦づれで私の家へ見えられたが、その折から

『アメリカもよござんすが、この物音には、どうも閉口しましたなア、』と、云つてゐられた。それはさうにちがひない。

ちよつと一日田舍へ行つて、歸りに、河底鐵道をとつて、地下停車場から往來へ出ると、まるでもう、一時に、耳元で、ぐわつと怒鳴られたやうで、暫く頭が、ガアンとしちやつて顳がかうふら〳〵する。

それでもこの間まで住んでゐたワシントン角園の家は、前が公園で、私のルームは二階目で、奥に深く入つてゐたから割合に靜かだつたが、今度のこの家はさうでない。この通り下では夜中ラデオを鳴らす。おや、もう鳴らなくなつたな。流石のダンス

の幽靈も、朝の冷氣に打たれて引つ込んだと見えるな。もう何時だらう？おや、もう二時だ。まだ少し寝る間があるな。

とろ〳〵としたかと思ふと、ぽか、ぽか、〳〵〳〵、馬の蹄の音だ。しばらく止まつてまたぽか〳〵。それがどうも耳についてまた寝られない。枕の上に起き上つて、窓のなかから見おろすと、淡青く明けかゝつた暁の街角に、牛乳配達の馬車が止つてゐる。男が牛乳の罎を抱へては、アパートメントの入口へ持ち込む。さうしてその手で昨日の罎の空いたのを持つて出て來ると、男は何んとも云はないのに、馬がぽか〳〵と歩き出す。さうしてまた止る。また歩く。なる程こいつは馬に限るな。自働車ではかうは行かない。歩けと云つたつて歩きはしない。止れと云つたつて止りはしない。一々上つて、足を踏んばつて、ぶう〳〵がた〳〵とやらなければならない。自働車は馬糞をたれなくつていゝと思つてゐたが、かう云ふ時にはその名の如く決して自ら働かない。馬の方が自ら働く。それでゐて人には馬車にされるなんて全く引き合はないと馬は思つてゐるだらう。

おや、馬車は一臺かと思つてゐたら、二臺も三臺も同じことをやつてゐるな。さうあるべきだ。數あるアパートメントへ牛乳をくばる馬車は、數なければならないはずだ。皆あれは違つた牛乳屋の馬車だらう。ぽかぽか〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵やつデとラオが済んだと思へば、今度はこれだ。これがニウヨルクの明け方なんだ。

□

午前四時。日本にゐて、文士家業をしてゐる人の、これが即ち寝る刻限だ。けれどもこゝではさうは行かない。毎朝この刻限になると、先づ第一に鐵材をしこたま積んだ重い大きな、左様さなア日本の九尺二間の四軒長屋を一と棟そのまゝ持つて來たぐらゐな、運搬自働車が地響きを立てゝやつてくる。その音の猛烈さ加減と云つたらないね。私のアパートメントの建物は煉瓦造りで、灰色の花崗石で化粧をした、まだ古くない建物なのだが、それが、から、細く慄へ出す。テーブルの上へ置いた石膏の達磨大師が爪立つて、やあとこせいを踊る。これは全くおまけだが、まあ、さうしたあんばいだ。これが日本の木造家屋だつたらば、また例の地震かと、皆は外へ駈け出すにちがひない。よくも、まあ、あゝ遠慮會釋もなく、朝つぱらから、あんな重い運搬車を引つ張り出して、人々の、これが一刻千金とも謂つべき、曉の夢を破ることが出來たものだ。それも一臺でおしまひならまだいゝが、あとから續いて、十分置き廿分置きに、幾臺も幾臺もやつてくる。丁度またこの街は、ずつと下つ

た河岸端に、鐵材問屋が何軒も並んでゐて、そこから市中の各所へ建築材料——あの鐵骨建築に用ひる各種の材料を送り出す。で、すつかり朝になつてしまつては、市中は車輛が輻輳して、こんな大きな運搬車は、走らせるのに都合が悪いから、それでまだ日の出ない前に、あゝして運搬してゐるものと聞いた。しかもこの街は、河岸から直かに上つて來て、シエリダンスコエヤの六つ辻へ出て、あれからマンハツタンの上町なり下町なりへ出るその要路に當つてゐるので、色んな車も數多く通ることである。これは災難な街へ引き移つたものだ。晝間見たところでは閑靜ないい街だが、夜の明け方に、かうした音がきこへやうとは全くもつて案外だつた。

さて、これがこの街の朝の物音のはじまりで——尤も乳屋の馬車の音はあれは夜中のものとして——これからそろ〳〵本式に雜多な音がきこえ出す。實際こゝへ引越すまでは、往來の物音をから迄氣にしたこともないが、これでは全く恐縮する。それはなる程、私は今迄、どこへ住んでも往來に面した家に住んだことは一度もなく、いつでも家の裏側の、窓があつても日も射さなければ、空も見えない煉瓦の壁しか眺めることの出來ない、小さな部屋にばかり住んでゐたせいで、今度はじめて表の見える部屋で寢ることになつたのだから、當分は物音が耳について、寢られないのは當り前だと云ふかも知れないが、その物音にも程があるので、これではこの往來に寢てゐるのと、そんなに大して違ひはない。何しろこの大きな窓が曲の手に明いてゐるのだからなア。しかもその觀音開きになつてゐる十六枚の硝子戸は、勿論夏のことだから締めてしまへば暑苦しいし、ストリートは石より硬いアスファルトで、物音はそこから發して、街の——この街はまた普通より狹いので——兩側の建物に反響して、それがまたこのアパートメントの一番上の軒に出てゐる化粧石に反響して、その直ぐ下に開いてゐるこの窓へ飛び込む。何んのことはない、街中の物音が、皆この部屋へ集まつて、それがまた私の耳のなかにあつまる。もうすつかり觀念して、目を閉じて、默つて耳のなかにあつまる物音を聞いてゐると、響きばかりの華嚴世界が現出する。一大音響の世界海のなかに、微塵數の音響の世界があつて、それが丁度、香油の珠を水のなかで振つたやうに、渦を卷いたりほぐれたりする。遠くに白く泡立つ渦は、これはハドソン河を渡す川蒸氣の鳴らす汽笛の音である。近くに高く洗濯板のぎざぎざのやうに三角なりに並んだ泡は、自働車がそこらの角で止まりながら息をしてゐる音である。ぱつと八角に五色の世界をひろげる音響もあれば、また黄色く筋のやうに先の曲がつた音響もある。なる程な

ア！今迄どうも分らなかつたが、未来派の絵と云ふものは、かう云ふところから考へついたわけなんだな。して見ると、無色界の有様を絵の具でもつて現したのが、未来派の絵なんだな。
おや、向ふの方から女の顔のやうな泡が浮き上つたぜ。その泡が、にんまり笑ふと、音響界海がすつかり淡紅色になつた。ははア、これは太陽が出現ましました音なんだな。然し自分の耳のなかの大きさと云ふものは、どのくらゐあるものだか限りが知れないな。これだけの大きな音響の華厳世界を、そのうちに包蔵してゐるのだからな。して見るとこの耳を持つてゐる自分の體の大きさと云ふものは、どのくらゐあるものだらう？

ビリビリビリビリビリビリン。呼び鈴が鳴つた。華厳世界はどこかへ、すつ飛んぢやつた。現在の私の體は毬のやうにベッドからころげ落ちた。あんまり音がひどいので、泡食つて飛び起きたせいである。

掛けて寝てゐた寝巻きの袖に片方の手を通しながら、下の入口から通じてゐる伝話口に取りついて、

『誰れだ？』

『アイスマンだ！』

『カモン、アップ！』

かちかちかちと、こちらの釦を押してやる。これで下の戸が明くのだ。何んだい氷屋は今朝は無暗に早いぢやないか。もう何時だらう？時計を見ると七時半だ。いつも氷屋の来る時刻だ。

この家へ引越してから、私は自炊をはじめたので、貯へて置く食料を腐らせまいと思つて、小さな冷蔵庫を買つた。これがため毎朝アイスマンは、五階の階段を踏み上つて、たつた十五仙の氷を届ける。肥つた大きなアイスマンが、一と欠けの、さうさなア、日本人の穿く駒下駄を二つ合せたぐらゐの、氷を桶へ入れて、汗みづくになつて上つてくると、この氷はアイスマンの、ほつと吐き出す火のやうな息のために、もう溶けて無くなつてしまひさうだ。

『日本ぢやア、こんな田舎くさい高い家は建てなからう？』

『さア住宅としては家は低いに限るからなア。』

『さうだらう？こんな高い家を建てやうものなら、日本人は皆、赤化してしまうのだから。』と、アイスマンは、顔の汗を手でかきとつて、それを、びしやりとフロアへ叩きつけた。猫がびつくり仰天して、ぱつと飛びのく。

「レフリジレーターが明いたので御飯をくれるかと思つて、猫がそこへ来てゐたものだ。

『グルバイ。』と、アイスマンは台所口から出て行つた。そこ

れで、私は寢直す氣もなくなつて、いよく起きると決心の臍をかためた。

これから私の毎日の、たまには休むこともあるが、先づその日課がはじまるのだ。序だからそれをこゝで少し話さう。もつとも顏を洗つたり、朝の珈琲を沸かしたり、日課に取りかゝる前には、獨身ものの私はこれで可なり忙はしいが、そんな話はこゝでは一切略して置いて、朝餐後の私の第一番の仕事は、世にも珍しい仕事である。それは何だと云ふと、私は夢を見る稽古をする。夢を見ると云へば、何んだかわけないことのやうに聞えるが、こいつがなかく六ケ敷いのだ。誰でも知つてゐる通り、夢と云ふ奴は、見やうと思ふと出て來ない。うつかり見たのぢや、覺えてゐない。そこでこいつを自分のものとして見るのには、實際、呼吸ものなのだ。だが平生、夢を見る稽古をして置くと云ふと、文章を書く時に大いに都合がいゝ。一々何を書かうかと工夫する必要もなく、書くことは夢になつて筆より先に走つて行く。あんまり走り過ぎて時々埒の外へ飛び出してこまるくらひなものだ。で私はこの夢を見る方法を色々と試みたが、寢てゐて見るのぢや、あんまり埒がなさ過ぎていけない。と云つて起きてゝ考へてゐたのでは、言葉がそれにからみ過ぎてどうもいけない。一番いゝのは傍ら何かやりながら、出て來る夢に氣を配ると云ふ方法だ。成る可くは、意味のないものでも傍ら讀むのがいゝ。意味があるとそのものに引き寄けられて、夢の出る際がなくなる。ところがこの意味のない讀みものといふものは無いもので、色々と取換へた末、私は梵語の文典を讀むことにした。古本屋からモニア、ウイリアムスといふ故人が著したのを一冊買つて來て、便所のなかでこれを讀む。便所は夢を見る稽古をするには理想的な場所だ。日本の便所では臭くて困るがね。例のところへ、浦島太郎が鶴にのつて龍宮へでもゆくやうな工合に、腰をかけ込んで、讀みはじめるのだ。パラスマイパダが何とかで、アートマンパダが什とかで、何がなんだか、ちんぷんかぷんだ。これが判つては面白くない。判らないところが有難いのだ。その判らないやつを、片つ端から讀んでゐると、いつとはなしに、夢のやつが腦のなかへ這入つてくる。そいつを知らぬ顏をして眺めてゐると、だんだん眷屬どもが現はれてその駈けるの早いことゝいつたら、今ここにゐるのかと思ふと、もう日本へ行つてゐる。日本へ行つてゐるかと思ふと、またこゝへ來てゐる。はつと思ふと、ぱつと消えてなくなる。どうも人間の腦のかたには、不思議な生き物が住んでゐると、今更ながら感心する。

かういふわけで、私は今朝も、朝餐の皿やコップを、臺所の

シンクのなかへ投び込んでしまつて置いて、先づ氣がかりを無くさないといけないからね、例の通りに、モニア・ウイリアムス先生の、梵文典を、便所のなかで、と、シメトリーに樗へ込んで、忝しく押し開いてそれを讀みながら、金持の一人娘に結婚を申し込まれて、斷はれば損が行くし、斷はらなければ見つともないし、進退こゝに谷まつて、てな、夢を見てゐると、

ビリビリビリビリビリン。また呼び鈴の音だ。かういふ時には、西洋は全くこまる。日本だと中腰に立ち上つて、厠の窓から首を出して、

「誰だツ？」と、大喝一聲するところだが、こゝではさうは行かない。

「やけに呼び鈴を鳴らしやがるな。まあ待てツ。」獨り言をいひながら、やゝあつて電話口へ來て聞くと、

「誰れ？メーリーだ。カマ、ナツプ。」かち／＼／＼と、また扣を押してやる。

なる程今日は、黒ん坊女のメーリーが、掃除に來る日だつたな。

一週間に二度、メーリーは、この太陽の御座敷を掃除に來る。

□

メーリーが、臺所まはりから浴室のあたりを、掃除してゐる間、私はフロントのパーラーへ來て、例の窓から往來を見おろす。

この街に沿ふた家は、皆家の前に芝を植へた、坪庭があるのだが、このアパートメントハウスに限つてそれがない。それだけこの家は、他の家よりも往來端に突き出してゐるわけであるから、私のゐるサンパーラーの兩側の窓からは、ストリートが眞つ直ぐに目の下に見える。突き當りには大きな船渠の建物が見えて、その建物の向ふにはハドソン河の灰色の水が見える。空氣の澄んだ日には、對岸のホボケンの街がほんの幽かに見える。しかも斯うして眺めたところは、これはこゝに、今以つて殘つてゐる昔のまゝのニウヨルクで、一と頃はこの街には銀行が軒を並べてゐたものださうである。それ故今でもこの町の名は銀行街、バンクストリートと呼ばれてゐる。こゝはそのバンクストリートの十四番だ。ニユウヨルクへ來たら御立寄り下さい。珈琲ぐらゐは沸かして吞ます。エントランスの五番目のベルの扣を押して、そこにある輕便電話の前に立つてお出でになれば、私が上から、

「誰だアッ？」ときつと怒鳴つてあげる。留守の時にはしかたがない。この間、日本から、松本苦味さんといふ文士がこゝへ廻つて來られて、私のところへ遊びに見えるといふお手紙だつたから、三日ほど外出しずに家のなかで待つてゐたが、とうとうそれなりすつぽかされた。兩三年のうちには、村松梢風君がやつて來られるといふことだから、今から私はブロードウェイの美形の用意もとゝのへて、待ちかまへてゐるわけだが、うつかりアメリカへ行くと、體にコールターを塗られるなんて恐れてゐられるやうだから、またこれもすつぽかしではないかしらんと心配してゐる。アメリカだつて、さうどこでもこゝでも排日風の吹くわけではないから、どし／＼お出でなさいだ。早く來ないと、私はロンドンへ行つてしまうよ。

おつと、話が埒外へ飛び出したが、もとのところへ立ち戻らせて、さて、この西南の窓から見た街は、オールドニウヨルクの俤の殘つてゐる街だが、フロントの西北の窓から見ると、こちらには高い家を幾層にも建て並べた、モーダンニウヨルクの街々が、丁度暈した墨繪のやうにだん／＼淡く、その果は水色の靄のなかに消え入つて見える。水色の靄は、この都會の名物だ。但しまた、このくらゐ空の澤山見える家もこの都會にはあまり無い。この都會の空と來たら、いつでもほんのちよつぴり、建物の間から見えるのが普通で、夜なぞは、見える星の數も本當に少なく、黑天鵞絨を張つた寶石匣のなかに、きらりと寶石が一つ二つ光るやうにしか見えないものだが、この窓から見た空は、これではあまり大安賣りだ。夜は空の星、さうして晝は往來を振り歩く女の尻。ともに目につく眺めだが、今は丁度、朝の九時少し前で、この川岸に並んでゐる船會社に務める女事務員や、その邊の製造所に通ふ女工たちが、いや、いづれもそのお尻をふり立てゝ通るは通るは、群を成し隊を成して通る。

『メーリーや、こゝへ來て、ちよいと、お見。』呼ぶとメーリーは手にブルームを持つたまゝでやつて來た、

『まあ、どうでしやう、これは、たしかに、見ものですね！』

『なんと思ふへ、あの華美々々しい衣裝は？』

『可愛さうにあの娘たちは、お洒落と勞働を一緒にしなけりやならないんだから、嫁入前の娘は、容易なことぢやない。』と、メーリーの觀察は振つてゐる。

『ゴールド、エンド、ラヴ。それより外に娘たちの目的はないんだから仕方がない。』

『まあさう云はなきやならないでしやうね。』

『私の國の日本でも、この頃は娘たちが思ひきつて華美な風をするやうになつたとさ。』

『それは、あの、日本の娘も近頃は自分でお金を取るやうになつたのでしやう。して見れば、風俗が華美になるのが當り前でさア。あなたもさうして眺めてばかりゐないで、なぜあのなかの一人を、おつかまへにならないんです?』メーリーは皮肉屋だ。

『だつてメーリーや、眺めると云ふことゝ、つかまへると云ふことは、こりやア別な問題だアね。』

『さうですか?眺めてばかりゐられたんぢやア、女の子はやりきれませんや。』

『と云つて、つかまへやうとすれば、娘は逃げるぢやないか。』

『そりやア逃げまさアね。逃げるところが娘ツ子の手ですもの。お試しになつたことがあると見えますね。』眞つ黒な顔の相好を崩してメーリーは臺所へ引つ返した。

私はあとで考へた。黒ん坊の女と雖も馬鹿にはならない。白ん坊の女なんかの云ふことよりは、はるかに穿つたところがある。虐げられてゐるものは皆賢い。

あゝして、赤や黄や白や、あらん限りの強烈な色彩を身につけて、白粉つけて紅脂さして、己が白い肌に見惚れて、白皙人の娘たちが浮かれ歩いてゐるひまに、黒ん坊の女たちは、塵と芥のなかにゐて、黙つて考へながら働く。

メーリーは、勝手の方の掃除をすまして、私の居間の掃除にかゝつた。パーラーと私のスタディとの間には、こゝにも硝子張りの開き戸があるが、メーリーはその硝子戸を拭きはじめた。

『メーリーや、おまへは、何宗だい?』

『エピスコペーリアンでさアね。』

『やつぱり、おまへの宗旨でも、悪いことをすれば悪い報ひがあるし、善いことをすれば善い報ひがあると教へるかね。』

『その通りです。』

『して見ると、おまへもそれを信じてゐるのだね。』

『それは信じまさア。』

『どうしてそれが信じられるね。』

「それは、あなた、神さまは、人間のやうに、忘れるといふとがありませんから。』

『どうしておまへにそれが判るね?』

『そりや判りまさア!』白み勝な大きな目玉で、メーリー——は、じろりと私を見た。

私は、ぞつとした。ふム!こいつ、なか〳〵徹してゐやがるなと、思つた。

メーリーはすつかり掃除をすましてしまつて、序に、これは

かの女の仕事ではない。私の朝餐の皿や茶碗までも洗つて、歸つて行つた。朝のストリートの極彩色のガールスも、もう通らないし、私はいよく本仕事の原稿書きに取りかゝつたが、夜の睡りが足らないせいか、脳が少しぼんやりしてゐる。ところへまた呼鈴が鳴つた。

『うるさいな。誰だらう？』と愚痴ながら私は言つた。

上つて來たのが、今日あたりは來るであらうと心待ちに待つてゐた、ランハートと云ふ、チエコスロヴアキヤンで、私の久しい友人であるが、アメリカの太平洋沿岸へ、スケツチ旅行に行つてゐたのが、一年ぶりで歸つて來た。

『なんだ、こりや、或る住宅だなア。』ランハートは驚いた。

『まあ驚くな。然し君も俺の能力に對してレスペクトを拂はなければなるまい。俺もこのくらゐなサンバーラーに住むやうになつたんだから。どうだ？』

ランハートはどんもりだ。目を白黑しながら、私の背中をぽんと叩いて、シエーキハンドを求めながら、

『ブ、ブ、佛教が成功したか？』

『佛教は抛り出した。』

『ど、ど、什麼して？』

『あんなもの、つらない。人間には必要は無い。』

『バ、バ、バ、バツト、』と、云つたつきり、ランハートは考へ込でしまつた。

私は、彼れに、考へるだけ、考へさせた。

『どうだつたカリホルニヤは？』私は尋ねた。

『或る、未開地だな。』ランハートは肩をすくめた。

『ワイルド、ウエストで通つてゐるんだ。』

『フランスの自然とは違ふな。』彼は笑つた。

『日本人の排斥されてゐる有樣を見たかい？』

『日本人は多少ゐたが、別に排斥されてゐるやうでもなかつたな。』

『そんなことよ。人間は、騷ぎの動物だ。』

暫く雜談をしたあとで、私は、ランハートに珈琲を沸かしてやることになつた。二人は手んでに椅子を運んで、臺所へと居場所を換えた。太陽の御座敷は、あんまりストリートの物音が響くので、どんもりのランハートの話を聞くには容易ぢやなかつたが、ここはそれでも幾分か靜かなので、話も先づ、とぎれずに續いた。

戸棚から茶碗を出たり。チーズをスライスしたり、クリームを出したりしながら、珈琲の沸くのを私が待つてゐる間に、彼れは窓ぎはに立つて、外を見おろした。向ふ側の建物の裏庭に

は、紺樹の木立ちがある。木立はなか〳〵奥深く、ずつと先の方まで續いてゐる。この邊で綠陰のあるところなんて本當に稀だ。樹の柔かい葉が風にゆらいで、晝前の日が濃藍色の陰をその下に染めてゐる。

『あれは何んだい。あそこの樹の下に、赤いテーブルの幾つも見えるところは？』

『あれは綠陰のレストランだ。そこの角に入口のある、ウエヴアリー、イインの、あれが樹下食堂だ。』

『客は一人も來てゐないやうだな？』

『晩方になると、裾の長い絹物を着た女たちが、撫でつけ髮の若者にエスコートされて、ぽつ〳〵見えるやうだが、何しろ樹下食堂へでも來やうと云ふ連中は、今頃は、シテーにはゐやしないからな。』

『この暑中、シテーにでもゐるものは、その日暮しの人間に限つてゐる。』

『心配するな。吾々はその仲間なんだ。』

ランハートは振り返つて、口をへの字にして見せた。

木立ちを圍んでゐる建物の裏手の窓は、皆こゝの臺所から見えた。その大抵の窓は明けはなされて、なかはすつかり覗かれた。臺所の見える家もあれば、浴室の見える家もあれば、寢部屋の見える家もあつた。これが、みな高い建物たんだから、波うつてゐる青葉の上に、重なり合つて見えてゐた。

『日が暮れて明りがつくと、向ふ側は奇觀だぜ。』沸いた珈琲をパットからコップのなかへつぎながら私が云ふと、彼は目の色を變へて――彼の青い目の色が變ると、目が無くなつたやうに見えるのだが、あまつさへ、せき込んで、

『ゼ、ゼ、ゼン、サ、サ、サ、サムタイムス、ネ、ネ、ネ、ネツケツドビユーテースが見えなければならないわけだが。』

チエコスロヴアキアンも人情には變りはない。私はテーブルの前へ自分の椅子を引き寄せながら、

『ネツケツドビユーテーは晝間でも時々見える。ことにあの突き當りの佛蘭西窓は、あれはあすこの舞踏學校の窓なので、蹴上げダンスを習ひに來る娘たちが、殆んどネツケツドになつて形の優れた足を蹴上げる有様が、もう今頃からそろ〳〵見える。』と、指さして敎へる窓を、彼は飛び出して行かんばかりの腰つきで熱心に見つめた。

世界を放浪して歩くやうな奴は、いくつになつてもこの通りだ。この男ももうそろ〳〵四十の坂を越すのであるが、たゞその、美人のネツケツドと聞いたばかりで、額に汗をかきながら目が光つて眩しいものだから、目をこぼめたり、手をかざした

りして、あの通りな努力だ。

『おい、窓から落ちてはいけないぜ。』私は冷かした。

『うん、よくは見えないが、窓のなかで、うす赤いものはひらひらしてゐるやうだな。』と、こちら向きになつてまでも、まだあきらめられないものか、椅子のうしろに停んだまゝ、しきりに彼れはその青い頭をなぜてゐ、たがそこの柵の角に載つてたオペラグラスに、ひよいと氣がついて、

『ハハー、ナーソ、俺は、君を見破つたぞよ。このオペラグラスで君はちよい〳〵ダンサーたちの、その足の擧るところを覗いて見るものと見えるな！』と、彼れは雀躍りしながら、その目鏡をとるより早く、またもや向ふの窓に熱中しはじめた。

『おい、珈琲がさめるぜ。』と、私は彼れをうながすと、彼れはすつかり悦に入つて、

『まア君は、世界のうちで、いゝ窓を持つたと云はなきアならないな。それにしても、どうして、かう直ぐ、金持になつたわけだ。この邊のアパートメントはこれでなか〳〵安くはないぜ。この先にフランタと云ふ俺の知人が住んでゐるが、こんなサンパーラーなんか無くつて、それで月に百三十五弗だとか云つてゐた。』彼れも金の勘定は知つてゐた。

『フム！家賃なんか高くつたつて安くつたつて、人間一生涯の總勘定をする時が來る日になつて見れば同じことよ。』と云ひながら、私はテーブルの裏でマッチを擦りつけた。

輪に吹く私のチエスターフイルドの煙に卷かれてしまつたランハートは、

『しかし、かうした家に住むのと、俺のやうに、ぼろ〳〵なスチューデオに住むのとでは、活きて行きつゝある間の幸福に、大した違ひがあるわけだ。』と、云ふその調子が、沈んで來た。

『何を云つてゐるんだい。しつかりしろやい。どんなところに住んだつて、人間の幸福に違ひなんかゞあつてたまるかい。』私は云ひ切つた。

『ところが、あるんだ。』彼はすつかり悲觀しちやつた。

『さうだなア、好いところに住まうと願つてゐるものが、住めずにゐるんぢや、幸福でもないかも知れないが、俺のやうに、そんな事は願つても見ずにゐた男が、ひよつくり、かうしたところに住むやうになつたんでは、魅されてゐるやうで、あんまり、有り難いものでもないなア。』私は本音を吐いてきかせた。

『魅されてゞもいゝから、住めれば幸福だ。』弱いところを彼れは云ふ。

私はあんまり虚勢を張つたことのない男だが、好人物のラン

ハートを目の前に置いて、太陽の御座敷に引き越した威光を借りて、先き様から、しきりに山を掛けて出た。元來が、我慢のない彼れだから、今にも、君は豪いよと、折れて出さうな様子である。しかし、それを云はしては、あまり氣の毒すぎるから、こゝらで私は、こゝの主人公となりすましたその、からくりを、白状することにした

『だが君。俺がどうしてこの家に住むやうになつたかは、君は知らないだらう？』

『それは、多分、君が何か出版物でも當てたことゝ、今、想像してゐるのだが。』彼の考へは着實だ。

『日本でかい。日本は金の相場が安いのだから、あそこで僕の本が百版賣れたつて、こゝの家には住めないよ。』

『さうかね？』

『さうだよ。君は、ものゝ裏を見ると云ふことをしない男だな。』

『さア、君は悪いことをする男ではなし。また、君の日本に於ける身分が俺には分つてゐないから、裏を見るにも見やうがないではないか。』

『日本には、妻と子が、飢えてゐるだけの話しだ。』

『ふむ！分らないな。どうしたのだ？』

私は思はず噴き出した。

『おい、何かい。人間と云ふものは、さう、必ずしも眞實を云はなければならないと、きまつたものかい？』

『そ、そ、そ、そりやア、あの……』と、ランハートは、詰つてしまつた。

──了──

河鍋曉齋

――本朝畫人傳の五――

村松梢風

一

舊幕の頃、下總國古河の藩主土井家の家臣に、河鍋喜右衛門といふ者があつた。喜右衛門は元來は武家の出でなく、同地の穀商鍋屋某の二男だつたが、河鍋家の養子となつて其の家を相續したのだつた。喜右衛門の妻は名を豐と云つた。石州濱田の松平氏の藩士三田某の女だつた。夫婦の間に男子二人をもうけた。長子を直次郎と呼び、次子を周三郎と呼んだ。次男が生れたのは、天保二年卯年四月七日だつた。處が、其の翌年のこと喜右衛門は急に土井家から暇を取つて江戸へ出ることになつた。それは、幕府の定火消同心に甲斐某といふ家があつたが、仔細あつて其の株を喜右衛門が買つて出たのだつた。火消同心などといふものはお話しにならない小身ではあるが、それでも直參であり、それに何彼と相應に役得はあるのだつた。で喜右衛門は一家を擧げて江戸へ移住し、爾來甲斐姓を名乘つて、御茶の水の火消屋敷に住むやうになつた。併し、喜右衛門は、舊姓の河鍋家を斷絶させてしまふことは忍びないところから、次男の周三郎に河鍋の姓を續がせることにしたのだつた。

周三郎は極く幼い時から繪が好きだつた。どんなに泣いて困る時でも繪をおもちやに與へれば屹度おとなしくなつた。繪を描くことは知らないので、只それを玩具にして遊んでゐるのだつた。彼が三つの時だつた。母は其の子をつれて上州館林在青柳村といふ處の田口七右衛門といふ親類の家へ行つたことがあつた。周三郎は母と一つの駕に乘つて伴を一人つれて行つた。其の途中、田圃路で伴の者が蛙を一匹つらまへて駕の中の周三郎に遣ると周三郎は、其の蛙を紙袋へ入れて脇へ置いて、それ

から笳で玉子を取り出して殻をむき、小笹の枝を短く折つて玉子の腹へさして蛙の形をこしらへて母と伴の者に見せた。親類の家に着くと直ぐに、紙を貰つて、矢立の筆で、袋の中の蛙を取り出して眺め乍ら蛙の繪を描いた。自然に筆法が備はつてゐる其の繪を見て人々は驚いた。周三郎が自分で繪を描いたのはそれが初まりだつた。四つ五つになるともう習はなくても上手に描けるやうになつた。で父の喜右衛門は「此の子は繪師にするに限る」と考へてゐた。

喜右衛門は、周三郎が七歳になると、一勇齋國芳の許へ伜を入門させて正式に繪を習はせることとしにた。

國芳は姓は井草、俗稱孫三郎、一勇齋と號した。又朝櫻樓とも號した。江戸の産で、元は京紺屋の徒弟だつたが、性來畫才があつて習はずして染物の上繪を巧みに描いた。後一世豐國の門に入つた。文政の初め、錦繪を二三枚描いたところが是れが比較的よく賣れて多少世間に認められるやうになつた。そこで地本問屋から俳優の似顔繪を描いてくれと云つて來たので、國芳は承諾して腕を揮つて描いて見たが、此の方はさつぱり受けなかつた。當時、彼と兄弟弟子であるところの國貞の繪が專ら世間に行はれてゐた。國貞の繪の濃艷なのに比べて、武骨な國芳の繪は少しも世間から歡迎されなかつた。爰に於て國芳は大いに考へて、貧苦を忍んでます〳〵畫法を研究した。そして文政の末年に至つてから、水滸傳中百八人の像を描き、錦繪として賣り出した處が是れは素晴らしい好評だつた。それが國芳の賣り出しだつた。當時評して、武者繪は國芳、俳優繪は豐國と云つた。國貞が三世の豐國を襲いでゐるのだつた。

國芳は、浮世繪以外の畫法をも研究して、筆力の秀勁なること、歌川の門流多しと雖も、彼に及ぶ者は一人も無かつた。彼は性質甚だ江戸つ子的に俠の風を有つてゐた。羽織袴などは着たことがなく、夏なれば縮緬浴衣に三尺帶を締めて何處へでも行くといふ風だつた。交際する人間も、火消だとか、町奴だとか、所謂市井無賴の徒に近い者が多く、其の行狀甚だ下等だつた。

喜右衛門は、一旦伜を國芳の門に入れたことは入れて見たが、つら〳〵國芳の性行を看るに餘りに下賤なので、周三郎が其の風に染まることを恐れて一年ばかりで廢めさせてしまつた。そして今度は前村洞和といふ狩野派の繪師を師匠に取らせた。

前村洞和は山内家の繪師で、本郷に住つてゐたが、彼もまた頗る異數の經歷を持つてゐる人物だつた。其の家は非常に貧乏だつたので、洞和が若い頃は父と二人で市中を引火奴を賣り歩

いて漸く堀口を凌ぐ有樣だつた。で毎日商ひに出ると、駿河臺觀音坂の狩野洞白の邸の前を通るのだつた。彼も繪が好きだつた。そこで門内へ這入り込んで覗いて見ると、廣い畫室で大勢の門人達が思ひ〳〵に繪を描いてゐる。それを見て彼は「あゝ羨しいなア」と思つた。自分もあの人達のやうに立派な先生に就いて繪を習つて見度いものだと考へた。が、引火奴を賣つて歩く境遇では、そんな事は夢にも覺束ない。仕方がないから諦めてまたしほしほと引火奴を賣つて歩く。翌日もまた駿河臺を通る。彼の足は識らず〳〵狩野家の門へ引き寄せられて、窓の外に佇んで羨しさうに覗いてゐる。それが何時しか洞白の眼に留つた。洞白はめずらしく思つたので、或る日其の若い小商人を中へ呼び入れ紙を與へて繪を描かして見た。すると、習つた繪ではないが不思議に能く描くので、洞白は感心して、若干かの金を與へて自分の家塾に置いて修業させることになつた。卒業して、洞和といふ名を師から貰つた。それから一家を成したのだつた。

洞和は大に周三郎を愛して、其前途に望を囑してゐた。洞和はいつも此の少年の弟子を呼ぶのに「畫鬼〳〵」と云つてゐた。それほどに少年周三郎は天才的だつた。

或る年、それは周三郎が九歳の年だつた。夏の初め頃五月雨が降り續いて、其の揚句の大雨で諸所の川が一度に出水して大騷ぎになつた。神田川も水が岸に漲つて渦卷いて流れてゐた。平常見られない有樣だつた。周三郎は其の頃寫生に熱中してゐた。彼は初めて見た物は何でも寫生せずにはおかなつた。で、川の出水を見ると、水流を寫生しようと思つて、雨があがつたのを幸ひ御茶の水の櫻の馬場の前から谷間をさして下りて行つて、船荷の揚げ場へ行つて水勢を眺めてゐた。と其の時、何やら藻のやうな物が流れて來て彼の足許へ引つ掛つた。何氣なく其の藻のやうな物を摑んで引き上げて見ると、それは男の生首だつた。「きやつ」と云つて拋り出すと、生首は揚げ場の上でコロ〳〵と轉がつた。周三郎は仰天して直ぐ樣逃げて歸らうと思つたが、其の時ふツと彼は考へて、「此の生首を寫生して遣らう」と思つた。これまでも人形師の作つた人形の首ならば何遍も描いたことがあるが、實物の生首を見るのは今が初めてだ。「恁んないゝお手本はないぞ」と周三郎は考へた。そこで水流の方は後廻しにして、其の生首を拾ひ上げて袂で隱しながら抱えて我が家へ戻つて來たが、家には大勢人が居るので持つて這入ることが出來ない。周三郎はあたりを見廻したが思はしい隱し場所が無いので、一先づ物置の中へそれを入れて置き、何喰はぬ顏をして家に戻つてゐた。それから少し後のこと、下婢が、

許を出さうと思つて物置の中へ這入つて行つた。すると、うす暗がりの處に何か變な物があるので、側へ寄つて見ると、炭俵の上に生首が載つてゐて、半眼に開いた眼で彼女の顔を睨めてゐる。きやア」と下婢は悲鳴を上げて物置の外へ轉がり出た。人々は其の聲に駭いて飛んで行つて見ると、此の有樣なので仰天したが、段々調べたところそれは周三郎が神田川から拾つて來た物だといふことが判明つたので、呆れてしまつた。併し、せつかく周三郎が寫生しようと思つて拾つて來た熱心を思ふと賴母しくもあるが、後難が恐ろしいから、元の場所へ持つて行つて其處で寫して來たらよかうと云つた。周三郎は又もや生首を風呂敷に包んで以前の荷揚場へ持つて行つて、其の場で寫生をした。往來の人がいつの間にか是れを見だして、大勢周りに立つて眺めてゐた。周三郎は描き終ると、家から持つて來た觀音經を書いた紙で生首を包んで、川の中へ押し流してやつた。

　國芳の許へ通つてゐる時分のこと、或る時國芳は李龍眠の水滸傳の人物畫を出して周三郎に見せて、自分が武者繪の筆法を會得するに至つたのには、此の李龍眠の繪が非常な助けとなつた。お前も後來は此の繪を研究するがいゝと云つた。それから猶師匠は、武者繪を描くのには、譬へば突然人を投げ出したり、投げ出されたりする時の身振りや、或ひは組み伏せて、反ね返さうとする顔などを、平常よく心を留めて見て置き、其の意氣込みを描かなければいけないと云つて敎へた。

　周三郎は何時も國芳の言葉を胸に置いて、喧嘩でもあると眞つ先に驅けて行つて、取つ組み合ふ樣子を側へ寄つて眺めてゐた

「何處かに喧嘩はないかな」周三郎は喧嘩を探し／＼歩いた。

　其の頃の江戸ッ子は氣が早いので直ぐに喧嘩が始まつた。口論をする暇は無く、ポカ／＼となぐり合ふのだつた。一寸盛り場へでも出掛けると屹度一つや二つ喧嘩に遇つた。さうして周三郎は活物敎育を授けられた。或る日も周三郎は裏町を步いてゐると、突然長屋の方から罵り合ふ聲と、ドタンバタンといふ格鬪の物音が聞こゑて來たので、彼はソラ來たとばかり長屋をさして飛び込んで行つた。

「さあ此の阿魔ア、太え阿魔だ」

「何んだい此の宿六め、殺さば殺せ、ヒイー」

　長屋の者は毎度の事と見えて、ひつそり閉と鳴りを鎭めて仲裁に行く者もない。周三郎が一人門口に立つて熱心に眺めてゐた。終ひに亭主の方がそれに氣が付いた。亭主はかみさんを組み伏せてゐた手を弛めてノツソリと起ち上ると、極り惡さうな顔から肝癪筋を張り上げて

「やい小僧、何が面白くつて人の喧嘩を見てゐやがるんだ」
周三郎は驚いて逃げ出した。

二

天保十二年頃から、師の洞和が病氣になつた。病は腦の病氣だつた。それがだん〳〵惡くなつてしまひには繪の稽古も出來難くなつた。そこで洞和は自分の師である狩野洞白の許へ周三郎を紹介して入門させた。今度は通學は許されず其の畫塾で生活をしなければならなかつた。併し入門したと云つてもまだ本統の門人に列したわけではなく、學僕として住み込むので、終日内外の雜用に使はれて畫學の時間とては少しも無かつた。師からは手本も貰へなかつた。周三郎は夜だけ自修の時間が得られるので獨りで畫を稽古して、鷄鳴を聽くまでは決して床に入らなかつた。居ること二年で初て臨本を與へられ門人に列した。狩野の家法として、最初は寶珠を描かせ、次ぎに花卉翎毛を學ばせ、運筆やゝ自由になつた處で古人の遺墨を模寫させるのだつた。

そも〳〵狩野家は、足利以來の畫史の名家で、代々徳川將軍の繪所を預る家柄だつた。宗家は中橋にあつて、是れを中橋狩野と云ひ、萬石以上の格式を有つて暮してゐた。支族凡そ十二家あつたが、守信を祖とし鍛冶橋に住する者を鍛冶橋狩野と云ひ、尚信を祖とし木挽町に住する者を木挽町狩野と云ひ、宗家を併せて以上を三家と稱へた。三家に續く者は、峰信の後裔である築地狩野、益信の裔たる駿河臺狩野等が最も顯はれてゐた。季頼、知信、長信、宗也、重郷、各々それらを祖とする支族があり、木村永光を祖とし世々京都に住する者を京狩野と稱へた。此の外門下から出て、一人一世狩野を稱し畫史を以て諸侯に仕へる者は數ふべからざるほどあつた。

當時駿河臺の狩野洞白は、狩野派を通じての名手だつた。周三郎は、古畫の臨模をする傍ら暇さへあれば寫生して歩いた。

或る日彼は雜司ケ谷の法華宗妙法寺の仁王尊を寫生に出掛けた。此の寺は有名な鬼子母神のある處で、其の仁王尊は古來運慶の作と傳へられてゐる。周三郎は餘念なく寫生をしてゐたがふと氣が付くと、陽はすでに彼方の森に沈み、四邊は暗くなりかけてゐる。彼は驚いて歸途に着いた。目白臺から水道町へ下り、水戸侯の百軒長屋（現今の砲兵工廠の一部）の邊り迄來た時はもう夜の八時頃だつた。此の邊は一面の屋敷町で、夜になれば火の影も見えず、人通りも稀であつた。其の時突然道の傍から白刃を提げた男が三人現はれて周三郎に襲ひ掛つて來

た。周三郎は驚いて逃げ出した。すると後から賊が追ひ掛けて來た。一生懸命走つてゐるうちに、運よく賊の一人が小川に架けた石橋を踏み外して川の中へ陥り込んだので、他のものがそれを救ひ出してゐる暇に周三郎は漸う逃げのびて、水道橋外の青木新五兵衛と云ふ人の家に逃げ込んだが、其處は知り合の家だつたので一晩泊めて貰ひ翌朝狩野塾へ歸つた。其の話をすると人々は驚いて

「先づ怪我がなくてよかつた」と云つた。

が周三郎は、前夜夢中で逃げた時、大切な寫生畫帖を落してしまつた。折角色々な物を寫生して保存して置いた其の畫帖を失つたことは、彼に取つては可成り大きな損害だつた。周三郎がしよげてゐると、其の日の午過ぎ、一人の僧が狩野塾を訪れて

「御當家に河鍋周三郎といふ人が居りますか」と尋ねた。

周三郎が出て對面すると、僧は

「愚僧は傳通院の正眼と云ふものですが、今朝早く水戸邸の傍を通ると、往來に斯樣な品が落ちてゐました。拾つて改めて見ると駿河臺狩野塾河鍋周三郎といふ名前が記してあるので、只今用事の戻り掛けでお屆けに參つたのです」

と云つて彼の畫帖を渡して呉れた。周三郎は喜んで、實は斯々爾々と昨夜の出來事を物語つた上、其の有樣を畫に描いて見せたので、僧は面白がつて其の繪を持つて歸つた。

周三郎の寫生に對する熱心は非常なものだつた。其の頃の狩野派の畫家は、大概粉本に依つて畫を稽古してそれで善しとする風があつたが、彼は粉本以外に何でも彼でも寫生するのだつた。宇宙の森羅萬象悉く形を究めなければ承知出來ないと云ふ調子だつた。勢ひ彼の寫生癖を裏書きするやうな逸話が幾つもある。

弘化二年丙午の正月十五日、本郷丸山阿部侯の土地から出火した火が、折柄の西北の强風に吹き煽られ、本郷を焼き拂つて止まらず、神田に燃え移り、日本橋、京橋と一直線に焼き拂つて、最後に佃島迄焼いて鎭火した。有名な丸山火事といふのがそれであつた。此の火事の時、周三郎は實家へ歸つてゐた。本郷三丁目の方から二丁目一丁目と進んで來た猛火がしまひにお茶の水をも襲つたので、彼の家では附近の櫻の馬場へ避難した。しかし、櫻の馬場は其の界隈唯一の避難所なので、八方から逃げ集つて來る人と荷物とでさしもの廣場も身動きのならぬ程になつてしまつた。其の頃、本郷三丁目に住んで、幕府へ諸鳥類の御用達を勤めてゐた越前屋といふ家があつた。此の家では平常、雁、鴨、鶴、孔雀などあらゆる鳥を飼つてゐたが、火

張り火を避ける爲めにそれらの鳥を悉く籠へ入れて櫻の馬場へ運ばせた。處が、後から〳〵と人々が荷物を運び込むので、最後には其の荷物に迄で火が燃え付いて來た。其時分は周三郎の家の火消屋敷が旺んに燃えてゐた。櫻馬場へ逃れた人々も今は生きた心地は無かつた。荷物にまで火が付いて來ては自分達も此處で燒け死ぬかも知れないと思つた。其の時越前屋の主人は「どうせ此處も危險だとすると此の光鳥を持つて逃げることは所詮不可能だ。さうして見す〳〵燒き殺してしまふのは不びんである」と思つたので、籠の蓋を開けて鳥を放つて遣つた。籠から離たれた澤山の鳥は一度に空に舞ひ立つた。火の光が翼の色に映じて、てうど花と紅葉とを一度に撒き散らしたやうだつた。特に孔雀の美しさに人々は「アレョ〳〵」と云つて、火事の恐ろしさも忘れて空を見上げてゐた。すると、鳥は明るい方へばかり飛んで行くので、最後には皆火に燒かれ、或は煙に卷かれ、空にも居溜らず、クル〳〵と舞ひ落ちるのだつた。其の有樣は、何とも云ひ難い哀れな、併し珍しい光景だつた。

周三郎は、恁んな時でも手放さない例の寫生帖を取り出して荷物の上に跨がり乍ら家の燒け落ちる樣や、鳥が空に舞ひ立つ有様を寫生してゐるのだつた。すると手傳ひに來てゐた彼の親類の人がそれを發見して大層憤つた。「此の騷ぎの中で呑氣らしく繪なぞ描いてゐるとは何事だ」と云つて周三郎はひどく叱られた。彼はあやまつて漸う勘辨して貰つた。

後年彼は鯉を描くことに妙を得た。所謂三十六鱗の割り出し方なども特別の方法で研究したのだつた。鯉魚の圖は、古來應擧に及ぶものはなかつた。應擧は游泳中の鯉も描いたが、鯉の瀧登りに至つては殊に迫眞の趣があつた。瀑布登鯉の圖は、高田敬輔から出て、梢取魚彦等が專ら描いた畫題だつた。高田敬輔は名は隆久、竹隱齋と號し、法眼となつた。享保頃の人で、近江日野に生れ、狩古硼に就いて畫を學んだ。梢取魚彦は下總の人で、國學を加茂眞淵に學び、畫を建部綾足に學び、殊に鯉魚と梅花の圖を善くした。けれども、鯉魚の圖は應擧に至つて初て完成したのだつた。鯉の瀧登りの如き事實に見られぬ畫題を描いて而も全く迫眞の氣がある處に、應擧の寫生の巨腕が知られるのだつた。應擧或る時鯉を描くと、一漁夫が是れを見て「是れ生魚に非ず、死魚なり」と云つた。應擧が駭いて其の仔細を尋ねると、漁夫が答へて「鯉の游泳する時は睛眼が必ず一方に偏してゐるものだ、然るに此の鯉は睛眼双つながら同じ位置にある、即ち死魚の眼である」と云つたので、應擧は大いに感服してます〳〵寫生に丹精を凝らしたといふ傳說がある。近年福山

平八郎が帝展に鯉魚の圖を出品して一躍畫名を喧がれた。傳へ聞く處に依ると、彼は三年間別府溫泉に在つて鯉の寫生のみしてゐたといふことである。鯉魚の千態萬形悉く腦裡に納められて、そしてあの作が生れたのだとすると、彼もまた寫生の名手と稱すべきである。

或る時周三郎は大川へ網打ちに行つた。諸所で網を入れたが目ぼしい獲物も無かつた。段々上手へ漕いで行き、最後に三圍の土手下で網を投じると、驚くべし三尺もある金鱗の大鯉があがつて來た。周三郎は狂喜して早速網を納め、船を漕いで神田川を戻つて來て昌平橋から陸へ上つた。塾へ歸ると大盤臺に水を張り、其の中へ鯉を放つた。一同の者も、周三郎の手柄話をきゝ此の鯉を見ては流石に駭いた。周三郎は直ぐ樣鯉の寫生に取り掛つた。彼は八方から鯉の形を寫生した。

「どうだ河鍋、もう鯉の寫生は濟んだか」其處へ大勢朋輩達がやつて來た。

「濟みました、どうか一つ見て下さいませんか」と云つて周三郎は何枚もの寫生畫を出して見せた。

けれども朋輩達は繪の方などは顧みもしないで

「どうだ、よく肥えてゐる鯉だな」

「是れが所謂正銘江戸前の鯉といふ奴さ、矢つ張りこく鱠が一番いゝだらうな」

そんな事を云ひ乍ら、やがて俎板を持つて來て緣側の方へ拵へる者もあれば、大皿や大鉢を運んで來るものもある。一人が庖丁を持つて俎板の前に控へると、大勢で鯉の盤臺を緣側の方へ運び掛けた。最前から駭いて見てゐた周三郎は

「何をするんです、此の鯉は池へ放して遣るつもりなんです」

「莫迦な事を云へ、貴樣が寫生したいだけ寫生したんだから、後は一同が腹中へ葬つて供養をして遣るのが當然だ」

「否え、それは成りません、私は今此の鯉を寫生して大變時間したのです、だから此の鯉は私の爲めには鯉を描く事の師です、私は此の鯉を不忍池へ放つて遣る積りで居るのだから、殺させるわけにはいきません

「何を生意氣な、ふだんは人一倍亂暴な小倅のくせに今日に限つて殊勝らしい事を吐し居る、食ひたくなければ貴樣だけ食はずに居れ、さあ／＼運んだり／＼」

周三郎は何故か此の鯉を殺すに忍びなかつた。彼は一生懸命盤臺の緣を押へてゐたけれども、一同の者は頓着なく奪ひ取つてそれを緣側の方へ運んで行つた。一二人掛りで鯉を捕へて俎板の上に載せた。そして一人が庖丁を把つてまさに料理に取り掛らうとした瞬間であつた、鯉はすさまじい音を立てゝ高く跳

ね上つた。

「あッ」

驚きながら見ると、其の時鯉の口中から、何やら金色の氣のやうなものを吐き出したのだつた。一同はそれですつかり恐れてしまつた。早速元の盤臺へ移し、一同でそれを擔いで不忍池へ持つて行つて放して來た。

鯉の口中から吐き出した金色の氣のやうな物は、みんな見たと云つたがそれは何であつたか解釋は付かなかつた。が、周三郎は此の時から鯉を描くに當つて、人の心付かない不思議な筆意を得たといふことであつた。

それはとにかく、周三郎の畫道は其の頃から長足の進歩を遂げた。古畫の鑒定などにも長けて來た。狩野塾には毎月一回鑒定會といふものがあつた。其の日は諸家の所藏の古畫を借りて來て、會席に臨んでは、落款印章を隱し、投票に依つて筆者の名を中てさせるのだつた。中らなかつた者は金一朱を罰金として徴集される規則で、會員は大概廿人位だつたが、其の罰金を集めて當日の會費を償つてもまだ餘りがあつた。周三郎は滅多に一朱を取られるやうなことはなかつた。

塾生の生活も年長になれば可成り自由だつた。晝の間は自身の研究をしたり、師匠の仕事の手傳ひをさせられたりするが、夜は何處へでも勝手に行かれた。淨瑠璃端唄を稽古に行く者もあれば、踊りの師匠へ通ふ者もある。或ひは寄席へ行つて遊んで來る者もある。周三郎は能が好きだつたので能の師匠の處へチョク〳〵通つてゐたが、月謝が高いから熱心に通ふわけにもいかなかつた。すると、洞白の妾に石川姓の婦人があつて、後に貞光院と云つた婦人だが、此の人が或る時周三郎に向つて「そなたはよく勉強するさうだが、それでも何か道樂がありますか」と云つて尋ねた。

で周三郎は、私は能狂言が好きだけれども費用が掛るので稽古が出來ませんと云つて答へると、貞光院は大層喜んで、自分も幼い時から能狂言が大好きである、そなたもそれほど好きな事であるならば今後其の費用は妾が辨じて上げるから良い師に就いて學んで見たらよからうと云つて與れた。周三郎は大に喜んで、貞光院の後援を受けて狂言師大藏彌太夫の門に入つて稽古をした。貞光院はよく周三郎に向つて「そなたが三番叟を踏む處を一遍見度いものだ」と云つてゐたが、遂に其の約を果さぬうちに貞光院は沒してしまつた。周三郎は其の事を大に悲み、後の事だけれども、貞光院の三回忌に相當する日に、彼は上野護國院の其の墓前に於て、笛 太皷、大皷 小皷の囃し方を集めて、生前の約に從つて、三番叟を舞つて手向けをしたのだつた。

嘉永二年十九歳で彼は卒業した。そして剃髪して、師の洞白陳信の一字づゝを貰って、洞郁陳文と稱するやうになつた。卒業をする時は免状を貰つたが、是れは中橋の宗家から出るのだつた。其の報酬金は二百匹（金二分）だつた。さうして一人前の畫工になると同時に、剃髪して僧體になるといふことも、狩野家に古來定められてゐるところの家法だつた。

三

嘉永年間、日光東照宮の御神忌に當り、總御廟修繕の工事があつた。幕府は天下に令を下し國内の名畫史を選んで古畫の手入れをさせることになつた。狩野洞白は絵所の畫史であるから勿論其の選に入つて、門人狩野櫻春、河鍋洞郁外二名の畫工を引き伴れて日光へ行つて久しく仕事をして來た。其の出來榮へが宜しかつたところから、續いて西丸紅葉山御殿の修復について御用附属を蒙り、又古畫の修繕をした。其の後芝山内黒本尊御堂修復の時も洞白が命を蒙り、洞郁等が助手として働いた。其の時洞郁は狩野探信の描いた雄の孔雀の彩色をしたが、出來榮へが拔群であつたので厚く賞された。此の數度の幕府御用の畫事を勤めたことに依つて河鍋洞郁は俄かに世の中から認められて來たのだつた。

卒業する前頃からの洞郁の性行は急に變つて來て、彼は其の頃から酒と女の味を覺え始めた。併し、遊蕩はしても一方畫事にかけては人一倍熱心なので、師匠も比較的大目に見てゐた。すると嘉永三年のことで、或る時師の洞白から養子に行くことを勸められた。先方は矢張り洞白の門人で秋元藩の御抱畫師坪山洞山の處だつた。洞郁は養子に行つて窮屈な思ひをするのは餘り氣乘りがしなかつたが、恩師の周旋と云ひ、殊に彼の兩親などは大喜びで賛成しちまつたので、斷ることが出來なくなつて到頭養子に行くことになつた。坪山洞山名は成章、濱町の藩邸に住んでゐた。先方には娘があつてそれと夫婦になるわけだつたが、其の娘といふのも餘り縹緻はよくなかつたので、洞郁は内心それも氣に入らなかつたが、併しどうでも厭だと云ふほど嫌ひでもなかつた。滿足したわけではないが、我慢して、其の後は品行も愼み、温和しくしてゐた。養父の洞山は極く温厚で昔から品行方正の人だつた。が其の代り絵は誠に下手だつた。

かうして半歳位は洞郁も至極神妙にしてゐたが、もと〳〵自分から進んで來た養子でないだけに、考へて見ると莫迦々々しくなつた。養家の娘に對しても愛情は持てなかつた。以前の自由な生活が戀しくなつた。が今更急に離縁して呉れとも云へな

いので弱つた。養家へも氣の毒だが、師の洞白に對してもそれでは義理を欠くことになる。で辛抱してゐたけれども、其の辛抱が續かなくなつた。彼は又もや以前のやうに遊蕩をやり出した。酒を飲み歩いて家に歸らないやうなことがしば／＼出來てきた。持ち前の性分もあるが、かうして遊蕩三昧をやつたならば最後には養父も愛相を盡かして離縁してくれるだらうと洞郁は考へたのだつた。養家でも呆れてしまつた。併し養父は養父で、矢張り仲人の駿河臺の先生に氣兼ねをして、不埒な養子を離縁することも出來ずにゐた。それともう一つは養子の腕前に惚れ込んでゐるのでもあつた。

其の頃、霞ケ關の黑田家で、普請が出來して、畫の用が澤山あつた。黑田家には、尾形洞霄、同探香等の畫師がゐたが、此の時に限り、秋元家の畫師坪山洞山、養子洞郁、其の外數名の町畫師が雇はれて行つて、書院、障壁、襖等の繪を描いた。多くの畫工の中へ立ち交つても、洞郁の技倆は獨り立ち勝つて見えた。其の筆力縱橫で意匠の卓拔なのには誰れでも感嘆しないでは居られなかつた。そこで黑田家では、洞郁に對しては養父に拂ふよりも數等多い報酬を與へたのだつた。此の畫事は三年の長時日を費して漸く完了した。

此の畫事に從事してゐる時の事、或る日洞郁が黑田邸の繪所の物見へ出て往來を眺めてゐると、丁度其の下を盛裝した御殿女中が五六人揃つて通り掛つた。すると洞郁は何んと思つたのか急いで降りて行つて、邸を出て、其の女中達の尻に隨いて行くのだつた。さも好色らしく女の尻の後を眺め乍ら門左丁も隨いて行つて漸う戻つて來た。するとそれを或る人が見てゐて、後で養父洞山に向つて是れ／＼だつたと云つて告げたので、物堅い洞山は大に怒つて早速洞郁を呼び付け

「かういふ事を人から聞いたが事實か」と云つて糺した。

「左樣で御座います」

「誠にどうも呆れ返つた次第だ。天下の畫史ともある者が、而も勤務中、往來の婦女子の尻にくツついて歩くなどとは怪しからんはなしだ。俺は其の話を聞いたばかりで實に赤面してしまつた。それほど女の尻に隨いて歩き度かつたなら、繪師を廢めて藝者の箱屋にでもなるがいゝ」

かう云つて叱られると洞郁は駭いて

「否、それは違ひます。私は決して好色の爲めに女の尻に隨いて行つたわけでは御座いません。實は其の御殿女中の締めて居つた帶の模樣が誠に珍らしい模樣でしたから、それを寫生して見度くなつて後を隨いて行きましたのです」

と云つて、寫生帳を出して見せたので、養父は一言もなく沈

獸して了つた。

嘉永四年六月、狩野洞白が沒して、其の子洞棠が駿河臺狩野の家を繼いだ。

洞郁の放蕩はます／＼劇しくなつて、今では殆んど邸へも歸らない有樣になつた。洞山もほと／＼愛相が盡き、嘉永五年の暮になつて離緣にしてしまつた。養家を追ひ出されても洞郁は無論非觀しなかつた。寧ろ束縛の無くなつた現在の境遇を喜んだ、併し、實家の方でも彼の放埒を怒つてゐるので殆んど足踏みも出來なかつた。又、駿河臺の師匠の家とても義理が惡く、それに恩師洞白が沒して洞棠の代になつた今日では殊に其處も面白い行先ではなかつた。何處にも行き所の無くなつた洞郁は放浪生活をしてゐた。それは反つて彼自身の性分に適してゐるやうに思はれた。

かうなつても彼は決して生活には困らなかつた。それは彼の技倆が助けて吳れるのだつた。彼は雜貨屋の仕入れの凧の繪だの、羽子板の繪だの、或ひは繪馬などを描いて錢を取つた。そして、さういふ雜貨屋だの繪草子屋などといふ家に居候をしたり、懇意な髮結床の二階にくすぶつてゐたりした。髮結床の障子の繪なども描いて遣つた。錢がはいれば直ぐ樣妓樓に走つて行つて有るだけ飲んでしまふのだつた。

さういふ荒んだ生活はしてゐても、畫の研究は一日も怠らなかつた。彼が最も自由に他流の繪畫を研究したのは此の時期だつた。土佐、光琳派、圓山、四條、浮世繪から漢畫の範圍まで、一切に亘つて研究した。健腕無類の洞郁の畫は日に月に進歩するばかりだつた。

腕達者の洞郁は、仕入物の繪を描くばかりでも可成の錢が取れたが、彼は常に嚢中一物もなく、汚れた着物を着て、あちらこちらとさ迷ひ歩くのだつた。

四

安政五年、二十七歲の時洞郁は妻を迎へて初て一家を成した。妻は於淸と云つて、鈴木其一の次女だつた。其一は抱一の門人で、當時光琳派の大手だつた。其一は洞郁の非凡の手腕に敬服して、浮浪人同樣の生活をしてゐた洞郁に愛娘をめあはせることになつたのであつた。

本郷四丁目の藥師堂境内にさゝやかな借家をして、世帶を持つた。其の費用は父の喜右衞門が出して吳れた。そして父は洞郁に一ヶ月分の生活費を與へて、其の月中に次の月の生活費を自分で稼ぐやうにと云ひ付けた。洞郁も眞面目になつて働いた。其の頃世間の人が、毎月繪馬を荒神樣に上げる習慣があつ

て、其の仕入の繪馬を雜貨屋で買つてゐた。洞郁は主に此の繪馬を描いて生活費を稼いだ。畫料は一枚が文久二文即ち三厘だつた。洞郁は晝の間は自分の勉强に費し、夜業に繪馬を描いたが、熱心に描いたので、最初の一月に一兩二分を働いた。處が、夫婦の生活費は三分で足りたので、一ケ月で三分餘分が出來たのだつた。

其の後彼は綿繪を主に描くやうになつた。横山町の辻文、兩國の大黒屋、芝の和泉屋等が當時一流の繪草紙屋で、洞郁はそれらの店から注文を受けては描いた。更に後には日本橋の狹原、通四丁目の金花堂などといふ宿の物も描いた。洞郁の描く綿繪は、浮世繪風の豔艶な美人もあつたが、主に武者繪が多かつた。それが國芳の感化から來たものであることは云ふまでもなかつた。彼は全體非常に國芳を崇拜してゐた。幼年時代に彼の父は國芳の惡感化を恐れて彼を國芳の門から去らせたのだつたが、併し其の感化は既に彼の腦裡に浸み込んでゐて遂に生涯を支配するやうになつてしまつた。彼は國芳を尊敬して、其の繪を見る時には必ず拜一拜して、然る後展べて眺めるのだつた。國芳の影響には長所もあれば短所もあつた。彼は國芳の短所をも十分傳承して、放縱不羈に流れ、殊更に下等社會に興味を有つやうになつた。彼は遂に生涯を通じて素行は修まらなかつたが、然し乍ら恩義に感ずることは非常に厚かつた。彼の二度目の師である前村洞和が歿したのは、彼が家を成す前の嘉永六年だつたが、洞郁は師の病中にも絶えず見舞ひに行つて小遣錢などを貢いでゐた。洞和は永の煩ひで窮してもゐたが、腦病が進行したので晩年は痴呆のやうになつてゐた。洞郁は洞和が死ぬと、父を亡つたやうに嘆き悲み、其の後は自分で洞和の肖像を描いて掛軸に作り、忌日〳〵には必ず其の前に茶菓を供へて拜するのだつた。後には更に面打師出目源助に依頼してそれを肖像に彫刻させ、佛壇に入れ置いて朝夕禮拜してゐた。

洞郁は斯うして世の中へ乘り出した。畫史として、江戸の一隅に旗幟を立てた。併し社會は容易に彼を認めて與れなかつた。それは時世も非だつた。文化文政の黃金時代を一轉期として、社會の景氣が下火になるにつけて、繪畫の流行は日に〳〵衰退に赴くばかりであつた。そこへ例の文人畫の壓迫を蒙つて來たので、文人畫以外の繪畫を以て優越の地歩を占めようといふのは容易ならぬ業だつた。餘程の特色を見せない限りには世人は顧て與れなかつた。

彼は、何か新機軸を出して世人を驚かせやうと考へた。そして、鳥羽僧正の筆意に倣つて一種の狂畫を描き始めた。其の時分から彼は惺々狂齋と號した。

鳥羽僧正は所謂鳥羽繪の元祖である。僧正は名を覺猷と云ひ、覺圓僧正の弟子で、大僧正となり、天台座主に補せられたが就かず、長承六年に青蓮院に寂した。鳥羽僧正の父は、今昔物語の著者宇治大納言隆國である。僧正は畫技に長じ、特に戯畫を描くに巧だつた。其の構圖が奇拔で、筆致の雄勁にして輕妙なることは後代の名匠も及ばず、平安末期に於ける緇流の畫家中最も傑出してゐた。多く鳥羽に住したので、世に鳥羽僧正と號するのだつた。

狂齋の戯畫は巧みに世人の嗜好に投じた。其の飄逸簡狂の筆は前後に無類と稱せられた。それに依つて彼は一躍畫界の流行兒となることが出來たのだつた。けれども、其の畫風は彼の本意ではなかつた。

文久二年の八月、兄の直次郎が沒した。直次郎は幼小より父の側にあつて學問武藝を學び、砲術に長じてゐた。爲に江川太郎左衛門の配下に屬してゐたが、資性沈勇にして慈愛の念に富んでゐた。或年中濱萬次郎と一緒に鯨獵をしたことがあつたが、其の船が南洋で颶風に遇つて覆へるばかりになり、船中周章狼狽して爲す所を知らなかつた時、直次郎は一刀の下に帆柱を切り倒して漸く一行の命を救つたのだつた。彼は非常によく弟を愛して其の面倒を見て呉れた。狂齋が放浪生活を送つてゐた時分、親類知己の悉くが彼に愛想を盡かしてしまつても、兄の直次郎だけは見捨てずに可愛がつて呉れたのだつた。で母親などはよく周三郎に向つて「お前も早く兄さんのお世話にならぬやうにならなければいけない」と云つたものだつた。其の兄に死なれたことは狂齋に取つて精神上の大打擊だつた。

其の頃の話である。或る日狂齋の家の門口へ一人の乞食が來て合力を乞ふた。躄車に乘つて獨りで押して歩いてゐて、齢頃は七十に近い老爺だつた。丁度其處に狂齋が居合はせたので見ると、其の老爺は確か以前彼の實家などへ仕事に來たことのある左官の佐十といふ男に相違無かつた。併し其の佐十なら立派な腕を持つてゐる職人だつたから、いかに老い朽ちたにしても乞食にまで落ちぶれるとは餘り以外だつた。

「お前は佐十ぢやないか」と狂齋が云ふと、躄者は驚いて狂齋の顏を見て

「へえ……左う仰つしやる貴君樣は？」

「見忘れたかな、火消屋敷の甲斐の二男の周三郎だよ、お前よく家へ仕事に來たつけぢやないか」

「へい／＼、甲斐樣の若旦那樣で、どうもお見それもうして失禮致しました。併し恁んな態でお目に掛つて、まことに面目次第も御座いません、お屋敷の皆樣はお變りも御座いませんか」

「うん、親共は壯健だが、去年兄貴が死んだよ」
「それはどうも、一向存じませんでした、確かお兄樣は直次郎樣と仰しやいましたな、まだお若いのに御愁傷樣で御座います」
「どうも壽命で仕方が無い。時に佐十、お前も見れば片輪になつて氣の毒だが、物貰ひをして歩くといふのはよく／＼だらうな、とにかく此處では話しも出來ない、家へ這入つて茶でも飮んで行くがいゝ」
「滅相な旦那樣、恁んな汚い態でお宅へ上れますものですか」
「構ふもんか、俺んとこだつて乞食小屋同樣なんだ、それ、手を貸して遣るからまあ一寸上るがいゝ」
狂齋は無理に佐十を家の中へ引入れて、それから種々事情を尋ねた。此の佐十といふ男は、元越中の生れだが、職人で若い時から江戸へ出て暮らしてゐるのだつた。佐官としては矢鱈人に負けないだけの腕はあつたが、生涯子供を持たずにしまつた。處が近年齡を取つて仕事が出來なくなつた所へ、脚の病を煩つて躄になつてしまつた。女房はたうに死んで、誰れ一人世話をする者も無い、國元の親類と云つた處で、何十年も不通にした後で、躄になつてから世話をして貰ひ度いとも云つて遣れず、此の土地の知り合ひの者とて、躄になつた佐十を見ては皆顏を反向けてしまふのだつた。
「是れもみんな若い時分から極道をした罰が中つたんだと諦めちやあ居りますが、情無いことに死に切れずに、恁うして今ぢや乞食とまで落ちぶれたやうなわけで御座います」と佐十は云つた。
「左うか、それあどうも困るだらう、併し、其の體で物貰ひをして歩くのも大變なわけだ、何かいゝ工夫がありさうなものだがなあ」
狂齋は如何にも佐十が氣の毒で、どうかして救つて遣りたいと考へた。彼は暫時腕を拱いて思案してゐたが
「や、いゝ事を思ひ付いた、俺に一つ工夫がある、そいつをやればお前も滿更乞食をしなくても濟むだらう」
「有難う御座います、どんな事をやるんで御座んすか」
「いや、もう少し待て、二三日中によく考へて置くから、今日はまあ歸んなさい」
と云つて狂齋は若干かの錢を佐十に與へて、二三日過ぎてからもう一遍訪ねて來いと云ひつけて其の日は歸した。云はれた通り二三日經つと佐十はやつて來た。すると狂齋は其の間に大幅に地獄極樂の圖を描き上げてあつた。それは細川玄以が作つた能狂言朝比奈地獄めぐりから思ひ付いた趣意で、近年地獄界

が不景氣になり、閻魔大王以下の冥官一同生活難に脅やかされてゐるのに反して、極樂界は非常な好景氣だと聞いて、冥界の物共何れも極樂へ行つて仕官の道を求めるといふ筋で、貧乏な鬼共は各々角を切り角細工にして旅費に充て阿彌陀の本廳へ行つて勞働に從事するといふ風刺と滑稽に富んだ複雜な戲畫だつた。狂齋は其の畫意を丁寧に佐十に教へて、

「お前はこれから緣日のやうな場所へ行つて、此の繪を掛けて置いて俺が今云つたやうな事を面白く話して聞かせるのだ、別段見料を取るわけぢやなくても、岐度相當にお賽錢が上るだらうと思ふから試しに一つやつて見るがいゝ」

と云つた。佐十は大に喜んで狂齋の指圖通りにやつて見た。すると果して見物人は、其の繪の奇拔な構圖を口々に賞め、或ひは極樂の諸菩薩に隨喜して、各々其の場で賽錢を投げるのだつた。佐十が躄車を押してやつて來たから狂齋は

「どうだつた」と云ふと

「先生樣、どうもハヤ大した御利益です、お賽錢が恁んなに上りました」

と云つて佐十は錢を出して見せた。

「さうか、それは先づよかつた、ではこれから毎日方々へ出張るがいゝ」

「へい、もう恁んなに儲かつちやあ私も廢められません、序で先生樣、どうか此の内から宜しいだけ貴君の上前をお取んなすつて下さい」

「莫迦ア云へ、俺が貴樣の上前をはねられるものか、お賽錢はそつくり貴樣の物だ」

「それぢやあ餘りうま過ぎて冥利が盡きやすねえ、濟みませんで御座んすねえ」

「なあに、いゝから仕舞つとけつてば」

左官の佐十はそれから毎日緣日を廻つて歩いては地獄極樂の繪を諸人に見せた。彼はそれに依つて意外の利益を得て、神田橋本町に一戸を買ひ、氣樂に餘命を養ふことが出來たのだつた。

五

慶應元年三月下旬のこと、狂齋は信州旅行を志して、門人松本留吉を伴れて江戸を發つた。一體狂齋は旅行嫌ひで、これまで滅多に江戸を外にしたことはなかつた。出たと云つても大概武州或ひは房總地方位に限られてゐた。だから自然彼の畫は多く市井の生活や物象に題材が取られてゐた。彼は、人物、神鬼、翎毛、鱗甲の類を描くのに妙を得、狂怪戲畫の筆を下すに當つ

ては變化窮り無く、奇想百出人をして絕倒せしむるの才があり、又神怪氣形を筆端に驅使するの力に至つては近世に其の比を見なかつた。確かに葛飾北齋以來の健筆だつた。が、山水は彼の長所ではなかつた。彼が旅行嫌ひであるのも所謂のあることだつた、

其の狂齋が信州旅行を志したのは珍らしい出來事だつた。併し彼は其の頃頻りに山を描いて見度くなつた。峻嚴の陰晴、幽谷の雲霧、激流岩に咽び、瀑布玉を吐くの有樣、さういふ物が描いて見度くなつたが、それには親しく實地を目擊するの必要があるので、さてこそ今回の旅行を思ひ立つたのだつた。

狂齋と留吉は、上州を經て、赤城、榛名、妙義の山々を寫生して、信州に入つた。往く〳〵信州の諸山を寫生して、同國高井郡小布施村といふ處に高井三九郎といふ人を訪ねる目的で、須坂町を經て小布施に向つた。其の日は空も晴れ渡り、風は無く暖かで、絕好の春日和だつた。狂齋と留吉は道々話し乍ら景色の佳い山道を步いて行つた。すると行手に當つて一本の松の大木があつたが、其の枝振りが實に面白いので寫生することにした、

「留吉、お前火をたいて酒の支度をしろよ」

「宜しう御座います」

留吉は枯枝を拾つて來て路傍で火をたいて、用意の酒道具を出して瓢の酒を溫めた。狂齋は先づ酒を煽つて、それから寫生に取り掛つた。留吉も寫生を始めた。さうして二人が餘念無く寫生をしてゐると、突然背後から、

「やいツ」と呶鳴つた者があつた。駭いて振り返つて見ると、年頃四十位の雲介みたいな人相の惡い男が尻をまくつて突つ立つてゐた。

「やいツ、うぬ等あ誰れに斷つて已れの地所で火をたきやあがつた、さあ勘辨ならねえだぞ」と其の男は云つた。

狂齋は餘り其の男の出樣が荒いのでぐツと癪に障つた。それに彼だつて酒の勢ひがある

「何、勘辨ならない、火をたいたのが何が惡い、燃える物も何も無い原つぱぢやあないか」

「此の野郎太えことを吐かしやあがる、原つぱだつて磧だつて人の地所で默つて火をたきやあ火付けも同じ事だぞ」

「火付けだと、火付けなら逆磔刑だ、磔刑に出來るものならして見るがいゝ」

「野郎もう勘辨ならねえ、此處は松城領だぞ、今に見てゐやあがれ」

かう云ふかと思ふと其の男は踵を返してとツとゝ向うへ驅け

て行つた。

「口程にもない、こつちが二人で敵はないと思つて逃げて行きやあがつた」

「どうも先生は氣が強う御座いますね、彼奴にやられた日にやあ二人だつて敵やしませんよ、私はビク／＼して居りました」

「臆病な男だ、江戸子が信州邊りの田吾作に脅かされて溜るもんか」

狂齋は喧嘩に勝つたやうな心地で、いゝ心持だつた。それから道具を仕舞つて、火を消して、一丁ばかり來ると茶店があつた。茶店へ寄り込んで澁茶を啜り乍ら　婆さんに今の話しをすると

「それは此の村に住んでゐる權十といふ奴でがんす。惡い奴でがんすよ、乾度仲間を伴れて來てお前様等あ捕めへてお金でも强請る氣に違えございませんだ、早く逃げてしまはつしやらぬと飛んだ目に遇ひますべい」と婆さんは云つた。

すると狂齋は忽ち蒼くなつてしまつた。

「留吉、大變な事になつた、早く逃げよう」

茶代を置いて其處を出たが、此の道を歩いて行けば直ぐに捕まつてしまふと思ふので、二人は道の無い雑木林の中へ紛れ込んで滅茶苦茶の方角をさして逃げだした。石に躓き莢に嫋まれ漸うのことで林の中を出ると、行手に谷川が流れてゐて橋は架つてゐない。途方に暮れて立つてゐると、其處へ一人の牧童が牛を牽いてやつて來た。これ幸ひと狂齋は牧童に頼んで二人を牛へ乘せて向ふ岸へ渡して貰つた。それから三里ほど歩いて漸う小布施の高井の家へ着いた。

高井三九郎は土地の豪家で、代々其の家は酒造を營んでゐた。三九郎は畫を好んで、青年時代に京都へ遊んで岸駒の門に入つた。すると或る時岸駒が門人を集めて、當代の畫史の品評をした後で「今京阪其の他に畫工は多いけれども、我が腕に敵する者はない、唯一人おそるべきは江戸の葛飾北齋である」と云つた。其處で三九郎は直ちに江戸へ來て北齋に入門したのであつた。さういふわけで北齋とは師弟の間柄であるので、北齋も天保二三年の頃此の土地に遊んで、三九郎の家に一年間滯在した。信州を遊歴する畫工は大概一度は高井の家に草鞋を脱ぐのが常だつた。

主はもとより狂齋の畫名を慕つてゐたので、其の來遊を非常に欣んで迎へた。狂齋は數日滯在して、諸方から依頼される畫を揮毫して、小布施を立つて善光寺へ向つた。其處から善光寺へは三里だつた。

善光寺では佐渡屋といふ旅籠へ泊つた。そして、此處でも依頼の畫を描いたり、留書を作れて方々寫生をして歩いたりした。もういつの間にか、五月雨の時節となつてゐた。其の雨が連日降り續くので、狂齋師弟は外出が出來ず宿屋で酒ばかり飲んでゐた。さうかうしてゐるうち雨量はます〳〵多くなつたので、到頭諸川が大洪水となり、殊に筑摩川が汎濫したので沿岸の村々水難を蒙つて大騷動になつてしまつた。宿屋で退屈してゐた狂齋は其の話を聞くと態々水害地へ出掛けて行つて其の慘狀を寫生した。

其の頃、戸隱神社の中院の本社の建築が落成したが、其の天井の龍を描くものがなくて、一山の神官僧侶が悉く是れで頭を惱ましてゐた。戸隱山は善光寺の西方五里、四面巍峨たる高山を以て圍み、當山の中院は思兼命、寶光院は表春命、奧院は手力雄命、地主神は九頭龍權現鎭座し、三谷一山に坊舍三十六院、社領千石、造營料三百石、御供米料八十石の大社だつた。

さて天井の畫龍を揮毫さすべき畫工が無くて困つてゐる折柄、近頃河鍋狂齋が善光寺へ來てゐることが分つたので、三十六坊會議した上、別當勸修院から使者を遣はして狂齋を迎へることになつた。狂齋は快諾して、奉納で描くことを約束した。翌日彼は戸隱へ向つた。

狂齋は山へ登つた日から每夜御手洗の瀧を浴びて、それから、三十丁ある奧の院に參拜して祈願を籠めた。そして結願の後漸く筆を執ることになつた。

中院の拜殿は天井の大さ十間四方で其の周圍が小張りの合天井になつてゐた。其の日は一山の神官僧侶は勿論遠近の人々が聞き傳へて見物に來たので、さしもの本社も立錐の餘地なく人の山をなすばかりだつた。狂齋は先づ、三合入の大盃を三杯傾けた後で、筆を執ると、十間四面を頭一つで掩ふかと思ふばかりの大龍を描き出した。人々は息を呑んで眺めるのであつた。

其の畫龍は七日間で描き了つた。そして上へ張り上げて見ると其の出來榮へは更に一入だつた。雲も風も見る人の頭上に迫つて來るやうに感じられた。それは狩野派正統の筆法を用ゐて描いたもので、筆力の剛宕古今に此類があるまいと思はれた。諸人の驚駭譬へやうもなかつた。此の畫は彼が生涯を通じての傑作の一つだつた。

そこで一山の人々は、更に龍の周圍の合天井をも揮毫して貰ひ度いと云つて賴んだ。それは全部で六十八枚あつた。そして是れに對しては畫料は望みに任せようと申し出たのだつた。けれども狂齋は今度は斷つた。彼は思つた。今から更に六十八枚描いてゐたら描き上げる時分には冬になつてしまふ。冬迄此の

山の上に引き留められてゐては叶はないと彼は考へた。初めは珍らしくて有難かつた山上の生活も最早其の單調さに飽き〳〵してしまつた。早く山を下りて白粉臭い巷の旨い酒でも飲まなければ遣り切れなくなつてゐたが、そろ〳〵江戸も戀しくなつてゐた。江戸の事を考へるともう一日も山に居る氣はしなかつた。で、遁辭をまうけて斷つたのだが、人々は承知しなかつた。是非共描いて貰ひ度いと云つて歸して呉れなかつた。仕方が無いので狂齋は合天井を描き始めた。そして漸う八枚描いた。餘す處まだ六十枚、前途遼遠だ、彼はうんざりしてしまつた。別當所では狂齋主從が遁げて行くことを恐れて、門番に命じてあつて二人を門の外へは一歩も出させなかつた。

「留吉、どうも弱つたな、何とかして遁げ出す工夫はないだらうか」

「さうですね、併し晝間は見張りが嚴しくつてとても見付からずに遁げるといふことは六か敷う御座いますね」

二人はコソ〳〵相談して、或る晩こつそり荷拵へをして、闇に紛れて別當所の庭から崖を下りて遁げ出さうとした。が何分暗さは暗し、勝手が分らぬのでマゴ〳〵してゐるうちに或る家の裏口へ行き當つた。其の家は門前の掛茶屋だつた。そこで茶屋の者を呼び起して「どうか內證で表へ出して貰ひ度い」と云つて頼むと、先方はもとより狂齋の顏を知つてゐるので「はい、承知致しました、少々お待ち下さいまし」と云つて待たせて置いて早速此の事を別當所へ注進してしまつた。二人は又もや引き戻されてしまつた。併し、最早所詮留まる意志の無い事が分つたので、一山の人々協議の上狂齋主從の下山を許すことにした。合天井の殘りは明年の春再び登山して揮毫して貰ひ度いと云ふので、狂齋は唯々として承諾したのだつた。

當山中院大井畫御奉納の所時季冷氣御揮毫難相成依テ來陽御登山皆成候樣奉願候以上

八月一日　戸隱山別當所印

河鍋洞郁樣

かういふ書付を貰つて狂齋は戸隱山を下りたのだつた。併し彼は其の後再び戸隱山へ登らなかつた。合天井の繪は八枚だけで、殘りの六十枚は現今でも白木の儘である。

狂齋は山を下りると直ぐ松本の方を志して發足した。松本から四里手前の稲荷山といふ宿で泊つた。此處は商家が軒を並べて繁昌の地だつた。すると此の土地に油屋五郎右衞門といふ人があつて、風流閑雅で畫を好むところから、狂齋を我家へ招待してさま〴〵にもてなした。頃しも中秋明月の時で、空も晴れて靜かだつた。狂齋は同好の人々の案內で姨捨の月を觀に出掛

けたりした。そして江戸へ歸つて來たのは九月の初めだつた。

六

明治の世となつた。狂齋の畫名はます／＼高くなつた。明治初年東京の畫壇で文人畫以外の大家として並び稱せられたのが、柴田是眞と狂齋であつた。是眞と狂齋とは、繪畫の上に於て全く同じ傾向を有つてゐた。是眞は岡本豐彦に就いて四條派の精髓を學んだが、一家を成すに當つては、古今の雅俗を自家の藥籠中の物として獨特の意匠を以て、所謂町繪風の輕妙にして洒脫な繪を描いた。それはてうど狂齋が狩野の正統から出て浮世繪を描き、飄逸怪奇の狂畫を描いたのと同じであつた。そして此の二人は、亡びてしまつた江戸時代を代表する掉尾の畫家であると同時に、やがて來る內外諸流融化の次ぎの時代をも照すところの大きな明星であつた。

狂齋は本郷から湯島四丁目の當時大根畑と云つた處へ住居を新築して引き移つた。其處では能舞臺などを建てゝ頗る廣壯な建築だつた。彼は旺んに畫作をした。洞郁陳之、惺々狂齋の名の外に、畫鬼、畑狂者、酒亂齋、雷醉、惺々庵、賣畫、狂者外史、齊畫道人、惺々狂者、如空入道などと樣々の號を用ゐた。

彼の道樂は能だつた。狩野塾以來能の稽古を續けてゐたので今では餘程上達してゐた。併し自身もそれが大自慢で少し醉と直ぐさま舞ひ出すので、門人などは毎度弱らせられた。能面を蒐集する事も附隨した道樂だつた。しまひには古刻の能面を數百貯藏するやうになつて、暇さへあれば取り出して樂しんでゐた。

併し、狂齋に取つては、酒以上の好物は無かつた。若い頃のやうに放蕩はしなくなつたが、酒は何歳になつても止らなかつた。酒量は一度に二升位は樂にやつた。性質は淡白で、金づかひは綺麗だつた。何處へ行つても酒だけは遠慮無く飲んだ。畫の謝禮なども正直に金を包んで持つて來るよりも、酒の二升も提げて來れば本人は其の方が餘程喜ぶのだつた。

其の頃厩橋に能舞臺があつて、或る日も狂齋は其處へ行つたが、酒を出されたので例に依つて飲んだ。鯨飲飽く事を知らず大醉して、歸途についたが、中途で路傍に倒れ石を枕として鼾聲雷の如く、通行人を驚かした。すると巡査がやつて來て引き起すと、狂齋は大に怒つて巡査に向つて小便を引掛けるといふ體たらくで手が付けられないのだつた。さういふ失敗がしば／＼あつた。甚だしい時は醉興に乘じて亂暴を働くのだつた。

彼は平常は非常に溫良な男で、物を云ふさへ遠慮勝ちな程だつた。それが一朝酒を飲むと此の有樣なので、數々の失敗を演

じた上に、とかく人から嫌はれるのだつた。此の酒癖の爲めに狂齋は生涯を通じて餘程の損をした。けれども、彼が一度び酒に元氣を得て筆を揮ふ段になると、筆端雲湧き龍躍り、縱横に飛動して眞に人を驚かすやうな畫を作るのだつた。だから、酒が、一面に於て彼を誤つてゐたと同時に、他の一面に於ては酒が彼を活かしてゐるとも云へるのだつた。不思議なことには、どれ程大醉した時でも、翌朝は必ず二時三時に起きて平常の通り畫作をした。決して宿醉をして仕事を怠けるやうなことはなかつた。それは彼が精力絶倫で且、萬事に規則正しい性格だつたからである。

明治三年十月六日の事だつた。其の日不忍辨天の境内の長蛇亭に於て、俳人其角堂雀志が主催で書畫會の催しがあつた。狂齋は其角堂とは年來の友人であるので此の日席上揮毫を賴まれたが、几帳面な男なので早朝から出掛けて行つた。すると會場には主催者の其角堂がたつた一人來てゐるばかりで、畫家も來客もまだ一人も顏を見せなかつた。其角堂は非常に喜んで早速酒を命じて二人で飲み始めた。其角堂も大の飲み手だつたので二人切りで盛んに飲んで、愈々會が始まる頃には三升餘りの酒を飲み盡した。狂齋は非常に醉つてゐた。

席上揮毫が始まると、狂齋は多くの人の依賴に任せて縱横に筆を揮つた。人々は狂齋に揮毫を賴む時は、めい〳〵盃の代りに茶碗だの丼を差し付けて「先生一つ獻上致します」と云つて波々とそれへ注いでから、さて扇面なり唐紙なりを差出すのだつた。彼は醉ふに從つてます〳〵健筆になり、奇々妙々の物を描き出すので、人々は爭つて彼に大盃を差し付けては揮毫を依賴するのだつた。

狂齋は早や六七升も傾けた。さすがの彼も今は泥の如く醉つてしまつた。すると其の時彼の近くで誰だか分らぬが怪んなことを云つて聲高に話してゐた。

「今日私が王子へ行つた處が、一名の異人が騎馬で遣つて來て扇屋の店へはひるんです、馴染と見えて女中共が飛び出して來て、旦那今日はお一人で御座いますかと云ふと、その西洋人が、否え一人ではありません、馬鹿を二人作れて來ましたと答へるから、妙な事を云ふと思つて見てゐるとね、少し遲れて鬚を生やした立派な官員が二人矢張り騎馬で遣つて來たぢやないか、どうも驚いたよ、

其の話しが狂齋の耳に這入つた。すると、狂齋は何と思つたか忽ち筆を執つて、有り合ふ紙へ、足長島の人物に或る人が二人で靴を履かせてゐる圖と、手長島の人物が大佛の鼻毛を拔いてゐる圖をも描いた。足長島と大佛の顏は西洋人を模してあつ

て、靴を履かせたり鼻毛を拔いたりしてゐる人物の面相は當時廟堂に立つてゐた二三の大官の顔に似てゐるのだつた。

それから暫く經つた頃、突然數名の役人がドカ〳〵と會場へ闖入して來た。不意の出來事に駭いて、忽ち會場は總立ちとなり、大混亂に陷つた。人々は譯も分らず周章てふためいて、取り持ちの藝妓達は悲鳴を擧げて泣き叫び、中には池の中に、落ち込んだものもあるといふ騷ぎだつた。其の中で役人は、狂齋の姿を發見すると、忽ち取り押へて繩を打つて、引立てしまつた。併し當の狂齋は、泥醉してゐるので、縛られたのも知らず、踊りながら連れて行かれるのだつた。此の騷動の爲め會は散々の有樣で其の儘中止になつてしまつた。

狂齋が捕縛された理は由、足長島と手長島の繪が、高貴の人を誹謗し嘲弄するものとして、何びとかの密告に基いたのだつた。狂齋は翌朝醉が醒めるに及んで、初て、前日からの自分の身の事を知つて、後悔臍を嚙むと雖も及ばなかつた。泥醉中の戲筆で彼は殆んど憶へが無かつた。

其の月の十五日に彼は呼び出しになつて、取り調べを受けた。が、もと〳〵憶への無い事なので殆んど答辯のしやうも無かつた。其の儘再び禁錮された。彼は前後百十餘日獄中にあつて、翌年正月卅日に至つて漸く放免された

さすがの狂齋も、今度の失敗では、泌々と後悔したのだつた。そして此の事を心に銘ずるため、狂齋の名を改めて其の後は曉齋と稱することにした。其の上一度は酒も廢さうかと思つたが、併し是れだけは廢められなかつた。

彼は、醉へば斯の如き有樣だけれども、平常は非常に溫良しくてそして几帳面だつた。朝は必ず二時三時に起床して繪筆を執り、定められた日課を怠るといふ事はなかつた。彼は日課として、菅公の像と觀音像とを毎日描いた。菅公像は、龜戸、平川、湯島の三天神へ毎月五葉宛奉納し、觀音像は淺草、上野淸水、京都知恩院觀音の三堂へ毎月十葉宛奉納した。生涯それを繼續した。

門人等に對しては非常に慈愛深かつた。平常門人と、同じ物を食べてゐて、自分だけ奢るといふことは決して無かつた。それで或る時恁んな事もあつた。或る繪の依賴者が彼の所へ馬鮫魚（さわら）を一匹贈つて來た。曉齋は大に喜んで、先づそれを觀音樣に供へた。其の觀音は、駿河臺觀音坂に住んでゐた先師狩野洞白の家で代々護持した觀音で、洞白の家が沒落した後或る機緣から曉齋が引き取つて祭つてゐるのだつた。彼は何んな物でも先づ觀音樣に供へるのが例だつた。

夕食の時馬鮫魚の照り燒を作らせた。例に依つて一同揃つて膳についた。すると曉齋は何思つたのか門人達の膳の上を見廻

してゐたが、やがて自分の膳の上の皿を取ると、いきなり妻の膝の上に投げ付けた。そして彼は憤りにおのゝき乍ら云つた。

「何故儂の膳にばかり大きな切身を付けたのだ。お前が恁んな心掛では立派な門人が出來ないではないか、儂は馬鮫魚を食べたければ何時でも食べられる。が、門人達はそれが出來ないんだ、何故彼等の膳に大きなのを付けないのだ、お前のやうな淺間しい女と將來一緒に暮すことは出來ないから出て行け」

激し易い曉齋は恁う云つてハラ／＼と涙を零した。妻はさし俯向いた儘一言も答へなかつた。門人達が樣々に云ひなだめて漸う其の場は納まつたが、折角の晩餐は是れがために滅茶々々になつてしまつた。

「どうも面白くない、今夜は俺が皆に鰻を奢つて遣るから一緒に出掛けるとしよう」

曉齋はさう云つて、十人以上の門人を一人殘らず伴れて神田川へ出掛けるのだつた。

七

駿河臺狩野家の觀音が、曉齋の手にはいるまでには、一場の因緣話があるのだつた。

元來此の觀音は、狩野家に取つては由緒のある觀音であつた。駿河臺狩野家の先祖から四代目に洞春美信といふ人があつた。此の人が或る年淺草觀音の天井の天人を描いた。當時、淺草觀音は上野寛永寺と同じく天台宗であるところから、輪王寺の宮の支配下にあつた。そこで輪王寺の宮から、奇特の故を以て洞春に對して、淺草觀音に在つた御前立觀音を一體下賜された。洞春は是れを駿河臺の屋敷に安置したのだつた。以來狩野家の寶物となつて、代々是れを護持し、先祖からでは八代目の洞白の代に至つたのだつた。狩野家では何よりも此の觀音を尊崇して、朝夕の御守りは門人が交替で勤めてゐた。然るに、洞白が歿して、其の子洞榮が九代目を相續したが、やがて戊辰の革命となつたので、狩野家は德川氏と運命を共にしたければならなかつた。さしもの駿河臺の狩野の家も沒落して、生計に窮し、一家轉々として流浪する境涯にまで零落した。其の際、右の觀音像と、今一つの家寶となつてゐた探幽の狂畫卷物一卷とが、本鄉六丁目の倉田屋といふ質屋にはいつて、其の儘質流れになつてしまつた。倉田屋の主人は信仰の深い人だつたので、自分の家の内に特に持佛堂を造つて此の觀音を安置したのだつた。其の間は何事も無かつたが、主人が死んで養子が後を相續すると、養子はそれを邪魔にして、持佛堂を毀して佛像だけ土藏の中へ入れて置いた。が後にそれも無駄だといふので取り出して、

下金屋に金五圓で賣り拂つてしまつた。

下金屋は、其の佛像に少なからず金が塡めてあるのを見込みで買つて來たので、其の金を取る爲めに、佛像を一と晩中水に漬けて置いた。すると翌朝起きてから、女房が蒼さめた顏をして

「ねえお前さん、妾あ昨夜妙な夢を見たんだよ、眞つ白い鬚をはやしたお爺さんが妾の枕許に立つて、此の觀音を粗末に扱つては成らんぞ――と云つたんだよ、」

「ふーん」

「妾あまだアリ〳〵其のお爺さんの言葉が耳に付いてゐるのでね、今朝水に漬けてある觀音樣を見た時いやあな氣持がしたのさ、何だか氣味が惡いから、後生だからお前さん此の佛樣を倉田屋へ返して來てお呉れな」

「うん、だが、惜しいもんだな、俺の見込みぢやあ金が十匁位は取れる積りなんだ」

「十匁取れたつて廿匁取れたつて、若し罰が中つて眼でも潰れて御覽、詰まらないぢやないか」

「さう云へばさうだな、ぢやあ返してしまふことにしよう」

下金屋は早速觀音を持つて行つて、譯を話して倉田屋へ返してしまつた。倉田屋では再び土藏の中へ入れて置いた。すると、それからといふもの店の小僧達が此の物を取りに行くことを嫌つて容易にはいらうとしないのだつた。で倉田屋でも困つた。元の賣人の手へ戻して遣り度くも其の人達は何處へ行つたのか行先きも分らなかつた。

すると倉田屋の隣家の下駄屋の主が此の觀音の來歷をよく知つてゐたので、それを話した後で

「湯島四丁目に居る河鍋曉齋といふ繪師は狩野家の門人だから、あの人に賴んで引き取つて貰つたらどうでせう、金の十兩も付けたら引き取つて呉れるでせう」と云つた。

そこで倉田屋は、近くの松吉といふ料理屋へ行つて曉齋を招待した上で、右の話しをして、金十圓附けて引き取つて貰ひ度いがどうだらうと云つて相談した。曉齋は觀音を引き取ることは承諾したが、金を附ける代りに、探幽の狂畫の卷物を貰ひ度いと云つた。其の卷物は道具屋相場では五圓位の物だつたので、倉田屋は一も二もなく承知して、直ぐ樣其の二品を家から取り寄せて曉齋に渡した。曉齋は、圖卷を懷中へ入れ、觀音像は羽織の中へ入れて自分で背負つて我家まで持つて來たのだつた。

明治十四年第二回勸業博覽會に、曉齋は墨畫で一羽の鴉が枯枝に留つてゐる圖を描いて出品した。それは彼が晩年特に好ん

で描いた處の一筆畫で、筆墨の輕妙極致を現はしてゐた。處が彼は此の畫に百圓の定價を附して出した。當時百圓の畫と云へば大した物、と云ふよりもそんな物は殆んど無かつた。同じ時出品した畫壇隨一の耆宿で古土佐の大家である菊池容齋の葡萄と栗鼠の圖が、破格の高價でもつて金二拾圓だつた。だから曉齋のたつた一筆の鴉の値段の百圓は殆んど無茶だつた。である人が

「先生あれは戯談でせうね」と云ふと曉齋は答へて

「いや決して戯れではない。が、是れは強ち鴉一羽の價だと思つて呉れては困る。私も幼少から畫を學び始めて數十年辛苦を極めて來た、で是れは其の修學の價値を世人に示さうとしたことであつて、購買者の有無などは固より問題ではないのだ」と云つた。

處が、日本橋の榮太樓の主人が此の繪を一見して直ぐ樣買約をしてしまつた。買約濟といふ札が下つたのでそれが非常な評判になつた。最後に審査の結果妙技二等の賞牌を授與された。

併し曉齋はもと〱賣る積りで附けた定價ではなかつたので、榮太樓の主人から百圓受取るのは如何にも氣の毒に思つて、「五十圓に負けて上げませう」と云つた。すると榮太樓は承かないで、定價通り百圓で買つて、そして恁う云つた。

「鴉一羽が百圓だから買ふ氣になつたんだ、五十圓なら誰れが買ふものか」

曉齋は其の内五十圓を割いて、博覽會の監守人に慰勞の爲めに分配して遣つた。

神田明神の神官に月岡某といふ人があつた。或る年神前へ立てる衝立を新たに調製したについて曉齋に揮毫を依賴して來た。曉齋は承諾して請合つたけれども容易に描かなかつた。月岡氏は折り〱催促したけれども、曉齋は「其の内〱」と云つて延ばしてゐて、早くも三年經つてしまつた。そこで神官の方でも少し腹を立てゝ來て、他の畫家に描いて貰ふ約束をして、其の向きを曉齋の許へ云つて斷つて遣つた。すると、他の畫家が愈々描かうといふ日の前々日になつて曉齋が走つてやつて來て「誠に遲滯して申譯が無かつたが、漸く畫稿が成り立つたから參りました。」と云つた。神官の方ではもとより曉齋の繪を望んでゐるのだから、他の方は更に斷ることにして、曉齋に描かせることにした。

曉齋は直ぐに筆を執つて、其の衝立へ、墨で、二頭の獅子が奮鬪するの圖を描いた。筆を揮ふこと、疾風の如くだつた。僅か二三時間で描き上げた。それを拜殿へ立てた。墨色淋漓として金光の上に躍つて、殺氣殿に滿ち、觀る人喫驚しない

者はなかつた。

成田不動の額に、大森彦七鬼女と闘ふの圖を描いて奉納し、湯島天神の額には、野見宿禰當麻蹶速と角觝の圖を描いた。それらの畫は、戸隠山の天井の龍と共に曉齋の生涯に於ける傑作だつた。

曉齋程腕の達者な畫師は古來稀れであつた。其の點に於て彼は古今無双と稱するも過賞ではなかつた。併し、彼は學問が無かつた。平常書物を讀まず、手紙等も全部代筆代讀をさせてゐた。文字は落款以外は知らないと自身で云つてゐたが、眞逆それほどではなかつた。けれども兎に角文學的教養は甚だ乏しかつた。其の方面で彼の思想の背景をなしてゐたものは能樂位のものだつた。從つて、曉齋の畫には、寫實的要素が缺乏してゐるやうな場合が往々にして少くなかつた。それは彼が殊更に怪奇の畫題を撰ぶ場合に陷り易い弊だつた。或ひはまた筆力を示すの餘り、誇張の弊を伴ひ、風調野鄙に流れるやうな缺點もあつた。併し、それらの缺點があるにも係はらず、彼の偉大を認めなければならないのは、其の縱横無碍の手腕であつた。意匠のみを重んずる大正現代の繪畫者流の大部分に最も缺乏してゐる方面をば、多きに過ぎるまで具備してゐたのが曉齋であつた。

彼は常に門人に向つて斯う云つてゐた。

「世間には、蘭竹などを、只それ一つ學んで、それで畫家だと云つてゐる人がある。が、かういふのは所謂消遣の具で、他の職業に從事してゐる者が片手間に筆墨を弄するので、畫を以て職業にしてゐるのではない。苟も看板を掛けて畫家だと云ふからには、天地間の森羅萬象を悉く筆端に擒縱するだけの技倆がなければならないのだ、それには寫生を學ぶより外に方法はない、寫生の經驗を積んで、春花秋葉禽獸蟲魚を初め、山川草木から服飾器財、およそ形のある物は皆其の形を詳かにし、其の態を窮めるやうになつて、初めて一人前の畫工と云ふことが出來るのだ」

彼は、如何なる場合如何なる畫題を求められても、立所に其の畫を作ることが出來た。あらゆる粉本が頭の中にあるのだつた。それであるから曉齋は席畫などといふ場合になると、到底人の眞似の出來ない事をして見せた。

或る時築地の延遼館に當代の縉紳の宴會があつて、藤堂凌雲、福島柳圃、曉齋の三人が招かれて席畫をした。其の時曉齋は人々の望みに任せて、絹地、畫箋、色紙、など取りませ八時間に百八枚描いた。すると其の後或る人が曉齋を批難して、

「曉齋は一日に百八枚描いたさうだ、それほど樂に描けるの

に、何んで吾れ〳〵の依頼した物に限つて三年も五年も捨てゝ置くのだ、して見れば、彼は貴顕紳士に諂ふのだと云はれても仕方がない。頼み手次第で描くのだと見える」と云つた。

其の言葉が暁斎の耳に這入つた。彼は、

「それこそ飛んでもない間違ひだ。決して左うではない。席畫は時に臨んで慰みの座興に過ぎない。だから後年に至つても、席上畫と云つて過失があつても別に咎めない習はしになつてゐる。處が、家に居て筆を執る場合はそれとは異ふ、依頼の畫は後年永く殘すべき物であるから、種々の圖を案じ、色々工夫を凝らさねばならない、其の物毎に依つて、古人の筆意を探つて、得手々々を研究してそれを基にして描くのだから、一枚を仕上げるのも實に容易でない、だから私は晝夜の分ちなく筆を執つて殆んど寢食を忘れて苦心してゐるのだけれども、それで猶約束の期日に遲れるのはどうとも致し方がない。私の處には十年この方の依頼の絹ばかりでも既に三百枚から溜つてゐる、一枚を七日で仕上げるとして是れだけで五年掛るわけだ、しかし最早齢も六十に近くなつてゐるのに、日増しに新規の依頼が加はるばかりだから、どうともすることが出來ない――」と云つて嘆息するのだつた。

八

初代尾上菊五郎は幽靈變化の名人と云はれた人だつた。そして當時見物を驚かせた獨特の機械仕掛などは、松緑自身が製造したのだつた。以來音羽屋は代々幽靈を得意として、家の藝となつてゐた。五代目菊五郎もそれが得意だつた。其の音羽屋の家には、昔から幽靈畫の優れた物を澤山蒐集して秘藏してあるといふことを聞いたので、暁斎は一日菊五郎を訪問して見せて貰つた。が、終日見ても見盡されぬ程澤山あるのには暁斎も驚いてしまつた。あとで菊五郎は暁斎に向つて矢張り幽靈を描いて貰ひ度いと云つた。

「それでは私が古人が誰れも描いてゐないやうな幽靈を描いて見ませう」

と暁斎は云つて、非常な工夫を凝らして、獨特の幽靈の繪を描いて贈つたので菊五郎も大いに喜んだのだつた。

或る年、暁斎は房總地方を漫遊して、下總國相馬郡花野井村といふ處に、古來其の土地の寺に藏する甲冑小手脛當及び一筋の矢があつて、平親王將門の用ゐた品であると言ひ傳へてゐるのを一覧すると、げにも古代の作で將門の遺品であらうと思はれる程珍らしい物だつたので、彼は直ぐ樣それを寫生したのだ

つた。其の圖は彼の著書である曉齋畫談の中に載つてゐる。曉齋畫談は、明治廿年の刊行で、內篇外篇全四冊にわかれ、繪畫研究者に取つては得難い好粉本である。

曉齋には可成り大勢の門人があつたが、晩年其の中に一人の外國人が加はつてゐたのは特に異彩を放つて見えた。それはコンテルといふ英國人で、彼は元來油繪と製圖の專門家で、其の技術を以て日本政府に招聘されて來て官途に就いたのだつた。彼は本國に居た時から深く日本畫に趣味を持つて、探幽の粉本に依つて研究した程だつたが、日本へ來ると直ぐ、曉齋に私淑して、入門を乞ふたのだつた。併し曉齋は「私は到底貴下の師たる資格は無い」と云つて再三固辭したが承かないので、遂に彼の乞ひを容れたのだつた。コンテルは間も無く非常に能く描くやうになつた。彼は曉英と號し、繪畫共進會に、雨中の鷺及び鯉魚の圖を出品して銅章を受けるほどになつた。

曉齋はよくコンテルと一緒に寫生旅行をした。或る年も二人で鎌倉に遊んで、鶴岡八幡、建長寺、圓覺寺などの古代の樣式や寶物などを寫生して、それから新居の閻魔堂へ行くと、コンテルは頻りに其の像の異樣なのを珍らしがつた。そこで又是れを寫生して歸つたが、後に調べると、其の閻魔の像は運慶の作で、應永の亂に戰死した人の亡靈を弔ふ爲めに造寄した物だといふことが分つた。曉齋はコンテルと一緒に日光へも行つたりした。

曉齋は生涯に三度び妻を迎へたのだつた。最初の妻は子が無くて死んでしまつた。第二の妻も、男の子を一人生んだ後死んだのだつた。第三の妻は女の子を一人生んだ。曉齋は二人の子供に繪を教へた、男子は曉雲と號し女兒は曉翠と號した。

明治十九年に曉齋は湯島大根畑から下谷根岸へ移轉した。それから後幾ばくもなく彼は病を得た。病氣は胃病だつた。

それが次第に重つて行つた、彼は久しく病床に呻吟してゐた。彼も自分の不起を悟つてゐるのだつた。

或る日曉齋は家族に向つて、庭前にある一つの大きな石を指し示し乍ら

「儂が死んだならば、あの石で蝦蟇を彫刻して塚の上へ置いて貰ひ度い、決して世間普通の墓などは建てるに及ばない」

と云つた。それは彼の六十年の繪畫の生活が、三歲の時母の膝に抱かれて行つて、蛙を描いたのに創まつてゐるので、死後の墓しるしもそれに因んで蝦蟇を置き度いと考へたのだつた。

そのうちに明治二十二年の春になつた。曉齋の病は俄かに革まつて來た、門人や家族の者が日夜枕頭に附き添つて看病して

ゐた。

或る日、彼は突然舌が硬ばつて物が云へなくなつてしまつた。すると彼は手を擧げて何か物を求めやうな容子をして見せた。息子の曉雲が其の意味をさとつて、紙と筆を持つて來て父の枕元へ出した。曉齋は直ぐに筆を執つて得意の戲畫を描いた。それは、彼自身が嘔吐をしてそれを見て醫者が仰天してゐる圖だつた。藪醫者に掛つた爲め恁んな目に遇つたといふ意味らしかつたけれども、それ以上尋ねることも出來なかつた。

それが絶筆で、其の日のうちに彼は死んだのだつた。四月廿六日の事で、享年五十九歳であつた。遺骸は谷中瑞林寺中正行院に葬つた。

追記

本傳を書き了つたのが九月の末だつた。それから間も無く、十月一日から六日迄私は長野へ旅行した。此旅行の目的は、隱れたる南畫家玉蘭堂長井雲坪山人の傳記資料蒐集の爲めである。雲坪山人は天保四年越後沼垂に生れ、青年の頃長崎に遊んで鐵翁逸雲に師事すること多年、明治初年の頃支那に渡つて親しく彼地の畫風文物を研究し後一度びは東京に來つて肆を開いたが、時世の容るゝところとならなかつた。山人一代の畫才を有して空しく世間から顧られないので、筆硯を携へて遍く江湖に放浪し、後信州に到り、善光寺の堂裏に草廬を結んで、世俗を隔絶して清節の生涯を送つたのであつた。それが爲めに山人の畫名は全く世の中から葬られてしまつてゐたが、土中の寶玉終には地上に光を放つの時節があるが如く、近來其の作品が一部の識者に認められたのが動機となつて、沒後卅年に近き今日漸く南畫家雲坪の存在が世間に紹介される機運に遇つた。私も數年前から雲坪の畫を愛し觀て其の超脱せる筆致に甚だ敬服してゐた一人だが、未だ以て彼の大を十分に理解する處には達しなかつた。處が今回畫人傳の一篇として南畫家雲坪を物する事になり前記の如く、長野に行き、同地に殘されてゐるところの多くの彼の作品を觀、且つ其人物閲歴を研究するに及んで、想像以上の驚きを新たにしたのだつた。雲坪の傳記は來る新年號に掲載の豫定だからすべてを其時にゆづることゝして、爰では唯一言、彼は明治年代に於ける最大最高の南畫家であつたといふ事を十分の確信を以て斷言するにとゞめて置く。長野滯在中私は戸隱に登山した。山上に一泊して下つた。登山の目的は、晩年雲坪が戸隱山上に幽居して彩筆に親しんでゐたことから、私も此の機會に靈山の土を踏んで、彼の生活氣分の一端に觸れて見

ようと思つたことと、今一つは、戸隠神社の曉齋の天井の龍を見學したい目的があつた。私が山に泊つた晩は強く雨が降つた。が翌朝起きて見ると、雨はやんで、白い霧が山上一面に流れてゐた。私は寢卷のどてらに宿の下駄を借りて、早朝、中社に詣で、拜殿の床に立つて、有名な天井の龍を仰ぎ見たのだつた。私は本殿の中で、狂齋が十間四方の天井に龍を描いたと書いた。それは曉齋自身の著書であるところの曉齋畫談にも左う出てゐるし、それに依つて書いたらしい二三の彼の小傳の中にも左う書いてあるので、私も是れを其の儘踏襲して十間四方の天井としたのだつた。處が、現場へ行つて實物を見ると話とは大變太さが相違してゐる。實際は二間半に三間位の大きさである。拜殿全體の間口が漸く六七間に過ぎないのだから、十間四方の天井のはまる道理が無い。其の天井は、周圍が二尺五寸四方位の合天井で、中央の鏡板の天井に龍が畫いてあるのだ。何故かう誤り傳へられたのだかは分らないが、狂齋自身が法螺を吹いたのだらうとは思ひ度くない。曉齋畫談と雖も、挿繪は彼の筆に成つたものだが、文章は何びとかの代作したものである。だから、狂齋自身が揮毫してゐる光景を畫いてある挿繪の方では實際位の大きさに畫いてあるにも係らず、文章の方を讀むと、十間四方の天井に一杯になる程の龍の頭云々と思ひ切つて大きくなつてゐる處から見ても、文章の筆を執つた人が昔の人の誇張癖から自分勝手に大きくして所謂筆の勢で書いたものと思はれる。それはともかくとして、肝心の龍の畫であるが、さすがに有名な畫だけあつて非常な名作だつた。狂齋洞郁陳之圖と落款が記してある。狩野の格法嚴乎とした中に、豪快無類の筆勢を見せ、眞に看者の頭上から風を起し雲を呼びさうな概がある。狩野派の代表作として後代に殘る物の一であることは確かである。けれども私は、寧ろ其の周圍の合天井の畫に眼を移すに及んで、曉齋に對する讃歎の念を一層強く感じたのだつた。合天井は十四枚描いてあつた。本傳中に八枚だけ描いて下山したと記したのは、是れも矢張り曉齋畫談執筆者の誤りを其の儘採用したのであつて、事實は十四枚書いてある。是れは全部極彩色の花鳥畫である。一々手に取つて見ることの出來ないうらみはあるが、形象正確にして彩色の秀絶せること驚くばかりで、彼の寫生の極意を發揮した作である。十四枚中のどの一枚を取つて見ても曉齋の畫家的地位を定むるに足りるものであらう。旅行先のことだから粉本の類も餘り用意しては居なかつたらうと思ふのに、其の不自由な中に於て斯の如き精密の畫作をする點から見ても、平素の練習の程度が窺はれる。畫室を一歩出たら繪が描けなくなるやうな今人の多くの畫工等は、此の

合天井を仰ぎ見てまさに愧死すべきである。私は自分の書いた傳記の主人公の傑作を眼のあたりに見て、押え難い滿足と感激の胸を抱いて山を下つたのだつた。

序でに、信州に赴いた見聞の一として、高井鴻山の事を少しく記して置く。鴻山とは、狂齋や北齋が訪問した高井三九郎の事である。其の家は高井郡小布施村にあつて、郡名を名乘る程の名家だつた。鴻山は當時の多くの文人學者と交遊して、また聞えたる勤王家だつた。小縣龍洞院の住持活紋禪師は當時の碩學だつた。鴻山は、佐久間象山や山寺常山等と同時に活紋禪師に就いて唐詩を學び、象山常山と並んで活門下の三山と稱せられたのだつた。彼が松平春嶽公に上つた幕政改革意見書といふものは、勤王の熱誠から成つたもので、立論堂々、是れを政策上から見ても非常に立派な意見だつたさうである。彼の畫は、信州では一口に化物鴻山と云つてゐるくらゐに、妖怪の筆を揮ひ詩文また妖氣を含んでゐる。岸駒に學び、後北齋に師事した事は本傳中にも記したが、鴻山が好んで妖怪變化を描いた點は、むしろ狂齋と一致してゐるとも見られる。北齋の信州慢遊は、私は前に北齋傳を書いた時其の期間を一年としたが、信州人士の說を採ると三年といふことである。すなはち鴻山が北齋を招聘して、特に自宅中に畫室を新築して其處で自由に筆を揮らしめた。北齋は其の三年の内一年は附近を遊歷したといふことである。私は故飯島半十郎翁の研究に基いてそれを一年間としたのだつたが、何れが正しいか知らないのである。それから、北齋が初めて鴻山を訪ねた時、メクラ縞の股引に印絆天を着て居たといふ話も殘つてゐる。是れはいかにも北齋がやりさうな話である。尙、小布施には、北齋の作に成る屋臺の人形があつて、信州一國の名物の一に數へられてゐるさうだ。同じく祭禮に用ゐる貫名菘翁の大幟も右の人形と共に町有の寶物となつてゐるさうだ。斯ういふ珍らしい物が傳はつたといふのも要するに高井鴻山の力に依つたものであることは勿論である。

スカンディナギヤの自然と藝術

林　久　男

「平靜なる公民は絶大なる世界的事變（戰爭）に對しては不思議なる關係にたつものである。――さういふ大なる運命、さういふ重大なる變化が迫つて來ると、彼にとつては幾多の外部的不便の外に、尙ほ例の不愉快が殘り、多くは災害を二重にし甚しくし、尙ほ有り得べき福祉をも破壞する。それから彼は味方からも敵からも實際難儀をうけるものであるが、大抵の場合、味方より受ける方が敵よりうけるよりも多いものである。而して如何にして其愛着を保つべきか、如何にして其利益を持續すべきかは、彼は全く知らないで居る。」

七年戰爭の當時ゲーテは既に斯くの如く嘆いて居るが、世界戰爭の苦難を經驗した今の世界人も同じ戰禍に惱んで居るものではあるまいか。

有史以來の世界的大戰爭は中歐諸國を殆ど半病人の悲境に陷れてしまつた。敗けた國は勿論、勝つたといふ側の諸國に於ても、その財政産業、思想生活の各方面に於ける混亂と窮迫とはいよ〳〵其度を加へて、今更ながら戰禍の犧牲の高さをしみ〴〵と思はしめるのである。それ等の諸國を旅行してさういふ斷面にある人心を直視したり、そこにある幾多の文化的遺物を觀照することも味深い事に相違ないが、そこに殘れる悲慘なる戰禍的痛痍と、まだ脫ぎきらない人心の武裝とを觀ることはそゞろに吾人の心を痛まし〳〵暗く重く壓しつけずには措かないのである。

戰禍の影の翳さない晴れやかな大自然の中に、歪められ壓しつけられない人情と生活とに接したいといふ、やめがたき欲念は吾々の心を北へ北へと驅つて、かのフォールドの絕勝と夜半の太陽とを誇るスカンディナギヤへの旅を急がせたのである。而もストリンドベルヒや、ハムズンや、イブセンや、ビョルンソン等の幾多親しみある作物の背景に面接したり、トゥルドセンやムンクなどの藝術に心ゆくばかり浸たり得るといふ豫期は、

どれ程吾々の心ををどらしたことであるか。

美學者のS君とこの旅にのぼつたのは、伯林の辻々の花壇に夏草が紅紫の姸を競ふ八月の初旬であつた。

アンデルセンの國からストリンドベルクの國へ渡る船路は東海の咽喉を通ずるのであるが、コーペンハーゲンの港を夕暮れに立つて甲板に涼風をいれてゐると、西の空を一杯に燒いて夕日が靜に海に沈んでいつたあとは、暫くは空と海と雲との變幻極まりない美しい戯れが、天國の大なる舞臺へと吾々の想像をさそつてゆくのである。やがて水銀色の殘光を抱いて次第に黑ずんてゆく地平線の雲の奥には、瑞典の山や陵がくつきりした刻みを見せて連なつてゐる。其神秘的な景色に見とれてゐると、ストックホルム出だといふ若い醫者が色々土地の話しをしたあとで、ハイデルベルヒやフライブルクなどで識り合つた日本の同僚の才力や人柄を口を極めて褒めたててゐた。

マルメーの港へ着いていよ〳〵瑞典の地を踏んだ時は、それがストリンドベルヒやハムズンの住んだ國、そこに生きてゐる言葉がそれ等詩人の口にし筆にした言葉かと思ふと、耳にし耳にする物皆がたまらなく懐しくさへ思はれるのであつた。

汽車はゲーラランドの平原を北へ北へと走つて居る。ふと目をさますと、もう夜がしら〳〵と明けそめて、窓外には河か湖水か、ほの白く樅や檜の森かげに淡金色に廣く伸びて居る。北の國を思はせる白樺の乳白な幹や、しつとりと朝露に光る花崗岩の山が目の前に飛んでゐるのも面白いが、紅から色に塗つた木造の平家が、小さい窓や急勾配の屋根をもつて居るのが木陰にぽつ〳〵散つて居るのを見ると、このあたりの自然人の冬の生活も偲ばれるのであつた。夜が次第に明けはなれるにつれて、河や湖に映る森や陵の影が次第に冴えわたつて、牧場に放つてある牛や馬も朝の爽かさに躍つて居るのが見える。日が地平線をはなれると、前には茫漠たる耕野が廣がつて、麥はもう黄に熟して居るが、案外に其豐穰なのは、此國の物資の豐かさを思はせるのであつた。併し概して此の邊の景は單調であるが、リンケーピング、ノルケーピングと次第に北に進むに從つて、水鄕らしい特色が加はつて來て、いよ〳〵北緯五十九度を越えると、ストックホルムを中心とした名だたる水鄕に入るのである。

水鄕の都として不思議なる自然に惠まれたること、ストックホルムの如きは他に又多く例を見ない。げにストックホルムこそは北歐のヱニスであり、龍宮である。東海（オストセー）からメーラールの湖に連なる峽江（フョールド）は參差出入の複雜を極め、幾百の島嶼を浮べ、

幾十の江浦を刻んで、迷宮の如く入りくみ花崗岩より成る四圍の岸よりは欝々たる松檜が其の影をおとしてゐる。その峽江を中にはさんだストックホルムは、恰も兩翼をひろげた白鳥のやうにふんわりと水に浮いて、瑞典の光榮と歌はれたその中島のスターデンは、美しい王宮や、美神の廟や、尖塔や偉人の諸像を戴せて、脚下を靑い水に洗はせて居るところは、大きく白く光る鸚鵡貝のやうにも見える。これこそ其むかし中歐の野に圖南の壯擧を企てゝ、リュッツェンに其英雄的最後を遂げたグスターヴ・アドルフはじめカール諸王の都した其活動の根據地である。南の丘(スーダア)や、ブレダブリックなどの高臺から下瞰する大パノラマは、城下を洗ふ紺碧の水に綠樹を蘸す島公園や、あざやかに羅布する白帆を一眸にをさめて、眞に大自然の一大偉觀である。而もそこに廣がる人口四十五萬餘の町は、その外觀と設備はすつかり近代式であり乍ら浮華でなく、住民は「北歐の佛蘭西人」と云はれるだけあつて、快活で愛相がよく而も正直であるので、人をしてそれ程遠く北に來たことを忘れしめるほどに親しさと快適とを感ぜしめるのである。男女ともに體格の雄偉であることは先づ目につくが、所謂北歐的剛健の氣象が其の眉宇の間にほの見え、又この國の藝術や文學などの底力を裏づけて居るのも興味深いことである。

こゝはもう北緯六十度に近いので、中夏には夜は僅かに二時間に過ぎず、六七月の頃五週間餘は終夜大空が仄白い薄明を續けて居るので、街燈さへも碌々ともされずに濟まされると云ふ。而も冬の氣候は中獨あたりと大差ないと云はれて居る。

この邊一體が美しい花崗岩層から成つて居ることは市の南區に峙つて居るその雄渾な斷層を見ても分かるが、市の東方近くの江上に、欝蒼たる綠樹に岩層を包んで美しく横はつて居るジユールガルデン殊に其中に動物園的博物館として名高いスカンセンは、天然と人工との理想的調和に於て、他に其例を見られない樂園である。こゝは今より三十餘年前にハゼリユース博士に依つて創設された野外博物館で、動物園と博物館とを兼ね、天然及び民族博物館の補助として文化史的意義の深いものとされて居る。そこには此國のあらゆる地方の古い民家が其儘うつされ、綠蔭の亭には其鄙びた地方服を着た少女達が茶を汲み珈琲をたてゝ接待してくれる。殊に珍しいのは十七世紀の有名な隱秘學者スエーデンボルグの居樓に擬した家や、十七世紀頃の鐘樓をもつたラプランド部落の異樣なる建物で、そのあたりには騾や馴鹿や熊の小屋や、石炭や、風車や、古びた寺や、鷲や、狐や、狼などの養巣のほかに、祭の日には其田舍ぶりの樂につれて手踊を演ずるといふ踊り場までも移してあるので、岡あり、湖あ

り、森あり、牧場ある七十エーカー餘の共園内を逍遙することは、即ち瑞典の縮圖と風土とを目のあたりに見ることで、民族生活を景趣のうちに知る上にはクリスチヤニアのビグドー公園と並び稱せられる天下無類の設備がある。

園内の最高所に七十五米突の高さに聳えるブレタブリックの高塔に攀ぢると、眼下に廣がる水と島と森と人家の大パノラマは、眞に北歐の自然の特異なる變化をあざやかに示しつゝある偉觀である。

中世紀そのまゝの兵服に身をかためた衛兵や、田舎出の無邪氣な茶汲女等と土語の會話や笑談をしたのち、孔雀や鶴などの遊んで居る木蔭や池畔をそぞろ歩いて、更にフリゼンスパルク（そこでは日曜毎に酒氣なしに牧歌的の田舎生活が展開されるといふ）を抜けて島を半周し、陵を越え、牧場を過ぎ、菩提樹や、樫や、柳の古木の森を靜に行くと、或は右に或は左に、不意に碧瑠璃の水が青葉ごしに隱顯して、北歐の水郷は夏の暑さも覺えしめない。

この島公園の入口には公園劇場と相並んで、動物博物館があり、その建築が古代那威のスターヴの寺に依つて居るのも面白いが、その中に展開される北歐の鳥獸生活の眞を穿つた寫實的風景に、人の心をして直にラップの國や北岬(ノルドカップ)近くまで飛ばしめるのである。

更にストックホルムの誇と謂はれて居るのは、此島の西隅を占めて居るノルデイスカの博物館である。次第に滅びゆく北歐土民の特異な地方的衣服をはじめ、その生活狀態を時代順に又地方別に整然と裝置したのは此國の文化を知る爲には無上の好資料であるが、殊に其素朴な壁畫や木彫や、器物の模樣等に北歐の原始的藝術を見られることも頗る興味がある。尚、土間の中央部の各室にはグスターフ・アドルフの彈痕ある死裝や武具馬具旗旗王車等の遺物が、此國歴代の王の鹿を中原に逐つた壯擧を偲ばしめるのである。今や中歐の先進諸國が鬪爭反噬の慘劇をくりかへして、人民は其弊に喘いで居るうちに、北歐のこれ等後進國が國家にも國民的にも着々健實なる地歩を築いて、若し其苟安になれることが無くんば、末遠い發展も思はれるのであつた。

この水郷の周圍は、參差複雜なる水をめぐらし、水と、森と、巖との織りなす自然の大公園を現出して居るが、市から半時間里程東方の半島サルチ・バーゲンは、かのヹニス潮頭のリドウとは其の趣を異にして、北歐水郷の特色を最もよく發揮して居るものと云はれて居る。

往きには陸を鐵路によると、森を過ぎ隧道をくゞる毎に左右に展けるフヨールドの景は其の姿を新にして、紺碧と濃綠とに孕まれる涼風は盛夏の暑さをも流し去つて、人の心も蘇らせてくれる。

うしろに木深い山陵を負ひ、前にバツゲンの峽江を抱いたサルチヨバーゲンの展望は、さながら我松島の扇谷の景を偲ばしめ、小島に通ずる橋のたゞずまひも彼の雄島のあたりを思はしめるが、流石に東西の趣味の相違は爭はれないもので、自然のさびよりも人工のすぎて居る憾も感ぜられる。ホテル、氣療院、海水浴場、旅亭、喫茶等の設備は全く善美を盡して、今しも丁度、セザンスの名畫から拔け出て來たやうな女子供が、綠蔭の浴に耽つて居るのも見えるが、彼方の島の並木には、はでやかな夏着の影を水に落して、楚々たる人の群が白鳥のやうに動いて居るのも畫のやうである。脚下を水に洗はすこごしい巖の小徑をたどつて、涼風をつれながら小島を半周して樓臺に腰をおろすと、前に廣がる錆銀色の水面には大小の汽船や帆船が恰も巨魔の玩具のやうに動いて居る。

「君、似てゐますぜ、あの人は。そつくりでせう?」

と突然S君は、彼方の偶にぢつと海を見つめてゐる一人の老人を指して、さう云つた。

「誰に?」

「顏の格構や髯の無いところはイブセンそつくりでせう。」

と云ふS君の言葉の通り、なるほど眼鏡の工合、口の結び工合、全く我がイプセンが生きかへつて來たのかと思はれた。

「那威へ行つたら、嘸あゝいふタイプが多いことでせう。併しこの國ではストリンドベルヒ型に會ひたいものですねえ。」

「まあ御覽なさい、空が一時に暗くなつて來ました。あの雲の湧き工合が全くストリンドベルヒ式ですよ。」などと冗談を云つて居るうちに、全景の氣分が一刻前とは全く違つて、今にも大空が破れさうに見る〳〵雲氣が黑く漲つて來るところは、全く北歐式な壯觀である。そこらに動いて居る男女の人も、もう今迄色々な作物をとほして馴染になつて居るやうな氣がしてならない。唯この邊は思つたよりも、獨逸語も、英語も、佛蘭西語も普通には通じない。不自由な此國の言葉を餘儀なく用ゐることが、吾々にいよ〳〵異國的（エキゾティック）な感じをそゝるのであつた。

歸路は小蒸汽によつて峽江（フヨールド）を縫つてすることにしたが、もう夕暮近い空は墨のやうに曇つて、水を渡つて來る寒い風は、やがては細かい雨さへ交へて來た。

これからストツクホルムへ通じる峽江（フヨールド）は屈折參差極まりない上に、或は廣くなり、或は狹くなり、こんもりと浮んで居る島

の中には、嘗て支那亡命の客康有爲が隱れ住んだといふ所もあり、或は兩岸近く迫つて船が漸く通れる程の處もある。このあたり一帶は有名な別墅地であるが、數奇を凝らしたそれ等の赤い壁や白い窓が、あたりの碧緑にうつろふのも繪のやうである。冬の日の此あたりの靜けさと淋しさとはどうであらう。ストリンドベルヒの物などでよく見た場面や背景も思ひ出される。突然夕日が黒い雲を破つて、さつと其金線を水面に亂射した景も、處から頗る劇曲的(ドラマティック)であつた。自分等は甲板のソファに腰をおろして、刻々變つてゆく眼前の景に見入りながら、しみじみと北歐的氣分に浸つてゆくのであつた。

サルチョバーデンの清遊は、いよいよ此水郷を吾々の心に親しくしてしまつた。思へば伯林からは僅か一晝夜足らず、即ち巴里へゆく位の時間で達しられる場所である。戰前獨逸とあれほど近い文化的關係をもつてゐたのも其わけである。獨逸の新聞さへ碌に見られない現狀に比べたら、定めし隔世の感のあることであらう。アストリア・ホテルの窓際に立つて、眼下に廣がるリツダアホルムの峽江(フヨールド)に對岸の灯がちらちらゆれるのを見入つて居ると、いつしか心は遠くヹニスの潟(ラグーネ)のあたりを馳けつて居るのであつた。

ストックホルムの今一つの誇りは、ブラジールホルメンに脚下を水に洗はせて、ヹニス式ルネツサンス風に高く聳えてゐる國立博物館である。正面にはリンネやゼルゲルはじめ多くの學者藝術家の諸像に飾られた建物も堂々として居るが、中に蒐められた石器鐵器時代より中古近代に至るまでの幾多考古的歴史的の遺物や、新古の彫刻繪畫のうちには、中歐に於ても容易に見られないものや、又北歐の文化の特質を知る上に缺くべからざる珍品が少くない。

彫刻室にはロダンやムニエールなどの物の外に、今より百五十年程前にハドリヤンの邸に發見されたといふ「眠れるエンデミョン」や、最近ハナクの手に成つた「祈り」の原型などが先づ眼につくが、併しこの國が現代に持つてゐる彫刻家として誇とされてゐるカール・ミレスの諸作が、ロダンや獨のメッツナーなどの技巧の外に希臘や東洋の古典的表現法をも取り入れて、まだ三十五六の彼自身の地歩を暗示して居る所に、尠からぬ意を引かしめてゐる。

此國の近代畫家の上に佛蘭西の畫風の外に、デュセルドルフ或はミユンヘンを主とする獨逸風の影響の著しいのは承知のことであるが、それでもラルソンや、パウリや、ローゼンや、ベルクや、クロークや其他若い作家に至るまで、一種特異な北國

情緒と地方的色彩を示してゐることは爭はれない。中でも雄渾な筆觸と外光派的技巧とを以つて農民生活や裸婦や肖像を描破したソーンの晩年に近い作や、ビヨルクの健實な筆致に成つた肖像畫や、華やかのうちに而も北國的淋しみをもつノールストレヨームの風景畫や、神秘的色調をもつたヤンソンやバウエルの作物などが、南國には得られない清新な印象を與へてくれる。畫の素描は兎に角として、殊に吾人の注意を引くのは、日本畫的筆意を加味したリリエフオルスの動物畫や、色彩的センスの鋭敏を思はしめるアロセニースの空想畫や、ユーゲン公爵の放膽な裝飾的風景畫などで、一面には最近の巴里の畫風の影響が如何に遠くしみ込んで居るかを思はしめるのであつた。

外國畫の部にはお定まりのクラーナハや、ヴンダイクや、ルーベンスや、ミレーのものも一通りあるが、こゝには又意外にレムブラントのものが可なり多くをさめられてある。中でも「クラウデイウス・シギリスの羅馬人に對する謀叛」の大幅は、此畫家としては常になく放膽豪壯な筆觸であるが、全體に於ける生命と力の横溢は他に多く見られない傑作である。少なくとも自分にはさう感じられた。

別室には印象派や後期印象派のものが小じんまりと並べられてあるが、マネーや、サザンヌや、モネーや、ルノアールなどの靜物や風景畫は目なれたものとしても、中でもルノアールの大幅の一點と、ゴーギヤンやムニエールの小品とは、この邊で味ふには豫期以上いゝものであつた。

九萬餘の銅板畫と、一萬五千に近い描畫を有して居ることは此館の誇とされて居るが、中でもデユラーや、レムブラントや、トウニエールや、ヴンダイクなどの手に成つたものは、それ等藝術家の藝術的生長を知る上に於て特殊の興味を吾々にそゝるものであつた。

近代の都ストツクホルムを去つて、北すること一時間餘でウプサラの小市の古城址の上に立つ時は、吾人の心は頓に十三四世紀の古へに置かれてしまふ。これこそ所謂瑞典發祥地で瑞典第一と云はれる其の大伽藍は既に十三世紀の創立で、グスターヴ・ヴーザやエリツク九世王をはじめ、ウルフソン大僧正や植物學者リンネなども此の高塔の下に永眠して所謂名譽の神廟として、この國の輝ける歴史を語つて居る。

又白い帽子の學生を以つて名高い此處の由緒ある大學は、十五世紀の末葉にウルフソン大僧正によつて創始されたもので、その圖書館には四十萬近い藏書と幾多の貴重記録のある中に、最も有名なる珍品「コデツクス・アルゲンテウス」を藏して居

る。これはゴートの僧正ウルフイラスによつて第四世紀の後半にメヨソゴチツク語に譯された四福音書の一部で、十七紀の中葉にプラーハで分捕つたものを皇后の贈賜によつてこゝにをさめてあるのであるが、古ゴチツク語が全ゲルマン語に對する關係を知る唯一の要楔とされて居る。その外にルターや、ゲヨーテや、シルレルや、リンネや、スウエデンボルクなどの眞蹟等も數多く藏して居る。

こんもりとした森を背景とする此の大學の丘と相並んで、而もそよりも一段高く、町を眼下に見晴らす丘の山に高くどつしりと聳えて居るのは、即ちウプサラの城址である。十六世紀の半ばにグスターフワザによつて築かれ、それ以來世々の攝政の居住として、今も尙ほ朝な夕なに同じ音色の鐘の聲はひゞいて居るが、彼のストリンドベルヒの戲筆によつて凄い程に戲曲化された狂王エリツクス十四世が多くの貴族を殺戮させたといふ室は今も昔の姿に殘つて居る。かのモスクワの藝術座の一團によつて此一曲が深刻に演出せられたのを觀た其夜のことが、まざ／＼と思ひ出されるのであつた。

流れるともなく淀んで居るフリゾ河を狹んだ、灰色に寂びた此の町の眞夏の晝は、しんかんとして國亡びて山河ありといふやうな古句を偲ばしめるが、もと／＼此ウプサラの町の起原は四哩を北の古ウプサラ（當時ウプサリール）にあつて、そこに駱駝の背のやうに並んだ丘のあたりこそ、瑞典王室の祖先達が祥を發した遺跡である。當時の殿堂のあとと云はれる其寒村の古寺や、その丘の上に古王の墓に詣でて、夕日に染まる蕭條たる曠野を目の限り遥かに眺めやると、異教時代よりの此國の崎嶇たる歴史が今更ながら思ひ出されて、惆悵去るに忍び難いものがある。

汽車は無限の野を行くやうに北へ北へと走つて居る。八月半ばといふのに、夜中の寒氣はぞうと身にしみて、思はず目を覺ました。窓の外はまだ闇であるが、それでも窓硝子にぢつと顔をあてゝ見ると、北國の眞夏の夜の常として空はどんよりと白く、森や丘が薄黒く飛んで居るのが見える。ゲヨーテの「魔王」の詩にあるやうなお伽噺の國をゆくやうな氣がある。時計はまだ二時をさしてゐる。その暗い森や丘の間に、水銀色に薄光つて長く續いてゐるが見える。湖水か、河か、河にしては餘りに靜かである。湖水にしては餘りに長く續いて居る。寒さうな星の光が、まばらにそれへ影を落して居る。これこそ何百萬年の前世にこの邊一面を通つたといふ氷河の痕で、巨人の指の痕のや

うにスカンデイナギヤ一帶に散在して千古の碧を湛へて居る湖水である。

やがて東方の地平線が僅かに茜色に色づいたと思ふと、それが刻々と灰白さを增して、極光の如く大空を染めて來る。拭つたやうに澄みきつた大空は双金色から梨地に變りながら、逃げおくれた星を次第に追ひ消してゆく。時々天女の衣のやうな狹霧が細く長く湖上を這つて通る。野におく霜も白く、白樺の幹も骨のやうに白い。この北歐の黎明の凄涼は、人のたましひに詩を呼びさますやうな又なく靜かにして爽やかなものである。

リユースダルからランジヨーに至る間は、河のやうに長い湖水がどこ迄も續いて、樅や、落葉松の森の切れ目の低地には必ずそれが蒼黝として隱顯して居る。このあたりは人跡稀で、たまに見える家は何れも平家の、屋根の尖つた木造で、その紅殼色の赤い壁は、冬の日の銀世界とどんなに味深い對象をもつことかと思はれる。

やがて東天地平線近くに一文字に流れた薄雲のかげが、苺色に燗を兆すと、刻々それが梨地の空を紅に染めて、楕形に、半圓に、まん丸に、大きく眞赤な日輪が、神の誕生を思はせるやうに、あざやけく赫々と浮び出た。時はまだ四時にもならない。緯度が高まるに從つて、夏の日はいよ〳〵長く、更に北して北(ノルド)岬(カップ)に至れば、眞夏には夜の十二時に日は昇つて、五週間あまりは日沒を見ないといふ。冬の夜の怖ろしく長いのに引きかへて北岬の民には、さういふすが〳〵しい夏の永日が惠まれるのであらう。

やがて共朝日の眞赤の日ざしが渺茫たる野を這ひ、前面の湖水をまばゆく灼いて、後ろの山の白樺の脚を赤々と照らす美しさは、眞に若き自然の目ざめに醉はしめるものである。

これからいよ〳〵名だたる瑞典の高原イエムトランドに入るので、殊にブレツケからエスタアズンド、更にそれからオーレに至る四五時間の間は、左右につらなる大小の湖水が河につながれ丘に抱かれて、送迎に遑なく、遠い湖面を滑る白い汽船は象牙細工のやうに美しい。數哩の間人家もなく、たま〳〵野には牛の群が見えても、牧人らしい人も見えず、腐りかけた捨小舟が木深い水際に仄見えて居るのも淋しい。

汽車の喘ぎも急になると、やがて目近く鹿の子斑らの雪の山が見え、その背後には眞白な峯も聳えて居るが、一體の山姿が瑞西の山とは異なつて、柔かい曲線をもつてゐる。樅や栂や樺や柳などの生ひ繁つた太古の森が繪のやうに廣がつて、その間に隱顯する湖水の色も次第に神秘的な蒼味を增して來て、海蛇や人魚などに關する傳說のからまる仙境であることが思はれ

る。これから北方一帶の山地は懸水飛瀑の壯觀に於ては世界に比びないと云はれて居るが、目もくるましく峨々と峭だつ花崗岩の斷崖が、山川に脚を洗はせて、苔水に仄白く光つて居るあたりは、あれほどハイネが口を極めて讃美したハルツの山中にも劣らない偉觀である。

避暑地として名高いオーレの邑から仰ぐオーレスタタンの峯は、眞夏にも雪を藏いて、イエムトランドの高原や、フョルドの如く入りくんだ湖面を睥睨して聳えて居るが、それが南の國とは違つて、一種何とも云へない幽靜な寂しみを帶びて居るのは、それこそ北國的色調とでも云ふのであらう。このあたりから山を分けて遙かに西南の方へ入ると、雪原や飛瀑や山湖で名高いシラルナの勝景があり、更に北の方へ長驅して北緯六十七八度まで行くと、サルトルオタタとか、アビスコとか云ふやうな、自然が雪と山と水とを以つて造りなした最も雄偉な絶勝もあると云はれて居る。

汽車は那威との國境へ向つて急勾配に上つてゆく。山はいよいよ雪を深めて、その間から雪解けの水が太い瀧をなして幾條も垂れて居る。天然も人も、このあたりへ來ると、本たうに生れ乍らの天眞と純朴そのものである。高さ六百米突のストルリエンへ着くと、そここそ、瑞典と那威とを分かつ處で、スカンディナギア半島の表と裏とを分かつ背骨の頂である。旅券や稅關の簡單な檢閲があるが、そこではまだ兩替は出來ないので、中食さへも調へることが叶はず、僅かに食ひ餘りの果物を送つて腹の蟲を慰撫したまゝストリンドベルヒの國に別れをつげながら、ハムズンの「飢餓」の筋などを思ひ起した。

もうイプセンの國である。ビョルンソンの國である。

那威に入つてからは汽車は急勾配に驀然に走り下る。メラーケルからは深いスチュールの谷川を右手に見ながら幾つもの隧道を目まぐろしく潜ると、やがて行手遙かにトロンヂュームの峽江が午後の日を照りかへして古鏡の如く光つて見える。

汽車がヘルといふ小驛へ滑りつくと、そこはスチュール河の河口で、眼の前に峽江が廣がつて居る。あたりには樹木もこんもり繁つて、濃緑の山をめぐらして居る所は、さながら瀬戸内海あたりを思はせる。澄みきつた海は空に廣がる白い雲にうつろつて、恰もシャヴンヌの繪などに見るやうな深い落着きを見せて居る。急に乘りこんで來た男女の大勢は海水浴の歸りらしく、皆つや〱と日にやけて居る中にも、若いをなご達が赤い縞の布を鉢卷にして、濃い眉の下から若々しい眼をかゞやかして話し合つて居るのも、此國の情趣をいよ〱濃くしてくれ

る。

それからは汽車は水際の隧道を幾つもくゞつて、河を渡り半島をつらぬき、いよ〳〵北那威第一の要港で、歐洲最北の大都會といはれるトロンチェームへ着いた。

見るからに由緒のありさうな古い町で、家並も低く、古い木造の平家も可なり多い。が、大通りや海岸通りは流石に港町らしい家造りと賑はひとを見せてゐる。でこぼこした街の敷石に此町の古さも思はれるが、幾度かの火災の爲めに町の外觀に古雅な味の缺けて居るのは物足りない。ホテルの窓から町を見渡すと、前は一面に峽江(フョールド)を抱き、後ろには大きくうねるニド河を帶びて、大通りムンケ街の南詰めには那威第一の大伽藍がゴチック式の高塔を聳やかしてゐる。もうこゝへ來ると、僅かばかりの英語の外は、南歐中歐諸國の言葉は殆ど通ぜず、殊に大戰後獨逸語の勢力は地を拂つて居る姿である。俄仕立の那威語を手眞似交りに燊みかけるので、宿の給仕もほと〳〵辟易してゐたが、魚の名が分からぬので、やをら筆談に及ぶと、とうとう逃げ出しさうになつた。食膳の材料は豐富であるが、料理が如何にも鄙びて居る。S君の好きなシャトウブリアンも、巴里のものとは似ても似つかぬので、胃の腑の不平を思ひやられる。由來那威人は素朴温厚と云はれて居るが、いやにすれた所がなく寡言で皆好人物らしい。その代り一般に擧動も遲重で、解かりもおそいやうである。イブセンのやうな頑強剛直な詩人を出した國とも思はれず、ノラのやうな強い女は南の方へ行かなければ見當りさうもない。概して宗教心と愛國心とが強く、案外教育は普及してゐて、宿の給仕をするやうなものにも良家の子女が尠くないといふことである。

町をあるくと、戲曲や小說の中でもう古馴染のやうな老人や女によく出つくはせる。中には帽子をとつて親しげに挨拶する年寄などもあるのは、ラプランドかエスキモー出の同種族とでも思つたのか。よもやイブセンの心友とは神ならぬ彼等の知るよしも無からう。カメラを向けると女小供は羞みながらもおとなしく並んでゐてくれる所は自然人そのまゝである。これに比べると瑞典人や丁抹人は、餘程近代的の愛相や辭禮にたけて居ることがわかる。

北緯六十三度半と云へば東京から樺太へ行く程更に樺太より以北へ上つて居るのであるが、暖流の關係か、こゝは所謂不凍港で、我が仙臺松島邊よりも暖い位である。夏の夕日を浴びてそゞろ歩くと、市場のそばには古びた白亞の女人等が白粉のはげた女のやうに立つてゐる。大通りの正面に聳える大伽藍(ドーム)は、古來國王の即位式の行はれた由緒のある古い建物で、中央に聳

えるゴシック式の高塔から、ロマネスク式をも取り入れた兩翼、その灰緑色の石の色が白い大理柱とい丶對象をなして、全體の結構と色調とが、南國によく見る赤煉瓦などよりは、いかにも北歐の空氣にしつくりと合つて氣持ちのい丶調和を保つて居る。元來このドームは十一世紀頃から工を起して、その後王家や大僧正の廟所ともなり、即位の式も多くはこ丶で行はれたのであるか、幾度か火災に見舞はれ、未だ曾て眞に完成したことなく、西翼の如きは今以つて其の工を續けて居る。

流石に永い北國の夏の日も、もう暮れ近くあたりをかすめて一層此の大伽藍を崇厳に見せる頃であつたが、恰も祈禱の式も濟ませて來た老僧正は懇ろに案内の勞をとつてくれた。而もそれが流暢な那威語で、さながら讀經をするに、抑揚のついた節であるので、そばに居た一英人は殊の外憤激して、「なぜ英語で說明しないものか」とそつと私に耳打ちするのであつた。英人の倨傲はそんな所にも見えすいてゐる。

ほつそりと八角の穹窿を高くかかげて居る東翼の敎壇は、その建築的典雅の點に於て他の如何なるものにも誇ることが出來るであらうが、極彩の窓玻璃を通して流れこむ折からの夕日にほんのりと明るめられた堂内の空氣はいよ〱人の心を深く澄ましてくれた。中には有名な「王の扉」とか、聖オラーヴの銀棺とか、その殉教の死體の側に湧いた噴泉の跡とか、トワルドセンの基督像とかいふやうな物も數多くあるが、自分等は矢張り古い石棺を飾る、手の取れたり頭の落ちかけたヨハネスや聖デュウスの立像などに何となく強く眼を引かれるのであつた。六百餘年來幾度の燒壞と改築とによつて中古以來の有らゆる建築的様式を併具して居る此大伽藍も、西翼の中部は今以つて完成に至らないので、そこここに天井や、方柱や、彫像の片々がごろ〱して居る間を通り乍ら、やがてはそれが統一的生命を與へられて此の大殿堂を飾ることを豫想すると、人間の創造的精神の長き努力を思はざるを得ない。

そとへ出ると、まだ日は暮れがてに空は明るいが、堂を包む木深い堂域には、もう夜のやうな靜けさが支配して居る。それから海岸を波止場の方へ出ると、灣内に浮かぶムンクホルンの小島には灯が赤々と瞬きそめて、紅玉を鏤めた寶冠のやうに見える。

こ丶から僅か三晝夜ばかり北航すると、ラプランドの北陲に所謂「夜中の太陽」の壯觀を見ることが出來るのである。そこには夜中海から生れる太陽を觀、中夏五週間餘は其太陽は沈むことなく絕えず大地を照らして居るといふ。

そここそ、天幕と馴鹿とに今も漂遊の生活を續け、その特異な言語と、服裝と、風習とに旅人の心を驚かすラプランド種族の住んでゐる所である。その夜の自分等の夢には、馴鹿や、白熊や、海豹や、ペンギーンの群れ遊ぶ雪の野や、千仞の斷崖の上に赤くどんよりと照る太陽が、幾たびまざ／＼と浮び出たことか。

便船は幾月待つても此港をおとづれさうもなかつた。

雨催ひの一日、ニト河の上流にレルフォスの瀑布を訪れる代りに、自分等は海岸づたひにイレンからヘヴリンゲンの方へとフョールドを飽かず眺めながら、どこ迄も歩いた。自然界のやうな小供達が妙になつこげに寄つて來るので、片言まじりに話をすると、いつ迄でも別れ惜しげに挨拶を送つて居る。とある岬に立つて遙に見渡すと、灣內は鏡のやうに靜かで、大小の船が玩具のやうに動いて居るのが一眸のうちに入つて來る。右にトロジェームの港を抱へ遠く低い島山をめぐらした眺めは、我が山陽道あたりにも髣髴として、こんな北極圈に近い所とは到底思はれない。或は明るく或は暗く、海の色調を色々に變へて時々徂徠する小雨も、我が時雨にさも似た氣分を與へてくれる何といふ平和な境地であらう。國と國と、民と民の血まみれな反噬と爭奪のない、斯ういふ自然の懷こそ眞に人間が伸びやかに住み居る樂土である。

引きかへして此市の博物館を訪ふと、もう時間過ぎであつたのを、遙に日本から來たといふと快く入れて丁寧に案內してくれた。北國の家具工藝品等を時代順によく整へてあるが、殊に古代の陶器や土彫に於ける剛健な趣向は殆ど他に其比を見られない。但し工藝品でも後のロココ式の影響を受けたものや、陶器でもマイセンあたりの影響をうけたものは、既に其の大味な特徵を失つて居るのは興がない。唯こゝで意外にも驚かされたのは、特に我が日本の古陶器、古磁器、刀劍、鍔、浮世繪の類が可なり色々と、如何にも大事さうに陳列されてゐることであつた。中には可なり如何はしいものもあるにしても、此のラプランドに隣れる北地に於て、故國の工藝美術品に斯く邂逅しては、その渡來の歷史など思ひかへして、種々興味ある回想に耽つたのであつた。

由來山水の美は瑞西を以つて世界に冠たるものとされてゐた。なるほどアルプスの雪嶺は秀麗である。氷河の大パノラマも偉觀である。幾多の渺瀰たる湖水の眺めも美しい。瑞西は一大公園である。併しこの大公園を行くに、先づ吾々を迎へるものは、手の行屆いた果樹園や牧場であり、水には美しい船あり、

町に嶺に、到る處に美美を誇るホテルがある。そこに在つては人工が餘りに自然の領域を冒して居る憾みが無いでない。

吾々の求めるのは、純樸にして壯麗なる、天眞にして雄偉なる自然そのものである。さういふ大自然はロッキイの山中や南米の奥にも求め得られやうが、水と山との大規模なる調和と、生れながら大自然の交響樂はスカンディナギア、殊に那威の峽江(フヨールド)に於て初めてこれを得ることが出來るのである。

勝景の點に於ては可なり祖國贔負の自分も、彼のユングフラウやモンドローザの嶺に立つては一も二もなく冑を脱いだのであつたが、那威のフヨールドを探訪するに至つては、唯々大自然の秀麗に驚きの眼を見はるのみであつた。山姿の雄大は或はアルプスに强みがあつても、水容の深い味に至つては到底瑞西の諸湖の及ぶ所ではない。由來瑞西の自然が遍ねく世に紹介せられて居たのに對して、この北歐の大自然は餘りに奥深く秘められた憾みがある。

那威の勝を探るには、單にクリスチヤナからベルゲンに至るヘリングの谿谷を通るだけでは、山谷の勝は味ふことが出來ても、この國特有の水姿の美に接することが出來ない。それが爲にはどうしても、大西洋又は北海に面する長い海岸線の若干と、深く陸地に切りこんでゐる峽江(フヨールド)の奥をわけて、數晝夜を船の人とならなくてはならない。

大西洋に面する西海岸では、トロンチェームから北岬(ノルドカップ)に至る間も山水の絶勝に富んで居ると云はれて居るが、トロヂェーからベルゲンに至る航行は那威の自然の特徴を最もよく味はしむると聞いたので、もう矢も盾もたまらない心で次の便船を待ち設けてゐた。

翌くる日の夕方漸く便船を得て乘り込んだが、僅かに一室を殘して滿員であつたのを、その一室を與へられていよ〳〵其海の客となつた。船は小じんまりした小奇麗な客船で、自分等二人の外は遠國の客らしいものもなく、何れも汽車に代へて此の海岸を往復する近國の人達で、那威語の外はたまに怪しげな英語を耳にするだけで、自然兒のやうなうぶな子供の群て居るのを見ても、如何にも異境的情調のおもしろさが感じられるのであつた。

あの女人寺(フルーエキルケ)や伽藍(ドーム)の塔を最後にして、トロンヂェームの港町は刻々と小さくなり終に見えがくれてしまつた。船は港口を出て、島山の間を縫ひながら、海岸に沿うて南へと進む。名も恐ろしい太西洋も、こゝは油を堪へたやうに靜かで、僅かに船の水尾が白く長く裾を開いて曳いて居るばかりである。永い晝

日もやがては暮れて、夕日が西に落かうとすると、海は燒かれて眩ゆくをどり、空も雲も大きく五彩に色どられた。自然の照明の大觀は、見る人の眼を唯だ驚異に燃えしめずには措かない。やがて其の赫耀が紅より樺に、代赭に、淺黄に、紫紺に、コバルトブリユーに刻々と色調を變へて、終に蒼然と水天を包んでゆくと、遠い近い島山は影繪のやうに黒くくつきりと劃されて、折から瞬きそめたそここの燈臺の光を浴びて、一種神秘的の深い色を帶びて來る。その蒼然たる大自然がやがては闇に包まれつゝも、北國の夏の夜の常として、尙いつ迄も仄白い空には、銀河が淡くかゝつてゐる。高く瞬く北斗星を仰ぎ巨人の心藏の如く一種の拍子(タクト)を續けて居る船の機關の音に耳をすますと、異境の旅人の空想は限りなく其の翼をひろげてゆくのである。

翌くる朝夙く目さめると、船はもう荷上げを濟ましてクリスチヤンズンドの小港を拔錨した所である。船は大なる白鳥の如く朝の水の上を動いて居る。左手には近く常に新しい島山が送迎される。このあたりは繁つた樹木は無く唯だ青草が僅かに苔のやうに塊磊たる岩山を包んで居るばかり。岸には點々たる農家や漁家に青い烟の立つのが見えるのみで、寂として人影を見ない。

晝近くに船は外海からモルデのフヨードに入つて、モルデ港に着いた。そこにひらける展望の秀麗にして雄大なるは流石に西那第一と云はれるだけあつて、前に廣く美しいフヨールドを隔てゝ遙か南に、恰も大アルプスとまがふやうなロムスダールの雪の連峯が巍峨としてそゝり立つを望んでは、その水と山との大交響に對して唯だ恍然として心魅せざるを得ない。顧ればあたりの山には、樺、山毛欅、樅、菩提樹等欝蒼として生ひ繁り、それを負うた町續きには瀟洒たる山莊が連なつて、いよ〳〵この仙境に住む人の天與の幸福を思はせて居る。フヨールドの眞中にはこんもりとした細い洲島が二重三重に長く引かれて居るが、一體にこの大灣に湛へられた水は、何といふ深みのある色をして居ることであらう。ナポリ沖の水の碧さでもない。ヱネチヤの潟(ラグーネ)にさしひく水の色でもない。澄みとほつた瑞西の湖水の晴れた青みでもない。これこそ那威の自然の基調をなす一種獨特の蒼味であらう。

その飽かぬ眺めに別れてフヨールドを出て尙ほ島山の間を縫つて進むと、このあたりにはもう美しい牧場が廣がつてゐる。雲は低く垂れて、時々思ひ出したやうに雨が打ちつけて來る。阿呆鳥が猫のやうな細い寂しげな音を立てゝ、船の周りを懷こげに翔んで離れない。

オールズンドの港は小さな離れ島の上に築かれ美しい公園や新しい建物をもつて居るが、これこそ二十年前の或る冬の日全市悉く火災に嘗められて一萬二千の人民は露天に曝されたので、ロイド會社の救助によつて其窮難を免れたといふことである。而もその救助の主唱者は前カイザア其人であつたといふことは、今に於て何といふ興味ある對象を感ぜしめることであらう。折柄、クリスチヤナ出だといふ一人の紳士が流暢な英語で四方八方の話をして、南濱に於けるイブセンの住んだ家や、クリスチヤナに於ける其の晩年の住居などに就いて色々興味ある話をつづけてくれた。

やがて船は暫く外海へ出て折からの夕風に大西洋は大きなうねりを見せて居るが、これこそ往昔那威の海王時代に慓敵なる北海人の威を逞うした領域であらう。

航行はまだ半ばに達しない。モルデンの港を過ぎると、數多い那威のフヨールドのうちでも最も參差複雜な美を具へて居ると云はれてをるノルドフヨールドの入口になるが、このあたりからは兩岸の島山いよ／＼迫つて、巍峨たる巖壁は神營千仞を削るが如く峙ち 仰げば雲を突く頭上の斷崖から數條の瀑水が千丈の銀河と懸かつて居る。その密樹の谷間に生れた夕風の爽かさ。白く齒をむいて岸を嚙む波の音に和してさら／＼と響いて來る飛瀑の音の爽かさ。遠くの山は大なる加茂川石を置いたやうに黑く、くつきりと夕空を限つて居る所、いよ／＼北歐の自然の特長をあざやかにして、この莊嚴凄絕な氣分と、色調と、響きとは、他の何れの境に又味ふことが出來るであらう。この地の自然こそ、未だ何等の人爲的甘漬を受けて居らない。こゝにこそ眞に自然のまゝの大自然に味ふことが許されて居る。併し、かういふ自然の凝視は、何といふ不思議な沈深な、寂寞な、やる瀨ない感じを與へることであらう。

宏大深奧な大自然に對する人間の微弱が、餘りに明かなる對象を以つて描き出されて居るせいであらうか。

麥青い岸邊には、ぼつ／＼農家や漁村が散在してゐる。このあたりこそ眞に自給自足で、反噬も爭鬪もない昔ながらの生活を續けて居る。小さな港に船が着く毎に、波止場には村の若い者や女子供や、長い喫へ烟管をした年寄などが群がり佇んで、又いつ會ふとも知れず船に乘せられてゆく人達を無心の如く又物思ふ如くぢつと見つめて居る。

雪を頂いて遠く行く手に空を突いてゐた名も知らぬ高い山も、次第に闇に包まれて、兩岸近く迫つた岩山も、いよ／＼黑い輪廓を空に劃して、さながら小暗巨大なる洞窟へ乘り込んでゆく思をあらしめたが やがて右手に高く燈をかすめて日の限

り空を突いて峙立した黒い岩山に。數條の瀑布が仄白く音も爽かに垂れて居るその美しさ凄さは、思はず人をして身の毛をよだつをさへ覺えしめるのであつた。兩岸はいよ〳〵迫り、山はいよいよ黒くなり増ると、やがて右にも左にも、幾條かの懸水が、恰も巨人の五指の骨のやうに夕闇に透いて見えて居るのは、其の雄大、その凄蒼、到底この世のものとは思はれない。夕風は潮の香を透つて寒く頰を打つ。

「これこそ眞に北歐的だ！」

二人は思はず聲を放つた。雪の日、月の夜はどうであらう。朝日に映じてはどうであらうと、この巍峨たる黒い巖山と、天河の如き瀑布とを四時それ〴〵の景趣にはめて吾々の想像は、遠く夕闇の中を駈けめぐつていつた。

これがグリークの音樂を生んだ國である。これがイプセンの藝術を育つた國である。この瀧の音や山や水の色にも、その音樂が反映して居る。ベルゲンの港にグリークの遺跡をたづね、勝景無比と云はれるハダンガアの峡江(フヨルド)を縱航し、水郷クリスチヤナにイプセンの故家を訪ねることも、もう旬日のうちにあると思へば、さすがに胸も小をどるのであつた。

菊花の賦

黄菊白菊

佐藤春夫

すべて花といふ花、原生花に近いものほどわが心にはかなふのである。「黄菊白菊その外の名はなくもがな」一竹の枝に支へられて時を得がほに大きく咲き誇り、さてはさまざまの名を與へられて、しかもその名札を麗々しく枝にぶらさげたのなどは、とんと風雅の心には遠からう。それとも風流を意志とさへいふ人もあるから。これ等の人々は何と説をなすやらん。もしそれ、菊花にも番附があるに至つては、僕はむしろ腕車を驅つて、別の籬にもの言ふ花を賞した方がまだしも贊成だ。

菊花の美は、ただ、さなきだに日々に寥々たる秋色の、嵐の後、霜の晨、葉はおもむろに枯れながらも二三輪、僅に有り得てこそ哀れもそぞろなのである。必ずしも傲霜の晩節をいふのではないが。

胸にはひめよその秘密
帯には挾めその薔薇
嵐の花に汝も似よ。

レミ・ド・グウルモンは夷狄だから、こんな場合に薔薇を言つたのだ。東洋には古來菊花がある。さうして幾多の詩人が、既に「嵐の花に汝も似よ」と教へた。

去年震災の後、故園が急に繁はしくなつて、しばらくそこに歸臥したことがあつた。母とともに枯れた草を集めて、一夕、落葉を焚いた。どうした誤りであつたか、晩咲きの黄花一輪炎のなかにあつたのを見出して、僕は大いそぎで取り出した。

「この花を見せたら、今年ならさぞ泣く人があるだらう」

僕はさう言つた——ふと、目前に火炎につつまれた人々のおもかげが浮び出たからである。

故郷へ歸る筈であるが、一日も早く、文債を處理しやう。今のうちなら、ゆつくり菊も見られるだらう。——いや、竹の杖に名札のくつついた奴ではない、石垣のかげなどに自づと生えたやうに小さく點々と咲く黄菊と白菊とである。淡むらさき八重の可憐なのもある。思ふままに生へてまがりくねつてゐる。去年は、つれづれに、紫淡い奴を採つて描き寫さうと試みたが駄目だつた……

わびしさに庭のくまなる花一つうつし申せばくる
秋の日

——歌もとんとなつてない。

僧房の菊花と霜に傷む菊花

小川未明

寺院の一隅に、菊花の幽香は、ふさはしく感じられます。境内は、しんとして、人跡を絶ち、窪地には、降つた雨の水が溜つてゐる。櫻の木の葉や、柳の木の葉が色づいて、ほろ〳〵と音もなく散つたのが、淺く底の見える澄んだ水の中に沈んだり、また、その面に二三片も浮いたりしてゐました。殊に沈んだ葉に、色の美しいのが見られたのです。

御堂は、障子が閉つてゐました。僧房の方にまはると、御堂から、書院につゞく廊下のところに、住職の作つた、大輪の菊花が、脊高く、幽かに薫つてゐたのです。こゝには、蝶も來なければ、また、訪れる蜂の羽音もしません。早くも、外は、雪の來る前の閉ひがしてあつて、高窓から射す光りと、縁側の一部が開いてゐて、寂しい庭さきを眺めるようにしてある間から、はいる光線とが、菊の鉢植の並んでゐるのを照らしてゐたのでした。

「寺の和尚は、菊作りの名人だ。あすこに咲いてゐる花は、珍花ばかりだから、めつたに人にも見せない。菊ばかりは、一葉でも摘んで盗んで來たら、それも來年は、立派に育てることができるのだから……」と、人の言つたのを聞きました。

ある年、私は、其人につれられて、菊を見に行つたのでした。道すがら、私は、和歌や、漢詩に、菊を讃美したものゝ多いのを想ひ出して、どんなに、美しい花が、そこに咲いてゐるだらうと思ひました。

私は、雅致と高潔と芳香とを、そのいろ／＼な姿に想像して、寺院に趣いたのです。そし　その際、日頃、こゝの住職のあまり好い人間ではないといふ噂などが心頭に浮ぶと、何うして、さうした俗人でありながら、高雅な菊作りの名人であり得るかと、矛盾したことのやうに、また、似附かない不思議なことのやうに、一種の考へに囚へられたのです。

いよ／＼菊の前に立つて見ると、芳香と幽美とは、その菊花からは感じられたけれど、これを高潔といふのには、あまり姿が整へ過ぎてゐる如く、また雅致があると言はんには、あまりに棒などが立てられてゐて、不自然の如く感じられたのでありました。そして、むしろ、光線のうす暗い、廊下に、かうして背高い、美しい人の立姿のやうな菊花が、ずらりと並んでゐるのが、何となく、神秘的に思はれた、その感じだけが、いまだに記憶に存じてゐるのであります。

この時、私は、和尚が留守であつたのを、何となく幸であつたやうにも感じました。静寂な、日々にさびれて行く境内を敷石を傳つて田舎道へ出ると、前には、すでに稻の刈り盡された田圃を遥かに望んだのであります。

田圃には、取り殘された柿が、枝の先に赤々となつてゐました。そして、またところ／＼に、稻を柵にかけて乾してゐるところもありました。村落を取卷く常盤木は、黒ずんで、その色が憂鬱に見えてゐました。遠くの山々は、青く灰色の空の下に、默つてゐます。そして、そのまた遠い、高い山には、雪が來てゐるのであつたけれど、雲がかかつてゐました。なぜなら、里にすら、霙が二度も降つたからです。

頸のまはりの白い小鳥が、路傍の藪に降りて、何かの木の黄色い實をつゝきながら鳴いてゐました。私は、むしろ、菊花の咲く其の頃の北國の自然を愛します。

野にある菊は、霜に傷んで、霙や、雪の降る日には、赤い血のやうな葉が、花よりも却つて美しかつたのです。そして、人間によつて、保護された花は、おそくまで、莖に花は附いてゐますけれど、その葉の色は、到底野生のものに比較すべくも

いのでした。

すべて、花は、自然を愛しますけれど、なかにも、薔薇や、菊は、野生のものが、一番雅趣に富んでゐます。たとへ、それ等の花は小さく、變化に乏しくとも、香氣が高く、莖の曲つて低いのが、自然の雄勁を表はしてゐるのです。

田舎にゐては、路傍にも深山あるやうな草すら、都會に住み、緣日などの露店に出て、たまく日につくとたまらない程、なつかしさを覺えるものです。

秋が老けて、霜の下りるやうな晩、カンテラの光りで、莖の低い、葉の眞紅になつた菊を見ると、私には、田舎の雪の降る頃の自然が思ひ出されて轉た鄕愁を催うすのです。

思ひ出の多い、その田舎道には、ふと氣にとめて見れば、雜草の蔭になつて、野菊が咲いてゐるのでした。

何人か、この野菊の花に、心をとめて眺めるでせう。その花は、人の目を惹くには、あまりに可憐でした。靑ざめた白い色は、秋の海鄕に近き、地平線の色にも彷彿するものがあります。また白い蛾の羽子のやうに悲しく、陶器の色のやうに冷たく、また戀を知らぬ、少女のやうにもつゝましやかです。

私は、後年になつて盆栽を好きな老人を知りました。その人は、盆栽については、達識の人でしたが、ある時、私に、向つて、

「野菊の雅味を解しないやうでは、いけません。宿根の野一鉢位は、置いて眺めていゝものです」と、言ひました。

濃艶から、淡彩に行くまでには、やはり鑑賞に過程があります。蘭亭の蘭は、淸楚ではあるが、日本の春蘭をそれよりも深く愛する者は、ちやうど支那の陶器よりは、日本の古い陶器の方を好くと同じ理で、より自然に近づいた證據と見做されるものがあります。

菊作りの名人の作つた、大輪の菊花に見向きもせずして、一莖の野菊に限りない詩興をそゝるものを誰か、眞に自然を解せすといふことができませう。

それは、曉の空の色よりも淡く、靑ざめた星の色よりも、幽微で、香の掬すべきものは、野菊の花であります。私は、可憐な野菊の花に讚辭を措まないものです。

――十月八日――

菊花の賦

近松秋江

許六の百花譜にも、菊花を和淡に通じて最も隠逸の花とたゝえてゐる。しとつは、季節の背景もあるためか、私もこの花を、百花の中にて最も愛する。

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな

と、昔の俳人はいつてゐるが、その言葉には賛成もできるが、又賛成しなくともよい。私は黄白の菊ばかりでは、何となく物足りない。

これは、このほど、ある物にも書いたことであるが、私が古い京の都に長い間思ひ染めた女があつた。その女との關係は、遂に最後を完うすることが出來なかつたが、私が、その女に、まだ深い愛着をのこして、女の住む家から遠くない處に、自分も、獨りで佗しい自炊生活をしてゐる時であつた。――それはもう今から五六年ほど前のことである。

秋十月の中頃でもあつたらうか、暫くその女の樣子を見にゆかなかつた。幾日もつゞけて、寂しい秋雨の降つたあとであつた。夕方から、その雨が休んで、雲が晴れると、折柄陰曆九月の十五夜で、東山の端に金色皎々たる滿月が、その古い都の街々辻々を隈なく照してゐた。私は、その雨後の月の色に、ふつとそゝられるやうな氣持ちがして、街の方に出てみた。そして、もう長い間、生々しい胸の傷に觸るやうな心地がするので、出來るたけ、女の住む家の方へは近づかぬやうにしてゐたのであつたが、それでも心の奥底では、さうして京の都を離れにくゝ思つてゐるくらゐであるから、やつぱりその女には未練があるのであつたが、この月の色の美しい晩彼女はどうしてゐるであらうかと思つて、一寸女の家を覗いてみる氣になつた。

そこで暫く遠ざかつてゐた、女の住む家の露地に入つていつた。露地の中は靜寂としてゐて、人の氣配はしなかつた。そして女の家の、櫺子窓が少し開いてゐたので、そこから背伸びをするやうにして、そうつと家の中を覗くと、一番手前の室には、二枚折の金屏風を座敷の隅に立てゝゐるのが、微かな灯を

放つてゐて、その次の茶の間との境の襖が半分開いてゐるが、明かりの具合で電燈は、そこに默つてゐるらしいけれど、人はゐるらしくもない。それから、そのも一つ奥に六疊ばかりの座敷があるのだが、そちらを見ると、向ふの緣側の障子が開放してあつて、緣先きの庭に滿開の黃菊と白菊の鉢を二つ置いてゐるのが、ふと眼に付いた。そちらに灯の明りはないが、月色がその露地の中の家まで隈なく照してゐるので、月の明りで露を帶びた黃白の菊の花が鮮かに眼に入る。

私は、女が今、家にゐるのか、ゐないのか、ことりとも音もしないで、美しい月の色に照らされてゐる菊の花を見たゞけで、滿足とも、又、いやさらに募る戀をそゝられたとも判らないやうな氣持ちになつて、靜つと、又、音せぬやうにその露地を出て戾つた。

黃菊白菊のほかに、いろ〳〵好ましい花の色はあるが、あまりに技巧を施し過ぎて、本來の自然の花の容姿に變形を與へたものは好ましくない。

そして菊花も、日比谷公園の花壇だとか、兩國の常設館の菊人形などは、あまりに觀ることを欲せぬ。

私が初めて東京に來た時であつた。――今から丁度三十年前の今頃――團子坂の菊を、人に伴れられて見にいつたことがあつたが、私は、その俗惡なのに驚いて、その等身大の菊人形に不氣味を感じたことを覺えてゐるが、それでも菊花の頃の團子坂といへば、何となく美しい年中行事の一つのやうに思はれて、その後一度も見にはいかなかつたが、その團子坂の季節の過ぎる頃から、おい〳〵年末に押迫まる、急がしい氣分は道を往く人の足音にもその響きがあるやうで、菊の時節の過ぎてゆくのが、逝く春の哀愁にもまして寂しかつた。その頃、たしか明治二十七年か八年頃の「文藝俱樂部」の扉の見返へしの處に、さういふ、晩秋の季節の移らふてゆく懷しいやうな、佗しいやうな氣持を短い俳文にしたものが載つてゐたのを、私はひどく氣に入つて、いつまでもその雜誌を保存してゐて時々取出して繰返して讀んで見た。作者は誰れであつたか、その頃は硯友社の盛時で、多分故川上眉山氏でも書いたのであるまいか、それとも嚴谷小波氏か、或は尾崎紅葉氏かとも思ふが、何となく川上眉山ではなかつたかといふ氣がする。一葉の名品「濁り江」の載つた雜誌であつたかも知れぬ。私は「濁り江」の名品に初めて接した時、それまで論文家になりたいと思つてゐたものが、一朝にして素志を變じて一葉の弟子になつて小說家になりたいといふ心を崩した。――これは菊花にゆかりのないことのやうであるが、何となく、その頃の團子坂の季節が、今か

思ふとひどく懐しい氣持がする。東京市街には、まだ鐵道馬車のほかに電車といふものがなく、無論自動車などはなく、貴人は馬車を驅つてゐた。人力車が多かつた。市街が落着いてゐて、段々秋の深みに入つて行く季節の感じは、今日では、郊外に出なければ味はゝれないのだが、その頃はまだ市中でも豊かに味はゝれたやうに思ふ。

私も、どうかして、境遇が許すならば、靜かに後庭に菊花を栽培して隱逸な晩年を過したい、それが多年の願ひであるが、今のところ、そんなことは、まだ〳〵容易に實現されない。櫻花などの殊に詩命の儚ないのと異り、菊花は凛然霜を凌いで僅に一ヶ月の餘は樂むことが出來る。花の詩命の短いのを、その美の價値の一つに數へる櫻花などは、それは、それとしてまた可いが、野菊、懸崖づくりの菊花などが、秋霜とゝもに、その色ます〳〵冴えて、透明な、秋寂びた空氣の中に、古いつづれ錦の如き色をさながらに現してゐるのを見てゐると、造花の巧みなる技巧を今更に感嘆せずにはゐられない。

私は、自分で栽培する心の餘裕のないまゝに、菊の季節になると、毎年數種の鉢を花屋から求めて來て、門の入口、縁側、座敷の床の間などに置き並べて、その隱逸の香と色に見入るのである。(十月十五日)

菊の詩菊の句

田中貢太郎

昨年南支那に遊んだ際、六七月の候であつたが、上海の市中、店頭といはず庭園といはず、到る所に菊の花を作つてあるのが眼に注いたので、さすがに菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見るのお蔭だけあると思つたことがあつた。その菊はおもに黄菊のやうに思つてゐるが、ついすると白菊であつたかも判らない。とにかく黄にせよ白にせよ、たくさんの菊が眼に注いたが、季節が早いので、どうした種類のものであらうか、やはり日本にあるやうな夏菊の一種であらうかと思つて、何人

かに聞いて見やうと思つたが、それもめんだうだからそのままにしてしまつた。

夏咲く菊の中には紺菊といふ紫の濃いやうな八重の花があつて、私が少年の時、自分の孫も私も一緒の孫のやうにして可愛がつてくれた人の好い老婆のあつた後隣の家では、鳳仙花などと一緒に庭先に作つてあつたので、母が時時それをもらつて來て墓參に行つたことを覺えてゐる。全體として菊は秋の專有物でなしに夏に配しても趣はあるが、私達は支那の詞人から得た情操によつて、菊を秋の景物としてゐるので、夏菊は造花かなにかのやうな氣がする。

支那では菊に陶淵明を配して、林和靖の梅と共に高士隱逸の伴侶としてゐる。その淵明は九月九日の重陽の日になつて、酒が無くなつた。家の傍の菊の花の咲いた叢の中に坐つてゐたが、しよざいがないので花を摘んで兩手に一ぱいになつた比、白衣の人が遠くの方から來るのが見えた。それが江州の刺史王弘で、淵明に酒を送つて來たところであつた。淵明は喜んでそのまま其所で二人で飲んだ。この淵明の故事は菊の詩といふ詩の中には、秋叢、舍を遶つて陶家に似たり、遍く籬邊に遶らして日漸く斜とか、毎に悔む陶彭澤、錢無うして菊花に對すとか、さういふふうに引用せられてゐるので、支那に學んだ日本の詞人の詩には、その故事を引用しなければ菊の詩でないやうに盛に引用してあるので鼻につく。

したがつて日本では、菊といへば、すぐ三逕、荒に就けども松菊猶ほ存す、清貧に安じて、天命を樂み、東籬に菊を採り、悠然として南山を見てゐる高士を聯想することになつてゐるが、その陶淵明の菊は離騷の朝に木蘭の墜露を採り、夕に秋菊の落英を喰ふといつた食用に供するための菊であつたといふことである。由來支那では菊を一種の靈草視して、それによつて齢を延べ、災厄をはらふものとしてゐる。爾雅には治牆と名づく。或は日精と名づく。一に周盈と名づけ、一に傅公延年と名づく。紫莖氣香にして味甘なる者有り。之を服すれば、疾を已し年を延ぶべしといつてある。荊州記には、酈縣の北に菊水有り。その涯、芳菊、岸を被ふ。水甚だ甘馨、胡廣久しく風羸を患ふ。此を飲めば疾遂に瘳ゆとし、風俗通には、南陽縣、甘谷有り。谷中水甘美、上に太菊有り。水に落ち山に從うて流下し、その滋液を得。谷中の人家この水を飲むに、上壽百二三十、その中百餘歳、七八十は則ち夭となすとしてある。この南陽の菊水は、太平記に引いた光親卿が東海道菊川の宿に誅せられた時に詠じたといふ、昔は南陽縣の菊水、下流を汲んで齢を延べ、今は東海道菊の河、西岸に宿して命を終ふといふ詩の典

據となつてゐるものである。そして支那では淵明の酒に因んだものか、重陽の日に菊酒を作つて飲む風習がある。費長房といふ者が桓景と云ふ者にいつたことばにも、九月九日、高に登りて菊花の酒を飲むべし、以て災を消すべしといふやうな語があつて、非常に菊を神聖視したもののやうに思はれるが、それは要するに神仙家の唱へた迷信で、普通には陶淵明以來食用として作つたものである。

今は日本でも菊を喫ふやうになつたが、それも一部分で、その多くは未に悠然として南山を見てゐる。私がはじめて菊が食用になるといふことを知つたのは、土佐の故郷で小學教員をしてゐた時であつた。それは秋の末であつたが、一日私達は村役場の人達と一緒になつて投網(とあみ)打ちをやり、それで獲た魚を肴にして酒を飲まふとしたが、漁場の近くには適當な場所がないので、數年間流行病もないので番人ばかりしかゐない村の避病院の事務室へ入つた。その時番人の岩松と云ふ老人が、肴にと出して來た酢の物が黄ろな花瓣のやうなものであつたから、何人かが聞くとそれが菊の花であつた。その老人は村の古老の一人で俳句などを樂しみにしてゐた。その老人は、『雪の日や雷鉢取れば巧婦鳥(みそさざい)』といふやうな句を作つてゐた。

次に私が菊を喫つたのは、桂月翁と熱海の梅林へ行つた時であつた。これはある年の正月の二日であつたが、そこの梅林の中で酒をもらつてみると、菊の酢物を持つて來た。私はその菊の酢物を肴にしてもう滿開に近い花に對してゐた。その菊の酢の物は菊の花瓣を海苔のやうにした菊海苔といふ、そこの主人のこしらへて賣品にしてゐるものであつた。菊海苔には俳味があつた。桂月翁はその時土産にとそれを買つたのを覺えてゐる。

菊のことを思ふと、私はすぐ『我が朝にその根久しき野菊かな』といふ句を思ひ出す。これは板垣伯と關係のあつた土陽新聞といふ新聞が、初めて俳句の懸賞を募つた時一等に當選した句で、何としての價値はないが、人工的に菊を咲かせて夢中になつてゐる者に向つて、大輪小輪、色とりどりに咲かしてある菊も、そのまま捨て植えにしておけば皆野菊に歸つて來る、菊作りの人人よ菊の大道を忘れるなよといつてゐるやうに聞えて懷かしい。

私が少年の比、土佐と阪神との間を航海してゐた汽船に乘つてゐた私の父が、ある日船からの歸りに一束の野菊の花を持つて歸つて來た。父は『山のはなの風の吹きつけるやうな所にあると云ふから、探したが云ふやうな花がない。』と云つた。父は大阪の者に賴まれて、野生の除蟲菊を探してゐたのであつた。父はその次に歸つた時にも一束の野菊の花を持つてゐた。私はそ

の時から野菊といふ名をはつきりと知つた。そして、野菊と風の荒い山のでつぱなとを結びつけて、野菊のことをおもうと波じぶきのかかる磯山のでつぱなにある野菊が、風に吹かれてゐる濱とびらの葉などと一緒に浮んで來る。

野菊の趣は花の形などに重きを置く人々にはわからない。今市上にある菊では、懸崖といふ野菊のやうな小さなたくさんの花を咲かして、鉢から下に枝を垂らしてあるのが稍の趣を得たものである。嘗て私は、

白菊の咲き誇りたる夜會かな

といふ句を得て得得としたことがあつたが、今から思ふと低級な悪趣味の句で、筆にするのも耻かしいやうな氣がする。

露店の灯鉢の黄菊にまたたけり

私は亦こんな句を作つたことがあつた。甚だ拙ひ句であるが、夜が更けて客もまばらになつた夜店の菊に、アセチリンガス何かの灯がちらちらとかかつてゐる所の寫生句としては、厭味がない句で、初めの句よりは良いが、しかし、菊の趣味を解しない句としては同じである。

野菊について趣のあるのは、庭の隅や畑の縁に植ゑ捨てにしてある菊である。馬小屋の前には籾殻がいぶつてゐて、その煙が糸のやうに曇つてとろりとしてゐる空へ消へてゐる。そこには一坪位の花畑があつて、鷄頭などと一緒に小さな黄菊が咲てゐるなどは、捨てられない情景である。松本といふ友人と根月翁に随いて利根川を溯り、その支流になつた片品川の谷の紅葉を觀に行つたことがあつた。その夜は高崎から七里先きの澁川に一泊して、翌日軌道馬車で三里、がた馬車で二里行つて、高平といふ所で遲い午食をすまし、根精峠の麓の小川まで行くことにして、そこの栗生峠といふのを越した。その峠をのぼり詰めた所に茶店があつて、休んで茶を飲みながら見ると、裏庭の所に豆菊が咲いてゐるのがめうにおもしろかつたのが今に忘れられない。

露寒し豆菊の咲く草鞋店

菊ではないが黄ろな單瓣の大きな菊そつくりの花が、秋の中比近郊を散歩すると籔の中などに咲いてゐるのが見えるそれは姫向日葵俗に菊芋といふもので、私の家の裏庭にも人の背たけよりも高くなつて花を著けてゐる。私は暫くその花の名を知らなかつたが、高潮會の同人で向島の百花園へ吟行をやつた時、服部耕石翁に聞いて初めて知つた。

たけ高き姫向日葵の枝ざさと鳴る

文會堂さん、はりま屋さん、酒飲み仲間が平生のやうに連雀町のぼたんといふ鳥屋へ行つてゐた時、その日は秋の晴れ渡つ

た美日で、緣側の障子に二つの鉢に植ゑた菊の花の影が映つてゐた。

『田中さん、あれが句になりませんかね、』

とはりま屋さんが云つた。

『田中なんかが氣の利いた發句が作れるもんかい、おい飲め、』

と、もう酒の廻つてゐる文命堂さんが杯を持つて來た。

『芭蕉以來だよ、』

と、私は右の人さし指をちよつと鼻にやつて笑つた。

菊日和障子に菊の影映る

菊花に對して物思ふ

上司小劍

菊は日本の最も古典的な花の一つと言ひ得やう。渡つて來た時代は知らないが、梅や櫻よりも古いとは思はれぬ。しかし、感じはズツト古い。いかにも古い國の古い花といふ氣がするではないか。いかさま古いにほひの花だ。芭蕉が歌つたやうに、『菊の香や奈良には古き佛たち』

陶淵明に憧憬し、Mme Chrysanthème の作者を思ひ出すところに、菊花の異國情緒といふやうなものが、湧き出して來ないとも言へないけれど、最も日本化した純日本の花と言ひ得るものは、菊を措いてたんとない。

『菊つくり汝は菊の奴かな』である。およそ栽培に骨の折れるものとして、菊を第一に數へても、他の花からさう苦情は來ないであらう。菊つくりの丹精は側で見てゐて、ほんたうに涙のこぼれるほどだ。私には其の經驗も閑もないが、よしや閑があつたとて、あの苦しい經驗は、とても得られまいと思ふ。すべてに創作の乏しい——といふよりは殆んど絶無な——日本において、菊花もむろん創作ではないが、しかし創作にひとしいほどの努力が、菊の進歩發達には盡くされてゐる。

『黄菊白菊そのほかの名はなくもがな』である。變な色がはり

や、餘り技巧に馳せたのは、俗氣を帶びて來て、反感を催さないものでもない。鬼一法眼の菊畠に見るやうな矯飾を加へたものよりも、むしろ畦路に咲く野菊の一輪が望ましいと言ひたくなる。

實にや、野菊には風情がある。けれども大輪の菊花や貴族的に培養された名花を悉く打ち滅して、すべてを野菊の程度に引き下ろせといふやうな議論は、人間の社會でなら通用するし、それが現在の思潮とか輿論とかになつて、人間の社會を支配してゐるけれど、菊の社會ではさういふ水準法を行ふ必要はない。技巧に過ぎて俗に墮ちたものは排斥するがよい。しかし美しいものはます／＼美しく、大きいものはいよ／＼大きく、立派なものはいよ／＼立派に、ます／＼菊つくりの腕を見せ、苦心を現はさなければならぬ。さうして、野菊は野菊で、其の簡素な、自然な姿を、野路の畔りで、もくげとゝもに馬に食はれやうとも、しほらしく咲き出でなければならぬ。

人間社會の民衆思想とても、これまで長いことかゝつて、今日の澎湃たる勢ひに導いた先覺者のつもりは、美しいもの立派なものを、皆打ちこわして、醜く粗末にせよ、といふのではなかつたのにきまつてゐる。折角高尚に進歩したものを、卑俗に引き下げよといふのが、民衆思想の一部分を構成してゐるやうに見えるのは遺憾だ。今更こゝに衆愚の跋扈とか趣味の低下とか言つて、愚痴をこぼすのではないけれど、坊主を憎んで袈裟を引き裂くやうなことはしたくないぢやないか。人間の社會は菊の社會とちがつて、大輪咲き必らずしも美しくなく、上流に却つて趣味の下劣なものが居るし、菊のやうに野菊は野菊、金屋の名花は名花といふ風に獨立してゐるのではなく、野菊の吸ふ滋養分を大輪咲きが搾取して、いよ／＼其の大をなすといふ風にたとへらるゝ現狀だから、菊の野咲きに不平のないが如く、人間の野咲きに不平ある勿れ、とは言へない。しかし私のこゝにいふのは、そんな算盤勘定ではなくて、ごた／＼ついでに美しいもの、傑れたものを、みんな叩きこわして、腹いせをしやうといふやうな、人間社會の狼藉を戒めたいと思ふのである。實際日々の食物に追はれ、住所や衣服を得るに苦んだものは、人間の最も高尚な趣味や娛樂に親しむ能力を失はしめられてゐる。さういふ人々が團結して大きな勢力をつくつた時、自分たちの味へないもの、解することの出來ないものを、すべて不用なものとして、棄てゝしまひ、少數の藝術家たちが折角苦心して作り上げたものを、見當ちがひの考へで叩きつぶして自ら快とすること、たとへてみれば即ち菊は野菊さへあれば澤山だと言つて、名花の園を荒廢させてしまふやうなことがあつてはな

らぬと、私は此頃寝ても覺めても、それを心配してゐるのだ。

ロシヤはあの革命騒ぎの時、モスクウなぞの市街にも可なり狼藉が行はれたらしかつた、劇場には指一本觸れないで、大切に、安全に保存して、今日に及んでゐるといふ。日本にそんな騒ぎの起るわけのないのは言ふに及ばないけれど、先年電車賃値上げ反對の運動が行はれた時、何んの關係もない帝國劇場へ、示威運動者の行列の中からばら〱と數個の石塊が飛んで來た。若し彼等の行列の過ぐる近くに菊花の名苑でもあつたら、忽ち蹈みにじられたかも知れない。さういふ風の無意義な破壞の行はるゝのが哀しいのだ。

雨荒深院菊といふ句は、さすがに支那だけあつて、大きな趣きを見せ、深い味ひをもたせてゐる。菊爲重陽冒雨開も菊が生きて踊つてゐるやうだ。雨の多い日本では殊に、百花皆雨を帶びて、更らに風趣を添へるが、支那でも秋の花は雨と親しみ、雨によつて活きるやうだ。コスモスの如き、日本では菊にくらべて遙かに後進ながら、秋雨に濡れて、可憐な姿を見せるでないか。

四人の菊

宇野浩二

私が十三歳の時、私が厄介になつてゐた伯父の家に嫁が來た。伯父はその時四十歳か四十一二歳かであつた。彼は若年の頃道樂者で、清元では素人として南地第一と稱せられた。無論、大阪でのことである。美男でもあつた。然し、そのため身がつまつて、或年東京に逐轉してしまつた。彼は東京で、その家に奉公でもしてゐたのが縁となつたのか、或藥種屋の娘の入婿になつて、三人まで子をなしたのださうであるが、その後六七年か七八年か經つてひよつこり大阪に歸つて來た。それはその藥種屋を又も逐轉したのか、それとも向から離縁にされたのか、私は知らない。彼が歸つて來たのは、當時私の家が未だ存在し

てゐた頃で、後家になつた母と、母の母と、そして私との家の玄關に、或日、ひよつこり一箇の鞄を下げて立つたのである。それは私が六七歳の頃であつたらう、偶然、玄關に人の氣配がしたので、私がちよこ／＼と行つて見ると、それが東京から歸つて來た伯父だつたのだ。それから彼は私の家が解散する迄、二三年の間私の家に居候をしてゐるうちに、志を立てゝ、三人の從兄弟たちと合名して雜紗の商賣を始めたのであるが、それが成功して私の家が解散した時、彼が家を構へることになつた。そこへ私と、私の母の母、――即ち彼の母とが引取られることになつたのである。彼はそこから毎日店の方へ通つてゐた。そこで、私が十三歳になつた時、遲れ走せに、彼は嫁をもらふことになつたのだつた。

嫁は私より一廻り上の、當時二十五歳であつた。彼女は、伯父からいふと、彼の從姉妹の夫の妹に當るもので、その時が初婚ではなく、三度目の嫁入りになるとのことであつた。が、彼女は伯父の家に來て到頭落着いた。三人の子供まで生んだ。私はそれからずつと中學を卒業する年まで伯父の家に世話になつてゐたので、自然その家の主婦になつた彼女の世話になつた。

彼女の名が菊といふのであつた。

彼女が嫁に來ると定つた時、祖母と誰かとがその名前の話をして、「ぢやあ××の後家と同じ名前だな、」といつてゐたのを、私は耳にした。××といふのは、伯父が一緒に合名して商賣してゐる從兄弟の一人の名で、即ち祖母からすると甥に當るものであつた。その人の母が早く夫に死に別れて、後家になつてゐたのである。××といふのは伯父たちの從兄弟三人のうちで一番年長で、商賣の方でも一番多く資本を出してゐたところから、他の二人は彼の家へ毎日番頭格で通つて行くやうになつてゐた。或日、私が何かの使を命じられて、この家へ行つたことがあるが、その時この後家さんの部屋に通された。後家さんといつても後妻に來た人であるから、割合に年が若かつた、當時五十歳位ではなかつたかと思ふ。何の爲にそんな子供の私が彼女の部屋に通されたのだつたか覺えてゐないが、それは六疊位の薄暗い部屋だつた。正面の床の間に、多分版畫の掛物でゝもあつたのだらう、西南戰爭の時、谷村圭介（？）が熊本城を拔け出して、賊軍の手に捕へられてゐる畫が掛つてゐた。

後家のお菊さんは、どういふ切つかけで、どういふつもりだつたか、その畫を指さしながら、この世は艱難に充ちてゐるといふことゝ、谷村圭介がえらいといふことゝ、私にも谷村圭介のやうにえらくならなければならないといふことゝ、私のやう

な父のない子は尚一層人に負けないやうにせねばならぬといふことなどを、彼女は訓誡した。私は泣き蟲で、どういふ譯だつたか、その話を聞いてゐるうちに、掛物の谷村圭介の畫が次第に見えなくなつて來たかと思ふと、もう隱し切れない涙が目に一ぱい溜まつて、到頭それが頰を傳つて膝の上に落ちた。涙を人に見られたと思ふと、一層悲しくなつて、終ひにはしくしくと聲を出して泣き出した。それにも拘らず、後家のお菊さんは泣き止めともいはないで、彼女の教訓をつゞけた。彼女とは、私はその前後にも五六度會つてゐる筈だが、彼女に就いての私の記憶は、その掛物の部屋で泣かされたこと一つしかない、而も、その記憶だけが妙にはつきりしてゐる。

つまり、私の伯父に嫁入つて來た人が、その人と同じ名の菊であつたのだ。先にもいつた通り、この人と私とは年も一廻りの違ひでしかなかつたし、六七年の間同じ家にゐた譯であるから、前の菊女の場合と違つて、思ひ出さうとすると、色々な記憶があるが、その一つ二つを擧げると、或時、彼女が私に、男と女といふものは決して思ひ合つた同志が夫婦になれるものではない、といつたことがあつた。さういふ話であるから、それは私がもう二十歲近い時分のことであつたに違ひない。彼女は教育のない人で、どちらかといふと無智な人であつたが、彼女の母の感化を受けて、念佛の信者だつた。だから、自分の好きと思つた人と添ひ遂げるなどといふことは、この世にはないことだ、と彼女はそれが佛樣の與へた約束でもあるかのやうにいつた。が、思ふに、伯父の家に來る前、二度も緣づいて歸つて來た彼女のことであるから、この言葉は彼女の經驗に依つて裏づけられてゐるに違ひないことも確だつた。彼女が更につゞけて、私に、自分のやうなものは無教育なもので、私から見れば何の取るに足りない者であるかも知れない、又それは本當である、だが、この言葉だけは、私がどんなに大きくなつて、どんなにえらい人間になつてからでも、屹度思ひ當るだらうといつた。それは間違ひではなかつた。私はその後幾度も彼女のこの言葉を思ひ當つた。

もう一つ、彼女の言葉で今でも覺えてゐるのは、或時彼女がいふには、彼女がその前の晩、里から遊びに來た彼女の母親と、道頓堀の雜踏を歩いてゐた。多分、彼女は姑のことや、氣むつかしい夫のことや、又夫の甥である厄介者の私のことやに就いて、嫁に來たもの丶苦勞や心遣ひを生みの母に訴へなどしながら歩いてゐたのであらう。その時、突然念佛の信者である彼女の母親が、「お菊や、」といつた。「お菊や、人間の世界は[illegible]ひ

であるか、悲しみであるか、又苦しみであるかは分らない。だが、その何れであるにもせよ、人は決して慾張つたり、意地悪をしたりしてはならない。考へて御覽、どんなにしたところが、今から七十年經つたら、私は勿論のこと、お前も、お前の夫も、お前の子も、又こゝらを歩いてゐる人も、みんな土の下にはひつてゐなければならないんだよ。」かういつたといふのである。菊女はその話を私に傳へて、まつたくさうに違ひない、彼女は母親にさういはれた時、突然目の前の雜踏も、彼女自身も、世の中の一切のものが、土の下にはひつてしまつたやうな氣がしたといふのである。なる程、七十年經つたらみな土の下か、と思つて、私も同じ眞暗な思ひをした。

やつぱり伯父の從兄弟に、（彼には無數の從兄弟姉妹があつた。）その時分東京の聯隊に勤めてゐた陸軍大尉があつた。この人が讃岐の聯隊に轉勤になつたといふので、通る道で、大阪の親類に寄つた。大阪の親類たちの誰もが、彼の細君を知らなかつた。彼は親類中の者の例を破つて、他國で嫁をもらつたからである。細君は東京の人であつた。そして、その人の名が菊であつた。「やつぱりお菊さんといふんださうだ、随分多い名前だな。」と私の祖母がいつた。

この大尉夫人の菊女は、東京辯であるだけでも、私たち珍しかつた上に、一體に大阪の伯父の家の親戚は商人が主だたので、彼女だけが所謂お上さんでなしに、奥さん型であるのも珍らしかつた。が、随分ハイカラだが、縹緻は餘りよくない、といふ大人たちの批評であつた。私は子供のことであつたから、ハイカラなことは分つたが、縹緻の點は分らなかつた。兎に角、東京辯は齒切れがよくつていゝなと思つた。私が伯父の家にゐる六七年の間に、この人は二度ばかり來ただけだから、その外に覺えてゐたことはない。何でも初めて大阪に現れた時、この夫婦は既に結婚してから四年にもなるのに、子供がないといふ話であつた。

私がその後中學を卒業して東京に來た頃には、この軍人夫婦も亦廻り廻つて東京に來てゐた。私一人の時には無論訪問もしなかつたが、そのうち私の母が上京して來て、母には彼が從兄妹に當るものだつたので、彼女が訪問した。その時、私も一緒に尋ねたことがある。十何年振りに見た譯だつた。菊子夫人も最早老いて見えた。そして、彼等には到頭子供がなかつたので、夫の甥に當るものを養子にもらつてあつた。その頃、菊子夫人も私の家を尋ねてくれたことがある。ところが、それから二三年後、久しぶりにたよりがあつて、いふには菊子夫人が妊娠し

て、男の子を生んだといふのであつた。結婚してから十八年目に初めて姙娠したのださうである。

その次のお菊さんはずつと後、私が二十七歳の頃である。辛うじて下宿住居はしてゐたが、殆ど無收入で暮してゐた時のことで、心では、もうこの上は、どこで雇つてくれるところもなささうだし、といつて外の職業にこれといつて腕に覺えはなし、身を捨てゝ、長年思ひをこめて來た小説を、乘るか反るか、半年か、一年か、下宿屋を食ひ潰してゞも、書いて見ようといふ志を立てた。志は立てたが、立てたゞけで、相變らずぶら〳〵と日を消してゐた。が、小説の外のことは一切考へまいと決めたことであるから、働いてゐるのは頭ばかりで、毎日朝から晩まで身體の處分に少なからず困つた。だから、夕方になると、誰彼と友達を尋ねては、彼等に從つて銀座のカフエーを歩き廻つてゐた。そのうちに、いつとなく行く先のカフエーが一つの場所にきまつてしまつたので、自然そこの家の女給たちと顏馴染になつたが、お菊さんといふのはその家の女給の一人なのだ。カフエーの女給にしては、彼女は主に銀杏返しなどに髮を結つてゐる、どちらかといふと古い型の女だつた

私は今いつたやうな貧乏な狀態だつたので、夏のことだつたが、手拭浴衣の、それも古いのと、洗濯のためとでところ〴〵もう地が破れてゐるやうなのを、二枚しか持たなかつたが、それを交る交るに着てゐた。眼鏡も一度金縁のを持つてゐたのだが、それも質に入れてしまつて、鐵縁の錆のついたのを掛けてゐた。無論、一緒に行く相手がどんなに變つてゐても、私は會計を拂つたことなど一度もなかつた。私は元來酒をたしなまない方なのだか、その頃は麥酒だけ飲み馴れて、一本半か二本位飲むと、踊つたり、歌つたりした。

すると、或晩、そのお菊さんが醉つてゐる私の耳の傍に口を寄せて、私の名を小聲で呼びながら、「あんたはもう本當にこれつ切りになつてしまつたの？」と姉さんのやうな親しみのある、馴れ馴れしい口調でいふのだ。初は私はその意味を悟り兼ねたが、つまり私が酒好きで、そのために家から勘當でもされて、それで貧乏して居ると思つたらしいのである。考へて見ると、醉ひながら、鐵縁の眼鏡などをふり廻して、これは三十錢だよ、安いだらう、前の眼鏡を質に入れて、これを買つたんだが、それで三圓二十錢も殘つたよ、などといつたことを、彼女は參考したのだらう。私は別にその女を好きとも思つて居なかつたし、向うでも私を色戀の意味で好きといふ譯ではなかつたのだらうが、そのことがあつてから、私たちは急に親しくなつ

た。それに、この女は妙に傳法肌なところがあつた。後で聞くと、家が浅草にあつて、自分は長唄の師匠をしてゐたのだが、妹がその家に以前から女給に來てゐたので、近頃はやる女給とはどんなものだらうといふ好奇心から、夏場の休みを利用して遊びかた〲稼ぎに來てゐたのださうである。だから、彼女は二週間ほど居た切りで、すぐに止めてしまつた。

愈々明日止めるといふ前の晩、彼女は私の耳の傍に口を寄せて、「止めても、あんたにだけは時々會ひたいわ、私んとこへ遊びに入らつしやらない、」といつた。その晩、別れる時、私はセンチメンタルになることを恐れて、一層醉つた振りを裝ひながら彼女と握手をしたが、彼女は心から哀れむやうに「本當に仕樣がない醉拂ひだわね」といつて、きつい女だつたが、目に涙をためて見せた。

それから一週間ほど後に、私の下宿に宛てゝ、彼女から何日に遊びに行くからといふ手紙をよこした。が、その日彼女は到頭來なかつた。そして來ない代りに、どういふつもりだか、その翌日蒲鉾型の指輪を一個小包で送つて來た。見ると、その指輪の裏に何か文字でも刻んであつたものと見えて、小刀で削つた後がついてゐた。そして、「これ質に入れてもかまはないわ、」と書いてあつた。三日ばかり私は持つてゐたが、結局その通りにした。そして、彼女とは手紙にも、會ふにも、これ切り交渉がなくなつてしまつた。

白菊

長田秀雄

記者から課せられた作文の課題は「菊花の賦」といふのであつたが、花については別に書くこともなかつたので、その花の名前を持つた人間を、思ひ浮ぶまゝに書いて見た。

これからさき、よく、仄暗らい床の間に、無造作に投入れられた一かたまりの小さな白菊が、果々として、目のさめるやう

な美くしい純白の色調で輝いてゐるのを、しやれた客間や、茶室などで見る事がある。

　これは俗に花賣りたちが、目玉菊と名付けてゐる種類である。が、本統は何と云ふか、私は知らない。

　世上多くの人は、菊造りが精魂をこめて造りあげた大輪の菊を愛するやうであるが、私は、どうも、あんまり人工を加へた菊は好かない。

　殊に、變り種のやうな物は、何うしても愛する氣になれないのである。これがダリヤとかバラとかその他の花木であるならば平凡な種類より、變り種の珍らしいもの程、面白いと思ふが、菊だけは、人工を加へた物は、何うも俗な氣がして厭だ。つまり、冷艶素香と、まあ、かう云つた情趣が、たまたま私の性に合ふのだらう。

　これは私の感だから、ひよつとしたら、違ふかも知れないが、どうも、支那人は黄菊を愛し、日本人は白菊を貴ぶやうだ。「採菊東籬下、悠然見南山」と云ふと、私は何となく咲亂れた黄菊を聯想する。一體、支那人が黄色を愛するのは、やはり日本人が白色を貴ぶのと、同じく一種の國民的感覺である。白と紺や藍色の美くしい調和が、浮世繪や何かでよく見られるやうに、支那へ行くと、黄色の瓦をのせた朱の殿堂だの黄色の大旆だの、その他俗間の調度や、彩色した看板などにも黄色がたくみに使はれてゐるのを見る。

　私が白い菊を愛するのは、やはり日本人だからだらうか

十二月號重要記事豫告

我國の敎育界が直面する一緊急問題(長大論文)……大山郁夫
都會時代の崩壞(長大論文)……室伏高信
經世眼と趣味眼に映ずる滿蒙(百五十枚の雄篇)……黑頭巾
圓山應擧(長篇)……村松梢風
街の灯(小說)……宇野千代
二人の中年者(小說)……廣津和郎
寂しければ(第三話)(小說)……久保田万太郎
子の愛の爲めに(小說)……近松秋江
警視廳本來の職責とスパイ問題……諸家
大正十三年歲晚記……諸家

大正十三年秋の美術展批判

日本畫總まくり

臨風生

一

池の端のバラツクに咲く牽牛花の輪も次第に小さくなつて、赤蜻蛉が蓮の浮葉卷葉に戯れるやうになると、上野の秋には美術の花が誇りげに咲き匂つて來る。院展、二科展に、南畫會、さて大詰は帝展である。現代美術の評は餘りしないことにしてゐるから、評判物の日本畫數點に就いて、所見を開陳するに留めて置く。

院展、川端龍子氏の「龍安泉石」は先づ題材の奇抜なので目を牽く。龍安寺の虎子渡は銀閣寺の林泉、大德寺塔頭大仙院の庭とともに相阿彌の名作として傳へらるゝものである。銀閣寺には流水が紆餘曲折してゐるが、大仙院の庭と龍安寺のとは一水一泉を用ひてゐない。然も大仙院には奇石に配するに異卉嘉木を以てしてゐるけれど、龍安寺の虎子渡は一木一草を配せずして嚴石と白砂とのみである。云はゞ盆石の擴大したものである。果して相阿彌の作か否かは甚だ疑はしいもので、他の多くの林泉が正確なる記錄に所載なくして、多くは傳說であるやうに、之も亦傳說に過ぎない。東山時代の史料には築庭の名人として善阿彌の名を存するが、相阿彌の築庭に就ては所見がないところから、相阿彌築庭說を否定する人もあるが、之は餘りに云ひ過ぎのやうである。相阿彌のやうな多趣味の人に築庭の趣味がないとは云はれまい。禪僧ではあつたが夢窓國師は天龍寺や西芳寺やの林泉を工夫してゐる。相阿彌築庭說は確に合理である筈である。然し龍安寺の虎子渡が果して相阿彌の意匠になつ

たか、それは明がでない。金森宗和作の説は案外林泉通の間に有力であるが、これとても傳説であつて、宗和の知己槐記の著者は此ことに言及してゐない。相阿と宗和とは晉に共通のところがあるから、一方は一方の轉訛であらう。細川勝元説もあるが、之は龍安寺と勝元との關係から唱へたもので、勝元が朝夕男山八幡を此處にて遙拜する故、目を遮る樹木を厭ひて、盆石式の庭を營んだと云ふことであるが、之れ亦一個の傳説に過ぎない。

龍安寺の虎子渡と云つて、龍安寺の庭と云はないのは、此寺には池水漫々たる一大林泉があるからである。此林泉も有名で、北尾政美の如きは都の錦に此林泉を描いてゐる。都名所圖繪にも虎子渡の圖は見えないで、此林泉が載つて居り、獨り花洛林泉圖繪にのみ虎子渡を圖してゐるのである。

此閑庭に羅列せられた石の數は十六、然も錯綜して配列されてゐるが爲に明滅定かないものがあつて、一見して其實數を擧げることは難いと云はれてゐる。波濤浩渺の間に島嶼の點々したのを形つたもので、數畝の閑庭は即ち煙波縹渺として限りない太洋である。同じく自然を寫すにしても山間の幽谷を象つたものではなく、溪流涓湲の狀を寫したものではなくして、滄溟の茫々たる間に青螺の點在したのを現はしたものでる。そこには風を孕んだ帆船もない、そこには蜑の住む漁舍もない。然し其間に坐して靜に之に對すると、風濤洶湧して鮫人夜泣くの感じが油然として眼前に展開される。又之に對すると、相阿彌の描く所の南畫式ではなくして、雪舟及雲谷派に見るが如き北畫式を思ふのである。

自然の精神を促へて、其大觀を縮圖したのが、此閑庭の價値であつて、局促たらず、煩瑣たらざるところが其身上である。龍子氏は果して善く築庭家の本意を領會して、此奇拔なる題材を書きこなしたであらうか。龍安寺の泉石に其題材を求めたところは、流石に畫壇の才人たるに背かぬ。一隅より閑庭を諦視したので、壁は畫面を遮斷して、屋根瓦は鱗の如く其上を蔽うてどツしりと重い。結構も趣向も決して凡ではない。

然し如何にもせゝこましい庭である。作家の着想は面白いが、龍安寺の虎子渡に現はれた築庭家の意匠は作家とは風馬牛となつてゐる。蒼茫たる滄海の大觀は薬にしたくもない。閑庭の生命も精神も畫裡には微塵も現はれてゐない。壁や屋根瓦やは遠慮會釋もなく閑庭の趣向を破壞してゐる。此泉石に對すれば、壁も屋根瓦も眼底には映ずべきものではない。若し映ずるとすれば、閑庭の精神は滅却してしまふ。

けれど、作家は泉石に現はれた精神を寫さうとしたのではあ

るまい。一體此泉石を畫にして、相當の功果を獲ようとするのは中々に難い。よしや羅列した巖石を描いたところが、散漫にして纏るものではない。作家は此至難の題材を捉へて、如何にして纏めようかと苦心したであらう。即ち一隅よりの觀測に着眼し、壁と屋根瓦とを配合して、巧に之を纏めたのである。そこに作家の働きがある。閑庭の精神は全く滅却して、泉石の面白味は全然失はれたにしても、畫圖としての功果はとにかく收められたのである。せゝこましくなつても、局促煩瑣となつても、それは已むを得ぬことゝあきらめねばならぬ。

但し畫かれた巖石は嵯峨峻峭たる北畫式のものではなくして、軟味のあるものであつた。皴もまことになだらかで、巖石よりは寧ろ土坡のやうな感じがする。盆石式の光景は此に失はれてゐる。

題材は奇拔であり、結構も手法もしつかりとしてゐて、龍安寺の泉石を描いたと云ふ功果は收めてゐるが畫としての、趣は極めて乏しいと云はねばならぬ。作家が龍安寺の泉石に興味を見出したのは甚だよい。然し龍安寺泉石の妙趣は畫圖の裡に現はし難いのであるから、作家は其構圖に工夫したのであるが、泉石の妙趣は其構圖の爲に失はれたのみならず、畫としても落寞たる沒趣味に陷ツてしまつた。此に至ると、作の勞は酬ひられるところ甚だ險しいと云はねばならぬ。唯斯る難儀な畫材をとにかく纏めてこなしたところに作家の才が光を放つてゐる。

「龍安泉石」は寧ろ水墨の畑であつたらうが、作家は色彩を以て大膽なる構圖と緻密なる手法とを用ひた。同じ洛外の風景は近藤浩一路氏が「洛外十題」に、水墨にて取扱はれてゐる。洛中洛外の風景は以前速水御舟氏に依りて輕妙なる淡彩の筆致を見せられたが、浩一路氏は全く水墨を以て細心な用意はありながら、洒々たる筆致を見せた。いづれも、潤ひがあつて、しかも浮薄ではない。然し洛外の光景と云ふ感じが案外薄いのは、どう云ふわけであらう。御舟氏の「洛中洛外」には、各々特色の動かすべからざるものがあつたが、「洛外十題」には特色の闡明せられたものが甚だ乏しと云つてよい。之を洛外と云ふても可、之を他の野趣ある郷土と云ふも可。大原野も鞍馬山もそこに動かすべからざる光景は見出し難いのである。

それはとにかく、此畫に對して感じのよいことは多とせねばならぬ。よしや墨の濃淡、滲墨にまだ到らぬところはあつたとしても、落筆の直率簡素にして輕煕洒脱なるは、嬉しい。水墨を選んで各畫題をこなさうとしたとこに、當子氏の如く、此作家の才が閃めいてゐる。

二

院展全體を通じて之を見ると、技巧に墮して來たことは爭ふべからざる事實である。横山氏が院展を代表するが如く、氏の作品「早春」は院展派が技巧に傾いてゐることを表明する。此小品にやゝ厭味のあるのは、多少小細工に過ぎてゐることである。早春の感じが、あれほど小細工をせねば現はれないやうでは、技巧も單なる技巧の爲の技巧で、精神表現の爲めの技巧とはならぬ。

下村氏は由來技巧派の頭目であるから、氏が鮮やかな技巧は今に始つたことではないが氏の技巧も多くの場合に於て、技巧の爲めの技巧に出ない。氏が好んで畫く維摩にしても、禪僧にしても、常に俗に陷つて、出世間的氣魄に缺けてゐるのは、之が爲めである。今秋の「維摩」に就いても亦同樣の嘆を繰返さざるを得ない。

私は或る一派の唱へるやうに技巧を排斥するものではない。技巧は作家が觀念表現の手段である。技巧の洗練せられたるものになると、一筆一畫に精神が躍如する。支那の畫論者は、畫の八格を說いて「石は老いて潤ひ、水は淨くして明かに、山は崔嵬を要し、泉は洒落なるべく、雲烟は出沒し、野逕は迂廻し、松は龍蛇を偃せ、竹は風雨を藏す」と云つてゐるが、此自然の生命を表現するだけの技巧がなくては、胸中の神氣も生機も發するに由はなからう。山水泉石の精神を理會し、胸中に藏する所の生機を持ちて、之を筆墨の妙に托してこそ始めて八格の八格たる點が明になるであらう。形似を寫して其神に及ばないのは、技巧の爲めの技巧に墮したからである。神氣生機一天張りでは、つく芋山水の末流文人畫になつてしまふ。描かんとする對象の精神を理會するには、胸中にそれだけの蘊蓄がなくてはならず、其精神を寓する形似を寫して眞の妙境に到らんとするには、是非とも神氣生機の發露がなくてはならぬ。高士逸人の畫が尙ばれて、畫工の畫が輕んぜらるゝ所以も、畢竟此に存するのである。唯に形似を寫す技巧と神を寫す技巧との區別は截然として辨ぜらるべきである。

美しく描かうとする、手際よく器用にやつてのけようとする、對象の精神を求めずに、之を形似の上に求めやうとつとめる。內容の空漠たるは當然である。技巧派が賤められるは畢竟之が爲めである。

然し下村氏の技巧は他の技巧派のそれに比して品致が饒かで、どこまでもしつとりとして、水際立つて鮮やかである。氏にして對象の精神を明に領會したならば、其精神を掴んで表現

するも易々であらう。表現の方法と其巧みさとは氏極めて善く之を知る。惜むらくは好漢未だ其見地に達してゐない。

速水御舟氏の天分は小林古径氏とともに院派の九鼎大呂である。自然を観るに一隻眼を備へて、藝術的良心が甚だ饒である。然るに近年の氏が作は纖細の筆を用ひて、しかも其色彩と云ひ、其風格と云ひ、西洋畫の傾向を帶ぶることが著しく、殊に本年のになると、銅版畫じみて、功果は其筆に酬ひない。しかし其中でも「曉靄」「平野晴景」の如きは、流石に優れて、小點とは云へ、人を引きつける力は十分ある。けれども斯くの如きは小點向きの筆となつて、大作としては果してどんなものであらう。

若し呶々を要するならば、猶二三子に就いて云ふべきこともあるが、個人の評判をするのは今の目的でない。一般の傾向に就いて論ぜんが爲に前記の諸作を借りて來たに過ぎない。畢竟するに院派も技巧に墮して來たことは爭ふべくもあらぬ。とぼけた馬鹿〳〵しいやうな畫が無くなつた代りに、一般に小奇麗になつたのである、院派が行詰つたと云ふ批評を受けるのも此にあるのだ。然し此傾向は獨り院派のみではない、畫界全體を通じての傾向である。

南畫院は新しい南畫を建設しようと意氣込んでゐるところに頼もしさがあるが、果して出來るかどうかは甚だ疑はしい。其展觀を見ると、從來の傳統や約束から離れようとつとめてゐるのもあるし、依然として傳統約束に囚はれて脱し得ぬのもある。離れようとするものには、舊の院派に眞似したやうなものがないでもない。とぼけた超人的構圖や落筆やを無理にこなさうとしてゐるものもあるが、餘りに賢明であるがために、其境地に達し得ないのを遺憾とする。小室翠雲氏の「鮮鱗」は、會場中にての評判物であつたが、潤ひが足らないと思ふ。

自由畫壇の諸氏はいづれも努力の作を展觀してゐるが、全體を通じて、池田桂仙氏の南畫、林文塘氏の版畫張りを除くと、同じ畑か、隣近所の畑同士かの爲に調子が同じやうで、變化が乏しい觀があるのを氣の毒に思ふ。努力の結果、書き過ぎて、餘情を留め得ぬのは、所謂展覽會型の弊であらう。

努力は結構だが、斯う云ふ努力になると、作家の肩の凝つたのは無論、觀者も肩が凝つて、見るに骨の折れること夥しい。寧ろ日本ラインの同人合作などの興味本位の方がさつぱりとして面白くて善い。然し努力は將來向上の階級であるから、一概に肩の凝るだの、骨の折れるだのと、けなすべきものでもない。但し此畫壇同人は固より技巧派の人であるから、全處に技巧の鮮やかなることは云ふまでもなからう。

三

帝展の日本畫も技巧本位であるが、案外に平凡で、諦視之を久うするものなきに失望せざるを得ない。然し京都派には流石に點頭るゝものも多いが、東京派の振はざることは以ての外と云はねばならぬ。川合玉堂氏や小堀鞆音氏や山本春擧氏やの如き老大家は鮮やかな手際を見せてゐるが新進作家で委員とか推薦候補とか云ふものになると、言語道斷で、安逸を貪るのか抑も名實伴はないのか、いづれも愚劣な作品揃ひで、入選さへも疑はしいのである。由來此徒が誤つて名聲を博してゐるとの感を抱いてゐたが、事實は之を裏書してゐる。廣島晃甫氏の如きは東京新進作家中唯一つ望をかけてゐたが、之さへも何等の進境を見ない。乳兒を抱く母性も斯う繰返されてはうんざりする。金泥の落葉に何の功果がある。畫面の諧調は破れて、目ざはりとなること尠からぬ。素質の美しさは失はれて、技巧が進んだと云ふより外に得る所ない。再省三省を要する。

同じ技巧にしても、韻致の優れた、上品な、手際の好いのは、菊地契月氏の「立女」である。單に天平美人を畫いたもので、内容は甚だ空疎であるが、一方藥師寺の吉祥天女のやうな女は藤の花を手にしながら、表情の乏しい顔つきしてゐるに對し、一方は眼をつぶつて兩手で壺を抱いてゐる。脚下には花が咲いて、鳩が飛んだり啄んだりしてゐる。模樣はすべて法隆寺物や、正倉院御物やら取つて、繪全體を裝飾化してゐる。調子は例の通り軟かで、しつとりとしてゐて、氣高い犯し難い所がある。面白い味は薄いが善い作品である。

福田平八郎氏の「牡丹」を見て、賦彩の混濁なるに少からず興味を殺がれた。好んで斯る不鮮麗なる色彩を點じたところに作者の意見もあらうか知れぬが、若しありとすれば、作者の色彩に對する概念は誤りである。獨り福田氏のみならず、一體に色彩の不鮮麗なるが多い。どす黒い、華やかならぬ賦彩は近來の日本畫を通じて見得る現象である。佛國繪畫の展觀を見て、オットマン等の諸家が極めて鮮麗に色彩を現はし、明るい快い感じを遺憾なく發揮してゐることは日本畫家の大に猛省すべきことだと考へてゐる。節は初夏、綠陰幽草花時に勝るの時で、晴淸にして日また長しと稱せらる。薫風一路明かなる陽氣の季節である。況んや牡丹は豊麗紅艶の花で、錦幕宮妝を以て知られてゐる。其花には一點の濁りがなく、半個の黒ずんだところがない。玉堂富貴を稱せらるゝのも、曉日微醒と云はれるのも、一に其濃艶を歌はざるのはない。此作家が畫面一杯に描き出した牡丹の一群は花と葉と錯綜して、千姿萬様のさま〴〵

を寫し、巧を極め微を盡してゐるが、色彩の不鮮麗は更に心行くばかりに思はせないのである。賦彩の鮮麗は古畫に於て今猶新なるが如きを見るものさへあつて、古人の用意深きを想はせられる。令へば僧惠心僧都筆の聖衆來迎圖の紅色の如きはそれである。竹田、椿山の花卉圖に於ても目覺むるばかりの鮮妍なるものに驚嘆させられる。作者が淡彩を以て、將た墨色を以て其技を發揮しようとなれば、敢てとかうの論をなすものでないが、極彩色を以て牡丹の情調を現さうとするに、何を苦んで、斯る不徹底な賦彩を以てしたかを怪まざるを得ない。賦彩の混濁は今の日本畫に多く、見る所の通弊である。作者の如き新畫壇に多大の期待を繋がれゐる人は宜しく特に此等の點に留意すべきである。

堂本印象氏も福田氏とともに京都畫壇の花形であるが、「乳の願ひ」は畫題としても時代後れであるし、作としても決して推稱に價せぬ。乳糜供養などの印度題材が流行したのは、既に過去に屬する。まして斯る怪奇な印度風俗などは、決して今日採るべきものではない。「故父」になりては西洋畫に讓つた方が遙に賢明であつたらう。

登内微笑氏の「梅雨霽れの嚴島」は纖弱の憾はあるが、器用に書きこなしてある。但したの御山半腹に名所圖繪式の一抹を加へたのは、目障りである。川崎小虎氏の「春の訪れ」は上品の出來榮えであるが、ポチチエリーの「春」が步々散華して行くのと事かはりて、之は空中を飛揚して花咲く野邊、蝶舞ふあたりを徘徊するのである。さあれ佐保姫の飛び翔けるに隨つて花咲き蝶舞ふ工夫があつて欲しいものと思ふ。

浮世繪は會場内に其影寥々となつた。今秋の展覽にも、伊藤深水氏の「おしろい」、山川秀峰氏の「夢」梶原緋佐子氏の「水取りの夜」三點を擧ぐべきである。南畫に至りては更に寥々、獨り小室翠雲氏の「春」に溫潤の趣あるを見る。

南畫の算を亂しての打死は、南畫界の物議を醸して帝展との分離問題が惹起されるやうである。之も尤もと思ふ。推薦にも醜態を曝露した帝展の日本畫前途には幾多の問題が橫はつてゐる。權威の餘り無くなつた帝展であるから、威嚇やら、すねるやらで、定めし賑やかなことであらうが、離合聚散の常ならない藝術家のことであるから、當局者もさして頭を惱ますにも及ぶまい。南畫院の建立された今日、南畫家諸君は院の展觀で氣焰を吐いたら善からう。

舊の金鈴社同人が打揃つての不參も一種の謎であらう。京都に於ける栖鳳門下の逸足が缺勤したのと善い對象である。少くとも暗雲低迷の香ひはあるが、天氣豫報と一般、晴雨は豫定す

べきでない。掛引きはどこにもある。藝術家は藝術家らしくありたいなどと云ふが、藝術家の定義からして先づ極めてかゝらねばなるまい。黨同閥異、勢力爭ひは、支那の軍閥日本の政治家だけと思ふと、大間違ひである

帝展の諸制度もいけない、改正の諸制度は猶更惡い。藝術家に不平不滿のあるのも無理はない。元來出立點が官僚であるから、民間の藝術家を網羅するには餘りに智慧が無さ過ぎる。まして藝術家と云ふ天才を統御して纏めて行くには荷が勝ち過ぎてゐる。

帝展廢止を叫ぶものもあるが、之れ亦無用の議論に過ぎぬ。帝展は一箇の大傘下で、群芳妍を爭ふ場所と見て置けばよい。以前は餘りに其勢力を買ひ被り過ぎてゐたが、今日では、推薦も無鑑査も入落も以前ほど大した問題ではない。藝術家の爲にもあつてよく、國民の爲にも當然あつて善い大展觀である。唯今日の諸制度が問題を起し勝ちな藝術家に更に一層起させるやうに仕向けてある。改善の餘地は多々ある。廢止すべきに非ずして改善すべきにある。

新進作家が、努力し苦心し、其力作を出品するのは、當然である。作家も血を吐く思で描いたらうが、観る方でもそれだけ肩が凝る。樂んで畫を描くのでなくして、苦んで描いてゐるのであるから、観者が樂むに到らぬのは偶然であるまい。老大家になると、どうやら樂むに近いところがあるやうに見えて、急に肩の凝りが下りる。間に合せの畫を出品して、いゝ氣になつてゐるのは、藝術的良心の乏しい畫工のすべき業であるが、結構と筆致とに洗練の手際を見せて、悠々逼らざる態度でこなし上げてゐるのは、流石に氣持がよい。老大家は斯る態度で、いつも作品を出展して帝展中に別の天地を開いて貰ひたいものである。

院展に對して技巧を論じた私は、帝展に就て彼是云ふことを避けたい。帝展はおしなべて技巧の競走であるから、今更云ふにも及ぶまいと思ふからだ。京都と東京とを通觀すると、京都派が技巧に優れてゐることは勿論である。寫生のしつかりしてゐるのは其特色である。其京都派が東京派の氣分本位に倣はんとするは京都派の強味である。東京派氣分本位が、其氣分本位を棄てゝ、京都派の技巧に眞似しようとするのは、一體どうしたことであらう。帝展日本畫中此兩派の數は各々七十餘點で、略々同一であるが、新進作家の優秀なるものは、多く京都にあつて、東京には甚だ乏しい。東京派畫家なるものは宜しく此に鑑みるべきである。

今年の洋畫概感

森田恒友

去年は九月一日といふあの震災日が招待日であつた二科會は、其日に行かなかつた爲めに、とう〳〵觀ずにしまつたが、今年も私は差支があつて、會期の終りに近くなつて院展も二科も觀に行つた次第です。

以前私は、折々新聞や雜誌から批評を仰せ附かつて、其義務を果さねばならぬといふ氣持で展覽會を觀に行つたこともあるが、それが二回三回となるに從つてひどくつらくなつた。それは自分の觀畫の氣持をどうも理屈つぽくしたり、こだはらしたりして、すらりと樂しんで畫を觀ることが出來ない。つまり觀畫の樂しみが薄くなり、畫を鑑賞するといふ氣持がどうもすつきりとしない。それでは結極は畫を觀るといふ本意に反することになりがちです。

勿論畫を鑑賞するといふ中にも批評はあり、其鑑賞の中に自然に生れる批評を私は面白しとするのです。それ故私は、自から畫筆を採る採らぬに係らず、一個の鑑賞者としての口から出る批評を面白く聞きもし、自分も亦お相手になつてしやべることもあり、そういふ場合とはづみとに出る畫評には時に隨分突飛なこともあつても觀畫の興味が添へられて面白いものだと思ひます。

そんなような氣持で今年も幾つかの展覽會を觀ました。今年は隨分展覽會の多い年だつたようです。平素無精者の私のことだから、到底數ある展覽會を片端から觀るなどゝいふまめなことは出來ず、中には「あの人の個人展覽會が觀はづして惜しかつた」と思つたのも二三あり、「あの展覽會は見て置くとよかつた」と思つたのもあるが、それでも大きい展覽會はどうやら觀たようです。

今の洋畫は大てい大きい展覽會に包容されて居ると言つてもよく、多少はそれからはみ出して居るにしても、先づ秋の帝展と二科と春の春陽會などに、大體現在の洋畫の趨勢は覗はれるかと思ふ。之れは個人的には斯ういふことを言ふのは氣の毒な

場合もあるけれど、兎に角今の洋畫の大體は、それ等の會に代表されて居ると言へるのです。

私はさういふ大體の觀畫に就いて少しばかり述べて見るつもりですが、春陽會は自分等の名を列する會だから遠慮する氣持もあり、今年第二回を開いたばかりだから、秋の會に現はれた中での自分の觀たほんの少しを述べて見ます。

二科會では會員諸君のなかなかの努力を見ました。石井、正宗二君の滯歐作の多數が特に會場を賑はして居たし、安井君の畫表が少しく二三年來と違つた味を見せました。石井君や正宗君は私達から言ふと特異な畫味なり深い詩情なりは見せて與れない人だが、自分の趣くまゝに畫き放して行く性情なり元氣なりか、見物に快感を與へもし、矢張り今秋の洋畫中の面白いものでした。

安井曾太郎君の繪は、矢張り二科會中でのどつしりとしたものであり、何處か畫味の堂堂たるものがあつて、二科會には無くてならないものだと感じさせます、今年の畫表が幾分の異りは見せたが、やつぱり畫味には異りはなく、春の梅原君の畫味と、秋の安井君の畫味とは、今年も洋畫壇の面白いものになつて居きました。山下君も例によつて凝り性の畫面を見せてくれましたが會員の畫にあまり蕪言を呈せぬことにして、今年二科會で撰んだ出品畫と、春陽會で撰んだ出品畫とについて、鳥渡述べて見ると、誠にどうも相互の差のあるのに驚かさるを得ないのです。二科會には極度にはつきらな大味趣味が現はれ、春陽會には又反對に小味なちよこきり趣味の多くが現はれました。誠に可笑しなことであり、實際どちらの會でもさういふもののみに發意を持つのでないことが明瞭でありながら、今年はさういふ結果を見たのです。之れは實によく現洋畫壇の二つの潮流が、此の在野の二つの會に現はれたものだとも言へるけれども、一面からは青年諸君の心理を私達は遺憾とするのです。それは之れ等の會の前年の展覽會前といふものがそれ等の人達の衝動となつて居るらしく内部の會員には感ぜられるが自然さういふ出品の多くから自づから撰出される爲めに出て來る結果なのです。もつと自由に自からの趣くところに、つまりは自分の成るようにしか成らぬ收獲を切望せねばなりません。

帝展は官展であり、出品數に三點以内といふ制限があり、且つ審査員が多い爲めに呉越同舟的であるだけ、様々な畫が惡く言へば見本的に陳べられる。それ故よく畫壇の現狀を語つて居るとも言へるが、從つて一つの展覽會から觀者が受ける畫興なり畫情なりは稀薄になり、興行物を見に行くといふ氣持になるのは免れ難い。而しそれは多數の鑑賞者といふよりは見物にと

つては問題ではなく、其様々な場面が反つて面白いのであり、且つ昨年休會した爲めに、今年は二年分の觀畫慾を充たさうとした見物はかなり多かつたやうです。無精な私も珍らしく今年は招待日に行きました。

だがどうも斯ういふ見本的展覧會場に入ると、甚だ我まゝのやうだが私は洋畫を觀るより日本畫を觀る方が面白い。之れは一作々々について言ふのでなく、會場面の總體感から言ふのだけれど、會員、審査員を通じてそれ〴〵の力作が一點、多くて二點陳列されて居るに過ぎなく、つまり紋附やフロツクコートのすがたにお目にかゝるのであつて、浴衣がけや着流しにお目にかゝるのでない。それでどうも樂しくくつろいだ鑑畫の氣持が薄い。日本畫の方が反つて樂な氣持で見られました。日本畫もざつと一見したに過ぎないのだが、正直に今秋私は帝展の日本畫を樂な氣持で觀ました。之れは其理由を今はつきりと言ふ譯に行かぬが、在野の會にも考ふる餘地があるやうに、帝展の洋畫部でも考ふる餘地のあるものかと思ふのです。

一作〳〵については、自分の友人のものもあり、先輩の作もあり、それ〴〵倶樂部や途上でお目に掛かつたり、話し合つたりするやうな心持で作品を觀ました。其中で例年の如く、岡田先生のつゝましい筆觸の畫面や、長原先生の淡雅な色調の畫面やに親しみを感じ、又金山君の相變らぬ刷毛の冴え、片多君の畫面の色感、高間君の畫が大分あくのとれたことや、藤田君の畫は興味本意の畫だが、矢張り面白い畫だなどゝ思つたことです。それに和田三造君の畫に久しぶりに接したのも興味があり、其他先輩や出品者の人の作などに、それ〴〵敬意も興味も持ちました。だが何しろ人の多い爲めの止むを得ないことでもありますが、一年間なり二年間なりのさういふ人達のほんの制作見本に接する感じを何だか遺憾に思ふのです。昔は座して茶を飲みながら畫を談じ、畫を鑑賞したことでしようが、今は日本畫も先づ展覧會場で接することになり、展覧會が最も一般公衆の觀畫に手つ取早い便利な場所になつた以上、何とかして成るべくざんぐりした氣持で畫を樂しみ觀たいものだと思ひます。作品が出來ない年は出來ないでよく、出來た人だけが出しても賑やかな展覧會が出來るのは、人數の多い帝展の一得一失かと思ひます。

二科展院展帝展の彫刻

石井鶴三

二科會の彫刻

二科會の彫刻は出品數は少ないけれど、現在のわが彫刻界に於ては等閑には出來ないと思ひます。それは何故かと云ふに、この會に於ける彫刻家としての唯一人の會員藤川勇造氏は彫刻を知つて居る作家だからであります。

現代はあまりに彫刻家が彫刻を知らな過ぎます。多くの彫刻家は肝心の彫刻上の諸要件を疎にして、あらぬ方に力瘤を入れて居る狀態です。其中にあつて兎も角も彫刻を知つて居る作家は尊重されなければなりません。故に彫刻を知る藤川氏に敬意を表し、氏によつて支配される二科會の彫刻部は重視されるべきだと申すのであります。

だが藤川氏の作品に不滿を感ずる點も亦決して少くはありません。今年の出品は概して出來がわるかつたと思ひました。けれども氏が彫刻を知る人である事はやはり動かないと思ひます。出來がわるくとも、いづれも純粋に彫刻に向つて心が費されて居る事を見なければなりません。四點の出品のうちではW翁とエスキースがよいと思ひました。習作は混亂が目にたつていけませんでした。

前にも申しました通りほんとうの彫刻家の少ない時ですから、氏の努力を切に希ふものであります。

オシツプ・ザツキン氏の彫刻は私の好みから云へば到底好きになれぬものですが、種々の問題を提供されて居る作として注意して見ました。而して作其ものには共鳴を感じませんが、其意嚮だけは同感出來ると思ひました。氏の意嚮は立體を大きく主觀的に決定的に扱つて行かうとするにあるのではないかと思ひました。この行き方は彫刻には大切な要件です。だから其理論には同感が出來るのです。近代彫刻は一般に纖弱に傾いて此點が著しく缺けて居ると思ひます。だから一部作家には殊更此點を強張しやうとする傾向があるやうに思ひます。ザツキン氏

の意想も恐らくそこにあるのではないかと察しました。だが氏の作品には大變不健全なところがあると思ひました。理論が生で露骨に出過ぎて居ると思ひます。各部の緊密が缺けて居たり、空隙があつたりして居ます。理論が先走りするのは一般に近代人の病弊ですが殊に西洋人には此癖が强いやうに思ひます。だが又そこを何處までも押し切つて行くのも西洋人の特性です。而していつか本當のものにぶつかるといふ結果にも屢々到達するものです。だからザツキン氏の彫刻も將來立派なものにならぬものでもあるまい、とそんな事も考へて見ました。

傑れた古人の作物を研究して見ますと、近代人の高唱して居る理論は大抵悉く具備して居ると思ひます。ただ之を露骨にあらはさないで、つゝましく奥に秘めてあるのです。この點ただく敬服の至りですが、神經の麻痺した近代人の心には强い刺擊でなくてはこたえぬものと見えます。だから何事も露骨に神經質に强張するやうになりたがります。かくて仕事はます〳〵せせこましく粗野に卑俗に理屈ぽくなつて行きます。私はこの點深く古人のしたやうに、すべてを内に包含して悠揚せまらぬ態度に學びたいと思ふのであります。

淺野孟府氏の作は形はととのつて居ますが立體の威力に乏しいと思ひました。容量の充實と重量が缺けて居るからではなかつたでせうか。

院展の彫刻

院展の彫刻も今年の成績で見ると大分よくなつたと思ひました。微力ながら私共の努力が漸く少しづゝ報はれて來るやうです。私共は純粹に彫刻を育てる事にひたすら努めて來たのです。現代わが國では立體の藝術が最もおくれて居りはしまいかと思ひます。誰しも彫刻が最もわかりにくい最もむづかしい藝術だと思ひはしないでせうか。專門家でも本當に彫刻のわかつて居ない現代ですからそれは無理の無い事です。現代人の生活があまりに平面的だからだと思ひます。近世長い間わが國には彫刻の傳統が榮えませんでした。彫刻の榮えなかつたのは人々の生活に立體の世界が貧しかつたからではあるまいかと考へます。それで此傳統を受けついだ現代人は立體に對する頭腦の働きが著しく鈍つて居ると思ひます。從つて立體の藝術であるところの彫刻が最もわかりにくいものになつて居るのだと思ふのです。

そこで今ここに彫刻を育てやらうとするのは頗る困難の多い仕事なのであります。先づ第一に私共の生活の立體化にあります。第二に立體の美を知る事であります。第三に至つてはじめ

て製作と云ふ事になるのであります。だから早急によい作品を求めても事實無理な事情にあるのです。碌な作品がないではないか、何をして居るのかと云ふ言葉を久しい間聞かされて居りましたが、私共はじつと隱忍して居たのです。ひたすら根柢を作る事に努力を續けて來たのであります。

しかるに今年の成績を見て幾分慰められるところがありました。倦まざる努力だとまた新に痛感したのであります。やがては日本の彫刻もものにならぬ事もあるまいといささか心强くも思つたのであります。

今年の出品のうちで私の最も感心したのは喜多武四郎氏と橋本平八氏の作品です。二人とも院の研究所で研究を續けて居る人です。私も研究を共にして居りましたが、二人の勉强ぶりを日々見て居て賴もしく思つて居たのです。こんど多數出品の中に見て此二人の作はやはり目立つてよく見えました。平生はげしく勉强して居る人はやはりちがふものだとまた新に感心したのであります。

喜多君のトルソーは古人の作に見るやうな滑らかさをもつた彫刻です。だが古人の作のやうな强さのないのは未だやむを得ぬところです。背部が殊にすぐれてよいと思ひます。淸く美しいその線の動きに私は感歎しました。習作ですから作者の意嚮も主として背部の研究にあつたものではなかつたかと思ひます。背部に比べて胸のあたりはいささか不充分です。それに腕や股の切口などがあまりうまくありませんから、此作を前方から見ただけで行き過ぎた人には此作のよいところは多分氣がつかなかつたかも知れません。

一體彫刻は立體の藝術ですから立體的に見なければならぬ事は勿論なのです。即ち見る人は心を立體的に働かさなければならないのです。之は口に云ふは易いけれど實際は頗る困難な事です。で自然作品の周圍をまはつて見たり離れて見たり近づいて見たりと云ふ運動が必要になつてくるのです。而して其間に心を立體的に働かす訓練も出來てくるものです。

このトルソはこんどの會場では注目に價するものですから、特に中央に据えて周圍にも充分餘地をとつて之を見る人に便りよくして置いたつもりですが、大抵の人は繪を見るやうにその前面に立ちどまつて一瞥を與へただけで其まま行き過ぎます。之では餘程心眼の鋭敏に發達した人でない限り彫刻を見る事は不可能でないかと思ひました。

彫刻は人體の外形を眞物どほりに作るものだと思つて居る人が多數あるやうです。專門家でも此誤謬をいだいて居る人は決して少くありません。さう云ふ間違つた考への人々は此トルソ

を見て失望したかも知れません。どこがよいのか一向わからないでせう。事實此作を幼稚で何のとりえのないものと評した人もありました。さう云ふ人は猶更この作に對して深く反省して見る必要があると思ひます。彫刻は人體を取材としても決して其外形を摸する事ではありません。人體の中に美を見出し之をひきぬいて來て作物の中に住まはせる事にあります。

喜多君は實によく人體の中に美を見出しました。此作は人體の摸寫ではなくて、人體の中に住む美の姿であるのです。線と面の纖細な美しさを此作から見る事の出來ない人は氣の毒に思ひます。

同君の作には猶一點N氏像といふのがあります。此方が全體どこてはよくまとまつた作です。だが塊りの凝結力が少し弱くはないかと思ひました。

橋本君の猫もよく線の美が捉えてあると思ひます。踏み出した前脚の瘦せて貧しいのが目障りでもありますが、全體のまとまりもよく殊に胴體から頭部にかけてはなか／＼確かと思ひます。ほんとにあの胴のあたり生き／＼として手を觸れたら脈搏が感ぜられはせぬかと思つた程です。生命のない木材も魂を吹き込まれれば生きていくらでも活躍するものです。彫刻は立體に生命を與へるものだと云ふ事も出來ませう。

清水多嘉示氏の女の首二つの中で（一）の方がよいと思ひました。塊りがしつかりして居ると思ひます。（二）の方は不充分です。だから近づいて見るといろ／＼細かい仕事も見られますが少し離れると影法師のやうに力のないものになつてしまひます。同氏は畫家であつて近頃彫刻に移つた人ですが、わかつて居ても知らず／＼のうちに立體で繪を描いて居るのではないかと思ひました。立體はどこまでも彫刻で行かねばおもしろくありません。其點（一）の方がより多く彫刻になつて居ると思ひます。

牧雅雄氏のK氏は一見しまりのないやうに見えますが、なか／＼よくものが見てあります。同氏の作も年々よくなるやうで嬉しく思ひます。

大内青圃氏の羅刹婆は昔の塑造の方法に似たやり方で珍らしいものです。また支那か印度の佛像に學んだ處も多い作と思ひますが、其學び方が皮相でなく眞髓に觸れて居ると思ひます。同氏の作はこれまで注意して見て居たものです。つつましい作者の人柄が出て居て好ましいものと思つて居たのですが、肝心の彫刻の構造が不充分だつたので惜しく思つて居たのですが、こんどの羅刹婆なら確だと思ひました。

中島誠淳氏の過去女像は背部がよいのです。背部を向けて陳

列して置きたかつたのですが、反對があつて前向きに置かれて居ましたので、大抵の人は後へまはつて見ませんから此作のよい處が氣づかずに過した人も多かつたらうと思ひます。前から見ると、此作は隨分缺陷があります。安定がありません。安定と云ふ事は彫刻には大切な事で氣をつけねばいけません。

新海竹藏氏の姉妹は二人の少女を方形にまとめたところによいところがあると思ひます。未開人の彫刻に學んだところもあるのではないでせうか。そんな點殊更やつたと云ふやうな、素直でないと思ふところもありますが、また全然模倣ではなく作者の心から出たところも決して無いのではなく、一種生きた感じのある作と思ひました。

大橋敏男氏のたばこは幼稚ですが愛らしさのある作です。微かながら眞實があるからだらうと思ひました。

松原松造氏の首は規模の小さいものでありますが顔の肉附けに捨て難いところがあります。

宮本重良氏のトルソーも弱くはあるが美しいところがあります。また附燒刄のやうなところもあつて何か安心の出來ない作です。

長谷川亮氏のK君の首は妙な癖が氣になつていけません。

藤原岳南氏の融合はちよつと人に好かれる作でもあり又骨を折つてあるものでありますが、細工ばかりが目立つていけません。これから人物と背景の間に無理がありはしませんか。いかにも彫刻の威力が乏しい作と思ひます。もつと氣魄が欲しいものです。古彫刻のやうな古びた着色に骨を折るやうな趣味に遊ぶよりも、古彫刻に見る古人の壯大な氣魄を學ばれたら如何かと思ひます。

白井保春氏の海はどうも眞實の仕事でないやうに思ひます。西洋の新らしい作家の作風を學んだものと思はれますが、一體他人の作から學ぶなら主として作者の精神を學ぶべきで、いたづらに作の外形を追ふのは感心の出來ぬ事です。日本の若い人人はあまりに此易行道に就く人が多く苦々しい事に思ひます。

田中正太郎氏の歸牧はまづい彫刻ですが、作者の心の眞實さが出て居るので嫌な氣がしません。

工藤繁造氏の土遊は無邪氣だと云ふ程のものでせう。

中島武氏の胴はものの表面を追つて居る作と思ひます。もつと心をひそめてものの構造を研究する必要があらうと思ひます。

杉本宗一氏の寂しき春も構造上に大きな缺陷があると思ひます。彫刻は建築と相通ずるものが大分あつて構造が何より大切です。此作は其點が甚だ不安です。之を建築として見るなら諸

用材の結合がちやんと組合つて居ないと思ひます。だから見て居ると危かしく今にも崩れて來さうです。

松村外次郎氏の眠は裸體の女が堅い木材の上に臥かされて居るやうな痛々しい實感が起きていけません。つまり彫刻になつて居ないからだらうと思ひます。

大野明山氏の土人の子はぬけがらのやうな空虚な作と思ひます。彫刻として肝心な立體のもつ重さとか充實感とか云つたやうな要素がまるで缺けて居るからと思ひます。皮相寫實家は皆かう云ふ病處に墮ちて脫殼のやうな作品を作ります。巧くても拙くても脫殼である事は結局同じです。

中平四郎氏の讚賞は臺と人物の關係がいけません。

北原鹿次郎氏の媛戀ふ皇子は彫刻の構造上に大變破綻があると思ひます。それから寫實と象徵と云つたやうな心内の混亂がいろ〱目にたちます。不統一な作と思ひます。此不統一は作者の心内に作品が充分熟さぬうちに實材に取りかゝつたからではないかと思ひます。何をやるにしても同じ事ですが、殊にかう云ふ種類の作をするには、內作品の醱酵を充分に待たなくては無法だと思ひます。

以上で一般出品者の作に就いて一通り思ふ處を申し述べました。以下同人出品に就いて少し申しませう。今年は同人出品が少く、少し寂しく思ひました。

保田龍門氏の立てる女はなか〱確りして居ると思ひますが、全體の統一が少しわるいやうに思ひます。それは部分々々の活動が各個的で相互の連絡が不充分の故ではないかと思ひました。

戸張孤雁氏の作は土の扱ひは巧みでありいつもながら纖細で快い肉附けです。氏の作は一歩をあやまると邪路に陷りさうな危險性があると思ふのですが、いつもそこを踏みはづさぬところはえらいと思つて居るのです。何にしても氏の健康が早く恢復してくれるとよいと希つて居るのです

藤井浩祐氏の彫刻にはもつと立體の威力が欲しいと思ひます。それから氏の作に惜しく思ふのは、土附けの面白さの爲めに大切な彫刻上の要件が犧牲にされて居るのを見る事です。此弊はロダンの作にも屢々見る事が出來ます。私共彫刻をやるものは深く此處を謹まねばなりません。立體の威力が倒されるのもかう云ふ處から來る事が少くありません。

最後に私の出品に就いて一言申します。私は平素研究にはひたむきにモデルにぶつかつて居りますが、自分の操作にはモデルを使はずにやりたいと思つて居るのです。制作時にモデルに賴ると心がみだれて作品に渾一が無くなるからです。あの噴水

盤は全然モデルに依らないで心內の幻像を其まゝ作つたのです。大體はすらく運びましたが腕のあたりで大分手こずりました。手こずつた處は最後までいけません。題名の通りあれは噴水盤試作で、あの盤の底に穴をあけて、そこからモタくと水を噴き上がらせ其水にひたくとあの女の足を浸させ、やがて其水は盤の縁から溢れさせる考へなのです。盤の縁に高低をつけてあるのは溢れる水に變化を與へたいからであります。青銅と水、動かぬものと動くものと、此二つの異つた物質を使つて立體の美を構成して見たいと考へたものです。漸く盤が出來たゞけで水を出す事は未だ實行して見ませんから、どんな結果になるかやつて見ねばはつきりわかりません。もつと大きく作つてもよろしいと思ひますが、あのまゝでも中庭とか室內等に据付けて見たら面白くはあるまいかと考へて居るのです。

帝展の彫刻

帝展の彫刻に就いては、編輯締切が切迫の爲め充分考へて居る暇がなくて殘念です。概略にとゞめて置きます。

先づ會場を一巡して思つた事は、感銘を受ける作品の少い事と、概して立體が扱はれて居ないと云ふ事です。あれだけの作品があつて、いづれも立體をそなへて居る、然もそこに立體が扱はれて居ないと申すのは、丁度繪の方で畫繪は素描に相違ないが、其繪に對して展素描がないと云ふ言葉が云はれるやうなものです。此事の意味がわかる人なら、或る彫刻に對して立體が扱はれて居ないといふ言葉もわかつてもらへやうと思ひます。つまり立體が秩序を以て處理されて居ないと云ふ事です。

以下少しく記憶に殘つて居る作品に就いて寸感を申して見ます。

吉田久繼氏の「犠牲」は場中で注目に値するものでせう。群像をあれだけにまとめた事はなかくの骨折で、またよくまとまつて居ると思ひますが、しかし立體の凝結力がいかにも弱いのが惜しく思ひます。面と線の處理も甚不得要領だと思ひました。これらの點がはつきりすると此作はもつと生氣のあるものになつたらうと思ひます。

堀進二氏の「秋」は左方上部が弱いため、あれから上の重みを支へる力がなくて不安定です。彼處を強めるがよいと思ひますが、あのまゝで置くなら、あれから上をもつと弱めて右方の垂直線を今少し內方人物に近くよせて來なくては釣合がとれなくはないかと思ひます。氏の作には今一つ「老人の首」がありますが、どちらも矢張り立體の凝結力が弱いと思ひます。

堀江尙志氏の「少女」はすらりとよくまとまつて嫌味もない

作ですが、重量感がもつと欲しく思ひました。

安藤照氏の「相」を見ると氏は彫刻家としての素質のある人らしく思はれますが、あまり粗放で今のところ何とも云はれません。あれからさきがどうなるかでよくもわるくもなるものと思ふのです。今一つの作「肖像」のやうになるのだとすると少と心細くなります。

大國貞藏氏「大空の下に」は、へんなところもありますが輕薄でないのが好きです。

荻島安二氏の「胸像」は頭と頸と胸の連絡がうまくないと思ひました。胸の方形に對して頸の圓柱形がやはらか過ぎはしまいかと思ひました。

吉田三郎氏の「心」は二人の人物が離れ〳〵になつて居ていけないと思ひました。

朝倉文夫氏の「砲丸」は人體の外形を模した以外に何があるのか了解に苦しみます。同氏の「ウッツの像」と云ふのは土附けの面白味を弄んだものと思ひます。

建畠大夢氏の「幻想」は殊更らしい誇張が目立つていけません。

場中を見廻すに、朝倉氏建畠氏の亞流とも見える作品が多く含めて居ると思ひます。之等の作の將來はどうなるのですか。何を云つたとてモデルの形が滿足に寫せないでは駄目ではないかといふ事がよく云はれて居ます。モデルの形が寫せてそれからどうなるのですか。此兩先輩の作を見て察するにそれは土附けの面白味に行くか、凸凹の誇張に行くか、或はむづかしい姿勢をとらせる事か、題名をひねる事等に行くのではないでせうか。私は考へるに彫刻は何處までも立體を扱ふのでなければ無意義だと思ふのです。だと云つて理屈が先走りして露骨に出るのは藝術には禁物です。此處古人はよく道を示して居てくれると思ひます。古人は何の餘念もなくものの形を作つて居ますが、それでそれがちやんと彫刻になつて居ります。之はどこから來るかと云ふに、つまり其人の生活が立體であり美であつたからに外ならないと私は思ふのです。そこで前にも申しました通り私共の生活の立體化美化が先決問題だと申すのであります。だから制作の態度としてはモデルの形を餘念なく寫すのでも差支ありませんが、修行としては此根柢に培ふのでなければうそだと思ふのです。

浮彫がいくつかあります。浮彫といふものは與へられた一つの面を基にして、立體を處理して行かなければいけまいと考へます。

石川確治氏の「採桑」、齋藤素巖氏の「容」どちらも此點に就い

く不滿を感じますが、兩氏の一考を煩はしたく思ひます。

浮彫が一つの面によつて處理されなければいけないと同じく、全彫ではまたいくつかの面によつて處理されなければなりません。帝展出品には不幸にして此點に就いて考慮されてゐるものは少いと思ひます。

木彫が澤山ありますが、一つも本當に木材を生かして扱つて居るものが無いと思ひました。大抵木彫家は土で原型を作つて、それを其まゝ機械で木材に寫して行く方法をとつて居ますが、此方法は一種の便法ではありますが、此爲め木材を彫ると云ふ本來の精神が傷けられる事を惜しく思ひます。私の思ふに、木とか石とかいふ材料を扱ふなら、どこまでも彫つて行く精神で行かねばうそではないかと思ふのです。此點二科會に出て居たザツキン氏の木彫には作其物の如何は別として、この木を彫るといふ精神は生かされて居たと思ひます。日本の木彫家諸氏に私は此點に就いて考へていたゞきたいと思ひます。

長谷川榮作氏の「施樂」でも佐々木大樹氏の「私の內在」でも關野聖雲氏の「文覺」でも山崎朝雲氏の「頭山翁」でも第一に木材を正當に扱つて居ないと思はれますが如何でせう。

木彫に實材を彫る精神が殺されて居ると申しましたが、同時にまた塑造に於ては土で塑るといふ精神が生かされて居ないやうに思ひます。一方は實材を刻んで作る。一方は空間に粘土を以て築きあげる。作らふとする目的物は一つでも行き方は全然異ひます。そこに當然作る態度の別が生ぜなければなりません。

塑造はあまり自由過ぎて、つひ邪路に陷り易いが、木彫は最初から實材を與へられて居るのですから却つて彫刻の精神を會得する便宜があると思ふのです。即ち立體を大きな面と線を基にして處理して行くと云ふ精神を知らず〳〵の間に會得出來る筈と思ふのです。處が木彫家の多くが塑造家と同じ病處に陷ちて居るのは惜しいと思ひます。塑造に於ては此面と線を空間にとつて行かねばなりませんので、そこに困難があり兎もすると邪路に入り勝です。用心すべき所です。

また古人の例をもつて來ますが、推古天平頃の作を見ますと、此材料を生かして使ふと云ふ精神が實に遺憾なく示されて居ると思ひます。

詞　華

山房の秋

―高野山にて―

荻原井泉水

□佛と共に

蜩の明け暮れの佛に事へ
ひぐらしを聽くさえさえと我獨り
佛燈かんがりと壁よりかなかな
煩惱無盡安居の髭のはや伸びて

青さ明け放るるやさつさつ雨來る

かなかなよ松の葉のなかに鈴振る

佛飯冷えてあるさげる・蜩

雷雲かかりつつ晴れゆくひぐらし

蜩の椅子に倚らるる大師のおん前

蚊とり線香はさびし一人なる身邊

此すずしさに足るとのみ云へり淋しさは

安居より起つ皆の星を示さる

□月に籠る

佛と居る庇を深く月に籠り

月光滿ちてのぼり來る佛の障子

月の葉ひらひらと明るき風通る

明るき月に胸さしのぞかせて獨り

更けて鐘にひた寄る月ありけり

人のすずしさ虛空に遊ぶ月見る

佛燈消えてある月ならさるなし

院院の門かたく月に鎖したる樣

こうろぎ疊に飛ばせて月夜なるらし

我清水にも月照り添ひて寢る時

雲走りつつ月さだまれば雲もなし

庭杉の月冷ゆる戸は引かす

□草と蟲と

蜻蛉も澄んで來る盆花賣りに來る

心を旅にとどまれば秋に咲かるる

俯になる子が球を玩ぶ歡喜の聲

露の葉の葉の固き鈍き草の世界

つゆけき草の中の蚊帳つり草は

秋ぬきんづる水引の雜草より

思ひ出の萩なれ咲けばこぼるる

お寺ばかりの秋風の魚賣るもの

螢蟲啼く珠數もちて出ありく

螢蟲のかすかなる路にして盡きず

町石に秋の日したしくなれり

蜩日の暮ほいほい翔來る

□嶽に登る

海を戀ふれば山に居て山に登るや

綠を學づるつひに裸身となり

山なみひたす海遠くほうふつと秋

榧の實青く初秋の曇りやすくて

君が知る花あり摘んで手に持たさる

大峰をまへにへうへうと風行く桔梗

眼鏡に遠く秋風の人があゆむ

ひぐらし鳴きすます谷あり池あり

谷は院院のひそけしひぐらし

祠ある秋風のいただきに立つ

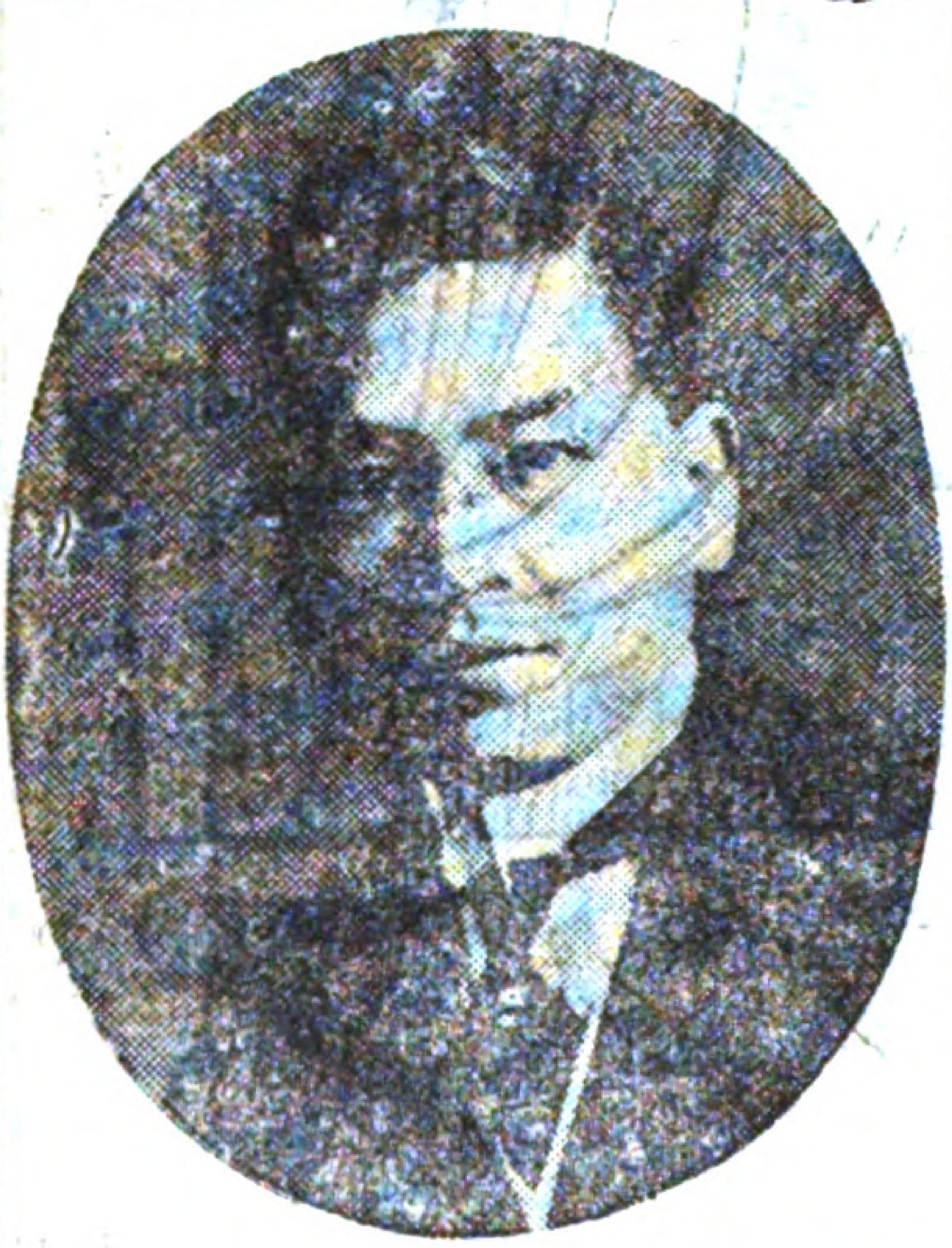
瞰れば薄に家ある指ささる

山の物折りて匂ふ薄原ゆく

を刺す大獅子吼!!

し何人も傾聴すべき經世の大文字である。

氏の哲學的考察になる着想と崇高なる信念より迸出せる言辭は一々讀者を首肯せしめ、簡明平易然も熱血罩れる雄辯は何人をも魅了せずんば已まず



新刊＝

傷ましき偉人の胸臆
理想に突進し人類の大恩人たる偉人の胸臆を偲ぶ大演說―

世界的勢力たるウエルスの作品と人物
世界的大思想家の作品と其思想人物を詳說して遺漏なし―

眞理の解放
徹底せる眞理に立脚し、廣く世界の大勢を洞察して我國婦人の一大覺醒を促せる大講演―

鄕土を愛する心
麗はしき山河、なつかしき故鄕を思ふ名演說―

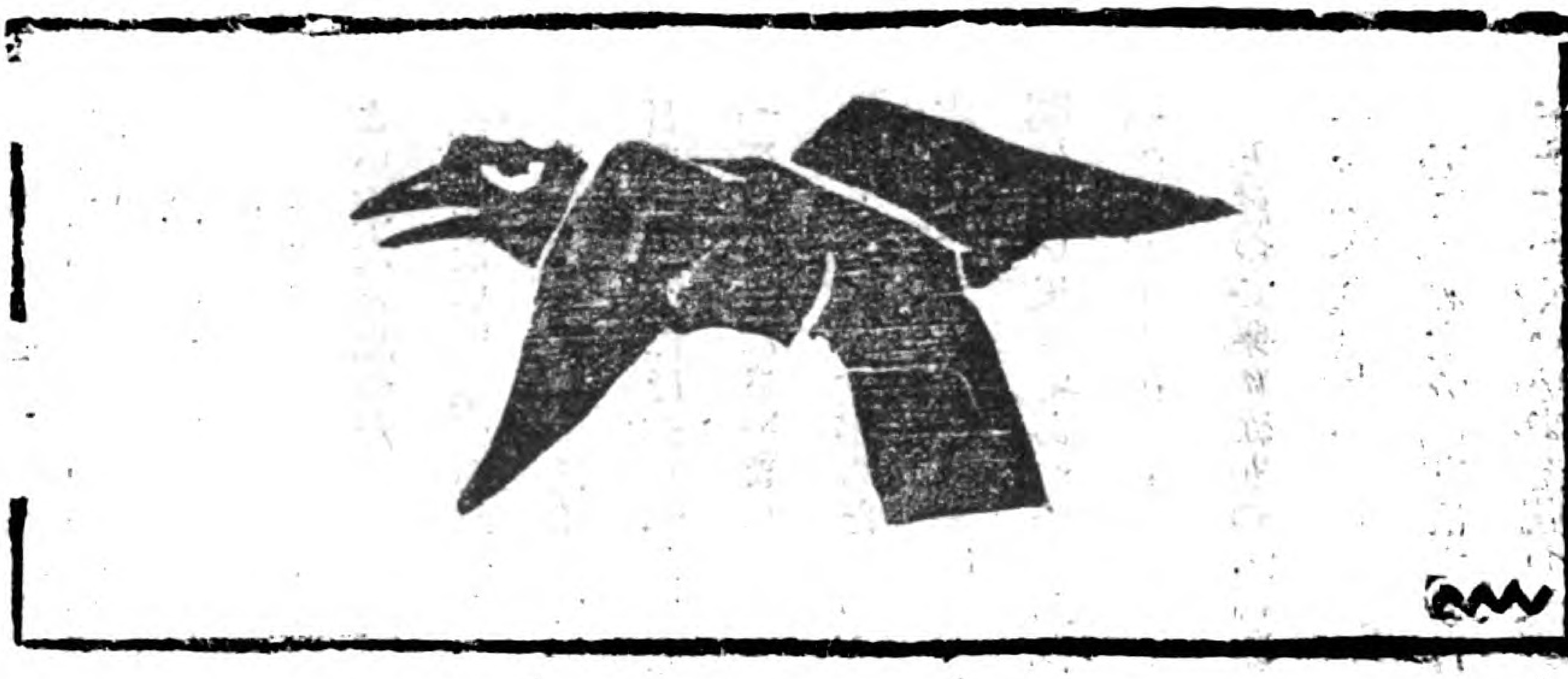
ウィルソンの生涯を憶ふ
畏敬せるウィルソンの追悼演說―聽者をして涙せしめ又奮起せしむ―

猶太人獨逸人排斥の原因を論じて世界に於ける排日感情の擡頭に及ぶ
その眞相！その原因！世界に對する挑戰、國民に對する警告―

鶴見氏は日米問題の爲め今尚國論喧しき米國に赴き各方面の名士を歷訪し得意の雄辯を以て祖國の爲に奮鬪中である

發行所
東京本鄕駒込坂下町
大日本雄辯會
振替東京三九三〇番


國産
マツダランプ
秋深き夕べ
△樂しき團欒に、讀書に、お仕事に……
△心地よきマツダランプの光に光明の世界は開け行く。
△明るくて、丈夫で、經濟なマツダランプの御使用をお勸めいたします。



人世

室生犀星

一

栗島のお母さんといふひとは初めて會つたのであるが、ずつと以前から知合ひになつてゐるやうに和々して、

「いつも栗島がおせはになりまして、——こんどはまたお近いんですからいろいろご厄介になります。」

と、ふくふく肥えた顔に美しい血色のよい笑ひ顔をした。年老つてから福々しく溫和に肥えたのといふものは、眺めてゐても安泰な氣がするものである。

「僕こそ却つておせわになるかも知れません。」

「いいえ、あのとほり栗島は陽氣な性分でございますから……いまもちよつと通りへ行つたんですが、すぐかへりますから、お待ちくださいまし。」

お母さんは茶を淹れに勝手へ行つたが、あたりは引越したばかりで取散らかしてあつ

た。勝手で若い女のひとの聲がした。開けられた障子にからだを半分露はにした女のひとが、勝手の道具を始末してゐるらしいのが見え、誰か知らと思つた。

離れのやうな四疊が鍵型に椎のある庭へつき出て、座敷の八疊からは好ましくその障子が見えた。竹垣のそとは小路になつてゐる。垣に絡みついた木枯れの朝顏の蔓に輪の詰つた白ぽい花が着いてゐた。栗島が始めて家を持つにしてはよい家だと思つた。

「こんないい家があれにあたるなんて、ほんとうに仕合せなことでございます。」

お母さんはほくほくして居られると思つた。自分で越す前に雑巾を用意してゐたといふ此のお母さんは、まるで小春日和のやうにほがらかな感じであつた。

「ごめんくださいまし。」

さう言つて大がらな女の人が庭へおりて庭を掃きはじめた。見たことのない女のひとだつた。紺の派手な、あらい單衣をぴつたりと身に著け、髪をあたまのてつぺんにぐるぐる巻きにせり上げて束ね。それも亂れてゐるがそんなことに關はない風采であつた。わがまゝで肥つたやうなところがあつた。

「やあ、――。」

と言つて栗島は玄關から這入つて來たが「この邊に障子紙がないもんだから電車通りまで行つて來た。」

「おかへりなさいまし。」

庭にゐる女のひとは左う言つて勝手へ廻つて行つた。

「とにかくいい家が見つかつてよかつたね。これなら僕が來たいくらゐだ。」

「僕より母親がよろこんでゐるよ、始めて家を持つたんだからね。」

栗島は煙草の灰をそこにある茶碗の中へ落した。お母さんはすぐ煙草盆を持つて來て、よごれた茶碗を引いて行つたが、栗島は平氣な顔貌だつた。

「二階へ來て見たまへ、一と間しかないんだが、日あたりも中々いゝんだよ。」

栗島のあとに尾いて上つた二階の緣側に日がさしてゐて、書物や机が雜然と散らばつてゐた。人家の屋根に乾いた日さしが射し返つて、遠いのは、帆のやうにきらきらして見えた。栗島は座り込むとまた煙草の灰をこんどは窓のところで拂つた。

「食事の方はどうするんだ。お母さんがするのかい。」

「母は姉の方にゐるもんだからそんな譯にいかんよ、實は君はもう見たらう、あの女がしてくれるんだ。」

栗島はやゝ心持を改めたらしく言つて、

「よそへ勤めてゐるんだが、僕の食事だけはしてくれる約束なんだ。どうも女のひとでないと食事の方はこまるからね。」

「よくそんな都合のよい人が見つかつたものだね。」

「うん、すこし知合ひでね。」

栗島はまじめにかう言ふと、その他のことは話さなかつた。かへりに玄關先きでこの女のひとはさよならと子供のやうな甘えた聲で言つて挨拶をした。それから門を出やうとすると、一人の少年がわたしの顔を見て、につこりと微笑つてあいさつをした。手に原稿紙の綴ぢたのを持つてゐた。錢湯で三四度會つた少年で、いつも、隅の方で、少年らしい

美しい肢體をして洗つてゐたが、わたしを見るたびに挨拶をした。神經質な、色の白い、眼にすこし高慢なところのある少年だつた。そのときからどこか文學的な少年だと思つてゐたのである。
それ故、かれが微笑つてあいさつをすると同時にわたしもやあと言つて、ちよいと首を下げ挨拶を返した。が、かれはそのとき原稿紙をおづおづわたしの手にわたさうとした。わたしは默つて當然これは見なければならぬやうな氣がして、何心なく手に受け取つた。
「これを見るんですか？」
美しい少年は顏を赧らめながら、きまり惡くそれでも決心したやうに、
「どうぞ見てください。」
と言つた。
「君はこの近くにゐるんですか、よくお湯屋で會ひますね。」
「ええ、すぐ崖の上に家があるんです。」
さう言へば、崖の上の雜木のある小路から出てくるこの男を見たことがあつた。紺絣の筒袖を着てゐるがその容貌の中には、なにか敵を作つて絕えずそれに挑んでゐるやうな狷介な表情があつた。わたしはこれは藝術家のもちものだと感じた。すぐにこの白面一介の少年も藝術家だなと思ふた。が、顏に吹き出ものなぞのある少年達ばかり見てゐたせいか、この少年は淸く惱んでゐるところが、蒼白い年齡(とし)よりませた高慢な目付を中心にしてその唇や鼻さきまでに現はれてゐた。
「これは小說ですか。」

「ええ、下の方になつてゐるのは去年書いたのです。」

かう話してゐるうちに、家のうしろの原になつてゐる空地へまで歩いてしまつた。家へは小路を曲ればすぐである。

「では來たまへ。」

わたしは部屋へこの少年を入れると、原稿をばらばらと眺めた。文章はかなりうまかつた。こくめいに雜誌や本なぞを讀み耽つてゐるうち、ひとりでに書けるやうになつた文章らしかつた。その器用さなぞもこんな年ごろのわたしなぞには書けさうもなかつた。わたしはふしぎな時代の遠隔を感じた。

「ぢや何ですか、僕が栗島のところにゐたことを知つてゐたんですね。つまり待ち伏せてゐたわけですね。」

「ええ、昨日はこのおたくの前を何べんも通つたのですけれど、這入りにくくて止したのです。ところがけふ栗島さんのところへおはいりになつたのを見ましたから待つてゐたんです。」

話し振りに少年らしさはあつたが、陰氣くささが際立つて見えた。色の白い畸型兒めいた感じがした。

「栗島の詩もよむんですか。」

「ええ。」

と答へた。

「學校へは？出てゐないんですか。」

「え、姉さんと弟とおとうさんとだけゐるんです。」

「文學で食ふつもりですか。」

「わかりませんがさうなるやうにと思つてゐるんです。」

「お父さんがそれを許してゐるんですか。不贊成ぢやないんですか。」

わたしはかう言ひながらお母さんはあるのかどうかと思つた。

「父は何ともいはないんです。却つてこんなことをしてゐるのを喜んでゐるやうに思はれるんです。」

「いくつです。」

「十八です。」

「どこかからだが惡いんぢやないんですか、顏いろなぞあまり良くないやうに思はれるが……。」

「いえ、どこもわるくはないんです。」

その小さな、ちよこなんと畏つてゐる膝を見てゐると、それとほぼ同じいくらゐの少年がかれの背後をとほり過ぎた。この男の眼には文學志望者の悲哀が話してゐるうちに顯はれ、しだいにその頰の上まで色に染めた。小說の原稿を見てゐるとわたしの文章のねばりが含まれてゐ、それが何氣なくわたしを可笑しくさせた。

「君は小說をかくことを知つてゐますね。」

わたしはこれだけ言ふと少年はまた赧い顏をした。べつにわたしはどういふ場合でも他人の文學を停めるやうなことは言はない。たとへ危險があつてもそんなことは他人のことである。わけて文學などといふものはその人の一生の內にどういふ發展をするかわからないものだけに、どういふ人々に對しても冷然としてわたしはわたしの說を述べることがなかつた。一生のうちに書けなければその人は書けない人である。書ける人は矢張りそれを目的にして進んだ人であらう、それ故わたしは他人のことには私見を述べない。若し述べるとしたらその人はわたしのもはや他人ではなくなつてゐることに氣づくだらう。この少年に酬ゆるわたしの心も又同樣であつた。

「これから時々おうかがひしていいでせうか。」

「仕事をしてゐる時はしてゐると言ひますから關ひません。」

　わたしはさう言つて夕方の玄關先きに少年を見送つた。すこし顏を上向きにして歩いてゆくかれのあとに、先刻と同樣な、かれと同じい年齡（とし）くらゐの、何者かのかげをわたしは自身の間に見出した。

「ああいふ男はお前たちから見たらどう思ふかね。なかなかきれいな少年ぢやないか。」

「けれども顏がつんとしてゐますね。」

「さうつんとしてゐるね。あれがあの男の身上らしい。あんなのを見るとあんな時分の自分のことを思ひ浮べていかんな。その氣もちがあの男と話させた原因にはなつてゐるが……。」

「一生懸命らしうございますね。」

「一生懸命だとも。……。」

　わたしはそのときかれがやつと一人前になつたことを、まざまざと自身に感じた。その感じは何か濁つてゐる氣がした。抵抗力のないものに自分の力量をかんじることは、恥ぢてよい力量だと思つた。女の言ふところのつんとしてゐることが、わたしの眼に傳つた。

　二三日後に崖の上の、空地になつてゐる芝の青いところをぶらぶら歩いてゐると、雜木にかこまれた家から山羊の啼く聲がした。見れば小さな小屋がけに二頭の山羊が繫いであつて、こちら向きになつて臼のやうな口をもぐもぐ動かしてゐる。も一疋の山羊は青草の上にぺつたりと冷たさうに座り込んでゐた。すると其處の古い家の椽側に誰か人が立つてゐる。その男はわたしの方を向いて頭を下げ、そして庭へ下り雜木の間をくぐりぬけて出て來た。れいの少年であつた。

いつか來たときより元氣さうなつやつやした顏いろをしてゐた。
「君のうちはあそこなんですか？」
「えゝあなたがここへ入らしつたのを先刻から知つてゐたのです。椽側に人がゐるでせう。あそこがわたしの家です。」
「あれは姉さんですか。」
「ええ。」
椅子によりかかつて本を讀んでゐる女はよく見えないが、顏だけぽつと白く古い家の中に浮いて見えた。山羊はこの少年が出て來たときに座つてゐたのが起きなほり啼き立てた。しかも二疋ともこちらの方を向いてゐる――。
「山羊の世話は君がしてゐるんですか。」
「父がしてゐたんですけれど、このごろは手傳つて僕もしてゐるんです。五疋ばかりゐたのが犬にとられたりして二疋きりになつたのです。」
何日かの夜この近くの犬が群れて山羊の小屋を襲ふたときに、殆手のつけやうもないくらゐ、犬の吠える聲がむら立つて怕かつた。父と一しよに犬を追ひ立てると掘り棄の井戸の中へ山羊を入れ、その上に板や棒杭を置いて夜明まで番をしてゐたが、遠鳴きに犬の吠える聲が氣味惡くてならなかつたと言つた。
「優しい可愛いいものですよ。」
少年は口笛を吹いて山羊の方に何か懸聲をするやうに顏を振つて見せた。山羊は雜木の間に乳白のからだをもがいて、頭につんとひびくやうな聲で啼き立てた。いかにも馴れてゐるらしい。かれは又口笛を吹いて手を振つて見せた。
「なるほど能くなれてゐるやうだね。」

この美しい少年もなにか山羊のやうに優しく見えた。
「乳をしぼるときなんぞ眼をほそめてゐるのが、可哀いものですよ。」
「乳はうまいんですか？」
「匂ひがきらひですけれど一杯さしあげませうか。」
「さあ、」
「すぐしぼれるんです。わけもないことなんです。」
少年は前へ歩き出した。
わたしは默つて膝くらゐある雜草を踏み越え、雜木の下を潜つて廢れた垣根を跨いだ。そこの小屋がけの山羊は少年を見ると、短かい尻尾を振つて媚びて少年の手もとにからだを擦りよせた。わたしはこの生きものの優しい眼をながめ、柔かい毛並におづおづ指先きを觸れて見て、女性的な或る感じを受けた。
「これがめすです。」
うすあかい乳房がぼつたりと膨れて垂れてゐる。それを少年はぐんにやりと掴んで見せた。すこし熱のあるやうな鈍いが永く眼に殘るうす紅い皮膚が、なほ辷つこくわたしの掌中にあるやうな氣がした。かれはコップを持つてくると、兩手に力を込め、上から乳首の方へごりごりとしぼりおろした。乳はどくりどくりと脈打ちながら透明な玻璃體の半ばを白く凝固させた。山羊は依然眼をほそめ時々ぴくぴく細かく驚いて首を振るばかりで、あとは靜かにしてゐた。その手つきはいかにも乳首をしぼるに慣れてゐるらしく思つた。こぼれた乳は草の葉の上に蟲の繭か何かのやうに點々として白かつた。

「これでも機嫌の惡いときはなかなか絞らせないんですよ、からだを動かしたりなぞしましてね。」
「今日は機嫌がいいんですね。」
「ええ、まあ、そんな方です。」
少年は弱々しく笑つて見せた。
コップの乳はすぐ口にする氣が起らなかつた。匂ひが靑みをふくんで、あたりの雜草の匂ひによく似てゐた。「どうも僕にはいきなり飮めさうもないね、目のあたりしぼつてゐたところを見てゐたせいだらうが……」
「さうですか。」
少年はべつに失望もせずにぢあ僕が飮みませうと言つて、コップを口のところへ持つて行き、半分づつ二た呼吸で飮んでしまつた。初めてこの少年らしい野蠻さがわたしの目に留つた。かれはそのコップを古い板戶を開けて勝手へはこび、又、ひよつこりと出て來た。そして山羊の毛をなでてゐる——。そのとき庭の方へこの少年とは二つくらゐ年下の、眼の大きい、たけの低い少年がふらりと出て來た。やはり近眼鏡をかけてゐる。その鐵ぶちがなほ眼を一さうくろぐろと陰氣さうな顏つきにして見せた。
「あれが弟です。」
わたしは兄に劣らず陰氣だなと思つた。弟の方はいろが淺ぐろいせいもあつた。こちらを見ると慣れない小鳥のやうにすぐ家の中へ這入つてしまつた。倚子はからになり古い椽側に新聞紙が擴げられたまま、座敷との境目にあつた。庭も荒れたままであつたが、垣にそふた鷄頭のとさかが美しく冴えて見えた。古い家ばかりではない、樹の茂り合ふたところや、家の中が暗くなつて見えるのや、それらが何か落寞としてゐた。もと日本橋に店をもつてゐてわたしの岡の町の有

名な老舗とも取引があつたが、母の死後、商業の方がうまく行かなくなつて、この郊外で山羊を飼つてみたが、犬にとられてからもう何もする元氣が父にはないらしいと言つた。その山羊も遠い知己に欺されて買つたのだとも言ひそへた。

二

「ゆりえさん、はばかりさまお茶です。」

栗島は二階からいつも女のひとをかう呼んだ。階下でははいと答へるのがあいと返辭するやうにも思へた。

「つまり君の藝術のなかにある詩は賛成だが、あんな官能的なことはいかんよ。」

「君は君子だからね。」

栗島は微笑つて、「べつに君子ではないんだが、僕は君のああいふ種類の作品はきらひだよ。」さう言つて、「つまりだねものの健全さが缺けてゐる點ではですね。」

栗島は人に教へる形を壓さうとする。わたしは頭を振つて

「君の言ふところは分るよ、もう澤山。」

と言つた。

栗島の机の上はいつも原稿で散らげり、一向仕事が捗取り兼ねるらしかつた。かれは幾晩も徹夜したあげく、瘠せやつれた髮の長い顔を机の上に置いて、絶え間もない客と應酬してゐた。若い客ばかりであつた。かれはさういふ客に自分の思ふところを説明し、そのためにも疲れてゐた。自分でもそれに氣附いてゐるらしいが矢張り遲々としてすすまな

かつた。

「昨夜は非常によい月夜だつたので、夜中にふと目をさまして見ると、雨戸が一枚明いてゐるぢやないか。變だと思ふとそこから射した月あかりが椽側を越えて、障子の下の棧へまでとどいてゐるんだ、あゝいい月夜だとすこし寢ぼけ眼をこすつてゐると、その月あかりが突然すうと消えた、眼のせいでないと思ふとこんどは吃驚してしまつた。」

「たしかに雨戸は閉めて置いた筈だのに、それが開けられてゐるからいよいよ變だと思つて、そつと床から起き直り、こんどは障子をすこしづつ開けてそつと外を覗いて見たのだ。庭にも椽側にもべつに人かげはない――起きて椽側へ出てみたがべつにどろぼうらしい影もなかつたのだ。ただ非常によい月夜だつた。」

「しかし變ぢやないか、そんな夜中にものの影がするなんてね。」

「それから椽側をしらべると足痕があつたりして、裏木戸が開いてゐたところから見ると、僕の目をさましたときに何んにもない家だとあきらめたらしいんだね。ただ、僕のふだん着が四機にあつたものだからそれは盜られたがね。こんな家へ這入るなんて餘程とぼけてゐるね。」

栗島はさういふと齒を出して笑つたが、飾り一つない階下の茶の間に射す月あかりがわたしには興深く覺えた。障子をあけて外を覗いてゐる栗島も目に見えるやうだつた。

「それにこんど庭のところへ鷄頭を植えやうと思つてね、鷄頭は一度植えたことがあるから大丈夫つくだらうと思ふがね。」

栗島にしては面白いことを言ふと思つてゐると、しばらくして、わたしの顏をのぞき込みながら言つた。

「感覺や神經末梢の藝術は世道人心を毒するね。そりや君の場合には美はあるが、しかしあれでは困るね、これからあ

とが恐ろしいから、――。」

「また初まつたな、その話はよさう、僕は氣の向くままに仕事をしてゐるんだから、君からどう言はれたつて直りやうはないんだ。」

「いや、それが君の場合には、他の君のやうな頽廢的な傾向のある作者の場合には、僕の考へをもつとはつきり言つて置きたいと思ふのだ。自然主義的系統を引いた作は當然もう亡びてもいいんだし、一方さういふ作であやまられる人生があるとしたら……。」

わたしは何時も睡眠不足らしい赤い眼をしてゐる栗島が、こんな問題をどこまでも渠らしい眞摯さで押し通す根氣には呆れたが、何度も聞くことなので微笑ひ出して、頭をふつて見せた。

「僕はそんな議論はきらひなことは君も知つてゐるぢやないか。」

「さうさう君は議論はきらひな方だつたな。ぢや止さう。」

栗島は又たけろりと忘れて了つたやうに默り込んだ。どういふ會合に出ても、栗島は何時の間にか議論の渦の中に呑き込まれ、對手かまはずに挑戰するのが常であつた。かれは一種の保守主義で同時に人生派であり、道德的であつた。かれはかれの思想を表現するときに何故か吃のやうな、廻り諄い表現をしたために若い人々から彌次られることがあり、何となく又た栗島の議論かと言ふ好意のある併し狡猾なからかひ氣分を人々から持たれることがあつた。さういふときの彼れは益々眞面目な熱情で片つ端から當つてゆくが、却つてそれさへ冷笑のうちに何の影響もなく吹き出されてしまふことがあつた。さういふときの栗島の疲れた顏にやきもきした焦燥がいたいたしく浮んでゐるのを、わたしは心づらく眺めた。或る詩人の會合でも同樣にみんなから遣り込められてゐるのが、見るに見兼ねる氣にならせた。へいぜい默

つてゐるわたしもつい、

「そんなに一時に君たちが寄つてたかつて栗島にあたるのはよくないぢやないか、第一考へてゐる暇もないぢやないか？」

左う言つて四方の論客を對手取つたかれに同情したが、栗島は平氣で手をふつてわたしを遮つた。

「いや諸君の言ふことはよく分つてゐるんだから、君はもう少し聞いてくれたまへ。僕は君のさう言つてくれるのは非常にありがたいが、議論は議論として押し進まなければならないから！」

栗島のさういふ片頑な、自分でも好きな論戰にどこまでも身を投じやうとする心持ちは分るが、しかしそれにも増して著しい疲勞がわたしには氣の毒であつた。どうかすると失笑(ふきだ)しかねないからかひ半分の對手の間にぎゆぎゆ壓されてゐる栗島の、その一番あとに受け取るものはばかばかしい失笑くらゐであることが能くわたしには分つてゐた。戯談を言ふことを知らない悶苦しい人物、――その議論の中にゆとりのない眞面目一本の綱渡りは、危氣ばかりではらはらした。それ故、かれが何か言ひ出すと又た今夜もみんなから遣り込められるのかと、ひと事に心が掻きむしられ寂しかつた。さういふ歸途には同じい郊外への道をあるきながら、わたしは今もなほ栗島が議論の餘憤をもつてゐるかどうかは知らなかつたが、一種の、疲勞以上の疲勞で、ぐつたりしてゐるのに氣附いた。

「あんなところで議論なんぞ止したらいいぢやないか、それが君がたしかに言ひ伏せたつて高が知れてゐる對手ぢやないか、僕は聞いてゐると腹が立つた。」

「あれが僕のくせなんだよ、それに僕には戰闘的精神がいつも湧き立つてゐるんだよ。さういふ精神の命令では默つていられないんだ。しかし君のいふところは分るよ、君があゝ言つてくれたことは嬉しかつたよ。しかしだね、あゝいふ

君の好意にすら僕はつい戰鬪したくなるんだよ。」

「さうか。さうなら勝手にしたまへ。」

「君はおこつたのか。」

「いやべつに怒らない。だが僕はあんなときの君を一口に言へばいぢらしくなるんだ。僕は議論はできないが默つて聞いてゐられる議論と、又、聞いてゐられないそれとがあるものだ。君の場合はいつも僕をやきもきさせる、しまひに君がにくらしくなることがあるよ。」

「それは分るね、さういふ一種の友情はよく分るが、しかしそんな友情以外な精神も存在してゐるし、それをどんどん發展させることも必要だし……。」

「何を言つても君はその調子だ。」

わたしは栗島がどういふ時でも知らず知らず議論めいてくるのに、いまさららしく溜息をつくやうな氣がした。しかも栗島は何時でも疲れてゐないことはない。机の上にはじりじり汗やあぶらを搔く原稿紙が、かれの蒼白い顏を映してゐるやうで無氣味な氣がした。

「仕事はどうか？」

「一向進まない。客が多すぎるんだ。それに僕のところへ來る客は一日座つてゐるんだからね。」

「歸つて貰へばいいぢやないか。」

「それがね、つい話し込んでしまふんだ。」

一週間前に來たときの、何かの論文がまだ二三枚しか進んでゐなかつた。〆切のあとの次ぎの〆切まで待つて貰つ

て、それを一週間も過ぎてしまはないと、栗島の原稿は書き上らなかつた。かれはその間ぢう蒼白く歪んだ顔付で、絶えずそれに氣を奪られながら、自分でもふしぎさうに、むしろ、わたしなぞには呆れ返るほど暢氣な嘆息をすることがあつた。

「どうして僕は書けないんだらう、しかし徹夜さへすれば決つと書けるんだ。」

三

或る晩、栗島はいつもとは違つた昂奮した顔附で、わたしが部屋へ通つたとき机の前に座つて、わたしの顔を見ると吻(ほつ)としたやうな顔つきをした。かれは原稿も書いてないらしく、煙草のけむりが室のなかを綱(つな)でも張つたやうにぽうとさせてゐた。何か考へつめたやうな眼はいつも優しげに瞬いてゐるのだが、けふは角々しく昂奮してゐた。

「書いてゐるのか。」

「いや書いてはゐない――。」

かれはかういふと何か考へつめてゐることを、わたしが這入つて來て中斷されたので、その考へのあとを辿つてゐるやうな眼附で、そのためにか落着かない憶々してゐるところがあつた。

「すこし何時もとは違つてゐるぢやないか。何かあつたのかね。」

栗島は疑乎とわたしの眼の中を覗き込んで、溜息のやうなものを一つ吐いて、「さういふふうに見えるかね。」と慴えたやうな聲音で言つた。

「いつもより變だよ。」

栗島はさういふわたしを又しても氣味わるく見詰めかへすと、喉ちんこをごつくりと下の方へ落した。氣味のわるい一瞬間であつた。さういふ氣はひはわたくしの心をいち早く莊重にしてしまつた。わたしにも呼吸苦しい何者かが宿り込んで、息づかひを小刻みにさせ、妙に胸のところを壓しつけた。こんな氣もちは栗島と會つて初めて感じるので、かれが何時もより異常に硬ばつてゐることを感じた。夜は晩かつたせいか、この二階が靜かさに冴え返つてゐた。

「煙草を飲みたまへ。」

わたくしは煙草の袋を机の上に置いた。かれの紙卷はもう一本もなかつた。

「ありがたう。」

かれは紙卷を默つてふかした。そのあげくに、ふと思はずにたりと微笑つて見せ、そして續けさまに顏を赤らめながら、大きな聲で笑ひ出した。わたしは吃驚してかれの顏を覗き見たが、言ひやうのない昏亂と羞恥に似た或る感情が一時にそのときの栗島の顏一杯に上つた。そして笑ひが、中途で吹き消されてしまつたやうに止まると、かれは取り直したやうに眞自面な、むしろ氣難しい顏容をした。

「君がこの間僕が議論をしてゐたときに僕に止めろと言つたね。あの心持ちは僕には大へん嬉しい氣がした。君の心もちが見えるやうでね。」

わたしは再びかれの顏を見ながら、この男は何を言ひ出すのかと思つた。

「君がみんなを論敵にして鳥度待つて下さいと兩手で制するのを見ると、まんまと對手に釣られてゐるやうな氣がしたからなんだよ。なぜ今になつてそんなことを言ひ出すのだ。」

「ちよいと思ひ出したものだからね。」

栗島はまた默り込んでしまつた。

わたしは煙草をふかしてゐながら心に落ちてくる或る想念を拂ひのけられずにゐた。それは正確に近い想念であつた。わたしはそれに間違ひがなければむしろ微笑をさへ漏らし兼ねない氣がした。かれが先刻突然笑ひ上つたのが必然に少しくらゐ病的に笑つたのかも知れないと思つた。かれはわたしが室へ這入つたときよりずつと落着いては來たが、特異な昂奮はまだ鎭まらないで、その蒼白い額の上を去來してゐた。

「僕はよく人からお人善だと言はれるが、決してお人善ぢやないね。むしろ人の惡い方かも知れない。」

「君にはぬけたところがあるのでそれがお人善しに見せるのだらうね。しかし君は惡黨めいたことを計畫してやれる人物ぢやないな。」

栗島はあたりを眺め廻して、聲をひそめ、むしろわたしにでなく、誰か他の人物にでも言ひ聞かすやうな低い聲で言つた。「僕はそんな世間で言ふやうなお人善ぢやないんだよ。」

「だが惡いすれつからしの人間ではないよ。君は德をもつてゐるからね。」

「德を！」

かれはにはかに正直者のやうに眞赤になつてしまつた。それがあまり突然であつたため寧ろどぎまぎしてゐるやうだつた。「しかしそんなに德をもつてゐるやうな氣がしないのだ。それよりもつと僕は惡い人間なんだ。ひとを欺くことすら往々あるんだからね。」さう言ふと、口を結んで何か口惜しいことでもあるやうなえがらつぽい表情をして、わたしを偸すみ見た。

そしてかれは急に何か新しい思ひつきを浮べたやうに、「しかしお人善しなところもあるんだ、これは君、書いてはい

けないよ、こんな話があるんだ。」栗島は急に考へ出した事がらのために、ひどく愉快さうな顔貌になりながら話し出した。

「或る婦人だがね、僕はよくそこの家へあそびに行つてゐるうちに、その婦人を考へるやうになつたわけだ。ところが或る月のいい晩にその女が何かきふに巫山戯たかつたのだらう、乳母車の中へ這入り込んでね、それを僕に押してくれと言ふのだ。庭のひろい家で、芝生には露が下りてゐる、しかも家人は寝んでしまつて誰もゐないのだ。僕はべつに何も考へないで乳母車を押しながらあるいた。それこそその女がどういふ氣もちで僕にそんな役目を言ひ附けたか知らないが、月あかりのする庭を車を押しながら歩いてゐるうちに、何度もこれは馬鹿々々しいこつたと思ひついたが、それよりも左ういふ命令を恭々しく奉じるといふことが、そんなに不愉快でなかつたから、僕はそのとほりにした。」

「そのうち庭を三度くらゐ、――ちやうど花壇をとりまいた小徑を廻つてゐるうち、いいお月さまですねといふ女の言葉を聞いたきり、あとは二人とも默つてゐた。あんまり默つてゐるのでよく氣をつけてゐると女はすこし俯向きに、あごを前襟のところに食つつけたまますやすやと眠こんでしまつてゐるぢやないか、起すこともできず停めて居れば蚊が群れてくるし、しかたなしに同じい道をぐるぐる廻りをした。迅く動かせば乳母車のことだから揺れるし、そこらにある礫にまで注意深くして十二時近くまで同じことを繰り返した。しまひには涼しい風に打れてゐると僕自身さへ睡くなつてしまつて、車を押しながら居睡をした。僕もなかなかお人善しぢやないか。」

これはいかにも栗島らしいことだと月あかりの、女のねむつてゐる乳母車を押してゐる姿が目に見えるやうであつた。さういふ高びしやな氣持で栗島と話してゐる女の心が、にがにがしくわたしの心にうつり、それを知つてゐながら逼つてゐた栗島の心を失へなかつた。

「それからどうしたのだ。」

「夜露が毒だからと言つて女を起した。女はまあわたし睡こんでしまつたのね、ずつと引いてゐてくださつたのと言つて乳母車から下りたが、僕はいろいろな混み入つた感情からわざと默つてゐた。女はさすがに氣の毒がつてこんどは僕に乘つてみないかと言つたが、僕はそれを斷つてやつと妙に物佗びしい悲哀を感じた。そんときの女のお愛想らしい心持ちが目に透いてみえるだけ自分をあさましく考へた。女はすぐわたしを送つて家へ這入つたが、變に月のあかるいのまでが身にしみていまだに忘られないでゐるのだ。」

栗島は珍らしく眼をほそめてゆつくり話をしたが、妙に硬張つた顏色が沈み込んでなほ悶苦しく泣いてゐるやうに思はれた。「いまとくらべると今の方が惡くなつてゐる。あんな氣もちはあれきりで無くなつてしまつたのだらう。」栗島はさう言ふと何やら持迷してゐるらしい考へに操られながら、むんずりと默つて了つた。たまに私の顏を見ても何も言ふことがないやうな空つぽな表情をしたが、瞬間的には何かちくちく刺戟されてゐる惑はしい或る想念をどういふふうに現はしていいかと云ふことに、尠からず迷ふてゐるらしかつた。のどちんこが落ちたり、又、上つたりした。その氣持は先刻室へ這入つて來たときに感じたそれを、なほ、一層事新しげにわたしの心内に喘えがせた。友だち同士がやあと聲をかけ合つたときから、その次に言ひ出すまでの變な呼吸繼ぎの吃つたやうな氣もちを、もつと憂欝にしたそれが栗島とわたしとの上に覆ひかかつて、身動きすらとれないまでに凍え上つてゐることに氣づき、それがどこから來てゐるかと云ふことを苦しげに栗島から反射されてゐた。夜は更けて寒さが破壁とまだ張りかへてない障子のそとまで陰氣にした。

「その女はそれから後どうしたのだ。」

「それきり或る事情があつて逢はないでゐる。」

栗島は何か言ひ出さうとしながら急に思ひついたやうに、默りこんだ。わたしはやや退屈な氣もちですぐ頭の上にある腰高障子を開け、人家の暗い屋根の上を眺めた。

「木村君」

栗島はさう呼びかけた。私はふり向いて彼の顏を見た。そのとき栗島は先刻からとは一層緊張した色をうかべて、非常な眞白面な、むしろ憂欝な暗いやうな聲音で突然に言つた。

「女といふものは深い谷間のやうなものぢやないか？――。」

「さあ、――。」

わたしは何故かれがこんな事を言ひ出すのか分らなかつたが、かれの言ふところの、深い谷間といふ言葉が何か知ら女といふものを穿つてゐるやうに思つた。

「さう、そんなふうにも見えるね。」

栗島は低い聲いこゑで、同じいことを最つと壯重な面地でくりかへした。

「何か知らかうふしぎな谷間のやうなものさ！」

かれは左ういふと初めてにこりと微笑つたが、言ひあらはし得た會心の微笑みのやうでもあつた。かれは先刻からこれだけのことを言ひ表はすためにあんなに陰氣くさく考へ込んでゐたのであらうか、――かれは今やつとこの言葉を思ひついたのに違ひない、そしてかれはむしろ先刻から見ると爽乎とした洗面のあとのやうにらくらくした顏になつてゐる……しかし又た言葉の絕えた次ぎの刹那には焦々した或るもどかしい氣分に驅られてゐることを感んじた。それは先

刻からとは別ないら立たしさであるらしかつた。深い谷間――かう心に浮べて考へてみるとわたくしは眼前にえも云はれず深淵的なものを感じた。女ばかりではない、人生のうちから暗聳したものかげに、暗い、削り落された谷間を目にえがいた。やくざな、取り得のないわたしの想像はその谷間の底をとぼとぼと辿る何ものかを、わたし自身のやうなものや、或ひは栗島自身のやうなものや、また、他の様々の人間やが非常に暗示的な姿をして歩いゐるのを見た。

「君はなぜそんなことを言ひ出すかが判りかねるが……併しその谷間つて奴は目を閉ぢて考へると恐ろしく象徴的でもあり、劇的の場面のやうでもあるね。」

暗色の幕がそらから吊されてゐる、そしてそこに表はれるものは何か人間以外の、それでゐて人間に近い何ものかが算用數字のやうにぽつりぽつりと浮いてゆく、蟲の繭が點々としてつゞいてゆくよう……

「僕は卒然と考へついただけだよ。他に理由はない――。」

「さうか、僕は何か君が話をもつてゐさうに思はれたのだ。」

栗島は再び暗然とした。

窓の外はくろずんだ煤の埋まりだつた。それに手を出して搔き廻してみたら、手はたちまちに黒ずんで染まりさうであつた。谷間はますます深くそして底知れない濕潤のある空氣を冷やしてゐるやうであつた。ふと見たとき机の上に栗島の疲れたかほが、そしてわたしの視界をさへぎる何かがあつた。

わたしは四角な窓を隔れた。

「君は結城を知つてゐるね、あの男が昨日ひよつこり訪ねて來た。」

わたしの心は一轉して或る不愉快なものに閉された。

「結城新之助かも知つてゐる。」

「この近くに越して來てゐるんだ。君とは仲たがひしてゐるやうだが、相渝らず惡どう振つてゐるよ、善人のくせに！」

「ふう！あれも善人か？――。」

わたくしは身近く迫まつてゐるこの文學的な紳士が、遲かれ町で行きあふか、あるひは栗島の部屋で會ふかすることは最大の不幸であると考へた。とるに足らないわたしの文學的名譽の不健康な狀態にさへ、古い文學的紳士等は何かに事づけてわたしに當つた。かれらのあるものは熱心な數日間の葉書をわたしのところに投書して、わたしの古い身上を洗ひ立てるか、あるひはその卓絶な批評をわたしの上に馬乘りになつてやつつけた。わたしはそのたびに苦笑をした。苦笑することの勉强はわたしを一段にずうずうしく不死身のやうにしびれさせた。

結城新之助、――かれは詩人で聰明で當然小說をも世に示すに足るべき紳士であつた。かれとわたしとの文學的マラソンは、まだどちらにも決勝點がつかない、にも拘はらずこの紳士は忌々しく、又、腹立たしく時々つぶやいた。

「あゝ、あの馬鹿野郎が假りにも筆硯で世に立つてゐるといふことは、何といふ世の移り變りであらう、まだ完全に日本の文字さへろくろくしりもしない彼の馬鹿野郎を預かる椅子が一つ空いてゐたといふことは迂濶なことだ。」

かれはこんな風に嗟嘆した。

わたしは栗島がわたしへ氣を兼ねてゐるらしい結城の來訪を、ことなげに氣にかけないやうな調子で言つた。

「あの男にもう四五年經つたら會つてもいいと思ふよ、あの男が僕のことなんぞ氣にかけなくなつた時分にはね。それとも一生會はないかも知れないが、とにかくむかしの友達といふものはむかしからの持ちくされの感情で行き合ふの

は、いろいろな場合考へものだよ。」

栗島はうなづいて見せた。わたしは又たつゞけた、

「もしそんな古くさい感情で行き合つたら切角のものも打ちこはしさ！僕はあの男ばかりではなくむかしの友達にあひたくないんだ。友だちはどうかすると僕のやうな何時もひとりでゐるものには、だんだん要らなくなる、ほんの、三人か四人くらゐあればいいんだ。」

わたしはたち上つてかへりかけた。

栗島は何度も止めた。結城の話が出たので君はへんに不愉快になつたのではないかともかれらしい優しい心を窺かしながら言つた。それもあるんだが然しもうかへりたくなつたのだとわたしは不思議にいまは平靜になつたかれの顏を見詰めた。かれは平常のやうなお人善しの眼差しのうちからわたしのいくらか不安さうな顏を見た。

「ゆり枝さん、お客さまおかへり！」

と、梯子段の中途で、かれは極めてしぜんに出たやうな聲音で言つた。うたたねしてゐたのか、まばゆい眼付でゆり枝さんが例のあまえた聲で、あいさつの手を白く古疊の上についた。

そとは蟲聲で一杯であつた。あたまの奥が疲れて蟲の聲が痛かつた。

四

少年は武木と云うた。狹い玄關に寄宿するやうになつてから、武木は終日机の上で何かを書きつゞけ、原稿紙を費かへしに食つてまで書いてゐた。かれはからだが弱いせいか何處か老人のやうに踞み込んでゐた。或る時、かれはひどく

胃を悪くしたあとで、ひよろひよろしながら電車道をわたしと一しよに歩いてゐたが、そのとき何處からか白い一疋のこれもひよろひよろした小犬が危ない足どりで電車道をよぎらうとしたがふと忘れ物を思ひ出したやうに自分の歩いて來た方へ戻り出した。そのあとへ猛然と長い橙々色の電車の胴が過ぎて行つた。

「まるで僕みたいな犬ですね。」

彼の言葉どほりの弱々しい小犬は、手帕の吹かれてゆくやうに町角の雜貨店から反對の通りに匿れた。うまくいひあてたものだと思つた。

「それはうまく言ひ當てたものだね。」

貳木はれいの空の方へ顏を向け、高慢な顏附でしかたなしに微笑つて見せた。ひよろひよろした胴の長い貳木は、このごろ買ひ求めた新らしい籐の洋杖を一つからんと地べたに敲いて歩き出した。——れいの山羊を飼つてゐる父の家を出たがつてゐた貳木は、とうたう、わたしの家へ來たが父なる人は矢張りそれには苦情を言はないで好きにするがいいと言つて、好きな酒をのんでゐた。朝からでも一人でちやんと座つてちびちび飲んでゐるらしく、山羊はすぐ近くにある山羊舍へ賣り飛ばしてしまつたらしかつた。僅ばかりの有金を使ひ減らしてゆく貳木の父は、べつに小言はいはなかつたが、自然貳木をゐにくゝした。弟は電話局につとめてゐた。

或る夕方であつた。貳木は門の前を通つてゆく古い二重廻しを來た老人を指さして、こごゑで、

「あれが親父です。」

さう子供らしくわたしに言つた。

この老人ならよく見る……いつも古マントの下から酒徳利を下げてゆくひとだ、これが貳木の父親かと思つた。頑固

さうな、しかし健康な鹿のやうな足をもつた老人だと思つた。弟の月給も一文もとらない。そのかわり何も闘つてやらないことは貳木同様であつた。何んでも自分の食事のことでも姉がゐなくなつてから一人で濟してゐた。そして少しづつの酒を飲んでゐるらしかつた。どうしてあんな金があるのか分らないと言つた。

貳木はわたしのゐない日の食卓に、おひるの殘りのお菜がついてゐたりすると、箸の先きでつうと小皿を卓のまん中へ辷らしてしまつて、それを食べやうとしないで氣むづかしい顏をした。女中が默つてそれの代りのものを持つてゆかないでゐると、つけもので凉しい顏をして食べて濟した。わたしが卵の黄味ばかりを食べてゐるせいか、

「白みをぬいでおあげしませうか？」

さう女中がたづねにゆくと、かれは昂然として、

「黄味ばかりにしてくれたまへ。」

と言つた。

かれは機嫌のいいとき、あるとき女中に僕はすこし他の人間と變つてゐるんだからと言つて、故もなく矜かした。かれは終日絶え間もなく書きつづめてゐた。わたしの機嫌のわるい日が一週間つづくと、かれもその一週間を默つて一軒の家で暮すせいか、蒼白く病的な額をして机のところを離れなかつた。もとよりわたしは一言も口をきかない。かれも默つてくらした。かれはさういふときに書きちらしたのか、机の上の原稿紙にはゆうれいといふ詩をかいて、かれの身邊にそのゆうれいが這ふてゐるありさまを描いてゐた。わたしはそれには失笑したがお互ひ顏を合しても直ぐ眼をそらしてしまふほどだから、貳木からみたらわたしはひるまの蒼白いゆうれいであつたかも知れないと思ふた。

「君、かきおきなんておかしいぢやないか。僕のうちにゐてかきおきをする譯がないぢやないか。」

あるとき貳木は遺書といふ原稿をかいて、自分の病弱であることや、仕事からくる厭世觀などをかいて月日まで認めたものを机の上に持つてゐた。そしてその氣もちはよく少年時代には持つ厭世觀だと思つて分つてはゐたが、わたしは一應問ひ糺した。

「いや、ちよつと書いてみただけです。」

かれは恁ういふと、少しづゝ青年になるらしい皮膚の厚さを見せて、頬を赤くした。しまつたといふ顏いろであつた。

「厭なことを書くぢやないか？――。」

貳木はきまりわるくにがい笑ひをしてその原稿をくしやくしやにしてしまつた。そして庭へ出るとツイと顏をそらに向け、何やら悲しさうにした。少年のをりに苦しんだわたしでありその心もちが見えてくると、何の理由もなく默つて不機嫌にしてゐた一週間が家族へも又貳木へも、氣をかねるやうな心もちを感じて、

「君ちよつと外を歩かうか――。」

さう言つて誘ひ出すのであるが、戯談や坐山戯る事や子供らしさの失はれてゐる貳木は、冷たく美しい顏を凍えさせるやうに凝乎とさせてゐた。が、たまにはわたしが鷄頭が好きなこと、その花が貳木の家にあること、親父が鷄頭一本をも中々機嫌のわるいときには呉れない事を苦にして、そして

「今夜にでも鷄頭を取つて來ませうか。」

と言ふことがあつた。

「しかしあとで知れたら却つておとうさんに濟まないぢやないか。」

「いや關はないんです。」

かれはかう言つて鷄頭を夜おそく取つてくることがあつた。人に氣を利かすことを知らない粗ではあるがぼんやりさんのかれは、また、物に大様なところがあつた。メリヤスの襯衣や足袋、着古しの浴衣はねぢ拒げてゴミ箱のなかへ棄ててしまつて顧なかつた。それも換け代えのないものでも一切かまはずに棄てた。

「君にはものをいたはる氣もちがない、もつと年をとると分るが、しかしよく考へてみないか？」

武木はしかし頑固に、「あれはもう着られはしないのです。」

さう言つて自分のものを自分で處分するにふしぎはないといふやうな顏容をした。それはわかる、わかるがよく考へてみないかと最う一度わたしは口へ出して言ひ出す親切氣はあつても、言ひあらはすことが厭なやうな氣がした。

「さうか、切角棄てたまへ。」

武木はしかしすこしも書くことを止めなかつた。すこしの暇をさへ偷んでは細かい神經質な文字をならべてゐた。小さな魂が絶えず日々試練されてゐるやうで、それがこれまで靜かであつた家の中に何か一點刺戟をふくんで感じられた。わたしが忙しい仕事に趁はれてゐればゐるほど、かれも又わたしに負けずに書いてゐるやうで、目まぐるしかつた。自分でかくことが厭なときに武木のかいてゐるのを見ると、一層疲れるやうな氣がした。だがその小さい魂には手應えがあつた。わたしは何度もああいふ時分のことを思ひ出した。そしてはわたしはわたしの机の上で、書け書いてみろといふやうな氣がした。いつか武木の原稿をよそへ紹介したときにその編輯者から返辭さへこなかつたので、それ以來、わたしは紹介はしなかつた。それ故、かれは一人で出掛けた。それがよいとわたしも言つてゐたが、原稿はよく戻されて來て、それを持つてゐるかれが例のにが笑ひをして、悄々としてわたしの部屋へ這入つて來た。

「また戻つて來ましたよ。」

「さうか、ちよつと見せたまへ。」

ひととほりは書けてゐるが、無名ではだめだらうと思へるものであつた。が、どう言つていいか分らずに、「こんな事くらゐはしよつちうあるもんだよ。」とわたしは成るべくかれが樂々とこの問題を取扱ふやうな調子で言つた。

「また書いてみるさ。」

かれは默つて部屋へ引き返さうとした。それをわざわざ呼び止めて、

「此間春木と一しよに芝の方へ行つたときに、みんなの詩を出すとき君のも出す口約束をして置いたから書いてみるんだな。」

「あの雜誌ならいいですね。」

かれはすぐ元氣づいて部屋へ行つた。

口約束、そんなものが的になるものかとわたしは自分自身で左う思つた。次ぎの部屋で小さな文學的紳士がせつせとペンを走らせてゐる氣はひがしてゐる。結果さへ人間の氣まぐれで運命を右ひだりにする……紳士は何にもしらずにかいてゐる。弓づるを張つてゐるやうな心が見えたつて仕方のないことである。わたしの運命さへそれであつた。わたしは仕方なしに又かれを呼んで言つた。

「いま言つたこともそれは氣まぐれな編輯者のことだから、一概に信じてしまつてはこまるがね。」

わたしは書けば書くほどらうそくのやうに細々と痩せてゆくことを、貳木の上に感じ、その凄さまじい魂を次第に好意をもつて眺めた。そしてかれの書いたものが年少ではあるが、既に書き過ぎて疲れてゐるやうなところを折々かれの

書きものの中に見た。人間は一生のうちに二度くらゐ文章の底が拔けて行つて良くなるものであるが、かれはまだその底が一度も拔けずに、もう書き疲れ書き荒れてゐるのはどうしたことであらう。かれ自身よく書けないときには、不機嫌に默り込んで、れいの高慢な顏つきでつんと空の方を向いて、さも頭がくさくさするやうに門の前へ出たりした。

「どうだい、機嫌はいいかい。」

わたしは氣まぐれに左う言つて此の年少の紳士に聲をかけるのであつが、かれは明らかに不機嫌らしい、蒼白い顏をれいに依つて上へ向けながら言つた。

「あまりよくありませんね。」

と左う言つた。

五

ひと睡りしたあとで表の戸を叩くものがゐたが、その音はどろどろに濁つた故意に叩いてゐるらしい烈しい音であつた。いまごろ誰が來たのだらうと思つた。

「誰か戸を叩いてゐますね。」

女はさう言つて耳を立てた。どなたですかと左う言つて床の上に置きなほつたときに、表のぬしは尖つたこゑで、

「おれだよ、分るだらうおれだよ。」

さういふ聲に聞き覺えはあつたが、いまごろ交際つてゐる友だちの中で、夜中にわたしの家を叩く不屆者はゐない筈だと思つた。どうも思ひつかない。――時計をみると十二時に十分前であつた。どなたでせうかねと女はおろおろ聲

で言つた。わたしは玄關の障子を開け念のためにもう一度訊いて置く必要があると思つた。

「おれではよく分らないが名前を言つて貰ひたいですね。」

さう言ふと表のぬしは暫らくして、「おれだよ。」左う太い濁つた聲で、あざ笑ひの中からその聲を絞り出した。わたしは呆然とした。同時に格子戸をがらりと開けた。軒燈のあかりのなかに醉ひどれた飲酒のあとに泌み出たあぶらの含んだ蒼白い顏を据えた結城新之助が、さも快よげにげらげら冷笑つて佇つてゐた。

「ふむ……。」

同時にわたしのからだにあるだけの、十年前くらゐに持つてゐた癇癖と醜いごろつきのやうた感情が、泥波のやうにだくだくと腹の方から頭腦の方へ掻き上つて來た。その感情は十年振りに襲ふて來たわたしには新しい感情の發作でもあつた。

「よく來た、だが何の用事だ?」

かれは玄關へ這入り込むと、そこの三尺椽に腰をおろし、わざとらしく落着き拂つて、「久し振りだ、坐布團を出さないか?」さう眞顏で言つてへへら晒ひを古めかしく絞り出した。そこでわたしはこの紳士をどういふふうに處分すべきかを考へた。これは外へ出す方がよいと思つた。

「むだは止して外へ出て行つてくれないか? 古くさいことは一切止しだよ。」

「久しぶりぢやないか、左う言ふなよ、氣取つたてだめだから、——それより一杯交際はないか。」

「おいでたね。」

わたしは左う言つてへどの出るほど笑つた。「よせ、夜中ぢやないか、ひるま堂々とやつて來て貰ひたいものだ。何

か僕に言分があればだね。」

かれはそこでそのにが笑ひと、低い聲音とをしまひ込んで、そして出來るだけ大聲でかれらしく吠え立てた。

「莫迦野郎!」

かれはかれ自身眼舞ひでもしてゐるらしく、左う吠えるとからから笑つた。そして又低い撫でるやうな聲で、ふふと唇と鼻の先で息をついて、二十圓ばかりでいいから貸せよ、おい貸せよ、と、何かゴム玉でもそつと投げつけるやうに言つた。そして出來たらすぐ返すとしやうぢやないか。左う言つてわたしの膝がしらを撫で廻すやうな顔附をした。わたしはその白々しい糞度胸とでも言ふやうな芝居じみたかれを立つたまま、痺れるやうな氣もちで見据えた。

「そこでと、僕がそれをまんまと出すと思つて來たのか、金のことはどうでもいいなんて言ふ體采はきらひだよ、夜中にそんな相談がうまくまとまるなんて空想するのはすこし古い言草ぢやないか?」

「ぢあ、できないと言ふのか、――。」

「おひと善しめ、もう出て行つてくれ。」

わたしはくらくらした。指さきに何かを引裂いて棄てたやうた氣もちで、結城の肩さきをつかんだ

「どうするおれを!」

かれは脚氣にかかつてゐるらしく、よろよろした。この男に病氣があつた。

「なるほど!」

わたしは再た、「ぢあ、きれいに出て行つて貰はう、僕は夜中にくだらない問答なぞ耐らなくなつた。」

さう言つてかれを出口へ押し出さうとしたが、かれはそのとき又新しく笑ひ出した。その笑ひ聲は表にまだ誰かがゐ

ゐらしげに見えた。するとまだ連中がゐるのだなと、卑怯ものといふ感じがした。

「同勢をつくつて來たな。」

　わたしは何か先刻から何羽かの小鳥の首を捩ぢ切つてでもゐて、その餘憤をからだぢうに燃えつくしてゐるやうな殺伐た氣もちになつてしまつた。しかもかれが同勢をつくつて來たことが忌々しく憎まれた。

「誰もゐはしないよ、出るな。」

　かれはその不體を見られたくないのか、わたしの袖を取つて止めた。わたしはどういふ人間がこの男と一しよになつてゐるかが見たかつた、そして不思議に結城なる人物よりも彼れと同勢になつてゐるものが憎悪の的になつた。さういふ感情はむしろ珍らしい氣もちであつた。

　わたしは表へ飛び出したときに、小路の角に二人の男がのつそりと立つてゐた。が、結城はそのときにはいかに勢ひを得たもののやうに猛り立つて、その杖をふり上げでもするやうに身がまへ、

「叩いてしまへ。」と言つた。

　わたしは始めて語音を切つた聲で、「ははは……」と嘲つた。わたしは氣が狂れでもしたやうに何も彼もむちやくちやにして了ふ氣がした。あちこちの長屋の雨戸を繰る音がし出した。わたしどもの聲があまり大きかつたからであつた。

「脚氣でも割引はしないぞ、近づいて來たらの」

　こんなときに國言葉が出やうとは思はないほど、けだものがからだに荒れた。そのとき家の中から女が飛び出して、まん中へ這入つたときに何故家にゐてくれないんだらうと思つた。

「もう遅うございますから明日入らつしつてくださいまし。」

と言つた。

結城はせせら笑つた。そして奥さん、これですな、と左う言つて、かれはかれ自身の胸元をその手で上げたり下げたりして見せた。それは恐らく心臓の鼓動を暗示したものにちがひなかつたらう、それがいかにもかれらしく悪どかつた。わたしは女を退けてかれにつきかかる氣にはならなかつた。女の出てきたとき一人前の自分が大人げなくわめき立てた淺猿しさをつくづく感じた。

「もう行け、目的はもう遂せられたらうからな。」

わたしはかう言つて、かれが何かしらわたしだちを騒がせるために、最も都合のよい時を選んだのだと思つた。

「奥さん、この男は待合あそびもするらしいんですよ、ははは……。」

かれは左う言ふと、醉のさめ切つた顔つきでとぼとぼ歩き出し、町の角にゐる二人の男と影を一しよに合せた。その影はいかにも醉のさめたものの倦い足もとであつた。わたしは腹立たしさをあまりに立てすぎたので、心は落莫としてゐた。

「なるほど。」

わたしはかう呟いてこの文學的紳士が、その鬱積した氣もちに氣がついた。なぜ、ああいふ捩ぢ曲つた心をもち合はせてゐるのだらう、だが、わたしはおかげで永い間不愉快であつた。そして考へついたことは、ただ古い友情がくされてどろどろ横はつてゐることであつた。こんなものがあつたために、それを辿つてかれはかれらしくぼんやりと遣つて來たものらしいと思ふた。

夜が明けてから栗島をたづねると、かれはまだ床の中にゐた、そして何か物問ひたげにしてゐたが、わたしへの氣を

兼ねてゐるらしく逡巡してゐた。わたしは直覺した。結城がわたしのところの歸へりに立寄つたものらしく思はれた。

「昨夜、結城が來たよ。」

わたしは栗島がやつと吻として、「君のところの歸へりに僕のところへも來た。」と又た言つた。

「一人でかい。」

「いや、行平俊郎と最う一人知らぬ男とだつたよ、そこで僕はなぜあの男が君をたづねたかを言つてをいたよ。君には氣の毒なことだつたね。」

「僕はそのときこそ嚇としたが、古い友だちがああいふ形式以外では、訪ねて來られないものも感じたよ。あんな形式を取るその心根はいやだ」

そのために嫉妬中の女があまり烈しい爭鬪の中へ這入つたために、何か異常が起りはせぬかといふことをわたしは氣づかつた。わたしは悪いゆめのやうな光景をもう一度眼前に髣髴させた。

「僕はあの男が來たとき寢やうとしてゐたが、あの男が君に與へたものは知らないが醉はさめてゐたらしい。」

「ふむ。」

蒼白い夜中に來た紳士は、栗島のすぐ近くのカフエでなほ飲酒したことをも、栗島は寂しさうに話した。行平俊郎まで一しよにゐたことは不快であつた。「行平はかれと一しよにゐることを君に對して恥ぢてゐたよ、それを君に話してくれるなと言つてゐた。」

「行平俊郎がか？」

この丈の高い紳士はわたしの書齋に出入する正直もので、人に誘はれたら斷はり切れぬ男であつた。カフエからカフ

エを流れ歩く人物ではあつたが、亂次ないだけ拔けたところだらけの紳士であつた。かれが結城と一しよにゐたことを恥ぢてゐたのは、何か一味の淸純さを感じさせた。が、わたしは町角に立つてゐた人影のひとりを行平として考へるには、なほ充分な不愉快さがあつた。あの男のことだから漫然と一しよの卓で飮んだに違ひはなからう、ものの結果なぞ考へない男であるから、――。

「とにかく結城はよくない――」

栗島は溜息をついて左う言つた

「若しあのために、ああいふ氣分の劇動から女が流産でもしたらただで置けないやうな氣がする。そんなことのないやうにと思ふがね。」

「けさはどうだつた」

「嘔氣はすると言つてゐたがね。」

わたしは依然仕事の進まないらしい栗島の机の上を見ると、朝の間に長居は疲らせると思ひ立ち上つた。

「とにかく……」

栗島は適當なわたくしへの慰安の言葉をすぐ發見されないことを戾かしがつて、ちよつと苦笑したが、ひるすぎにでも話しに行かうと言つた。ぜひ來たまへと言つて別れた。

或る會合が果てたとき行平俊郞は酒氣をおびてゐたが、いきなりわたしだち四五人が歸へらうとしたときに、かれは

諸君ちよつと待ちたまへと叫んで、電話室へ駈け込んで、しばらくすると一人で昂奮して飛び出して來たが、かれの顏は明らかに物好きな、そして騷ぎ立てることに夢中になつた混亂の表情が烈しく入り亂れた。

「諸君、しばらく待てと言つたら待て！」

かれは再びさう叫ぶと先刻電話で命じたらしい自動車がこの料理店の前で止まつた。行平はみんなに乘ることをすすめた。待合に集まつた紳士だちは當代の詩人であつた。かれらは屈托のない泰平な表情で、この感激しやすい二十五六の青年のやうな行平の昂奮を興味深く、頰笑みさへ浮べて眺めた。危惧なぞ一つもなかつた。あたかも行平俊郎が大金を懷中してゐるやうにさへ思はれた。でも中には君乘つてもいいのかねと囁くものがあつた。

「一切引受けてゐる！　けちけちするな。」

かれは顏ぢゆうを眞赤に痙攣させ、異常な神經でがたがた震ひながら言つて、運轉手に行く先きを命じた。或る繁華な大通りの裏にあたる名だたる待合であつた。自動車のドアが罐詰のふたを開けたときのやうな音で閉められると、行平は眼をすはらせ自動車の外の方を凝視してゐた。その橫顏に既にいちじるしい神經の疲勞があつた。そして默りこくつてゐた。

「大丈夫かね、君はまた妙に出すぎたことをして困りはしないかな。」

わたしはかれの耳もとへ左う囁いたが、かれはふつと夢でもみてゐて、それが一としきりさめたやうにけろりとしたが、

「いや引受けた！」

と言つた。

車中の紳士はその何人も行平以上の收入をもつて居、また行平がどういふ氣まぐれからこんな突飛な夜行を思ひ立つたかと云ふことを、おぼろげに理解してゐた。しかし全部の理解をすることを退ぞけてゐた。そのためいくらか陰氣になり低いこゑで何か話し合つてゐた。

自動車は或る大きな玄關を一ト廻りして、瀟洒な植え込みに向いて横づけになつた。かれはわたしの袖を引いて、自動車の分だけはたのむと言つた。わたしはそれを出した。女中が二人、中腰になつてみんなを迎えた。

「這入りたまへ！」かれはみんなに左ういふと、再び又た昂奮を新しくして、自動車の分は濟んだのだと左う女中に言つて、靴をぬいだ。女中は呆然として何か不平さうにしてゐたが頓着はしなかつた。

二階へ上るとかれは酒を呼んで、妓どもの名差をし、口早やにビイルか酒か、何か食べものはいらないかと一人でやきもきして、バットの長いパイプをかちかち前齒でならした。異常の昂奮でかれの全身がこまかく震えてゐるやうな、何かおこりにでも罹つてゐるやうに見えた。そしてかれは溫和な或る作家をつかまへ、ここは一流なんですと言つた。

「ほう！　一流ですか？」

溫和な詩人は二間打ち通しの大廣間と金屛風と、座るときくらぎのやうに鳴る座布團とを見廻した。そして白襖のかげからほつそりと次から次へと辷り出る、弱腰の、どきりとくる感じの美しい妓どもを珍らしくながめた。かれらは一樣に典雅で落着いた物靜かさをもつてゐた。唇さへ考へ考へ動かしてゐるやうな夜中の淑女だちであつた。

行平俊郎はこれらの凡ての妓どもと相識であるらしく、やあとか、しばらくとか、肥つたとか、痩せたとか目まぐるしく言つて、一人で酒をぐいぐい飲んだ。かれのあごの骨が寂しく皮膚の上に形をあらはすほど、飲酒のためにやつれ込んで見えた。美しい妓どもだちは何か言つては、紳士たちの間へそれが勤めのやうに手ぎわよく晴々しく割り込ん

で、或るものは煙草をふかし始めたりした。一さいの光景は物しづかではあつたが、なまめかしく華やかであつた。紳士だちはいくらか茫然としてゐたがみんな落ち着いて、茶化したり巫山戯たりした。

「これは大事になつたね。」

温和な散文詩家はしかし泰平な調子でわたしにささやいた。

「何しろ行平俊郎の宴だからね。なかなか大したものさ。」

わたしはそのうち最も勇敢である新進の或る詩人が、もうその得意な義太夫で滿座の妓どもを呆然とさせてゐるのを、煙草のけむりの中に見た。ほどよく肥り細目のいい男であるかれは凡ての酒席の音頭取りであるごとく、今夜もまた最も素晴らしい人氣のうちに既う二三人の妓どもをそば近く座らせ、よい喉で何かのさわりをうたつてゐた。それはもはや堂に入つてゐる調子であつた。行平俊郎はその優越ぶりをかれらしく無闇に喜んで、も一つ、も一つと叫んでやたらに拍手した。かれはむちやくちやに騒ぎたかつたらしかつた。しまひにかれは憤然として怒つてゐるやうに唐突に座敷のまんなかに仁王立ちになると、諸君、さう叫んだ。

「ライオンの眞似をして見せるからよく見てゐたまへ。」

かれは左ういふと、六尺に近いからだを四ツに這つて、美ごとな長髮をふり亂しながら、もの怖さうによたよた歩いて見せると、うをうをとうなり出し、そして座敷をあちこち歩いた。その感じにはライオンの逞しさがあり拍子のうちにかれは酒席に返つた。そして一杯引かけると疲れたらしい顔いろをしたが、それはいかにも彼らしい怒號のやうであつた。

「うをうをお……。」

と、かれは踊だけでもう一度やつて見せ、妓どもに誰かおどつて見せよと言つた。妓どもはみんな辭退したが、そのうちの若い妓が二人、うたにつれて疊の上に手をついて踊つてしまふと、れいの、義太夫の先生がおどり初めた。あちにも、こちにも唄つた、みんな醉つてしまつた。しかし行平俊郎だけはしやんとした性根で、絶え間なく酒を命じ料理を言ひ附けだれだれを呼べと、しきなしに喋つた、そのあげく物忘れしたやうに例の長いパイプを咥へがちがち鳴らした。

かれは或る一人の大きな妓どもの、胸の兩側にふくれてゐるものを指さしながらわざと言つた。

「それ何あに！」

「これ猫の子よ。」

妓どもは左う言つて乳房のふくれてゐるのを、上の方からそつと撫でて見せた。白い一疋のふうわりとした猫の子、それを抱いてゐるやうに見えた。

「猫の子とは面白い、五十錢遣らう！」

行平は王者のやうに左ういふと鏘然として五十錢銀貨を卓の上に投げ出した。銀貨はきりきり舞をして大きな光つたからだを夜更けの電燈の下にかがやかせた。

「もう一疋ゐるわよ。」

妓どもは亦左う言つて最う一つのふくれた方の乳房をぽつたりと手につかんで見せた。

「は！　もう一疋ゐたのか――。」

れいの温和な詩人は左う心からおかしさうに言つて笑ひこけた。みんなが大笑ひをした。しかしもう一疋の分の銀貨を出さうとするものがゐなかつた。わたしは仕方なしにもう一疋の、欲張つた猫の子の分の銀貨をぱつちりと卓の上に

置いた。そこで行平は嬉しさうに異體の分らない拍手を續けた。――散文詩家は不圖、何かを振顧つて見たやうに、「一體こんなことをしてゐていゝのかね。なんだか後のたたりがありはせんかと思ひますがね。對手が行平君ですからね。」

わたしは微笑ひながら言つた。「こりや領け前を出す氣でゐないと、あとあとに間違ひが起り易いやうですね。」

が、行平俊郎はどうかすると一座が白けかけやうとすると、それを盛り返す爲めに絶えず苦しい努力をつづけ、しまひに力盡きてしまつたやうに飯だ飯だと叫び出した。實際、もう電車はとつくになくなつてゐたし、海近い二階の障子のそとは秋冷えのうすら寒い空氣に充たされてゐた。誰かがいまから飯を食つてどうするのだと言ふと、かれは頑として頭を振つて見せた。

「いや此處にはそれはそれは可愛いいお握りができるんだ。白い象牙のやうな溫かいのが……」

が、これまで默つてゐた栗島は、もう我慢が出來なくなつたやうに、今まで匿れてゐた一座の隅からこれも夜更けらしい蒼褪めた顏をさし出して、行平を遮ぎつてそれは餘りだと言つた。

「もう引上げやうぢやないか、かなり更けてゐるし、僕はもう御免だ。」

しかし行平はすぐ言ひ附けたらしく、全くそれはそれは可愛いい、ちいちやいお握りがこんもり何かの白い盛り花のやうに出されたときは、みんな不思議な或る驚愕に均しい感情でそのお握りを凝視した。季節に早いほそぼそした大根が添えられてあつた。散文詩家は感服したやうに、その世にもいとしげなお握りを眺めながら言つた。

「なるほどね、こんなふうなお握りもあるもんだね。」

行平はそれを手摑みにして、「これは何か天から降つて來やうなものだよ。」

さう言つてむしやむしや食べはじめた。妓どもたちもそれに手をつけた。時はづれの食事が一座に沈滞した或る想念

を與へてゐるのか、或ひは氣難しげに默つてゐる栗島が容易に話し出さない故か、妙な息づまりが完全に行き亘つた。そして妓どもの一人が貰ひをもらつてかへりかけ、次の一人がまた去つたときには、とても動かしがたい寂寞に似た氣もちが流れ出した。その寂寞に抵抗しやうと企てゝゐるらしい行平の意圖が、どうしたせいか妓どもの一人が「藝者してゐる間は子供だわよ!」さう叫んだ瞬間から一切が破れて了つた。

散文詩家はあくびをした。栗島が立つてわたしを呼んで、出やうぢやないかと、かすれた聲で言つた

「かへらう。」

そのわたしの聲を合圖にみんなが立ちあがつた。行平もしかたなしに急に狼狽てたやうに歸らうと言つた。行平の行きつけと見え、かれは金を拂はないで一しよに外へ出たが、行平は思ひ返してもう一度みんなに向つて、ちよつと待つてくれと言つた。そして待合へ這入つて行つたが永い間經つてから出てくると、いま自動車が、くるからと左う疲れた聲で言つた。

みんなは默つて自動車を待つた。

間もなく深夜の街路を坦々として自動車が走り出した。途中で一人二人降りてわたしと行平とが殘つた。かれは過勞のために默りこくつて、物憂さうに喉の乾いたやうな樣子をしてゐた。そして水道の水を飮もうかと言ひ出した。上野廣小路の松坂屋の前で自動車を停め、水道の水をかれはがぶがぶ飮んだ。そして又自動車に乘り込んで、疲れたと言つて烈しく息をついた。

「みんなに分け前を取つてやれよ、今夜の分は?」

わたしは笑ひながら左ういふと、かれは意外にも眞面目な顏つきで、恬然として言つた。」

「もちろん取つてやるつもりですよ。」

さう言つて恐ろしく憂鬱に考へ込んでしまつた。上野の林のなかをくぐりぬけ、蟲の音のながれる間を行つたとき、かれは最う一度かう言つた。

「取れるだらうか？。」

さう言ふかれの醉はすつかり醒め切り、どこか寂しさうに膝がしらを撫でた。大丈夫だよ、みんなもその積りでゐるらしいんだよと言つた。が、實際はわたしとても知らなかつた。わたしは今は明らかに後悔に似た氣もちで凝然と考へ込んでゐるかれが、再び先刻仁王立ちになつたライオンだとは思へさうもなかつた。

が、自動車が本郷動坂近くに來たときに、かれは窓先から町並みを眺めてゐたがにはかに元氣づいて言つた。

「まだ起きてゐるから最う一軒寄つて見よう！」

と言つた。

さう言へばブラジルといふカツフエの硝子窓には、まだ、あかあかと電燈が點れてゐたのである。わたしは頭を振つた。

「もう晩い、よしたまへ。」

「ふうむ。」

かれは左う言つたきり再び元氣のなささうな顏つきに返つて、氣難しげにしてゐるわたしの顏を見ないやうにした。

夜風は水のやうに窓から吹きかけた。

六

武木正吉が或る球戯場の二階の入口を借り受け、わたしの家を出てから僅かな金で自炊を始めてから、屢々わたしはかれを尋ねた。かれはしよつ中書いてゐた。この小さい紳士へは定めた以外にわたしから心づけしなかつたので、童話や童謡をかいて暮すやうにしてゐた。そして決してわたしから金を借りやうとはしなかつた

「飯かい？」

から言つて段梯子を上ると、かれは狼てて赤い顔をして手で何かを覆ふやうにした。かれはきちんと座つて今から食事を始めやうとするところと見え、茶碗が一つ、かれの机の上に置いてあるきりであつた。

「ええ、寢坊をするものですから――。」

かれは左ういふと聲變りのした青年らしくなつた顏をまた赧らめた。どんな苦しいことがあつても父親のところへ行かずに、自分一人で耐えてゐた。父親の方でも決してこの子息を顧みなかつた。

「そのくせこの窓の下をよく通つてゆくんですよ、好きないい酒屋が町にあるものですから、それを三日目くらひに買ひにでかけるんです。」

「そんなときどんな氣がするかね。」

「何とも思ひはしないんです、ふしぎなのはそんな酒なぞ買ふ金はとつくの昔になくなつてゐる筈なんですがね。」

武木の父親の暮しは武木にも分らないらしく、わたしの腑にも落ちかねた。銀行の方はとくに引出してしまひ、保險まで出してしまつたので貰食ひより外にはないらしかつたが、武木は貰食の樣子さへないと言つてふしぎだと言つた。

「それはまだやはり金があるんだね。自分の餘生の分だけをちやんと小刻みにつかつてゐるんぢやないか？子息の世話になることもできないから能く自分を知つてゐる遣口をしてゐるのぢやないか。」

さうでなければ長續きするわけがない、いつか貮木が一ト月ばかり山羊の家へかへつてゐると、曾つて來たことのない父親がわたしの留守中に遣つて來て、「貮木が何んにもしないで遊んでこまるから、どこかへ下宿するなりして一人前の方針を立てるやうに先生から話しください。」と賴んで行つたことがあつた。わたしは貮木にそのことを言つて此の球突場の二階へ移させたのであるが、親父は貮木が引越したあとから、「親に默つて越す奴があるか。」と叱責したさうであつた。自分でそんな風に仕向けて置いてそれを妙に親父らしげな恩を着せて叱る腹の中が、見えすいてわたしには不快であつた。

商人でもあり又子息の世話にならないつもりの貮木の父親の、その日暮しには貮木やわたしの分りかねる暮しがあるらしく思はれた。貮木はたゞ分らないと言つたきり餘りたづねもしないらしかつた。

「飯をやりたまへ。」

さう云つて四角な窓ぎはから見えるテニスコートをわたしは眺めた。貮木の食事するところを見るのが手痛くもあり貮木も好まないらしかつたから、──しかし貮木はたゞの白い飯の上にソースを振りかけ、平然として食事をすました。かれにはこんなことが屢々あるらしく、また、わたし自身のわかい時のことを考へても珍らしくはなかつた。ただ、かれは甚だ平然としてゐるところが羨しく思はれた。

「大したご馳走ぢやないか？──。」

「えゝすこし口淋しい氣はしますが、慣れてしまひましたからね。」

かれは甘美さうに朝日の一本を口に啣へ、いかにも食後の喫煙は甚だ結構ですよ、と言ふやうな泰然とした顔附をした。しかも急いで食事したので少年らしくいい顔の色をしてゐる。——いつもこの球突場にゐる中婆さんが貳木に食事のものを饋けるのだつたが、氣に入らないものだとかれはゴミ箱に棄ててしまつて食べなかつた。氣を利かして金なども立て換へやうとしても貳木は陰氣くさい顔をして斷つたりした。何をしたら氣に入るのか、又、どんな事がかれを喜ばせるのか、中婆さんには解らなかつた「あの子は全く風變りですよ、日の暮れるまで何にも食べないでゐても平氣らしいんです、さうかと思ふと一度に五合飯をあがるんですもの、全くあんな人たらありませんね。」と、いつか夕方かれの留守中にたづねたときに、中婆さんは左う言つて、「いつたいあの方のお腹はどうなつてゐるのでございませうね。」と左う言つた。さうだな、あの方のお腹はあれは？さう言ひかけわたしは苦笑して、まんざら人事でもあるまひとわたし自身が市井に住んでゐたことを思ひ出して暗然とした氣もちになつた。

貳木は窓際へやつて來て、「此のコートの奥の方が寂しくて中々よございますよ、まるで原つぱのやうな野蠻なところがありましてね。」と言ひ、すゝきの生え亂れたコートの奥の方を指差した。

貳木はしよつ中からだを惡くしてゐたので、よく水銀座藥を用ひては通じをよくしてゐたが、このごろ、その座藥も利かなくなつたと言ひ、わるい胃袋を忌々しがつた。が、わたしはその話をきくと苦笑する前に、何か言苦しい氣もちになつた。

「第一お腹に何も這入つてゐなくては、座藥もきかなくなるわけですからね。肝心の食物が這入つてゐなくては？——。」

かれは左ういふと例のにが笑ひをした。なるほど！ 肝心のものが這入つてゐなくては出やうがないと思つた。

「あとでよくそんな事に氣がつくことがあるんです。幾日もろく／＼食べないときにはですね。」

かれは又たにがい笑ひをした。そして「あんまり腹が減りすぎると却つて反對に頭がよくなつて來ますね。何か額が蒼褪めてくるやうな氣もちで——。」

わたしは不圖かれの顔を見てゐるうち、一本の白い道路を行くわたし自身の姿を目にうかべた。何日何處を歩いてゐたといふ覺えはないが、しかし眩惑に似たものを頭腦とそして胃袋とに感じてゐた。さういふときに最も恐ろしいものは日の當つた道路を歩くことであつた。その光線は胃袋の中までいなづまのやうに閃めいた。そのたびにわたしは眩惑を感じた。けれどもわたしはどう云ふ用事であつたか記憶しないが、やはり勇敢に歩いてゐたのである。

「それに僕はどこか畸形のやうですね。何だか若死にしさうでそれがお可笑しくて仕様がないんですよ。」

實際、かれは身體が纖細過ぎてゐるやうなところがあり、その蒼白い皮膚は弱々しげに見えた。しかしそれにも拘はらず强情ぽい柄のやうな骨づくりが、父親から受け繼いでゐるらしく見えた。

日本橋に店を持ちながら本所から車で通ふてゐた父親は、よく武木をその車に乗せて店へ連れて行つたが、そこで彼れは店の人々からすつかり甘い坊ちやん育ちにさせられた。父親はそのころから一こくな剛直な人であつた。かれはその時分の日本橋界隈のことを時々話した。

「本所の家に池がありましてね、それを能く店のものが浚ひに來たものです。母がそんなとき皆を喜ばせるやうな御馳走をして自分も樂しんだものですが、父はやはり難かしい顔をしてゐましたよ。母はいゝ人でしたよ、母が生きて居れば家はまだちやんとしてゐたかも知れません。」

東京で生れた武木は、日本橋あたりの日のさした町すぢのことや、さういふ町であそんだことを靜かな時にかいて見せたが、何かこの少年にふしぎな由緒が匿されてゐるやうな氣がしてならなかつた。何日だつたか食膳に向つたとき

に、」

「うなぎなら頭でもきゝますよ。」

さう心から言つて氣がついて、弱々しくはゝゝと笑つたことがあつた。

「僕はよく淺草へゆくとうなぎの頭を食ふんです。何だかあれがばかに利きさうな氣するんでしてね。」

わたしはこの男がうなぎを食ふところを思ひうかべ、町々の灯のありさまや、人が群れてゐる通りのことを考へると、ほつそりした醜木がうなぎの頭を舐るのを小鳥が雛蟲をつツつくやうな氣がしてならなかつた。英國製の鳥打帽をかぶつたこの紳士は又言つた。

「あいつを食べたあとははゞかに元氣になるんです。」

七

「ゆり枝さんが來て居りませんか？」

晩の十時過ぎに栗島が表から家の女にさう聲をかけた。さう言へば一足先きに少し何時もとは違つた氣はひで、ゆり枝さんがわたしの家へ來てゐた。――書齋でわたしは一人で微笑みがうかぶ氣がした。

「來てゐるよ、どうしたんだ。」

栗島は蒼い顔をして固くなつてゐた。何んでもないんだが、しかし遲く濟まないね。」

茶の間はひつそりしてゐる。ゆり枝さんと女とが身をちぢめて靜まつてゐるらしい氣はひが感じられた。

「實はね。」

栗島は聲をひそめるやうな調子になつた。
「あのひとに勤めの方はよしたらどうだと言つたんだ。一日ぢう出掛けてゐては切角來て貰つても手數がかかる一方だからね。しかしあのひとは聞かないんだ。もう少し勤めて色々なものを揃へたいと言つてゐるんだ。」
「さうね、勤めを止めるのは僕も贊成なんだが、やはり身のまはりのものを作るためにも出掛けてゐた方が無事だと思つてゐるらしいんだね。」
栗島はちよつと遠慮めかしい眼色をしたが、親しげな聲音になり、
「身のまはりのものくらゐならたかが知れてゐる、——僕はさう言つて止めるといいと言つてゐるんだ。」
「結局勤めの方は止した方がいいね。君としては矢張り早くかたがついた方がいいだらうし……。」
其處へ當のゆり枝さんが茶の間から出て來て、わたしに今晩はと挨拶をして、栗島へはただ笑つてだけ見せた。笑ふと子供のやうな稚々しい顔になる……。
「あなたは默つて家を飛び出すなんてよくない。」
栗島は中學の教師のやうな訓辭めかしく言つて、「おたがひによく理屈が立つやうにしないと困る。」と栗島らしく眞面目くさく言つた。
「でもよくわかりましたのね。こちらにゐると言ふことが……。」
ゆり枝は平氣でさういふと、うちの女と顏を見合せて笑つた。が、栗島は笑はうとしなかつた。
「あなたのその平氣なところがわたしには合はない……。」
栗島はれいの理屈めいた調子で、依然、顔色を蒼褪めさせ睨んでゐるやうな眼いろをした。

「だつてそりや仕様がないことなんですもの。わたしの性分よ。」

ゆり枝は栗島の昂奮してゐることに氣もかけないで、ねえ奥さん、と左う言ひ笑つてしまつた。栗島はさういふ無邪氣さうな對手を一段とにがにがしく、わたしの手前でもあるのか氣難しく「そんな性分はなほさねばいけない、あなたの一番よくないところだ。」と此の男らしく併し毒のない調子で言つた。

わたしは默然として栗島とゆり枝とに、なるべくぢかに眼をふれないで見てゐるうち、悲哀の味はひが追々沁みて來た。この、ぼんやりさんの天使、そして生涯飽くこともない理屈やの學徒、その交はりの妙に淸らしく映るのはどうしたことであらう、かれらは何も隱してゐない、結果がくるまで平然としてゐるではないか？――

「お歸へりなさい、こちらも遲くご迷惑だらうから。」

栗島は厳然と左う言ふと、ゆり枝さんは默つて素直にうなづいて

「わたし明日また參りますわ。」

と立ちあがつた。

「どうも君いろいろ、――。」

栗島は苦笑して玄關さきへ出ると、ゆり枝さんを五六間さきに遣り過していくらか落着いた安らかな聲音で、

「ゆり枝は君、自然兒ですからね。」

と言つた。

「あゝあの人はまるきり子供らしいところがあるね。」

かれらの足音が小路のくらみに消えた。そして心もちは人ごとでありながら愉快であつた。

栗島のところへ此頃になつて愛讀者といふ女が、いつも茶の間に座つてゐた。べつに何を話すといふこともなく泛乎としてゐるばかりだつた。

「篠原さんと言ふんだ。」

栗島は紹介してそれきり茶の間に置去りにして、よくわたしと二階へ上つた。そんなことに一向頓着しなかつた。昔も朝もゐるらしかつた。ゆり枝さんとも友だちのやうになつてゐる、――ふしぎな女だと思つた。小柄でくりくりに肥た瞳の大きい、ひと懷こい娘のやうな女だつた。

「會社員の妻君なんだが晝間ひまだから來るんだよ。いい人でね。」

物珍らしげな眼附でわたしなぞの顏を見る女である。栗島の留守にも來てゐる。ああいふ小柄なくりくりに肥つた女といふものには、情熱をおもちやにするところがあるものだと思つた「中々美人ぢやないか、」さう言ふと、なかなか美人だよと氣にも咎めずに答へた。

「切角來てゐるんだから話してやりたまへ、僕はかへるから。」

「いいよ、ああして置けばいいんだから。」

栗島はべつにこの女に些しの昂奮もかんじてゐないらしかつた。――行平俊郎に言はせると彼れは何ものよりも、この女を問題にした。

「ねんばりと座り込んでねちねちした物言ひをしてゐるのは、何か物欲しさうぢやないか?栗島はあんな男だから女になれゝば何とも思はないのは實際かも知れないよ。然し一たん座つたら中々かへらないでゐるところに何かがあるな。」

行平はああいふ女は不道徳であつても本人は何んとも思はない、おひと善しなものだとも言つた。

「つまりばかみたいなところがある……。」

行平はさういふと最も卑俗な言葉で何か言ひ當てて、大聲で笑つてしまつた。「だがですね。栗島もああいふ無頓着で通してゐるんだし、あの女には興味はないらしいんですね。それにゆり枝さんとああいふふうになつてゐるんで、あの男の道學者めいたところから言つて至極無事ですね。他の誰かが射止めればともかくですね。ははは……。」行平は又た言葉を繼いだ「東京くらゐああいふ若い細君のゐる都會もすくないかはり、東京くらゐ性根の決つてゐない女のゐるところもありませんよ。さういふ意味での東京の若い女といふものは、至極落着かないと言つた方がいいんですま。つまり彼らは自分が女であるといふことを、かなりに深く最つと性的にも考へてゐるらしいぢやないか？」

行平はもう三人の子供の父親だつたが、いまの細君は或る地方での、最も新手の女性文學者であつた。かれは大學時代にただ地方の（かれの郷里である京都の）新聞にその女の詩や短歌が掲載されてゐる珍らしい事實に、又たさういふ優美な藝術的淑女の存在が行平をむやみに昂奮させた。で、かれはその優美な詩や短歌の世界での、その處女としての女の暮しに或ひは間違ひでもできたりすることの假定的な空想は、單なる讀者としての彼れの目ざめを苦しませた。かれは地方の新聞にその詩や短歌を見出すことに、かれの心はすつかりその見もしない女を假想させた。かれはしまひに思ひ切つて地方の親父のところに電報でその女を貰ふことを告げた。前々から手紙で問ひ合せをしてをいたことも實際であつた

かれらは――彼れ自身言ふところの此の悲しむべき一片の電文によつて結婚したのであつた。それゆゑ、わたしが結婚するときに彼れは先づかう言つて脅かした。「結局疑つても疑ひつくせない人生だとしたら、そつくり諦めて疑はない方が何よりの得策ですよ。わけて分り切つてゐる女の場合では？――まだ女といふものがそんなに清淨であつた例を

どういふ意味にでも證據立てられない今の時代でですね。そりや科學的にはあるだらうが、さういふものが結婚をしやうといふ若い者同士にはとうてい役立たないものですからね。」

かれは何日かの晩のやうに一切が熱情的で、そして忽ちそれが消失しやすかつた。そのためか悲しむべき一片の電文をかれはよく話して、僕のやうなものは今でこそ子供はあるが、がらが結婚するがらじやなかつたんですよ、いやはや、みんなさう云つて悔むにちがひないだらうが、いやはや……彼れは笑ひ出した。「しかし栗島の場合は何と言つても良縁ですな。かれらは二人とも氣さくで、そして道學者の妻らしくもなく素晴らしく暢氣で、道學者自身もそれ以上に暢氣なんですからね。天の配劑といふ言葉がありますね。全く玩味すべき言葉ですよ。」行平は何日かこんな風に栗島を批評した。

その日、栗島は突然かう言つて、妙にわたしの顏を見つめた。

「僕は結婚しやうと思ふがね。今のやうだと却つて人から妙な解釋を强ひられるやうになるからね。」

わたしは栗島がとうたう言ひ出したなと思つた。むしろ、こちらから待ち構えてゐたやうな問題であつた。「姉か一切面倒を見てくれるんだ。僕はこのとほり素寒貧だからな。それに姉はあのとほりに僕の今までの事はすつかりして呉れてゐるんだから！」

「そりや何よりだ。僕も實は君にそれを勸めたいくらゐに考へてゐたんだよ。姉さんならみんなして呉れるだらうね。」

栗島の姉さんなる人物は、殆栗島を今までに育てたやうな人であつた。第一の論文集の出版されたときも姉さんが全部金の方を持つた。あちこちを放浪したときにもこの姉さんが下宿屋へ行つてあと始末をした。「そこでだね。君ら夫婦が仲へ這入つてくれるやうに姉に話をして置いたんだ。姉はそれが何よりだと言つて、「ともかく一度お目にかゝつて何

彼とお話したい）と言つてゐたから、このごろのうちに代を尋ねるから會つてくれたまへ。」

「いいとも。ゆり枝さんもそれを望んでゐるんだね。」

「早い方がいいつ言つてでてゐるんだ。あれの國の方とも打合せが必要だし……こんな話は初めてだからどういふ工合に運びをつけていいか分らない。」

栗島は何日かのやうに憂鬱ではない。いくらか明るくなつてゐる。人生の一つの形式が栗島にも必要であるらしく思はれた。

「此處の家に緣があつたやうなわけだね。いまになると？」

「さうだな。」

栗島は色つやのわるい顔いろで、妙に寂しく笑つて見せた。この間から書きかけの原稿は汚れてまだ書き進んだところさへ見えなかつた。何に精力を消されるのか？ また、しよつ中客のために時間を奪られるのか、わたしには分らなかつた。「こんな樣子だと何時になつたつて書けはしないよ、さう思つて遣り初めるんだけれど駄目なんだ。」

栗島はきふに思ひ出して、手を叩いて、ゆり枝さんを呼んで、茶をもつてくるやうに言ひ、茶をはこんでくると、

「例のことを今話して仲へ這入つて貰ふことにした。それで姉にも會つてもらつてね。」

ゆり枝さんは鳥渡嶮い顔をして、そしてこんどは平氣で、れいの、あまえた子供のやうな聲音で

「どうぞ、――。」

さう言つて微笑つて階下へ下りて行つてしまつた。栗島はそのあとを見送るとそれが全くたうであるやうに

「あれは全く君、自然兒だからね。それで困ることもあるんだが……。」

いつかと同じいことを言つてお可笑しさうに笑つた。何か一と息ついたやうな寛ろいだ栗島の顔に、これまでになくゆつくりしたところがあつた。が、いつかの晩、かれがこの部屋に坐つてゐたときの、陰氣くささはどうだつたらう、まるで別人のやうに思へた。

「この障子なぞも張りかえるといいんだが、つい、うつちやらかして了つてゐるんだ。こんどは張り代えやう。」

かれは冬近い障子の外を透して見た。屋根には夕しめりが催してゐて、暗みが褪いろをおびた晩秋の色であつた。何氣なく覗いたわたしにも障子の破れが身に沁みた。

八

貳木は晝間のうちは外へ出ないやうにしてゝなるべく日當りを嫌つた。なぜかと言ふと日當りだと上逆せてしやうがない、さう言つて火鉢さへ用ゐなかつた。この少年厭世家は夏は洗面器に氷を入れ、その氷に頬をあてるやうにして暮してゐたが、冬は足袋も穿かずに机の前に座つてゐた。用事以外には球突場の二階を離れなかつた。

「君はまるでさうしてゐるとお經を上げてゐるやうぢやないか。」

「は！さうですか？――。」

かれは微笑つて、「かうしてゐるより外に仕方がありませんからね。」

諦らめ切つたやうに言つた。

「すこし勤めてみる氣にならないか？原稿暮しなぞと言つてもまだまだ早いぢやないか」

わたしは時々さう言つて勤めをすすめるのだが、からだが弱いのと、人中へ出るとかつとして何もできないと言つて

聞かなかつた。も一つ心臓が弱かつた。

「その氣にはなつてゐるんですが、勤めたつて駄目なことが分り切つてゐるんですから……」

「勤めないさきに分るものか?」

「いえ、分るんです。」

貳木は自分を知り盡してゐるやうに言ひ切つて、そんな事は聞きたくもないといふやうな表情をした。そんな時のかれは故意とらしい眞面目な色をした。かれは唯一人で、どんな不自由をしても机の前に座つてゐることが相應はしいと考へてゐるらしかつた。それ以外の生活はあり得ないものと考へてゐるらしかつた。

「けれども左うしてゐたら困る一方ぢやないか。」

「そりや左うですが、しかし勤めるより此の方がいいんです。」

貳木は頑固に左う言つて、袴や着物、それから毛布まで賣つてしまつたと言つた。自分のことは自分でると言つた彼れの氣性らしくみすみす無ければ不自由なものでも關はないで賣り飛ばした。

「僕はこれきりですよ、が却つて樂な氣がしますね。」

實際、かれは着のままで、平氣で、そんな事にこだはらない風であつた。一日の暮しをささへるものがあれば、一日のうちにまるで生涯のいろいろなことを縮めて生活するといふふうであつた。かれはまだ十九歳であるが併し二十代の暮しも暮してゐるやうな顔つきをした。「病氣なんていふものも今では僕には趣味としか思へなくなりましたよ。こんなにいろいろな病氣がたかつてゐますとね。」かれは何日かかう言つて、わるい胃や心臓や鼻なぞを一切ひつくるめて、かれらしく弱々しく冷笑して見せた。「唯、可愛さうなのはこんな自分をささへてゐるいのちぐらゐなものです。」

「君には何を言つてもだめだから好きなやうにするといいが、困つたときは何時でも僕のところへ來ればいいぢやないか？知らない仲ぢやないしさ！」

わたしは武木がどうして困れば窮るほど來ないのか分らなかつた。呼びにいくとやつと來るくらいだつた。

「が、このごろ僕は困るほど行きにくくなつたんです。すこし幾干か、ほんの幾干かが懐中にあれば、それだけの元氣でお宅へ行けるんですが、何んにもなくて、その上食事の方ばかりの目的では、どうしても行けないんです。困るほどその感情が募るばかりなんです。」

「それは僕にも經驗がある、なるほど、君はいまそれをやつてゐるか？——。」

わたしは遠い或る心持ちを武木の言葉を通して、愕然として思ひ至つた。あの變な、絡みに絡んだ心もちは、もう、とつくにわたしの心から遠のいてゐた。貧するほど烈しくなる正義、それと戰つてゐる間にその正しさに乘り取られるほど、飢えてがつがつになる氣もち、なるほど、武木はいまそれを嘗めてゐるのか？わたしは初めて氣づいた。

「そんなときは思ひ切つてやつて來るさ、存外そんな氣もちは樂に取扱へるものなんだよ。」

「ですが僕はそれを感じると、どうも行けないんです。思ひ切つて行つてもその氣持をあなたに見透かされるのが、厭ではないのですが、つまりその、そのとき僕のかんじるセンチメンタルな氣もちがこまりものなんです。」

「だから平氣でくるさ、一人でゐてそんな事にくよくよしてゐるから、頭ばかり働くんだよ、最も胃袋のはたらきが君の説のやうに頭へ上つてしまふと言へばそれまでだが……。」

「はは……。」

かれはおかしさうに微笑つて、ときに親父から貰つた火鉢も賣つてしまつたと言つた。あんまり寒かつたがそんな事

を言つてゐられないんで賣りましたよ、「ことにあの火鉢はむかしから家にあつたので、いろいろな事を思ひ出して不快だつたものですから、ひと思ひにかたをつけたのです。」さう言つて冬がきてゐるのに、北窓に向つた部屋をべつに寒がりもしなかつた。

「冬さきに向つて詰らないことをしたものだね。」

「僕はすこしくらひ寒い方がいいんです。暑いとこいつがだるくなりましてね。」

武木はそのこいつと言つたときに、心臟のところを指差して厄介もののやうに鳥渡笑つて見せた。

「しかしこいつは冬になると普通わるくなると言ふぢやないか。」

「ところがですね。」

かれは病氣の話になると、いつもの異常な力をこめた言葉づかひになり、「冬になるとこいつが胸ん中にゐる姿が、(笑つちやいけませんよ、)何んだか非常に透明になつて見えてくるんです。どう言つたらいいかな、何かかう魚の浮袋みたいな奴に見えてくるんです。そして不思議に冬はそんなに惡くなることがありませんよ。だから夏よりは冬の方がしのぎよいんです。」

「かうして寒い晩なんぞ座つてゐると、こいつが透明に凍てあがつてゐるやうに眼に感じられてくるんですよ。だから何日かあなたをお呼びしたことがありましたね。あのときは最う全く駄目だと思つたくらゐでしたが、このごろではこいつの方で愛想を盡かして冬の方がいいらしいんです。」

武木は何日か酷く心臟をやられたときに、こんどはひよつとしたら危ないかも知れないから、ひまがあつたら是非來てくれ。それも暇が、なかつたらよいと書いてよこしたときに、かれは床の上に臥たきり、ここのところ（心臟）が重

くて仕方がないと言ひ、呼吸苦しげにしてゐた。そんな時の彼れはまるで少年そつくりであつたが、どうかすると堂々として喋り立てた。

「栗島さんですか、あれは半分頭がよくて半分わるいんですよ、そのよい方の半分で喋るときには議論もわかるが、れいの惡い方で喋るときは對手にわかりつこは無いんです。あの人はしよつ中何か考へてゐますが、あれはれいのものを半分づつ搗き交ぜてゐるので、本人にすら見當のつきかねることがあるんです。いい人はいい人ですね。暢氣さうで、そして決して他人を不愉快にする分子を持つてゐませんからね。」

それに不思議にあの人に、どんなに疲れてゐても、何か話し出すと元氣になるのは、默つて考へてゐることが彼の人に非常に有害なことを證明しますね、と言つた。

「栗島も君のことをかはり種と言つてゐたやうだよ、だがかはり種といふやつは每年種を採つて見てゐるうち、數年のうちにはただの種子になつてしまふことがあるさうだから……。」

「は！ははは……」

武木は微笑つた。「僕はまだ種子ぢやないんですよ、いはばまだ花にもならない方なんです。」

武木はきふに思ひついて興味さうに言つた。「變り種子で思ひ出しましたが、行平俊郎さんこそありや正しく變り種ですよ、全く、珍らしいくらゐです。」

「ふん、それは當つてゐるね、しかしあの變り種子は變色しないやうな氣がするぢやないか！——。」

「えゝ、あの人は變り種子の本元のやうです。どんなことがあつてもただの花にならないでせう。此間僕のところへ遣つて來て、このごろ或る雜誌を出すから何か書けと言つてくれましたから、原稿を渡したけれど雜誌がまだ出ないと

見え何とも言つて來ませんよ。」

貳木は初めつから的にならないやうな氣はしたが、あんまり元氣がよかつたからつい書いたんですが、そんな話を聞きませんかと言つた。いや聞かないといふと貳木はこのごろ原稿の行先きが落ちつかなくて困ると言つた。

「一體原稿といふものはむかしから流水のごときものだよ。けふは西、あすは東といふふうだからな。」

「さうですかね。」

わたしはわたし自身で言つたことが分らず、貳木もまた解りかねるやうな顏色をした。しかしその間に漠然と解つてゆく何かが釋明されてゐるやうな氣もした。それはわたし自身の傷のいたみでもあるやうだし、貳木の新しい日々のいたみでもあるやうでもあつた。取るに足らない雜誌の原稿のことまで、いまは貳木の心をひどく厭世的にならせたりする時代のやうに思はれた

だいぶ以前からゆり枝さんのお腹が大きくなつてゐることは、女の注意でそれとなく知つてゐたが、式を擧げたときは目に見えて大儀さうであつた。栗島の姉さんは皮肉つて、大きくなつてから式を擧げるのも變でございますが、ああいふ暢氣な人たちですから今となればその方が却つていい意味に取れて、つみのない笑草で、それも何も彼も引つ括るめておめでたうございますのね、と左う言つて下町の育ちらしくきれいに笑つて見せた。わたしは首俛いてそれが當節よくあることなんですとつイ笑つてしまつた。

會場へは栗島とゆり枝さんとが電車で、わたしと栗島の姉さんとが乘合自動車で、わたしの方が十分ばかり乘るのが

過れたが、高島屋の前のあたりでかれの電車とわたしの乗合とがすれすれに同じい馳驅をつづけてゐるうちに、吊革に右の手を提げてこち向きになつてゐる栗島の顏が、明るい街燈に映し出されてゐた、向ふでも此方に氣がついたのであらう、かれらしく、

「やあ、――。」

さう言つたらしく窓のところで手を振つて見せた。こちらでもお可笑しいやうな、また興味いことのやうに窓のところへ手を振つて見せた。なほよく見るとゆり枝らしい女のひとが、うしろ向きに直ぐ栗島の立つてゐる下の座席に坐つてゐるらしく見たえ。栗島が電車に乘つてゐますよ、ほら、こちら向いて手を振つてゐる……」さう姉さんに話してゐるうちに電車は停留場で停つた。その間に乘合はいままでの二倍くらゐの速力でずーつと拔いてしまつた。

「あの子も一しよのやうでございましたのね。」

「え、多分、よこに座つてゐたのがそのやうでした。」

會場へつくと栗島はひと足あとになり、大きな聲で笑つて、あの時はなぜかお可笑しかつたと言つた。にも拘はらずわたしは一瞬間かれが妙にさびしく引釣つたやうな曖昧な、極りわるげに微笑つたのを忘られなかつた。偶然ではあるが兩方の乘りもののすれ違つたこと、そしてあの時乘りものが同じくらゐの速力であつたために、却つて一點に停つてゐるやうに思はれたことも、なぜか頭に殘つた。

式の後に栗島はゆり枝と電車で歸ることになつたが、栗島は疲れた顏の中に妙なはぢらひを浮べてゐた。ゆり枝さんはいろいろどうもと言ふと、栗島よりもさきに電車に乘つた。――姉さんはすぐ下町へかへると言ひ、會場から俥に乘つた。

「母もこれで安心するだらうと思ひます。どうもおつかれさまでした。」

「いいえ、どうしまして！」

わたしは何日かの、ふくぶくした顔の栗島の母親を目にうかべた。

或る冬の朝、大がらな栗島のゆり枝さんが菜漬の大束をかんかんとした朝霜の井戸端で、きしきしいふのを桶の中へ撲ち込み、撲ち込みながら荒鹽をばら撒きにしてゐた。朝日の中のさういふ光景は勇敢でもあり壯麗でもあつた。なぜかと言へば、菜漬の菜の鮮綠の中に眞赤になつた大きな手が、朝日の光の中で笑つてゐるやうだつたからであつた。

「お早う、栗島君は？」

「お早うございます。栗島はいままでそこの垣のところにゐましたが……。」

わたしは振りかへつて見た。垣根がつづいて庭になつてゐる、その折戸のかげに揚子をくはへて栗島が立つてゐた。

「やあ——。」

「そんなところに居やうとは思はなかつたよ、すこしも此方から見えない。」

「ふふ！」

栗島は揚子をつかひながら含み聲で笑つた。ゆり枝さんはそんなところを振りかへりもしないで、菜漬をいそいでゐる。——となり家の屋根のトタンの筧へ霜とけが落ちては歇んで又聞えた。

座敷へはいるときふに明るくなつたことに氣がついたが、それは障子が新らしく張り換えられたからであつた。かれも一棹、わたしも一棹づつを月賦で買つた簞笥が白々と置かれてあつた。が、何か足りないものが感じられ、それが何であるか分らなかつた。

「篠原といふ女の人はあれから來るのかい。」

かう口に出して言つて見て、この人が座つてゐたのがゐないから物足りなく感じたのだと思つた。

「たまに來るよ。

栗島はまた少し遠くへ越したものだから來られないのだらうと言つた。「君の崇拜者か?。」といふと、「なあに、ひまがあつたり男の中へ這入ることが好きなやうなたちな人なんだよ。」と、その返辭はよく女を見てゐるとわたしに感じさせた。へいぜいのかれは何故かそんな事に氣附けてゐないやうな人がらであつた。

「結婚前になると、あゝいふ飛入がよくあるものだよ。」

「飛入か?——。」

栗島は笑つた。わたしはふと思ひついて言つた「しかし僕はあゝいふ男の中へ這入つて、そしてにこにこしてゐるやうな隙だらけの女といふものの氣質には、全く陶然としたやうな好ましさがあるやうな氣がするんだ。危險ではあるが……反對に美しい氣もするよ。」

「君の言ひさうなことだ。」

「それにだんだん來なくなるのが當り前なんだよ。」

「さう、そんな譯かな。」

栗島は微笑つてゆり枝さんが這入つたときに默つてしまつた。式を擧げてから後のゆり枝さんの顏に落着いた血色さへ上つて見え、道具の少數いこの家の、柱や押入れや、疊にまですつかり慣れて調和されてゐるやうに見えた。行平の言ひ分ではないがこれまでは借りもののやうに見えたといふのがすつかり本物になつて見えた。

或る朝の霜どけの日かげの温かくなつたところに、突然けたたましく門のところから馳け込んで眞青になつた栗島がいきなり玄關へ飛び上ると、つづけなりに白井君と左う叫んでわたしを呼んだ。わたしは狼狽て玄關の間へ飛び出した。

「出たよ、出たよ君！」

栗島は明らかに手と足とを震はせ、顔ぢゆうに泣くやうな微笑ひを泛べた。

「何が？――」

わたしは即座に直覺した。

「こんなに早いとは思はなかつたんだ。奥さんは！」

女も茶の間から飛び出した。「そして誰がとり上げなさいましたの。」

栗島はあはてて先刻の言葉を取消し、「いや、實はもう出かかつてゐるんだ。何しろ僕一人なもんだからどうしていいか分らず………」さう極りわるげに言つたが、女は多分さうだらうといふ顔をした。

「おむつだの、汚れものを拭くものがありますの。」

「いや何にも無いんです。」

「さう、ぢあ、わたしすぐ用意して参りますから。」

女は急にあはてて、「栗島さん！すぐ産婆を呼びに行つてゐらつしやい！すぐですよ。」

「何分たのみます、何しろ。」

栗島は又玄關へ飛び出した。そして「君も來てくれ。」さう言つた。行くよ、わたしはさう言つたものの、女が女中をつれて出て行つたあとから、のこのこと歩いた。何か騒しい中に一脈の淸冽な冷たさが頭をながれてゐた。女は女中に湯を沸かさせた。ぱちぱち燃える薪の音をききながらわたしは階段のところで、ゆり枝さんが陣痛の中にあることを知つた。そのくるしさうな聲が足もとをわなわなふるはせた。風のない晴れた日が窓のところにあつた。

「産婆は？」

栗島が這入てくると、わたしは昂奮したかれの顔をみながら病氣にならなければいいがといふ考をもつくらゐ、眞蒼な顔いろを見つめた。

「いま直ぐ來るさうだよ、どうも奥さん濟みません…………。」

かれは産室にゐて、女がゆり枝さんに、しつかり、しつかりと言つてゐるのを見て言つた。「ボロ切れを集めてをいて下さい。」女は栗島にさう言つた。

産婆が來てから、すぐ生れた。女の子であつた。

「女だよ、君。」

「さうか。」

わたしは栗島の額に汗とあぶらがにじんでゐるのを見た。なるほど、あれぢや二人して生んでゐるやうなものだ。みんなそんなものか知らと思つた。産婆がかへると赤子のこえが高々と泣き立つて、窓の朝日が玄關の間へ移つて來た。栗島はまだぼんやりと長火鉢の向ふに立つてゐた。

「おめでたうございます。」

「いや、どうも！」

栗島は女に頭を掻いて見せ、はじめて父親らしげな、すこし威儼のある微笑みを漏らした。こんな瞬間にそんなに人間の顏が豹變るものではない、が、しかし落着いた平らかな顏の中には悠然たるものが感じられた。

「僕は亡くしたが君のところの子がうまく育つといいね。」

「いや、君の細君が來てくれて全く助かつたよ

かれは額の汗とあぶらを拭いた。ゆり枝さんはすやすや睡つてゐるらしい。赤子もしばらくなく泣き歇んだ。栗島は氣がついて長火鉢のところに座ると、君も座りたまへと言つた。わたしは茫乎と立つてゐたらしいことに氣がついた。

「人間は實に大變なことを經驗するものだね。」

かれは、つくづく感心したやうに言ひ、一時はどうしたらいいかと思つたと言つた。

「もう見たのか？――」

「まだだよ。」

產室から產婆の助手が白い服のまま、襖から半分からだを現はして、この種の女によくある端嚴な顏つきをして、栗島を見て、ちよつと微笑ひながら

「どうぞお這入りくださいまし。」

さう言つて、また、忙しく姿を襖の中に消した。

「はあ、もういいんですか。」

栗島はわたしを顧みて君もどうかといふ顏をした。先づ君からの順序だからと言ふと栗島は產室へはひつて行つて、

すぐ五分も經たないうちに出て來た。

「まだ人間らしい形がついてゐるばかりだね。」

さう言ふとむんずりと默り込んで了つた。わたしも赤子をみると、栗島と對ひ合せにしぜん默つて座つた。こんなときに人間は別に言ふことが無いものらしい。――栗島は何か考へながら赤子が泣くたびに氣がかりらしく産室の方をふりかへつた。

「これからぼんやりしちや居られないな。」

栗島はふと思ひ出したやうにかう言つて

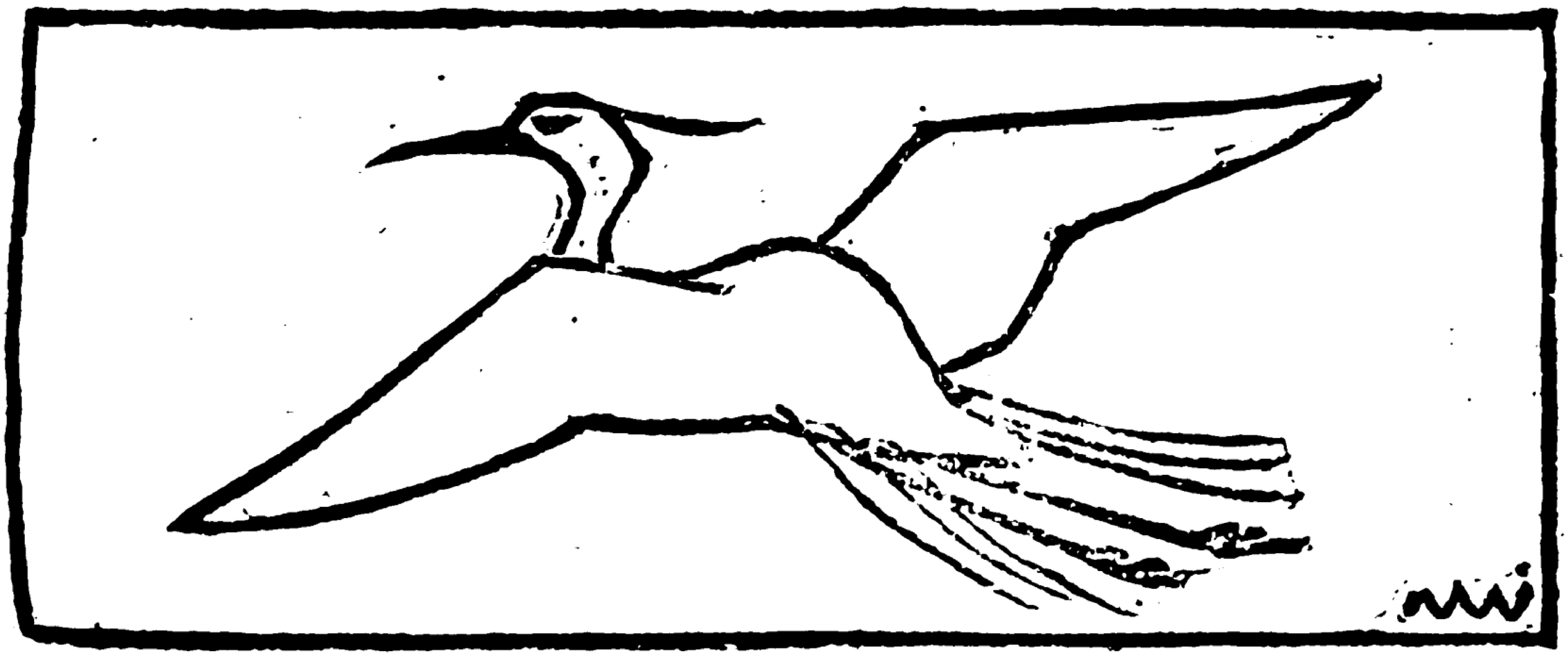
「何かかう忙しくなつたやうな氣がしてくるね」 先刻からの疲れをかんじ出したやうに、ははと笑つた。

「壓されてゐるやうだよ」

暫らくしてわたしは立ち上り、遲い朝日のちらつく通りへ出た。

「あとで又來よう。」

栗島はぜひ來てくれと云つて、通りに立ちながらぼんやりとわたしを見送つてゐた。振り顧るとかれはなほ無表情のまま、向ひ家の屋根の上を眺めこんでゐた……。



踏切番の幻影

小川未明

鐵道線路に交叉して、高架線に電車が走つてゐました。ちやうど、その下は、ガードになつて往來になつてゐます。ガードの積み上げられた煉瓦は、もう靑くなつて、雨に晒らされるところは、うす靑く苔ばんでゐました。その傍に、踏切の小舍があつて、番人がゐて汽車の通る時には、線路の兩側を塞いで、人間や、馬車の往來を杜絶したのでした。

このガードの傍の踏切番は、もう老人に近かつたのです。ぢつと、ものを見つめて考へ込むといふ癖がありました。それは、生れながらの癖ではなかつたやうです。これまでの經驗が、さうさせたのであります。彼は、かうして、何思ふともなく、一つのもの丶上に目を止めて居る時、過ぎ去つた日のいろ／＼の影が、もう一度その前を默つて、音もなく過ぎるのでした。彼は、それを見つめてゐたのでした。

小舍の中にかゝつてゐる、六角時計の秒を刻む音が、獨り靜寂を破つてゐました。それでも、彼は、一日の中に、幾たび小舍から外に出て、柵を閉ぢて、寒しい響きを

地面に打つて、黒い煙を吐きながら走つて行く汽車を見送つたでありませう。また、その合間には、馬車や、人間が、彼のぢつとしてゐる前を通るのでありました。

この附近に住む人々で、よくこの踏切を通つた者は、そのたびに、體の小さい老人がぢつと控へてゐるのを注意したものがありませう。そして、血色のよくない顔に、髭がのびて、むさくるしくなつて居り、苦勞を經て來た跡らしい小皺が、額際に細かく幾筋も寄つてゐるのに氣付いたでありませう。しかしこの孤獨な踏切番には、その人達は何の關係もなかつたのでした。

もはや、雨の降る日は、うす寒く、どこの眺めにも、秋の來たことが感ぜられたのでした。

鐵道線路は、東に向つて、限りなくつゞいてゐました。數丁離れて、停車場があります。そこの建物が、あたりに亂雜に建つてゐる柱や、電線などの間に、霞んでゐました。場末の工場の煙突から立上る、黒い煙は、空を濁してゐます。たへず、煙は、風の行く方になびいて、低く、消えてゐました。それから、またずつと、線路は、さびしい方に走つてゐました。林があり、森があり、その間を行く線路は、地平線に隱れてゐました。

踏切番は、停車場に停つてゐる汽車からさかんに、黒い煙を上げてゐるのを見る事がありました。またある時は、からんとして、停車場のあたりは、空虛に見え、その先へ續いてゐる線路の上へ、ころがるやうな秋の雲が、不思議な形をして、ちようど森の間に浮んでゐるのを眺めたこともあります。

ある日のこと、秋風が頻りに吹いてゐました。青い空は、澄み渡つてゐたけれど、なんとなく氣味惡く見える。その下には、停車場の屋根が光つてゐました。もう、森の梢は、幾分か、ところどころに色づいて、渡鳥が、群をなして、線路の上を、あちらへ飛んで行くのを眺めました。

「天氣が變るかな」

踏切番は、かういつて、また腰をかけて、ぢつとしてゐました。ガードの下を通る人の足も、荷馬車の轍の音も、いつになく急ぐやうに思はれました。

夕方になると、鉛色をした、鳥の巣のやうな雲が、遠くの線路の上を轉がつてゐました。そして、雨が、足許に横はつた、鼠色の土の面に、ぽつり、ぽつりと落ちて來ました。

彼は、この時、振向いて、柱にかゝつてゐる時計を見ました、かれこれ、今時分通る列車があつたからです。そして、また、兩手を膝の頭に組んで、カーヴを造つて、西の方へ走つてゐた、線路を越して、あちらの丘に、立つてゐる大きな木に、風が當つて、黄ばみかゝつた葉が、揉れにも揉れてゐる有様をぢつと眺めてゐますと、怪しな風をした男が、線路の傍を歩るいてゐるのを見付けました。

彼は、思はず立ち上つて、小舍の外へ出ました。もう、汽車の通る時刻ではあり、また迂散にも思つたから、

「あ、もし、もし、線路道を歩るいてはならない！」と、彼は、男の方を見て叫びました。

縁の廣い帽子を眼深に被つて、白の汚れたズボンを穿いた、脊のひよろ高い青年は、そのまゝ踏切番の立つてゐる方へは、歩るいて來ずに、そこから土手の上へ這ひ登つて、ガードの上の電車線へ出ると、木立の風に吹かれてゐる方へ立去つたのでありました。

踏切番は、仰ぐやうにして、しばらく、その行衛を見送つてゐましたが、また、小舍の中にはいりました。

小雨になつた夜は、暗く、そして、寒かつたのでした。日が暮れると、いつもはおそくまで、この踏切を通る馬車の音も早く絶えて、あたりが靜まつたのでありました。

まだ、最終の電車には、少し早かつたが、しきりに警笛を鳴らすので、踏切番は、耳を欹て、もう何時頃かと、頭の上の時計を見ようとした時に、走つて來た電車は奇妙なきしり音をたてゝすぐ間近かのところで止つた様子でした。

「誰か轢いたな？」

彼は、瞬間にかう思ひました。同時に外へ出て見ると、ちやうど、ガードの上のあたりへ、大きな爬物のやうに感じた、電車が止まつて、人のわめき聲が耳にはいり、驅ける靴の音などがきかれたのでした。雨は小降になつて、風は、いつしか熄んでゐたけれど、空は依然として、眞暗でした。

たしかに、人間が轢れたのでした。

踏切番は、小舎の中にはいりました。そして、先づ、この事件が、自分の受持範圍でなかつたのを喜びました。たとへ目と鼻の先であつても、線路が異つてゐたからです。彼は、さう思ふと、ほつとしました。電車は、約十五分間も停車して居ましたが、やがて、笛の音がして、つゞいて、車輪の響きを闇に傳へて通過する氣はいがしたのであります。檢死のすむまで、多分死骸は、そこに殘されてあつたでせう……それとも、重傷であつて、そのまゝ電車に乘せて、運び去つたものか……いろ／＼に、踏切番は、考へてゐました。シカシ、何か知らず、電車は去つてしまつて、あたりは、全く、靜寂になつてしまつたけれど、なんだか、黑い塊りのやうなものが、頭の上のあたりにぶら下つてゐるやうな氣がして、彼は、魘されるのでした。そして、夜の明けるのが、待たれたのでした。昨夜は、お前の番だつたが、上の電車で、人の轢かれたのを知らなかつたかい？」

彼は同僚から、かう言つて、たづねられた時に、ちやうど、その時は、雨が降つてゐて、空は、暗かつたことなどを答へました。

「お前、ガードに、血がべつたりだな」

から、注意されて、彼は、眼を擦りながら小舎から、十歩とは離れてゐない、ガードの下まで行つて見ると、内側へ、上から流れた赤黒い血の痕が、地圖のやうに煉瓦を染めて滴つてゐるのでした。

「やはり、死んだんだな」

彼は、その時、さう思いました。

附近に、小さな町があつたが、そこの人々がやつて來ました。まだ、轢死者が線路の上にでもころがつてゐるとでも思つて、それを見ようとしたのであります。けれど、彼等は、それを見ないで、生々しい、血が、ガードの煉瓦を染めてゐるのだけを見たばかりでした。

「人間の血といふものは、いつたいどればかしあるもんだらうな」

遠くから、彼等の一人が、ガードをながめながら言いました。

「あればかりぢやないだらう」

「いや、あんなもんだ」

「線路の上に流れて、砂の中に浸み込んでしまつたんだらう……」

「昨夜は、可なりひどい降りだつたな」

彼等は、しばらく立つて、話をしてゐました。そのうちに、ガードに、轢死者の血が附いてゐるといふことが、あたりの噂になると、こんどは、その血をば、誰でも、心には、うす氣味惡いとは思ひながら、やはり、怖しいもの見たさに、女や、子供等までが、踏切の近くまでやつて來たのでした。

たとい、このあたりが、かうしたことで、さはめいても、踏切番の、昨日と今日の生活に異りがありませんでした。汽車の通るたびに、彼は、踏切を塞いで、旗を持つて立つてゐました。そして、汽車が過ぎてしまふと、小舍の中へはいつて、ぢつと目を一處に落して、何をか、たよりない、はかない、目の前を過ぎる幻影を見てでもゐるやうに思はれたのであります。

彼は、かうして、ゐるうちに、町の人々が立話をしてゐるのを耳に入れるともなく、聞いてゐました。

「なんでも、白いズボンを穿いた、背の高い男だといひますから、その男です。二三日前に、角の八百屋さんへはいつて、腹が空いて歩けないから、飯を食はしてくれろと言つたのです。それで、むすびをこさいてやると、食べて出て行つたといひます」

「ぢや、二三日前から、このあたりをうろついてゐたんだね？」

「昨日は、荒物屋さんへ入つて來て、三拾錢ばかり借してくれろといつたさうです。白いズボンを穿いてゐたといひますから、八百屋さんへ行つた男と同じですとも。荒物屋さんでは斷つたさうです。それに、この頃は物騷なもんですから、注意してもらひたいと、交番へ、荒物屋さんでは、屆け出たといつてゐました。子供達は、昨夕、同じ白ズボンを穿いた男が雨の降る中をうろ〳〵してゐたのを見たといひますから、きつと、食ふに困つて、自殺をしたのでせう」

「なんで、このあたりにばかし、うろ〳〵してゐたものでせうか？」

「ほんたうですね。乞食したつて、食へないことはないんですから、もつと田舍の方へでも行つたらよさゝうなものに、誰が、あなたさうたび〳〵金をくれたり、飯をくれたりするもんですか。二度姿を見たゞけで、氣持を惡くしてしまひますよ……」

「やはり、顔馴染のところがいゝと見えて、このあたりから離れなかつたのでせう」

「自殺ですね?」

「さうとしか思へませんね」

「しかし、このガードの上を歩るいてゐる時分に、電車がやつて來たんでないでせうか」

「夜中時分まで、こんなところをうろついてゐる筈がないぢやありませんか」

「自殺なら、もつと場處を撰びさうなものだ」

「いや、自殺でせうよ」

踏切番は、默つて、其等の男女の話をきいてゐました。彼の目には、雨を含んだ風が、あちらの立木に當つて、その葉を揉みにもんでゐた、昨日の晩方の景色を浮べました。いまも、その木立は、見えます。一夜の雨と風の戰ひに傷んでか、一層、黄色がかつたやうに思はれました。

彼は、あの時、線路を歩るいて來る白ズボンの男を見付けたのです。そして、その男を叱つたのです。すると、男は、土手を這ひ登つて、ガードの上の電車路に出て、あちらの方へ行つた、うしろ姿を見送つたのでした。

自殺したのは、その青年らしいのでした。その男の血が、いまガードの煉瓦を醜く染めてゐるのです。

「あの時、俺が叱らなかつたら、この鐵道線路で自殺をしたのかも知れない」

彼は、ぢつと、目を一處に据えて、さう思ひました。

町の人々は、いつしか散つたのです。そして、もはや、わざわざこのガードの血を見に來る者もなくなつてしまひました。やがて、その日も、灰色に暮れてしまつたのです。

あくる日も、秋の雲は、線路の上に、ころがつてゐるやうに、森と森との間に浮んで見えました。青空の下に、複雑した遠くの建物や、電柱などが霞んで見えてゐます。踏切番は、血色のよくない顔をして、ずつと一處を見つめて、何か考へてゐるやうでありました。

荷馬車は、ガードの下を通ります。けれどそこに、煉瓦を染めた、生々しい血に氣が付いてか、また付かんでか、馬引は、平氣で知らない顔をして過ぎるのもその中には、ありました。しかし、また、飛び上りさうに驚いて、驅け出して行く女もありました。

踏切番は、二三日來、通る人數が、少なくなつたやうな氣もしたのでした。彼は、それを、自分の氣のせいでないかとも思ひました。なぜなら、朝、晩、この道を通らなければならぬものが、この血のために、他の道へまはるといふことは、このあたりは不便であつて、ちよつと考へられないことでありました。

煉瓦についた血の色は、だん／＼黒く、變つて來ました。

踏切番は、それを見まいとしながら、小舍から出て、汽車を見送るたびに、目をぢつと、それに落しました。そして、小舍に、はいつてから考へ込むのでした。

自殺者があつてから、四日目頃のことです。青年が、ステツキを振りまはしながら、踏切を過ぎる時分に、

「いつまで、流れた血をあゝして置くのだ。怪しからんぢやないか？」

青年は、獨りで憤慨をしたといふよりは、踏切番に、聞えよがしに言つたことは明かなのでした。

踏切番は、ぢつと、目を外に向けて默つてゐました。青年の言つたことに對して、別に腹も立てませんでしたが、心のうちで、俺の知つたことかと、答へたのです。

少し、日が、うす暗くなつた時分でした。女が通りかゝりに、

「まあ、氣味の惡いこと、早く、洗つてしまへばいゝのに、まだ、あのまゝにしてあるのだこと……」と、言ひながら行きました。

踏切番は、氣にしてゐる者が、澤山あることを感じたのでした。彼の仲間も、きつと聞いたにちがひないが、このことについて、まだ話をする機會がありませんでした。なぜなら、自分の休みの日は、休むといふことで、頭の中がいつぱいでしたから。

彼は、前を通る人々が、「まだ、血があのまゝになつてゐる……」と、言つて、血痕について話をしながら自分の方を振向くのを見た時に、なんとなく自分に對して、非難を浴びせて行くやうに思ひました。彼は、それを頗る不當のことだと思つたのです。

ある朝のこと、役所へ勤める人らしいのが二人連れで、やはり通る時に、

「なんだか、いやな氣がするものですから、二三日遠まはりをして、あちらの道を行きましたが、あまり遠いので……」

かう言つたのをきゝました。顏の青白い踏切番は、あの日以來、大分人通りが少なくなつたと思つたのは、自分の氣のせいではなかつた。やはりさうであつたのをはじめて知つたのであります。

晩方の、貨車が過ぎた後でした。

昨日の夕方ステツキを振りまはしながら通つた。同じ青年が——多分、學生であるらしいのが——この日も、ステツキで、地面を叩きながら、前を行く時に、

「新聞に投書してやつたんだが、まだ出ない。かうして、いつまでも、往來を汚して置くのは、人道問題だ。それにし

ても、よく平氣な顔をして、睨めくらをしてゐられるもんだな！」と、大きな聲で言ひました。

踏切番は、彼れ自身のちつと、目を何かに据える平常の癖を知つてゐます。そして、この惡罵は、自分に向つて、浴びせられたのだと思ひました。彼は、また、かう思ひました。——自分が、それを鐵道省にでも知らせずにゐるので、まだ、手を付けずにゐる、………さうとでも、人々は、考へてゐるのだらう。しかし、それは、間違つたことだ——

彼は、この青年が、面と自分に向つて、言つたのなら、よく、その理由を聞かしてやらうのにと思ひました。彼は、この前の時とちがつて、多少腹が立ちましたが、青年が、すでに、線路のあちらへ去つてしまつたので、默つてゐました。

その翌日のことでした。洋服を着た、一人の紳士が、踏切番のゐる傍まで近寄つて來ました。

「あの血は、もう幾日かになりますが、どうして片附けないんですか」と、紳士は、言葉を丁寧にして、踏切番にたづねました。

踏切番は、起ち上つて、小舍を出て、仔細に、紳士の樣子をながめながら、

「管轄がちがひますんです」と、簡短に答へて、彼は、また紳士を見ました。あなた方までが、そんなことを、俺に向つてたづねるのかと、いはぬばかりに、紳士を見る彼の眼は、光つたのです。

紳士は成程と言つたやうに、うなづきました。

「さうだ。高架線は、電車ですものね。鐵道省と關係がない筈だ。それをこゝの踏切に聞くのは、聞く方が、間違つてゐますな。しかし、みんなはこの踏切で、轢かれたとばかり、思ひちがいをしてゐるんですな。して見ると、電車會社では、このガードについてゐる血を知らないのかも知れませんね………」

紳士は、ガードの方に眼をやりながら、その筈だといはぬばかりに、うなづきました。

「いや、知らぬこともありますまい」

踏切番は、答へました。二三日來、こゝを通る人々が、さながら自分達の怠慢から、いつまでも血痕をからして置くといはぬばかりに、罵つて行くのをきいて、迷惑に感じたから、監督が巡視した際にそのことを告げたのである。監督は、早速、電話を會社の方へかけて、知らしてやると言つたのが、耳に殘つてゐたからであります。

「知つてゐて、いつまでも構はずに置くといふのは、ひどいな……」と紳士は、獨り言のやうに言つて、頭を傾けて立去りました。

夏の季節のやうに、終日、穩かな日であるといふ日はなくなりました。午前、靜かであつたものが、午後からは、風が出て、乾いた地面に埃を捲き、木々の色ばんだ葉を振ひ落したのです。あちらの丘に立つてゐる大きな木の葉は、二三日前見たときよりは、一層色づいてゐました。そして、枝と枝の間が透いて、だん〳〵とさびしくなつて行くのでした。

踏切番は、膝頭に手を組んで、青い顔をして、一處を見つめてゐました。誰も、彼が、頭の中でどんなことを考へてゐるか、それについて知るものはありません。

彼は、思ひ出したやうに、小舍から外へ出ました。そして、ガードの煉瓦についた、黑くなつた血の痕をぢつと、いつまでも立つて見つめてゐました。彼は、また、頭を傾けて小舍の中にはいつて腰掛けて、前のやうに、膝頭に兩手を組んで、ぢつと空間の一處を見つめてゐたのです。

彼の二つの眼は、いつもひかつてゐました。この二つの眼だけが生きてゐて、ぢつとして動かない、死んだやうな體

から自由に遊離して、不可解な、夢幻の域を漂つてゐるやうにすら、見られたのでした。そして、彼は、冷かに笑ひました。しかし、この冷酷さうに見えた微笑も、彼自からは、意識しなかつたことかも知れません。自分で、自身の残忍な表情を知るものは、恐らく、この世界の何人にもないからです。

晴れた日の朝のことでした。紺サージの上衣を着て、汚れた麥藁帽子を被つた男が、一人の立ん坊のやうな男をつれて、踏切番の小舍の前にやつて來ました。

「轢かれたのは、このあたりだ」と、會社の社員らしいのが言ひました。

踏切番は、いよ／＼ガードの血を洗ひに來たなと思ひました。

彼は小舍から出て、

「こちらの責任でもないのを、通行人が、この前を通ると、怠慢だといつて、惡口言つて行くので、それが一人や、二人でないので弱はらせられた。どうして、こんなに遅くなつたのです」

踏切番は會社の男に向つて言ひました。

「夜間で、こゝへ血が垂れたと、氣付かなかつたんですね。それに、やつと、昨夜聞いたんです……梯子がなくは、手がとゞかないだらう」

會社員は、立ん坊の方を見ながら言ひました。

立ん坊のやうな男は、默つて、ガードに近づきながら、仰いで線路の枕木を染めて、其處から滴つた血痕を凝視してゐましたが、急に、身振ひするやうに、首を縮めてあちらへ歩るき出しました。

「オイ、どこへ行くんだ」と、社員は、呼びかけた。

「梯子が、あるか見て來ます……」

立ん坊は、うしろを向けて、バケツに、箒を道端に投げ出して、そのまゝ後も振向かずに、あちらへ行つてしまひました。

「梯子なら、そつちへ行つたつてありやしない。線路のあちらへ行かなければ、家がないのだ……」と、踏切番は、言ひました。

「オーイ、どこへ行くんだ」

社員は、呼びとめようとしたけれど、立ん坊風の男は、つひに行つてしまひました。

「逃げやがつたな」

社員は、いま／＼しさうに言ひました。太陽は、あちらの森に、きら／＼と輝いてゐます。もはや、蟬の聲もきこえなかつたけれど、薬風の光りに、一時の過ぎ去つた夏の日をば思ひ出させるのでした。

ちやうど、其處へ六十ばかりの婆さんが、通りかゝりました。

「まだ、煉瓦に、血が、そのまゝになつてゐますね。拭いてやる人は、ないんですかね」

から老婆は、言ひました。彼女は、頭の髮こそ半分白くなつてゐたが、草履をはいて、短かい筒袖にした、仕事着を被て、手甲をはめてゐました。墓地の掃除人であつたのです。

「お婆さん、誰か、あの血を洗つてくれる人はないかね。いま、つれて來たのが、逃げてしまつたんだ」と、會社の者は、言ひました。

「さうですね……」

老婆は、口ごもつて、ちつとガードの方を見てゐました。

「私は、この間から、こゝを通るたびに、誰か拭いてやる人はないもんかと思つてゐやした……さう、言つて、悧みなさるなら、私が拭いてあげやしよう」と、老婆は、答へたのでした。

會社員も、踏切番も、ちよつと意外な感に打たれました。

「お婆さん、お前さんが拭いてくれるかね？」

「はあ、拭いてあげやしよう」

若い社員は、反身になつて、あきれたといはぬばかりに、老婆の顔を見てゐましたが、

「それで……お婆さん、會社から、壹圓五十錢のきめなのだがね。それで、よかつたらおたのみします。梯子がなくちや、手がとゞかないだらう」

背の低い老婆は、二人の傍に立つてゐました。

「お金なんか……いくらでも、よろしうございます。ぢや、梯子を借りてきますから」

老婆は、あちらへ行きました。

「あ、もし、もし……」と、言つて、社員は老婆を呼びとめました。

「お婆さんの家は、この近くなんかね」

二人から、大分離れてゐた老婆は、

「家は、遠方ですが、私は、毎日、すぐこの近くの墓地へ來てゐますんで、こゝを往きかへりに通るので、こゝの踏切の番人さんの顔をよく知つてゐます」と、言ひました。

男は、これを聞くと、聲を出して笑つた。

踏切番は、地面を見つめながら、あつちへ行つたり、こつちへ來たりして、自分は、誰の顔も覺えてゐないのに、いくたりも他人が、自分の顔を知つてゐることに、妙な感じがしたのでした。

老婆は、見えなくなりました。

「やはり、女といふものは、涙もろいんだな」

と、社員は、獨言のやうに言ひました。

「自分で死ぬのは勝手だが、みんなにかうして大騷ぎさせるんぢや、關係のない者が、迷惑だ……こちらは、どんな顔の男か知りやしない」

男は、しやがんで、上衣のポケツトから、マツチと煙草をとり出して、火をつけて吸ひはじめました

踏切番は、あの雨催ひの日に、線路道を歩るいてゐた、青年の姿を思ひ出しました。あの若者は、この世界に、もう生きてゐない。さう考へると、死といふ事實は、それが、誰の死であつても、苟くも人間の死である限りは、この社員の言ふ如く、簡單に、取片附けられるべき問題でないやうな氣がして、何とも言へずに、小舍の中へはいつたり、また出たりしてゐました。

汽笛が、停車場の方にきこえました。彼は踏切を塞いで、通行を遮斷しました。間もなく、鈍色で、煤けた貨車のつながりが、そこを通過したのでありました。彼の旗を持つてゐる腕は、上下に、活動するのでありました。彼は、それには、慣れてゐます、そんなことは氣になりませんでした。そして、共等の貨車を見送ると、その一つに、牛が三頭ばかり繋がれて、一頭が、眠むさうな目付で、頭を扉の隙間からあらはして、外の移り變る景色を無心に眺めてゐたの

を見たのです。

貨車が、通り過ぎてしまつてからも、彼の眼には、牛の頭が映つてゐました。柵を開くと、待つてゐた人と車とが、がや／＼といつて、前を、通つて行つたのです。

「あ、梯子を持つて來たな」

老婆が、あちらから、梯子を抱へるやうにして引摺つて來ました。

「婆さん、どこから借りて來たか……」

社員は笑つてゐました。

老婆は、バケツに水を汲んで來たり、梯子をガードに懸けたりしました。ガードの下を通る人は、急ぎ足に過ぎました。

「婆さん、なるたけ奇麗に洗つて下さいね」

社員は、注意しました。そして、何か用事があつてか、それとも、仕事の終る頃までの時間を見はからつて、そこらをぶらつくつもりか、あちらへ歩るいて行きました。

しばらくすると、老婆は、バケツに水を汲むために、踏切番のゐる前を通りました。

「お婆さん、血が落ちるかね。男共が氣味惡がつてゐるものを、よくやつたもんだ」と、踏切番は、言ひました。

老婆は、立止つて、はじめて、相手の顔をしみ／＼と眺めたのです。

「氣味の惡くないものが、お前さんありますかね。私は、二人男の子を持つてゐましたが、二人とも亡くしやした。上のは、來年になつたら嫁を取らうといふ間際を、病氣で死んでしまひやした。弟の方は、旅へ出てゐて、やはり、あち

らで病みやしたが、遠方で、見舞ひに行くことも出來ぬうちに、死んでしやいやした。それからといふもの、私は、たんでかうして生きるのか、自分でさへ分らないのです。

こゝで、若い男の人が、飛び込んで轢かれたときゝやした時に、その人にも、親や、兄弟があるのだらうと思ひやした。このことを聞いたら、どんなに歎きなさるか。知らずにゐなさるなら、こんな不憫のことはないと思ひやして、何日かも、何日かも、かうして、血が洗はずにゐるのを見ますと、死んだ人が、浮ばれないと思ひやして、誰の子供も同じだといふ氣がしまして、自分の子供も、旅で人様の世話になつて死んだのだと思ひやして、血を洗つてあげる氣になつたのです………」

老婆は、かう述懐いたしました。

「成程…… ……」

無口の踏切番は、たゞかう言つて、青い顔をして、老婆の言つたことを聞いてから、手持ち無沙汰に體を動かしたのでした。

老婆は、去つてしまつた。

踏切番は、老婆の言つたことに、ひどく體を撲られたやうな氣がしました。毎日、こゝにかうして、生々しい血痕を目の前に見てゐながら、老婆の言つたやうな同情心が、自分の心に湧かなかつたといふこと………老婆の言つたことが、自分に對する皮肉のやうにすら聞かれたからです。

彼は、少なくも、この老婆の目に、自分が冷酷に映つたといふことを意識しました。そして、彼は、多少うろたひ氣味で、老婆が目の前を去つてからも、しばらく落付かない足どりで、あたりを歩るきはじめたのでした。」

あちらでは、老婆は、ガードの血を洗つてゐます。會社の男は、まだ戻つて來ませんでした。

踏切番は、小舍の中にはいつて、腰をかけました。そして、ぢつと、眼を一處に落して、あの青年が、こゝで自殺をした日から、自分の胸の中に、蘇生つた――いまだ曾て、誰にも語らなかつた――幻想を、二たびぢつと見つめたのでした。

――この踏切番に、一人の伜がありました。戰爭の時、召集されて行つたのです。それきり、伜は、二たびその村に歸つては來ませんでした。彼は、伜があんなに見送られて、村を出て行つた時の光景を思ひ出してゐました。村に、霙が降つた頃です。もはや木々の葉は色づいて、大抵は、地面に落ちつくしました。霙といつしよに、戰死の知らせは、彼にとゞいたのでした。

村の人々は口々に名譽の戰死だ！と言ひました。そして、中には、無名の村か、一人の戰死者によつて、あたりに輝いたといつて喜んだものもおります。しかし、父親の彼は、伜に死なれて、全く孤獨となりました。妻は、ずつと以前に世を去つてしまつたからです。彼は、あてもなく、道の上を俯向ながら、ふら／＼と歩るいては、ぼんやり考へるやうになりました　それから、間もなく、彼は、その村から出てしまつたのでした………

ガードに、滴つた血をぢつと見つめながら、彼は、思つたのでした。

「伜の體から流れた熱い血は、やはり、あたりの草を染めたらう。乾いた土に浸み込んで行つたらう。苦しさのために叫んだにちがひない。けれど、誰も、伜を顧みてくれる者がなかつた　あちらでも、こちらでも、苦しんで、叫ぶのだから……そして、その體の上を踏んだり、また、蹴つたりしてみんなが行つたにちがひない。伜は、燒けつくやうに咽喉は渇いてゐても……水をくれる者がなかつた。そして、死骸は、幾日もそのまゝになつてゐた？血は流れたまゝ

になつてゐた？……」

彼は、その戰場の光景を眼に描いたのです。幾年も前に、空想し、想像した、同じ苦惱が血を見ると、一たび、彼の眼に蘇返つて映つたのでした。彼は、それを見つめたのです……

彼は、自分の忰のことを思つて、あすこで自殺をした、青年について、あまり思はなかつたことが、なんとなく年中妻もないやうな、また、無慈悲であつたやうに思はれて、自分とは、全く異つた考へから、ガードの血を洗つてゐる老婆に對して、顏を合はせるのが、何となく氣恥かしく感じられたのでした。

汽車が來た時に、彼は、小舍から出て、旗を持つて立つてゐました。

線路の上を高く、秋の雲は飛翔しました。あちらの丘の大きな木の葉は、日毎に色づいては散つて、枝と枝の間が透いて見えました。踏切番は、腰をかけてぢつと一處を見つめてゐることに變りがなかつた。

たゞガードの血が、洗ひ落されると、もはや、こゝに來て、それについて話をしたり、罵つて行く者がなくなりました。そして、すべてが以前の如く、また踏切番の存在も忘れられて行つたのであります。

――一九二四、九作――



喜多川歌麿（一幕）

大森眠歩

寛政二庚戌秋――申刻前後。

江戸、通油町――蔦唐丸宅。

喜多川歌麿（浮世繪師）

おりん（同、妻）

蔦屋重三郎（版元）

おすわ（同、妻）

東洲齋寫樂（浮世繪師）

お卷（女中）

前面、庭――下手寄り枝折戸、

庭の葉越しに見える、茶の間。

女ふたり。

幕あく。

おすわ。いつのまにやんだかとおもふと、いつのまにか降つてくるし、……（欝陶しい容子。イキな洗ひ髪の櫛巻姿）

お　卷。（ようすをしながら、喫茶）

おすは。時雨蛤は美味しいかい。（菓子鉢を見る）

お　卷。！　あんまりお話が面白くて、うつかりしちまひました。」

おすわ。？

お　卷。ちよいと煮物を見てまゐります。（退場）

おすわ。（長火鉢へ、しなりよる）

間

歌　麿。（正面下手寄りの襖より、登場）

おすわ。オヤ、しばらく。

歌　麿。……。（親指を示し）不在？——寫樂も居ないやうだし。？

おすわ。珍らしくないとは云ひながら、寫樂さんの變屈には呆れぢやありませんか。阿波様のお邸からお使が見えたのですよ。八丁堀のね。『寫樂に一獻遣はし度いから、召し伴れて参るように』といふのさ。お咎めを受けたといふわけではなし、厭なら厭とはつきりお断り申したがいいに、……妙なひとツてありやしない。

歌　麿。して？

おすわ。わたしが挨拶してゐる間に、プイと裏口から行衛も何も、かいもく分らないのさ。

歌麿。？

おすわ。仕様ことなしに、良人(うち)がひとり、お邸へあやまりに行つたわね！

歌麿。（興味もなく、妙に落ちつかない容子）

おすわ。お茶がはいつたところへ阿波様のお使ひが見えたものですから、此のまんまになつてゐるんですよ。みんなは居ないし、何かしてみたい氣もないし。（間）半月以上も空けるなんて、おまへさんも凄い腕になつたね。うちへ、寄つて來ましたかえ？

歌麿。女房の顏は、木で拵へた假面(めん)のやうにしか見えやァしない。

おすわ。一ト喧嘩して來たんですね。

歌麿。かたい假面が相手ときては、喧嘩する氣にもなれやァしません。

おすわ。とにかく、寄つては來たんでしよ？

歌麿。大丸新道の角を曲つて行くと、もう家(うち)の悶い氣持ちが、くツくと迫つて來るんですからね。たまつたもんぢやァないんです。――格子を開ける。わつしが怎麼氣持ちをして歸つて來たか、女房にはテンカラ解つちやゐないし、急ぎの仕事に繪の具を溶いてゐたつて、お茶一ぱい持つて來るぢやァなし、――半ときも經(た)つてわつしが呼ぶと、おいらんの聲色(こわいろ)をつかつて返辭をしたり、イヤミを言つたり、……我慢にも何も……はやい話が、逃げて來たやうな始末なんです。斯う、三十八にもなつてる大の男が、……褒められた格好ぢやァありませんワな。

おすわ。（歌麿の容子を見守つてゐる）

歌麿。今……、お卷どんに頼んで置きましたがネ、是れ（小指）がやつて來ても、わつしは居ない事にしといてすひませう。

おすわ。（戲れなひとり言のやうに）遊蕩兒（だうらくもの）の女房には、なるもんぢやァないねえ。（笑み、消える）履物を、隱しておかないと、……？

歌麿。お卷どんの氣が利いてるには、イヤ、氣の早いにはスツカリ感心しちまいましたよ。

おすわ。――

お卷。（小皿を持つて登場。おすわに）もう少しお醬油（したぢ）を入れませうか？

おすわ。（味加減をみる）……此のくらゐが恰度！

お卷。（立ちしなに歌麿の方を、チラリ、にらむ）――

歌麿。好いおむこさんを世話しようかね、？

お卷。お嫁に行くなんてイヤなこと。」

歌麿。さては、………（微笑）

お卷。（退場）

歌麿。（座蒲團を枕に、位置よきところへ横になる）――

おすわ。（自分のあかい枕と搔卷を出して來て、歌麿にし換へさし、長火鉢の前へ戻り、長煙管をもち――――ふさぎ込む）

近處に常磐津の稽古所があるらしく。秋の氣を透して微かにきこえてゐる。――

間

お　卷。（登場、おすわに）アノ、新道のお内から。お内儀さんにチヨイトお目にかゝりたいと仰言つて、……

おすわ。（歌麿を忍び起こし、隠れ場へ促す）

歌　麿。（上手へ退場）

お　卷。（退場）

おすわ。（正面へ退場）

舞臺。無人。

間

おすわ。（登場）

おりん。（登場）

おすわ。（おもはし氣に茶の支度等）―

おりん。（俯向きがち）

間

おすわ。斯ふ言つてはお前さんのお氣に入らないかもわかりませんが。……なんぞ。あの人に障るやうなお話でもありありましたのですか？

りん。わたくしとして何も。別にさからろやうな口はきなかつたのですが。……或ひは。昔の事を言はれたのが、それが、癇に觸れたやうにも推れましたけれども。

おすわ。　よもや、あの——初戀の……お千代(ちよ)さんのお話ではないでせうねえ？

おりん。　ホンノ、わづかに……

おすわ。　（口を締める）

おりん。　不斷からわたくしも、自分の胸によくいましめては居りましたのです。——なのに、『明けても暮れても、女房の顔は一つしかない』恁麼ことと言はれましたのが、わたくし、考へれば考へるほど口惜くつて、その言ひツ振りがあんまりなんですもの、……つイ。

おすわ。　おまへさんは、怎ういふ言ひかたをなすつて？

おりん。　以前に、寫樂さんから言はれました通りのことを、……ホンノ一と言、『初戀の娘の顔よりほかに描けない繪師』と言つてやりましたら、あのひと、もう何も口をきかなくなつてしまひまして、それツきり、……

お　卷。　（登場。おすわに）　髮結ひさん手がすきましたさうです。

おすわ。　そ?!（躊躇）

おりん。　どうぞ。……わたくしにおかまいなく。

おすわ。　（考へ。お卷に）　ぢや、ご免被つて、——直ぐに上りますからよろしくつてね。

お　卷。　（退場）

おすわ。　（身じまひ、おりんに挨拶……退場）

おりん、一人。

間

雨……………………

有るか無い風氣――庭の點滴り……

お　卷。（登場）あの、まことに濟みませんが、髪結ひさんへ傘を置いてまいりますから、恐れ入りますが、ちよいとお留守居をお賴まうします。

おりん。（會釋しながら頷く）

お　卷。（退場）

おりん。（孤獨――襦袢の紅い袖口を……つまぐ）

雨、しきり…………

間

東洲齋寫樂、年格好三十五六、『すみよし』と書いた番傘阿彌陀に片裾からげ、下手より登場。下駄（右足）の横緒が切れてゐる。庭の枝折戸を開けて入り、緣側に腰下す。

寫　樂。（おりんの姿を見て見ない振り、奥へ聲かける）お卷どん、……お卷どんは居ないかい、？

おりん。（氣まづい容子）今ちよいと、………（そより立ち、躊躇）

寫　樂。近頃あんたは、ちよい〳〵此家へ來なさる樣だが、私の食客姿を眺めるたんびに、好い氣持ちがしますかね？

おりん。（悲しい當惑）

寫　樂。喜多川歌麿は怜悧な男ですワな。仕事つ振りといひ、遊びつ振りといひ、蕩らしつぷりといひ、申し分のない男ですね。まア、せいぜい大切にしておやんなさるがいい。

おりん。けふ此頃のわたしが、怎麼に切ない思ひをしてゐるか、お前はよう知つてゐるに、ナンボなんでも、……その憎たれ口、――

寫樂。おりんさん、否、喜多川のお内儀さん、あんたは既う、繪の具問屋の娘さんとアちがふんですぜ。――だが、好い女房つ振りになりましたねえ。

おりん。(寫樂の身近くに、すり寄り……顏そむける)

寫樂。(おりんの頭に光つてゐるヒラ打ち(銀の簪)を、閃光的に拔取る)

おりん。(吃驚)……!

寫樂。(簪を見ながら、ひとりごと)――富士の山形に蔦の紋か!

おりん。(哀求)……? 勘忍して!? ?……

寫樂。(ヒラ打ちを放り置き) おほかた御亭主さんのお仕込みだらうが、――おりんさん、あんたは利口にお成りなすつたよ。

おりん。――……

間

寫樂。(泣き慄へてゐるおりんの姿を傍目に、よごれた素足、着物などを拭いたりしてゐる)

おりん。(氣を取り直し、寫樂の身邊にまつはる) まア此麼に、着物へまでも泥が付いて、……

寫樂。私のからだへは、觸らないで貰ひませう。――此家のお内儀さんは、何處ぞへ行きましたかえ?

おりん。其麼によそよそしい……他人行儀な言葉づかひをして、たんとお賜りなさるがいい。……

蔦樂。(よごれてゐる着物を脫いで緣側へ置き、呼ぶ) お卷どん。

お卷。(登場) いまお歸り？

蔦樂。先刻から呼んでゐるのに、……

お卷。(答へ遊り、——おりんに) ありがとございました。

おりん。(會釋)

お卷。(蔦樂に) またよごしたんですか。

蔦樂。すまないネ。代りを持つて來てお呉れんか。一ト風呂流してき度いから。

お卷。あれは未だスツカリ乾き切つてはゐませんよ。

蔦樂。……

お卷。着物にまでお酒を浴びせるなんて、ずゐぶん、……

蔦樂。すまないネ。……しかたがない。重三郎(だんな)のを持つて來ておくれや。

お卷。(躊躇)

蔦樂。いいから。大丈夫。

お卷。(退場)

おりん。さだめしお前は、此のわたしを怨んでゐようねえ？

蔦樂。なにをつまらない……

おりん。いゝえ、きつと怡んでゐるにちがひない。

寫樂。……――

おりん。（居づらい容子）

　　蟲の聲…… ……

　　間

お卷。（着物を持つて、登場）

寫樂。誰も居ないのかい？

お卷。貴方を探しに。（クスリ、笑ふ）

寫樂。（着始める）

お卷。深川にいいひとが出來たのですつてね。

寫樂。（無關心）

お卷。知つてますよ。――生ッ粋の辰巳藝者なんですツて。

寫樂。私の氣持ちが、……誰にわかるもんか。

お卷。（寫樂に帶を渡し）行燈（あかり）の支度をしてまゐります。（退場）

　　間

寫樂。（着濟まし、退場せんとして正面の襖を開ける）

おりん。お話しし度い事があるんです。ちよいと待つて……

寫樂。（退場）

蟲の聲、しきり……

間

おりん。（愈々悶へ、泣きに泣いてゐる）

歌麿。（靜かに、登場）

間

おりん。（漸く、歌麿が居る事に氣が付く）

歌麿。おかへり。此家はおまへの家ぢやアない。

おりん。わかつてゐます。

歌麿。——お歸り。

おりん。歸ります！貴方も一諸に、ね？

歌麿。わつしは今歸れない。

おりん。？

歌麿。かへり度くなりやア、おまへが迎へに來なくとも歸る。

おりん。おねがひですから、一諸に歸つてくださいな。？

歌麿。わつしの言ふことが、分らないね。

おりん。……

歌麿。さ、お歸り。

おりん。　貴方は？

歌麿。　おまへも知つての通り、わつしやア泣き顏が大嫌ひ……

おりん。　……斯ツ、……もう泣いてはゐないほどに、………此のとほり、笑ふてゐるほどに、——拜みます。？此のとほり、をがみます。

歌麿。　…………

重三郎。　（正面の襖が開き、登場。四十格好）

おりん。　（會釋）……

間

重三郎。　おぬしたちが今日の仕儀は、すつかりお袋に聞きました。おりんさん、とにかく、一ト先づお歸んなさい。して、萬事わたしに委してお臭んなさい。必ずわるいやうにはしないから、——が、まア、いそぐ事アない。ゆつくりお茶などのんで行かつしやるが好い。

歌麿。　（たばこ喫ひながら、庭へ眼を外らしてゐる）

間

おりん。　（重三郎に）　なにぶん、………よろしくお頼まうします。

重三郎。　わたしがあとから、乾度伴れて行きます。

おりん。　（挨拶、退場）。

重三郎。　——……——

歌麿。…………
　　　間
重三郎。（手を拍つ）
お卷。（登場）
重三郎。一杯のみ度いからナ、横町へ行つて何か誂へて來てお呉れ。
お卷。はい。（退場）
寫樂。（登場）
歌麿。（笑顏）……よ。
寫樂。（皮肉な微笑）あがりしなツから、……妙に花魁の薰りがすると思ひましたら、（故意な挨拶）ようこそ、……（短い哄笑）
重三郎。湯歸りの手拭ひが、濡れてゐないのはおかしいね。
寫樂。ほどいた帶をまた締め直して、戻つて來ましたよ。
重三郎。今時分、雜み合つてるわけもなからうに――どうしてマタ、？
寫樂。なアにね。帶をといてゐますと、……やつて來たんですよ『堀川の段』がね。
重三郎。研師のおやぢか、――ちよいと素人離れしてるナ。當人としてはあの聲が自慢だらう。
寫樂。いくら聲自慢とはいへ、あのおやぢが石榴口へ構へ込んだ日にア、……こちとらのやうな痱持ちア頭痛がしてきますツ。

歌麿。ときに——どうですえ？（寫樂に）おぬしがこんど、新しく工風しられたとかいふ噂を聞いてゐましたが、その……雲母繪の成りあひを見せてもらへますまいか？

寫樂。（重三郎へ、ちらりと眼を配る）

重三郎。（退場）

歌麿。（語らうとして語り得ない表情）

寫樂。（歌麿の容子を見て見ない振りしながら、——ぬすむやうに覗つてゐる）

お卷。（登場……退場……出つ入りつ、膳の支度等）

間

重三郎。（數枚の錦繪を持つて登場。歌麿の前に置く）

歌麿。（凝乎と、繪を見つめてゐる）

寫樂。（鋭く、歌麿を見つめてゐる）

間

重三郎。（歌麿に）團十郎の生命が、斯う、仁木の魂に燃えうつッてる氣合ひを、ようく見ておやんなさい。——（繪を變へ、ひとり悦に入る）是れを凝乎と見てゐると、白髮の岸柳はお人形ぢやアないね。尾上松助の生きた心が切れるやうに光つてゐるところなんざア、今どき、眞質のお武家にだつて作麼氣禀はありますまい。——此の空間いつたいに含まれてゐる雲母の具合を見てみなさい。むだも、そつもない！　うがつてるね。當人の前で言ふのもおかしいが、……眼に見えないものが心に見える！　藝のこまかいことを褒める前に

人格の奥から迫つて來る氣品に打たれる、ね。――うな！　ここに値打ちがあるのさ。俳句の詞で言や、『動かない』と、言ひ度い。此の（繪を變へ）定九郎……人間の生地ツから、生き生きとしてる、張り切つた口跡が聞こえるわ。

寫　樂。（重三郎に）おやツさん。（歌麿を暗示）……相手は素人ぢやアないんだから。

重三郎。……

寫　樂。おやツさんが、其處にある富三郎の繪を見りやアまた言ふにちがひない。草木を書く作法で、――人の世の喜怒哀樂が、尖つた一點に集り、……寫樂の錦繪といふ花に開らくツてね。白猿の賞めツ振りなんか名文句だアね！　斯うつと、――百年の命が寸尺の間に凝結して鬼氣、人を襲ふ。冷やゝかに突ツ離して引き締める……沁々とした――恍惚の境……

重三郎。（或る感情に、たばこへ火を點けるのを忘れてゐる）

歌　麿。（顏、繪に對ひ、眼、庭に落ち、耳、門を開き、口、無關心）

間

重三郎。（眉……微慄）

寫　樂。（哄笑――止）

おすわ。（仇めき、登場）　まア皆さんお揃ひだね。

歌　麿。（ちらり、おすわと顏見合はす）

寫　樂。（自分の版畫に手を伸ばし、『取つて欲しい』といふ表情）

重三郎。（渡す）

寫樂。（手早く、版畫をズバリ引き裂く）

おすわ。（吃驚）………

重三郎。（諦視）

歌麿。（猪口を取り、左を利かす）

ゆふぐれの時の鐘。

間

お卷、行燈を置いてゆく。

おすわ。（寫樂に）おまへさん今日、三人連れのお武家と喧嘩をしたんですつてね。すきてさんが通りがけに見てゐたんですとさ。かかり合ひになると恐いつて遠くの方から、辻番へ曳かれて行くまで見てゐたんですつて。

重三郎。（ひとりごとのやうに）着物をよごしたのも其麼わけだつたのか。（寫樂にともなく、おすわにともなく）何處で……？

おすわ。兩國橋から相生町への曲りツ角とか言つてましたよ

重三郎。（寫樂へ）のちに、面倒な事はないのかね？

寫樂。――莫迦々々しい話なんです。

おすわ。わけを聞かしてお呉んなさいよ。？

重三郎。（寫樂の機嫌を察し、おすわに）お止し。――済んで了つた事を今になつて、かれこれ言ふにアあたらな

いッ

おすわ。―（重三郎に） お邸の首尾は怎うでしたえ？ わるく思はれてはゐませんでしたかえ？

重三郎。ナアニ、冗い事はないのさ。（寫樂に） 忘れてゐたわけぢやアないが、殿さまからおぬしへのお小遣ひ……（言ひながら、寫樂の前へ紙包を置く）

寫樂。……（手にも取らず、妙なものを見るやうに、紙包を見る）

重三郎。わかり切つた話だが、念の爲にきいておきませう！ ？ お能の舞臺へ、もう一遍立つ氣は……まア、無いて事はわかり切つてるが、……お邸からの言傳として念の爲にきかして貰ひませう。？

寫樂。私は、幇間ぢやアありませんから。―お子供衆の玩具ぢやあるまいし、――男一匹を五兩の餌差に釣らうとアいい氣なもんですネ。

歌麿。くろ天竺のえらい人は、生まれると直ぐ、（立ち、腕を伸ばし天地を指し）……怎麼風つきをしたさうですな。

寫樂。（むらむらした表情）

おすわ。（苦笑を耐へてゐる）

寫樂。立ちなすつた序いでに、外八文字を見せてお呉んなさい。

歌麿。（花魁の道中姿を身振り……）

寫樂。（忌々しい目付きを凝乎と、庭の一點に据えてゐる）

間

歌麿。（……やうやく舞臺を一と廻り。──座る）

寫樂。（依然として、庭の空間を諦視めてゐる）

一座、沈默。

間

寫樂。（座を立ち）おやツさん、私は飲み直してき度いから、二分ばかり貸してお呉んなさい。

重三郎。…………

おすわ。（寫樂に）今夜は折角、斯うして勇さんと、否、喜多川さんと久し振りに顔合したんですから、（機嫌取るやうに促す）さ、ひとつ、……妙な心持を變て了つて、ね？ 唄の文句はおかしいけれども一十九や二十ぢやあるまいし、まア、氣を取り直してお坐んなさいよ。お燗番がかわいさうぢやありませんか。

寫樂。（重三郎に）？……賴みます。

重三郎。二分と言はず、此處に、五兩といふものが在りますわナ。

寫樂。（冷やゝかに、紙包を見下ろす）

重三郎。何も強ひて能舞臺に立てといふわけではなし、厭なり應なりの返辭は返辭として、ま、氣持ち好く呉れたものは氣持ちよく貰つておくさネ。（手に取り、渡す）

寫樂。（躊躇──受取り──退場）

おすわ。（重三郎に）おや、お前さんもお出掛け？

重三郎。今夜の内に返辭をする約束になつてるんでナ。

おすわ。　八丁堀のお邸へ？

重三郎。　（煙草入を腰に……）　駕籠で一とツ飛び行つて來よう！

おすわ。　（ひとりごと）……宮樂さんにも困まつてしまふ！

重三郎。　愚痴を言ひなさんな。（退場）

おすわ、　——（歌麿を見）　？　おまへさん淚を溜めてるね。怎うなすつたの？

歌麿。　…………

　　　　間

おすわ。　？　よう何がそんなに……？？？

歌麿。　……（口元に、僅な、笑みを含む）

おすわ。　おまへさんの爲に、とつて置きの話が有るんですよ。

歌麿。　明るい話ですか？　……胸の奥に眞つ黑い足痕が殘るやうな暗い因緣話なら、そんよりと六問代さんの方へ——お預けのまんまにして置き度い

おすわ。　おことわりが無くたつておまへさんの心は百も承知、千も合點してらアね！

歌麿。　話と謂ふのは？

おすわ。　さきおとついの、もう一つ昨日の夕景にね、……

歌麿。　？　眞實にあつた話ですかい？

おすわ。　おまへさんこそ、眞面目に聞いてゐるのかえ？

歌麿。（眞僞の判斷に迷ひながら）……もう一つ昨日の夕景に——それから？

おすわ。わたしも以前の商賣が商賣だけに、ずいぶん綺麗な女もたんと見ましたがねえ、羞かしさを通り越して勿體ないといふ氣になるくらゐ美しい女子を見たのは、あの時が初めてなんですよ。

歌麿。ほんとうの話ですかい？

おすわ。（不快らしく）疑ぐるんなら、眞身に咄してもつまらない。

歌麿。齡は？

おすわ。（考へ）……二十三四——ぐらゐにしか見えないが、あれでもう、二十六、七にはなつてるかも知れないね。

歌麿。（動ゝ眞劍になる）——二十七！……服裝は？

おすわ。着物は見當が付かないけれども、あアしたお髪の結ひ様は、お武家の御新造でもないし、といつて、客商賣の女でもなし、お蠶いぢりや機織りでもなし、海へもぐるよな海女でもないから、……まアいづれは、良い家の町女房らしいね。もしもわたしの眼にあやまりがなかつたら、お子さんが二人ぐらいは確か——あのお乳の張り具合も

歌麿。乳房を見なすつたかネ？（おすわの顏を指し）その生きてゐる眼に、？

おすわ。見ましたよ。

歌麿。（うつかり眞劍になつた恥かしさを、テレ隱しに笑ふ）

おすわ。（眞面目に）變な笑ひかたをしておくれでない。

歌麿。…………

おすわ。？

歌麿。一面識もない婦人の肌を、女のおぬしが見たといふのを、生眞面目に聞いてゐるなんて、……（苦笑。髪を掻き上げる）

おすわ。（冷笑）お湯ん中へ着の身のまんま入れますか。

歌麿。（動々しどろ……用も無く立ち座る）

おすわ。斯うまで咄して了つたら、わたしが何を言はうとしてゐるか、凡う合點がおゆきだらうね？

歌麿。（揺る心を耐へ）そ、それから？

おすわ。（冷靜、微笑）どこまで咄しましたかね。

歌麿。子供が二人……乳が、――？

おすわ。その美しい御婦人はね、……

歌麿。？（思はず乘り出す）

おすわ。氣味がわるいとおもふくらゐ、あの綺麗な女子にね、……十一年前に生き別れをしたとかいふ、おまへさんの戀人にちがひないよ。

歌麿。（情熱と叡智が衝突して、痙攣的な微笑……）

おすわ。斯うして、（風呂に於ける女の姿態を眞似）……斯ういふ風に耳を洗ふとき、眞つ白い右の乳房に、黒子がはつきり見えましたもの。

歌麿。?!

おすわ。（歌麿の容子を見……おそる）

間

あはい……三味の音。

おすわ。いま咄したことはみんな嘘……まツかな嘘。

歌麿。（顔いろ冷めたく。）眼、炎、唇、引きしまる。

おすわ。（熱意を篭め、眞劍に）十一年間惱み通して來たおまへさんの初戀も、いま咄したわたしの嘘とおんなじやうに、日の暮れ前の夢なんですよ。けど、わたしは決して、夢を棄てやとは言ひません、もしも今咄した御婦人がほんとうに生きてると決まつてゐたら、こんな野暮は言ひますまいし、また言へもしないわたしの心を、おまへさんも疾から知つての通り誰が何と言はふと、情死が厭なら驅落ちもよかろ、お貰ひサンもよかろと奬めるわたし、なんとして分別らしい事が言へませう!?あかるい智慧をはたらかして、ようツ考へてみやんせ。今のやうな嘘ツぱちにも左樣したおまへの本氣らしさ、そつちの眼から此のわたしを見りや、涙も血も無い女と思ひませうが、いゝえ、その目つきによう知れてゐる、……わたしの身にも覺えがあること、おりんさんが今の身の上を怎う思ふてや？　男性だからとは言はせない！廓風、花魁食ひ、娘つ蕩らしのおまへさんに、女の氣持が分らないといふことはない筈――？おりんさんが今日此頃の心持を、おまへさん怎う思ふてや？

歌麿。わつしの頼みを、背いてはお呉んなさるまいか？

おすわ。？

歌麿。またしばらく居候に置いて——といふわけではありません。………

おすわ。光るもの?

歌麿。なんにも言はずに、放つといつてお呉んなさい。

おすわ。頼むといふのは?

歌麿。なんにも言はずに、放つといてお呉んなさい。

おすわ。………、そんなに氣にいらない此の家へ、怎してまた來なすつたえ?

歌麿。なんにも言はずに、放つといておくんなさい。

おすわ。………………

雨——しとしとゝ點滴りのおと………

間

お卷。(登場)

おすわ。いやだよマアうす氣味のわるい風つきをして、………なアに?

お卷。お玄關先に、新道のお内儀さんが、(考へてゐる)

おすわ。すぐにこちらへお通し申しておくれ。

お卷。——お妾がお見えになりませんので、………

おすわ。お前にも似合はず氣が利かないわえ。表へ出て見るがいゝぢやないか。

お卷。見るには見たんでございます。

おすわ。　おもてを？

お　卷。　はい。たしかに。

おすわ。（手早く帯などを締め直しながら、お卷に）　わたしの留守に、下駄も出しといとくれ。いそいで。

お　卷。　はい。（退場）

おすわ。（歌麿を佇み、袂と涙を隠し、……退場）

歌麿、ひとり。

かすかに常磐津の唄、絃の音……………

〽……にほふ灯の薄影に
幾世の誓ひ、しつぽりと
八重に結びし糸柳
ほんに思へば徒らな
綵は曲れ　幼遊びの
今にちらちら（合の手）
ちらむらさきや
さんざめく夜の廓に泳ぐも
可愛いあが兒の
繁に浸るも

忘れ兼ねにし初戀ひは
いまに心を離れもやらぬ
（二上り）十有餘年の
起きつ伏し
色筆に迷ふ浮世繪姿
絲の黑髮縺れつ縺れつ
夢張り挑みし弓張りの
身に近き世も棄て切れず
男の意氣地に持ちつ
耐らへし
強者が（合の手）
泣きに來たのは　法もない
ここな、エ、
千秋のあやまり〳〵
（三下り）萬夜がたり
比翼の片羽
いまいづく、……

……雨、しきり…………

間

歌麿。（悩ましげに起き、縁先へ立ち、秋の庭へ心を散らさうとしてゐる）

蟲の聲、絶ゆるともなく、消ゆるともない……

間

歌麿。（眼を据え）　其處に居るのは、おりんぢやないか？

枝折戸に近い闇い軒下――籬の陰に、おりんが竦み佇つてゐる。

歌麿。うちへ歸つたのかと思つてゐたら、まだ其處いらにうろ〳〵してゐたのか。

おりん。（籬をすり離れ、枝折戸に手をかける……髪も着の身も濡れ萎れてゐる）　拜みます。どうぞわたしと一緒に、歸つてください……？

歌麿。執念深い女だ。

おりん。賢しい子供達から、（涙に胸つまり）……『父さんは？〳〵』と、訊かれるたんびの味氣なさ、……いゝえ、わかつてゐます。……ゐればこそ、ねえ、わたしは忍んでゐます。たゞ、淺げないことは、日毎々に殖へる物、あれやこれやの諸拂ひ、他人さまへの義理、近所への手前もあること、蔦屋さんへの不義理もなんぼう積もりましたやら、もう此の上にわたしが恥を搔く事は、みんなおまへの上に懸かるは知れてゐるに――氣が向いたら歸るでは濟みますまい。わたしがわるかつたと思ふ事は怎麼にしても、自家へ戻つてから謝罪りませう。さア、わたしと一緒に……？

歌麿。　――あとから屹度かへると言つてゐるのに、聞きわけのない女だ。狂人の眞似ごとはいい加減にしたがよい。見ろ、鬢から雫が落ちてゐるワ。そんな風をしながらもの言ふて、自分ながら氣はづかしいとは思はないか。人一倍に着物を大切がる女が、……正氣の沙汰とはうけとれない。（緣側から引き込み、故意に諸の前に据はる）

おりん。（追ひ縋るやうに枝折戸を開け、庭へは入る）

歌麿。（氣色立ち、再び緣先に出る）

おりん。（怖ぢ離れ、雨の下に躊躇む）

緣の上から、庭の下から、相見合つてゐる。

雨、漸くに烈しくなり風を伴ふ……

間

歌麿。（呼ぶ）お卷どん。

返辭無し。

間

歌麿。お卷どん。

お卷の聲。……はい？

歌麿。わつしの蛇の目を、此處へ持つて來て呉れないか。

お卷の聲。はイ。

間

歌麿。（お這を防ぐやうに、傘のみ受取り襖を閉め――縁先へ立ち、おりんの足もとへそれを放る）

おりん。（傘を拾ひ起ち）いくらなんでもあんまり酷い……（恨むやうに、頼むやうに）こんな仕打をしてまでも……其處にうちへ歸るのが厭かいねえ？（迫り寄る）？

歌麿。（靜かに身をひき、ゆつくりと一枚々々障子を――遂に自らを茶の間の内へ閉め切つて了ふ。悩ましい立姿が映つてゐる）

おりん。（障子に濃い歌麿の影像を見つめてゐる容子）

すでに斜雨しきり……しとしとゝ庭の葉に點滴る……

間

しめりやかな蟲の音――が、はやる耳にはきこえない。

障子に濃い立影は動かない。

靜かに――幕

中央公論大賣捌所

同	神田區通神保町	上田屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至誠堂
同	本郷區春木町	盛春堂
大阪	市北區梅田町	盛文館
同	北區東梅田町	立盛社
京都市	七條停車場前	共盛社
同	新町通り七條南入	大誠社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮	京城本町二丁目	日韓書房

一 送代郵税 [illegible] 場合は發送を止む

一 振替貯金 口座番號 東京三四番 長野三二〇五番なり

一 郵券代用は謝絶す 但し郵便不便の地に限り一割増にて代用せらるることを得ます

一 代金引替 一切御斷り申上候

一 集金郵便 [illegible]

一 中央公論及婦人公論 [illegible]

一 受領證請求 は必ず返信料を要す

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
	以上郵稅共	

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾三圓六拾錢外國は金拾八圓三拾六錢の割となれども冊數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂 萬年社 告天社

正路喜社 帝國通信社 日本廣告社

信輔社 金蘭社 ・星社

大正十三年十月廿五日印刷納本
大正十三年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木陽一

發行所
東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話 丸ノ內三〇二一（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



東京小石川研精社印刷